吉田絃二郎全集

第十一巻

目次

小鳥の來る日……三
寂人芭蕉……五
路上素畫……二一
郊外に住みて……三三
柔かな草……四〇
私は生きてゐたい……四八
自然に還る日……五三
春日夜……五八
涙の味ひを知る人間の生活……六二
心の影……七一
夏の朝……七四
草の上の學校・宗教・藝術……七八
樂紫の秋……八四
冬日抄……九〇
修善寺行……九七
眞人間となるまで……一〇五
一本の葱……一一三
濁つた河……一二〇
榛名小學校の先生……一二五
冬のうた……一二九
素直な心……一三一
自分の魂のために……一三九
藝術にひそむ新生の力……一四一
南國の町と島……一四五
一人で歩む道……一五一
クリスマスの鐘が……一五六
千住の市場……一五九

貧しき者の春……一六二
供養の心……一六七
備後の兄へ……一七〇
基督の解放と無限……一七三

生の悲劇……一七九

自序……一八一
驚異の殿堂……一八四
沈黙の扉……一九三
超人の心境……一九九
自我燃焼の歎美……二〇七
愛の伸展……二一五
死の歎美者となる前に……二二三
永遠の疑惑……二二六
自の愛へ……二三三
疑いの瞳……二三六
藝術の權威……二四一
色々な感想……二四八
愛慾の巷へ……二五八
或る秋の日記……二六六
落葉するまで……二七〇
靄につゝまれた夕暮……二七四
睡蓮夢……二七六
呪はれた歌手……二八〇
懊惱の巷から……二八三
病床より……二八五
柊の咲くころ……二九二
犬吠岬より……二九八
幻影を追ふ心……三〇五

雜草の中……三一五

武藏野の中から……三一七
淺春……三二三
小鳥の巣……三二八
流れ行く影……三四一
木槿の花……三四四
路次裏……三四七
チエーホフの歎き……三四八
渡り鳥……三五三
ありがたき人情の人……三五九
曠野を想ふ日……三六五
獵人……三六九
芭蕉の跡二三……三七二
溫泉嶽紀行……三七六
墓……三八三
冬の旅……三八六
職業と文學……三九七
霜夜……三九九
山茶花……四〇五
海をわたつて……四〇九
お坊つちやん……四一一
移轉……四一八

生命の微光……四三一

自序……四三三
孤獨者の心……四三七
罪人の涙……四四三
啄木鳥……四四九

旅から旅へ……四五六
淡紅のチウリップ……五六二
孤島の春に……四六三
柳の芽生……四六五
夜の汽車……四六六
馬關海峽で……四六七
或る朝……四六八
大學正門前で……四六九
寒い日であつた……四七〇
この秋……四七一
八丈島に行つた女……四七八
濱に立つて……四八一
ナザレの貧兒……四八三
武藏野の秋……四八八
額……四八九
母の愛・母の心……四九三
秋雨の日……四九九
三十の彼……五〇二
暗と悲哀とから……五〇七
先驅者の悲哀……五一五
ロシアに行かんとする青年へ……五一八
鞭打つ者、鞭打たるゝ者……五二三
曇り日……五二六
大地は呻けり……五二九

卷頭・著者肖像……昭和二年八月撮影

第一感想集

小鳥の來る日
生の悲劇
雜草の中
生命の微光

小鳥の來る日

寂人芭蕉

「月をわび身を侘つたなきをわびてわぶとこたへむとすれど問ふ人もなし。なほわび〳〵て

わびてすめ月侘齋がなら茶歌」

或る年の秋、芭蕉が去來に送つた手紙である。身を侘び、人の世の宿命のつたなきをわびた詩人の寂心がそゞろに想ひ出される。

木曾殿と背なかあはせの寒さかな

義仲が寢ざめの山か月かなし

芭蕉が木曾の遺兒、不運な木曾の英雄を何のやうに見てゐたか、私には芭蕉に關しての知識が少しもないので、何とも言へないが、翁の句や弟子たちへの遺命を見ると、翁がこの不運な英雄に深い同情をもつてゐたことが思ひやられる。

「翁かねての遺命の通り、木曾殿の右の方に埋葬し奉りけり。」（花屋日記）

かれは永遠に寂しき風雲兒木曾殿と背なか合せに眠つたのであつた。

×

粟津の草庵のことについて一人の弟子から相談を持ちかけて來たその返事に

「粟津草庵之事先は御深切の至忝存候兎角拙者浮雲無住之境界大望故如此漂泊いたし候間其心に叶ひ候樣に御取持奉賴候必是につながれ心をうつし過ざるやうの事ならばいかやう共御差圖可忝候しばらく足のとゞまる所は蜘蛛のあみ

の風の間に間にと存候へば足駄の藏も藏ならず候流石の御人々申もくどく候得ば打まかせ候」

　行脚に世を送つたかれの足のとゞまるところはたゞ蜘蛛のあみのくだけんまでの、ほんの短い時であつたらうが、「蜘蛛のあみの風の間」はまた刹那的な人生流轉の相そのものを語つてゐるものであつた。家あるがために、家財あるがために風雅、厭世の心を迷はされるやうなことのないことをのみかれは案じてゐた。人生は假の宿、家宅は一夜の雨露を忍ぶを得れば足れりと考へてゐた。かれはアシシのフランシスのやうに貧乏を妻とした一人であつた。

×

「武藏野を出し時、野さらしを心に思ひて旅立ければ

　死にもせぬ旅寢の果よ秋の暮」

芭蕉にとつては死の影はいつもかれの前に立つてゐた。

　野ざらしを心に風のしむ身かな

「江上の破屋を立いづる」その日からかれの頭には、曠野の涯に捨てらるべき自分の髑髏が映つてゐたのであつた。

「月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人也船の上に生涯をうかべ馬口とらへて老をむかふるものは日々旅にして旅を栖とす古人も多く旅に死せるあり」。（おくの細道）

旅！　旅を想ふ時、芭蕉の寂心は恐らく躍るのであつたらう。そこには富もなく、賤しきもなく、善人もなく、惡人もなく、すべてが、つたなき宿命の下に刹那的に逢ひ、刹那的に別れて行く、人生の寂そのものゝ心につゝまれてゐた。

　送られつ送りつ果は木曾の秋

一つの薄暗い木曾の旅籠の行燈の下に酒を掬みかはした旅人と旅人とは、やがて明日になれば送りつ送られつ別れ

なければならない。或る者は東に、或る者は西に、そしてかれ等は恐らく永遠に二度と逢ふことはあるまい。

　　西東あはれさ同じ秋の風

かれ等が行く旅路は、いづれにしても白い秋の風が、音もなく大地をつゝんでゐる。

×

俳行脚をして歩くかれの簡素な生活は、キリストが十二人の弟子を傳道に送る時、二枚の嚢を持つなかれ、二枚の上衣を持つなかれと言つた言葉と似てゐる。

「野ざらし紀行」のなかには、自分の旅の支度を「腰に寸鐵を不帶、襟に一嚢を掛て、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵あり、俗に似て髮なし」と言つてゐる。

かれは、ほんたうに何物をも持たぬ者の幸福を知つてゐた。かれのねがひは自然の到る處に見出さるゝ風雅であつた。自然そのものゝ寂であつた。ほんたうにかれは大地にひざまづいて、草に接吻することのできる人間であつた。

「猶栖をさりて器物のねがひなし空手なれば途中の愁ひもなし寛歩駕にかへ晩食肉よりも甘しとまるべき道にかぎりなく立べき朝に時なし只一日のねがひ二つのみ今宵よき宿とらん草鞋のわが足によろしきを求んと斗はいさゝかのおもひなり時々に氣を轉じ日々に情をあらたむもしわづかに風雅ある人に出合たる悦限りなし日比は古めかしくかたくなりと惡み捨たる人も邊土の道づれにかたりあひはにふむくらのうちに見出したるなど瓦石のうちに玉を拾ひ泥中に金を得たる心ちして物にも書付人にもかたらんと思ふぞ又是旅のひとつなりかし。」

何といふ可憐な欲望であらう。かれが求むるところは金殿玉樓でもなくば、學者の名でもなければ、市人の財でもない。今宵の宿のよからんことと草鞋の足によろしからんことの二つのみ。

かれにとつては旅はすべてのものを淨化するものであつた。わづかの風雅ある人間、或ひは日ごろは頑なる人間と

して憎みたる者も、旅で出逢ふ時には懐かしき人間となり、うれしき人間となるのであつた。所詮人生は旅である。今宵のみ逢ひて明日は永遠に別れなければならぬ旅人と旅人との集まりである。そこには善、悪の觀念はない。あるものはたゞ傷ましい、儚ない寂の心のみである。明日は永遠に別れなければならぬ旅人である。誰が人を憎み、人をさばくことができよう。

人と人とは相凭り、相懷しみ、相想ふのみ。

秋深き隣は何をする人ぞ

芭蕉にとつては天地は風雅であつた。寂であつた。

「萬象もまた風雅なり。此風雅は佛祖の肝膽なり造化に隨つて四時を友とす見る所花にあらずといふ事なくおもふ所月にあらずといふ事なし。」

かれの藝術、かれの生活はいつも風雅を中心として生まれてゐる。かれにとつて風雅は佛祖の肝膽であり、天地の寂である。

天地の寂そのものゝなかに浸さるゝ時、自然の寂そのものを呼吸する時、藝術も生活もめぐまれるのであつた。

「他門の句は彩色のごとく我門の句は墨繪のごとくすべし折にふれては彩色なきにもあらず心他門にかはりてさびしをりを第一とす。」

かれの眼に映つた人生はいつも秋の寂であつた。しかしかれはその寂しさからのがれようとはしなかつた。かれは秋をかなしみつゝも秋そのものゝなかに浸されて行つた。大自然の寂はかれの魂のパンであつた。

×

おきなく起ば浮世の秋を見ん

信濃の山路の或る秋の日の出來事である。道傍にいぎたなく眠りこけてゐる一人の乞食があつた。そこには寂しい、しかしやさしい眼の、旅に痩せた行脚僧が立ちつくして眠つた乞食の姿を見つめてゐた。私たちはミレエの薄暮の寂しさに似た好畫面を想像することができる。

かれは深過ぎるほど人生の寂寞を觀た。かれの藝術も亦寂寞の底から掬まれて來た。しかしかれはいぎたなく眠つてゐる乞食の前に立つた時、乞食を起して寂しい秋を見せるには忍びなかつた。

恐らくかれは平和に眠つてゐる乞食の祝福を祈りつゝ、木曾の山路を行き過ぎたであらう。乞食が眠りから目ざめた時、乞食は、今しがた行脚僧が、かれの祝福を祈りつゝ通り去つたことをも知らなかつたであらう。

かれは人生の救ひを與へようとは言はぬ。かれは人間をより善くしようとも敎へぬ。かれの世界は善惡を超越したところにある。善人もなく、惡人もない寂寞の世界にかれは友を求め、寂寞そのものを求めてゐる。それがかれの生活と藝術のすべてゞある。

礁打て我にきかせよ坊が妻

×

「二十二日

朝の間雨降、今日人もなく淋敷まゝにむだ書して遊ぶ其詞

喪に居る者は悲をあるじとし

酒をのむ者はたのしみをあるじとす

愁に住する者は愁をあるじとし

徒然に住する者は徒然を主とす……

淋しさなくはうからましと西上人のよみ侍るは淋しさをあるじなるべし……

獨すむ程面白きはなし……

うき我を淋しがらせよかんこ鳥」（嵯峨日記）

「羇旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん是天の命なり」と思ひつゝかれは、いつも大自然の寂栞をたづねて歩いたのであつた。

かれは大自然の寂をもとめて旅に出ない折にも少かに身を横たゆるに足るだけの草庵のうちに寂をもとめて生きてゐた。

芭蕉野分して盥に雨をきく夜哉

×

かれの簡易生活は決してストイック風な非人間的なものではなかつた。かれの温かい心はいつも人間的であることを忘れなかつた。かれは宗教を說かなかつた。かれは哲學を說かなかつた。かれは最も大きな凡人であつた。凡人の仲間であつた。かれは最も愛すべき親しむべき仲間であつた。

かれは人々に簡易生活を說く時、「衣類器財相應にすべし、過たるはよからず足らざるもしからず、程あるべし」と言つてゐる。かれは人間の欲求を殺して、非人間的な生活を強ふるやうなことをしなかつた。かれは食物に對しても「魚鳥獸の肉を好んでくふべからず」と言つてゐる。かれは凡人らしい凡人であつた。

「船錢茶代忘るべからず」と言つたかれはまた苦勞人であつた。世間といふことを忘るゝことのできぬ眞人間であつた。市井を捨てゝ市井人の人間心を忘るゝことのできぬ人であつた。

「俳談の外雜話すべからず雜話出なば居眠りして勞を養ふべし。」

かれの生活にとつて俳諧はその生活のすべてゞあつた。かれの生活のすべては藝術の一點に焦點を見出した。

×

「女性の俳友にしたしむべからず師にも弟子にもいらぬ事なり。」

芭蕉が何故に女性に近づくことをかほどまでに戒めたかはわからないが、親しらず、子しらずを過ぎて北國の或る宿屋に越後の國の遊女であつた女と泊り合せた折にも、芭蕉が女性といふものをいたく憚つてゐたことがうかゞはれる。「行へしらぬ旅路のうさあまり覺束なう悲しく侍れば見えかくれにも御跡をしたひ侍らん衣の上の御情に大慈のめぐみをたれて結縁せさせ玉へと泪を落す。」

これほどの女のねがひをも聽かないで芭蕉は「我々は所々にてとまる方おほし只人の行にまかせて行べし」と言ひ切つて女と別れてしまつた。

しかも女と別れてもなほ女のことがひどく思ひやられたと見えて「云捨て出つゝ哀さしばらくやまざりけらし……」と書いてゐる。

一つ家に遊女もねたり萩と月

强ひて女を振り捨てゝ去りながら尙ほ女を思ふ人間的な芭蕉のやさしい心の面影がしみじみと味はゝれる。

遊女の話につれて思ひ出さるゝのは、捨子をいたむかれの句である。

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

しかしかれはこゝで捨子に對して、自分のつたなき運命を泣くより他に方法はないことを說いてゐる。父をうらむな、母をうらむな、所詮は人間はすべてつたなき宿緣に泣かなければならぬのである。

遊女を殘して立つ旅人も、子を捨つる母も、つれなしと恨んではならぬ。すべてこれ人間の宿緣である。すべての

罪業も、惡心も宿緣である。人間には罪はない。人間にはたゞ寂しさあるのみ。

×

浪花の花屋で芭蕉が臨終の床についた時、弟子たちが辭世の「一句を殘したまはゞ諸門人の望み足りぬべし」とねがつた時、かれは「きのふの發句は今日の辭世、けふの發句はあすの辭世われ生涯いひすてし句々一句として辭世ならざるはなし」と言つたとつたへられてゐる。

何といふ尊い藝術家の言葉であらう。
何といふありがたい聖者の敎へであらう。
何といふ悲しい大詩人の聲であらう。
この一句はほんたうに涙なしには聽かれない寂寞の詩人の聲である。

×

芭蕉ほど人生の寂滅を知つて、人間を悲しみ人間を懷かしんだものもないであらう。かれの心は寂しみを泣きつゝも、いつも赤ん坊のやうに素直であつた。

かれはいつも赤ん坊の心と、赤ん坊の眼で人間を見、人間と語り、自然を見てゐた。

「諸法從來常示寂滅相」を感じながらもかれはあらゆる寂滅相のなかに、自分の寂しい、やる瀨ない心を慰められてゐた。

　　おもしろうてやがて悲しき鵜船かな

かれはやがて悲しかるべき運命を知りながらも、鵜飼する人々と共に語り、共に夜を蹔に更かさないでは居れなかつた。

寒けれど二人寢る夜ぞ賴母しき

子供のやうになつて、旅籠の夜具にくるまりながら物語りに興がつてゐる詩人の面影が思ひ出される。

×

かれの作品のうちで、いつも私を最もふかく動かすものは、秋の句のうちに多い。

礁打て我にきかせよ坊が妻

野ざらしを心に風のしむ身かな

義朝の心に似たり秋の風

あか〳〵と日はつれなくもあきの風

塚も動け我泣聲は秋の風

西東あはれさ同じ秋の風

見送りのうしろやさびし秋の風

見わたせば眺れば見れば須磨の秋

秋の夜を打崩したる噺かな

死もせぬ旅寢の果よ秋の暮

こちらむけ我もさびしき秋のくれ

此道や行人なしに秋の暮

愚案ずるに冥途も斯や秋の暮

九度起きても月の七つかな

旅人と我名呼ばれん初しぐれ

宿かして名を名のらする時雨かな

「こちらむけ」「此道や」「愚案ずるに」の句の如きは、ほんたうに讀むごとに胸を刺さるゝやうな寂しさを感ずる。人間の宿命的な苦惱を分ち持つてゐる詩人芭蕉の腹からの歔欷が聞えてゐるやうに思はれる。

×

芭蕉は故郷を忘れ得ない人であつた。自分の故郷に對するあこがれといふものがいつも、かれの寂しい心に巢喰うてゐた。

かれ二十四歳の時「雲とへだつ友かや雁の生わかれ」といふ句をのこして家をのがれた後も、折さへあればしばしば家鄕の人たちをたづねたやうである。かれはこの點に於いてもほんたうに人間らしい素直な人間であつた。「長月の初古鄕に歸りぬ北堂の萱草も霜枯果て今は跡だになし何事も昔に替りてはらからの鬢白く眉皺寄りて只命ありてとのみいひて詞もなきに兄の守袋をほどきて母の白髮拜めよ浦島の子が玉手箱汝が眉もやゝ老たりと暫く泣て、手にとらば消ん泪ぞあつき秋の霜」

これと同じ時であらう。何事につけても昔のなつかしきまゝにはらからのあまたよはひかたぶきて侍るも見捨がたくて初冬の空のうちしぐるゝ頃より雪を重ね霜を經て師走の末伊陽の山中に至る」と言つてゐる。そのをりの句

舊里や臍の緒に泣くとしの暮

には、人生を寂滅相と觀じながらも、なほあきらめ得ぬ人間的な愛慾の念が、かれのうちに涙ぐましいほどに動いてゐるのを見ることができる。

×

芭蕉が誰にも愛せられ、したはれたことは弟子たちの話を聽いたゞけでもわかるが、かれは到るところに、友を見出してゐる。しかもそれが何のゆかりもない往きかひの人々の間にすら、極めて自然的に見出されてゐるのである。かれの人となりの美しさ、慕はしさが想ひやらるゝ。越後の新潟の傾城の物語をはじめ、松島鹽釜見物の折には繪師加右衞門といふ男が紺の染付の緖を付けたる草鞋を二足はなむけしてゐる。

木曾路の山深くはいつて行つた時も、六十ばかりの道心が芭蕉をなぐさめたことなどが書いてある。月影が壁の破れ目から木の間がくれにさし入つて、鹿を追ふ聲などが聞えて來る眞夜中に、旅の僧と對ひ合つて盃を持つた寂しい俳行脚の尊い姿が想像せられる。

日光山の麓に泊つた時、佛五左衞門といふ男が、眞心つくしてかれをいたはつてくれたことや、奥のほそ道をかけて行くかれの寂しい道をたすけてくれた曾良のことなどを見ても、芭蕉がどれほど人々に慕はれたかといふことが想像せられる。

那巢の黒はねといふところで雨に逢つて、農家に一夜を明かして、さて曠野を旅する時、「この馬のとゞまる所にて馬をかへし玉へ」と言つて馬を貸してくれた百姓や、その馬のあとからしたひ走つて來た二人のちさき者、(そのひとりはかさねといふ小娘)の姿なども美しい繪として頭に思ひ浮かべられる。

×

芭蕉が人に懷かれたと同時に、かれがまた弟子思ひであり、弟子を信じてゐたことも世にありがたいことである。越後の傾城たちと別れて間もなくであらう。七月の五日といへば暑い盛りである。かれは金澤で大阪から通うてゐた商人と宿を共にした。かれはそこで同じ俳道に志してゐた一笑といふ男の死を聞いたのであつた。

塚も動け我泣聲は秋の風

かれのこの手向草に動かさるゝのは亡き人の塚ばかりではあるまい。

かれに隨いてゐた曾良が間もなく腹を病んで、伊勢の國長島といふところのゆかりの人を頼ることになつたので、芭蕉は曾良としばらく別るゝことになつた。その時の心持ちを芭蕉は「行くものゝ悲しみ殘るものゝうらみ雙鳧のわかれて雲にまよふごとし……」と書いてゐる。

×

嵯峨日記のなかにも「夢に杜國が事を言出して涕泣して覺る。……我に志ふかく、伊陽舊里迄したひ來りて、夜は床を同じくし、起臥行脚の勞を助て百日が程影のごとく伴ふ片時も離れずある時はたはふれ或時はかなしみ吾心裏に染て忘るゝ事なければ成べし覺て又袂をしぼる」と書いてゐる。師弟の美しい情が、ありく\と思ひ出される。鎌倉の土牢に押し込められてゐた法弟を懷うて、「日蓮は明日佐渡國へまかるなり今夜のさむきに付てもろうのうちのありさま思やられていたはしくこそ候へ」と言つた法華經の行者と、その弟子の間にも似て、限りなく慕はしい感じがする。

×

「惟然支考內議していかなる良醫なりとも招き候はんと申しければ師曰くわれ本元虛弱なり心得ぬ醫に見せはべりて藥方いかゞあらんわが性は木節ならで知る者なし……」

花屋日記の一節であるが、最後までかれは自分の弟子を信頼し切つてゐた。そして自分の生死を弟子の木節にまかせた。

またその折の話である。去來が師の病を聞いて早速京から伏見に出て、舟で浪花にかけつけて來た。そして師の病床ににじり寄つた。

「師もうれしさ胸に迫り、暫時はものものたまはざりしが諸國に因みし人々はわれを親の如く思ひたまふに……殊更汝は骨肉を分けし思ひすれば三日見ざれば千日の思ひあり……再會あるまじく思ひ居たりしに相見ることのうれしさよとて袂をしぼりたまへば去來もしばしは嗚咽せしが……」

これほど美しいこまやかな師弟の情が何處に見出されよう。かれは或ひはキリストよりも幸福であり、美しい師弟の心を味ふことができたのではないかとも想はれる。

×

かれの死が偶然にも初時雨する旅空に於いてゞあつたことも、かれにはふさはしい死に方であつた。世を捨てたかれ、西行の道を慕うて世をのがれたかれは、實は最もひろく凡人の仲間を見出してゐたのであつた。かれの臨終の床は惟然、乙州、正秀、木節、去來、支考、其角、丈草等の弟子たちによつて護られてゐた。元祿七年十月十二日申の中刻、かれは時雨の音を聽きつゝ永遠に眠つたのであつた。

白木の長櫃に納められた寂しい詩人の亡き骸が、十一人の弟子たちに守られて夜の淀川を伏見まで送られて行つたことなども、いかにも詩中の光景を思ひ出させる。

夜もしらじらと明けはなるゝ頃、僧李由が乘つてゐた下り舟と行き逢つて、李由は舟を乘り移つて來て、他の弟子達と一緒に師の事を語つて泣いたことなどを思ひ出すと、芭蕉といふ詩人の一生がます〳〵光つて來るやうな氣がする。

×

「格に入て格を出さるはせはく格に入さる時は邪路に走る格に入り格を出てはしめて自在を得べし……」芭蕉にとつて格は束縛ではなかつた。格はかれの藝術を託すべき自由の搖籃であつた。呪ふべきは格に入りて囚はるゝ藝術である。狹き格のうちに大自然の寂寞の呼吸を自由にすることのできるものでなければ、ほんたうの藝術家ではない。

更にこの心を押しひろげて行けばかれの藝術は一つの格であつた。かれはその藝術に對して生活のすべてをさゝげた。しかしかれはかれの寂寞の魂を生かすことを忘れなかつた。

「俳諧師御執心之由先は珍重物しりにならんより心の俳諧肝要に御座候句者は澤山御座候得共心法を守る人はまれまれなるものにて候」

寂寞の心を見つめて、靜かに寂寞の底に生きることをのぞいては、藝術はなかつた。この點に於いてかれは恐らくたゞ一人超人の寂しい道を歩いてゐたのではなかつたゞらうか。

かれはすべての人々に愛せられた。しかしかれの寂寞の底を見つめ得た弟子たちが果して幾人あり得たであらうか。

此道や行人なしに秋の暮

×

九度(こゝのたび)起ても月の七つかな

芭蕉の生涯を想ふ時、ミケランゼロの生活を想ふ。

「眠ることはうれしい、しかし石となることは更にうれしい」と言つた晩年のミケランゼロの心は、なほ秋の夜ながを寝ねがてになやんでゐる旅の芭蕉の心ではないか。

「おきな〱起ば浮世の秋を見ん」とうたひながらも、かれ自身は秋の夜長に眠ることもできなかつた。そして思ふ存分浮世の秋を見た。かれは眠れる者の幸福をうらやんだ。しかしかれ自身寂寞のなかに覺めないでは居れなかつた。

かれは自然の大寂寞をさながらに意識するために、そして自分の魂と自然の魂とをいつも寂寞の脈管によつて結びつけるために旅から旅を歩いてゐた。かれの藝術はかれの魂と自然の寂寞とを結びつける脈管でなくて何であらう。

×

かれが孤獨寂寞の底に生きて行く詩人であつたにかゝはらず、かれの周圍にはいつも多くの人々がかれを慕つて集まつてゐたことは前に述べた。またかれ自身無慾枯淡の生活を送つてゐたことも述べた。

かやうにすべての人々になつかれたかれは決して嫌人主義者になることはできなかつた。かれこそ最も廣い民衆の道づれであつた。かれこそ自然のまゝの素直な民衆であつた。貧しい生活も、寂寞を追ふ生活もかれには自然的に行はれたものであつた。

「昨日は渡紙澤山御惠辱存候然所昨夜惟然一宿例のむだ書剩筆の先棒になし困入申候今四五枚申請度候……」

「襦袢せんだく糊少々と御申付可被下候」

芭蕉のこんな手紙を讀んでゐると、眼の前に世間ばなれした惟然の姿や、また寬容な弟子思ひの芭蕉の俤が浮かんで來る。またかれの生活がどれほど簡素なものであつたかもうかゞはれる。

「幻住庵記」を讀むと、かれが死ぬ少し前、石山の奥につゝじや山藤や、時鳥の聲や木つつきの木を啄く音などにつつまれて、武藏野の芭蕉庵のことなどを想ひ出してゐた頃の靜かな生活の有樣が偲ばるゝ。鹿笛を吹いたり、水鷄の笛を弄んだりしたことのある芭蕉は、いつまでも子供々々したところのある人であつたやうに思ふ。

「木曾の檜笠、越の菅簑許は枕の上の柱に懸」けて、晝はまれ〳〵に訪ねて來る人々と語り、宮守の翁や村の男たちと、猪が稻を食ひあらした事や、兎が豆畑に出て來た話などを聽いて興がつてゐた老詩人の俤は、ほんたうに眞人間らしい凡人だといふ感じを抱かせる。

かれ自身でも語つてゐるやうに「ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさん」ために自ら世を避けたのではなかつた。かれの病身であつたといふことが、「世をいとひし人に似」た生活をかれに强ひさせたと見るのが適當であらう。

かれは人を避けてもどこまでも人を避けることのできない、そして人に懷しまるゝ人間であつた。

かれが死んで、湖畔の義仲寺に葬ひがあつた時、近江、京、大阪、美濃、尾張、伊勢諸國の人々が幾百人と集まつて來て、狭い寺の境内にはいりきれなかつたので「表より入りたる人は裏へ拔け出るやうにしつらへ置き田の刈跡に道を附けゝれば、燒香の人々はすべて裏へ拔けゝるにぞ……」と書いてあるが、かれの死を悼んで集まつて來た人々が、どれほどかれの死を悲しんだかといふことも想像がつく。

今日まで全國殆んど到るところに、苔むしたかれの句碑が遺つてゐることなどを考へて見ても、かれは世界の文學史上にも珍らしいユニークな地位を持つべき詩人であると思ふ。

ほんたうな意味の、かれは最もすぐれた民衆的な詩人であつた。

×

かれの手紙は極めて簡素で、しかも無限な情味をたゝへてゐる。寂しいが、しかし溫かい心の芭蕉といふ人を想ひ出させる。

路上素畫

久し振りで一と通りバイブルを讀んで見た。

イスカリオテのユダとキリストの關係は外國でも問題にされてゐるやうであるが、他の弟子とキリストの間よりはユダとキリストの間のいきさつが一等面白い深い人間的な心理のはたらきを持つてゐるやうに想はれてならぬ。四福音書の記錄者たちは、イスカリオテのユダの記事はたゞ一行か二行ですましてゐて、最初からユダを不倶戴天の仇のやうに書いてゐるので、實際にユダがどんな人であつたかは知れないが、四福音書の記述者たちの頭には先天的な偏見が幾分あつたかも知れない。

ユダの立ち場から考へて見れば、ユダがたゞ一人の異邦人――少くともガリラヤ人でなかつた――であつたことなどもあの異族排斥の念の強い弟子たちの間に於いては、ユダをいつも不利な地位に置いたことであらうと思はれる。キリストの愛は世界的だといふ。けれどもキリストにしても、その弟子を傳道の旅に出す時には「汝等たゞイスラエルの迷へる小羊を救へ」と言つてゐる。そして異邦人の間に行くことをいましめてゐる。キリストは一方に於いては博い愛を說き、鴿のやうな柔和を說いてゐたが、他の一方では蛇の如く賢くあれと說いてゐる。キリストの頭のなかにさへ對他的な考へがかなり濃く出てゐる。

ユダがキリストを捕へさせたことを悔いて、銀三十枚をエルサレムの宮に投げつけて首を縊つて死んだことなどを考へて見ても、ユダは大した惡人ではなかつたやうに思はれる。或ひは一等善人であつたかも知れない。

實際人間の記錄ほどあてにならないものはない。日々の新聞記事を見てゐてさへ、賢夫人だの、才媛だのとほめた

たへてある人たちで、實際はいかゞはしい人たちがある。むしろ新聞でたゝへられる人たちの大部分はその反對なのが多いやうな氣がする。

イスカリオテのユダは惡い記者に睨まれた不幸な善人であつたかも知れぬ。

×

やはりキリストと弟子の關係であるが、無學な弟子たちははたしてキリストの心をどれほどまで理解してゐたかといふ疑問が起る。

キリストは弟子運の宜い人ではなかつた。その點では日蓮などの方がずつと仕合せであつたやうに思ふ。それは日本人の方が一層多く犧牲的で、ユダヤ人の方がずつと利己的であることが第一の原因なのかも知れない。

キリストに最も可愛がられてゐたペテロでさへ、いよ〳〵の場合になつて來ると「我れキリストを知らず」と言つて、その場を逃げてしまつた。ペテロは後で悔いて泣いてはゐるが……。

こゝいらがむしろ西洋人に近いのではないかと思ふ。ずつと日本人より利己執着が強い。「家も子女も捨てなければならぬことを知つてゐる。けれども出來ない。どうか、とがめないでくれ。」といふやうなトルストイの大きな人間的苦惱も畢竟はペテロの悲しみに近い。ロマン・ローランが言つてゐるやうにそこに偉大な人間としてのトルストイがあるとも見られるが、また考へやうによつてはトルストイの爲めに惜しいやうな氣もする。

もしトルストイを學ぶ人たちが、トルストイのこの眞似をしようとするならば、それは僞善者に近いやりかたに陷らないとも限らない。

×

最後の晩餐の時、キリストは衣を賣つて劍を買へと言つてゐる。弟子が「二口の劍がある」と答へたので、キリス

トはそれで宜いと言つてゐる。あの刹那のキリストには最も人間的な、反抗的なキリストがあらはれてゐる。「人右の頰を打たば左の頰をも打たせよ」といふ無抵抗主義のキリストでは決してなかつた。

ペテロが劍を拔いて祭司長の一人の僕の耳を切り落した時、キリストは劍を鞘に收めよ、「劍をもつて立つものは劍によりて倒る」と言つてゐるが、あの苦惱のどん底にいたつて始めてキリストの博大な愛、無抵抗な人類愛が生まれてゐる。

×

家庭のキリストはどんな人であつたらう。これも興味のある問題である。また彼の敎育についても考へなければならぬことであるが、この點では私はルナンよりも、却つてオスカア・ワイルドの見方に贊成したいと思ふ。キリストは或る程度まではギリシヤの言葉も知り、學問もしてゐた人ではないかと思ふ。でないと、あれほど美しい言葉や譬喩は出なかつたであらうと思ふ。

×

十二人の弟子たちが、天國の十二座を爭つたことも彼等のユダヤ人的な利己心をよくあらはしてゐる。ゼベダイの二人の子たちは、その母マリヤを通して、天界にのぼつた日には自分等をキリストの直ぐ左右に坐らせてくれるようにとねがつてゐる。

「家の隅に捨てられたる礎を見よ！」といふやうな譬喩を語つて、キリストは弟子たちの功名心をいましめてゐる。キリストは時としては弟子に對してかなり高飛車に出たやうである。「弟子はその師より大ならず」といふやうな言葉には一面彼の自信の强さが想はれる。

最後の晩餐の折、彼が弟子たちの足を洗つてやつたことは、誠に美しいことである。キリストの最も美しい供養心

のあらはれである。

×

マグダラのマリヤにナルドの香膏を抹られたキリストは、愛すべき靑年であり、愛すべき自然人であつたにちがひない。彼には娼婦だとか、博徒だとか、收稅吏だとかいふやうな區別はなかつた。彼の目にはみんな愛すべき兄弟として、姉妹として映つて來たのであつた。仲間として……。廢娼運動などをやつて、自分のみを正しい人間と見、不幸な女たちを罪人のやうな考へでやつてゐる僞善者たちが、考へて見なければならぬことである。

×

彼が傳道をして歩いてゐた時、弟子たちが「おつ母さんと御兄弟が家の外にお見えになりました」と言つた時、彼は「我に母なし、兄弟なし。我を愛する者は我が母なり兄弟なり」と言つて、家を出て母に逢ふことをしなかつた。こゝには「我はその子をして親にそむかせんために來れり……我が來るは平和を出さんがためにあらず、劍を出さんがためなり」と獅子吼した豫言者キリストの超人的な面影が泛かんでゐる。

彼が十字架につく時母を案じて、弟子のマタイ(?)にその母を託したのは、ほんたうに人間らしいキリストであつた。

×

キリストの傳道生活がいつも無智な女性たちによつて支へられたことも面白い。また女性に關する傳說が美しい詩となつてのこつてゐるのも面白い。

處女マリヤ、カナンの婚宴、井戶傍でキリストと語つたサマリヤの女、マグダラのマリヤ、癩病人シモンの妹マルタとマリヤ、ゼベダイの妻、エルサレムの門の前で驢馬を曳いてキリストを乘せた女、最後の晚餐の準備のために水瓶を

携へた女、石で撃たれようとしてゐたエルサレムの女。

×

キリストの傳道が大抵田舍まはりであつたことも面白い。キリストはカペナウンを中心とした美しい自然のなかを經めぐつてゐた。彼はルナンが言つてゐるやうに雀、百合、無花果、からし菜、荊棘、麥、鴿、駱駝、驢馬のやうなものゝなかに自分の生活をつゝんでゐた。彼の譬喩にはいつも野の香ひがゆたかに漂うてゐる。

彼は大抵は湖の上を舟でめぐりながら、自分は舟の上にゐて、丘の上に立つた人たちに說敎をしてゐる。彼は湖畔の詩人であつた。

或る場合には彼を殺さうとしてゐる人々を恐れたがために湖の上に逃げ、森のなかにかくれたこともあるやうにおもはれる。

×

キリストは丈夫な人であつたゞらうと思ふ。美しい人でもあつたであらう。殊に眼は男性的な强さとやさしさを持つてゐたのであらう。どの女性にも愛せられたやうである。

エルサレムの宮の前の緣日商人の緣臺などを蹴つたりしたところには、いかにも野人的な面影がある。パリサイやサドカイの徒や祭司の長などの面前で彼等を罵るところは、いかにも野から生まれて來たまゝの自然人の偉大さを持つてゐたやうである。

廣い野原で四千人五千人の聽衆を對手に道を說いた彼の體格は頑丈であつたと思ふ。

×

手も洗はないでパンを食つたり、麥の穗をつまんで食つたりした漁夫や收稅吏出の弟子たちや、娼婦上りのマグダ

ラのマリヤやその他の人たちに取りかこまれて、野から野を步いてゐた自然人キリストと、喪家の犬のやうな姿で步いてゐたといふ氣の毒な孔子とを比べて考へて見ると面白い。

×

彼は豚と學者と宗敎家が嫌ひであつたやうに想はれる。

×

「彼等にいひけるはわがこゝろいたく憂へて死ぬばかりなり。爾曹こゝに待ちて目をさましをれ。」（馬可傳一四の三四）

生を思ふ日がある。死を思ふ日がある。

生くることのあまりに嬉しい日がある。生くることのあまりに悲しい日がある。

心から祈つてみたい日がある。久しく忘れられてゐた自分の心が、取りかへされたやうな嬉しさを感ずる日がある。

薄明のころ眠りからさめる。秋らしい風の聲を聽く。時として小鳥の聲を聽くこともある。その刹那である……生きてゐることを心から感謝したい折もある。自殺を想ふ朝もある。

「生きよ、生きよ……」柔かな秋の陽の光りは言ふ。悠久なるものゝ聲が言ふ。しかしその聲は自殺を想ふ私の心よりも更に悲しい聲である。

私は現在の生活を想ふ。現在の生活を一層深くすることを想ふ。眞實にすることを想ふ。現在の生活を愛する。

私は生の深さを想ふ。悠久を想ふ。縹渺として無限なる生の蠱惑と寂寞を想ふ。

「生とは？」私は叫ぶ。私の心は寂寞に耐へぬ。

「現實の生活を生きよ！」と人々は言ふ。

「現實の生活の底を摑め！」と人々は言ふ。

男女の戀、友人の愛、人と人との信、憐愍、寛容、……それ等の人間の魂の香、魂の光りを見のがすことはできない。或ひは人間の罪として考へらるゝ嫉妬、憎惡、暗鬪のなかにすら見出さるゝ人間的な涙の眞率さや芳醇さの前に跪いて、生の尊さを想ふ。魂のうるほひを讃美する。

けれども生くることは餘りに尊く、餘りに寂しい。

私は神を信ずる。宗教家の言ふ神でもなく、哲學者のいふ生命の力でもない。それは無限であり、孤獨であり、絕對であり、寂寞であり、大悲であり、大慈であるところの實在である。

神のない世界を、人生を、私は想像することはできない。一葉の落つる後に神の存在を想ひ、二羽一錢にて賣らるる雀の死の背景にも神の嚴在を想はずには居れぬ。

私は宗教家の謂ふ信仰を持つにはあまりに人間的である。けれども私は神の存在を信じないでは生きて居れぬ。私が生の寂寞を泣くとき、私が自殺を想ふとき、私はなほ神の存在を信ずる。生きつゝある現在に私の魂を受け容れた神は、また私が死ぬるとき、私の魂を受け容れてくれるであらうことを信ずる。

私は未來の天國を考へることはできない。死後の「生命の解放」を信ずることはできぬ。けれども現在に死ぬばかり變ふるこの魂の死滅を信ずることはできない。私は過去に生き、現在に生き、未來に生くる魂を信ずる。今、生きつゝある現在の魂に盛られたる過去と未來の生命の流れを信ずる。永遠に寂しい魂の存在を信ずる。

靜觀する現在の私の心に、過去が生き、未來永遠が動いてゐることを信ずる。

刹那にして永遠なる現在を信ずる。しかも永遠なる現在は寂寞の影につゝまれてゐることを感じないでは居れない。

到底生は永遠の寂寞である。辞い生、嚴かな生、神の涙につゝまれた生、大悲につゝまれた生！　それを想ふ時、私

の胸はをどる。

私は神に祈る。感謝する。貪り生きる。

けれども悠久なる生の寂寞を想ふ時、私の心は死ぬばかりに憂ふ。私は神に祈る。自殺を思ふ。

×

寂寞は私にとりて、生活の糧となつた。

生の寂寞を見きはめようとする心熱ほど、私の生活にとつて突きつめた力強い刹那的生命感を與へるものはない。心の底から生の寂寞を感ずる時、私は生きつゝあることを涙なしに感謝することはできぬ。

何を思ふともなく、考へるともなく、大地から生まれたまゝの自然人として、秋の土を踏み、雜木林を歩む。悠久な寂寞は地から、木立から、大空から涌く。天地の無限な寂寞にひたされながら靜思する刹那に、ほんたうに人間の偉大さを、自然の驚異を、悠久の悲哀を直感することができる。

その刹那こそ私にとつて大歡喜の時である。見神の時である。ほんたうな自分自身を見出し得た機緣の時である。

神と人間とが結びつき、自然と人間とが一つになり得た無碍純一の時である。

私にとつて寂寞ほど尊いものはない。神は寂寞であり、自然は寂寞である。生の懷しいのも、生そのものが寂寞だからである。

私にとつて寂寞ほど美しいものはない。寂寞の影を湛へたる女の眼は美しい。寂寞の聲寂寞の氣を湛へてゐるが故に自然は美しい。

現代の宗教は寂寞を忘れたるが故に神の聲を見出すことはできない。

現代のキリスト教は呪はれてあれ。佛教もまた……彼等は社會的の活動をなすために、宗教の基調たる寂寞の觀念

を失つてしまつた。

キリストはたゞひとりで、しば〳〵寂しく祈つた。キリストは山上にかくれて寂寞に泣いた。そこから彼の宗教の生命が湧いて來たのであつた。恐らく譬喩的記述であるかも知れないが、彼の衣の裾に觸るゝことによりて盲人は見、啞者は聽き、跛足は起ち、死者は更生つたといふ奇蹟は、キリストの山上に於ける寂寞直感の生活からのみ生まれて來たであらう。

樂天を說く宗教、歡喜を說く宗教は滅びよ。

キリストを見よ。佛陀を見よ。宗教は寂寞からのみ生まれる。寂寞の底に永遠の寂寞を見出し、悲哀の底に大なる悲哀を見出すところに、宗教の苦惱があり、解脫があり、愛が生まれ、菩提心が發する。

×

「猿を聞く人すて子に秋の風いかに。

いかにぞや汝父にくまれたるか母にうとまれたるか父は汝を惡むにあらじ母は汝をうとむにあらじ只是天にして汝が性のつたなきを泣け。（芭蕉——野ざらし紀行）

俳聖蕉翁の生涯を貫いてゐた寂寞の感じほど力づよく私を動かすものはない。彼にとつて人生はあまりに寂しかつた。彼にとつて人生は枯野であつた。しかも枯野ほど彼にとつて尊く、懷かしく、悲しきところはなかつた。彼の魂は死の刹那まで夢寐の間にも枯野をかけめぐることを忘れなかつた。

彼は枯野のなかに心ゆくまで生の寂寞を感じた。枯野のなかに見出さるゝ人間生活の悲哀を見出した。彼は枯野のなかに見出さるゝ寂寞や悲哀の前に謙虛な心をいだいて跪いた。人生におこつて來るあらゆる憎惡も悲劇も、みな運命であつた。人間は運命のなかに「性のつたなきを泣く」より他に方法はなかつた。運命は寂寞であつた。

運命の寂寞に、忍從しつゝ生きんとする彼にとりては旅人の生活ほどなつかしいものはなかつた。彼は一所に永住して、刻々に滅び行く萬有流轉の相を凝視するには忍びなかつた。彼は自然の流轉と共に流轉し、自然の寂寞と共に寂寞を分ちて生の寂しさに泣き、生の寂しさを禮讃したのであつた。彼の生活の基調は自然の寂寞のリズムそのものであつた。

「日々旅にして旅を住家とす古人も多く旅に死せるあり」（おくの細道）

放浪者の心ほど尊いものはない。絶えず一身を自然の前にさゝげ、天を信じ、寂寞そのものゝなかにひたされて、生をあこがれ、生をかなしみ、生の寂寞を禮讃する。

「礁打て我にきかせよ坊が妻」

寂寞を悲しみつゝ、尙ほ寂寞を嚙みしめ、寂寞を禮讃するところに厭世詩人の悲壯な生活美があり、嚴粛さがある。寂寞の底に徹して、一身を捨て、一家を捨てゝ、旅より旅を歩く放浪者のみ神の國を見ることができる。

「親を捨てよ、子女を捨てよ、財寶を捨てよ」と放浪者キリストは言ふ。

「一つの杖のほかは旅の用意に何をも携つなかれ。旅袋、糧食また金をも携たず、たゞ履をはき、二つの衣をきる勿れ。」（馬可傳七の七）

何物をも持たざるが故に、全世界を持つことのできる放浪者の生活ほど尊いものはない。

寂寞の涙をもつて淨化せられた宗敎家出でよ。哲人出でよ。

×

田園に歸れ！　私はこの頃特に故鄕が戀しくなつた。父と母と姉妹たちと靜かな故鄕の生活を送つたらと思ふ日がかなり多い。けれども故鄕にはもう耕すべき一枚の畑をも持つてゐないことを思うては、自分の決心を破つてしまは

なければならぬ。

東の空が白むころ起きて、終日を野良に働いてゐる故郷の人々を懷ふ。日が暮れてから廣い土間に沿うた爐で、榾火を焚いてゐる夜物語の若者たちを想ふ。櫨の行樹の下に麥を干してゐた小娘を想ふ。

筑後川からSの町まで雨のなかを一つの傘にはいつて歩いて來た乞丐を想ふ。

二十年前の故郷はすべて美しく私の頭にのこつてゐる。

×

學校が始まる。若い人々に逢ふのはうれしい。若い人々の眼には夢があるから。詩があるから。

講師室にはいらないで、いつでも學校の周圍をぐる〳〵歩いてゐたといふラフカディオ・ハアン先生がなつかしい。

×

戀人を訪ねて、逢ひもしないで、中途から引きかへして來る若者のなやみは、涙を持つた悲哀である。

友人に逢つて見たいと思つて出かけながら、中途でいやになつて引きかへして來る男の寂しさには涙はない。けれどもそれは涙以上の悲哀を持ち、人間そのものゝ宿命的な悲哀や絶望の影が動いてゐるやうに想はれる。

涙を流さない悲しみの深さが、このごろになつてだん〳〵わかつて來たやうな氣がする。またそのやうな悲しみをだん〳〵多く味はゝなければならぬやうなことになつて來た。

×

四年前にTが自殺をして死んだ。

今日久し振りで机のなかを整理してゐると、Tが富士の裾野の板妻のバラックで撮つた寫眞が出て來た。

富士をバックにして劍を杖づいた靑年士官の、長い靴をうづめるやうに秋草がしげつてゐる。寫眞の裏には「半年ノ

病癒エテ、裾野ノ廐舍ニ來タ。再ビ捲土重來ノ活動ヲ期ス。爲記念。」と書いた彼の字がある。五年前の寫眞である。

私はまた同じ抽斗のなかゝらY夫人S子の寫眞を出して見た。S子がまだ女學校に通つてゐたころの寫眞である。

Tが自殺した時は、私はS子を憎まずには居れなかつた。S子も二年前に鎌倉で亡くなつた。

私はTとS子の寫眞を今日終日机の上にならべて飾つて置いた。

×

私はよく他人を恨むことがある。しかし大抵の場合他人は私よりも率直で善人であることをさとることができた。

私は心のうちで、ほんたうに惡いことをしたと後悔せずには居れないことが多い。

郊外に住みて

昨日は栗をたくさんお送り下されてありがたう存じます。もう山百合も枯れてしまひましたか、林のなかには栗鼠などが枝から枝を傳うてゐますさうで一つ一つの栗を拾うて下すつたあなたや、またあなたを取り卷いて林間に嬉戯してゐたであらう子供たちのことを想像しながら、栗をゆでていたゞきました。首のまはりの黒く垢づいた子供、補綴だらけの着物につゝまれた子供たちを對手に、栗を拾つてゐる若い教育家の姿を描いて、私は小半日緣端に坐つてゐました。

私はその時恰度ロダンに關する本を拾ひ讀みしてゐたのでしたが、その中でロダンが花について語つてゐる言葉を面白いと思つて讀みました。

「人生を理解する人は誰でも花を愛し、花の無邪氣な心づかひを愛する。」

「花のすがく\しさを說き明かすことのできるほど純潔な心を持つた人間はない。」

「花が花瓣を落す時は、花は衣を脫いで、大地の上に眠りに行くのであらう。」

「花も亦かれ等の日沒を持つ。」

「私の花束はいつ見ても同じだが、私はつひぞ見倦いたことがない。」

私は君が榛名、小野子、子持の山々の間を縫うて來る吾妻川の畔で、自然の懷にはぐくまれた「靜かな、柔順な」子供たちを對手に、教鞭を執つてゐられる尊い生活を羨ましいやうな心持ちで色々に想像して見ました。

ロダンが花を愛した心持ちをば、恐らく君は自然の子供たちのうちに見出してゐられるだらうと思ひます。

神は自然を作り、惡魔は都會を作つたと言ふ古人の語を想ひ出しますが、實際都會の空氣につゝまれた多くの人々の心は、少年の心までもが傷けられてゐます。眞人間らしい瑞々しさを失つてゐます。ブルジュアーの子供ばかりではありません、プロレタリアーの子供たちまでもが、救ひがたきまでに傷けられてゐます。

君の現在の心持ちがいつまでもつゞいて行くことを心から祈ります。師が自分の弟子たちに對してすべての信愛をさゝげることのできる境遇ほど尊い生活はありません。そしてそのやうな敎育家の生活は今では極々田舍の一部分にしか見出されないことになつてしまひました。權利を主張することの他生活を知らず、または唯物論的な見方の上にのみ人間生活を築き上げようとする都會人の間には當分眞人間の生活は見出されないことであらうと思ひます。

×

私は武藏野を愛します。けれどもそこでも自然の美しい心は日一日と失はれて行つて、到る處に金錢によつて汚された惡魔の臭ひが漂うてゐます。

かつて武藏野の靜寂を象徵した欅の森は伐り倒されて、そこには貪慾な小資本家のゴム工場や、鐵工場の煙突が武藏野の空氣を溷濁させてゐます。かれ等小資本家の常として身邊を飾るものは金の時計、金の指環、金の何……といかにも不快なマムモニズムを象徵してゐます。

私たちはかつてせゝらぎのかすかな響を聽いたところに、今日では惡魔的小資本家のオイル・エンヂンの音を聽かなければならないのです。

私たちは冷酷な大資本家を倒さない間に、すでにありあまる程の小資本家が武藏野の自然をマムモンの殿堂と化しつゝあることを見るのです。

そしてこれ等の小資本家のうちには、かつてプロレタリアーの間の小悧巧な人間であつたか、または大資本主の懷

に喰らひついてゐる狡猾なだに的人物であつた者がはいつてゐることも注意すべきことです。
私の近所にも二人の小資本家がゐます。一人は近所の鐵工場の職工であつた男が、今では三十人近くの職工を雇つて資本主の立場にあるのですが、三百圓の獵犬を飼つたり、堂々たる邸宅を構へてブルジュアーの仲間にはいつてしまひました。
尙一人はランプ屋だつたのですが、これは大資本家の懷に喰らひついてゐるだに的人物で土地賣買のコムミッションで叩き上げて、今では妾を置いたりして、村の人に逢つても頭を下げたことのないほどなブルジュアー氣質をあらはしてゐます。
正直な勞働者、正直な農夫、正直な敎師、正直な記者はいつでも貧乏で、いつでも無能者のやうな生活を送らねばなりませぬ。これが今日の世の中です。武藏野を步いてゐると、私たちは橫着な男たちが大きな邸を構へてブルジュアーに成りすましてゐる傍に、正直な男たちが住むべき家もなくして、蒼白い顏をしてゐるのをあまりに多く見ます。
資本家と勞働者とのいさかひもなほ〳〵續いて行くでせう。正しい事のためにはどこまでもいさかひを續かせて行かなければなりません。
しかし何時も私たちが考へてゐなければならぬことは正直者を尊敬しなければならぬ、勤勉な者を尊敬しなければならぬといふことです。人類のために盡してくれる人々を尊敬しなければならぬといふことです。
私たちの戰ひは資本家對勞働者の戰ひといふよりは、不正直者對正直者、怠惰者對勤勉家の戰ひでなければならぬと思ひます。そして、その戰ひが、怠惰者や不正直者を滅ぼすための戰ひでなく、かれ等を眞の人間として生かし、勞働の幸福を自覺せしむる爲の戰ひでなければならぬことはいふまでもないことです。

×

今日の日本にはあまりに不正直者や怠惰者が多過ぎるのです。

日本人全體が殆んどブルジュアー風な氣障な病氣にとりつかれてゐます。東京に來て、（大阪でも京都でも、同じですが）電車に乘つて御覽なさい。汽車に乘つて御覽なさい。資本家階級の人たちは無論ですが、商人も、農夫も、會社員も、勞働者も、官吏も、學校敎師も、金緣の眼鏡を欲しがつてゐます。金の時計を欲しがつてゐます。

私はこのやうな國民が將來惠まるゝであらうかといふことに對しては非常な疑ひを持つてゐます。

私は戰後いろ〳〵な會社が破綻するのを見て、むしろ宜いことだと思つてゐます。もつと〳〵破綻や、倒潰が、起つて來て、人非人的な大資本家や、それにくつ付いてゐた寄生蟲的な小ブルジュアーたちが眼ざめることを祈つてゐます。

×

勞働時間の八時間制や、更に六時間制といふやうなことが久しい間問題になつてゐますが、たとへ十時間でも、十二時間でも喜んで勞働に從事されるやうな社會になつて來ない間は、六時間が三時間働くやうになつても勞働は苦痛にちがひないのです。勞働者は一日でも早く勞働から足を洗ひたがるにちがひないのです。

勞働六時間制や八時間制を決めるのも必要でせうが、それよりも大切なことは勞働を生活創造の唯一手段として喜ぶやうなものにしない間は、勞働は畢竟人間生活の牢獄になつてしまふでせう。

勞働の機械化を打破して、勞働の創造化、或ひは勞働の藝術的生活化といふことが考へられなければならぬと思ひます。

勞働が重荷であると考へられてゐる間は、勞働は人間生活の呪ひであり、不名譽であります。

勞働が私たちの創造的衝動に滿足を與へるやうな組織になつて來た時、勞働は生活表現の唯一手段となり、人生の

名譽となつて來ます。

×

避姙といふことがこの頃世間の問題になつてゐます。しかもそれが白手(ホワイトハンド)の部類に屬する人々の方から主張せらるるだけに皮肉な感じがしてなりませぬ。

避姙にも理由はあります。首肯せらるゝ點もあります。しかし十から十までが是認せらるゝといふ譯のものではありませぬ。中には隨分得手勝手な議論もあります。

最近歸朝して來た若い男爵夫人の言として「あたしたちはたくさんの子供を生むことによつて、自分の社會的な事業を妨げらるゝ」といふやうな言葉が新聞紙に揭げられてゐましたが、その夫人が餘程の天才であれば兎も角だが。

……自分はあの記事を讀んだ日、一日不快でならなかつたのでした。

「あなた方はせめて御自分の子供くらゐたくさん生んで、勤勉な立派な人間に作り上げて下さい。私たちはあなた方に私たちの社會の面倒を見ていたゞきたくはありません。」と私は言ひたいのです。

貴族社會の人々の慈善事業だの、愛國婦人何々事業だのといふやうな物くらゐ、不快な、そして空虛なものはありません。僞善的なものはありません。

すべて國家的に、また社會的に爲さなければならぬ事業は、みんな、正直なそして勤勉な人たちが、自分の額に汗して贏ち得た物を提供して盡す時に、始めて尊さを持つてゐるのです。

×

こんなに惡い心になれるものだらうかと驚かされるほど惡い心の人間が世間にはゐます。

同時に、こんな善い心になれるものだらうかと驚かされるほど善い心の人間が世間にはゐます。

私はこのごろになつてこの二つの事實をしみじみと味はゝされました。

私は人間といふものをほんたうに呪ひたくなることもあります。同時に、ほんたうに人間といふものを心から尊敬したくなります。

×

何のやうに憎み合つてゐる人間でも、屹度何處かに共通の點を持つてゐます。その共通の點さへ巧く結び付くれば二人は互に今までとまるでちがつた方面から、その對手を見ることができるやうになるにちがひありません。愛、憎は共通な點を結び付け得たか、否かに依つて起ると思ひます。

一度憎んだものは、大抵はいつでも共通の點を結び付けることをしないで、過去の憎みの影をのみ見てゐるのだと思ひます。

×

善ばかりの人間がないと同樣に、惡ばかりの人間もありません。

荒涼たる野の中に一片の花を見出し得た時、私たちは暗い自然のなかに、美を見出し得たことを喜ぶでありませう。

利己的で、僞善的である人間のなかに涙を見出し得た時、私たちはどんなにか人生に生きてゐることを尊いと思ふやうになるでせう。

善人の眼は、人生はあまりに多く善に充ちてゐることを見出すでありませう。

惡人の眼は、人生はあまりに多く惡に充ちてゐることを見出すでありませう。

惡人は、不幸な眼の所有者であります。

×

ひところ急に寒くなつたので草のなかの蟲がすつかり隱れてしまひましたが、この二三日またすこしぽかぽかして來たものですから、私の嫌ひな蛇が池のまはりなどにのたくつてゐます。私はこの郊外に引つ越して來てから隨分たくさんの蛇を見ました。しかしどうしても馴れません。あのいやな形を見るたんびに體中の毛が一本一本にすくみ上つてしまふやうです。

造物者は妙な物を拵へたものだと呪ひたくなることもあります。

しかしどうも殺すこともできません。

あれでも生きるために作られたのだし、それにもう幾日も草の中をはひまはることもできまいと思ふと、あはれにもなつて來ます。恐らくこの頃では冬眠の準備に穴でも探して歩いてゐるのでせう。

この頃では嫌ひは嫌ひですが、誰にも呪はるゝやうに作られた蛇の運命が氣の毒に思はれてならぬこともあります。

この近所でも秋らしい渡り鳥の聲が日ましに多く聞えて來るやうになりました。

柔かな草

善人或ひは悪人といふやうに、一つの人間を差別することの不合理であることはいふまでもないことである。けれども今日の學校教育の一つの理想は善人を作るといふことにあつたり、また文藝界でも善人の世界を目あてとして歩かうとしてゐる人たちが必ずしも少くはない。

しかしながら善の對照を胸に描いてゐる間は、宗教も、倫理も、藝術も、ちひさな我執の域を脱してゐない。「より善き人生のために」といふ言葉が數年來文壇にも唱へられ、現にこの言葉を唯一の標語として、藝術を取り扱はうとするやうな人々が必ずしも少くはない。第二流、第三流の批評家や作家にとつては都合の宜い目やすである。

「某はまつたく善きもほしからず、また惡もおそれなし。善のほしからざるゆゑは、彌陀の本願を信受するにまされる善なきがゆゑに、惡のおそれなきといふは、彌陀の本願をさまたぐる惡なきがゆゑに……」

この境地まで行つてはじめて親鸞の眞の宗教が生まれる。藝術の世界は善惡を超越したところになければならぬ。善惡を差別してかゝるやうな宗教や藝術は到底第二義的なものに過ぎない。囚はれたるものに過ぎない。

×

生活も藝術も自然であることが何よりも大切である。素直な人間の心のまゝから生まれて來ることが何よりである。イプセンに取り憑かれた藝術、ドストイエフスキイやトルストイに取り憑かれた藝術、ポーに取り憑かれた藝術、……さう言つたものを私は排する。

人道だの「より善き善」だのを目やすとしてゐる藝術もまた憑かれたる藝術である。小主觀の藝術である。

何ものにも憑かれない藝術、何ものにも囚へられない批評を創造することのできるもの丶みが、存在の價値を持つてゐる。

私は自然のまゝの藝術を、自然のまゝの生活をもとめる。小主觀から割り出された藝術や生活の息苦しさを厭ふ。自由、個性の尊重、勞働の尊重、社會奉仕、獻身……みな正しい市井人の主張である。しかし默々として畑を耕してゐる素朴な一農夫を見よ。それはミレエの傑作中に見出さるゝ農夫にも增して寂しいがしかし尊い人間そのもの丶生活表現である。そして喧しい市井人の小悧巧な主張にまさること幾十倍である。

×

私にとつて最も恐ろしいことは天才の無いといふことではない。あらゆるものに對する心熱の炎が燃えなくなるといふことである。恰も十七八歲の靑年が初戀に燃ゆる日のやうな心熱の炎が、自分のうちに潜んでゐる間は、私は悲しまうとは思はぬ。

あらゆるものに對して胸のときめきを經驗することは、かなり遠い過去となつた。今では時折り、或る偶然の機會に打つ突かつた刹那に過去の或る時を思ひ出して、かすかに胸の高鳴るのを聽くことがある。しかしほんの刹那的で、響きも弱い。恐らく十數年の後には私の心からはその思ひ出さへも忘れられてしまふのかも知れない。思ひ出を持たぬ人間の生活の寂寞を想ふと、私は耐へ切れなくなる。思ひ出は悲しくとも、いつも私を過去の少年の日に、或ひは靑年の日に甦らせてくれる。

たゞひとりで田舍道を步いてゐる時、武藏野の丘阜に立つた時、或る街を步いてゐる時、或る坂を下つて行く時、色々な俤が自分の胸に甦つて來る。その刹那ほど私にとつて尊い刹那はない。そこには悠久の寂寞がある。永久に滿たされない悲しみがある。けれどもそこには憎みもない、不純な影もない、すべてが淨化せられた現在となつて、私

のものとなつてゐる。かつて永久に別れたTも、Kも、そしてかの女も、みな私のものとなつて、私のうちに甦かへつて來る。

思ひ出は私の生活にとつて、たとへば宗教家のいふ神の世界を如實に感ぜしむるものである。しかも神の國などといふものよりも、幾層倍懐かしい世界である。

×

昨日畑のなかの道を傳うて、王子の町に出て、盆提灯や茄子などを買つて來た。ませがきもなく眞菰もないので、庭の草を刈つて來て、假の精靈棚をこしらへて祖父やTの寫眞などを飾つた。

迎へ火を焚いて、燈籠を吊せば、黍の葉をゆらぐ風が既に秋らしい感じをわかさせる。何となしに「燈籠に亡き玉菊が來る夜かな」の句さへ偲ばるゝ。

クリスマスだの新年だのといふさわがしいお祭りさわぎにくらべて、何といふ靜かな行事であらう。

私はこの夏十幾年振りで田舍に住むやうになつて、久し振りで落ち着いた心持ちで夏から秋へかけての自然のうつりかはりを味ふことができた。

七夕まつりだの、盂蘭盆會などといふものを見てゐると、いかにも自然と人間との生活の親しみといふことを想ひ出さずには居られない。

春の灌佛會なども、このころでは宗教上の一種のプロパガンダのやうな心持ちで、大きな都會の眞ん中で行はれてゐるが、あれなども田舍の自然のなかにつゝまれてやつた方がほんたうな味はひがある。

前の日にお寺に行つてお寺の周圍の野原や、お寺まで行く野の道に咲いてゐる薊の花だの菜の花だのれんげだのと花を摘んで坊さんの手傳ひをして花の御堂を拵へて、八日の朝ほの暗いうちに竹の筒を抱へて高い〳〵石磴をのぼつ

て、お寺の古い山門をくゞつてから、花御堂の前に立つと、まだ甘茶からは湯氣が立つてゐる。湯氣のなかゝらは眞つ黒なお釋迦さまがほの見えてゐる。

小ひさな柄杓に甘茶を掬んで幾度も〳〵眞つ黒なお釋迦さまの頭から灌ぎかけた甘茶を、竹の筒に容れて、お寺の石の段々を下る間にも、幾度も指の先で甘茶を眼につけたり、顳顬につけたり、またお腹が痛まぬようにと言つて臍につけて、みんなで笑ひこけながら草の道を歸つて來たころのことは、いつまでも忘れられない。學校に行つてからも終日竹の筒の甘茶を出しては飲んだり、硯のなかに注いだりするのであつた。

×

七夕祭も田舍の少年にとつては樂しい年中行事の一つである。

夜毎に銀河が近く、はつきりと見えるやうになつて來ると、少年たちの頭には笹につるした色紙が浮かんで來るのである。

野天のなかに焚かれてゐる風呂のなかで、私たちは父親から牽牛星や、織女星を指さして教へられるのであつた。

何といふ星であらうか。銀河から少し南西に寄つて三角形を作つた星座がある。そして頂點をなした中央の星だけが紅く見えるのである。

「眞んなかの星さまが紅いだらう。あれは左右の星さまを擔いでろからぢや。右と左の星は秋の收穫ぢや。だから豐年になればなるほど右と左の星が重うなるので眞んなかの星さまの顏が紅くなる。」といふやうな父の話を、私は野天風呂の湯をぼちや〳〵させながら聽いたものであつた。

雨が一粒でも降れば天の川が溢れるので、牽牛星と織女星は逢ふことができないといふやうな話も聽かされた。

「可哀想にまた雨が降つて來た！」と言つて、牽牛星や織女星の不運を悲しんでやる女たちもあつた。

七夕の夜は、まつたく雨になることが多かつた。

「私たちは三日も四日も前から紅、白、綠、黄、淺黄、青、黑などの色紙を買つて來て短册を拵へては、朝早く起きて蓮や稻の葉の露を集めて墨を磨つて短册に字を書いた。六日の朝は山から大きな男が笹をつけた男竹を擔いで賣りに來るのであつた。

他家の竹よりも自家の竹が大きくて丈が高いといふのが、子供心にも矜であつた。

姉や妹たちは、五色の紙で着物を裁つて星にさゝげるのであつた。

私たち少年の身になると七夕の宵に雨が降るといふことは牽牛星や織女星のためよりも、むしろ自分等の七夕棹が濡れることのために悲しかつたのであつた。

私たちが雨に濡らすまいと思つて七夕棹をどうかしようとする、親たちは「雨が降つてゐても七夕さまは短册を見て下さるから……」と言つて私たちの手をとめた。

雨は大抵嵐を伴うてゐたので、笹に結へつけられた色紙は自由に飛んで茄子畑だの桑畑だのへ散つて行つた。

あの頃のやうな素直な心は失はれてしまつた。

七夕祭だの灌佛會がだん／＼忘れられて行くやうに、自分の心も年々がさつな、かたくなゝものになつて行くやうな氣がしてならぬ。

×

心から人間を信ずることのできないのは、神を信ずることのできないのよりも更に不幸である。

疑ひ深い近代人の一大苦痛は人を信ずることのできないところにある。身も心も打ち委ねて人を信ずることのできないところにある。

「たとひ法然上人にすかされまゐらせて、念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふらふ。」

この信頼あつてはじめて親鸞の宗教に、光りが生まれ生命が湧いて來る。

善人と信じてかゝれば惡人も自分に對しては善人となつて現はれて來る。人を見て盜人と思へば、どのやうな正直な人間でも、自分に對しては盜人となつて來るにちがひない。

最初から監獄といふものを拵へなかつたら盜人や惡人は生まれなかつたかも知れない。社會或ひは國家がその社會人や國民を疑ふところからいろ〳〵な惡人が生まれて來る。

少くとも小悧巧な道德律などを頭に持たなかつたら人間は、もつと正直に、もつと素直なものであつたにちがひない。

これは藝術の場合にも言へる。色々な藝術上の約束や、「より善き人生」だのといふやうな小悧巧な範疇を捨てゝしまつた時、素木のまゝなほんたうな藝術が生まれる。

戀に燃えた青年は、僞らぬ戀の心を歌ふが宜い。それがほんたうなかれの藝術である。「萬葉」を模倣したり、當世の歌人の歌を眞似たりする時、かれの歌ばかりではない、かれの戀までもが氣障なものになる。

農村の青年たちは、農村の言葉で、農村の青年の憧憬や、疑惑や、禮讃や、憂鬱をそのまゝに語れば宜い。それが唯一つの尊い藝術である。

作家にとつて恐ろしい危險の一つは玄人になるといふことであらねばならぬ。樂に物を作ることができるといふことでなければならぬ。多くの助太刀を持つといふことであらねばならぬ。

作家にとつて一等嬉しいことは、いつもひとりであるといふことでなければならぬ。いつも自分の歩むべき道を自分ひとりで歩いてゐるといふことでなければならぬ。擽つたいやうな批評をしてくれる味方を持たないといふことで

あらねばならぬ。氣障な、傲慢な、無理解な讃美者を持たないといふことであらねばならぬ。

×

「善人なほもて往生をとぐいはんや惡人をや。」これも親鸞のありがたい言葉の一つである。私はこの尊い言葉と、オスカア・ワイルドのキリスト論中の「罪人なるが故に救はる」といふ意味の言葉とを思ひ合はせて深い興味を感ずるのである。この言葉は、さらに聖者親鸞も救はる、耽美派詩人ワイルドもまた救はると思ふ時一層深い意味を持つてゐる。

私たちは善惡二つの差別相にこだはつてゐてはならぬ。善を思ふものは却つて地獄に落ちる。私たちはひたすら自分の惡を思はなければならぬ。惡を泣かなければならぬ。そこから救ひが生まれるであらう。

倫理學者や、行の正しい宗教家といふ人に往々人間らしい親しみを持たないことが多い。

私たちは、必ずしも善人や正しい人間をもとめない、人間として感じの深い人間をもとめる。殊に私は正しいと自らを認める人間を嫌ふ。かれ等は正しかつたかも知れない。けれどもかれ等は人間の世界を濕ほす涙を持つてゐない。かれ等の心は砂漠である。ペトンのコートである。そこには一本の樹も見出されない。

監獄のなかの男にも涙がある。人を殺した女の心にも涙がある。かれ等の心は雜草に掩はれた野原である。けれどもそこには植ゑさへすれば木も繁り花も開く。

もし科學が人間の心を冷たくし、人間の涙を涸らすごとき科學であるならば、私は全然科學のない社會をもとめる。涙は智識以上に尊く、人間的であることは、すべての科學を知ることよりも尊いことであるから。

×

「たとへば人を千人殺してんや、しからば往生は一定すべし」

善人または正しい人間が救はれないのは、人一人殺したほどの自責の念をも持たないからである。私たちはラスコルニコフが金貸しの老婆を殺してから後の懊悩を想像することができるが、かれはたゞ二人の老人を殺したゞけであれほどの苦惱を嘗めなければならなかつたのであつた。もし私たちが親鸞の言葉を文字通りに實行したとしたら、その苦惱はどれほどであらう。人千人殺したほどの自責の念を持つことのできる人のみが往生することができるといふ本願の世界は、どんなにか尊い、深い、ありがたい世界であらう。

人間の罪惡といふ罪惡から生まれて來るすべての苦痛を嘗めつくしても、まだ本願は仕遂げがたいであらう。いはんや自己を天才と信じ、自己を賢いと信じ、自己を正しいと信じてゐる人々には彌陀の本願は成就しがたいことであらう。私は嘘つきである、輕薄な人間である。利己的である、妥協的である、ごまかし家である、うぬぼれ家である。しかし私は私を捨てゝはならぬ。

「彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずればひとへに親鸞一人が爲なりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしたちける本願のかたじけなさよ」

すべての惡人のために救ひがある。惡人なればこそ救ひがある。

×

錐をもつて揉み、鑿をもつて刻まるゝやうに痛切に自分の惡を意識するところから救ひが生まるゝであらう。藝術家が、千人を殺したほどの強い自責の念を持つ時、千人を殺した囚人ほどの恐怖を持つ時、謙虚さを持つ時、その人の藝術は救はるゝであらう。

文壇にもほんたうに魂の底から自然人の心で「より惡しき自分」を掴み出してくれる愚かな人間が一人や二人はあつても宜い筈だと思ふ。

私は生きてゐたい

私は夜、雪の道を歩いてゐた。
私は星を見てゐた。そして星の一廻轉に八萬幾千年を費すものもあるといふ天文學者の記事を讀んだことなどを想ひ出した。
私はいつまでも星を仰ぎながら歩いて行つた。
生きてゐるといふことや、死といふことが色々な形で私の頭に思ひ泛かべられて來た。私は耐らないと思ふほど寂しかつた。そしてまた星を見上げた。
私は不圖私の數歩前を歩いてゐる一人の男が、やつぱり天の星を仰ぎながら歩いてゐるのを見た。恐らくあの男も私と同じやうなことを考へながら歩いてゐるであらうと思つた。
更に私たち二人の前を歩いてゐる男があつた。恐らくその男も天の星を仰ぎながら、私たち二人と同じやうなことを考へて歩いてゐるのかも知れない。
私たちの前を歩いてゐる第四人目の男も、第五人目の男も……そして人類すべてが同じやうな絶望と孤獨とを感じながら、天の星を仰いで歩いてゐるのであらう。
そして更に私たちの後から後からと歩いて來る人間も、恐らく同じことを思ひながら、星を見上げつゝ歩いて來るであらう。
前の方を歩いてゐる男が一人づゝ世界から失はれて行つた。

自分等の順番がまはつて來るまで、人間はみんな星を見上げながら、同じ孤獨と寂寞とを感じつゝ歩いてゐる。

去年「大地の涯」を書いた時であつた。私は一部のキリスト教の人たちから手きびしい非難を受けた。「人の魂を傷けるお前は人のものを盜んだのよりも罪が重い」といふやうな言葉まで浴びせかけられた。無論その言葉のうちには「あはれな不信者だ」といふやうな、私に對するキリスト教徒的な同情も加はつてゐたやうである。私は餘り良い氣持もしなかつたが、別に反抗したい程の氣も起らなかつた。時としては神としてのキリストを信ずることの厚い人が餘り多いのに驚きもし、羨ましくもなつて來た。

數日前であつた。未知の人から「あなたはクリスチャンでおいでの由」といふ手紙が來た。私も過去の或る時期に於いてはクリスチャンであつた。高い雪の山に登つて、雪に降られながら地にひざまづいて祈つたこともあつた。しかしその時だつて私はクリスチャンといふ名にはふさはしくなかつた。私は餘りに惡魔的な熱情に燃えてゐる人間であつた。

私はこの數年來神を失つてしまつた。未來といふものをも信ずることができなくなつた。メエテルリンクの未來觀など讀んでゐると彼が餘りに樂天的な肯定者であるやうな氣がしてならぬ。

無論私は唯物論的に人生を解釋しようとは思はない。私は無限なる或るものの存在を感ぜずには居れぬ。けれどもそれが現身の私自身の永生といふやうなものに何の關係があるかを疑ふのである。

私たちは恐ろしい流行性感冒のために近頃あまりに多くの死を見た。ちよつと市街を歩いてゐても二つや三つの柩車には打つ突かるのであつた。多い日には十や十四五の死を見た。實際に半月乃至一ヶ月以前まで語つてゐた人たちが既に、この世界の人でなくなつてゐたりした。言ひ舊された言葉であるが「人生は餘りに儚ない」といふ感じがひしひしと胸に迫つて來る。神を信ずる人たちはこれでもやつぱり「神の御心だ」として安んじてゐるだらうか。そして

死者が何處かの世界で甦つてゐるといふやうな、のんきな信仰を持つてゐるであらうか。

親しい人を失つた人々にとつては、「せめて未來あれ」と望む心の起るのは無理もないことである。しかしそれは人間が描いた夢であつて、眞實在ではない。

一疋の蟻を踏み殺した人が、嘗て蟻のために永生を思つてやつたことがあるであらうか。

蟻の死は蟻の永遠の死である。人間の死は人間の永遠の死でなければならぬ。

それは隨分辛い、悲しい事實である。しかしながら私たちの生にはそれ以外の何ものもない。

「神すべてを與へ給ふ。故に神すべてを奪り給ふ」とヨブは言つた。

私は神とは言はぬ。たゞ「無限なる或るものが混沌の底から私たちに生を與へた。故に彼はまた私たちの生を奪ふ」と言ひたい。人生は一度與へられたるものを再び取り返さるゝ刹那に最後の幕が下りる。

×

私は神を失つた。未來を失つた。私は死を恐れる。神を持たず、更生を信ずることが出來ない私にとつては現實の世界ほど尊いものはない。

親子、夫妻、朋友の間に戰ひがあることも眞實であらう。けれども子として親を思ふ心、夫として妻を思ふ心、友として友を思ふ心ほど美しい生そのものゝ閃きが、現身の世界を去つて何處に見出されよう。

人生は戰ひであるといふやうな言葉を平氣で語る文學青年がある。親を思ふ心、戀人を思ふ自分の心に利己的な曇りを認めないで、このやうな大膽な宣言が果して言ひ得られるであらうか。

現身の世界は永劫の虛無の時を通じて、私たちに與へられた刹那の現實である。

死は、そして永遠の虛無の手は私たちの戀の後ろに、私たちの友情の後ろに、親と子の後ろに闇の世界の鍵を握つ

てゐる。
死の手にかゝへられた蠟燭の光りに照らされながら私達は刹那の生を享樂し、または苦しんでゐる。
或る詩人は「死の面前で踊つてゐる」と言つた。しかし人間が「死の面前で愛し合つてゐる」事實を見のがしてはならぬ。
暗い夜の空に一點の星を見出し得たやうな勇氣を與へるものは絶望の底の人間の愛である。曠野の黑い土の上に、一點の紅花を見出したやうな明るさを感じさせられるものは人間の涙である。
私は木にも愛があり、鳥にも愛があることを信ずる。しかして、それはすべて永遠に混沌たる虚無のなかゝら刹那的に閃き出づる造られいたるもの〻微笑である。
愛は惱める者の微笑である。愛は絶望せる者の微笑である。
私たちは惱める者と惱める者との間に微笑を取り交はすことによりて、絶望の生の裡に少かな潤ひや、明るさやを見出すのである。
人生に微笑に醉ふことによりて、微笑に蠱惑せらるゝことによりて、少かに自殺から免れてゐる。
私は神を持たない。しかし人生に愛がある間は、惱める人間の微笑を見出してゐる間は、人生から遁れようとは思はぬ。
私には宗教もない。神もない。在るものは人間のあたゝかい心と涙だけである。
「この世界に神がなかつたら自分は生きては居れぬ」と言つた大思想家もあつた。
私はさうは思はない。神を失つても、宗教を失つても、藝術を失つても私は生きてゐたい。人間のあたゝかい心と涙がある間は。

×

親がある間は、友達がある間は、戀人がある間は私は生きてゐたい。たとへ國が亡びても生きてゐたい。神が無くなつても。

よし友達を失つても、戀人を失つても私は生きてゐたい。亡くなつた友達を想ひ、去つて行つた戀人を想ふ涙が私の胸に湧く間は、私は生きてゐたい。

自然に還る日

「雲とへだつ友かや雁の生きわかれ」といふ句を書いて芭蕉が世を捨てたのは二十三四歳ころであつたと記憶してゐるが、「芭蕉野分して盥に雨をきく夜かな」と言つたのは三十幾歳ころでもあつたらうか。

更に白隱和尚が「厨下枯淡益々甚だし、商家捨る所の敗醤を乞うて日用に給す」といふやうな清貧の生活を送つたのも四十歳前後であつた。

このごろ私はまた京都の西田天香氏の書かれたものを讀んでゐる間に西田氏が三十二歳で、恰も白隱和尚のやうな枯淡な生活にはいつて行かれたことを知つた。

アシシのフランシスやキリストの發心はもつと早かつたやうであるが、大抵の人が無常觀を抱いたり、或ひはその生活に大轉機を喚び起させるのは三十から四十歳前後までのやうに想はれる。

私はこの二三年來殊に、自分の生活にも更改を喚び起さなければならぬ時が來てゐるのではないかといふやうなことを切に考へさせられるが、いざとなつて來ると實行するだけの勇氣がない。自分ながら恥づべきことであると思ふ。たゞ私は捨て身になつて自分の思ふところに向つて精進することのできる人を羨ましくも思ひ尊くも思ふ。昔から人間の苦痛を分ち持つてくれた人はいつも名もない捨て身の人であつた。

私を訪ねて來たO君といふ青年があつた。キリストについて、青年は私とまるでちがつた信仰を持つてゐた。O君は飽くまでもキリストを神と信じ、キリストの無謬論を信じてゐた。私とO君とは何處まで行つても議論の上では同じ道を歩くことのできぬ人間であつた。

二人がかなり激しい議論をしてから半年ちかくの時が經つた。私は人生といふものに對して何一つ肯定的態度を取ることもできず、毎日々々光りのない生活を送つてゐた。或る日私はいつものやうに終日何にもしないで上野公園を通り抜けて、街をあてもなしに歩いてゐた。夕方疲れてしまつたので、上野の方へ歸つて來たが、私は途中でO君に出會つた。O君はにこ〳〵笑ひながら私の方へ近づいて來た。

「これから野外傳道に出かけるのです！」と言つたO君の眼には、何物をも貫かずには置かないといふやうな勇氣と希望とが輝いてゐた。

私はO君が葉櫻の下で靜かに神の言葉を語り出したのを、遠くから眺めてゐた。私はO君の姿を見てゐる間にO君に對して尊い感じを抱かずには居れなかつた。合掌でもしてO君を見送りたいやうな氣がした。

×

「隣人を愛さねばならぬ。」生きることが第一だ。愛することが第一だ。生きるといふことの哲學を知ることや、愛といふことの哲學を知ることは第二義だと語つたのはドストイエフスキイの「不思議な夢」の主人公であつた。生きることも捨て身でかゝらなければならぬ。愛することも捨て身でかゝらなければならぬ。藝術を生むことも、戀人を戀することも。

私はいまだに捨て身になることのできぬ自分を悲しいと思ふ。

私の一生を通じて現世的な幸福を求むる心と、現世を厭離する心とが絶えず私の心のなかに動いてゐるであらう。

私は芭蕉の旅行記の記などを讀んでゐると、明日にも社會生活を捨てゝ一所不住の旅人となりたいと思ふことがある。念々刻々、永劫の寂心そのもの、なかに浸されて、自然そのものゝ大悲のなかに生死を託する捨て身な人間の生活ほど悲しく、貴いものはない。

私は人間の快樂や幸福をもとめに生まれて來たのだとは思はない。また苦しむためのみに生まれて來たのだとも思はない。人生は苦しみのなかゝら悲しみのなかゝら微なしかも無限な光りを見出す時に生きてゐる價値がある。

私は人間の宿命と、すべての造られたる物の宿命とを異つたものだとは思はない。花が咲き、散り、朽ちる宿命と、人間が生まれ、生き、死んで行く宿命との間には何の差別もない筈である。すべての造られたるものは永劫を通じて一つの宿命の軛に支配せられてゐる筈である。

たゞ人間にはこの宿命に對する悲しみの意識が與へられてゐる。この悲しみの意識こそ人間生活の最も尊い原動力である。

人間の愛、宗敎、藝術の根本の力は宿命に對するこの大悲觀である。最も深い悲しみを意識するものでなければ、ほんたうに神を見、ほんたうに藝術を生み、ほんたうに隣人を愛することはできない。

人間の宿命に對する大悲觀と現世の厭離といふことの間にはいつも一步の隔たりがある。

私たちはできるだけ深い大悲觀を絕えず意識してゐなければならぬ。苦しんでゐなければならぬ。私たちの魂は常に大悲觀の惱みをさながらに惱んでゐなければならぬ。私たちの魂は絕えず大悲觀の障痛を苦しんでゐなければならぬ。苦しみが深ければ深いほど生まれて來る宗敎も愛も藝術も眞物である。大悲觀を苦しむ者の上にのみ惠みがある。

しかし大悲觀から一步を踏み越えて、人生を厭離してはならぬ。大悲觀から一步を踏み越えて厭離の境にはいつた刹那に、愛も宗敎も藝術も滅びる。

私たちは大悲觀の淚をいつも盃の縁まで盛つてゐなければならぬ。藝術も愛も宗敎も盛られたる大悲觀の淚の香である。盃の外に淚を捨つる時藝術も愛も滅びる。

ほんたうな藝術家は、ほんたうに隣人を愛する人間は、いつも最も大きな悲しみの所有者でなければならぬ。しか

しながら一歩を踏み越えて厭離の世界にのがれてはならぬ。

捨て身になるといふことは、大悲觀の絶頂に達した刹那の生命充實觀である。芭蕉の藝術、ドストイエフスキイの愛、佛陀やキリストの宗教はこゝから生まれて來たのだと思ふ。

厭離まで一歩を隔てた大悲觀者、人間の世界を忘れ得ぬ大悲觀者こそ最も尊むべき人間である。

×

芭蕉は後には家を持つ事さへしなかつた。ほんたうにかれは自然そのものゝ懷に抱かれて生き、死んだ。かれは時雨をうたひ、猿の聲を悲しみ、路傍の捨て子や曠野の乞丐をあはれんだが、かれ自身誰よりも深い大悲觀の涙に浸されてゐた。かれこそ最も悲しまるべき孤獨、寂寞の人間であつた。病みて死の床に眠るまでかれの魂は枯野をかけめぐつてゐた。かれが自然の前に悲しくも忍從の歌をうたつて死んで行つた寂しい心を思ふと、ひとりでに涙が流れて來る。かれほど立派な尊い生活を送つた人間は滅多に見出すこともできない。かれの生涯は立派な聖徒の生涯であつた。しかも說敎をせず、我を立てず、飄々として秋の風のやうに人をいたみ、草を泣き、荒海を悲しんで行つたところに、最も自然的な人間の姿が見出さるゝ。

「自然に還れ！」といふ言葉がかつて文藝界の主潮を形作つた時代があつたが、私は今日の社會組織に對しても、自分自身の生活に對しても同じ標語を使用したい。

勞働者が鎚を捨てゝフロックを着て演說でもつて飯を食つたり、資本家といふ俗物が政治家といふ破落戶と結びついて勝手な眞似をするやうな社會は、決して私たちの住むべき社會ではない。

私たちの住まなければならぬ社會は資本家だの勞働者だのといふ區別のない社會である。みんなが自分の食ふだけのものは自分で働き出す社會でなければならぬ。そしてみんなが勞働を樂む社會でなければならぬ。銀行だの、商人

だのといふものがなくて、みんなが一日一日の食ふだけのものを自分で拵へて、餘つたものは他人に施してやるやうな社會でなければならぬ。明日のことを思ひわづらふことをしない社會でなければならぬ。

このやうな社會を生み出すためには、成るたけ多數の人が、日々の勤めといふものに束縛せられないやうな生活をしなければならぬ。出來るだけ多くの人たちが正直な農民になることである。そして家族が生きて行くに必要なだけの收穫を得るために、日々野に出て働くことである。

人間の生活にとつて最も幸福た生活は、太陽の光りと野の空氣と大地とに直接により多く觸るゝことである。私たちの今日の生活の多くは不自然な牢獄のなかに鎖されてゐる。大學その他の學校は大抵はその子弟たちを、不自然な牢獄のなかに這るための準備敎育をしてゐる。

さて私は振り返つて自分のことを思ふ。私も日々の勤めのために束縛せられてゐる。私は第一に自分の日々の勤めといふものを止めて、自然のなかに還つて行かなければならぬ筈である。私は一日として自然のなかに還つて行くことを考へないことはない、しかも自分ではいまだに決行することができないでゐる。

五月の野を見ろ、太陽が輝いてゐる。土が薫つてゐる。私は涙ぐましい心をもつて大地の上に突つ立つてゐる。しかしまだ私はこの不自然な都會生活を捨てることができないで、家族の者たちの日々の糧を得るために自分の魂を賣つてゐる。

春日夜

少かの貧しいパンを得るために馬車馬のやうに、朝晩働き通しに働いてゐる間はいくらか氣も紛らされてゐるが、さて一週間か二週間の比較的怠惰な日が續いて來ると、いろ〳〵なことが今更のやうに思ひ出されて來る。大抵は寂しい、悲しみを中心とした思ひ出である。いつもは無理にも弱い心を強くしたり、自分に持つてもゐないものを無理にも持つたやうに見せかけてゐなければならぬ自分が初めて弱いところは弱いなりに、愚な點は愚なりになつて來るのを見出すことができる。硬化されてゐた自分の魂が初めて人間らしい素直さを取り戻した感じがする。淚ぐましいほど懷かしまるゝ安易な怠惰の時である。私はこの二三日、久し振りで幾分このやうな怠惰な時を見出す事ができた。

私は日暮れてから郊外の曠野を獨りで心ゆくまで歩くことができる。夜がどのやうに更けようとも、明日の仕事を考へることなしに私は疲れるまで、あてもなく歩いてゐることができる。步一步、私は自分の自由な生活を取り戻したやうなよろこびを感ずる。この嬉しさは、恐らく日常時間といふものに生活を束縛された經驗のない人々は、夢にも察することはできないであらう。

私は月明の下に白くつゞいた曠原の道を步みながら、星を見上げる。久しく見失はれてゐた夜の空が自分の眼に更生へつて來たやうな氣さへする。春が近づいたので夜の道は煙つてゐる。かなり長いこと思ひ出しもしなかつた土の香が、私の胸の隅の方に疼くほどな懷しい過去をよみがへらせて來る。田舍では遠い山々の、野火の帶のやうな焰が、每晩のやうにちら〳〵と雨催ひの暗い空に燃えるころである。そのやうなことを考へながら步いてゐると、私の心は

十年くらゐ前の時代に立ちかへつて行く。または十五年も前の時代に。

戀といふべきものか、たゞ人懷かしいといふべきものか、私は若い日のまゝの心であてもなき人を想ひ出してゐる。それが博多で逢つた名も知らぬ女であつたり、關ケ原の夜汽車で不圖頭に遺つた何處の人とも知らぬ若い人であつたりする。

「人は刹那だけ人を戀し、そして永遠に悲しみを抱かなければならぬ」といふやうな感じが犇々と胸にこたへる。

私はパンのために働かねばならぬ苦痛を知らぬ階級の人々のやうな、安易な自分の心をいたはりながら丘を下つたり、畑を突つ切つたりして、あてもなく歩く。汽笛の聲などが地の底からでも洩れて來るやうに遠くから聞えて來ることもある。

十幾年前である。私はNに金をこしらへてやるためにまる一週間夜晝知つてゐるかぎりの人々をたづねて歩きまはつたことがあつた。私は初めて人に金を借ることの苦痛を知つた。辱をも知つた。私は證文を書くことをも知つた。それでもまだNを救ふための金額の半分をも調達することはできなかつた。一週間目の夜であつた。私は疲れ切つた身體を郊外の道に運んで考へあぐんだことがあつた。私は白い埃の道を歩きながら泣いた。

その夜のやうな涙ぐましい感じがまた私の胸によみがへつて來る。

生活は私にとつては、新しい悲哀から悲哀へと暗い經驗を見出して行くことに過ぎないやうに思はれてならぬ。

×

草の上に仰向きに寢て、心ゆくまで眠つて見たい。眼をさましたら、靜かな川の面に礫でも投げて遊んで見たい。

「これがほんたうな生活だらうか？」

私は時々このやうな疑問をいだかせられることがある。私たちの生活は餘りに時間といふものに追はれ、脅かされ

てゐる。生活といふものは、こんなにまで、いらくした心と、あわたゞしい心で送らなければならぬものだらうか。私たちは夜も晝も時計の面のみを見て、殆んど太陽も見ず、夜の空も眺めないでゐる。私たちの耳は時鐘の響のみを聽いて、南の風が吹かうと、春の風が吹かうと、まるで聾のやうになつてゐる。私たちは不具者のやうな生活から遁れなければならぬ。

私は一人の鶏を持つてゐるが、彼が繁々と夜訪ねて、何かと相談を持ちかけて來るのさへ、どうかすると恐れてゐる。私は自分ひとりのための怠惰な時間が欲しいからである。睡眠の時間が欲しいからである。hospitality といふ古風な、温かい心は、私たちのやうな生活と時間とに追はれてゐる者からは無殘にも失はれてゐる。

「朝五時に起きて、夜九時に寢る」といふ規則正しい生活をやつてゐたホイットマンが羨ましくなる。「御免なさい、私は寐む時間ですから……」と言つて自分の室に歸つて行つたホイットマンの子供のやうに率直な言葉が羨ましい。

×

私たちは自分の眞の生活を作り出すために藝術を創造すると言つてゐる。けれども大抵は藝術を作るために、人間そのものを、また人間生活そのものを不具にし、不自然なものにしてゐる。藝術を生み出す前に、自分自身の素直な魂を見出すことが大切である。素直な生きかたをすることが第一の仕事でなければならぬ。

「あの男の(草の葉)は餘り好かない人もあるさうだが、ホイットマンのことを蔭口なんか利く人は一人もない」と言はれたホイットマンの子供のやうな素直な生活がなつかしい。彼は湯浴してゐる時も、着物を着替へてゐる時も、散歩をしてる時も大きな聲で唱つた。彼は渡船の水夫とも、馬車屋の男とも、巡査とも、子供とも、金滿家とも、洗濯屋の男とも、乞丐とも快く語つた。彼は新しい大陸が生んだ自然のまゝの人間であつた。人前に自分を飾ることを知らぬ男であつた。或る日曜の朝、教會に行つた時の出來事である。彼は帽子を脱ぐことを忘れてゐたので寺の男が低い

聲で彼に注意した。併し彼は聞えなかつたので、そのまゝにしてゐた。寺の男は怒つてホイットマンの帽子を叩き落した。ホイットマンも怒つた。そして彼は帽子を拾ひ上げて、それを繩のやうにくる／＼と卷いて、寺の男の襟を摑みながらそれで三四回打つた。

あれほど誰にも愛せられ、尊敬せられたホイットマンの一面に、このやうなむき出しな子供らしさが見出さるゝのが却つて尊くも、羨ましくも思はれる。

怒りたい時にも怒らないで、悲しい時、くやしい時にも泣かないで、冷靜な顏をしてゐなければならぬ自分たちの生活を呪ひたい。大きな聲を出して笑つて見たい。大きな聲を出して唱つて見たい。涙が出るほど。

×

花曇りといふのか、霧でもかけたやうに空がかすんで來た。木瓜や薔薇が新芽をふいて來た。

旅！　といふ心がひたすらに動く。濁つた大河を靜かにのぼつて行く外輪船や、野の香につゝまれながら菜畑や麥畑の間をがたくりと走つて行く、野趣を帶びた馬車のことなどが、しきりと頭に泛かぶ。旅ほど私にとつて懷しいものはない。そこでは時間に縛められることもなければ、生活のためにする排擠もなく、屈辱もない。笑ひたい時に笑ひ、泣きたい時に泣く自然のまゝの自分の襟度が見出さるゝ。そこでは自分を喜ばない人に自分を强ふる必要もなく、刄を懷にして空お世辭に自分の心を僞ます必要もない。

一處に停滯する時水が腐るやうに、人が一處に操作する時その魂は饐ゆる。人は流轉の旅に於いてのみ、最も人間らしい自分の魂の素直さと、美點とを豐かに見出すことができる。旅に於いてのみ人は非打算的な嬰兒のやうな、インノーセントな獸のやうな、小鳥のやうな自分の魂の影を見出すことができる。

「人生は旅である。」昔からすべての厭世家たちが考へたこの萬有流轉の消極的な考へ方ほど私にとつて眞實味のゆた

かなものはない。刹那にして訣れなければならぬ親を思ふ時、戀人を思ふ時、友人を思ふ時、どうして人を憎むことや、呪ふことができよう。

×

世間から隠れるやうにして、裏町に住んでゐる「お圍ひ者」たちの家にも春が來た。軒からは金絲雀の唄が聞える。彼女は仕立て卸しの羽織を引つかけて町に出かけて行く。彼女は隣りの同じたぐひの女の家に立ち寄つて、戸口から話しかけてゐる。

「少しくらゐ派手でも、成るたけ若い間に着て置いた方が得ですよ。」年增の女が格子戸のなかゝら言ふ。

「……」若い方の女は明るい顏をして、ちよつと自分の新しい羽織を見る。彼女の眼には輕い矜恃が動く。彼女は振りかへつて笑ひながら明るい正午の街を歩いて行つた。しかし、彼女の新らしい派手な羽織に對して、彼女の下着のあはれさ！　彼女のパラソルの可笑しさ！　一枚の派手な羽織に滿たされた彼女のよろこびの可憐さ。

彼女の肉體は、彼女の魂は、一枚の羽織のために獸の如き男たちに賣られたのであつた。

道化役者のやうな彼女の姿を見てゐると、涙ぐましい氣にさへなる。

浮草のやうな裏町の女の白い顏にも春がかへつて來た。

涙の味ひを知る人間の生活

或る時は、人は自殺を欲することがある。しかも、その同じ人が、或る時はどこまでも生きんことを欲する。その人にとつては、この二つの何れの欲望も眞實であると言はなければならぬ。

自殺の淵を覗き込まうとするほどの苦痛な經驗を持つた人でなければ、ほんたうに生きることのありがたさは味はれないといふことができよう。

ほんたうに人生を泣いた人でなければ、人生の笑ひは理解せられない。悲しみある人でなければ天國の幸福は味はれない。

人類の生活がつゞくかぎり悲しみはつゞくにちがひない。

人類の生活がつゞくかぎり、人生には喜びがあるにちがひない。しかし同時に人生には無限に涙が流るゝにちがひない。

畢竟人生は喜びの中の涙であり、涙の中の喜びであるとも言へよう。

ほんたうに人生の喜びを噛みしめて見れば、そこに無限な人生の光りや、意義が潜んでゐることを知るであらう。

同樣に、ほんたうに人生の悲しみを噛みしむれば、そこから無限な人生の香味といふものを意識することができるであらう。

私たちの感情を働かして人生の諸相に打つ突かつて行けば、喜びか、または悲しみか、この二つの氣分の何れかゞ、私たちの生活面をいつも掩ふことになる。

感情生活から言へば、喜びも、悲しみも同様に意義あるものとして、ありがたきものとして、私たちは受け容れて行かなければならない。

私たちの智慧を働かして、生活の諸相に打つ突かつて行けば、疑ひと信仰の二つの相剋した心持ちが、絶えず私たちの生活面を掩ふことになる。

この場合に於いても、私たちは疑ひと信仰の二つを同じやうに、尊いものとして受け容れなければならぬ。

ほんたうに深い疑ひの苦痛を持つた人でなければ、深い信仰の喜びを見出すことはできないといふことができよう。

疑ひそのもののうちに、信仰の芽は根ざしてゐる。

一等恐ろしいことは信仰を持たないことでなくて、既得の信仰の搖籃に凭りかゝつて、安眠してゐることである。

信仰を持たないことは非常に寂しいことであり、苦痛なことである。しかしその寂しさを感じ、その苦痛を持つてゐる間は、私たちの生活には未來がある。伸び展がつて行く內的な力が湧いてゐる。

信仰は無限な旅の一里塚に過ぎない。未だ切り拓かれない無限の旅を步からうとする內的な力は疑ひそのものである。

疑ひがその深みへの步みを停めて休息した時、信仰が生まれる。

深みへ徹して行く疑ひの力の弱い者ほど早く信仰の安息所を築き上げる。

×

この人生をも否定しようとした思想家たちがあつた。私はその人々の心持ちに同情することはできる。

近代のロシヤの青年たちの間には、自殺結社を作つて、順次に自殺をはかつた人々もあつたといふことを聽いたことがある。それ等の人々の心持ちも理解することはできる。

實際人生は餘りに寂し過ぎる。餘りに空虛な感じがしないではない。

けれども私はこの人生に對しては、まだ〳〵深い執着を持つてゐる。荒野のやうな人生の底から色々の光りや、色色な力が無限に溢れて來ることを知つてゐる。

寂しさに耐へないで笛を吹く人は、一層切なる寂しさを笛の音の中に見出すにちがひない。かれは笛を吹くがために更に苦痛な寂しさを知らなければならぬ。しかし笛を吹く人にとつてはその更に苦痛な寂しさこそ、唯一つの慰めである。

ほんたうに人生の寂しさや、空虛さを感ずる人にとつては、實にその寂しさや、空虛さこそ、かれの魂のパンとなるのである。

かれ等は人生に寂しさがあるが故に生きることを冀ふのである。かれ等にとつては人生の寂しさ、人生の空虛さほど尊いものはない。

小鳥が靜かな秋の山を愛するやうに、かれ等は靜寂な人生を愛する。

×

「神すべてを與へ給ふ故に神すべてを奪ひ給ふ」とヨブは言つた。

人生が苦痛であらうと、人生が涙に充たされてゐようと、すべてそれは神によつて私たちに與へられたものである。

涙も、苦痛もみな神によつて與へられたものである。

私たちは石として造り出されなかつたことを神に感謝する。

私たちは涙を涙として、苦痛を苦痛として感受することのできる人間として、作られたことを感謝する。

涙の苦さを知らぬ石の生活よりは、涙の苦さを知つた人間の生活が、どれほど尊いか知れない。

×

しかし私たちはまたヨブが苦しさの餘り神に苦痛を訴へたことをも忘れてはならぬ。ヨブは一度はすべての苦惱を神に對して忍んだ。しかしかれはまた或る時は、聲を揚げて神に苦痛を訴へた。神にプロテストした。

この世界にはあの忍從的な、敬虔なヨブですらプロテストせずには居れないほどの苦痛な悲しみがあり、涙がある。しかし、私たちはそれがために人生を拒否してはならぬ。

私たちの智慧は、何故神がこれほどまでに人間を苦しめなければならぬかを、理解することはできない。私たちの友人は、私たちの親しい人達は、あまり早く死んでしまふ。そして正しい人達があまり冷酷に取り扱はれたり、迫害されたり、病氣に苦しめられたりしてゐる。

私たちはなぜ神が、このやうな不合理な苦痛を人間に與へるかを理解することはできない。

私たちはこの點では神にプロテストせずには居れない。

しかし、私たちはそのやうな不幸な人たちに對して愛を注いで行くことのできるのを感謝しなければならぬ。たとひ神がどのやうに不合理な不幸を人間に與へても、人間と人間とは互に愛し合ひ、慰め合ふことができる。

私たちの智慧は神の心のすべてを知ることはできない。だからヨブと同じ不滿や不足を神に訴へなければならぬこともあるが、私たちの愛は私たちの不十分な智慧よりもずつと大きな仕事をしてくれる。

人間と人間との愛は神の力を以てしても何うすることもできない。

四人と四人とが感じ合ふ愛の交通は國王すら何うすることもできないばかりでなく罪人を罰する神といへども何うすることもできない。

×

たとへ法然聖人にすかされて地獄へ落とされても後悔はしないと言つたのは親鸞聖人であつた。
キリストはこの世界を善しと見た。釋迦も、孔子も人生をこの上もなく生き甲斐あるものと見た。
私たちはキリストにすかされ、釋迦や孔子にすかされて、たとへ地獄へ落とされても悔いないほどの信頼を抱いてゐたい。そしてかれ等と同じ心で人生を見たい。
もし親鸞が法然に對してあれほど強い信頼を持つことができなかつたとしたら、恐らく親鸞の宗教は生まれなかつたであらう。
キリストに對する信頼、釋迦に對する信頼はやがて第二のキリストを生み、第二の釋迦を生む。
私たちは絶えず疑ひを苦しまなければならぬ。しかし疑ひを苦しむ理由は人生を拒否するためではない。更に人生を突きつめて眞實に生きるためである。疑ひが深くなればなるほど私たちの心は偉大な過去の人たちに對する思慕信頼の念を強める。
自分の生活を更に深く、根強く、如實にして行くための絶えざる疑ひは、いつもキリストを、或ひは釋迦を、或ひは孔子を尊敬することを教へてくれる。

×

人間の心の底には不滅の光りがあり、美しさがあるといふことは眞理である。しかしそれと同時に人間の心の底には滅することのできない暗があり、醜さがあることも眞理である。
私たちは、こんなにまで善い人があるかと驚くことができると同時に、こんなにまで惡い人があるかと驚くこともできる。まつたく人生には無上の善人もあれば、無下の惡人もある。
善い人ばかりを見ることのできる人は幸福である。惡い人ばかりを見なければならなかつた人は禍である。

しかし、ほんたうに人間が人間らしい生活を生きて行くためには、善人をも知り、惡人をも知らなければならぬ。
人間はみんな善人ばかりだと思つてゐる人はやゝもすれば餘りに早く、餘りに狹く地上に樂園を築き上げる。
人間はみんな惡人ばかりだと思つてゐる人は、日日、自分自身のために暗い、冷たい墓穴を掘つてゐる。
人間の世界には多過ぎるほどの不合理があり、惡があり、陰謀がある。打算がある。それは他の動物や植物の世界では見られない醜さである。
けれども同時に人間の世界では愛がある。人のために自分の肉體を殺すほどの獻身的行爲がある。そこには他の動物や植物の世界で見られない美しさがある。
私たちは人間の醜さを突きつめて凝視しなければならぬ。その醜さを恥ぢなければならぬ。疫病のやうに恐れなければならぬ。
同時に人間の美しさを感じなければならぬ。自分のうちに成長させなければならぬ。

×

立派な藝術が絶えず人を高尚にし、人の魂を深くするやうに、善い人間はその周圍の人々を高尚にし、魂を淨くしてくれる。
惡い藝術に接することが、その人の魂を墮落させると同じやうに、卑劣な人間に接してゐると、私たちの魂は日一日と曇らされて行く。
惡い藝術ならば見ない方が宜い。聽かない方が宜い。
惡い人間とならば接しない方が宜い。孤獨である方が宜い。
清濁合はせ呑むといふことは、それが寛容といふ美しい心から現はれて來てゐる時は宜いが、惡に對する鈍い感じ

の缺乏から生まれて來た場合には呪はるべきものである。
美しい一本の花を完全に育て上げるためには、數十本、數百本の雜草を刈り取らなければならぬ。
美しい花と雜草とは一つの畑では育たない。

×

この十五六年の間に、私はかなり多くの人々を知つた。大抵は不幸な人たちであつた。
A氏は兩親を知らず、たゞ一人の妹を持つてゐた。その妹は二三年前上野附近で自殺をしたといふことを人づてに聽いた。A氏は今山陰地方の寺にはいつてゐる筈であるが、久しく消息を聞かない。
今では名さへ忘れたが、いつも暗い顏をして物を考へてゐる靑年があつた。學資を得るために夜は印刷所などに通つてゐた人であつた。私はその靑年の口からその人の弟が冬の頃家出をして行方不明であつたのが、春になつて深い雪が解け初めたころ、東北の雪の下から死骸となつて出て來たといふことを聽いた。
私の眼には不幸なA氏や、あの色の蒼白い靑年の顏が時々思ひ出される。
冬の夜であつた。京都から東京へ來る汽車のなかで、初めて逢つて語つて來たM氏のことが、今でも冬の夜の星を見る時など思ひ出される。
A氏、あの靑年、M氏……みんながこの冬の夜を、世界の何處かで、寂しく物思ひながら過してゐることであらう。
あの人たちは私が今あの人たちのことを思ひ出してゐるやうに、私のことを思ひ出してゐるだらうか。
あの人たちと私とは恐らくこの世界では、二度と永遠に逢ふことがないかも知れない。
あの人たちは大抵不幸な人であつた。何うぞして、あの人たちの上に、幸福な冬の太陽が輝いてゐることを私は心から祈らずには居れない。

×

二三日前の雨と風で木の葉が大抵落ちてしまつた。

それでもまだ少かに枝にのこつてゐる葉が、時折ぱたと枯れ切つた音を立てゝ地を擊つてゐる。

火鉢の中の火を見つめたまゝ、逢つてやがて別れて行つた色々な人々のことを思ひ出してゐると、何時とはなしに自分の魂が遠い世界に飛んで行つてゐるやうな感じがする。

人生といふものが、ばかに空虛なところのやうな氣がしてならぬ。

マアカス・アウレリウスが言つたやうに明日は何處かの世界に旅立つて行く旅人のやうな感じがしてならぬ。

何處の世界かは知らぬが、人間は無限に一人旅をつゞけて行かなければならぬやうな氣がする。

それを思ふと人を憎んだり、人を怒つたり、富を求めたり、地位を求めたりすることが、ほんたうに濟まないことであり、愚なことであるやうに思はれてならぬ。

何うせ寂しい旅なら、何うせ一人で步かなければならぬ旅なら、多の木立のなかの小鳥のやうに、何處へ行くにもたつた一人で、うたひ度い時にうたひ・行きたい空に行つて見たいといふボヘミヤンらしい心になつて來る。

心の影

盜癖を持つた小娘がゐた。彼女は私の本を盜み、私の金をも盜んだ。私は彼女を憎んだ。

或る寒い冬の夜であつた。私は小娘に三匹の小猫を捨てさせにやつた。夜更けてから、小娘は蒼白い顏をして歸つて來た。小娘の懷には尙ほ三匹の小猫が快さゝうに眠つてゐた。

小娘の眼には淚が湛へられてゐた。

私は小娘の前に跪かずには居れないやうな感じがした。

×

誰にか賴らないでは生きて居れないやうな寂しい日があつた、しかし對手がやはり自分と同じ不完全な人間であるかぎりは、他人に賴る自分の心が十分に報いられることはない筈である。私は何時も孤獨の人であつた。

やがて私は神をもとめた。自然のなかに慰めを見出さうとした。しかし神は餘りに遠く離れてゐた。自然は餘りに深く隱れてゐた。

私は畢竟孤獨の人間であつた。

しかし私のこの考へ方は誤つてゐた。私は乞丐の生活をしてゐたのであつた。他人から、神から、自然から、何物かを得ようとのみあせつてゐたのであつた。乞丐の貪慾な心は永遠に充たされることはできない。

私がしばしば自殺を想つたのは、乞丐の心のみ持つてゐたからであつた。私はかうして引き摺られながら生きてゐたのであつた。

かくて數年は經過した。

私が不圖振りかへつた時、私は私の周圍に私を賴りとしてゐる數人の弱い女や、年寄つた男たちを見出した。私はその弱い人たちのために强ひても每日戶外に出て働かなければならなかつた。私は本を讀む時間も、思索する時間も悉皆捨てゝ、周圍の人々のために貧しいパンをもとめなければならなかつた。

私は藝術家の矜持といふやうなことを顧る遑はなかつた。私は意識しつゝも自分の魂を賣らなければならなかつた。

私は、私の魂のかけらを貪り食ふ周圍の弱い人々を呪ふこともあつた。けれども私は今では彼等の可憐な利己心を、要求を蔑むことはできなくなつた。

私一人を賴りに生きてゐる父や母や姉や妹を想ふ時、私は何うしても生きてゐなければならぬ。

私は自分に賴つて來る弱い人々を持つてゐることを感謝することができるやうになつた。世間には自分に賴つて來る親や兄弟さへ持たぬ全くの孤獨者もある。それに比べると私は何れほど幸福であるか知れない。

私は今日では to be! or not to be! といふやうな氣の弱いことを考へてゐる暇はない。それが何のやうな人生であらうと、生きてゐることそれ自身が限りもなく尊いことであり、ネセシテイとなつて來たのである。私は是非とも生きてゐなければならぬ、私に賴つてゐる弱い數人のために。

私は死んではならぬ。

×

千人の味方を見出すことよりは、千人の敵を見出すことが更に尊い生き方であることが、辛つとこのごろになつて私の心に感じられて來た。

人を愛することの苦痛よりも、人を憎むことの苦痛は更に深い、更に人間的であることが仄かに意識せらるゝやう

になつた。

×

千人の聽衆を惹きつける說敎者よりも、一人の妻の心のすべてを支配することのできる夫は偉大な人間でなければならぬ。

五千の人々の空腹を充たしたキリストよりは、マグダラのマリヤにナルダの油をさゝげられたキリストの方が尊く思はれる。

×

電車に乘つてゐて、老人などがはいつて來た時、快く眞つ先きに立つてやるのは勞働者風の男たちである。彼等は何の理窟もなしに愛そのものによつて動かされてゐる。

私が立つ時、私は自分の行爲に對して愛だの、同情だのといふ意識をば附け加へようとすることが多い。私は心の單純な男たちに對して恥ぢずには居れない。

夏の朝

Tが自殺をしてから恰度五年になる。かれが亡くなつてから、ほんたうに私の世界は空虚になつたやうな氣がする。私は今でもかれの寂しい、そしていつも瞑默してゐた顏を思ひ出すことができる。

かれが最後に私の家を訪ねて來たのは六月十九日の夜更けであつた。その夜かれは夜つぴて眠れないで苦しんでゐた。

二十日の朝、私は學校の試驗監督があつたので、春日町の停留場でかれと別れた。あれが永遠の別れとなつたのであつた。私は振りかへつて見たが、かれは俯向いたまゝ電車に乘つてゐた。

私はかれの病氣を見舞ふために、「明日は行かう！」と考へてゐる間に五六日經つた。

かれは六月二十七日の朝、千葉の森のなかの家で自殺したのであつた。

かれは死にかゝつてゐる息の下から、私を呼んでくれと言つたといふことであつた。

私は惡いことをしたと思つた。學校のことや、世間の仕事などは放り出して置いて、かれを訪ねなければならなかつた筈であるのに、私は後へ後へと日を延ばしてゐる間に、到頭あんなことになつてしまつた。

私はまたつい一月前に、同じやうな失敗を繰り返した。それは久しい間逢つて見たいと思つてゐたHといふ老人に到頭逢はずじまひになつたことである。

五月であつたが、用があつて私は東京から半日がゝりで海岸へ旅をした。老人の家まではステーションから大分遠かつた。用が濟んでから雨のなかを松原を通つて、老人の家の方へ大急ぎに歩いて行つたのであつた。私は老人の家

から五六町前のところで最終の汽車の時間まで幾らもないことを發見した。
私は雨に煙つてゐる小山を見ながら夕暮の道を再びステーションに歸つて來た。小山の木蔭には老人が一人で東京を捨てゝ三十幾年住んでゐるのであつた。
「この暑中休暇には來るんだから！」私はさう思つて自分を促しながら、ステーションの方へ急いで行つたのであつた。何うしても私はその日の最終の汽車で歸らなければ、明日の勤めを缺かすことになるのを恐れたからであつた。
しかし暑中休暇が來ないうちに、老人はあの寂しい海岸の小山の上で急に病死してしまつた。
三十幾年振りで老人は小ひさな骨甕のなかにはいつて東京に歸つて來た、私は到頭老人には逢はずじまひになつたのであつた。
「仕事なんて何うでも宜いんだ。人間は生きてゐる間に思ふ存分、逢つたり、語つたりして置く方が宜い。」私はこの頃、こんなことを想へさせられることが多い。
「仕事なんていふものは何時でもまたやり直しが出來る。一度死んだ人間は永遠に逢ふことはできないのだから……」
私は故鄕を出てから二十年になる。
親兄弟や古馴染の人たちと一緒にいつも平和な生活を送つてゐる故鄕の人々の生活を想ひ出しては、耐らなくその人々が羨ましくなることが多い。

×

郊外に出ると今恰度麥秋の頃だといふことがはつきり意識される。
鎌の音がさく〳〵と靜かに、倦怠さうに傳はつて來る。空も日一日と高くなつて行き、野も日一日と曠くなつて行くやうな氣がする。

私は二三日前若い學生たちに誘はれて、惠美須から祐天寺の方へ歩いて行つたが、久し振りでほんたうに土の懷かしい香を嗅ぐことが出來た。車に山と積んだ草の香を嗅ぐことが出來た。刈つたばかりの草の香はいつも私に遠い幼年時代を想はせる。私はまた桑の實を見た。田舍で小學校時代に友達と一緒に黑い寶石のやうに爛熟した桑の實を食つてゐた時代のことが思ひ出さるゝのであつた。

あの時代のことは何も彼も懷かしい。

眼をつむつてゐると、高い山と山との間に劃られた麥の野や、美しい谿川や、草笛の音などがはつきりと、私の心に泛かんで來る。しかしそれが永遠に歸らぬ過去となつてしまつたことを思ひ出すと、何うにもしようのない哀愁が湧いて來る。

×

祐天寺の裏の莓園の芝生の上で、若い元氣な學生たちは綱引きをしたり、綱飛びをしたり、相撲を取つたりした。私もなかにはいつて綱を持つてやつたり飛んで見たりした。私は久し振りで學生時代のやうな元氣になつた。しかしいつとなしに自分は憂鬱になつてゐることに氣付いた。酒に醉ふことのできないと同じやうに、私は喜びにも醉ふことができないやうな人間になつてしまつてゐた。

私は若い人たちの笑ひ聲や罪のない話を聽いてゐるのをうれしいと思つた。しかしそれだけ心の底から笑ふことの出來ぬ自分を傷ましくも思つた。

人間は日一日と笑からも、歡喜からも遠ざかつて行く。

青春時の笑は二度と人間には歸つて來ない。

「秋の夕暮よりも、夏の夕暮の方が一層寂しいぢやありませんか！」と言つた若い人の言葉を耳にしながら、私は暮

れて行く武藏野の起伏地をいつまでも見つめてゐた。
糸のやうな雨の脚が、かすかな音を麥畑の上に遺して、木立から丘の方へと走つて行つた。

×

私の書齋の障子と雨戸の間にいつからとなく蜂が巢を作つた。私が戶外に出たり、また、朝遲く起きたりすると雨戶が締められてゐるので、蜂は巢から出ることも、巢に歸つて來ることもできないことになる。
私はもつと早く蜂の巢を取り除けてやつたら宜かつたかとも思ふ。今では何うすることもできない。壞すのは可哀想な氣がするので、そのまゝになつてゐる。蜂も不自由であらうが私も困つてゐる。
ところが、さうなつて來ると蜂と私の間に妙な心の上の交渉が起つて來た。
私は朝になつて雨戶を明けるたんびにそうつと蜂の巢を覗いてやる。そして蜂が達者で羽根を動かしてゐるのを見て安心する。
蜂が巢から出てゐる留守に、雨戶を締めなければならぬやうな時は、蜂に對してちよつと氣の毒なやうな氣がする。
「巢に歸れないで困つてゐるだらう、蜂は。」などと考へて私は街を步いてゐることもある。
「旣う歸つて來ないかも知れぬ、蜂は。」などと思ふこともある。
しかし半日も經つと蜂は巢に歸つて來てゐる。私もほつと安心する。
いつの間にか、小ひさな蜂も、私の生活の圏內にはいつてしまつた。
私は可憐なやゞかいりを持つことになつたのである。

×

今朝は高い空に白い鰯雲が飛んでゐる。冷つこい風が吹いて來る。何だか秋を想はせる。早く秋が來れば宜いと思ふ。

草の上の學校・宗敎・藝術

學校だの、敎會だのといふやうな組織に對して私は時々疑惑を抱くことがある。
昔孔子は樹下に道を說いたことがあるやうに聽いてゐる。ソクラテスも戸外で問答をしたやうであり、キリストも町の中や湖の上から說敎をしてゐる。
今日の敎育は幼稚園時代から大學に至るまで、建物のなかで、硝子窓のなかで施されてゐる。
私はこのやうな敎育のやり方に對して疑ひを抱かずには居れない。
窓から射して來る太陽の光束に、敎室內の息詰まりさうな塵埃の浮游してゐるのを見るといふことだけでも、少し神經の銳い人は敎室敎育といふものに對して疑惑を起すにちがひない。
あの廣い靑空が寶石のやうに輝いてゐる時、敎へる者も、敎へられる者も、平氣な顏をして腐敗した空氣の中に閉ぢこめられてゐる。
殊に光線の取り方のまづい敎室になつて來ると、まるで土牢の底にでも押しこめられてゐるやうな氣がする。
硝子窓一枚破りさへすれば、戸外には、あんなに太陽が輝いてゐるのに、何を苦しんで、學校といふものはその敎師や子弟たちを、あんな牢舍のやうな光りのないところに押しこめなければならないのだらうか。
硝子窓一つ隔てた世界では、小鳥が鳴いてゐる。白い雲が飛んでゐる。光線が躍つてゐる。そよ風が吹いてゐる。靑い草が柔毛のやうに光つてゐる。
雨が降つたりする日は是非ないことゝしても、私はせめて天氣の好い日だけは、今の學校から屋根と壁といふ物を

取り除けて欲しい。

土の上で、木蔭の下で、直かに太陽の光りを浴びてそよ風に吹かれながら子弟を教育するやうにして欲しい。或る特殊な教育、緻密な實驗であるとか、化學的なもので、何うしても室外で出來ないものは、別として、大抵の講義は野良で出來る筈である。

無論今直ぐすべての學校に向つて、この通りにしろといふことは不可能であるかも知れないが、周圍に餘地の多い郊外や、田舍の學校では直ちに實行のできる事ではないか。

都會地の學校にしても、建物に費す金をかければ今よりずつと廣い空地が得られる筈である。

人間はあまりに太陽の光りと、空氣の尊さとを忘れてしまつてゐる。

林間學校といふやうなものが夏の間だけは試驗的にやられてゐるが、出來るならば春夏秋の三季だけは、學校はすべて土の上で、草の上で、林のなかでやつて欲しい。冬だつて、やられるだけは戸外で教育はやるべきものだと思ふ。

空氣の腐つた、牢舍のやうに暗い家の中で教育をやればこそ、その教師たちのうちには御殿女中式ないやな小人が出來たり、子弟のうちにもカンニングをやつたり、老人見たいなませた活氣のない人間が出來るのである。

戸外教育はまた教會や寺院の場合にも適用することができる。

いつもほんたうな宗教は枕するところをすら持たぬ野の人、路傍の人たちから生まれて來る。

黄金の丸屋根を延べたチヤペルが出來たころはキリストの教は死んでゐた。これは釋迦の場合にもさうであつた。

今日の宗教をほんたうに甦らせて行くためには、寺院と教會を壞つてからかゝらなければ駄目である。

人間は太陽の光りの下で直接働いてゐる間は正直に働くことを知つてゐる。また勞働の尊いこと、愉快なことを知つてゐる。しかし一度屋根の下にはいつてしまふと怠け者になつてしまつて、惡賢い知慧を働かせて、體を骨折らせ

ないことを工夫する。教會から屋根と壁を取り除いてしまはなければ、ほんたうな宗教は生まれては來ない。

×

音樂、美術、演劇に對しても私はこれと同じ要求を持つてゐる。

ベエトーヹンの音樂を聽くといふことは、大抵今日の社會では、中流以上の人たちでなければ滅多に得られないことである。

ミレエの繪を見るといふことにしても、よし日本にミレエの繪が來たとしても、それは富豪の屋根と壁に守られて極く少數者の人たちにのみ頒たるべきよろこびである。

ベエトーヹンと貴族階級、ミレエと富豪！ この二つの名詞を並べ立てゝ見たゞけでも妙にアイロニカルなコントラストを覺えるではないか。

それだのに實際はこの二つの者が、いつも不自然な結び附き方をしてゐる。

あの聾で、金に困つた、そして人間苦を味ひつくしたベエトーヹンの音樂が、生活の苦痛を知らぬ人たちにのみ專有せられてゐるといふ不合理を、何故私たちはもつと強く感じないのだらうか。

あの雪のなかで薪一つなしに凍えてゐたミレエの繪が、溫かなストーヴを持つてゐる人たちの室に飾られてゐるのを、私たちは大して不似合ひなことであるとは思つてゐないのであらうか。

劇場に行つて見るが宜い。音樂會に行つて見るが宜い。そしてそこに集まつてゐる若い女や、若い男たちを見るが宜い。

そこでも私たちは一部の眞面目な靑年たちを見出すことができる。よろこびの淚をもつて偉大な藝術の力に打たれてゐる眞率な人々を見出すことはできる。

しかしそのやうな眞率な人は大抵室の隅の方に追ひやられてゐる。

室の中央に大きな面をしてゐる男女は、大抵は生活の苦惱を知らぬ種類の人々である。かれ等の髮を見よ。かれ等の胸飾りを見よ。その毛皮のコートを見よ。

かれ等は一度だつて鍬を握つたこともない人間である。かれ等は一度だつて自分のパンのために苦しんだことのない人間である。

私はこのやうな種類の會合に出るたんびに、「藝術は亡びよ。音樂も、劇も打ち壞してしまへ」と叫びたくなる。

×

眞の藝術は創造せらるゝ時、最も深い人間的な苦惱を一つの最も根本的な條件として生まれてゐる。したがつてその藝術を味ふものも亦、作者の人間的苦惱を最も深く分ち持つことのできる者でなければならぬ。

藝術は最も深く人間の苦惱を知る人によつて作られ、最も深く人間の苦惱を知る人によつて味はゝるべきである。

藝術が救ひであるといふ理由の一つはこゝにある。

今日の社會で、誰れが、そして何の階級の人々が一番藝術の救ひを求めてゐるであらうか。そして、また求めなければならないであらうか。

しかも一番藝術の救ひを求めてゐる人々が、求めなければならぬ人々が、ほんたうにベエトーヹンに接する機會を、ダ・ギンチに接する機會を、ミレエを味ふ機會を多く與へられてゐるか、何うか？

×

今日の組織のやうな劇場や、音樂堂は排斥しなければならぬ。學校も敎會も寺院も。

ブルジュアーの後援の下に建てられてゐるやうな今日の學校組織は、決して正しいものであるとは言へない。

富豪の子弟の少しでも多いことを以て誇りとしてゐるやうな教育家は俗物である。富豪の檀家、富豪の信徒を少しでも多くしようとしてゐる寺院も、教會も呪はれてあれ。さうして、このやうな弊害の一つは、かれ等が屋根を持ち、壁をめぐらした建物のなかに宗教を說き、教育をしてゐるところから生まれて來る。

×

野外劇といふものが數年前にちよつと問題になりかけてゐたが、またその後ちよい〳〵試みられたこともあるやうであるが、物好きか、物珍らしいくらゐの程度を越えてゐないやうに思はれる。

教育にしろ、宗教にしろ、藝術にしろ、近代では自然といふものを餘り忘れ過ぎてゐるやうな氣がしてならぬ。太陽の光りの尊さ。空氣の香の快さといふものを、誰れも彼れも忘れてしまつてゐるやうに思はれてならぬ。草の上で本を讀むこと、草の上で歌をうたふこと、草の上で芝居をすること、草の上で宗教を語ること、草の上に寢ころんでゐること、草の上で繪を描くこと、草の上でデインナーを持つこと、草の上でクリスマスを祝ふこと、草の上で落日を見ること、星を見ること、草の上でクラス會を開くこと、研究會を開くこと、朗讀會を開くこと……このやうなことがほんたうに少い、殆んどやられないことが多い。

殊に私は靑年たちが、もつと草の上、地の上に直かに坐ることのよろこびを知ることをして欲しいと思ふ。室中を閉め切つて、煙草の煙でいつぱいにした集會を思つたゞけでもいやでたまらない。窒息しさうである。何故野良に出て人々は集まることをしないのだらう。

たゞし、太陽の光りや、野の空氣の味を知らぬ人々が、野外劇をやるのはむしろ滑稽である。勸めたところで、それが何にならう。

人間の作つた小ひさなホール、煙草の煙にくすべられた不快な劇場、マンモニズムの香にけがされた建物を心から憎む人でなければ、野外に出て說教をすることも、教育をすることも無駄であることだけは考へて置かなければならぬ。でないと野外の教育も、宗教も、藝術も、一種の無意味な流行物であり、デイレツタントの遊戲に過ぎない。

×

私たちは少くとも現代のブルジユアーの手に汚された學校教育、教會制度、劇場、音樂堂といふものを排斥する。

私たちは、私たち自身の手で築き上げた教育の場所、宗教の場所、藝術の場所を要求する。

私たちは太陽の光りと、野の空氣を持つた草の上で、本を讀まうではないか。神を禮讚しようではないか。音樂を聽かうではないか。

筑紫の秋

秋になれば思ひ出すことが多い。

現在の生活が年々單調な、機械的なものになつて行くほど、幻を追うてゐた十七八の靑年時代のことがこの上もなく寧いもののやうに、私の心に映つて來る。あの時代のことを想ひ出すといふことは寂しいことであり、時としては胸の疼くやうな感じがすることでもあるが、あの時代の夢を現在の時の前に展げて見るといふことは、たまらなくなつかしいことであり、また私の生活にとつてこの上もない幸福なことでもある。

現在の生活が散文的であればあるほど、あの時代のことは美しい詩となつてあらはれて來る。しかもその思ひ出さへ、年々面影が薄らいで行き、思ひ出すことが少くなつて行くのは寂しい氣がする。

私の少年から靑年時代が主として田舍の風物のなかで過ごされたために、私の靑年時代の思ひ出は大抵は田園のうちにのこつてゐる。私があのころのことを想ひ出すと、そこには屹度田園のものうい空氣や、死のやうな靜寂が、私の「靑年時代」をつゝんでゐる。

私はこの夏十幾年振りかで田園生活にかへつて來た。朝起きるから眠るまで、自然に親しんでゐる。一週に一度いろ〳〵な用足のために東京に出るほかは、終日靑い曠野を見、高い空を見てゐる。自然私の靑年時代のことなどがいろ〳〵と思ひ出されて來る。

私の靑年時代の思ひ出のなかにはいろ〳〵な人々が含まれてゐる。もいちど逢つて見たい語つて見たいと思ふ人がかなり多い。しかしそのうちには行くへも知れずなつたものもあれば、死んでしまつた人もあり、逢ふ機會の絶えて

しまつた人もある。

私は故郷といふものを三つか四つの年に出てしまつたので、故郷に對する記憶は割合に少い。十五から十七の年まで學校に通ふために故郷に歸つて行つたので、その三年ばかりの間といふものが、私にとつては唯一の故郷の記憶となつてゐるのである。しかしその三年は故郷の地としてよりは、感激し易い青年時代の地として、より深く私の頭に刻まれてゐる。

Sの城下まで二里あまりも隔つた廣い稻田のなかの、小ひさな農村に私は宿を借りてゐた。昔長崎から江戸へ行く街道になつてゐたので、古い列樹(なみき)などがKといふ川の土堤に沿うて繁つてゐた。その列樹(なみき)が雨の日など煙つて見えるのがたまらなく寂しかつた。

その土堤の下に三四十戸の草葺きの農家が古い街道を挾んで列んでゐた。私が泊つてゐた家の窓からは城下までつづく平野がひろがつてゐるのが見えた。秋になると稻の波をへだてゝ城下の白い倉の壁が、夕陽に映つてゐるのが寂しく思はれた。

平原につゝまれた田舍に育つた人は誰も經驗することであらうが、國境の山々が幾十里の彼方にかすかにたゝずんでゐるやうな曠い秋の稻田のなかに見出す寂寞くらゐ、悠久な思ひを湧かさせるものはない。

私はあのころの秋の平原を思ひ出すと、今でも地の上にしやがんで泣きたいやうな氣がする。

ウオーヅオースの "Solitary Reaper" のなかに見出さるゝ寂しい收穫手は、秋の平原のいづこにも見出さるゝ。

少年の心は秋の野を歩くごとに痛いほど疼(うづ)くのであつた。

私はあてもなく稻のなかの小徑を歩いた。稻にかくれた廣い沼が忽然として私の前に現はるゝこともあつた。そこには菱の白い花が咲いてゐた。若い女が紅い襷をかけて半切(はんぎり)といふ大きな盥に乘つてたゞ一人で、菱の實(み)をもいでゐる

ことゝあつた。また或る時は水草を掻き分けて釣を埀れてゐる男が、稻の蔭に寂然としやがんでゐることもあつた。沼の上には白い雲の影が動くともなく動いてゐた。

稻の間を縫ふ小徑には大抵は白い野菊が咲いてゐた。晝日中からこほろぎは草のなかにころ〳〵と鳴いてゐた。それは地の底からでも湧いて來るやうな寂しい聲であつた。國境の山がかすみ、溫泉嶽が黑い影につゝまれるやうになると、幾里もつゞいた畷の土堤が靄につゝまれて來るのであつた。鎌を持つた農夫や、釣竿をかついだ男たちが、啞默つて稻のなかを靄のなかへ滅えて行くのであつた。

あの時代のことを思ふとほんたうに泣き出したいほどなつかしい氣がする。

×

靑年時代の思ひ出に浮かんで來る人々のうちで、私が第一番に逢つて見たいと思ふのは、私が泊つてゐた家の「要さんのおつ母さん」である。

「要さん」といふのは故鄕を捨てゝ長崎の造船所などに働いてゐたが、要さんのおつ母さんは自分より年の若い男に再緣して來てゐたのであつた。要さんと義理の父との間は面白くないらしかつた。そんなことからして、要さんは故鄕に歸つて來なかつたのであつたらしい。

冬になると星をいたゞいて私は家を出るのであつた。城下の入り口にはいるころ夜が白々と明けた。私が學校に通ふ日は、要さんのおつ母さんは、冬でも一番鷄が鳴いて間もなく起き上るのであつた。私も眞つ暗なうちに起きて、戸外の流れに行つて顏を洗つた。星の影が冷たく流れに映つてゐた。廐のなかの馬がかた〳〵と暗のなかに音をさせてゐた。

學校からの歸り路では、大抵城下の町を出外れようとするころから日が暮れかゝるのであつた。城下の町を出て十

七八町も歩いたところに、櫨の土堤があつて、そこは昔、藩の刑場になつてゐたので、今でも何うかすると骨などが桑畑のなかゝら出て來ることがあるといはれてゐた。少年の心には雨の夜など通ると、薄氣味惡く思はれることもあつた。畷の中程には、刑場へ引かれて行く囚人と、身內の人々とが別れの盃を掬みかはしたところだといふ「別れの松」といふ老木もあつた。

學校から歸つて來ると要さんのおつ母さんは團子などを拵へて待つてゐた。

要さんのおつ母さんはいつもおづ〳〵してゐた。士族の娘だといはれてゐたが田舍の人としては美しかつた。品もあつた。

或る冬の寒い日であつたが、私が學校から歸つて行くと、要さんのおつ母さんは膝あたりまで流れのなかにはいつてしきりと物を探してゐた。「何うしたんです？」と私は訊ねた。

「申しわけもありませんが、あなたのお箸を片方水のなかに落しましたので……」と言つて、氣の毒なほど悲しい顏をしてゐた。

私は誰よりも先に要さんのおつ母さんに逢つて見たいと思ふ。しかし今では、あの男とも別れて、あの家からも出て、何處に行つたのやら皆目わからなくなつたといふことである。

×

あの時代のことを思ひ出すと源六といふ老爺のことが泛かんで來る。土堤の下に小屋を拵へて四五人の子供を持つてゐたが、源六の二人の男の子と私はよく沼の中に烏貝を取りに行つたことがあつた。恐らく今では源六の孫たちがあの沼の烏貝を取つてゐることであらう。

櫨の土堤を上り切つたところに掛茶屋があつた。家のまはりには、夏はよく鵯が鳴いてゐた。掛茶屋には瞳の黑い

女の子がゐた。もう今では幾人かの母となつてゐるであらう。そしてその子供たちが沼に行つて菱の實を穫つたり、鷭を追つかけまはしたりしてゐるであらう。

筑紫の平原を懷へば涙が流れる。源六爺よ！　源六の子たちよ！　誰よ！　彼れよ！

菱の花が白く咲いたであらう！　秋が近づいて來たであらう！　平原の涯に城下の白い倉の壁がほの見えてゐるであらう。

あのころと同じやうに、旅の少年が寂しい心をいだいて、稻田の間を歩いてゐるであらう！

×

秋であつた。ポプラアが秋の平原を劃るやうに沼に沿うた農村をつゝんでゐた。稻の穗が道を埋めるばかりに垂れてゐた。そこに私ははじめて、零落した伯父夫婦を訪ねたのであつた。かつて郡內第一と言はれてゐた富限者の家に生まれた伯父夫婦は、私が訪ねて行つた時は藁を打つて、俵を編んでゐた。一枚の俵を編めば一錢か二錢かの儲けがあるといふことであつた。伯父には與一といふ一人の養子があつた。私がはじめてたづねて行つた時、伯父夫婦も與一も涙を流してよろこんだ。

與一は沼で漁つた鮒を持つて來て鮒の酢味噌をこしらへてくれた。私は秋の一夜を筑紫の平原のまんなかで、靜に語り明かしたのであつた。伯父も伯母も與一も幾度か涙をためながら語つた。

翌日私が立つ時は、三人が一里あまりの稻田の道を、跣足でステーションまで送つて來てくれた。沼からは藻の花の香がかすかに漂うてゐた。

その後十幾年、私は筑紫の伯父をも伯母をも見ない。

二三年前與一は、伯父の家を出奔して再び他家に婿入りをしたが、その家の舅を切り殺し、その娘を傷けて、自分

は腹を切つたが死に切れないで、病院に送られたといふことだけを聽いた。

筑紫の秋が近づいて來たであらう。ポプラアの葉が落ちかゝつてゐるであらう。沼には藻の花が咲いてゐるであらう。

あの不運な伯父と伯母が跣足で、尻切半纏を着て、朝から晩まで藁を打つてゐることであらう。與一は監獄に行つて煉瓦でも擔いでゐるだらうか。それとも絞首臺で縊り殺されたであらうか。

筑紫の秋よ。お前を想ふ時私の胸は疼く。

冬日抄

或る時はキリストの愛を想ふ。
或る時はストリンドベルクの憎みを懷ふ。ニイチエの戰を思ふ。
靜かに胸の上に聖書を載せて死んで行つたストリンドベルクよ。天使のやうに可憐な少女の額を撫でゝ淚ぐんだニイチエよ。私は人間の弱さを想ふ。
信愛！　口にすることの餘りにメローディアスであり、餘りになだらかである言葉！　私は一日に幾十度信愛を語つたであらう！
しかも私はかつて一日だつて、一夜だつてあるべき筈の信愛の心に滿たされたことがあるか。
私はマタイではあり得なかつた。私はラザロではあり得なかつた。私に最も近い性格は恐らくイスカリオテのユダ。

×

私はこのごろキリストの或る種類の奇蹟を信じ得られるやうな心持ちになつた。
癩病患者を癒したキリスト、跛者を起たしめたキリストを、私は信ずることができると思ふ。
奇蹟を持たない宗教は、すでに魂を失つてゐるのだと思ふ。奇蹟を行ふことのできない人は宗教家になる資格を持たないのだと思ふ。
奇蹟は肉體の更改である。さらに魂の更生である。奇蹟は魂と魂との點火である。奇蹟は魂の燃燒である。炎を持たない宗教はすでに滅びたる宗教である。

このことは藝術の場合にも言へると思ふ。
奇蹟を持たない藝術は私たちに何のかゝはりも持たない。
私たちの魂に更生の點火を與へない藝術は滅びなければならぬ。
都會人の藝術、田舍人の藝術。そんなことを考へる必要はない。
巧な藝術、ごつ〳〵した藝術。そんなことを考へる必要はない。
信仰の炎を持つた男、燃えるやうな愛を持つた男、狂ふほどの憎みを持つた女が、本當に自分の胸を掻き裂いて語れば宜いのだ。
私達の藝術には、いつも原始人的な大膽な冒險心が欲しい。野性が欲しい。熱が欲しい。若々しさが欲しい。獸のやうな力が欲しい。
私たちの藝術には才氣は異端である。自分のうちに才氣が生まれて來たことを氣付いたなら、極力それを殺さなければならぬ。
もし才氣を滅ぼすことができないなら、私たちは藝術家たる志を捨てゝ土を耕した方が宜い。それが自分のためでもあり、人類のためでもある。
私がペンを走らせてゐる時、私の家の周圍の畑では農夫たちが土を掘つたり、草を刈つたりしてゐる。きたない着物を着て、汗みどろになつて。
「俺は家のなかでこんなことをしてゐて宜いのだらうか？」と思ふことが時々ある。
野良で働いてゐる百姓たちの苦痛な勞働を見ても、自分の仕事を恥づかしいと思はぬほどの藝術が作りたい。

×

キリストにも釋迦にも親鸞にも策略といふ事はまるでなかつた。昔から大抵大きな宗教家たちは宗敵の策略に陷れられて殺された。

キリストは嬰兒を愛したが、かれ自身最も大きな嬰兒であつた。かれは最も愚かな傳道法によつて道を說いた。しかもかれの宗教ほど力強い宗教はなかつた。

嬰兒は天國に入ることができるとキリストは言つたが、藝術の天國に詣ることのできる者もまた嬰兒でなければならぬ。

藝術は何時も生一本の道を進まなければならぬ。全か然らずんば無。生か然らずんば死。嬰兒はたゞ生きることの他、何事も考へない。藝術家は最も良い藝術を生むことの他何も考へる必要はない。

芭蕉は俳諧の他談じてはならぬ、雜談の折は居眠りしてゐよといふことを敎へてゐるが、ほんたうに宜い言葉であると思ふ。

×

誰とも語りたくない日が續く。人と顏を合はせてゐることが苦痛でならない。

私は草の中に仰臥して冬の青空を見てゐる。紗のやうな白い雲が波を描いて靜かに流れて行く。

太陽は私一人のために照つてゐるやうに想はれることもある。

小鳥も、風も、汽笛の音も私一人のために存在してゐるやうに想はれることがある。

私は草の上にちよつと起き上つて見る。私が寢てゐたところだけの枯草が、私の體だけの幅さで、ちやんと地にくつ付き加減に俯向いてしまつてゐる。

二三町の田圃を隔てた小學校では子供たちがしきりと唱歌をうたつてゐる。大抵私の知らない唱歌である。そして

遊戯も私たちの小學校時代よりずつと面白さうなものである。

時々小學の先生をして見たいと思ふこともある。

私が投げ出してゐる足の見當の木立の中では小鳥が囀つてゐる。

小鳥も、二三ケ月と同じ種類の鳥は滅多にゐないやうだ。

氣を付けて聽いてゐると、季が移りかはつて行くのよりも、もつと早く小鳥の種類がかはつて行くやうに思はれる。

大抵は渡り鳥なんだらう。

曇つた日や、風の強い日は滅多に鳥の聲を聽かない。小鳥もやつぱり青い空の下でなければうたひ出す氣になれないらしい。

ちよつと見たところではいかにも冬ざれの草地のやうに思はれるが、枯草の下を分けて見ると、そこには既に色々な草が新らしい芽を出してゐる。雪の下にはすでに可憐な春の草が頭を擡げてゐる。

靜かな自然の生命の尊さと偉大さとを思ふ。

或る朝は咲き後れた山茶花のなかに、頭を突つ込んだまゝ、蜜蜂が凍え死んでゐることもある。靜かな死の寂しさと尊さを想ふ。

×

この夏から秋の終りころにかけて、夜が明けるから日が暮れるまで大抵十一羽の鳩の群が何處からともなく飛んで來ては、庭に下りてゐた。しまひには馴れてしまつて家のなかまでもはいつて來たものもあつた。

それが何うしたはずみであつたか、冬になつてからばつたり來なくなつた。

私たちの留守中に近所の男たちが、空氣銃を持つて來て鳩を殺さうとしたといふことを、餘つぽど後になつて子供

たちから聽いた。

この頃の青い冬の空を仰いで草の上に寢てゐると、時折鳩の群が庭の上に弧を描いて翔んで行くことがある。私たちが聲をかけると、幾らかまだ夏から秋のころのことを記憶してゐるのか、庭に下りて來ようとするやうな羽つかひをして見せる。

惡擦れのしてゐる大都會の郊外の人間たちよりは、鳩や小鳥の方が多く懷かしまれる。

×

郊外では一度雪が降ればなか〳〵數日間は步行も困難である。

私はこの前の雪の日に王子まで出かけて行つて足駄の緒を切つてしまつたので、雪のなかを五六町も困りぬいて步いてゐた。色々な家の前を通つて行つたが、誰一人氣の毒がつて聲をかけてくれるものもなかつた。

或る裏長屋のきたない街を步いてゐる時であつた、しきりに人を呼んでゐる聲が聞えた。最初は私を呼んでゐるのではないと思つたので、私は雪の中を振り向きもしないで步いて行つた。私が振りかへつて見た時、薄暗い夕暮の、むさくるしい小店のなかゝら、顏色の惡いおかみさんが私を呼んでゐるのを發見した。

おかみさんは火箸と麻の苧を持つて來てくれた。私はおかげで樂に雪のなかを家に歸つて行くことができた。

その後私は王子に出かけて行くたんびに、その裏長屋の前を通つて行く。そしておかみさんが店に坐つてゐればぢよつと頭を下げて行く。顏色の惡いおかみさんも頭を下げて笑ふ。

補綴だらけの着物を着た職工長屋のおかみさんは、いつも寒さうな顏をして、貧弱な店に坐つてゐるがつひぞお客らしい人の影も見えない。

×

音樂と禮拜だけの教會が欲しい。

そのやうな教會があつたら時々行つて默禱して見たいと思ふ。

儀式といふものは時々說教以上の雄辯な力を持つてゐる。

私は今のプロテスタントの教會よりは或る點ではカソリックの方に親しみを持つことができるやうな氣がする。

自力と他力といふ點から考ふれば、このごろ私は何となく他力門にはいつて來たやうに思ふ。

たとへ法然聖人にすかされて地獄に落ちても、後悔はしない、と言つた親鸞の信仰を羨ましく思ふ。

親鸞はほんたうに幸福な人であつたと思ふ。あれほど信じ賴つて行く法然を見出すことができたといふだけでも、非常な幸福であつたと思ふ。

バイブルのなかにでも、あれほど深い信賴の言葉を見出すことは出來ないかと思ふ。

キリストの弟子はあのキリストの大悲劇の夜三たび(我れキリストを知らず)と言つたではないか。キリストはこの點に於いては法然より不幸であつた。

×

キリストが一人々々の弟子の足を洗つたこと、日蓮が佐渡へ流さるゝ前日、牢のなかの法弟を悲しんで書いた手紙や、親鸞が法然に對して抱いてゐた信愛の情などについて考へて見ると、涙で淨められ、心で温められた宗教の尊さや、深さが想像される。

アメリカ式のキリスト教を排せよ。教會主義のキリスト教を排せよ。日本の今日の寺院を排せよ。

たゞ一人の跣足のまゝのキリストが生まれて來れば宜い。

たゞ一人の日蓮、たゞ一人の親鸞を野天の下に立たせれば宜い。
その日、ほんたうな宗教の法悦が、不安な民衆の心に充ちあふれて來るであらう。
私たちの社會にはたゞ一人の親切な人間を缺いてゐるのではないか。

×

（十年來打ち解けなかつた父にこのごろ「歎異鈔」を送つてやつたが、珍らしく父から手紙が來て、體を大事にしろと言つて來た）と涙ぐんで語つた友人があつた。
打ち解けなかつたその父と、その子との上に柔かな春の光りよ照れ。
私たちはボルクマンとエルハルトであるには耐へない。

修善寺行

まだ薄暗い間に眼がさめた。湯のなかゝらは田舍の客らしい男女の疳高い聲が絶えず聞えて來た。雨が降つてゐるのか、筧を傳うて流るゝ水が遠い鈴のやうな音を立てゝゐる。

旅だ！　と思つたゞけでも、神經のはしぐ\／までもくつろいだやうな氣がする。久しい間見失はれてゐたほんたうな自分の姿が見出されたやうな快さや、懷しさや、傷々しさが、甘い涙を喚びさまして來る。

池の鯉が跳ね上る音や、筒拔けた階下の湯のなかゝらの笑ひ聲が、靜かな雨の朝の空氣を掻きみだしてつたはつて來る。

宿の男が氣をくばりながら、そうツと雨戸を明けて行つた。どんよりとした雨の空の鈍色が障子に反射して見える。久しい間聽いたことのなかつた四十雀や、繡眼兒や、鶫や鶯の聲が、直ぐ枕に近い樹立のなかゝら流れて來る。

長い廊下を湯の方に歩いて行くと、そこでは見知らぬ旅人たちが私を見ては「お早う」といふ。私もまた「お早う」といふ。何の不自然な感じも抱かないで。

「カラマゾフ兄弟」のなかで、父のフイヨドル・パヴロキッチがアリヨシヤに言つたことがある。「お前を愛することはできる。けれど惡漢に對しては俺も惡漢になるのだ。」と。……善人となるのも、惡人となるのも大抵は周圍の境遇にある。

旅では大抵の人が善人の心に歸つてゐる。都會では生活の自然の壓迫から、經濟上の自然の要求から、人は無理にも自分を殺して、惡漢の仲間入りをしてゐる。冷酷な人間となつてゐる。それが一度旅に出ると不自然な壓迫や要求

から遁れると同時に、彼等はほんたうな自分に立ちかへつてゐる。魂を害はれてゐない善人の群にはいつて行く時、私たち自身も善人の心を喚び起されずには居れない。

湯から上つて欄干に立つと、霧につゝまれた春の山が桂川を隔てゝ湯の町の屋根に迫つてゐるのが見える。修禪寺の本堂を廻つて雨に濡れた櫻が白く煙つて見える。

岩燕であらうか。翅の眞つ黑な、そして普通の燕よりはやゝ肥つた恰好の小鳥が、桂川の瀬をなした水の上をかすめて翔んでゐる。その聲が千鳥に似て優しく、傷々しい。黑い大きな岩の上にも鶺鴒が雨にうたれながら宿つてゐる。鶺鴒の唄も寂しい、細い雨にふさはしい聲である。

東京を發つ時二册の本を持つて出たのであつたが私は何うしても本を讀む氣にはなれない。本を讀む機會は何處でも見出さるゝけれどもこのやうな落ち着いた心で、自然そのものゝなかに浸されてゐる機會は滅多に見出せるものではない。本を讀むために少しでも自然から眼を離すのは、惜しいやうに思はれてならぬ。

昨日この町に來る途中でもさうであつた。私はバスケットのなかゝら本を出しは出して見たが、一行も讀むことはできなかつた。一年中、地下室の生活見たいな生活をしてゐる私には、太陽の光りの直下に照らされてゐる自然を見ることは、心の躍るほどな驚異であつた。

新しく掘りかへされた土の上にも、松林の間にちらほら見えてゐる桃の畑にも、水車小屋の、草につゝまれた草葺き屋根の上にも、白い菫の花にも、黃色な辛子菜の花の上にも、丘阜の上にも、生まれたまゝの自然の輝きが湛へられてゐた。「本を捨てよ」と言つたマアカス・アウレリウスや、モンテーンの言葉を私はそのまゝに受け容れることができた。

午後になつて雨が止んだ。小高い雜木林の小徑を歩いてゐると、木立の間からは天城や、十國峠や、乙女峠がなだら

かな傾斜をなして連つてゐるのが見える。修禪寺の鐘の音が、靜かな山の隅々までも餘韻をつたへて顫へてゐる。麥畑をかこんだ疎林からは小鳥の聲が絕えぬ。櫟林を通り拔けて水車小屋の三つばかり列んだ小川の傍に來ると一面にチウリップの咲いた花畑がある。そこから範頼の墓は直ぐであるが、日が暮れかゝつて來たので桂川に沿うて町の方に歸つて行く。去年の多來た時、見知つた犬が、やはり同じ家の前にゐて、尾を掉つて來たが、何にもやるものを持たなかつたので頭を撫でゝやつた。桂川のところまで跟いて來て、橋の上で菜畑の方へ駈けて行つた。

×

夜が明けきらぬ間から小鳥の聲が聞える。修禪寺の鐘が谷の底からでも湧いて來るやうな響き方をして傳はつて來る。大仁行の馬車の鈴の音が必ず朝ごとに聞える。「さよなら」「御機嫌克う」といふやうな挨拶が取り交はされて馬車の人々は危ふげな橋をわたつて、桂川に沿うた野の道を下つて行く。馬車はやがて宵い丘の蔭にかくれてしまふ。浴衣を引つかけた、病人らしくもない、頑丈な田舍の人たちが退屈まぎらしのつもりか、橋の上に立つては、往き來るさの旅の人々を見てゐる。

嵐山と城山の間の峠を越して下田街道に沿うて旭の瀧を見に行つた。桑畑の傍に立つてゐると、後から來た老人が、問ひもしないのに先方から聲をかけて「瀧の道なら、こつちだ」と言つて敎へてくれる。老人について麥畑のなかを七八町も步いてゐると、下田街道から右手に遠くの空に懸つた高い瀧が見える。南畫にでもありさうな古雅な眺めである。老人は耳が遠いと見えて、折々私の問に對して見當ちがひな返辭をする。

椿の花が眞つ紅に咲いた寺の廣場で老人と別れた。今日はお說教があるので、庫裏には老人たちが茶など煎じてゐるのが見えた。

「三十六丈の瀧で、朝五時ごろ朝陽が映るころは何とも言へない眺めだ……」といふやうな茶店の女の說明を聽いて

ゐたが、柔かな女瀧といつた感じの瀧である。下田街道に出ると、そこからは廣い磧をなした狩野川が、春の水を泛かべてうねりくねりして流れてゐるのが見える。李や梨の白い花の下を五六人づゝ、かたまつては老媼たちが寺の方へ歩いて行くのを幾度も見かけた。

狩野川に架けた釣橋を渡つて妙國寺に行くことにした。「お女郎衆」であつたと村の人から聽いた橋場の女は今日もやつれた顏をして橋場に坐つて、橋錢を取つてゐた。橋を吊した針鐵には襁褓だの、女の襦袢だのが乾してあつた。河下の方には、青い淵を湛へた横瀨の渡船が仄かに見える。船には二人の男が乘つてゐた。

妙國寺までは一直線に、麥畑の間の道を歩いて行かなければならなかつた。雲雀の高鳴く聲が何處からともなく聞えて來た。

家康の寵妾「お萬の方」が世を忍んでゐたと傳へられる妙國寺は、がらんとした古い寺である。本堂から庫裏へ通ふ廻廊の屋根には青い草が一面に生えてゐた。蟲蝕んだ階段を昇つて行くと、暗い須彌壇の前には、顏の蒼ざめた女が、しきりと何か念じながら、手一つぱいにかゝへた椿の葉を、疊の上に落しては、裏を見せた葉と、表を見せた葉の數を算へてゐた。私はこの古風な迷信に生きた女を何時までも興味をもつて靜かにながめてゐた。椿の葉に佛の御告があらはれて來るといふ、如何にも山國らしい懷かしい傳說である。

庫裏の方に廻つて「お萬の方」について細かい傳說をも聽きたいと思つたが、そこには薄暗いがらんとした大きな室の片隅に、たゞ二人の雛僧が明るい窓口に對して坐つてゐるばかりであつた。

「お萬さまは久しい間この寺に居られたといふだけで私たちは何にも知りません」といふ雛僧の聲を後にして、私は椿の花のこぼれた門の方へ歩いて行つた。廣い麥畑の隅に一人の老人が、草掻で雜草を捞つてゐるのを見出したので、私は老人に「お萬の方」のことを訊ねて見た。

「お萬さまの化粧の井戸といふのが、つい近年までありましたが、今ではちよつと見當もつきますまい。あの畑の邊でした……。」

と言つて指さした藪の傍の畑には、白い蕪の花が麥の間からほの見えてゐた。

「お萬柿と言つて、お萬さまがお植ゑなされた柿樹があつて、一年に三度柿實が果るといふ昔からの言ひ傳へでしたが、俺共も二度果つたのは覺えて居ります。三度目は花ばかりでしたが……」老人は草履を動かしたまゝ、そのやうなことをも語つた。

振りかへつて見た時は、老人は麥のなかに隱れてゐた。富士の白い嶺が妙國寺の樹立の上の宵空にくつきりと曲線を描いてゐるのが見えた。

賴家の墓に詣つたのは夕方であつた。政子の寄進に成つたと傳へられてゐる經堂の前には長唄の師匠の家が出來て、中からは絃につれて唄の聲などが洩れてゐた。夕暮の道を埋めるばかりに花が白く散つてゐた。

五六人の田舍の男女が、あの輪塔の石をかゝへ上げては何か念じてゐた。「石が輕く持ち上がれば湯が利くのだ」といふやうな事を誰が言ひ傳へたのであるか、石塔をかゝへてゐる無智な顏の男女がうとましくなつて來た。賴家の墓の直ぐ後には、電力で米を搗いてる小ひさな家が出來てゐた。

修禪寺の庫裏の横に出た。旅から歸つて來たのか、または旅の僧であるか、若い僧が二人緣に腰をかけたまゝ草鞋を解いてゐた。傍には深い笠が二つ脫ぎ捨てゝあるのも、山寺の夕暮らしい感じを抱かせた。

鶯の聲が、霧深い雜木林からひつきりなしに聞える。昨夜はこの町で活動寫眞があつたので、宿の田舍客たちは夜遲く歸つて來て、湯のなかで騷いでゐた。私は夜半に幾度も眼をさまされた爲か、今朝は少し頭が重い。

伊東からわざ〳〵逢ひに來てくれたK君とS君を送つて大仁まで步いて行つて、步いて歸つて來た。人に逢ふこと

を避けて旅に出てゐながらも、人に別れては寂しさが犇々と迫つて來る。K君やS君の馬車が越えて行つた天城の連亙が春らしく霞んでゐる。山には野火の煙が柔かい春の光りに溶け込むやうに上つてゐる。

碎米薺の一面に咲いた田の畦に兩脚を投げ出して下田街道に行く馬車を見てゐると、馬車の中から聲をかけた女があつた。修禪寺に來る途中で知つた母子づれの旅人であつた。色の白い十八九の娘は今日も力のない微笑をたゝへてゐた。娘の黑い瞳が今日は特に、人懷つこい蠱惑の力を持つてゐるやうにさへ思はれた。

「今度は少し海岸の溫泉に行つて見ようと思ひまして……」といふ母の聲を遺して、馬車は桃の花の咲いた村の方へ、狩野川沿ひの道を走つて行つた。

不治の病を持つた娘を伴れて、溫泉町から、溫泉町へと旅をつゞけてゐる母親の氣の毒な運命を考へながら、私は馬車の後をしばらく見送つてゐた。輝かな曠野に靑い色に燃えてゐた。

二人の旅人の上に祝福あれ。

×

山に登ることも飽きた。全然人間界から去つて自然のなかに浸され切りになることは、私には出來さうにもない。ドストイエフスキイのものを讀んでゐると、彼の世界は殆んど人間の心、男と女との心と心との愛憎、離合、纏れ合ひ、絡み合ひのみに限られてゐたやうに想ふ。彼にとつては鳥の聲を聽いたり、空の色を見たりすることよりも、刹那々々に動き、流れ、苦しみ、怒り、泣き、悶ゆる人間の魂の相を見出すことに無限の蠱惑があつたやうに想はれる。彼は餘りに人間的な人間であつた。

人間といふものから孤立してゐると、山を見ることよりも、流れを見てゐることよりも、仍り人間といふものに近づかずには居れないといふ感じが沁々と湧いて來る。そして實際人間ほど深い、微妙な神祕性をたゝへた自然はない

といふことが幾分推察されるやうな氣がする。ドストイエフスキイほどな強い人間執着の心は持ち得ないとしても、やつぱり私には人間を忘れることはできない。山を越えて行つた人が懷かしい。

私は湖畔に孤獨の生活を送つたソローの生活を思ふ。彼の孤獨の生活は決して嫌人主義者的な生活ではなかつた。ソロー自身の生活は全く人間からかけ離れたものではなかつた。彼の簡素な山の家には三つの椅子があつた。一つは彼自身の Solitude のために、一つは Friendship のために、一つは Society のために。彼は山向うを通る馬車の轍の響をも懷しいと思つて聽いた。彼の机の上には訪問客によりてさゝげられた柳の環もあつた。彼はその足跡や、踏みにじられた草や、路傍に折り捨てられた梢などを見て、直ちに彼の不在中に訪ねて來た人が、男であつたか、女であつたか、また何れくらゐの年配の人であつたか、その性質さへも判斷することができた。また或る時は三町ぐらゐ離れた旅人を莨の香を嗅いで追つかけて行つたこともあつた。山のなかに自然の胸に懷かれようとしたソローも、人間を忘れることはできなかつた。

ドストイエフスキイとソローと比べて見ると一人は巷のどん底の人間であり、一人は森の奧の人間であるやうに思はれるが、人間を懷しむ心に於いては共通の點を見出すことができる。人間ほど人間を避けながらも人間を懷しがつてゐるものはない。

私たちは時々孤獨のための椅子が欲しい。

同時に友人のための椅子と、社會の人のための椅子をも持つてゐないでは生きて居れない。

明日は東京に歸らなければならないと思ふと、さすがに淡い旅の哀愁も湧く。大雪のなかを七八里も歩いたので、腰も立たぬほど病つたといふ隣室の男と語つてゐても、何だか旅の離愁といふやうな感じがする。

大澤だの堀切だのといふ山里に通ふ草山の峠に立つ。天城から乙女峠の連山や、狩野川の流れも見える。富士の裾

野がやがて海に入つて煙つてゐる。麓から三人の女が空籠を背負つて上つて來る。顏色の良い、田舍には珍らしいすつきりした女である。

「姉さん」と聲をかけると、先方でも手拭の冠りを取つて愛想笑ひをする。

「日が暮れぬうちにお歸りなされ」と言つた女たちの姿は、やがて山の懷にかくれてしまふ。

裏山から修禪寺の庭に出た。廣い本堂のなかを、黑い衣の僧たちが法燈をかゝげて默したるまゝ動いてゐた。廻廊を歩む若い尼僧の顏が白く夕月に照らされてゐた。

石磴を下つて來ると右手に鐘樓がある。鐘樓には三人の雛僧が立つて、入り相の鐘を撞いてゐた。一つの鐘と次の鐘との間には、かなり長い間がある。鐘の餘韻がいつまでも〳〵蜜蜂がうなるやうに響いてゐる。その長い間を雛僧たちは何か語つては笑つてゐる。三つばかり鐘が撞かれてからであつた。二人の雛僧は甃の上を庫裏のなかに消えて行つた。後ではたゞ一人の雛僧が重たげに撞木を動かしては、彫物かなんぞのやうにだんまり込んで鐘の下に立つてゐた。

鐘の音は山から山を越えて、やがて暗のなかに吸ひ込まれてしまつた。

淡い月影の下に、今夜も遠い山の野火が帶のやうになつて燃えてゐる。

眞人間となるまで

何も持つてゐないといふことは、人間としてかなり寂しい生活であるにちがひない。しかし何も持つてゐない生活を心からありがたく、尊く思ふ人でなければ、ほんたうな人生の味といふものを嚙みしめることはできないであらう。

哲人ソクラテスは知識の究竟は「自分は何も知らぬ愚者」といふことを意識することであると言つた。智者にとつては自分の無智なことを心から覺るのが、唯一つの救ひの道でなければならぬ。

金を持てる者にとつては、金を捨てることが唯一つの救ひの道でなければならぬ。官位を持つた者にとつては官位を捨てることが、かれ自身を救ふ最後の方法でなければならぬ。

「ソロモンの榮華も野の百合に及ばざりき」と言つたキリストの言葉は決して比喩的な美辭ではない。野の百合は百合であるが故に、ソロモン王の榮華にもまさる幸福を持つことができたのであつた。ソロモンの生活は王といふ權威に囚はれたがために、ほんたうな人間の幸福を持つことはできなかつた。ソロモンがもし眞人間の生活を持つことができたならば、かれも亦野の百合と同じ生活の幸福を味ふことができた筈である。

私たちは何物をも持たぬ眞人間であることを祈らなければならぬ。自然のまゝの人間であることをもとめなければならぬ。嬰兒であることを冀はなければならぬ。

私たちは富を持たぬことのために、毎日何れほどの苦痛や屈辱やを忍ばなければならぬか知れぬ。私たちは貧しかつたがために、富める人たちの夢にも知らぬやうな、いろ〳〵な涙をも經驗しなければならなかつた。私たちは貧しいといふことを呪つたことも多くあつた。

しかし、私たちは貧しいことのために、自分の魂を傷けてはならぬ。自分の素直な魂を歪に曲げてはならぬ。

私たちは貧しければこそ人間の世の美しい同情や、愛や、涙といふことをいやといふほど味はゝせられたのであつた。また苦痛といふことをも味つた。

涙があり、苦痛があつてこそ、私たちの魂は練られ、磨かれ、豐かにせられ、伸び展げられて行く。

しかし涙や、苦痛は一方では私たちの魂を大きくし、深くし、人間らしくする機縁であるが、同時に涙や苦痛は私たちの魂を歪にしたり、頑にしたりする力をも持つてゐることを忘れてはならぬ。

悲しみや苦痛は神の鞭である。素直な心の人にとつては神の鞭は自分を一層正しく、善くするものである。けれども邪な心の人にとつては神の鞭は、かれ自身をます／＼正しいことや、善き事から遠ざけるものとなる。

私たちは自分の心を素直に保つて、日々の苦痛や涙を感謝しながら受け容れなければならぬ。

×

私たちが正しい人間となつて、正しい人間の生活を生くることのできる機縁はいつでも、そしていづこにでも存在してゐる。

貧しいといふことも、私たちが人間らしい生き方を味ふことのできる一つの尊い機縁である。裏切られたといふ苦さも、僞られたといふ悲しさも、人一倍不運であるといふ意識も、私たちにとつてありがたい機縁でなければならぬ。更に自分たゞ一人が世界に孤獨であることを見出す寂寞も、自分にとつては尊い機縁でなければならぬ。

「富める者の天國に入るは、駱駝の針の孔をくゞるよりも難い」と言つたキリストの言葉は眞實である。更に「悲しみある者は幸なり、その人は慰めを得べければなり」と言つたかれの言葉は、實際、涙なしには受け容れられないほどの、尊い眞人間の言葉である。

私たちは貧しいこと、愚なること、悲しみを持てることを感謝しなければならぬ。そこから天國の門が開かるゝ。「何のその百萬石も笹の露」とうたつた俳人の意氣は、眞に平民の幸福と矜持とを味つた者でなければ掬むことはできぬ。

「大名はぬれて通るを火燵かな」

俳人一茶にとつては加賀百萬石の權勢よりも、彼自身の魂の自由が尊かつた。

私たちは自分の魂の無限に尊いことをほんたうに自覺しなければならぬ。官位に魂を賣る者があり、黄白に魂を賣る者があり、虛榮に魂を賣る者がある。

家を捨て、富を捨て、官位を捨て、學問を捨て、衣を捨て、素つ裸の人間となつた時、はじめて眞人間の姿があらはれる。眞人間の魂が見出される。

一枚の美衣を裝ふことはやがて自分の魂の上に一個の重石を積むことゝなる。更に土地を所有する時、家を所有する時、官位、黄金を積む時、私たちは自分の魂の上に重荷を積み重ねてゐることを氣付かなければならぬ。自分の魂を賣つてゐることを悲しまなければならぬ。

空の鳥は土地を持たず、家を持たず、官位を持たざるが故にソロモン王にもまさつた生活の幸福と自由と光榮とを持つてゐる。

私たちはもつと〳〵貧人の幸福を心から意識しなければならぬ。

×

正直であれ、とは誰もいふ言葉である。自己に正直であれといふこともかなり言ひ古された言葉である。正直であることは卽ち自分の魂を生かして行く唯一つの正しい道である。

正直であることは非常な勇氣を必要とすることも覺悟しなければならぬ。私たちは自己に正直であるために多くの敵を持つことを恐れてはならぬ。人に憎まるゝことを恐れてはならぬ。堂々と戰ふことを恐れてはならぬ。

心の弱いといふことは時として一種の罪惡となる。正しいことのために戰ふことのできない臆病者は自分の魂を救ふ機會を失ふ。

しかし考へなければならぬことがある。自己に正直であれといふことは、自分の胸に思つたことを言つてしまへといふ譯ではない。

私は時々「自己に對して正直であれ」といふことを穿きちがへた人々の不快な言葉を聽くことがある。自己に對して正直であると同時に、私たちは他人に對する正直を忘れてはならぬ。自己に正直であることは、自己の魂に對する親切心である。私たちは自己の魂に對すると同じ強さの親切心を他人の魂に對して持つてゐなければならぬ。

謙虚な自分の魂に對して恥づることのない言葉のみが自己に正直な言葉である。純一な、素樸な魂そのものゝさゝやきである。人の悲しみに對して、人の苦痛に對して、そゝがるゝ涙こそ最も自己に正直な言葉である。

正直な言葉は一時は對手の感情を傷ふことがあるかも知れぬが、必ず對手の魂を生かす。對手の魂を生かさないやうな言葉は決して正直な言葉ではない。

正直な言葉は一つの概念ではない。また批評でもない。眞理が必ずしも正直な言葉であるとは言へない。眞理が一度人格を通して表はれて來る時、それは正直な言葉となつて響いて來るのである。

たとへ眞理といへども、温かい人格を通らないで來るものは不正直な言葉となる。

かの多くの官僚的な教師たちが教壇の上から鸚鵡がへしに叫んでゐる眞理は、概念としては眞理であるが、生きた血の通つた眞理ではない。正直な言葉ではない。したがつて決して聽く人々の魂を濕さない。魂を淨めない。

「言ひたいことを言ふ」のが決して正直な言葉ではない、それは最も厭ふべき、憎むべき不正直な言葉である。言ひたいことゝ、言はねばならぬことゝは大分ちがふ。

言ひたいことは何のやうな臆病者も言ふ。言はねばならぬことは勇氣ある人でなければ言へぬ。

匿名の手紙などを出して言ひたいことを言ふのは最も卑怯な人間のやり方である。面と對つて言はねばならぬことを言つたのはキリストであり、佛陀であり、マアカス・アウレリウスであり、孔子であつた。

言ひたいことを言つて、自分の責任を免れようとするくらゐ卑しい人間はない。かれ等は人の魂を傷くることを喜ぶ卑劣漢である。かれ等の言葉は人の魂を傷けると共に、自分自身の魂を滅ぼす。

言はなければならぬことを正直に語る者は常に多くの敵を持ち、十字架を負はなければならぬ。しかしその言葉は人を生かし、かれ自身の魂を救ふ。

×

言はなければならぬことを言ふ人の言葉には自責の念があり、涙があり、感謝があり、同勞者の憐愍がある。私たちは子を打つ親の眼に涙が泛かんでゐることを忘れてはならぬ。

鞭打たるゝ者よりも、鞭打つ者の苦痛の更に深く切なることを知らなければならぬ。

鞭打つ者も泣け。鞭打たるゝ者も泣け。泣きて共に祈る時神の國の扉が開かれるであらう。

鞭打つ者も祝福せられ、鞭打たるゝ者も祝福せられてあれ。

正直な言葉はいつも愛から生まれて來る筈である。憎から生まるゝ言葉ほど不正直なものはない。

×

藝術の鑑賞といふことがこの頃いろ〳〵な人々によつて、いろ〳〵に唱へられてゐる。私もこゝで藝術鑑賞につい

て一言述べさしていたゞきたい。主としてこゝでは文藝方面について述べることにする。
藝術の善し惡しはそれによつて、自分の魂が何れだけ動かされたか、淨化せられたかといふことによつて判斷される。
しかし藝術品そのものが何のやうに傑れたものであつても、藝術に對する讀者の心が素直に受け容るゝ狀態に置かれてゐない場合は、讀者はその藝術から何ものをも與へられない筈である。
藝術の鑑賞は一面、讀者自身の心を反映することゝもなる。
低級な藝術を理解するか、高級な藝術を理解し得るかといふことは、その人の生活にとつて大事件であることを知らなければならぬ。低級な藝術を讃美することの恥辱をも知らなければならぬ。
藝術の鑑賞はいつも少年の心を要する。正直な心を要する。早合點と小悧巧さと、通とは藝術鑑賞の躓き石である。
小悧巧な藝術、理責めの藝術は誰にも面白くもあり、理解され易い。
一片の野の花を見て、その驚異に擊たるゝ人でなければ、ほんたうな藝術はわからない。
藝術は頭で受け容れてはならぬ。魂で受け容れなければならぬ。
藝術の作家が、その筆を執るに際して神棚の前に額付くならば、讀者もまた鑑賞に際してはそれだけの眞劍さや、謙虛さを持つて讀まなければならぬ。
すべての良い藝術は交響樂的に私たちの魂に訴へて來る筈である。そこには筋もない、小悧巧な人間の理窟もない。作家自身の魂の無限なるものに對する欣求、憧憬のリズムが、端的に聽者の魂を擊つ時、音樂は生きて來る。
作者と讀者との間に作物を通して生きた魂の交通が開かるゝ時、眞實の鑑賞が生まれる。そこには作者もなく、讀者もなく、人類全體が一つの交響樂のなかに人生の無限とありがたさとを感じてゐる刹那が生まれる。

×

明日といふことを考へてはならぬ。
私たちにとつてはいつも今日だけが賦へられてゐる。もつと切り詰めて言へば、この刹那だけが賦へられてゐる。
近代の享樂主義者は、人生は今日だけであるが故に、その悲しみを忘れんがために醉ふことを敎へた。かれ等は醒めてゐることの苦痛を恐れたのであつた。私たちは享樂主義者の悲しい心持ちに對しては同情することができる。
しかし私たちはもつと強くならなければならぬ。人生はたゞ今日だけであるが故に、今日この刹那を最も美しく、最も價値あるやうにすることを忘れてはならぬ。
今日の悲しみは今日味はゝなければならぬ。この刹那の苦痛はこの刹那に嘗めなければならぬ。明日や、次の刹那にのばしてはならぬ。

×

魂のよろこびは人に頒たねばならぬ。さうすることによつて人も救はれ、自分も救はれる。
魂の悲しみは人に隱さねばならぬ。悲哀を自分ひとりのうちに靜かに耐へ忍んで行くことによつて、自分の魂が淨化せられ、自分の生活が深化せられて行く。
淚は外に出してはならぬ。淚は貴い寶物であるが故に、自分の胸の底に隱して置かなければならぬ。
深く隱された淚は、美しい光りとなつてその人の魂を照らす。
淚を深く隱すことのできる人の言葉はいつも愛に濕されてゐる。

一本の葱

メレジュコウスキイはトルストイを近代ロシヤ文學に現はれた靈の柱とし、ドストイエフスキイを肉の柱として、この二つの柱がやがて未來の文化を形作るべき殿堂の大黑柱であると考へてゐる。神的なトルストイの柱と、人間的なドストイエフスキイの柱とが並び樹てられてやがてその柱が頂上に於いて結び付けられる時、そこに完全な文化の殿堂を飾るべきアーチが作らるゝといふのである。

メレジュコウスキイが言つてゐるやうにトルストイとドストイエフスキイを比較するならば、一つは餘りに宗教的であるが故に靈的な柱とし、一つは餘りに人間的であるが故に肉の柱として考へることも無理ではない。隨つてメレジュコウスキイの二つの柱の比喩も或る程度までは是認することができる

しかし私たちは今日靈と肉の差別を立てる必要を殆んど見出すことができなくなつた。人間と神とを甄別する必要をすら見出すことができなくなつた。それほど私たちは人間といふものゝ尊さと、深さとを、はつきりと意識するやうになつた。

私たちは人間であるが故に自分自身を限りもなく愛する。限りもなく尊いと思ふ。私たちの生活のすべてが人間的であるが故に、私たちの生活表現のすべてを是認する。

神と人間との握手！　これが多くの宗教家たちの理想であつた。

けれども私たちは私たち自身が全然人間的であることをのみ求むる。人間生活そのものを至上の境地と信ずる。

私たちは自分を離れて神といふものを見出さうとは思はない。私たちは神を求める必要はない。失はれた自分自身

を見出すことが私たちの仕事のすべてゞある。
私たちは神にならうとは思はない。私たちはどこまでも自分自身でありたい。どこまでも人間でありたい。
私はキリストが人間であつたことを限りもなくキリストのために、人類のために尊いことであつたと思ふ。私たちは神に生まれなかつたことを嬉しいと思ふ。私たちが鳥や獸に生まれなかつたことを嬉しいと思ふのと同じ程度で。
私たちは人間である。人間であるといふ意識ほど私たちにとつて眞實なものはない。人間は人間であるが故に尊い。
カアペンタアは來るべき時代は天使の時代でなければならぬと言ふ。しかし私は永久に人間的な世界の存在をのみ認める。
來るべき時代の文化は神の文化であつてはならぬ。それは何處までも人間の文化でなければならぬ。最も人間らしい人間の文化でなければならぬ。よし人間が神によつて創造せられたとしても、人間の世界を支配するものは人間でなければならぬ。人間の世界が人間によつて支配せらるゝ時、神の意志が達せらるゝ。神はその力によつて人間の世界の一寸一尺をも動かすことはできない。人間の世界を改造するものは人間そのものでなければならぬ。人間の世界から不幸を、不正を、不善を取り去るものは人間自身でなければならぬ。
嘗て詩人は「孔雀の光耀は神の光榮である」とうたつた。しかし私たちは「人間の光耀こそ神の光榮である」と信ずる。
嘗て詩人は「獅子の憤怒は神の智慧である」とうたつた。しかし私たちは「人間の憤怒こそ神の智慧である」と歌はなければならぬ。
この地球の上から人間を引き去つたとして、そこに何が殘るであらう。
私たちは人間なしに、世界を考へることはできない。人間なしに、神の國を想像することはできない。

キリストは「爾等二人以上あるところに神あり」と言つた。

人間と人間との魂が交通する時、そこに生きた神の國が生まれる。

人を殺す者は人間である。けれども人のために自分を捨つる者も人間である。神は十字架上に死なゝかつた。十字架上に死んだものは人間のキリストであつた。人間の心をのぞいて何處に愛があらう。人間の魂をのぞいて何處に永遠の生命があらう。

キリストは十字架の上に涙を流した。彼は人間であつたからである。神は涙を持たない。涙は最も人間的な魂の香である。

「汝の涙をもつて大地を濕はせ」と言つたのはロシヤの作家であつた。全人類の魂が涙に浸された時、世界の幸福が生まれる。

私たちの魂の多くは金錢と名譽と權力に痲痺されてゐる。金錢をも、名譽をも、權力をも持たぬ貧しい人々のみが、日々その魂に涙を灑いでゐる。

「貧しき者は天國を見出す」とキリストは言つた。眞實に人間の世界を見出し、眞實に人間的な生き方をすることのできるものは、貧しい人々のみである。

×

近代藝術の一つの特色は惡の歎美であつた。罪の讃咏であつた。

人道主義の立場にある人々は何のやうな惡人の魂の底にも滅すことのできぬ人間性の美しさを見出さうとした。惡魔主義的傾向の人々は人間が釀し出す惡そのものゝ美を見出さうとした。この二つの行き方は異つてゐるやうにも思はれるが、畢竟は人間生活を至上とする人生の見方に過ぎない。

善は人間のものであるが故に尊い。惡も亦人間のものであるが故に尊い。善惡共に、それ自身では枯木であるに過ぎない。人間の吐息が吹きかけられた時、初めて善にも惡にも、生きた人間的な香が動く。善惡の花が薫る。

私たちが眞實に生きてゐる喜びを感ずるのは、善惡そのものによつてゞはない。善惡を通して見出さるゝ人間的な魂の光りによつてゞある。人間の魂は善惡を超越してゐる筈である。善なることのうちにも惡なることのうちにも人間的な魂の閃きが流れてゐる。人間的な魂の閃きを見出し得た刹那に、私たちは善惡を超越する。

人間の魂は、人間そのものゝために存在するのであつて、善惡のために存在するのではない。人間の魂が閃くところには惡はない。或ひは善すらあり得ないと言ふことができる。人間は人間的であるところに無上の光榮を持つてゐる。

人間の魂は、自分を大きくするために、自分を深くするために絶えず動き、流れ、伸びひろがつて行く。人間の魂を培ふものは善でもない。惡でもない。人間の愛である。涙である。

×

絶えず鞭打たるゝものゝ魂は絶えず涙に濕さるゝが故に、深くなり、大きくなり、伸びひろがる。絶えず自らの惡を恥づるものは悔恨の涙をもつて、その魂を培ふが故に、その魂は救はるゝ。絶えず充たされざる魂の空虛を意識するものは、自己の無智を泣くが故に、その魂は明かにせられる。弱き者、虐げらるゝ者、貧しき者、罪ある者、無智なる者の魂は救はるゝ。彼等は最も人間的な生活者である。

×

世界の「審判(きはき)の日」は神が齎すのではない。それは人間が生まなければならぬ大事業である。「審判(きはき)の日」が一日早ければ一日だけ早く人類の事業が完成せらるゝ。「審判の日」は人間の運命が裁斷せらるゝ日ではなくして、人間の勝

利が證明せらるゝ日でなければならぬ。

愛は不可思議な力である。「一本の葱」は無數の罪人を地獄の底から、天國に引き上ぐる力をもつてゐる。「一本の葱」が愛の手で握られてゐる間は。

神は一人の惡人に向つて言つた。「お前は生前、何か一つの愛を他人に施したことがあるか？」惡人は應へた。「たゞ一度一本の葱を隣人に與へたことがある」と。神は一本の葱によつて彼を天國へ引き上げやうとした。しかし彼は同じ道連れであつた地獄の苦惱者等を蹴落したがために、彼自身も再び地獄に落ちた。

愛の至境は人類全體を目的としてゐる。人類全體が救はるゝでなければ、愛は完きものではない。人類の最後の「審判の日」は私たちの愛が、ほんたうに人類全體をつゝむことができる日に來る。人類のすべてが救はれた日、それが最後の「審判の日」である。それは神の再臨の日ではなくて、最も完全な人類の生活の日である。最後の一人まで救はるゝでなければ、「審判の日」は生まれない。

×

苦痛は獨で苦しまなければならぬ。涙を嚙みしめて苦痛を味ふ時、自分の魂が涙に培はれる。苦痛は魂に灑ぐ涙の泉である。

苦痛から遁れるために人の助けを求めてはならぬ。苦痛は一人で、靜かに味ふべきものである。默して苦痛の笞を忍ぶ時、苦痛は私たちを、一層大きくし、深くする。

苦痛を人の前に並べ立てる刹那、魂を淨化する涙は涸れてしまふ。

キリストはたゞ一人で十字架にのぼつた。

×

M君。お手紙ありがたう。いつも忙しいので、僕の方からは御無沙汰ばかりしてゐる。

田舍では麥も穗が出るやうになつたとのことを君のお手紙で知つた。同時に僕の空想は麥畑につゞいた桑畑を想ひ出す。そこに黑い寶石のやうに熟した桑の實を想ひ出す。惠まれたる自然を思ひ出す。

M君。君は京都から歸つて、久し振りで田舍の夏を見て、非常に喜んだやうであるが、樂しい心を懷いて故鄕に歸ることのできる君を羨ましいと思ふ。

M君。僕にも故鄕はある。けれども故鄕は僕にとつては懷かしい場所ではない。故鄕の人々は何時も誤解の眼をもつて僕を見てゐる。僕は故鄕を出てから二十年近くになる。その間殆んど一日だつて故鄕を忘れたことはない。僕は故鄕を戀ひしいと思ふ。しかも故鄕の誰れが、嘗て一度だつて僕に深い同情をもつてくれたものがあるか。猜疑と侮蔑! それを除いて何ものをも僕は故鄕に見出すことはできない。

M君。僕は今夜も父の家に手紙を認めた。そして破つた。父は僕が極めて父に對して冷淡であるやうに思つてゐるかも知れない。けれども實は殆んど每日のやうに手紙を書いては手紙を破つてゐる。

「故鄕からの手紙も欲しくはない」と父に言つてやつた。しかし僕は每日のやうに父の手紙を待つてゐる。姉の手紙を待つてゐる。故鄕からも滅多に手紙は來ない。故鄕の人々はすべて僕を忘恩の徒と考へてゐる。

M君。自分の肉體ばかりでなく、魂までも歸るべき故鄕を持たない僕自身の境遇を、我ながらあはれに思ふこともある。

「故鄕を持たぬ魂!」「巢を持たぬ魂!」

僕は時々、さう思つては、自分自身の魂のために涙ぐましい心になることもある。

M君。東京では祭りのシーズンである。今日は午後一人で淺草の方に出かけて行つた。三社祭といふので、男も女

も歡樂に醉うてゐるやうに思はれた。初め冷靜な心で熱狂した男や女たちを見つめてゐる間に、何時となしに僕の心も、浮き立つやうな溫かい雰圍氣につゝまれて來た。

「御免なさい！」と言つた聲が聞えた。僕は振りかへつて見た。花笠を冠つた小ひさな弟らしい子の手を引いた小娘が、僕の袂をくゞるやうにして御輿の方に近づいて行くのであつた。僕は小娘の顏を見た。小娘と弟らしい子は僕を見て笑つた。僕も何氣なしに笑つた。僕は小娘たちの姿が群衆のなかに隱れてしまふまで見送つてゐた。僕は淚が出るほど嬉しかつた。

M君。こゝの群衆のなかでは、僕は故鄕にゐるよりも、溫かい心や、溫かい微笑や、溫かい凝視を見出すことができる。

僕は銀貨一枚を投げ出して萬燈を買つた。僕は子供たちのなかにまじつて走つた。子供たちは決して僕を異邦人扱ひはしなかつた。

一つの萬燈を持つといふことは、こゝでは無邪氣な庶民の一人たることを表象することになるのである。

彼等が笑ふ時、僕も笑つた。僕が叫ぶ時、彼等も叫んだ。僕等は五月の太陽の光りを浴びつゝ街から街を駈けまはつた。男も女も一樣に心から幸福を感じてゐるやうに思はれた。

M君。故鄕を思ふ時、僕の心は暗くされる。けれども祭りのシーズンがつゞく間、僕は異鄕の町の人たちと一緒に笑ひ、醉ひ、踊ることができるだらうと思ふ。

×

M君。一坪の庭をも持たぬ僕の借家の窓からも五月の空が見える。可憐な木瓜の花が散り、棗の葉が輝くやうになつた。僕の窓から見るすべての空も、自然も僕に與へられてゐる。僕は一坪の土地をも所有してゐないが故に、空を見、

郊外の樹立を見、夜の星を眺めてゐる。僕は何物をも持たぬ僕の生活を感謝する。
去年の夏祭りまでは僕は毎朝自分の軒に花と提灯を提げただけであつたが、今年は前の家の老人たちも遠慮なしに、僕の助けを借るやうになつた。僕は踏臺を運んでは前の家の提灯と花を軒に飾つてやつた。何でもたい少かな勞力を人のためにさゝげることによつて、僕の心はひどく明るくされた。
溝のなかに落ちた豚を抱き上げてやつたアブラハム・リンカーンの話を思ひ出すことに、僕は傲慢な自分自身を責めないでは居れない。僕等は道を歩む時、僕等の手を貸してやらなければならぬ餘りに多くの出來事を見出す。しかし僕等は比較的冷淡である。
「彼等農民のなかに眞實の魂が生きてゐる」といふことはロシヤばかりの事實ではない。何れの國に行つても貧しい社會の者ほど眞實の魂を持つてゐる。無智な階級ほど僞はれない魂の香を持つてゐる。
泥濘のなかにめりこむでゐる荷車を助くるものは何時も彼等である。心から人の苦痛を聽くことのできるのも彼等である。子供のやうに喜怒哀樂を僞りなく顏に現はすのも彼等である。
彼等は大きな赤ん坊である。
世界は大きな赤ん坊を要求してゐる。ブレーンのみを持つた人間によつて支配せらるゝ文明は、人間の魂を涸らしてゐる。人間の魂はハートによつてのみはぐくまれる。
僕等はブレーンによつて編み上げられた文明の殼を壞らなければならぬ。
僕等は自然的に人間のハートから生まれ出た文化を見出さなければならぬ。
宗敎も敎育もあらゆる社會制度も悉く赤ん坊のハートから、ひとりでに生まれたものでなければならぬ。

濁つた河

梅雨は明日からはいるといふことだが、今日は朝から梅雨らしい雨が降つてゐる。午後になつて雲も途切れ、雨も止んだので、それでも傘だけは準備して、荒川の方へ出かけて行く。千住行の電車は割合にすいてゐる。雨の日の人人の顔にはかなり困憊の色が見られる。車掌も凭りかゝつたまゝ眠つてゐれば、二三の客も眠りこけてゐる。都會の町外れといふやうな氣分がする。私の隣に坐つてゐた十一二の少年の黒い瞳がひどく私の注意を惹いたので私はぢつと少年のあどけない顔を見つめてゐる。少年は左の手をすつかり繃帶してゐる。少年は繃帶を外して、更に卷き直すのであつたが、幾度やり直しても結ぶことができない。

先つきから興味を持つて見てゐた私は、むしろ少年が繃帶を結ぶことができないやうにと心のうちで望んでゐた。私は「坊つちやん、僕が結んで上げませう」と言つた。少年は素直に手を私の前に出した。私はかなり手際良く繃帶を結んでやつた。少年は麥藁帽を取つて頭を下げた。私の心は急に明るくなつた。私はこの電車がもつともつと長くつゞけば宜いにと思つた。繃帶を結んでやつて、二つ目の停留場が千住大橋の終點であつた。少年は川に沿うて左の方にかくれてしまつた。

大橋の下には一錢蒸汽が今着いたばかりと見えて、ぞろ／＼と船橋の上を人々が岸の上へ歩いて來る。私はだらだら坂を下つて船橋の方へ小走りに走つて行く。

船にはいつて見ると、私より先に五十年配の男と二十前後の女だけが、隅の方に坐つてゐる。永代が何うだの、木場が何うだのといふやうな會話がこの男女の間に交はされてゐる。「カラマゾフ兄弟」のなかのグリュシエンカを想ひ

出す。あれは「たゞのロンヤの娘」であつた。今私たちの古ぼけた船室の隅に腰を卸してゐる女は「たゞの葛飾あたりの娘」であらう。無論處女ではない。そこいらの曖昧屋にでもつとめてゐた女らしい。それが鞍替へをして深川あたりの酒場にでも賣られて行くやうにも思はれる。しかし、その顔の何處かにはまだ、生れたまゝの愛すべき粗野なお人善なところがある。薄鼠に汚れた足袋を脱いで丹念に土を揉み落としてゐる手つきなどにも、生な田舍娘らしいところがのこつてゐる。

「こゝから何れくらゐかゝります？」

女は酒場の主人らしい男にたづねる。

「さうさなあ……まだ一時間半はかゝるだらう。」

男は火を點けた煙管を女にわたしながら應へる。女は所在なさゝうに煙草の煙の行方を見つめてゐる。「着物が汚れては……」と思つたかして、羽織を大事に疊んで、丸つこく肥つた膝の上に乘せる。男はいつの間にか横になつて眠つてゐる。

「船はまだ出ないのか知ら？」と思つて船の男を見ると、船の男も仰向になつて腰掛の上に長くなつて眠つてゐる。

私は水の面を見つめる。水は濁つてゐる。上げ潮と見えて、藻草などが小臺の渡の方へ追はれながら川を上つて行く。思ひ出したやうにあちこちで靜かに渦が卷く。

潮時を待つてゐた船が、潮に乘つて上流へ上流へと走る。柴を積んだ船、材木を積んだ船、藁を積んだ船、塵芥を積んだ船が後から後からと續く。大橋の下をくゞる時、帆を倒したのが、橋を出ると直ぐ檣を立て直して帆を捲き上げる。帆を捲き上げるせみのきり／＼と軋る音が、寂しい靜かな千鳥の聲などを聯想させる。

帆には、入營を祝つた折の幟の古びたのを繼ぎ合はせたのや、芝居の幕などで作つたものもある。市川九藏などゝ

いふ役者の名が破けかゝつた帆にはつきりと讀まれるのもある。
大抵の船には夫婦の外に二三人の子供や、生まれて間もないやうな嬰兒などが見える。女は甲斐々々しく、男のやうな股引などを穿いて櫓を押してゐる。水の上に生まれ、水の上に生き、水の上に死んで行くであらう彼等の運命を考へてゐると、濁つた水の上に漂うてゐる藻草を見るやうな儚い感じも湧く。
小山のやうに積んだ藁の上に立つてゐる二人の小ひさな子供は、爪立ちして大橋の上を見てゐる。そこには火葬場に送られて行く柩や香華が雨空の下を、靑々と繁つた蘆の多い村の方へ急いでゐる。

×

また霧のやうな雨が一面の河面をつゝみ初めた。流れて行く船の上では一本の破けた番傘や、一枚の荒莚などにくるまるやうにして、二三人の子供たちがしやがんだまゝ、寒さうに水の面を見つめてゐる。積み重ねた船荷の間から少かに首を突き出してゐる小娘もゐる。
「面梶！」などゝ可憐な子供の聲が聞える。聲の主は果實を齧じりながら帆檣の蔭に立つてゐる。
向ふ岸の煙突も、やがては少しかけはなれた船の帆までが雨に煙つて、恰度紗一重隔てゝ見るやうに見える。窓の硝子を打つ雨の音が滅入るやうな單調なトーンを繰りかへす。
「あゝ……」と二三度たいくつさうに欠をしてゐた女は、窓の硝子に額をくつゝけたまゝ水の面を見つめてゐたが、しまひには何か低い聲で唄ひ出した。唄のリズムが途切れ〲に傳はつて來る。濁つた流れの底から湧いて來る泡沫が、ぱつと明るく光つて、やがて消えて行く刹那にする聲のやうに、淡い感傷的な感じを起させる。
「ばかにゆつくりしてゐやがる！」私が氣付いて聲のした方を振りかへつて見た時、そこには橋向ふの靑物市場の男が腰を卸して、幾枚もの附木を調べてゐるのであつた。

赤ん坊を背負つたおかみさんが雨に濡れながら、はいつて來て間もなく船は辛つと動き出した。五人の男女とたゞ一人の赤ん坊を乘せて……。

雨が止んで、河の面はまた明るくなつた。青く輝いた蘆の葉が、撫でゝ見たいと思ふほど滑かな曲線を描いた幾つもの小丘を兩岸に造つてゐる。蘆の間に、もやはれた船からは、あか／＼と七輪の火が見え、青白い煙が低く蘆の葉を這ひながら流れてゐる。紫陽花や菖蒲などであらう！　岸の小ひさな藪の蔭に白い花がほの見えてゐるのも寂しい。

何時の春であつたか、それは晩春のころであつたが、私はやはりこの流れの上で旅から旅を歩く、二人の三味線彈きの女と、一人の舞扇を持つた小娘と乘り合はせたことがあつた。小娘は船のなかで踊つた。扇の繪の色が褪せてゐたことや、友禪の振袖が垢染みてゐたことを私は今も記憶してゐる。

流れ流れて行く不遇な女たちが、嘗て、そして今日、更に明日、この濁つた河の面を浮草のやうに流れて行くことであらう。五位鷺が高い雨空を南の方に飛んで行つた他には、今日は鳥の影一つ見えない。

鐘ケ淵では船の故障が起つたといふのでまた大分長く待たせられた。

綾瀨の土堤の上に建てられた白い敎會堂も今ではこの川の岸邊をかざる點景としてなくてはならぬものとなつた。更に鐘ケ淵の牢獄のやうな赤い建物も、それと向ひ合つた岸のあの黑ずんだ瓦斯の高いタンクも、絕えず吐き出されてゐる毒々しい煙も、今では却つて、近代の大都會のあわたゞしい生活の底を貫いてゐる一脈の疲勞や、寂寞を、聯想させる詩趣を帶びたものとしてなくてはならぬものとなつた。

あの古城のやうな高い塀のなかに、何うしても私は機械文明の活動を聯想することはできない。若い女工の自由を奪つたあの恐ろしい塀には、古城の廢墟を想はせるやうな蔦が這つてゐるではないか。川に臨んだ病室の窓からは何時も、蒼白い顏の女工たちが、やる瀨ない眼を瞠いて流るゝともなく流るゝ水の上を見つめてゐるではないか。

毒々しい煙を吐く川添ひの工場の何處に生きた文明の活動が聯想されやう。赤錆びた鐵板、傾きかゝつた工場の屋根、さらに倦怠さうに吐き出されて行く煙、渚に立つて船の方を見てゐる痩せこけた少年職工……。

白鬚に着いた。新しい客がどか〳〵とはいつて來る。私の聯想はすつかり壞されてしまふ。

燭が水の上に、水の岸にちらほらとまたゝき始める。千住で一緒に乘つた男はまだ眠つてゐる。女だけが膝の上の羽織の小ひさな皺などを丹念にのばしてゐる。

「お盆になつたら新しい帽子を買つてやる！」

六十ばかりの貧しい老人が、孫らしい男の子に話してゐる。男の子は古ぼけた麥藁帽を手にしながら老人の顏を見つめてゐる。「お盆ッ？」少年はさもうれしさうに訊ねた。

町の燭はだん〳〵明るくなつて行く。幾條も、幾條もの靑い、紅い光りの脚が、暗い隅田川の左右に搖れてゐる。

榛名小學の先生へ

H兄。あなたは今、榛名の麓に二十人の少年を前にして、最も美しい生活を送つて居られることゝ思ひます。あなたは私には初見の人でした。かねぐ人に逢ふことを億劫がつて居る私は、あなたの名刺が通された時は、いつもと同じやうに輕い不快なショックを感ぜずには居れませんでした。實際私には人と會ふことはかなりの苦痛だからです。

しかし二階に上つて行つて、あなたを初めて見ました時、私は自分の豫想がすつかり良い方へ裏切られたことを嬉しく思ひました。

あなたは直ぐ、私にとつて忘れることのできない小學時代の懷かしい私の先生を聯想させました。あなたは都會の敎育家たちに滅多に見ることのできない素樸と摯純と熱誠とを持つておいでゝした。あなたの聲は曠野そのものゝなかゝら生まれて來る自然の溫かさと、寛容さを持つて居ました。

私は五六分話してゐる間に、あなたが好きになりました。あなたは榛名山上の湖水の話をしました。冬枯れの赤城山のことを話しました。利根の上流烏川の話をしました。天才的な少女の話をしました。最劣等の兒童の啓發について實驗談をしました。それはみな私にとつて新しい興味を喚び起すものでありました。

あなたはぽつりぐ話しました。あなたは雄辯ではありませんでした。しかしあなたは榛名山麓の自然に養はれた素直な魂を、私の前に見せてくれました。あなたは餘り語らないでゐてスキートな感じを心ゆくまで人の魂に注ぎ込むことのできる人でした。

私はあなたと對坐してゐる間に、西の方へ放浪してゐた時代の國木田獨歩を想ひ出しました。獨歩の人間的な藝術を拵へたものは恐らく彼が放浪時代に於ける小ひさな村塾の教師生活ではなかつたかと思はれるのです。無論教師生活そのものが直に、彼の藝術を拵へたとは思ひません。けれどもあの素樸にして信賴心の厚い村童に對した刹那に、都會生活に荒んでゐた獨歩の魂は何れほど溫められ、ふくよかにせられたか知れないと思ひます。

詩人の言葉を藉るまでもなく、人間の魂を損はれない少年ほど美しいものはありません。無論少年にも虛僞、打算、嫉妬などの罪惡もあります。けれども少年の罪惡そのものは、實は可憐なる魂の美花であることを忘れてはなりませぬ。少年の罪惡は罪惡として評價するには、餘りに美しく、餘りに率直で、ナイーヴであります。或る詩人はすべての人間の罪惡を花として歎美します。が、この見方には少くとも耽美的な惡魔的な要素が含まれて居ます。けれども少年の罪惡は、或ひは少年の缺點は文字通りに美しい人間の魂の花であります。

少年の怒ること、泣くこと、僞ること、憎むこと、すべてがさながらに最も人間的な魂の香を持つて居ります。よし「人は性善なり」といふ言葉には疑ひがあるとしても、少くとも少年の間にはこの定義は是認せられなければならないと思ひます。

H兄。私は獨歩の村塾先生時代を羨ましいと思ひます。同時にあなたの生活を羨ましいと思ひます。愛すべき少年よ。愛すべき自然よ。あなたはその二つを惠まれて居ります。

×

H兄。人生に對して疑惑をのみ抱いてゐる人々の生活ほど不幸な生活はありません。彼等は性格的に破産してゐます。

私はあなたの幸福に輝いた眼を記憶してゐます。あなたは力強く「少年の愛は巨萬の金にも替へ難い」と言ひまし

た。私はあなたのその教育に對する信仰を羨ましいと思ひます。

自分の職業に對する信念のぐらつき始めたものほど不幸なものはありません。私は嘗ては、恰度あなたと同じやうに、教壇の上の信仰を持つてゐました。しかしそれ等の信仰は現在の私からは大分失はれてしまひました。

無論私は若い人々の師に對する信頼の豫想外に大きいことを知つてゐます。寧ろ信頼の過大なのを恐れます。けれども、あのキリストの偉大な人格を以てしても尙ほ、イスカリオテのユダを弟子のうちに持つてゐた悲しさを考へると、轉た寂寥に耐へないことがあります。

森とした教室のなかで、誰かゞ微かな笑ひ聲を洩らしたゞけでも、教壇の上の私は心を暗くされてしまふのです。私は人と會ふことを恐れると同様に、教壇の上に立つことを非常に恐れるやうになりました。

H兄。私はあなたが、すべてを抛つて教壇に立つて居られることのできる幸福を羨まずには居れません。

私はあなたが中等教員、更に大學教授以上の研究をされることを賛成はします。けれどもあなたが、その自然とその少年の世界を捨てられないことを心から祈ります。

×

荒削りの板の床の上に列べられた二十基足らずの机、色も剝げてしまつたたゞ一枚の塗板、狹い教室の隅に切られてゐる爐、自在鍵につるされた煤けた鐵瓶、たゞ三つの硝子窓……私の眼には山の麓の寺小屋式の學校が映つてゐます。

H兄。あなたはその學校を捨てゝはならぬ。世界の何處に、あなたの魂に向つてそれほど強く結びついてゐる少年の魂がありませう。

キリストは最後に一人の弟子をも持たなかつた。あなたは今あなたの魂に向つて絶えず動いてゐる二十人の少年を

持つてゐます。

榛名山の麓に、秋の日の光りを浴びた荒削りの小舍。そこに二十人の少年の魂が、一人の若い敎師の魂に向つて夜も晝も結びついてゐることを想像しただけでも、人生は惠まれたやうな氣がしてなりませぬ。

H兄。收穫の秋が來ました。あなたの小ひさな學校をめぐつて小鳥が鳴いてゐるでせう。雲が高く霧のやうに飛んで行くこともありませう。私は、秋の大空の下で、草の香を嗅ぎながら、少年の信愛と自然の慈愛のなかにつゝまれて、靜觀しつゝあるあなたを想像してゐます。

冬のうた

初冬の朝を駒鳥の聲して影は見えず。
寂しさは灰色の雲に入りて、我が胸にかへり來。
木瓜の實の今朝も淋しく電線の下に戰けり。
鐵鎚の音、鴉の聲、汽笛の響、すべてのもの今朝は美しく、悲し。

妻を亡へる夫、木瓜の下に立ちて落葉を掃けり。
蒼白き男の顔、雲を見ば悲しかるべし。
子に捨てられし老媼初霜を踏みて市に出で行く。
髮の薄く、影の薄き、落葉の道を行く跫音の寂しさ。
太陽はやゝに靜かなる朝の街を照らせり。

不圖俤の扉に立つ日あり。
雲を見てあればやがて滅えゆく。
寂しからず、悲しからず、たゞわけもなき涙の湧く。
礫を蹴ればからくと虛なる聲す。

少女は弱し、弱ければ愛し。
病みてあれば黒髪の寂し。
おとなしく病みてある少女の悲しさ。
日は夜につぎて、恐ろしき運命をはこぶ。
過去を知らず、未來を知らず、たゞ生くることのうれしさに生きし少女の病みてあるは悲し。
唇よ、瞳よ、柔き手よ、生くることのよろこびに戰きしいのちよ！
病みてあれば思ふことなく涙しながる。

野を歩みし日を想ふ。
街を歩みし夜を懷ふ。
我一人歩めり。悲しからず、呪はしからず、たゞわけもなく寂し。
夢の日は過ぎぬ。たゞ醒めやらぬ我が愚さの悲し。

落日の前に冬の野を歩みつゝあり。
故鄕を忘れたる魂の冷たさ。
疎なる森の下に燭あり、家あり、男あり、女あるべし。
大地は寒し。大空は暗し。
たゞ一人野を歩む我が心のみさらに寂し。

素直な心

私は割合によく病氣をする。實際無病息災の人がうらやましくてならぬ。健康を増すことについても相當に注意をはらつてゐるつもりであるが何うも病氣がちで困る。

たゞしかし病氣から與へらるゝものについては折々感謝せずには居れないものがある。

度々の病氣からあたへらるゝ最も强い感謝は生きてゐるといふことをしみ〴〵と味はゝされることである。

私は、人生そのものに對しては、一面に於いてかなり絶望的な考へを抱くこともある。けれどもほんたうに心の底から生きてゐるといふよろこびを感ずる折がある。これは誰でも病後には經驗する普通の事であるにちがひないが、私には普通のことであるとして見のがしてしまふことはできないほど、その刹那の生きてゐるよろこびは深くもあり、眞實味もある。

病氣にかゝつた際にも、私は生きてゐたいといふことを心からねがふこともあるが、病氣にかゝつてゐる間には、一方にはむしろ、それと反對な生を諦める考へがかなり濃く動いてゐるやうに思ふ。死を恐れまいとする考へが私の心のうちに生まれて來るやうに思ふ。

健康であればあるほど、生きてゐることをよろこび、感謝する心は强いやうに想はれる。

かねてあわたゞしい生活を送つてゐる人であるならば、病氣の後の數日の落ち着いた氣分に對して感謝しない人はないであらうと思ふ。故綱島梁川氏が「中宵枯坐」の裡に一種言ふべからざる靈感に接して無限の喜びを感じたといふのも畢竟、この心の境であつたにちがひない。

「悲しみある者は幸なり」と言つたキリストの言葉がしみ〴〵と味はゝれるのも病後の數日である。

純一な自分の姿を見ることのできるのも、大抵病後の數日であるやうな氣がする。

かねて、色々な人々の書を讀み、色々な人々の說を聽いてゐる私たちは、何うかすると自分のものになつてゐない說なり、主義なりを自分のものと信じてゐる場合がある。したがつて自分の主義として、說として人に語つてゐながらも、どうかすると自分の心とぴつたりそぐはぬやうなことがないとは言へぬ。

「汝の本を捨てよ」と言つた哲學者の言葉がほんたうに感じられるのも病後の數日である。

「嬰兒の如くあれ」と言つたキリストの言葉をほんたうに理解することのできるのも病後の數日である。

寢床から起き上つた私たちは、たゞ生きてゐるといふよろこびの他には、何の雜念も持つてゐない。私たち自身が感ずるものはまじりつ氣のない私たちの生な心の僞らぬよろこびや感謝や思索である。恰もそれは母の乳を見出した嬰兒がひたぶるに母の乳を目がけて抱きついて行くほどな純一な人間的な欲求や、あこがれから生まれた生活感激である。

恰もそれは黑い處女地から芽生えた嫩草が春の太陽を目がけて、まつしぐらに伸びあがつて行かうとするやうな素直な心の呼吸である。

×

聖壇の前に立つた時、何を語り、何を祈るべきかを想ひわづらふなかれと敎へたのはキリストであつた。

私たちが素直な自分自身に還つた時、そこには必ず私たちが語るべきもの、祈らなければならぬものゝ相が明かにされるにちがひない。創造といふことは素直な自分自身の言葉なり祈りなりを見出すことでなければならぬ。

ほんたうに自分自身を所有するといふことが、私たちの生活の究竟の目あてゞなければならぬ。

たとへそれが大きいにせよ、小ひさいにせよ、純一な自分自身を持つといふことは、私たちにとつて、この上もない强味であり、矜恃である。

「野の百合を見よ……空の鳥を見よ……」と言つたのはキリストであつた。

野の百合はソロモンの榮華にもまさつた眞實の生活を送つたのであつた。野の百合は少くともほんたうな自分自身の僞らぬ要求にしたがつて伸び、あるがまゝの、自分自身をあるがまゝに生かして行つた。ほんたうに野の百合は、どこまでも野の百合のすべてを生き、微塵も野の百合以外のものとして生きなかつた。

ほんたうな自分自身の生活を見出すことのできなかつた王者の生活よりも、野の百合の生活は貴ぶべきものであつた。

×

できるだけ素直に人生を受け容れ、自然を受け容るゝといふことが、藝術家にとつても、すべての人々にとつても第一の事である。嬰兒のみ天國に入ることができると言つたキリストの言葉は、藝術家の人生の見方に於いても、藝術創造の場合に於いても第一義的なものである。

偉大なる人物、もしくば大なる天才といふことは最も素直な心の所有者といふことではないか。キリスト、釋迦、シェークスピヤ、ホイットマン、エマアソン、芭蕉、近松といふやうな大きな宗教家や藝術家を想ふとき一層この感を深くさせられる。

天才は、或ひは偉人は、普通の人間から最もかけ離れた天分なり、氣質なりを持つてゐるものであるかのやうに想像され易い。無論第二流の天才藝術家にはこのやうな種類の人々も歷史上に見出すことができる。けれども眞の意味で、一世紀に一人か或ひは數世紀に一人生まれて來るといふやうな大天才は、最も平凡人らしい

人間であつた。最も人間らしい人間であつた。

藝術に志す靑年にとつて最も戒めなければならぬことは、所謂天才藝術家を目あてとして藝術生活に入らうとすることである。

私たちは何處までも人間らしい人間の聲を聽きたがつてゐるのである。それは千年二千年を通じてかはることのない眞人間の聲でなければならぬ。沙翁の聲、近松の聲、芭蕉の聲がそれであつた。彼等は最も人間らしい人間であり、最も素直に人間を、或ひは自然を取り容るゝことができたが故に、彼等の藝術には何の飾りもない、生地のまゝの眞人間の聲が生きてゐるのである。

眞人間の聲を聽かせらるゝ時、私たちははじめて私たちの生活の滋味と深味とを味ふことができる。人間生活に對する讃美や、感謝の念も湧いて來る。

素直に人生を受け容るゝといふことは、最も深く人生を愛することになる。

誰よりも先きに人間を愛し、人生を愛する人でなければ藝術家となる資格はない。無論私たちは人生を廻避し、人生を冷眼視する天才を知つてゐる。けれどもそのやうな藝術家の廻避や冷眼視の底には、尙ほ平面的な人道主義者たちの持つことのできぬほどな、人生に對する强い執着心が纏ひついてゐることを見のがしてはならぬ。

無理にも人々とちがつた特色なり、無理にも他との差別を作り出さんがために、素直な人生の見方をすることができぬのは藝術家にとつて、最も悲しむべき邪道に陷つたものであると言はなければならぬ。

私たちが要求してゐるものは素直な上にも素直な人間そのものゝ聲や、脈搏を聽かんことである。

沙翁の作品、ミケランゼロの作品、近松の作品が偉大であればあるほど、それ等は素直な人間の姿を描き、僞りない人間の心を、素直な人間性そのものを語つてゐるものである。

×

愛といふ言葉を、直ぐに人類といふものに結びつけなければ、愛は完きものでないかのやうに考へてゐる人がある。そのやうな愛に限つて僞善的な、自負的な、ひとりよがりになり易い。「汝等祈る時はたゞ一人にて祈れ」とキリストは言つたが、愛も靜かなるところに於いてのみ愛の深さ、切實さ、眞實さを味ふことができる。愛もたゞ一人である時、最も強く、最も純であるべき筈だと思ふ。

愛といふ言葉は直ぐに對他的に考へ易い。しかし愛は對他的な力といふよりは、むしろひとりでに自分のうちに燃ゆる個性の香である。或ひは魂の香である。

愛を與へるといふ言葉ほど僞善的な感じを抱かせるものはない。

愛はあたへるものでなくて、一等素直な自分を、一等素直に生かして行く、または伸ばして行く生活感激そのものである。草が芽を伸ばして行く刹那に、草が根を張つて行く刹那に、小鳥が歌ふ刹那に感ずる生活感激は愛である。

人がたゞ一人でゐる時、何の虚僞も、見せかけもなく、ほんたうな彼自身を靜かに內省する刹那に、彼自身のうちに泉のやうに溢れて來る生活感激は愛でなければならぬ。自分自身のうちに至純な生活感激が強く溢るれば溢るゝほどその人の愛は純なものであり、強いものである。そのやうな愛の所有者が他人に對する時、その人の愛に他の人の心のうちに愛を目覺ます電波的な力となるにちがひない。

その人の眼、その人の顏、その人の言葉、更に一層その人の沈默は、周圍の人々に對して愛を目ざます電波的の力を持つてゐなければほんたうな愛ではない。

×

愛は人間の世界に天國を見出すことである。一人の戀人を眞實に愛することのできる人はたしかに一つの天國を見

出すことができるにちがひない。

個々の人間の魂には、はかり知れぬ深さ、神祕さをたゝへた天國が潛んでゐる。個々の人間の魂の底には無限そのものゝ脈搏や呼吸がさながらに動いてゐる。

プロメシウスは天上の炎を盜まんが爲に天に昇つて行つた。ドストイエフスキイは天の炎を見出さんがために貧しき女ソニヤの胸のなかに、賤しい女グリユセンカのなかにはいつて行つた。

愛は貧しい人間と貧しい人間、弱い人間と弱い人間との間に見出さるゝ天界の法悅である。感激である。實感である。

近松の心中物のなかに見出さるゝ男と女との道行きには何時も、未來の樂土が彼岸の眞實境として描かれてゐる。けれども道行きを急ぐ刹那の男女の心のうちに既に至純な樂土の實感は生まれてゐる。死ぬほどに人を愛する心のうちにのみ、無限そのものゝよろこびなり、智慧なり、悟りなり、大悲なりが如實に味覺せられるであらう。

×

「人に人をさばく權があるか？」と言つたトルストイの言葉は、私達の日常生活に向つと當てはめて考へなければならぬ。

私たちは人を批評する時、その人の缺點を餘りに多く見出し易い。しかも更に一層細かく考察して見たならば、それは決してその人の缺點でなく、却つて美點であることも少くない。

私たちは恰度裁判官が罪人に對して比較的簡單に黑白を決めてしまふのと同じやうなやりかたで、大ざつぱに一個の人間の價値や、人となりを決めてしまひたがる傾がある。

このやうなやり方は決して正しい人の見方ではない。宗教的に言へば、これは神の殿堂を汚すものである。

奥行きのわからないほど深い人間を、たゞその外部にあらはれて來る折々の閃きだけによつて批判するくらゐ恐ろしいことはない。このやうなあわたゞしい批判は、人間を見ないで何時も幾つかの死んだ型(タイプ)のなかに、生きた人間を押し込めようとするものである。千人の人間が千人それ〴〵にちがつた缺點と同時に、ちがつた美點を持つてゐる筈である。即ち個人々々の味、個人々々の魂の香を持つてゐる筈である。

愛は個々の人間の奥底から、その個々獨自の魂の味や香を掴み出すだけの忍耐を持つてゐなければならぬ。

×

ツルゲーネフの散文詩のなかに、乞丐に錢を乞はれたかれが、生憎ポケットに一文の錢も持たなかつたので、乞丐の手を握つて「友よ！」と呼んだところがある。あの作者の心持ちほどしみ〴〵と尊く思はせられるものはない。あの刹那に二人の間には美しい天國が生まれたにちがひない。

あの刹那には兩者の何れにも與へるとか與へらるゝとかいふやうな意識はなかつたであらう。兩者の心に動いてゐたものは恐らく「何(ど)うも濟(す)まないが！」といふやうな謙虚な心と心との結び付きであつたであらう。

物を與へることによつて生まるゝ愛は大抵不純なものに陷り易い。それは救ふ者をも、救はるゝ者をも汚すことが多い。

涙を分つことのできる愛、魂を打(ぶ)ち出してかゝることのできる盲目的な愛のうちにほんたうな人間の姿(すがた)が見出さるる。

愛を說く說敎師の愛、職業的勞働運動家の愛には、どうかすると砂でも嚙ませられるやうな不快さが混(まじ)つてゐることが多い。

今日、イエッツのものを讀んだ。シングが死の床に就いてからイエッツに向つて、"Oh what a waste of Time" と言つて、死を悲しんで、もがいたことがちよつとほのめかしてあつた。

死ほど恐ろしいものはない。シングを尚少し長く生かして置きたかつたと、はたの人にさへ思はれたのだから、若いシング自身にとつてはそれは何んなにか悲しいことであつたらう。

ほんたうに死ぬことは恐ろしい。健康が欲しい。

自分の魂のために

世間が何のやうな藝術を要求してゐるかといふことは私自身にとつては問題とはならない。私自身が果して何のやうな藝術を要求してゐるかといふことが第一の問題である。

ほんたうに自分を見出すといふこと、ほんたうに人間そのものを見出すといふこと、これは自然主義の根本的な試みであつたにちがひない。けれども今までの自然主義では、一方に片寄り過ぎた人生のみを見て來たやうな傾向が多い。もつと人間らしい人間の姿を見出して、その人間らしい人間の魂なり、生命なりを伸びるだけ素直に伸びさして行かうとするのが私たちの今日の努力であるやうに思はれる。そしてこの新しい仕事は眞實に人間の魂、生命そのものを摑んだ人でなければ成就することはできない筈である。

人間の魂を摑むといふことは、既に出來上つてゐる魂の相なり、深さなり、廣さなりを見出すといふことではない。無論人間の魂には無限の深さや廣さを持つことのできる潜在の力があるにちがひない。しかしそれはたゞ蓄積せられた可能力に過ぎない。潜在する無限な人間力の開拓、整理、更に人間力の伸展、新生に對して絶えず全我的な創造の試みを繰り返して行くことによりて、人間の魂は深められ、廣められ、新しくせられて行くであらう。人間そのものの魂を摑むといふことは、畢竟、魂そのものゝ複雜な變化を、進化を、或ひは深められ、新しくせらるゝ魂の脈搏を絶えず實感しつゝあるといふ意味である。魂の生長を實感することのできる人のみが魂の創造を企つる。

藝術の尊いところは、絶えず魂を深め行くところにある。絶えず人間性そのものを大きくして行くところにある。新しくして行くところにある。魂の更に深い相が發見せられない時、私たちの藝術に倦怠が生まれる。魂の更に新し

い力が創造せられない時、藝術はコンヹンショナルなものとなつて來る。
藝術家にとつて最も恐ろしいことは、世間の要求を知らないことでなくて、自分自身の魂の相を見失ふことである。
魂の深所を更に深くして行く創造の苦惱を忘るゝ事である。
藝術はいつも藝術家自身の魂のために存在するものでなければならぬ。
新しい藝術を造り出すといふことは、新しい魂を見出すといふことである。更に新しい魂を、更に新しい人間性を創造するといふことである。
新しい藝術は人生觀照の態度を變ることによりて見出さるゝものではない。新しい人間の魂の深さを、廣さを、創造したる天才によりてのみ新しい藝術は生まれる。

藝術にひそむ新生の力

私は學究者を尊敬する。たゞしかしかれが眞人間の心情を持つてゐる場合に。

また私は藝術家を尊敬する。教育家、宗教家を尊敬する。たゞしかしかれ等が眞人間の心情と感情とを豐かに持つてゐる場合に。

私は農夫を尊敬する。工夫を尊敬する。兵士を尊敬する。たゞしかし、かれ等が眞人間の言葉を語り、眞人間の涙を持つてゐる場合に。

名譽のために、打算的な考へのために小ざかしき智慧を働かすところの學究を排する。教育家や宗教家を排する。小作人を、兵士を。

人間であるの光榮は學究たるが故に存在するのではない。宗教家たり、教育家たるが故にも存在するのではない。人間であるの光榮は、私たちが眞人間であり、眞人間の心を持ち、眞人間の涙を持つところに存在する。また私たちが學究の徒となり、藝術家となり、宗教家となり、教育家となるのも、實は眞人間の心を掬み、眞人間らしい生活を營まんがために他ならぬ。

眞人間の生活を忘れたる學究、藝術、宗教、教育、農業すべては私たちにとつて無意義である。

眞人間はつねに嬰兒の心を持つ。嬉しきことに面して笑ひ、悲しきことに面して泣き、不正なることに對して憤る。その泣くことも、笑ふことも、憤ることも眞情そのものゝ發露である。たとへば風に吹かれたる草の葉が搖れるやうに、風に打たれた波が立ち上るやうに、五つの原動に對する五つの反動である。

そこには何の掛け引きもない。何の打算的な考へもない。かれ等にとつては怒ること、泣くこと、笑ふこと、すべてが自然のまゝである。

キリストもさうであつた。釋迦もさうであつたであらう。良寛も白隱もさうであつた。

心の底から大きな聲を絞つて笑ふことのできぬ近代人、心の底から大きな聲を絞つて泣くことのできぬ近代人の生活は決して全き生活ではない。

×

無論久しい間世紀末の病に取り憑かれてゐた近代人の心の底には、まだ〳〵脱けやらぬ灰色の氣分がのこつてゐる。ゴンチャロフの「オブローモフ」はいつも寢床のなかに寢込んでばかりゐて、「いつたい人間といふものは起きて働く必要があるのか？」といふやうな疑問を發してゐるが、寢床から起き上つた人間として私たちはツルゲーネフの「ルウディン」を想ひ出す。

併しルウディンは寢床から起き上つては來たものゝまだ〳〵より多く空想家たることを免れなかつた。今日私たちの社會にはまだオブローモフがあり、ルウディンがあるにちがひない。

更にまたこれから後幾百年の間、チェーホフの「叔父ワーニャ」があるにちがひない。

オブローモフ型の人、ルウディン型の人、ワーニャ型の人は心から大きな聲を出して泣くことも笑ふこともできない人々である。

このやうな種類の人々にとつては大きな聲で泣かぬこと、笑はぬことが自然である。私たち自身まだ餘りに多くのオブローモフを持ち、ルウディンを持つてゐることを悲しむ。

私たちはこのやうな心の弱い、宿命的な性格の人々に對しては心からの同情を寄せないでは居れぬ。

ツルゲーネフもこの種類の人であつたらう。チェーホフもさうであつた。

「どうせ人間は一生もだえ拔いて、しまひには頭を石に打ちつけて死ぬんだ」といふ消極的な考へしか持つことのできなかつたチェーホフにとつては、あの悲しみにも泣くことのできなかつた不幸な人々を描くといふことは自然であつた、眞實であつた。

×

私がこゝにいふところの心の底から笑ふことも、泣くこともできない人々といふのは、チェーホフや、ツルゲーネフとはちがつた意味の人々である。

それは今日、多くの社會に見る餘りに打算的な、小ざかしい、目から鼻に拔けるやうな小惡魔的な人々を指してゐるのである。

文明人の弊害、都會人の弊害、現代人の弊害の最も大なるものは、ぼろを出さないといふことである。お上手に纒まりをつけるといふことである。手際善く物を作り上げるといふことである。

かれ等の特色は巧に纒まりをつけるといふことである。

しかしこゝに大きなものゝ缺乏がある。

即ち氣魄の弱いことである。原始人的な野性力のないことである。

かれ等は旣に大きな聲で笑ひ、泣き怒るだけの氣魄さへ失つてしまつてゐる。

私たちは力を持たなければならぬ。氣魄を持たなければならぬ。

私たちは物の不完全を恐れてはならぬ。完成者は後から來る。私たちはいつも先驅者でなければならぬ。

私たちはミケランゼロにならなければならぬ。レオナルド・ダ・ヸンチにならなければならぬ。

人生には、人類の歴史には完成といふことはない筈だ。

藝術にも完成はない筈だ。一つの藝術は永遠に伸びんとする力の一歩の歩みである。小ひさく歩いて、それで止まつてはならぬ。大きく跨いで、いつも舊き物を破つて行かなければならぬ。

小ひさな藝術家は一つの破綻もない藝術を作り上げようとする。大きな藝術家はいつもたゞ自分の無限の氣魄を無限に伸びひろがらせることのみを考へる。小ひさな破綻や、手際のまづさなどを考へてゐる暇はない。

大きな藝術家が盛らんとするところのものは、大きな悲しみであり、大きな憤りであり、大きな笑である。そこには色々な破綻やひゞれがあるであらう。しかしそこには大きな眞人間的な魂の響がある。

小ひさな藝術家は、小ひさな、品のいゝ笑ひ方を藝術に盛る。品の宜い、おつくりをした上流婦人の泣き聲を藝術に盛る。だから、その藝術には品の宜い纏まりがある。

しかし、そこには人をどん底から動かすだけの氣魄がない。人を心の底から泣かせ、笑はせ、憤らせる力がない。

大きな赤ん坊生まれよ。

今日の宗教界にも教育界にも藝術界にも大きな赤ん坊が欲しい。

南國の町と島

長崎の町は伊太利の港に似てゐると言つた人があつた。
恐らくさうであらう。
山と山の懷にいだかれた南國の港町。
山には城のやうな石垣を積み上げたお寺が多く、それがみんな甃を敷いた道で聯ねられてゐる。
暗い大樟の蔭には古びた山門がある。支那のお寺もあれば、舊教のお寺もある。
長崎は古いお寺の町である。
ローマの七つの丘を想はせるやうな丘から丘の間を甃の道がつらなつて、軒の低い古風な窓からは人懷かしさうに色の白い女たちが南國的な黒い瞳をかゞやかして、街の旅人を見てゐる。
長崎の町はコスモポリタンの町である。
支那人の血を引いた人、ポルチュガルやスペインやオランダやロシヤやイギリスやイタリイや、ほとんどすべての人種の血を引いたやうな人たちが、出島や大波止あたりを歩いてゐる。
支那人と日本人との間には長崎の町では、もう異人さんといふ觀念も失はれてゐるやうに思はれる。

×

オランダの古い繪に見るやうなアーチ型の石の橋、或ひは誰かの繪にあつたダンテがビアトリチェに見とれてゐた川岸のやうな船着場が、長崎の海岸には幾らも見られる。

マニラ還りのアメリカの水兵も長崎の町では無邪氣なヤンキイとなつて騒いでゐる。アメリカ印度人の兵隊も長崎の波止場では大きなパイプを啣へて、子供のやうな顔をして歩いてゐる。
たまには日本の娘に冗談の一つも言つてゐる。しかし長崎の町ではアメリカのやうな恐ろしいリンチはない。
長崎の町はコスモポリタンの天國である。
ゴンドラはないが、水の町には美妓を擁すべき小舟は月の夜毎に、まつ黒な船頭の腕で巧に操られてゐる。
夜は海に沿うた異人さんの酒場でマドロスの唄が聽かれる。
古い教會堂の石段の上では、あやしげな猶太の女が、マンドリンを彈くマドロスの傍に腰かけてゐる。

×

夏から秋にかけて、近在の田舍から草花を賣りに來る女たちは、ローマの郊外からローマにはいつて來るといふ花賣乙女たちを聯想させる。
花は女郎花、蝦夷菊、吾木香、姫百合といつた風な極ありきたりの花である。花には露がまだ眠つてゐる。女たちの紺の手甲、脚絆が目につく。
花賣り女たちの後からは大きな牛がのそ〳〵とやつて來る。牛には肩から首にかけて數十の鈴がつけてある。
牛が歩くたんびに鈴の音ががらん〳〵と涼しい朝風に響いて來る。
首から小ひさな十字架をつるしたクロと呼ばれる舊敎徒たちも見られる。
浦上の奥には何十年か前から、舊敎徒達の寄進の煉瓦で築き上げられてゐた敎會堂が丘の上に建つてゐた。
一年に五寸か一尺ぐらゐづゝ積み上げられて行くので、まだ出來上らないうちに、下の方には蔦がまとひついてゐたが、このごろでは恐らく丘の上に高く聳えてゐることであらう。鐘も響いてゐることであらう。

牛の首の鈴の音に驚いて、クロの教會堂の裏手の青い山を見ると、そこにはかれ等の祖先が幾日かの間、燒かれ、磔にされた記念の十字架が高くそびえてゐる。
コスモポリタンの歡樂の町は、また殉教者のいたましい墓場でもある。

×

長崎の町をめぐる山の草は靑く輝いてゐる。
その靑い夏草の上に十字架が聳え、クロの教會堂のベルが朝にも晝にも夕暮にも響いてゐる。
茂木から長崎の町へはいつて來る峠の茶屋、矢上から來る峠の木蔭、浦上から來る町の蔭、そんなところでは顏色の悪い男たちが西瓜を割つて頬張つてゐる。
恐らく、昔、そこいらはクロの殉教者たちが、槍にかこまれながら刑場の方へ歩いて行つたことであらう。
西瓜を割りながら、長崎の兄しいやまたちは秋の祭のことなどを胸に描いてゐるらしい。

×

恐ろしい朝鮮風が夜晝の分ちなく二三ケ月の間吹き荒んで、幾百尋といふ深い海の上に矗々とそゝり立つた島の山の地肌も疎になるまで、木の葉を吹き落してしまふと、やがて、甦つたやうな靜かな島の春が還つて來る。
まだ冬の荒海の名殘が、北の方へ突き出た岬あたりには遺つてゐて、嶮い岩山を目がけて後から〳〵と三四丈もあるやうな大うねりが頭を擡げて、打つ突かつてゐる、その小山のやうな浪のなかをくゞつて鷗の群の寂しい聲を聽いてゐる間に、既に北から南へ三十五里の間を流れた山の背には柔かな春の光りが、一つ〳〵の草の葉を惠むやうに張つてゐる。
山蘭や風蘭の花が、殆んど年に一度も人間の足跡をとゞめぬ高い山の上に薫つてゐたり、名も知れぬやうな一本一

本の樹がどれもこれも自分等の個性を示すやうに、同じ緑といつてもみんながそれ〴〵に異つた嫩葉の色を輝かして來るのである。多の風が荒いので、山が高くなるにつれて、幹は途中から切つたやうになつて、伸びきれないで、づんぐりむつくりと言つた風な形をしてゐる。

馬醉木に似て、もつと背のひよろ長い木から、南京玉でもつらねたやうな、或ひは銀絲でも垂らしたやうな可憐な花が、山といふ山、谿といふ谿を埋めて咲く。木犀に似て、木犀よりも尙つと薄くて、柔かな葉の間からは黄色な花がこぼれるやうに到るところの山に咲いてゐる。幾曲りにも彎曲した紺青の淵にのぞんで、垂直に突つ立つてゐる岩の上には、山櫻の花が陽に輝きながら競つてゐる。

その頃である。太陽に向いた山と、太陽に背いた山の香や空氣の感じがはつきりと區別されるのは。

波の音が轟々とまるで遠い嵐のやうに、ひつきりなしに聞えてゐる間にでも、私たちはちよつと立ち留まつて暗い谿の方に耳を傾くれば、何の悲しみも、寂しさも知らないやうな鶯の谷渡りなどを幾つとなく聽くことができる。

博多からこの島に來る船の上に鶯商人を見るのもこのごろのことである。

春は何處の世界でゝも早く立ち易い。山の櫻が散つたと思ふころは、島を埋めて海岸の山には薄紅の躑躅が咲く。山の背には草菖蒲の花が咲く。山の背からは東の方には北九州の山脈や平戸島が水天髣髴の間に見える。西の方には一層近く朝鮮の山が煙つて見える。

雲雀の唄を浴びながら、三尺にも足らぬやうな島の小馬に跨つた五人、十人といふ女たちの群が、高原の草を踏みにじつて行くのもこの頃である。

島の人たちの生活はこのころから活動期に入るのである。濱の石屋根の上には網が干されたり、濱いつぱいに高い杭を樹てゝそれに幾段にも綱が張られる。それに毎日幾十萬といふ烏賊が乾される。

烏賊の乾し場が準備せられるころになると、色々な渡り鳥が島をめがけて集まつて來る。燕と殆んど同じころに時鳥の群が海をわたつて來る。時鳥は晝日中でも三羽五羽と群をつくつて漁村の空を鳴きながら飛んで行く。

×

平戸から、松浦、壹岐、博多の沖にかけて初夏の太陽の光りが白い波路をぎら／＼と照らすやうになる。一番烏賊が獲れ出すころになると內地や朝鮮あたりにゐた何萬といふ漁船が、一時に對馬の港々に集まつて來る。佐須那だの佐鄕だの琴だの嚴原だの幾十の小港には、漁期を目あてに內地から流れ込んで來た色の白い女たちが、漁夫對手にあやしげな手つきで三味線を彈いたり、卑猥な唄をうたつたりする。

この女たちのうちには去年この島に渡つて來たことのある女もあれば、初めてこの夏渡つて來た女もある。またかの女たちの對手にする漁夫たちのうちにも、去年來て、今年は來ない男もある。「あの男は北海道に稼ぎに行つた」だの「冬の暴風で到頭歸つて來なくなつた」だのいふやうな話が、荒くれた男と、旅稼ぎの女たちの間に話されることもある。

燕が幾度かこの島を訪れて、また幾度か海をわたつて還つて行く間には、荒くれた男たちも、旅稼ぎの女たちも、墓場さへ持たないやうな死に方をするものもあらう。

×

烏賊釣りの船が追々內地に歸つて行くころには、もう秋風が島と海とをつゝんでしまふ。

青い海が寂しい日光に輝くやうになる。朝鮮の島影が靑くほの見えて來る。島を遠くに眺めたまゝ立ち寄らないで、大陸から大陸へと行く汽船が、徐かに水平線の上を動いて行く。白い海鳥の群が千鳥のやうな可憐な聲を殘して、波の上を雲のなかに滅えて行く。

山といふ山は芒の銀のやうな波に掩はれる。谿といふ谿は紅葉に燃える。その間を淸冽な水が瀨をなして流れる。朝と夕暮には霧が山をこめて、それが日光の具合でいろ〳〵な色に絶えず變化する。島の秋で一番うれしいのは月の夜である。甘諸の畑には露が深く落ちてゐる。白い磧からは霧の底から人聲が聞えて來る。

山猫といふ名で呼ばれてゐる地酒に醉うた男たちが、亡國の民を想はせるやうな哀愁をたゝへた調子の唄をうたふ。月に照らされた一つの山を越ゆれば、さらに淡い霧につゝまれた他の一つの漁村が、暗い影を作つた山の懷に抱かれて、白い海を控へて横たはつてゐる。燈の見ゆるところ必ず山猫に醉うた島の人々の哀調を帶びた唄が聞える。

×

幾百年來孤島を唯一の鄕土として、代々荒い波の上に、或ひは戀し、或ひは醉ひ、やがて死んで行かねばならぬ島の人々の生活を想像すると、うたつてゐる島の人たちよりも、聽いてゐる旅人の心が暗くされる。

月の夜の漁村の唄が途絶えて來るころは、再び玄海の上に冬の風が日も〳〵すさびはじめる。內地との交通が幾日も鎖されてしまつて、暗い低い空の下に、あらしを誘ふ大波が涯しもなくつゞく。濱の漁夫の扉はとざゝれて、鷗の群が沖から濱の方へあらしを避けてつどうて來る。

一人で歩む道

この一ヶ月ばかりの間にいろ〳〵な自分の身邊に起つた一身上の問題で、私の心は日一日と一層沈んで行つたやうな氣がする。私は自分自身に物事を斷乎として決行するだけの勇氣のないことを切に齒痒く思ふ。私はこの一ヶ月ばかり殆んど毎日のやうに家の者にも當り散らすし、家の者を困らせ、苦しませつゞけて來た。私は家の中での暴君であつた。私はまた毎日戸外を歩いた。歩いてゐながらも、いら〳〵した氣分の心をどうすることもできなかつた。果は自分で自分の身がいぢらしくなつて來ることもあつた。「結句自分は一人だ」といふ感じが、今までよりも一層痛切に感じられるやうな氣がした。かうなつて來ると、私は自分の偏狹な性格に對しても、冷たい周圍に對しても感謝しなければならない。ぢいつと自分一人でいろ〳〵な苦痛を忍んで行く折くらゐ、ほんたうに突きつめた心で考へさせられる事はない。私はいつまでゝも自分一人で、自分の道を歩いて行くより他はない。

×

私は餘り多く友達を持つてゐない。しかし何のやうな人の好意でもありがたいと思つて受け容れることはできるつもりでゐる。文壇といふものに始めて出ようとするために、一つの原稿を一年餘りも持ち歩かなければならなかつた頃の苦痛や悲しさは今でも忘れ得ないが、恩師島村抱月先生を半年近くも責めて原稿を讀んで貰つて、初めて處女作を出していたゞいたありがたさだけは忘れることはできない。

それから後の私自身の文壇生活を振りかへつて見ると、かなり自分でも寂し過ぎたやうな氣がしないでもない。また自分の力の足りないことを悲しくも思ふ。それだけに自分の作品に對して與へられた同情や非難もひし〳〵と強く

胸に刻みつけられてゐるやうな氣がする。批評を氣にしないといふ人もあるが、やつぱり人間である以上は批評は氣にならないことはない。チェーホフは「鷗」のなかであつたかと思ふが、「褒められた時は嬉しい、くさゝれば一日か二日ぐらゐは不愉快だ」といふやうなことを語つてゐたやうに記憶してゐるが、それが人情だと思ふ。故意にされた惡罵や、冷笑を浴びせかけられた時はなかなか十日や二十日で不愉快は除かれはしない。それだけ私は執念深いのかも知れぬが。

×

自分の天才を信ずることのできる人は幸福である。羨ましいやうな氣もする。しかしそのやうな人に對しては、到底懷かしい感じを抱くことはできない。その作品からは殆んど動かされない。

罪人を慰めてくれるものは、罪に泣いたことのある人でなければならぬと同じやうに愚な自分を慰めてくれる人間は、最も強く自分の愚を悲しみ、味つた作家でなければならぬ。

私には天才は要らぬ。眞人間の心が欲しい。眞人間の心を持つた作家でありたい。又眞人間の心を持つた人の作品が欲しい。

眞人間の心持は天才を欲するやうな人には理解せられない。眞人間の心持は小悧巧な人たちには理解せられない。私は天才を欲する人々や小悧巧な藝術家たちにわかるやうな藝術は生みたくないと思ふ。ほんたうに眞人間の苦惱を分ち持つことのできる少數の藝術家や、すべての眞人間たちのために、自分の貧しい收穫をさゝげたいと思ふ。

×

一人で歩む道は寂しい。けれども寂しさや、悲しさや、苦痛は自分一人で忍び、自分一人でぢつと押し耐へて行く時、ほんたうに自分を淨化してくれる。

褒められることは嬉しいにちがひない。しかし、無理に褒めそやされたり、祭り上げられたりする苦痛も大抵なものではあるまいと思ふ。作家の良心が鋭ければ鋭いほど。

×

眞人間といふことを除いては藝術家はあり得ない筈だ。

自分のすべてをさらけ出してかゝるところに藝術の光りがあり、命がある筈だ。少しでも自分の魂に小悧巧な曇りがかゝつた以上は、その人の藝術は傷けられなければならぬ。

作家にとつては本を讀むことも必要であらう。思索をすることは更に必要な事であらう。しかし眞人間の心を失はないやうに努めて行くことは、更に大切なことでなければならぬ。

私の心は絶えず小悧巧にならうとしてゐる。絶えず不正直にならうとしてゐる。私にとつては本を讀むことよりも、思索をすることよりも、小悧巧にならうとする自分の心、不正直な自分の心を鞭打ち、矯め直して行くことが一層大切である。

×

知己は現在にも、何處かには必ずあることを信じてゐたい。正直な心で語られたものは、必ず正直な讀者に訴へるにちがひない。眞人間の聲は眞人間のみに受け容れられる。

知己は百年の後にも必ずあることを信じてゐたい。時が經つにつれて、たくさんの知己を見出すやうな藝術が欲しい。

五年、十年、百年の後、ほんたうに殘るものは眞人間の正直な言葉のみである。眞人間の藝術のみである。何の様な批評も、冷笑も、惡罵も、眞人間の言葉を滅すことはできない。

無責任な冷笑や、漫罵を投げかけた人々が滅びて行く時、眞人間の言葉だけは永遠に遺つてゐる筈だ。

×

私はいつも一人で歩いて行く作家を尊敬する。眞の藝術は到底いつも孤獨者にのみ惠まるべきものであると思ふ。戰ふならば一人と一人の太刀打ちでなければならぬ。助太刀を持つやうな藝術家は大抵の場合端武者に過ぎない。

×

一つのスケールを持つて批評する批評家を排する。そのやうな批評家は、それ以上のスケールを必要とする藝術に打つ突かつた時は冷笑か、でなければ漫罵を浴びせかける。

藝術は自分の魂の全的燃燒である以上は、批評家の魂もまた全的に燃燒してゐなければならぬ。

×

一つのスケールを持つて批評する批評家のうちには、たとへば「より善き人生のために」といふやうな標語をかざして藝術を批評しようとする者がある。

しかし私たちの人生は、實は善惡といふことにこだはつてゐるには、餘りに深過ぎる。餘りに尊過ぎる。したがつて私たちの藝術は「より善き人生のために」といふやうな、そんな狹いスケールでは量り得られないものでなければならぬ。

藝術が與ふる救ひは明日にはない。藝術の救ひは今日に在る。この刹那にある。藝術そのものゝ中に在る。人生と結びつけて初めて藝術の價値が生まれて來るものではない。救ひは藝術それ自身のうちにのみ在る。そして藝術の救ひは必ずしも「より善き人生」のなかにのみあるのではない。藝術の救ひには善惡の觀念はない。藝術は人を善人にするかも知れない、しかしそれは藝術の究竟の目的ではない。藝術の救ひは善でもない、惡でもない世界にある。眞

人間であること、それ自身のうちにある。眞人間であることの寂しさ、尊さ、ありがたさのうちにある。眞人間の踴躍、脈搏のうちにある。

「より善き」といふやうなことは、大きな、無限な人間感の波濤の飛沫に過ぎない。

この大きな、そして無限に深い人間感の脈搏を摑む時に、大きな藝術が生まれてくる。

クリスマスの鐘が

クリスマスの鐘が聞える。
野を越えて、暗い夜を越えて。
妹よ。私はお前に贈るべき何にも持つてゐない。
妹よ。お前も私に贈るべき何にも持つてゐない。
妹よ。私はお前に私の魂をあげよう。
妹よ。お前は私にお前の魂をおくれ。
妹よ。感謝しよう。
貧しきが故に、私たちは最も尊いクリスマス・プレセントを持つたことを。

クリスマスの鐘が聞える。
妹よ。燭をお點し。
私たちは神にさゝぐべき何にも持つてゐない。私たちはたゞ罪のみを持つてゐる。
妹よ。私たちは二人の罪を神の前にさゝげよう。罪を悔ゆる涙を。
妹よ。私の涙!

妹よ。お前の涙！
祈れ。
神よ。二人の罪人の涙をさゝぐ。

日暮れて歸る。
私たちの道は落葉を踏む。
高い家、自動車の音、窓飾の寶石が……私の頭に妹の頭に、刻まれてある。
寂しい夜の道をうなだれがちに野の家に歸る。
妹よ。めぐまれてあれ。
星が、大地が私たちの胸によみがへつて來た。……野を歩いてゐる間に。
妹よ。寂しい私たちの室にも燭を點せ。
榾を焚け。パンを燒け。
妹よ。祈れ。
聽いて御覽、空を高鳴りする風の聲が聞える。
妹よ。榾の火を見つめてゐるお前の眼の美しさ。お前の額の白さ。
妹よ。私たち二人のために世界は今生きつゝある。
私たち二人のために大地は脈搏ちつゝある。
妹よ。御覽、空の星が……世界でたゞお前と私だけがあの星を見てゐるのだよ……。

恐らく。
妹よ。祈れ。
貧しきが故に富める二人のために。

千住の市場

朝六時、坂本から千住大橋行きの電車に乘る。二三人の客があるばかりで、涼しい朝風が窓から流れ込んで來る。龍泉寺三の輪附近の横町から稼ぎに出かける女人夫たちが後から／＼と歩いて來る。大橋の袂で電車を捨てる。二三人の花を賣る男が車を止めてゐる。草花の種類も色も既う秋らしいものが多い。橋板を架け替へ中の大橋の下を、濁つた水が流るゝともなく流れてゐる。荒川を下る一錢蒸汽も、朝早いので七八隻もやはれたまゝになつてゐる。素つ裸の男がせつせと甲板を洗つてゐる。客らしい男が二三人柳の蔭に腰を卸して船を待つてゐる。

大橋をわたつて一町ばかりつゞいた町を通り過ぐれば、またそこに一つの橋がある。右も左も靑々と繁つた葦の洲である。葦の間に見える水溜りには竿をかついだ男たちが釣場を探し歩いてゐる。「四十三年の大水の時にはこの橋があの鐵橋まで流れて行つた」と言ふ聲がするので、振りかへつて見ると、そこには中年の男が二人立つてゐて、一人の男が川下の汽車の鐵橋を指さしてゐた。

もう、そこからは靑物市場の喧騷な聲が聞えて來る。柳やポプラの蔭には靑物をはこぶ車が限りもなく列べられてある。夾竹桃と紅い薔薇が靑い葉の間から際立つて見える。

車を押す男、車を曳く男、靑物を肩にした男、馬鈴薯や、玉葱を數へて居る男、罵りながら男の後を追つかけて居る女、瓜のやま、玉蜀黍のやま、鰌の桶、桃の箱……何から何と、家の前の廣場々々に列べ立てた間には買ひ出しの男たちが揉み合ふやうにしてたかつてゐる。露を帶びた靑物は見るからに生新な感じを喚び起す。

四斗樽を倒さにした上には、肥つた男が胸をはだけて、大きな眞桑瓜を高く空に投げ上げては、「眞桑瓜！　眞桑

瓜！」としやがれ聲の限りをつくして人々を呼んでゐる。その隣の家ではバンコの上に立つた若い男が「三貫の葱！」と呼んでゐる。その下では男たちが狂人のやうになつて、指を二本出したり、引つ込ませたりして競り合つてゐる。家の入口の高い勘定臺の上では、二三人の男や、女たちが奇蹟とも思はれるほどはしつこく耳と手とを動かして、絶え間なしに筆を走らせてゐる。

この眼のまはるほどな渦のなかを、一人か二人の子供を連れた、または赤ん坊を背負つた女たちが、溝の縁や、車の下に落ちてゐる茄子や玉蜀黍などを拾ひ集めては汚れた風呂敷や、破けた袂のなかに入れてゐる。大かた荒川の土堤附近に住んでゐる乞丐でゝもあらうか。背の子も、母の後ろに跟いて歩いてゐる子供も腐れかゝつた桃を大事さうにかゝへてゐるのが、傷ましい感じをあたへる。更に八十にも近いやうな老婆が道ばたの腐つた果物を拾うて頬張つてゐる姿などを見ては、人生のどん底の悲慘を想はずには居れぬ。

何の心もなしに疊の上に腹這ひになつて、兩腕で顎を支へながら、通りの混雜を眺めてゐる少年や、または嬉しさうに四つか五つの玉蜀黍を小脇に掻い込んでは落し、掻い込んでは落してゐる子供を見ると、さすがに秋近い日の朝らしいのんびりした感じも湧いて來て、我れながらほゝ笑みたい氣もする。忘れられたやうにして、大きな盥のなかに抛り出されてゐるたゞ一尾の緋鯉をめぐつて靜かな朝日の光りが金鱗をかきみだしてゐる。

青物市場の喧騷を避けて葦の葉につゝまれた古橋の上に立つ。目路の限りは青い葦の川原である。蓮の白い花が遠い沼から見えるのもすが〳〵しい。

茣蓙を手にした若い女がはれぼつたい顏をして通る。頬から首のあたりに白粉がほんのりと香つてゐる。並んで曖昧屋の女將らしい白粉焦けのした年増女が通る。何かの講の連中が麻の衣を着た先達を車に乘せて、後から押すやうにして幾十人となく橋をわたつて來る。先達の頭に卷いた白い布が、印度の僧侶たちの頭に卷きつけた帽を聯想させ

る。白い手甲、白い脚絆に麻の着物を一樣に端折つた同行の菅笠や絲立が葦のなかにかくれてしまふ。

五六人の女の乞丐や子供の乞丐が、葦のなかの道を荒川の方へ歩いて行く。顏色の惡い、瘦せこけた乞丐の子の肩に朝の太陽の涼しい光りが白く流れてゐる。銀鈴の音を想ひおこさせるやうな葦の嵐につゝまれた水鄕の市場では、やがて、人のどよめきや、罵りさわぐ聲も靜まつてしまふ。

燕が草の葉の散らばつた市場の甃(いしだたみ)の上を優美な曲線を描いて翔りまはるころは、薄暗い店の奧の方では、疲れ果てた男や女たちが、いぎたなく午睡の夢をむさぼつてゐる。

人通りも滅多にない甃の上にまだ一人か二人の乞丐の子が、蓮根を拾つたり、眞桑瓜を嚙じつたりしてゐるのを見出す。

やがて鐘ヶ淵通ひの一錢蒸汽の汽笛が、けだるさうに水鄕の正午の靜かな空氣を戰かしてゐるのが聞える。のそくさと黑い牛が大橋をわたつて、秋近い草原のなかにかくれる。

貧しき者の春

二三日前から、裏の墓地の藪に來て鶯が鳴くやうになつた。私はこの寂しい裏町で三度春を迎へることになつた。一坪の庭さへ持たぬ狹い家だが、二階の窓を明けると近所の大きな邸の梅などがちらほらと見える。天氣が好い日にはかすかに筑波の姿も見える。大戰爭以來急に煙突が二三本出來たので、ひところは殺風景な感じを抱かせたが、今ではそれすら、この寂しい裏町の單調な光景をかざる直線としてなくてはならぬものとなつた。

私の窓にすれ〳〵に、隣邸の花梨や棗がまだ冬ざれた枝を見せてゐるが、雨に濡れた梢からは青い小ひさな芽生えが出て來た。さすがに春が來たといふ感じを湧かさせる。私は久し振りで小半日も窓から薄曇りの空を眺めたり、近所の大きな邸の庭などを眺めたりすることがある。

「人間に生まれたからには一度はあんな大きな家に住んで見たい！」

私の小ひさな窓に立つ毎に、家の女たちはさう言つて、お寺のやうな大きな屋根や、垣根から覗いてゐる梅などを眺めてゐる。

女たちの話は直ぐと大金持の噂に移つて行く。

あの邸から出て行く自動車は美しいが、奥さんらしい人の容色はあまり良くないといふことだの、三人のお妾がゐることだの、何とかいふ家の花嫁が百五十本の帶を持つて來たことなどが話される。

女たちの話が靜まつたと思つて階下を覗いて見ると、近所のおかみさんたちが一緒に集まつて、荷車を挽いて來た一人の若い男を圍んで、一本一錢か一錢五厘の葱の取り引きをはじめてゐる。

「千住大橋の市場まで行つて買ふと、こんな葱は三厘くらゐだわ。もつとまけときなよ……」と高い聲で話してゐる女の聲が聞える。

女たちは自動車の話も、百五十本の帯の話もすつかり忘れてしまつて、貧しい取り引きに夢中になつてゐる。

私は狭い窓から墓場の方を眺めてゐる。私は不圖柳の芽生を見出す。私の心臟は何か大きな發見でもしたやうに鼓動を昂める。「ほんたうに春が來たのだッ！」といふよろこびが、私の血管の端々までも波打つて行く。恐らくこのよろこびは、私たちの血管に流れてゐる原始人のたましひが、春を意識した刹那のよろこびであらう。私はかつて或るポーランドの作家の作品を讀んだことがある。それは久しく故國を追はれてシベリヤにさ迷ふてゐた男の話であつたが、或る冬の日に同じ故國の男の脣から綠といふ言葉を聽かされて「それだ、それだ！」と言つて涙をながしてよろこんだといふやうな物語であつた。綠といふたゞ一つの言葉は、その男に故國の春の光りや、春の小鳥の唄や、ライ麥の波打つ丘を想ひ出させたのであつた。かつてかれが、ほしいまゝに飛び歩いた故國の春を想ひ出した刹那に、その男のたましひはほんたうに生きてゐるといふよろこびを感じたのであつた。

私たちの祖先であつた原始人は恐らく幾萬年の間、或ひは幾十萬年の間綠の色につゝまれた野を Vagabond としてさ迷ひ歩いたであらう。今日たほ世界の隅々にのこつてゐるヂプシイの生活は恐らく、私たちの原始人の生活の俤をつたへたものであらう。

家を持たず、食物を貯ふることを知らなかつた原始人にとつて、冬といふものくらゐ恐ろしいものはなかつたであらう。したがつて春のおとづれくらゐよろこばしいものはなかつたであらう。そこには豐かな收穫がかれ等を待つてゐた。そこには豐かな海の幸、山の幸がかれ等を待つてゐた。樂しい戀愛が待つてゐた。春はかれ等にとつてよみがへりであつた。

私は今近づいて來る春を待つてゐる。私の血管に流れてゐる原始人の血は蠢めき始めた。

×

私は家を持たぬことを感謝する。富を持たぬことを感謝する。私は冷たい煉瓦のなかに縛られてゐる不幸な人たちでなかつたことを感謝する。人間を人間と見ることのできぬ官僚の徒でなかつたことを感謝する。

私は今日、この刹那に、家を飛び出して曠野の靑い草の上に仰臥する自由を持つてゐることを感謝する。

私は官僚の徒でないが故に、私は家を持たぬが故に、私は貧しい民衆であるが故に、世界の何處にでも歩いて行くことができる。そして到る處に靑い草を見出すことができる。そして胸をふくらまして思ふ存分春の空氣を呼吸することができる。

×

東そして西の風吹け。すべてそれは神のものであり、また私のものである。

南そして北の風吹け。すべてそれは神のものであり、私のものである。

×

かつて私は久しい間椅子を買ひたいと思つてゐた。學校を出て數年後であつた、私ははじめて一脚の椅子を買ふことができた。緣にクッションのついた肱懸椅子であつた。その椅子が私の貧しい室に運ばれた折のよろこびは今にも忘れ得ない。

私はさらに椅子に坐つて本を讀むやうな机を欲しいと思つた。それから數年經つた。

はじめ買つた椅子の脚は損じ、緣のクッションは色褪せて來た。けれどもまだ机を買ふことができないでゐる。

しかし私は自分の生活を感謝したい。數年待ち望んで一脚の椅子を買ひ得たよろこびは、決して富める人たちの經驗し得ないよろこびである。

私は今、机を買ひたいと思つてゐる。私は新らしい背の高い机が、私の貧しい室に運ばれるであらう日を想像する時、心からのよろこびを感ずる。

貧しい者程明るい未來を持つてゐる。

×

今朝、近くの小學校からは、卒業式があると見えて、「螢の光」を唱ふ聲が響いて來る。あの唱歌の聲を聽くと、何となしにいつも涙が催される。

高等學校の敎師をしてゐた或るスコットランド人が、或る時信濃の山間に行つて「螢の光」をうたつてゐる子供の聲を聽いて泣いたといふ話を覺えてゐる。それはあの歌の節が偶々スコットランドの詩人バアンスの"Auld Lang Syne"と同じものであつたので、そのスコットランド人の心をいたく打つたからであつた。

私も小學を出る時は「螢の光」をうたつた。私たちのクラスの女たちは無論のこと、男のうちにも泣いたものがあつた。そのせゐか知らぬが、あの歌くらゐ今でも感傷的な氣持を喚びさますものはない。

×

二三日前千住大橋をわたつて荒川の方へ散歩した。土堤の下に大きな小學校があつた。夕方であつたが、二階からピアノの音がしてゐた。私は昔の小學時代の事を想ひ出した。小學から程遠くない處に田圃や並樹などがあつた。

私は一度は田舍の小學にだけは敎鞭を執つて見たいと思ふ。

昨日、上野の公園を通つた。竹の藪の芝草の上にたくさんの小學の子供たちが遠足をして來てゐた。みんな竹の皮をひらいて晝飯を食つてゐた。

私は直ぐ恒河の畔のボルプールに在る詩聖タゴールの林間學校を想ひ出した。

太陽と子供、草木と子供、戸外の空氣と子供、風と子供、小鳥と子供……私の空想は限りもなくつゞいて行つた。もし私にそのやうな機會があつたら、私は子供のための林間學校だけはやつて見たいと思つた。

供養の心

Sさん、私は十八日の午後から急に四十度ちかく發熱しまして、今に苦しんで居りますので纏まつた考へも出來ませんがお約束までにきれ〴〵た感想を書かして戴きます。

私の枕許には四五日前買つて來た室咲きのカーネーションと櫻草があります。私は人間の生死といふ大きな問題を考へて居ますが、この考へをもつと押しひろげて見れば私の病室を飾つてゐる二つの草花の命といふことに就いても、眞面目に考へて見なければなりません。私たちは自分の或る心の要求を滿足させる爲にかなり殘忍な無慈悲な行爲を繰り返して居ります。この二つの可憐な草花の生死に對する無關心、無慈悲よりも更に大きな罪惡をば人生そのものに對して犯して居ることに、とき〴〵驚かされることがあります。それは作家としての私自身の人生に對する態度の冷酷さに氣付いた刹那であります。

私たちは絶えず人生に對して出來るだけ鋭い批評の眼を注がうとしてゐるのでありますが、その動機がともすれば眞實に人々の運命をいたむ心からではなく、人々と共に悲しみを分つ爲でもなくして、自分の創作の爲の材料として、嚴肅な諸々の人生現象をば冷たい解剖の刀を握つて剖かうとすることがあります。何といふ恐ろしい人生の冒瀆でありませう。

無論作家が周圍の人々と共になつて泣き悲しみ、喜び、狂ひ立つて居たのみでは、ほんたうな藝術は生まれないかも知れないが、眞實の作家の批評眼はすくなくとも周圍の人々より一層多くの悲しみや、涙や、喜びや、怒りを伴つて居なければなりますまい。心は嬰兒の如く、頭腦は大人の如き作家でありたいと思ひます。

しかし現在の私自身の心は悲しくも大人の頭腦のみをもつて小兒の心を失つたものになりがちであります。たとへば私の周圍の人々の上に悲しい事件が起つて來たとして私はそれ等の人々の悲しみを分つ前にまづ冷たい批評の刀を握る事を考へて居ります。小ざかしい私自身の批判力を動かすことによつて嚴肅な人生そのものを切りさいなまうとしてゐます。たとへば純心の光りに照らして見分けねばならぬ人生の諸相をば冷たい蕪雜な心の刀で切りさいなまうとしてゐます。

キリストが大酒飮みであつたといふことや、彼がまた永生を信じながらもラザロの死を聽いて泣いたといふことは如何に彼が子供らしい、又人間らしい人間であつたかを想像せしむるのであります。

冷たい心の作家であることを心から憎みます。「我等笛吹けど彼等踊らざりき」といふ言葉がありますが私たちは笛を吹く世間の人々の笛の音のみを批判してその笛を吹く人々の心を掬まなければならぬことを忘れてゐることが餘り多くあります。

笛の音を聽いてもなほ踊ることの出來ぬ自分の冷たい心を悲しみます。

×

私は昨年の秋ごろから北海道の倶知安といふ町の一人の未見の靑年から絕えず苦しい薄運な宿命を訴へた消息を聽いてゐます。靑年は子供の頃片腕を切つてしまつて今では殆ど不治の病をいだきながら、一人の祖父とふたりで雪の深い倶知安の町に日々のパンを求めて働いてゐるのださうです。靑年は內地から山の薪木を伐り出しに來た大勢の荒くれ男達の仲に交つて飯場の事務を執つてゐるのださうです。この多は祖父（靑年には兩親はなく唯一人の祖父だけがこの世界にあるのです）と別れて歌棄の山まで出稼ぎに出かけたのですが、其處でも三日にあげず病にくるしめられて居るのでした。しかも靑年は死の眼前にわなゝきつゝも自分の苦しい心を筆にしては私に訴へてゐます。數日前

の手紙では靑年は雪を蹴つて再び倶知安の祖父の家に歸つて來たといふことであります。靑年には世界に唯一人の祖父と別れて居るといふことはパンを失ふことよりも、もつと苦しいことであります。たとへ不幸な二つの魂が深い雪の底に飢ゑ死なうとも彼等は相抱きつゝ死なんことを求めて居るのです。祖父はその不具な病身な一人の孫の爲に老身を提げて若い人々に交つて毎日雪の中を山に這入つて行くのださうです。

この氣の毒な靑年にとつては生死の問題であるべき訴へもどれだけ私の心を暗くし動かして居るであらうかを考へると私は自分の冷たい批判的な心を呪はずには居られない。私にとつてはやゝもすれば雪の中に埋もれて居る不幸な二つの魂の運命を悲しむことよりは寧ろ一種の創作家としての興味をもつて彼等の生活を見ようとするやうな冷酷さが湧いて來ることがあります。

尊い人生の冒瀆者である自分自身を悲しまずには居られませぬ。

×

木を刻む彫刻家たちの間に「木の供養」といふ、やさしい營みが行はれたことを知つて居ますが、絶えず冷たい批判の鑿を揮つて生ける人生を刻んでゐる私たちの心にも木の供養を營む彫刻家達の感謝と、罪を詫るの念を人生に對して絶えず抱かせて置き度いと思ひます。

備後の兄へ

さんどいも（馬鈴薯）鐵道便にてお送り下されますさうで、嬉しく毎日待つて居ります。去年の秋ちよつとお寄りした時、姉さんの手料理で鷄とさんどいもの御馳走にあづかつたのを今にも思ひ出して居ります。餘りいたゞき過ぎた爲でもありますまいが、岡山あたりから腹痛を覺えて、夜が明けてから、一汽車だけ京都に下りて時雨に逢つたことなどを想ひ出します。姉さんも養蠶でお忙しい由、いつぞやお屆け致せし紅蔘は姉さんには大變利きましたさうでよろこんで居ります。あなたも養蜂やら、葡萄畑の手入れやら、なか〳〵のお骨折と存じます。「あの白い雲を見い。あの青い山を見い。大自然のなかのわしの生活も惡いもんぢやあるまいが」と言つて、備前境の青い山を指さゝれた折の、あなたの聲はまだ私の耳に響いてゐるやうです。

「兄さんは青い山が、白い雲が、と言つてお出でぢやが、あたしなんか、賑かな都會の方が宜い」と言つて笑ひながら私の顏を見た姉さんの聲も、そのまゝに私の耳に響いてゐるやうです。實際あなた方に見送られて桑畑のなかの輕鐵の驛に歩いて行つた時は私も「これはまた餘りに寂し過ぎる」と思ひました。三里四里と見渡す曠野の中にたゞ二つか三つかの農家の燭を見出した時、何うしても私は姉さんの述懷に同情を持たないでは居れませんでした。

しかし現在の私は、あなたの土の香のなかに埋められた生活を、この上もない尊いものだと思つて居ります。私はあなたがそのまゝの生活を根氣強く打ちつゞけて行かれることを祈ります。三四年前に逢つた折のあなたには、まだ臺灣に渡つて生蕃の王を夢みて居られた頃の、夢に近い霸氣が滿々としてゐました。恐らくあなたの心の何處かにまだ、捲土重來といつたやうな未來に對する熱意や霸氣が、隱忍蟄居してゐるのではないかと思はれました。

私はこの頃有樂座でチェーホフの「叔父ワーニヤ」といふ芝居を見ましたが、あなたの性格にはワーニヤの血が流れてゐるやうな氣がしてなりません。私はワーニヤが絶望の底にあつて尙「ドストイエフスキイもショッペンハワーも……」と叫んだ悲痛な聲を忘れる事ができません。私は「あの山を見い」と言つて居られる、いかにも田園を樂む人らしいおだやかなあなたの言葉の底に、隱さうとして隱す事のできないあなたの悲痛な反抗的な聲を聽きもらすことはできませんでした。山を伐つて、田を賣つて、そして近郷一番の村人の所謂「阿呆門」を構へて、傾きかゝつた、歷史的な名譽を持つた古巣のなかに空嘯いて居られたあなたを淚の出るほど懷しい心で見ました。しかしあの門は畢竟するに世間に對するあなたの反抗的な覇氣の表象でした。あなたの心の底には成り上り者に支配せられてゐる村の人々に對する冷笑がありました、侮蔑がありました、白眼視がありました。それだけ、あなたの田園生活は私に傷ましい感じを起させるところが多くありました。何時かはあなたの田園生活が恰度都會生活者が都會を熱愛するといつたやうな極めて自然的な生活になることを心から祈つてゐます。けれども私は「叔父ワーニヤ」を觀た時に思ひました、「一度インテリゲンチヤの世界に住んだ人間は、何のやうた暗い運命の下に生きなければならなくならうとも、インテリゲンチヤの過去の大きな夢を永劫に忘れることができない。」そしてそのことが、ワーニヤの性格から生活の光りや怡悅の殆んどすべてを滅ぼしてしまつたのでした。

恐らくあなた自身も永劫に一人のワーニヤとなつて一生を送られるのではないでせうか。私は性格のなかに宿つてゐる悲しい人間の運命を想はずには居れません。

あなたはこのごろ心靈の交通といふやうな方面にも趣味を持つて晝間の農園の勞働に疲れ切つた體を、假作りの講堂に運んで村の靑年たちを導いて居られるといふことですが、私にはそれがまたルウディンの計畫のやうにも想はれてならないのです。あなたが「講堂の建築費に抛ちたいから東京の成金にでも賣つてくれ」と言つて送られた山陽や

蕪村の掛物を持つて、私はかなり多くの家を訪ねてあるきました。あなたが送られたその他の書畫については、私のやうな何の鑑賞眼もない素人でも、殆んど價値のないものであることは直ぐに見當がつきました。流石に山陽と蕪村だけは何うかと思つて持ち步きました。あの博物館で「拙劣な僞物」といふ鑑定を下された刹那には、私は失望といふよりは寧ろ一種の喜劇的な微笑を感じないでは居れませんでした。ばかに眞劍でゐて、そして爲ることなすことが、如何にも素人臭い失敗に終るあなたの事業を想ひ出さずには居れませんでした。

ロシヤの「叔父ワーニヤ」の破產は何處までもせつぱつまつた冷たい、人間の力が動かすことのできない悲劇です。日本の「叔父ワーニヤ」の破產は何處か溫かいゆとりがあるやうな氣がしてなりません。笑ひが潛んでゐるやうです。

私はこの頃、一層あなたが好きになりました。姉さんは私の計畫を話したら止めなさるかも知れませんか、私も將來、あなたのあの堂々たる「阿呆門」をくゞつてあなたのお弟子になるかも知れません。さんどいもの畑で勞働をして見たいからです。白い雲や、靑い山が人間の顏よりも懷しく思はれるからです。土の香が戀しいからです。

朝七時に家を出る。終日、本のなかの一字々々を拾ふ。訪問客の跫音に胸を轟かす。年中睡眠不足。出來るだけ客を避けて自分の時間を偸まうとする生活、これが何でほんたうの生き方でせう。

思ふ存分紺碧の空を見、薰ばしい空氣を吸ひ、本を捨て、時間の觀念を忘れて、人間と人間とが結び付く田園の生活を除いては、正しい生き方はないと思はれます。太陽の光りの下で、葦の莖で書かれた文字を私は覓めてゐます。

私の腕はペンを握るよりは鍬を摑むにふさはしい力を持つてゐます。私は屹度あなた以上の勞働ができることを信じてゐます。私は十年後にあなたの葡萄畑に行くかも知れません。また明日行くかも知れません。何つちにしても私は心からあなたの生活を羨ましいと思つて居ります。

本日小包郵便で、例の山陽、蕪村並に他の五幅をも一緒にして、お返しいたしましたからお受取り下さい。

基督の解放と無限

キリストの言葉は誰にでも――子供にでも――わかるやうに書かれてある筈である。平易に、わかり易く書かれたのがキリストの言葉であると言つたのはトルストイであつた。

誰にでも讀まれ、誰にでも愛せられ、誰にでも受け容れらるゝのがキリストの言葉である。

頑迷な教派の人々のうちには今日尙ほ聖書無謬說を固持して、無理にもバイブルを固苦しい超人間の言葉のやうに信じてゐる人々もあるであらうが、トルストイやルナンが考へたやうに眞人間の言葉をバイブルの中から見出すやうにしなければ、キリストはいつまでも教會といふ牢獄のなかに閉ぢこめらるゝ恐れがある。

私は「キリスト解放」といふことを時々考へさせられる。「農奴解放」といふことは誰も言ふことであるが、近代思想の一つの流れとして、「キリスト解放」といふ大切な事實をも見のがしてはならないと思ふ。

キリストといふナザレの大天才は千幾百年の間、教會といふものゝなかに閉ぢこめられてゐたのであつた。或ひは神、超人間といふやうな非人間的な概念の扉のなかに、押しこめられてゐたのであつた。然るにトルストイや、ルナンや、オスカア・ワイルドのやうな近代の人々は教會といふ牢獄のなかゝら、キリストを眞人間の世界に解放したのであつた。

キリストは教會のものでなく、私たち個人々々のものとなつたのであつた。近代に於ける農奴解放民主的運動といふやうなものも大切な仕事であつたが、近代の文藝家のキリスト解放はそれにも劣らぬ立派な事業であつたと思ふ。

無論宗教改革に於けるルーテルの事業も一種のキリスト解放であつたにちがひないが、ルーテルが解放したキリスト

はやはり神の國のキリストであつて、人間の世界のキリストではなかつた。

人間らしい人間、人間の弱點をも、缺點をも持つたキリストを見出した文學者の一人はルナンであつた。私たちは近代の文學者たちによつて、ほんたうな意味で、友達としてのキリストを見出し得た。ルナンが見たキリストは神の子として宗教の寵のなかにあがめて置くにはあまりに人間的な人間であつた。キリストは宗教の樂園から追はれて私たちの穢土に落ちて來た。彼はほんたうな意味で、私たちの道伴れとなつたのであつた。

私たちが貧しいパンを食ふところにキリストがあり、私たちが戀を語るところにも、私たちが人を憎むところにもキリストがある。キリストは近代の文學者たちの力によつて、敎會から離れて、世界的に人間個々のものとなつた。

恐らく今日キリストは、昔彼が娼婦マグダラのマリヤと語つたやうに、醜惡な人間生活のどん底に友をもとめてゐるであらう。恐らく彼は廢娼運動者や基督敎宣傳者たちを避けて無智な人々や、飮んだくれの間に友達をもとめてゐることであらう。

×

キリストの解放と同時に思ひ出すことは釋迦の解放である。私たち日本人にとつて最も親しみあるべき筈の釋迦について、實は私たちは纒つた知識どころではない何うかすると何も知つてゐない。これくらゐ私たちの國民生活にとつて不幸なことはない。釋迦はもつと〳〵、寺院からも傳說からも解放されなければならぬ。

釋迦の敎の尊さや、妙諦といふことは決して、一般の宗敎家が考へてゐるやうなわかりにくいところにひそんでゐるのではないと思ふ。これもやはりトルストイのバイブル觀と同じやうに、衆生にもわかり易いところに釋迦の敎の妙諦があると見るのが至當であると思ふ。釋迦の慈悲は衆生の魂の救濟であつたに違ひない。それならば無智な衆生への釋迦の言葉は最も庶民的なものであつたにちがひない。

藝術の民衆化といふ言葉は數年來しば〱聽くことであるが、宗教界にこの聲を聽かないのは何故であらう。元々宗教は民衆化されてあるといふ意味からして、今更宗教界にそのやうな提唱の必要がないといふのであらうか。

しかし最も民衆的であるべき筈の宗教が實は民衆を忘れてゐる。少くとも今日の宗教は精神的に民衆の力となつて動いてゐない。私はわかり易く宗教を說けといふのではない。眞人間の釋迦、眞人間のキリストを眼の前に提示してくれる宗教家が欲しい。釋迦なりキリストなりに對して、少くとも戀人に對するほどの人間的な愛着を感ずる程の心を個人々々のうちに眼ざませてくれる宗教家が欲しい。更に深く、眞實にキリストなり釋迦なりを一般の人々の心のうちに生かすといふ仕事は今後なほ藝術家自身の仕事としても意義あることであると思ふ。

×

ロシアの小說を讀んでゐるとよく十字を切ることが書いてある。大抵の場合、殆んど無意識にやつてゐることであらうが。あの飾り氣のない原始的な行爲の後には宗教上の無限といふ感じが流れてゐるやうな氣がする。十字を切ることを知つてゐる民族は祝福されてゐると思ふ。

日本でも念佛を唱へる人があるが、そんな人の生活の後にも、無限といふ感じが潜んでゐるやうに思はれてならぬ。

無限といふ感じを持つてゐない人の生活ほど淺薄なものはない。たとへ間違つてゐても宜い、何等かの形に於いて無限に對する憧憬をもつてゐる人の生活は濕ひがある。深さや神祕さが潜んでゐる。無限を感ずることのできぬ小賢しい民族ほどうとましいものはない。

無限はあらゆる表現の神祕的な底力である。生命の母である。有限な人間生活の尊さも、ありがたさも無限な背景があればこそ生まれて來る。

人と人との交渉、人と人との愛、人と人との憎惡も、その後に、その底に、無限そのものゝ呼吸と、無限そのもの

の脈搏とを持つてゐるが故に限りもなく尊い。深い意義も持つてゐる。

善惡、愛憎、明暗の相剋せる表現が共に私たちの所有として、人間の所有として純一絕對の價値を持ち、光りを持つ所以は、それ等の表現が絕對無限そのもの〻啓示であるからである。

絕對無限の啓示を除いて生もなく、我もなく、光りもなく、善もなく、惡もない。絕對無限そのもの〻脈搏と意欲とを賦へられてゐるが故に、すべての造られたる個々物は無限の翺翔、把握、光明、睿智、生命を欲する。

こ〻に悲しむべき人間の——またはすべて造られたるもの〻——宿命が生まれる。

私たちは無限を翔らんとする意欲を魂のなかに生みつけられた。けれども私たちの翅にはたゞ有限の時と處とに羽打つ力より他にはあたへられてゐない。

涯しもない翺翔の彼方に無限はおぼろげな極光のやうに私たちの魂に映つて來る、まつしぐらに無限の影を目がけて薄明の空を飛ぶ人間の夜鳥！　彼等は無智ではない。彼等は知り過ぎる程翅の力の有限なることを知つてゐる。しかも彼等は無限への涯なき空を羽打つ。絕望の底の翹望！　それがすべて造られたるもの〻生である。

無限を背景とする生活は、人間の唯一の眞實生活である。絕望裡の翹望！　は最も惠まれたる人間の生活を動かす生命力である。

有限の翅をもつて無限への翺翔を敢てすることによつてのみ、生を實感することのできる人間の宿命ほど、傷ましいものはない。更にその傷ましい絕望のなかにあつて、無限の愛を完成しようとした人々の生活ほど英雄的なものはない。

釋尊、キリスト、アシシのフランシスの愛の背景として、これ等の傷ましい絕望的な人間の宿命を置いて考へることによつて、私たちは一層切に偉大な人間愛の尊さや深さを感ずることができる。

×

最後に私たちは無限への羇旅に於て、人間のみが生きつゝ、歩みつゝあるのでないことをも知らなければならぬ。すべての自然は絶望裡の翹望を力として生きつゝあるのではないか。

樹、草、雲、花、小鳥、獸、すべては私たちの涯なき旅の道伴れである。そしてすべてが個々のうちに無限そのものゝ呼吸と脈搏とを持つてゐる。

私たちは無限そのものゝ微光を、寂しい隣人のうちに、小鳥のうちに、或ひは石をもつて撃たれたる不貞なるイスラエルの女のうちに見出すことができる。

プロメシウスの天上の炎は畢竟無限そのものゝ炎である。しかし人間に對しては永遠に無限の天界への梯子は斷たれてある。

たゞ私たちの周圍の人々のためにいたみ悲しめ。寂しいすべての自然のために悲しめ。個々の人間の中に、自然のなかに無限なるものゝ微光が、時として刹那的に閃くことがある。

刹那的に無限なるものゝ微光や呼吸や、脈搏を感ずることが、私たちにあたへられたたゞ一つの神の祝福である。

生の悲劇

自序

過去の世界を知らず、未來といふものを知らず、たゞ現在生をのみ生くることをゆるされたる私にとりて、現實の生命ほど懷しいものはない。

しかも私にとりて現實の生は必ずしも多くの人々が考へてゐるやうな幸福や光明にあふれたものではない。「悲哀を中心として廻れる生活」はまた常に私の生活である。「一千のよろこびよりも一つの悲哀を」尊く思ふこゝろはまた私のこゝろである。

私たちの過去は恐らくは無限の暗黑であつたであらう。私たちの未來は恐らくはまた無限の暗であらう。暗と暗永久の暗より永久の暗に入る二つの世界の境にありて私たちはこの刹那の現實の生命に生きてゐる。暗と暗とをつなぐ刹那的な現實生命の意識！　何といふ寂しい、悲しい人類の運命であらう。

一本の百合は少か二尺にも足らぬ莖によりて支へられてゐる。その可憐なる花瓣こそ私たちの人生を象徴したものではないか。花は少かに三寸にも足らぬ。けれどもその根を通して地球の端より端を貫く幾千哩の暗が湛へられてゐるではないか。一片の花を生まんがために費されたる過去のかくれたる幾千哩の苦痛暗黑を想ふことなしに何うして眞實に一片の野の草を愛することができよう。

花はやがてまた無限の暗と悲哀とに散り行くことを想ふ時、何うして野の百合に對して貪るやうな熱愛の涙を灑がないでゐられよう。

暗より暗にたどり行く現實の短かい生活にありて、私たちは相爭ひ相鬪きつゝ私たちの生活の悲劇を訴へてゐる。

虐ぐる者、虐げらるゝ者。みな同じ寂しい人生の道伴れではないか。私たちをして虐げらるゝ者の味方たらしむるとゝもに、虐ぐる者のために祈るの心を起さしめなければならぬ。憎惡、相愛、爭鬪の奧にさらに私たちがたどり着かなければならぬ眞實の世界があるのではあるまいか。私たちは鬪ふ。しかしながらそれが人生の究竟ではない。私たちは愛する。けれどもそれが何で人生のすべてゞあらう。

私にとつて人生は寂しい、餘りに寂しい。しかもその寂しい暗い人生の底を徹して流るゝ唯一つの眞實、それを私は知りたい。それがどんなに寂しいものであらうと、悲しいものであらうと、或ひは死そのものであらうと、私はそれを知りたい。

野に與へられたる一片の花を通して幾千哩の地の底に湛へられた悲しみと暗とを知るやうに、この刹那的な脆い人生の底を徹して流るゝ永久の悲しい眞實を把握したい。

私に與へられた人生がどんなに汚れたものであらうと、罪多いものであらうと、暗いものであらうと、それが無限の時空內にありて、たゞ一つの限られたる私の所有であることを想ふ時何で熱愛敬虔の念をさゝげないで居れよう。

私は不具な悲しい私の運命を自分の戀人の如く愛して行きたい。私の不具な暗い俤に描かれた戀人の眞實を摑みたい。それが私にどんな悲しい報告を齎らすものであらうとも。

私はこゝに最近の貧しい私の心の收穫のうちからその主なるものを集めて孤獨なる私の生活の過去を顧る

道標とした。私は來らん日の幸福を望まない。たゞ悲しい眞實をもとめる。

大正五年一月三十一日夜駒込にて

著者識

驚異の殿堂

小ひさな村の片隅に何時も懷しい樂の音が聞えた。十二三人の若い人たちが靜やかに讚美歌を唱ふてゐた。私は幼な心にもそのうたの音に聞きとれて、敎會堂をつゝむ柳の並樹の蔭に幾度もさ迷うた。そして私はたうとう敎會に通ふことを知つた。私は起きる時も、寢る時も、本を讀む時も讚美歌を唱ふた。私が下宿をかへたとき先の下宿の裏隣にゐた一婦人が、「あの書生さんの讚美歌が聞えなくなつたので何だか急に淋しくなつた」と下宿のおかみさんに話したといふことをば私はあとで聞いた。それくらゐ私は熱心に讚美歌をうたひつゞけてゐた。自分で靜かに唱ひながら、自分の唇から流れて來る純一な諧調のなかに溶け込むで行く私の敬虔な心は、たしかに懷しい或るものゝ力や驚異を感じてゐた。神さまが何うだ、キリストが何うだのといふことは、私にはよく分らなかつた。しかし歌の快い諧調だけは私を敎會に誘ふ充分の魔力を持つてゐた。他人の眼から見たらそのころの私は、宗敎を信ずる人と見えたかも知れぬ。

しかしこの純な幼ない心持ちはながくは續かなかつた。私は追々と人の懷しいといふことを知つて來た。讚美歌のメロデイアスなリズム以上に私の心に强い顫動を與へたものがあつた。それは異性に對する强い愛着の念であつた。處女の美のなかゝら湧いて來る驚異に對する憧憬の念であつた。そのころの私たちは人を戀するといふことは一種の罪惡であるかのやうに敎へられてゐたものであつた。だから、人を戀しながら、しかもそれを私一人の胸に祕めて、日曜每に聖壇の前に額づくことが、非常な僞善のやうに思はれてならなかつた。私は敎會の樂の音に見出した驚異の境を捨てゝ、戀愛の裡に見る力强い或るものをあさる人となつた。

その後私は幾度もまた、方々の教會を訪ねた。けれども、私に宗教といふものにすべてをさゝげ盡すほどの信仰心を湧かさせるだけの力を持つた教會はなかつた。私は深い懷疑に陷つた。私は人間の集團を憎むやうになつた。幾度も自殺といふことを考へるやうになつた。それでも私にたつた一つ忘れることのできぬ懷しいものがあつた、それは大自然の驚異であつた。私は運命論者となつて自然のすべてのものを憎んだ。しかし戸山の原から、あの櫟の森あたりをさ迷ふときだけは、心から自然を懷しいと思つた。あの森や、あの原をさ迷ふ間だけは、私にとつて最も生き甲斐のある時間のやうに思はれた。そのころの私にとつて、若し眞實の生活といふことが言へるならば、それはあの森のなかに入つて、驚異につゝまれながら想念に醉ふことのできたあの數十分の時間であつた。その後私はまた不圖したことから教會の閾を跨いだ。しかし私はこれこそ眞實の宗教だといつて、掴み出すことのできる何物をも經驗することはできなかつた。

　私は始めから、何物をか得んがために教會に行つたのではなかつたかも知れない。たゞ何となしに、何か或る力が潜んでゐる所のやうに思はれて、一種の淡い好奇心に驅られて行つたのである。今日でも私はたゞ、教會といふものは、自分の先輩や友人と論爭をして見たり、(却つて淋しい思をすることもあるが)お互の顏を見るのが愉快だといふくらゐの心持ちが大分手傳つて、教會に行くやうになつてしまつた。だから私は他人から見たら、宗教生活でもやつてゐるやうに思はれるかも知れぬが、自分の生活といふ立ち場からしては宗教生活なんていふものは特別に區別して、あり得る譯はないと思ふ。もしあり得るとするならば、それは宗教といふ概念を無理に築き上げて、自分で自分の生活を囚縛せられてゐるものだと思ふ。

　無論第三者から見て、かれの生活は宗教的だとは言へるであらう。しかし果してその宗教生活といふものが何んなものであるかは私にはまだ分らない。恰かも藝術なり或ひは藝術的生活といふことが分らないやうに、宗教或ひは宗教

的生活といふことをはつきり意識して生活することは、不可能であるばかりでなく隨分アブノーマルな方法である。飽くまでも宿命觀に陷り易い個性を持つた私にとつては生活或ひは生存といふことすら時としてはまるで無價値な、しかも或る自然力の意地惡い企劃の實現に使用せらるゝ手段であるかの如く考へらるゝのである。或る人は私の運命論を目して「お前の考へは臆病である。そんな手短かな解決が着くものか」といふ人もある。しかし私の運命觀は諦め的な宿命論とは全然異ふ。自分が生まれること、自分が生活すること、自分が新たに未知の人を知るといふこと悉く運命である。しかしその間に自分の生命を擴張し、生活を創造するだけの自由も亦本然的に持つてゐる。私は自己生活の創造をも運命のなかにとり入れるのである。ベルグソンの生活力といふことは、私の運命の力と同一であるやうに感ずる。私にとつては、運命といふこと或ひは運命の力といふことの外には、何物をも存在し得ないのである。ベルグソンの哲學を信ずる人は「生の力の跳躍」を信ずる。しかも「生の力の跳躍」は決して形而上學的に或ひは形而上學そのものによりて「生の力」さながらに感ずることはできない。ベルグソン自身が言つてゐる通りに、たゞ直覺を通してのみ感ずることができやう。しかも直覺は人格そのものゝ反映に過ぎざるが故に、直覺を通して意識せられたる「生の力」はまた各個性、また各人格そのものを表現とせる人格我、個性我の根本義に過ぎない。かく考へて來るならば、ベルグソン自身の「生の力」と、他の人々の所謂「生の力」との間には、隨分異なつた氣分なり、見解なりが介在してゐるにちがひない。ベルグソンが一度、「生の力」を高調し、創造的進化を說くや、思想家の殆んどすべてが、生命の擴充を叫び、生命の創造を主張するやうに思はれるが、私にはまだ眞實に「生の力の跳躍」を直覺することができないやうに思ふ。よしんば私が「生の力の跳躍」を直覺し得たりとなすも、それはベルグソンのそれと同じ緊張や、光りや、方向のものであるか、否かは疑問である。無論自然科學を通じても、或ひは刻々に發生し來るあらゆる事象の顯現を通しても、或る靈しき生命力の跳躍が存在のすべてを通じて流れつゝあるといふことは誰しも感ずることで

あらう。しかしそれだけの意識を直覺によつて得るといふのであつたならば、それは餘りに貧弱な直覺である。ベルグソンが「生の力」を直覺したといふ場合には、恰も或る宗教家が「見神の實驗」を得たといふくらゐな强烈さに於いて信念や歡喜や或ひは光明が渾然としてかれの全意識のうちに燃燒したであらう。それだけの經驗や、人格や、または形而上學的な準備のない私が、「生の力」或ひはその擴充を叫ぶ時、隨分ハイパボリカルな言葉を藉りて、生命！生の力！　自我伸展！　といふやうなことを叫んで見た所で、私のその刹那的な熱心が少し冷めかゝれば、私の心の底から、何となしに物足らぬ淋しさが湧いて來て、前よりも一層暗い心持ちに鎖されることがある。

すべてのものは生きてゐる。すべての存在のなかを流るゝ偉大なる生の力！

私は幾度もこんな感じを抱いたことはある。しかしながら、その生の力が何のために流れてゐるのであらう。何のために永遠の創造に向つて爭鬪してゐるのであらう。何かの目的があつて流れてゐるのであらうか、或ひは何の目的もなく、たゞ創造そのものゝ裡に、無限なる自己の力と自己の生命を感ずるがために動いてゐるのであらうか。

私は「生の力」を直覺するとしても、まだその目的や方向を直覺してゐるのではない。恐らく盲目的に發展して行くのかも知れない。或ひは永遠の眼より見て有目的に動いてゐるのかも知れない。私にはまだそんな問題を解決するだけの經驗もなければ、力もない。私はたゞ「生の力」の本流なり踊躍なりを直覺すれば、それで充分である。私が曩に、私は眞實に「生の力」を自覺しないと言つたのは、生の力の本體そのものを攫むことができなかつたといふ意味であつて、「生の力」が存在してゐるといふことだけは私も信じてゐる。

私は極おぼろげだが「生の力」を直覺することはできる。しかしそれはたゞ一種の驚異として私の全心をつゝむのである。私はこの世界のあらゆる事象のなかに絶えずうごめいてゐる生の力に直面するときたゞ驚異より他に、何物をも持つことはできない。勿論その驚異は原始人のそれとは、性質を異にしてゐるにちがひない。しかし、あらゆる事

象に現はれたる生の力に直面して、私の全生活を動かすものはたゞ驚異の感のみである。そしてその驚異の感に對して私は時として自ら敬虔の念の湧き出づることを覺ゆることもある。その刹那が或ひは第三者にとりては宗敎的だと見られるかも知れぬ。しかし時としてまた私は非常に深い憎惡の念を抱くこともある。耐へがたき寂寞を感ずることもある。要するに自然にあらはれたる生の力に直面するとき、私の心持ちはいろ〳〵であるが、そのすべての感情なり、氣分なりに通ずる一ツの强い刺衝は驚異といふ感じである。

驚異！　驚異！

すべて私の生活のあらゆる形式をつゝむものも、私の生活のあらゆる進化の上にあらはるゝ力も驚異である。そして私にとつては驚異はやがて運命である。或る人は言ふ、「自ら生の力を擴充することによりて、自ら創造者となるべし」と。私もこの說に對しては同感である。しかし生命の擴充、新たなる創造といふことの更に後方にありて、私の生活の方向なり、進化なりを見てゐるものがある。それは卽ち私の批評的生活である。無論批評卽ち創造である。しかしながら批評は創造を先有實在としてのみ起り得る創造である。創造なき所に批評はない。だけど批評なき所に創造は存在し得る。

私が驚異の感じを抱く一刹那は無批評であり、無創造であるとも言へるかも知れぬ。しかしそれは絕批評絕創造と言つた方が適當であらう。批評と創造とが同時に、しかも意識せられずして、最も白熱的に燃燒する場合、それが驚異につゝまれたる私の生活の刹那である。意識せられざる如くにして、しかも意識し、批評し、創造なきが如くにして、しかも批評と創造とを有する驚異の時が、連續すれば連續するほど私の生活は光明であり、充實せらるゝ。

私は驚異の生活を少しでもより多く、より長く味ひたい。

私が宗敎に入る、すなはち驚異の感をより多く經驗したいからである。私が野に耕す、驚異の感を味はゝんがため

である。私が戀愛の人となる、私が藝術に入る、驚異の感をより多く味識し得んがためである。

私が生まれる。この世界に生まれる、現在の空間に、現在の時間に生活する、死ぬ、これ運命である。私が創造する、私が批評する、これ運命である。或る人は言ふ、「創造と批評は、自分が創造し、自分が批評するのであつて、運命といふ他の力によりて動かさるゝのではない」と。なるほど創造と批評、それは宇宙の生の力を分有する一個性の創造であり、批評であらう。しかしながら、その一個性は自ら創造と批評とを放擲することができるか。或ひは可能であらう。しかしそれならば同時にかれは死を持たなければならぬ。苟しくもかれが生の力を要求する以上、かれは批評と創造を自ら爲さゞるを得ないのである。運命の力に動かさるゝのではないか。

生の力の奔流に飛び込み、生の力と共に永遠の時の伸展に入るといふが、飛び込まざるを得ず、流れなければならぬ理由は何處にあるのであらうか。生の力を說く人々が、生の力の流れと、自己の立ち場を異にして考へ、生命の流れが自己の生存以外に或ひは自我そのものと區別して存在するが如く考ふればこそ、彼等はその奔流に飛び込むとか、または一度その奔流に飛込みたる後に、更に岸邊に立つて奔流を眺むるなどゝいふやうに考へるのであるが、私が生まるゝ刹那、否、生まれない以前から私の生の力は宇宙的生の力そのものゝなかに浸されて、私の生活の一秒時と雖も、その生の力から離れたことはない。死そのものすら、生の力の一部となつて流れてゐるのではないか。かく考ふれば、私には生の力の流れに飛び込むとか、這ひ上るとかいふやうな自由は初めから賦へられてゐない。私はたゞ「生まれる」といふ運命の第一歩から「死ぬ」といふ運命の最終歩に至るまでたゞ運命の力のなかに生存し、創造し、批評するのみである。それゆゑに私にとつては所謂生の力即ち運命の力である。

私は何故に生まれ、何故に死ぬかは知らない。只運命の力によりて生まれ、運命の力によつて死ぬ。しかもその間、私は創造し、批評せずには居れないから、批評し創造するのである。私にとつて人生は餘りに寂しい。私は創造し、

批評することによりてせめてもの慰安を得る。私は運命の力を感ずる、私は生命の力を感ずる。しかもその本體の何であるかを明かに知ることはできない。たゞおぼろげに刹那的に感ずるのみである。その刹那的な刺衝、刹那的な燃燒こそ驚異の感である。

私は人生のすべての事象に對して驚異を感ずる。そしてすこしでもより永く、すこしでもより確かにその姿を攫みたいがために、私の全生命を抛つた創造と批評とを要求する。私は幾度か小ひさな私の創造の殿堂を築いた。しかも失望の手斧を以て壞つた。慘めなその形骸を見戍つては幾度か泣いたであらう。それでも私はまた更に新たなる殿堂の建設を企てずには居れなかつた。殿堂を打ち建つる鑿の音、打ち壞つ手斧の響きが、私の生活の刹那々々を意味あるものとして刻んで行く。

私は運命のうちにありて槌を振り上げてゐることを知る。しかし私は創造の爭鬪や、創造の努力や、批評の生活なしには生きてゐられぬほどの寂しさをも知つてゐる。

驚異！　驚異！　無智なる私の心はそれ以上の懷しい面影に胸をどることを知らない。私はその刹那の印象を臘石に彫り附ける。殿堂に象徵する。そしてそのなかゝら人生そのものゝ姿を攫む。私はあはれなる殿堂建設者である。

私の生活は矛盾と、寂寞と、失望とに充ちた生活である。しかし私は創造なき、批評なき生活のあまりに寂しきを知るが故に、或ひは創造や批評なしには生きてゐられないが故に、私は創造し批評する。したがつて、その批評、その創造に對して、何等永久的または普遍的の價値を附けない。藝術、宗敎に對しても、普遍永久の價値を附けない。私自身の立ち場から見ては、二者の區別を認めない。その創造なり批評なりの表現の形式にしたがつて、第三者にとりては或ひは宗敎的であり、或ひは藝術的であると言ひ得るかも知れぬ。しかし私自身にとりては、たゞ單に私の生活の創造或ひは批評であるといふことの他に出ない。

宗教と藝術とが私自身にとりて區別の出來ないと同時に、一面に於いて他人の宗教、他人の藝術は飽くまで私のそれ等ではない。私のそれ等は飽くまでも私一個のそれ等である。キリストの宗教、釋迦の宗教、ミケランゼロの藝術、トルストイの藝術、みなかれ等一人一人の宗教であり、藝術であつて、私の宗教でも、藝術でもない。キリストの宗教はかれ自身にとりての生活の創造であり、批評であつて、私自身のそれ等ではない。しかし若しこゝに宗教的生活を營む人があつて、キリストにインスピレーションを感ずるとせば差し支へはないが、しかしその人自身はその人自身の創造的宗教を味到しなければならぬ。その最後の到達點はキリストと同一であるにしても、それに詣るまでの努力はその人自身の批評と創造とから湧いたものでなければならぬ。私達は出來上つたキリストの宗教を捨てることはできる。しかし私自身の刹那から「我れ生きて而して我れ創造しつゝあり」といふ心持ちを捨てたならば、その刹那私は生きてゐる價値のないものである。藝術にあつてもこれと齊しく、トルストイの藝術はトルストイ自身にとりてのみ絶對意義があり、絶對價値があるのであつて、かれの藝術は決して私にとりて絶對意義があり絶對價値があるものではない。私一人の藝術は私一人にとりて眞の意義、價値があるのであつて、私以外の人々に問ふ必要はない。もし宗教家や藝術家が、かれ自身の宗教なり、藝術なりが、眞にかれの生活の創造であり批評であることを信じ、それによりて自己の生活が充實されたと自覺するならば、かれの宗教、かれの藝術はかれ自身にとつては絶對のものであつて、たとへ世に解せられずとするも何の憂ふる所はない筈である。自己の宗教なり藝術なりの理解者を他に、或ひは後世に求むといふが如きは、まだ眞に自己の創造的生活を味はゝざるものである。

すべて私の生活は運命の大きな流れの上に築かれた刹那々々の波濤的生活である。その流れが或ひは飛沫となつて、或ひはうねりとなつて私の生活に現はれる。私はその刻々に驚異といふ靈しき心の燃燒を通して、運命の本體を捉へようとする。

私は自我本能の命ずるがまゝに、自我の眞實と認むる所に向つて殆んど馬車馬的に創造の生活を營めば宜い。そして若しその生活が社會の道德なり、習慣なりと矛盾するならば、それは社會の道德なり、習慣なりが便宜的であり、功利的であるからである。自我の眞實なる伸展の徑路、自我の眞實なる創造の方向にありては虛僞といふものもなければ、罪惡といふものもない。

私は水の流るゝがごとくその刹那々々に方向を定めて進む。それが私の生活の創造である。そして私は靜かにその流れのさゝやきを聽きながら、私の生活に一つ一つの意義を發見する、それが私の生活の批評である。私はこの意味に於いて創造と批評の二つの特權を持つてゐる。しかしながら私が何んな方向を撰み、何んな谿川を流るゝだけの自由を持つてゐるにしても、私は永刧に亘りて、私の生活の創造のうちに潛んで私の生命の力のすべてを支配してゐる運命そのものから離れることはできない。「高きより低きに流れよ！」といふ運命の力を遁れることはできない。私は生の力を感ずる。しかしそれは運命の力と言つた方が私の心持ちにぴつたりと當て嵌まるやうに思ふ。

驚異！　驚異！

驚異を通して見る私の人生はあまりに淋しい。けれども、その驚異を味ふことがせめてもの私の人生である。私は驚異のために殿堂を築き、更に新たなる驚異のために舊き殿堂を壞ち、そして「これ私の生活の創造である」と叫んでゐる。

戀愛、戰爭、航空、耕作、宗敎、藝術！　みな私にとつては驚異の殿堂を築かんがための多にして一なる顯現に過ぎない。

沈黙の扉

私の生活がどんなに苦しい時でも、私は「私が生まれなかつたら……」といふやうなことを考へたことは餘りない。私自身の生活に對して、どれほど疑惑や失望を抱いてゐる際にでも、私は生まれたことを後悔するやうなことはない。少くとも生命を信愛しようとする心だけは失はずにゐる。

私が惑ふ時、私が悲しむ時、私は一層生命を劬はり、生命を信愛する心を覺える。もし私が自分で自分の生命を斷つことがあるとしても、それは私が自分の生命を疎んじた結果ではなく、餘りに生命に執着し、餘りに生命を信愛せんとした心からであるにちがひない。私は私が自殺するほど眞劍に私の生を想ひ、私の生命を突きつめて信愛することのできないことをもどかしく思ふ。生を信愛する心と、生命を斷つ心とは、全然矛盾してゐるやうに見られるが、私にとつては矛盾してゐるとは考へられぬ。生を熱愛する私の感情と、生そのものゝ眞實を攫まうとする私の理智とが絶えず相剋して、二つの間に溶けがたい隔りができる時、私は盲目的に生命を愛して行くか、或ひは自ら生命を斷たなければならぬ境に入る。私は餘りに愚かな私の理智を悲しむ。私の理智の眼が餘りに力弱きものであることを悲しむ。しかも私は生命信愛の情に乏しいことを餘り經驗しない。殆んど生の信愛そのものが私の生命であり、生活であるやうにすら考へる。生きて行く現實から信愛の心を削つたならばその刹那に私の生活は滅びてしまふであらう。生命信愛——不斷永劫の——はやがていのちの流れそのものではないか。私は何故に自己の生命を愛すべきかを知らない。しかし私は生命の信愛なしには一日も生きて居れない。智慧の實を食はなかつた時のアダムにも生命信愛の念はあつた。否な、かれは生命信愛そのものゝちからに動かされてのみ生存してゐたであらう。

生命信愛の念は人類にあたへられた本然的の意欲である。さらに押し擴げていへば、あらゆるいのちの表現の本然性である。栗の花はいのちの表現のために、微風に搖られつゝ生の信愛に顫いてゐる。庭前の梧桐も、百合も、アカシヤも一樣に同じいのちの懷しさに顫いてゐる。

油のやうな大河の流れに六月の碧空が映る時、燕は輕やかな翅を羽叩いていのちの凱歌(かちうた)をたゝへてゐる。蘆の間の剖蘆(よしきり)も、草原の牝牛もいのちの信愛に輝けるいたいけな眼を瞬いてゐる。

草原のなかに突つ立つてゐる一本の樹に對して私は幾度か「友よ！」と聲をかけて見たいと思つた。今も私は、時々森に入つては眠れるが如き立ち樹に對して、かれのたましひと物語つて見たいやうな氣がする。眠れる銀杏樹のなかに、沈默せる老欅のなかに、人間と人間との言葉が言ひ表はすことのできぬ不可思議な大きな力や、理智や、思ひやりがかくされてあるやうに想ふ。宇宙が造り出された刧初から、樹と樹とは物言ひ、鳥と鳥とは物語つてゐるであらう。それは人間の知らない、また人間の眼に見ることのできぬ世界の言葉であるにちがひない。私の貧しい室のなかにも、私の古ぼけた机の上にも、どんなにか美しい、どんなにか光りに滿ちた世界が表現されてあるのかも知れない。その世界が、蜜蜂や蟻の眼には感じられ、或ひは見られるのであるかも知れない。森のなかにはいのちの靈(く)しきちからが織りなした無數の驚異が秋の夕の星のやうに漂ふてゐるかも知れない。たゞあはれな人間の眼には梢の頬白や、梢の白い天人椿の花瓣のみが見られるだけで、それ以上のちからのあらはれは私たちの意識には映らないのかも知れない。音や色彩ですらも私たちの耳や眼に達するものは、物理學上の約束の内に限られてゐるではないか。私たちは一定の範圍内の振動をのみ感ずることができる。その埒外に置かれたるいのちの表現を知ることはできない。

森といふ森、曠野といふ曠野は悉く眼に見えざる不可思議なものによつてつゝまれてゐる。私たちは紅い花瓣を發見した。白い翅の羽叩きを聽いた。しかしそれが何であらう。限りないいのちの表現としてそれはあまりに貧しい表

現ではないか。かぎりもない美しさ、かぎりもない明るさ、かぎりもない幸福が自然といふ自然のなかに湛へられてゐるであらう。私たちは少かに自然の窓を透して、かすかに洩れて來る法悅のさゝやきや、靜かに漂ふて來る久遠の樂の音を聽くのみである。私たちが見る自然――いのちの表現としての――は、たゞ少かにその窓口から覗いてゐる一輪の花瓣に過ぎない。殿堂の奧から流れて來る樂の餘韻に過ぎない。私たちから永遠に鎖された殿堂、そこに私たちのいのちの交響樂がある。私たちは扉の前に立つて內殿の光明や華麗さやを想像してゐる。

生けるものは悉くその鎖されたる扉の前に立たされてゐる。或る者は喇叭を吹き鳴らしながら扉を叩いてゐる。しかしかれの耳には內殿の樂の音の餘韻すらも聞えない。かれはたゞ、かれ自身の卑しい燥音の反響を聽くのみである。かれはその反響を以て、內殿の樂の音であると想ひなしてゐる。かれは街の人々の前に立つてその反響を繰り返す。かれは角笛を吹いて「我れ天啓に觸れたり、內殿の光明を見たり、內殿の樂の音を聽けり」といふにちがひない。

騷々しき街頭の豫言者よ!

私は幾度かこのあはれなる街頭の豫言者であつたことを恥づる。ともすれば驕慢な私の心は、幾度か扉の前に立ちて內殿の樂音を聽き得たりと思つた。プロメシウスのごとく天火を偸み得たと思つた。私の炬火は何物の影をも照らすことはできなかつた。

また或る人々は最初から扉を背にして立つた。そして街を往來する馬車や自動車や都會の喧騷に對して話しかけてゐた。やがてそれ等の人々は何時の間にか巷の塵のなかに隱れてしまつた。

賢き都會人よ!　力强き勇者達よ!

扉の前に立ちて瞑默してゐた私は、たび〳〵怯惰なる偸安者と想はれることもあつた。また私自身ともすれば爭鬪の氣力なき自分を顧みてあはれに思ふこともある。しかし私は夢を夢みてゐるのではない。自然の殿堂の扉に立つ時

私はたゞかすかなる內殿の光りと、樂音を感ずるだけであるが、私はそれだけでも充分である。私が二年立つてゐようと、或ひは十年立つてゐようとも、その扉は永遠に鎖されてゐるかも知れぬ。人間はしかく運命づけられてゐる。しかしながら私はそのかすかなる光りのなかに、內殿のなかをこむる光明の本質と同じいのちのあらはれが流れてゐることを感ずる。縷のやうな纖音のなかに、永遠のいのちから流れて來るちからの漂ふてゐることを感ずる。私たちは天空の星にまで翔ることはできぬ。しかしながら少かに吾々の世界に投げかけられた天空の星光を分析して、星そのものゝ本質を知ることができる。私たちは一滴の雫は萬滴の湖水に通ひ、一條の入江は萬頃の海原に連なつてゐることを知つてゐる。

鎖されたる扉の前に立ちて、私の胸は內殿から流れ來るいさゝかなる樂の餘韻につれてうごめく。靈しき殿堂のなかに鎖されたる神祕の力、うごめくいのちの高波は、やがて扉の外に立てる私の胸の高波となつて搖らぐ。內殿に溢れたる光明はやがて私の小ひさな胸底の暗を照らして、さゝやかなる光明の世界を私の心奧に形作る。

勇敢な人々が街頭に立ちて爭鬪を宣言してゐる時、私は何といふ意氣地なしであらう。私は驚異につゝまれたる殿堂の扉の前を離れることはできない。

私が眼をつむつて扉によりかゝる時、潮のやうに打ち寄せて來る內殿の驚異は、私の全身の血といふ血を同じ驚異のちからに波打たせる。私は沈默しつゝ、瞑想しつゝ、そして靜かに內殿の神祕の樂の音に聽く。

勇敢なる人々は、人と人との爭鬪にかれ等の生命をかけて戰つてゐる。生の爭鬪を爭鬪せる人々の劍戟の音を聽きつゝ、私は遥かなる森の廢寺の前に立つて、老木の梢に梟の聲を聽き、またはかげらふ正午(まひる)の陽光(ひかり)を浴びつゝ怠惰な安易を貪つてゐるのではないだらうか。私は怠惰者の沈默を守つてゐてはならぬ。私は劍を執ることを知つてゐる。街に出て鬪ふことを知つてゐる。私たちの生活そのものが爭鬪なしには一日も、一瞬も存在しないことを知つてゐる。

しかしながら靜寂なる森のなかの沈默！　沈眠せるが如き廢寺の前の瞑想！　そこに言ひ知れぬちからの歡喜を聽くことのできる私たちの心靈を想へ！

人々が街頭に馳驅する時、それは人々にとりて眞實の生活であり、眞實の爭鬪であらう。しかしながら私が廢寺の前に立つ時、それは私にとりて眞實の生活であり得ないだらうか。そこに生のための爭鬪がないだらうか。

私は爭鬪といふ文字を餘り使ひたくない。爭鬪といふ言葉は私をしてむしろ消極的な、または强者に對する被征服者の弱味を聯想せしめる。私たちの內なるいのちが眞實に充たされる時私たちは爭鬪なしに勝利者たり得る。私たちの生命が爭鬪また爭鬪によりて創造せられ、伸展せられるといふことよりも、私たちの生命が內から自然に湧き出づることによりて、或ひは新たにたえず湧き出づることによりて伸展するといふことが、より多く眞實性を帶びてゐはしないか。

私たちは到底一種の宿命から免るゝことはできない。生命の發現、生命の創造、生命の伸展すらも動かすべからざる宿命の轅につながれてゐるのではないか。いのちは伸展することが自然である、運命である。そして伸展するがままに伸展せしむるところに生命の實感が湧く。靜默の扉前に立てる私の心は、街を驅けつゝある勇ましい戰士のそれよりも深刻な、痛切な、徹底的な爭鬪を爭鬪しつゝあることを信ずる。

嗤かれても宜い、それが迷ひであるならば迷ひであつても宜い。よしそれが夢であらうと、幻であらうと私は靜默の扉に立つて、私の內心に共鳴する驚異の世界のいのちの樂の音を聽かう。もしそのいのちが私のいのちを鼓舞するならば、もしその幻が私の生活の基調となつて、私の生活を根柢から動かして行くものであるならば、それは私にとつて眞實である。現實である。私の個性が靜默の扉前に立つことによりて、眞實の自己を見出すことを得、眞實の生命を實感することができるならば、それこそ私にとつて絕對無二の現實でなくて何であらう。

自然！　それがつゝめるあらゆる驚異！　私は汝の永久に鎖されたる扉前に立ちて汝を崇拜する。汝の慟哭は私の慟哭であり、汝の生長は私の生長である。汝が私語く時私は聽き、私が祈る時汝は私に聽く！

私は永久に汝に面し、汝と語らう。沈默せよ、沈靜せよ、そこに始めて汝と私との心と心とが共鳴の樂を奏づる。

森よ眠れ、白き翅の鳩よ眠れ、天空に眠れ、流れよ暗のなかに沈め！

沈默と暗黑と寂滅！　そこに始めて眞實の生命が動き、眞實のちからが伸展する。

野よ日暮れよ。高原よ風を止めよ。空と水と市街と悉く滅びよ。黝暗と死靜とがすべての世界を支配せよ。そこに始めていのちの潮が高鳴りの響きを傳へる。そこに始めて內なる世界のうごめきが始まる。

私は最後に一言附け加へて置かなければならぬ。それは沈默なる言葉の內容に就いてゞある。沈默とは必ずしも無意識無爭鬪といふ意味ではない。私が强ひて沈默を主張する所以は、ともすれば外に向つてのみ、いのちの伸展を索めようとする現代の私たちの心は、やゝもすれば內なる生命の空虛を忘れんとする傾向を多く持つことを恐るゝからである。

沈默は內に向つての爭鬪である。沈默は靈の世界に於ける戰ひである。沈默は我れ自身に向つての爭鬪である。社會、他我に向つて戰はれる爭鬪は時として絕ゆることがある。けれども我自身に向つての鬪ひは永遠に絕ゆることはない。眞に生きる者は常に我自身の內に鬪ふことを忘れない。

沈默は內なる世界の覺醒である。內なるいのちのうごめきである。眞に永遠なるいのちの伸展である。

此の半世界が日暮るゝ時、他の半世界が光明の世界を現すやうに、私達の心が外から內に向けらるゝ時、私達の眞實の世界が私達の內に現じて來る。

沈默は內なる世界の光被である。

超人の心境

佛陀も慈悲を說き、キリストも愛を說いた。そしてかれ等は何時もその周圍から一歩先きに進んで歩いてゐることを自覺してゐた。かれ等が權威を以て道を說いたのはたしかにかれ等が周圍の人々よりも前方に進んであることを確信してゐたからである。

今日、私たちは人を愛せんがために、或ひは自己を愛せんがために絕えず鬪ひを續けて行くのであると信じてゐる。しかも愛せんとして愛し得ざる悲哀を繰り返してゐる。

何故に私たちは人を愛しなければならないのであるか。何故に私たちは鬪ひを續けてまでも愛といふ一念のために悶えなければならないのであるか。

愛するといふことは、そんなに愛せんとして愛し得ざるの苦痛を伴つてゐなければならぬものであらうか。無論現在の私たちにとりては人を愛せんがためには非常な努力感を伴ふてゐることは事實である。人を愛せんとする半面には常により以上な憎惡や嫉妬や怨嗟の情が動いてゐることも事實である。

けれども愛といふものが人間として自然的な心情のあらはれである以上、愛は常に苦痛を伴つてゐるものだとは思はれない。まだ苦痛を伴つてゐる間は眞實な愛がその人の人格內に動いてゐないのではあるまいか。

さらに考へて見なければならぬことは人生は愛そのものゝためにのみ存在してゐるのであるか、或ひは愛以上の何ものかを私たちは索めてゐるのではないかといふことである。

人生に對して、或ひはこの宇宙のあらゆる顯現に對して、未だ曾て驚異の眼を瞠らなかつた者は一人もあり得まい。

私たちが生きてゐるその事すらも最大の驚異であり神祕である。昔、私たちの祖先が智慧の木の實を食つたのは、畢竟この驚異、この神祕の扉を開かんがためではなかつたか。

メエテルリンクは「吾々は努めに努める、けれども吾々の最高の思想は常に不確で、落ち着きのないものだ」と言つてゐる。その最高の思想といふのは神祕或ひは驚異といふやうな感じにつゝまれてゐる私たちの憧憬の的ではないのか。

無限の遠きにある或るもの、私たちが達せんとして達することのできぬ遙かな世界の眞實在、これやがて私たちの全生活を盡して絶えず焦燥の心を抱いて索めてゐる世界ではないか。

無限より無限にあこがれて行く心、驚異より驚異に、神祕より神祕に、そして私たちの眞實の故郷を見出さうとする努力、そこに人生の光明があり、法悅がある。同時にそこに私たちの悲哀があり、暗黑がある。しかもそれが生のすべてゞあり、生の最終の努力である。

現實に生きよ、人と人との交渉に生きよと叫ぶ人々がある。けれども印度の聖者が言ふ「遙かなる或るもの」、或ひはメエテルリンクが叫ぶ「最高の思想」に對する私たちのあこがれや翹望を他にして何處に私たちの生活の基調が潜んでゐよう。永遠に鎖されたる扉の前に立ちて泣けるもの、悲しめるもの、焦燥てるもの……これ等の現象を他にして何處に現實の世界があらう。互に憎み、互に愛し、互に相鬪ひつゝ生きて行くところ、そこにのみ現實生活の緊張があり、努力があり、充實感があるといふのは、餘りに人生をば外的に考ふる偏見に墮してゐるからである。相愛すること、相憎むこと、相鬪ふことを透して、或ひは更に愛憎の生活を超越して、より以上の生活に於いて遙かなる或るもの、または最高の思想に詣り得べき信仰を抱きつゝ、生活することが眞實の生活ではないか。

キリストの如き、佛陀の如き、マホメットの如き、或ひはソクラテスの如き、聖フランシスの如き人々は、この生

活にまで詣ることのできた人々である。

私は「一世紀の間にたゞ一人か二人の人のみが嶺の頂に立つことができる」といふ言葉を記憶してゐる。私たちの行かなければならぬ道は少くともこの山頂ではないか。古來多くの豫言者達はすなはちこの嶺の上に立つことのできた人々である。私たちは少くともこの豫言者の地位までは引き上げらるゝことをその理想としなければならぬ。

×

幾千年の間といふもの、多くの人々は谿の底にゐて相愛憎しつゝある。けれども豫言者は或る遙かなるもの、或る最高の思想に向つて一歩一歩嶺の頂に近づいて行く。無論かれは谿の底の人々を忘れるのではない。かれの兩脚は地についてゐる。けれどもかれはたゞひたすらに相闘ひ、相愛憎することのみのために、かれの智慧の命ずるところを忘れはしない。かれは絕えず遙かなる世界の神祕の天火を盜み來らんとするプロメシウスの役目をしてゐる。かれは自然を通して、或ひは人と人とを通して常に絕えざる生命の神祕を凝視してゐる。かれには悲觀もなく、樂觀もない。かれには唯驚異と感謝との念に敬虔なるかれの一生を獻げようと努める。念々刻々かれの生活には憧憬れと感激のみがある。もしかれの生活に悲觀と樂觀とを允すならば、かれに於いては大悲觀即ち大樂觀であらう。かれは或る刹那に於いては大なる悲哀、寂寥、孤獨の感に擊たれるであらう。或る刹那には躍り立つほどな歡喜や光明に動かされるであらう。けれどもかれは何時もかれの周圍を取り圍める弱い人間や、あはれな兄弟を忘れない。かれのうちには最早やかれ一人が生活してゐるといふこと、かれ一人が泣いてゐるといふこと、或ひはかれ一人が喜んでゐるといふやうな考へ方は恐らく取り去られるであらう。群集を離れてかれの生活なく、群集を離れて寂寞も悲哀も法悅も存在しないであらう。かれの生活には幸、或ひは不幸といふことは何の價値もないことゝなるであらう。たゞ眞實、實在、ふ生といふことのみがかれの生活を支配するすべての力となるであらう。かれは嶺の頂に立つて睿智の眼を開いては實

在の姿をまざ〳〵と凝視するであらう。かれは絶えず山嶺を徂徠する神祕境の涼風にその面を吹かるゝであらう。群集はかれを通してかすかなる山嶺の聲を聽きつゝ、少かに未知の世界を想像しようと努めてゐる。山嶺のかれ自身も亦谿底に呻吟せる人々に對してかれの感激を傳へようと努める。けれども眞の山嶺の日の光りを仰ぎ、山嶺を吹く生命の涼風を實感するものは山嶺に達し得たる人のみに與へらるべき神のブレッシングである。佛陀は佛陀一人のみ佛陀の涅槃を味ひ、キリストはキリスト一人のみ眞に神人合一の至境を味ふことの可能なるを知つてゐる。マホメット一人のみ眞にマホメットが直感したる世界を知り、ソクラテスのみかれの明智の境を知ることができる。

ソクラテスの後にソクラテスなく、佛陀の後に佛陀はない。この意味に於いて私たちがもし或る宗教を信ずることによりて救濟せらるゝといふやうなことは妄信である。人には人を裁く力がないと同時に、人には人を救濟する力はない。キリストを信ずることによつてキリストとなることはできぬ。私たちはキリストによりて或ひは佛陀によりて刺戟せられることはある。けれどもキリストたり佛陀たることはできない。私たちの努力によりて私たちは或ひはキリスト以下たり、或ひは佛陀と同じレヹルの明智を有することもできる。或ひは佛陀、キリスト以上の大明智となることも不可能でないかも知れぬ。けれどもかれ等と同一であるといふことはできぬ。佛陀の個性とキリストの個性とが異つてゐるやうに、私たちの個性と佛陀やキリストのそれとは異つてゐる。私たちは全然異りたる個性の所有者として或ひはキリストの如く、或ひは佛陀の如き人となることもできるであらう。けれども決してかれ等と同じものではない。そしてかれ等はかれ等自身のためにのみ生きてゐたといふことも出來る。卽ち絶對の無我は絶對の自我であり、佛陀もキリストも最も偉大なる自我の大藝術を創造したものであると言はなければならぬ。絶大の豫言者は絶大のエゴイストである。絶大の超人であり、貴族である。

人は人を愛し、人は自然をも愛し、そこに眞實の生命の交響樂が奏でられるやうに思ふ。けれども私たちにはまだ

眞に人を愛し、眞に自然を取り容れて行く心の準備さへ充分には盡されてゐない。

私たちは常に深きより深きを、遠きより遠きを追ひ索めてゐる。しかも私たちには恐らく永遠の神祕の扉を破り、遙かなるものゝ一境に詣ることは允されてゐない。よし私たちが嶺の頂に立つたとしても、まだそこからは天に達するには永遠な時と空間とが横たはつてゐる。キリストも佛陀もこゝに立つて人間の力の偉大なるを知ると同時にいと小ひさきことを知つた。かれ等はこゝに於いてか絶對の實在者に對して謙虚な心をさゝげずには居れなかつた。かれ等の心眼を通してあらゆる世界は神祕と驚異と慈悲と悲哀とに充てるものであつたらう。かくてその絶對なる實在の前に歔欷しつゝ感激する者の心はあらゆるものを美とし、あらゆるものを靈しき人生の道伴れとして取り容るゝ。扉の傍に響く行人の跫音も、黎明の光りを浴びたる市場の人々も、途上無緣の風のごとく徂來する人々も一樣に未だ知られざる世界にあこがれつゝしかも到り得ぬ悲しみを悲しみつゝある道伴れでなくて何であらう。

かくてかれの敬虔な心は自然に對して、人間に對して言ひ知れぬ懐しさと、慕はしさとを覺えるであらう。頑是ない嬰兒の寢顏にも、低頭れてゐる乙女の横顏にも、岩を碎いてゐる男の額にも言ひ知れぬ遙かなる或るものを索めて、尙ほ索め得ぬ悲哀の影の顫いてゐることを知るであらう。囚人の眼にも、殺人者の瞳にも刧初より永遠に流れてゐる悲哀——遙かなる或るものに達せんとして達し得ぬ悲哀——が湛へられてあることを知るであらう。無限なる力、無邊際の神祕を驚異する敬虔の念は、私自身にも、或ひは隣人の額にも、永劫に解き得ざる驚きと悲しみの影が動いてゐることを氣付くであらう。

×

私たちは何時までこの「遙かなる或るもの」に對して憧憬れてゐなければならないのであらうか。恐らく人類が生存してゐる間、この充たされざる悲しみはつゞくであらう。人間の生存は畢竟より高い思想に對しこの悲しき努力そ

のものである。私たちは恐らく永遠にこの鎖しを打ち破ることはできない。私たちは知らん事を欲求してゐる。把握せんことを努めてゐる。しかし私たちは感ずることのみを允されてゐる。そして知ることを允されてゐない。たゞ最高の思想を感じつゝあこがれて行くことのみが人生にゆるされてゐる。聲なき聲を感じ、色なき色を想像することはできる。けれどもそれを如實に把握する力は賦へられてゐない。こゝに智慧の果實を食つた人間の悲劇が生まれる。私たちの原人が食つた果實は智慧のそれでなくして、盲目な感觸の果實であつた。

私たちは雲の漂ふことを感ずる。けれども何故に雲が漂ふかを知らない。私たちは花の咲くことを感ずる。木の葉の凋落することを感ずる。けれども何故に咲き、何故に凋落すべきかを知らない。私たちは生きることを感ずる、死ぬることを感ずる。けれども何故に生き、何故に死ぬるかを知らない。人は生の創造といふ、けれども何が故に生を創造しなければならぬかを知らない。

私たちはたゞ感じつゝ、感激しつゝ無始より無終の世界に神祕と驚異とに浸されつゝ、遙かたる或るものにあこがれつゝさ迷ふ。

私たちはその何の故であるかを知らない。けれども私たちは生まれる、生きる、感ずる、そして死ぬる。感ずる、けれども知ることのできぬ悲しい人間の運命、そこに私たちの絶えざるあこがれがあり、焦燥があり、悲哀があり、執着がある。私たちが實感したる現在が既に過去となる時にも、私たちは終に實感を通して遙かなる或るものを把握することはできない。來らんとする未來に對しても私たちは仍り何ものをも把握し得ざる悲哀を繰り返す。過去と未來とが悉く惑瞑の暗にのみ鎖されてゐる人生にありて、私たちはたゞ現前實感の世界を感受するの他に何物をも賦へられてゐない。私たちは現前の刹那的な生の燃燒に對してたゞ貪るほどの執着と、憧憬とを感じつゝ生きる。よしそれが悲しくとも、淋しくとも、私たちは貪り盡すまでに現前の生命を執着し、熱愛する。――たゞ現前の生命

のみが私たちに賦へられた唯一の實感の世界であるが故に。

かやうな寂しい人生の相を見る時何うして人が憎まれやう、何うして兄弟相闘くことができやう。癩病人、乞丐、中風病、收稅吏、娼婦、囚人といふやうな差別が何うして立てられやう。彼我ともに淋しい暗から暗を辿つて、たゞ現前の一刹那に於いて辛うじて生そのもの〻かすかな跫音を聽いてゐるのではないか。

人を怒る者の眼にも涙が湛へられてあるではないか。人を殺す者にも、盜む者にも、欺く者にも、全勝を矜れる將軍の眼にも絶えざる懷疑と感激の涙が湛へられてあるではないか。

私たちは人を目して敵と呼ぶ。けれどもそれが何で敵であらう。見よ、かれも亦寂しい人生の道伴れではないか。たゞ實感することをのみ允されて、知ることを允されない同じ運命の兄弟ではないか。人間のどん底からこみ上げて來る永久の寂寞がかれをして人を殺さしめ、かれをして欺かしむるのではないか。

かれは弱き者である、愚かなる者である。けれどもかれは常に善良なる者である。私たちはこの悲しき運命を受け容れることの他に現實の人生を持つことはできない。けれど私たちはかくのごとき運命を呪はうとも、悲しまうとも思はぬ。索めんとして索め得ぬ最高の思想、「遙かなる或るもの」を索めつ〻、しかも刹那々々に直感し行く生活の底になほ私たちは不可思議なる永遠の蠱惑を感ずる。

私たちは隣人を愛せんことを欲する。けれども隣人を愛することのみによりて眞實に私たちの生活が行くべき道を歩むことができるであらうか。眞實に實在そのもの〻姿を把握することができるであらうか。さらにまた愛んせがために愛する心よりして眞に隣人を愛することができるであらうか。私たちが愛のための愛を唱ふる間、私たちは愛せんとして愛し得ざるの悲哀を繰り返さねばならないのではあるまいか。

私たちは山巓の一人者たらんことを欲する。超人たらんことを欲する。絶えず最高の思想に向つて、遙かなる或る

ものに向つて思慕憧憬の念を忘れ得ない哲人の境に詣り得たる刹那に於いて始めてキリストの如く人を愛し、佛陀の如く大慈大悲心を抱くことが出來るのではあるまいか。

しかも最後にかれ自身は絶對の、超人たると同時に、大悲觀者たるのではあるまいか。悠久の悲哀、寂寞、そこに超人の行き着くべき未來が待つてゐるのではあるまいか。

自我燃焼の歎美

私たちは未だ發見せられざる眞理に向つて感謝しなければならぬ。隱れたる眞理のうごめけるところに、私たちの生活の日々の新らしさと命とが流れてゐる。

私たちは毎日々々、埋もれたる眞理を探し歩いてゐる。私たちは過去幾年に於いて、聞き飽きるほど生、眞實の生活、生の充實といふ言葉を聞かされた。

生命とは何であらう？　眞實の生活とは何であらう？　私たちは新らしき哲學の解釋を待つまでもなく、渾然として永遠の時を流るゝ大生命の實在を想はずにはゐられない。しかしながら大生命の實在、或ひは萬象流轉の根本相を想像し得たところでそれが現在私の寂しい生活に何の慰めにならう？　何の解決にならう？　現代多くの思想家、宗教家殊にベルグソン哲學に根據を置く一派の人々は、主として生命生長の歡喜を說き、生命の跳躍を高調するが、それが私の沈滯し切つた生活に何れだけの光明を與へたであらう。

私は街に出て終日秋の陽を浴びて歩いた。私は幾度か丁字路や三叉路や、十字路に出會つた。そのたんびに私は右に行くべきか、左に行くべきかを考へなければならなかつた。私は雜作もなく自分の行くべき道を選んだ。私は豫定せられた目的によりて道を選んだのではなかつた。私は何か一つの決定せられた目的によりて南北を決めたのではなかつた。私は日當りの良さゝうな道を取つたこともあつた。柳の並樹が快い蔭を作つてゐる方向へ歩いて行つたこともあつた。不圖した好奇心から灰色の建物の方へと曲つたこともあつた。そして私が夕暮に辿り着いたところは、何時も申し合したやうに賴りない、不安な、なげやりな哀調に顫いた街の家並みであつた。

私は疲れてゐた。重い鐵鎖を引き摺る囚人のやうにして、懷しい夕暮の燭を慕ふて人々の扉の前に立つた。當て途もなくさ迷ふ巡禮者のやうに。

空には永遠の謎を瞬く星の光りがあつた。薄暗い軒下を拔けて、廐から醱酵する牧草の甘酸いもの丶香が襲ふて來た。

濁酒を爐に突き込んで、他愛のない野良唄に夜を更かす若者等もあつた。かれ等の唄の絕望的な諧律! かれ等の笑ひは何と機械的ではないか? かれ等の原始的な傳說が、夢路を辿るもの丶やうに、家から家の爐邊に繰り返されてゐる。かれ等の愚昧な眼が自然の驚異に脅かされてゐる。かれ等の一日がかくして劃られて行く。かくして寂しい人生の一頁がひもどかれて行く。

夕暮の街! 夕暮の村! これが私たちの行き着くべき一日の最後の場面であり、これが寂しい私たちの一生の最後の場面ではないだらうか。

生の歡喜! 生の跳躍! 何と輝かしい、何と曉々しい言ひ現はし方ではないか。私は過去の幾年間、これ等の言葉の眩いほどな光明や、私の幼い心を蕩かすやうな潤熱に、私の寂しい生活――私が本然的に忍びつ丶步いて來た荒寥たる宿命的生活――から、自覺的な自主的な生活の新らしい世界を開拓し得たかのやうに想ふこともあつた。「俺は勇者である。俺は運命の創造者である。俺は生命の愛撫者である。俺は生命それ自身の表現である。」私は聲を大にしてこんなことを繰り返して言つて見た。殆んど內省する餘裕さへないくらゐに、生命! 生命! と叫んで見た。

私はひたすらに燃ゆるばかりの生命を想ふた。私は爛熟したばかりの果實に見る生命の强烈な魅力を想ふた。私は乙女の透き通るばかりの頰肉にたゆたへる歡樂を追ふ生命の脅威にをの丶いた。私はその刹那の生命に驚歎した。「すべての生命は力である。力のある所に生命の囁きがあり、生命の囁きがある所みな眞實である。生命の基調と共鳴す

るもの、みな美である。美は悉く眞實であり、道德である。生命の力は衝動の振絃に鳴つて、そこに永久に若き戀の歌が唄はれる。そこに法悅の光明が人生を衒耀する。生命！　生命！　永遠に青春爛蕩の高潮時をのみ知つて、頽廢幻滅の虛無を知らざる生命！　私は生命をこんな風に考へて見たのであつた。

「私は今、生命を攫んでゐる。」「私は今生きてゐる。」と思つた刹那に、私は自分の幸福を賦へる生命の本體に向つて感謝せずには居れなかつた。

生命！　生命！　爾の名の美しいことよ、爾の名の力强いことよ。しかしながら、その名の美しいことゝ、力强いことゝが私の生活にとりて何の希望をも光明をもめぐんではくれない。私は聲を大きくして生命！　生命！　と叫んで見た。しかしその聲には何の力も充ちてゐなかつた。私は尙一度起つて、最後に渾身の力をこめて生命！　と叫んで見た。私はその錆びたる聲の空虛であるのに驚いた。落葉し盡した冬の森を踏む旅人のやうに、灰色から灰色の空間に吸ひ込まれて行く私の聲の滅び行く姿を私は凝然として姑く見つめてゐた。聲は錆びてゐた、しかしそれは私の生命の片影ではなかつたか。小ひさな振動であつた、しかしそれは私の生命から絞り出された生そのものゝ勞作ではなかつたか。

私の生を索めんがために、私は眞實の生命を攫まんがために、生！　生！　と叫んだ。その聲こそ私の肉體から切り放たれた眞實の生命であつた。私は「生」を叫ぶ每に私の肉體に宿る生命の一片一片を吾自ら切り放つてゐることに氣付かなかつた。天に向つて私の嚴かな心が生を索むる時私は祈りの聲を擧げた。しかもその聲の一旋律が私の生命の肉の一片一塊であることに氣附かなかつた。

私は生を創造せんがために生きてゐるのではない。生を浪費せんが爲めに生きてゐる。生の總支拂ひを果さんがために生きてゐる。私の日々の勞作、それは私の生の創造ではなくして、私自身を作つてゐる生命の放散なのだ。若し

私の勞作が創造であるとするならば、私の日々が創造であるとするならば、私は永遠に廢滅といふ悲しい運命を知らない筈ではないか。今日の創造を踏み臺として私は明日の創造に入るべき筈である。そして永遠の創造に私は生きなければならない筈ではないか。しかしながら私たちは一瞬でも廢滅、寂滅といふ背景を持つことなしには生きて行かれないのではないか。

常識的な肯定論は吾々の寂滅を以て、更に新らしき生命に入る準備としての假死に過ぎないとも言ふであらう。もしさうであつたならば、何と價値のない現在ではないか。未來世の光明界を渇仰する迷信と五十歩百歩の差ではないか。私が若し來世界を希望するといふならばそれは未來世が光明であるからではない。それは暗黒であり、虛無であるからである。私が死の境を冀ふならば、それは死の境が無であるからである、全虛無であるからである。

現實を戀ふ切なる生の要求はこの寂しい心から生まれたものでなければならない。私たちは過去の創造の骸の上に立つて今日の創造に生きてゐる。そして明日の死の淵を瞰きながらなほ生を索めてゐる。

×

生とはたゞ現在に於ける勞作の對象に過ぎない。生とはたゞ創造自覺の刹那的實在に過ぎない。私が過去に於いて戀人のやうに索めてゐた「生の影」は、私の刹那々々の創造のひらめきに過ぎなかつた。私は私の肉體のなかに本然的に眠らされてゐる生命の持續を持つてゐる。長い長い生命の持續の黄金絲を持つてゐる。私は本然的にその生命の絲を繰り出す。私はその勞作を「日々の創造」と言つてゐる。時の進みが、日の影を喰み盡して行く毎に、私の生命の黄金絲も小止みなく死の影へと繰り出されて行く。その小ひさな金絲の上に朝の太陽が紅薔薇の色を投げかけることもある。私の金絲がその光明の法悦をしみ〴〵と味ふ、そして私は美しき生の創造！　と呼ぶこともある。或ひはその小ひさな金絲の上に冬の夕陽が雪國の荒寥たる頽影を漂はすこともある。寂しい生の創造ではないか！　私はかく

想ふこともある。
生命の黄金絲は絶えず手繰り出されてゐる。朝の影と夕の影とを泛べて、齊しく暗黒と死滅の夜に向つて手繰り出されてゐる。
生命！ 私の生活のすべてを支配する生命！ 幻滅より幻滅に入る生命！ 死と死の境を結びつくる短い連鎖、それが私の生命である。暗影と暗影とを境する刹那の光明、それが私の生命である。
戀人のやうに懷はれてあつた生命！ お前ほどいぢらしいあはれな運命を荷うた實在が何處にあらう。
生命！ 生命！ 私は昨日までお前を美しいものとして憧憬れてゐた。お前を強いものとして待つてゐた。お前は美しいものではあつた、しかしお前は強いものではなかつた。お前はいぢらしいものであつた。いたいけな嬰兒であつた。あはれな處女であつた。
生命！ 私はお前を強いものと想へばこそ、お前を呪ひもした、お前に反抗もして見たいと思つた。しかしながらお前は美しいものであつた。弱いものであつた。私たちの寂しい旅の唯一人の道つれであつた。私は今お前を崇める氣分を失つた。そのかはりにお前に反抗する心持ちも失つてしまつた。お前は今から私の可憐な妹だ、私の戀人だ。弱き者としての戀人だ……
人生の暗黒と悲哀から生まれ出でた人々の索むる生の執着はこれでなければならぬ。暗の森から出でゝ暗の森に盜らるゝ旅人には、森と森の境を劃る一刹那の光明界が何うして懷かしくないことがあらう。今私たちは「生」といふその一と時の光明界に投げ出されてゐる。通り過ぎて來た森の冷たい風が、また私たちの柔かな髮に慄へてゐる。行く手の森の暗い底からは言ひ知れぬ恐ろしいどよめきが呻いてゐる。私たちは今刹那の光明を浴びてゐる。そこには紅い花が咲いてゐる。そこにはなだらかな銀線がさゝやかな諸律を奏でゝゐる。そこには若い人々の心と心とが同じ波

動の胸のときめきを聽いてゐる。そこには戀がある。愛がある。やさしい涙がある。美しいねたみがある。大理石の肌に絡んだ綠髮は、放縱な生活の歡喜に賦立つてゐる。生存の欲望が人々の肉體を透して燃えてゐる。刹那々々の生活！　そこには量り知れぬ美しさと眞實さとが盛られてある。そして私たちが進んで行く時すべてこれ等の生活燃燒が私たちの肉體を透して實在そのものゝ呼吸を私たちの心絃に響かしめる。私は行く手の暗を想ふことをしない。暗と暗との境に横はるこの刹那の人生を絕對のものとしなければならぬ。その刹那の實在は悉く、光明に輝かされ、光明に生きてゐるが故に、その悉くが善でなければならぬ。美でなければならぬ。

生！　生！　お前は弱い乙女であつた。お前は私の寂しい道つれであつた。私たちの寂しい人生に於いて、私たちは可憐なお前より他に、一人の旅人をも見出さなかつた。お前は寂しい乙女であつた。しかしお前は何時も美しい處女であつた。お前のもし何處かに美でない現象があつたとしても、それはまだ私の眼が、お前の全體を美と見るまでに發達してゐないからだ。私は日々お前の美に憧憬れてゐるのだ。それが私の生活のすべてなのだ。現在の私には眞もない、善もない。唯美のみがお前のすべてなのだ。

暗と暗との境に横たはる刹那の人生の光明界に見出さるゝすべては美そのものでなければならぬ。私にとつて人生は美を措いて何物でもない。生とは美の別名でなければならぬ。生は美を表現することによりてのみ、光明とも法悅ともなる。生命の跳躍は美の表現を他にしては存在し得ない。

×

人生とは何であるか。生とは何であるか。暗と暗との境の一光明界に於いて、表現せられたる美の意識境に過ぎない。私たちは寂しい旅人である。虛無より虛無に入る巡禮者に過ぎない。旋律のあはれな御咏歌をうたひながら自らのあはれなリズムに溶け入る幻想者である。野の草花を手折つては、またあはれな御咏歌を唄ふたふ巡禮者である。

途もなく雲の峯を越えて、落葉の森を踏んで、札所々々の古ぼけた山門に立つ巡禮者である。そして自らの物あはれな御詠歌のリズムに、郷愁の涙を見出す巡禮者である。その涙のなかに懐しい美を見出す幻想者である。

生は刹那の表現である。刹那の實在である。實在と表現とみた生の創造の新らしき切斷面である。人生は永遠であらう。しかし私自身にとつて人生の永遠性が何の價値を持つてゐやう。私は私の刹那的な生そのもの、生活そのものに價値を見出すことによりて願ひ足れりとする。私たちはその滿足を購はんがために自我本具の生命力を放散してゐる。絶えざる創造は絶えざる自己生命力の放散である、衰滅である。

創造は新たなるもの、或ひは虚無なるものよりして、或る實在を造り出すことではない。自己の生命を裂きて最も端的に生そのものゝ與ふる力を感ぜんがための端的なる表現である。しかしてその最高潮の生命の力は美なる形式に於いて現はされなければならぬ。

私の腕は毎日毎夜永遠に連なる鐵坑を掘つてゐる。私の一生は鐵坑に入りて鐵鑛を斷つことであつた。私の祖先は私の一歩先きにその鐵鑛の勞作に疲れて死んだ。私は同じ鍬を振つて同じ勞作を繰り返してゐる。一刹那前に私が切り拓いて置いた坑道は次の刹那に暗のなかに沈められてしまつた。私の創造的勞作なしには寸秒の前途もひとりでに開かれることはない。私は私の生命力のすべてを傾けて堀鑿の勞作を始めなければならぬ。私の生命が放散せられては、鐵鑛と相擊つ鍬の刄の閃光となつて暗の底に明滅する。私の生命の刹那々々の消滅！　それが私の創造であり、勞作である。それが刹那的閃光となつて、人生の最高潮を表現する。私はその閃光を唯一の眞實在として求むる。

虚無から虚無に、暗から暗に押し流さるゝ運命の人々！　暗に咲くでもあらう黑百合は、私たちの美的、實感的生活に何の關りがあらう！　私たちは虚無と虚無、暗と暗との境ひ目の光明の刹那に、せめて心ゆくばかり白百合の美しい瞬きに醉はうではないか。私たちが切り拓いた道の後ろには、永久の暗が私たちの踵に跳び附く狼のやうに、私

たちの生命を脅かしてゐる。私たちの前面は未だ人間の斧を入れぬ森の暗である。人々よ、生命の斧を振つて未知帰の梢を斫れ。人々よ斧と梢の相撃つては散らす閃火を見よ。何と美しい火花ではないか。私たちはその火花を見つめる。まじろぎもせずに。私たちは幾度も暗のなかに立ちて美しい火花！　をたゝへた。閃光の美をたゝへた。しかしながら誰も、その火花が私たち自身の生命の放散であり、死滅であることを知らなかつた。私たちは自己の骨を焚き、自己の肉を燃やした暗の焔を見て驚歎しつゝあるのだ。自己の生命の死滅が齎らす閃光にはゝ笑む人生の巡禮者！

閃光がひらめいた。人々の笑ひ聲が聞えた。閃光が消えた。人々の笑ひ聲が絶えた。すべてが暗のなかに吸ひ込まれた。あはれなる自己燃燒の生存者！

それでも私たちは少しでもじつとしては居れない。過去は虚無であつた。未來は暗黒である。今私たちに現實と勞作と創造の力を與へられたこの刹那に私たちは自分の肉を裂き、自分の生命を投げ出してせめてもの閃光を作り出さう。そしてその閃光を讃へよう。その光耀に白百合の美しさを認めよう。

刹那！　刹那！　現實生命の刹那！　虚無から虚無に入るその境界の生の刹那！　私の生命のすべてをその刹那に燃燒しよう。そしてその刹那に私の生の力のすべてが快く燃えて行くひらめきの美しさを見よう！　現實刹那の生命の尊さと美しさは、寂しき運命論者によりてのみ味はゝれるであらう。

愛の伸展

一と口に愛といふが、與へるところの愛と、與へられるところの愛とは餘程異つた內容を持つてゐる。愛は與へるところに最も多く生命の歡喜を伴ひ、與へらるゝところに最も強く生命の悲哀を感ずる。

私たちは私たちの周圍を形作つてゐる多くの人々に對して、絕えず愛の交換を實驗してゐる。この全世界が全一として活動するところには必ず愛の力がその根本調をなしてゐなければならぬ。友人、夫婦、父子、戀人、すべての人と人との關係が靈から靈へといふ狀態に於いて結ばれんがためには、必ず愛が私たちの生命表現の全基調として燃えてゐなければならぬ。しかしその愛は與へるものでもなければ、與へられるものでもないといふ狀態に於いてはじめて愛の愛たる生命をあらはし得る。例へば君臣、師弟、主從、といふやうな相對的二元的な態度に在りては眞の愛の力に感ずることはできない。愛を與へる者と與へられる者とを前提したる如き關係に於いては、未だ眞に愛の焰は燃え盡せない。「俺はかれよりは強きが故に、かれを愛してやる」のだといふのであつたならば、それは愛を弄ぶ者である。恰かも陰陽二つの電流が合しなければ電光を發しないやうに、愛は相互から同時に湧き出づる時に於いて最も強き光りを發するにちがひない。勿論愛は同時に起るものでないかも知れぬ。同時に起り得ない場合も多くあり得るにちがひない。しかしながら一つの愛が動けば、他の愛が眼醒めなければならぬ。盲ひたる心、頑な心の鎖しを破つて柔かな愛のよろこびを感じさせるものは、より強き愛の力でなければならぬ。

靈を喚び醒すものは靈であるが如く、眠れる愛の扉に立ちて鎖されたる愛を喚び醒すものは愛の力でなければならぬ。

ガリレア湖畔の無學な漁夫達を率ひて、その敬虔な宗敎的生活に入らしめたものはキリストの智でも才でもなかつた。たゞかれの愛の力であつた。マグダラのマリアをしてキリストの足に香油を灑がしめたものもまたかれの愛そのものゝ力を他にしては考へられぬ。

私はこのころ毎日いろ／＼な人達と接觸してゐる。殊に始めて見るやうな人がかなり多くなつた。そしてその多くは私より年長の人達である。その人達に接するごとに、私の平和であつた心の狀態が絕えず掻きみだされるやうなことが多い。できるならば私は此の境から逭れたいと思つてゐる。しかし私は自分の麵麭を索めんがためには、何うしても今の自分の境を急に打破することはできない。たとへ私が假りに此の境から逭れ出ることができたにしたところで、私は結局人間の境から逭れることはできない。

Misanthropist となることは卽て人生から全然厭離することである。死そのものである。自分を靜かに守りながら、自分といふものを密かに勞はりながら、しみ／＼と人生を味つて見たいといふ心持ちと、生きて行かなければならぬ、麵麭を索めなければならぬといふ要求とが何時も私の生活に悲しい矛盾や分裂やを齎らしてゐる、

生きんことを欲する間、麵麭を索めてゐる間、私はこの苦痛から逭れることはできない。しかし私が日々經驗してゐる幾多の苦痛、幾多の屈辱といふやうなことは何れの社會にはいつて行かうとも同じやうに嘗めなければならないものである事を思ふ時、私は人生を厭離すべきかまたは突き進んで行くべきかに迷ふことがある。幾多の人生の呪詛者、Misanthropists はこゝに至りて、人生を厭離すべき方法をとつたのであつた。しかしながら古來誰れ一人として、眞に人生を厭離し、人生を忘却し得たものが果してあり得たであらうか。私はこのやうな問を發する自分の愚を笑はずには居れない。

生を要求する間、私は人と人との接觸から離れることはできぬ。そして誰れもが眞個に自分といふものゝ全的な交

渉を取りかはすことのできぬ悲しさを感ずるにちがひない。そして多くの場合私たちはやゝもすればその罪を他人の上に置く。かれが自分を理解することができないからだ。またはかれが自分に愛を與ふることができないからだといふやうに考へることが隨分多い。私たちはこゝに考へなければならぬ重要問題が潜んでゐるやうに思ふ。卽ち自分がかれを理解せず、自分がかれを愛することができなかつたといふことを私たちは第一に考へて見なければならぬ。極めて通俗的な倫理觀であるかのやうに聞えるかも知れないが、眞實私たちが人と人との生命の交渉を營む際には、どこまでも閑却することのできぬ問題である。例へば今日まで私たちは隨分赤裸々な自分を提げて人々と接したやうであつた。しかし人々は私たちに對して幾何の眞實なかれ等自身をも現はして吳れなかつた。私たちが赤裸々で接近すればするほどかれ等は障壁を築いて私たちに對するやうに思はれた。こゝに於いて私たちはやゝもすればかれ等を以て僞善者であり、虛僞の人であるとした。かく呼ぶことを以て私たちの眞人であり、新人であることを標榜するかのやうにさへ考へたこともあつた。

ドストイエフスキイの「虐げられし人々」を讀んだ時私にドストイエフスキイの寛大な心を思ふて、私たちの焦々しい心から餘りにかけ離れてゐることに驚いた。殊に私は「虐げられし人々」の主人公ソニヤがナターシヤに對して抱いてゐる愛、寛容、犧牲的精神といふやうなことは、餘りにばかばかしいとさへ想つたことがあつた。しかし「死人の家」を讀むに至つてドストイエフスキイがすべての不運なる人々に對して抱いてゐた寛容な心持ちを知りさらにはじめて、ソニヤの心をも窺ひ知ることができるやうに思つた。

幼い子供を誘拐して來ては、かれ等の柔かい四肢に鋭い小刀を突つ込んで、そのひいくと絞り出す泣き聲を聽いて一種の快味を覺えるやうなシベリアの囚人も復活祭が近づけば無邪氣な村の子供等のやうに他愛もないことに感激してその日を待つてゐるではないか。酒の密賣者も、上官殺しの重罪犯人も復活祭の夕となれば節あはれな故鄕の唄

をうたつて罪もない一日を過ごすといふではないか。鐵の扉も、鐵の連鎖も囚へることのできない人間性の尊さが、機會ある毎に閃き出るのではないか。私はドストイエフスキイの心とキリストの心とを結びつけて考へずには居られなくなつた。

キリストは實に人間性の尊さをその窮極にまで捉へてゐた人であつた。かれの眼にはたゞ人間性の無限なる光耀と生命と尊嚴とがあるのみで、決して瘋癲病も、癩病も、蹇もなかつた。かれの眼には人間の肉を透して、永久にかはらぬたゞ一つの靈があるばかりであつたらう。かれが悲しむ時決して貧民の乏しきがために悲しむだのではない、貧しき者の靈の窮乏を悲しむだのである。

×

人間性の尊さを見ぬ者に眞の愛はない。靈から靈に波動するところに眞の愛が成り立つ。肉を透して見る靈なる人間と人間との交渉、そこに眞實の理解があり、融和があり、渾一がある。

人間性の美しさを見ぬ人々の愛といふ愛は、どこまでも有限であり、無常である。時にそれは憎惡となり、怨恨となる。人間性の無限なる尊さを認めたる人の愛は永刧常住のものでなければならぬ。キリストの一生は常住の愛を以て一貫せられてゐた。釋迦もさうであつた。かれ等の眼に映る人間が、肉の上にのみ現はれてゐる刹那的、表現的、象徵的な人間でなくして、悠久、不惑、不變、實相それ自身なる靈である以上、かれ等がこれに向つて注ぐ愛は常住不惑のものでなければならぬ。

私たちの愛が絶えず無常、不安につゝまれてゐる所以は私たちの愛の對象そのものが肉であり、形骸であるからである。私たちが友を求むる時、その友人の面貌や、動作や、境遇やに就いて相互の愛の交渉を要求するならばその愛は必ず不安疑惑の時を經驗するにちがひない。私たちが友を求むる時、その肉を透して輝けるかれの人間性の尊さを

見、かれの心靈を捉へることができるならば、私たちの愛はキリストの愛と同じ力を持ち、いのちを持つであらう。

愛の絶對境を戀といふことができるならば、全人類の交渉は戀の如く潔く純にまた眞劍でなければならぬ。私たちの戀人にとりて私たちはキリストたり得るであらう。キリストはマグダラのマリアにも戀人であり、ヨハネにもパウロにも、イスカリオテのユダにすらも戀人であつたにちがひない。あらゆる時代を通じて、あらゆる人々を通じてかれは人類の戀人であり得る。そこにかれの偉大なる愛の力が潜んでゐる。キリストは肉につけるイスカリオテのユダの悲しむべき謀叛を知つてゐた。しかもキリストはかれを憎むことはできなかつた。キリストは何うしても汚すことのできぬ人間性の美しさをイスカリオテのユダの裡に見出してゐたからである。最後の晩餐會に於けるキリストの愛は最も強くその「師を賣らんとするあはれなる弟子」の上に注がれてあつたにちがひない。さらにかれがゲツセマネの園に於いて祈つた時、かれはかれの愛がまだ最も近き弟子の間にさへ充分生きてゐなかつたことを悲しんだであらう。かれは「主を殺さんとする者は誰ぞ」と訊ねた弟子たちがまだ眞實にかれの愛を理解してゐなかつたことを歎いたであらう。かれはどこまでもその敵を愛することを忘れなかつた。否、かれは敵といふものを知らなかつたであらう。世界を掩ふかれの愛の眼よりしてはそこに一人の敵もあり得ない筈である。靈の眼を透して見る人類のすべてはみな靈そのものとしてかれの前に動き、愛の眼を透して見る生物のすべてはかれの前に悉く味方となり、兄弟となつて現はれたにちがひない。イスカリオテのユダも、パリサイの徒もすべてかれの味方として、かれ自身の反映として現はれたであらう。

私たちはどこまでもキリストの愛を持ちたい。どこまでもドストイエフスキイの心持ちを抱いて隣人を見たい。もし「自分は敵をも愛すると」いふ言葉を、そのまゝに受け取つて自分の生活に愛を活かして行かうと思ふならば、それはまだ眞に愛に生きたる人ではない。眞に愛に生きたる人にとりて敵といふものはあり得ない筈である。かりにも

敵といふやうな觀念を抱いて人に接してゐる間は、その靈は眞實に他我の靈に飛び込むで行くことはできないであらう。まだその人の愛は限られたる愛である。

私たちの生命の擴大といふことは愛の擴大に他ならぬ。生命はたゞ愛によりて傳へられ、愛によりて結ばれ、愛によりてのみ伸展する。

私たちが社會に立つてMisanthropistとなり、或ひは厭離者とならうとする場合に、私たちはユダであり又は稅吏(みつぎとり)である人々に對してキリストが抱いてゐたやうな心持ち、またはドストイエフスキイがシリベアの囚人たちに對してまで拂つてゐた人間性の尊さに對する驚嘆の念を失はなかつたならば、私たちの周圍が餘程異つた氣分や明るさを以て充たさるゝにちがひない。

×

私は多くの人々に接するごとに、何時も人々の顏色を見て自分の心を動かさるゝことが多かつた。現在に於いてもさうである。そこで私にとつては人を訪問することも苦痛であつた。又日々麵麭を索めんがために巷に出て多くの人人と接しなければならないことはなほさら苦痛である。私は自分が接した一人の人の不興氣な顏色を見たゞけで侮辱されたやうな、或ひは裏切られたやうな氣になつて一日悲しんでゐることが多い。例へ自分に對してゞない事までも私は自分の身上に持つて來る性癖がある。或る友人は「人が君のことを何と思つたつて宜いぢやないか、君はたゞ君の眞實と思ふところを盡せば、それで宜い。君は人から愛せられようと思ふから駄目だ」と言つて私を慰めてくれた。私はその友人に感謝する。寔に私たちは人から愛せられんことをのみ要求してゐる。私たちは自分を愛しなければならぬ。人を愛しなければならぬ。キリストは誰の愛をも要求しなかつた。かれはあらゆる人類を愛した。しかもかれほど自己の生命の伸展を實感したる人はないであらう。先づ私たちは自己を理解しなければならぬ。隣人を理解しな

ければならぬ。自己を愛しなければならぬ。隣人を慈しまなければならぬ。自己に對する他人の愛の缺乏、理解の不徹底を歎ずる前に先づ自己の愛の不擴充を歎くべきである。自己を愛する者は先づ自己でなければならぬ。

かれ等はみなあはれなる旅人である。麗しき人間性の光耀を抱きつゝ寂しき道を歩みつゝある道伴れである。怒れる者、かれも靈に生ける人である。罪を犯せる人、かれもまた麗しき人間性の所有者である。これ等の人々は運命の下に寂しき道をひたすらに歩みつゝある。たゞ引き摺られつゝ歩める旅人である。

かれ等は涯もなき行路の寂しさに焦立つて人を殺し、人を傷け、人を冷笑する。しかしながらかれ等は悉く尊き人間性の持主である。かれ等は泣きつゝ人を殺し、泣きつゝ人を賊する。不可思議なる運命の力は默しつゝこれ等の旅人を引き摺つて行く。引き摺られて行く人類のあはれなる行旅の道伴れを見よ!

キリストは寂しき人々の慰め手であつた。ドストイエフスキイも亦悲しめる不運な囚人等の友であつた。

死の歎美者となる前に

死の歎美者となる前に、私は生の歎美者とならなければならぬ。しかし私は餘りに生の歎美者たらむがために、死を恐るゝ者の一人となつた。

死の恐怖！　死の脅威！　あらゆる生の現實刹那の一といへども、死を豫想することなしには味ふことのできないほど私の心は死を恐れてゐる。私が生の永遠を想ふ時、杳々として死の暗が前方の眺めを塞いでゐる。刹那々々の生の微搐を凝視してゐる時、生の一つ一つの痙攣的微搐にすら死の神祕的な影が去來してゐることを感ずる。死は絶えず生きんとする意志、生を味はんとする心の殆んど必然的な隨伴者として、私の全生活の裡に一如の神祕的な背景を作つてゐる。

私は生の擴大、生の確保、生の伸展から生ずる爭鬪、不純、分裂を悲しむがために死を歎美するが如き臆病な時代もあつた。死が何であるかを顧る遑はなかつた。たゞ無限より無限にわたれる黝い神祕的な世界を想像して、そこに永遠に沈默せる私の生の墓場を築いて見たのであつた。

小鳥が巢を離れて初めて綠の野を翔るとき、かれはその古巢を懷ふであらう。その巢立つた梢を記憶してゐるであらう。

私が生の世界に一歩を踏み入れる前に、私は或る神祕な世界を歩いてゐたのではなかつたゞらうか。空の鳥は古巢と梢とを忘れ得ないであらう。しかし私はかつて私が歩いてゐたであらう神祕な世界の一つの記憶をも持つて來なかつた。だけど私の心の何處かに、私が過ぎて來た神祕界の餘韻が顫いてゐるやうに想ふこともあつた。私が太陽の肢

耀かな光明に照さるゝ時にも、神祕的な、靈的な存在が私の動くところに、私が歩むところに、一つの雰圍氣を作つてゐた。それは未來が齎らしたものでなくして過去そのものゝ執着であつた。私を過去の世界へ引き戻さうとする不可思議な力であつた。私は生といふことを想はず、死といふことを想はず、たゞ過去の神祕界を追ふ幻想に生きてゐることもあつた。夕陽の西に入るごとに國境の山の向ふに、紅い雲の下に、私の過去の世界があるやうに想はれてならないこともあつた。

しかし私は何時までも、懷ひ起すことさへできぬやうな過去の神祕界をのみ憧憬るゝことはできなくなつた。

爾、先づこの世界を見よ！

これは私が初めて幼い意識を賦へられた日の何ものかの囁きであつた。

私は餘りに不純な、餘りに擾がしい世相に恐れをのゝいた。現實意識の世界はすべて私の心から過去の神祕界を忘れさしてしまつた。私はこの暴虐な世界を見るに耐へなかつた。古巢の記憶を破壞せられたる私の心は、現在の世界に目をつむつて、そして來るべき世界の神祕に憧憬れて泣いた。私は過去の神祕界から未來の神祕界に向つて一氣に跳び込まうとした

しかし現實意識の世界は私に足もとの草、草の花、露、そしく流れの囁きに、私の注意を喚び起さした。

空を見よ。地を見よ。そして爾自身を見よ！

これ私が驚異につゝまれ、驚異に喘ぎつゝある現實界の神祕に私の生のすべてを意義ありと想つた第一日であつた。

私の周圍を取り卷いてゐる若い人々が生命！　生命！　と叫ぶ聲を私は聽いた。雄々しくも生命の創造に向つて驀進する人々の叫喚を聽いた。或る人々は既に生命の本質、生命の方向、生活に對する私たちの立ち場、態度なりを知り盡し、決し盡したのであらう。生命表現の革新に向つて相爭うてゐる。私は雄々しい私の周圍の人々が羨ましい。

このあはれなる幻想者を見よ！

私は私自身に向つてかく叫ぶ。隣りの人々が驀地らに自我の發現！　個性の發揮を叫ぶ時に、何といふ意氣地ないことであらう。私は終日小川の畔に立つて、さゝやかな流れの音に幻影を追ふてゐるではないか。

人は個性の尊嚴が傷けられた時に爭鬪するといふ。私は自分の幻影が掻きみだされた時、言ひ知れぬ寂しさを感ずる。私は何時この神祕を追ふこゝろから遁れることができやう。私も私の周圍に對して爭鬪を挑むことがある。しかも私が明かに私の主張の上に勝利の冠を贏ち獲たと想ふ時ほど、私は寂しい思ひをさせられたことはない。爭鬪そのものが、悲しい、神祕となつて現はれる。彼れと我れとをつゝむ神祕の海が、むざ〳〵と人間の我執のためにかきみだされることを悲しむ。

私の歩みが遲れても宜い。尚少し私の內を、私の周圍を見よう。しかし私はたゞ見るといふことだけではならない。私は一歩一歩を確かに歩いて行かなければならぬ。それが私の創造である。そして創造の刹那に私の觀照がそのすべてをつゝむでゐなければならぬ。創造をも觀照をも岐つべからざる一境、そこに神祕驚異の世界が生まれる。

私は野の花の悲しみ、嫩葉の悦びを私の胸に直感するまでに到らなければならぬ。私は私の周圍の人々に對して、憎惡の念を抱くことができる。何故私は草や花に對して憎惡の念を覺えないのであるか。暗の背景なき所に光りなきが如く、憎惡の背景なきところに眞の同情、理解、抱擁、愛撫といふものはない。私は人間に對すると同樣に花に對しても、草に對しても、先づ憎しみを持たなければならぬ。そこにはじめて私は伐り倒されたる野末の老木を悼み、低頭れたる四月の花を悲しむほどの理解を持つことができるであらう。ペンを走らせながら窓の硝子戸を通して隣り境の棗の梢に見入る時、その一と葉一と葉が私に何か話しかけてゐるやうにおもはれる。私は盲ひたる私の心を悲しむ、私はあまりに不可思議なあらゆる生の表現に對して驚異の眼を瞠らないでは居れない。

驚異！　神祕！　私と、私の周圍と、そして生きとし生けるものゝ不可思議なる顯現！

神祕を思ふ私の心は、生に對する執着を喚び起した。私は驚異の眼を瞠つて人生の旅路をさ迷ふた。古巣を忘れた野の小鳥は、日の暮れんことを恐れ滿身の生命力を翅に込めて、縱橫無碍に翔りに翔つた。そして見盡せない野の神祕が潜んでゐることを知つた。そこには味ひ盡せない驚異が一片の枯れ葉のなかにも顫いてゐることを知つた。

私は何處までも生きてゐたい。何時までも生きてゐたい。そして一日一日、刹那々々の私の生活が、盛れるだけ盛られた神祕の生活でありたい。味はゝるゝだけ味はゝれた生活でありたい。

私にはこの世界に生きて行くことが幸福であるか、幸福でないかといふやうなことを考へる餘裕はない。私はたゞ生といふ絶大な權威の前に、生といふ峻嚴なる神祕の前に、自ら敬虔の心をもつて跪かなければならなくなつた。私は時として生といふものを憎む。それだけ生に對する私の執着、私の愛は強くなつたことを意識する。

私は死が何であるかを知らない。幻滅であらうと、更生であらうと、暗であらうと、光明であらうと、それは現在の私にとつては齊しく寂しき宿命である。私は極度まで生の神祕を歎美する。絶えず私は死の恐怖を感ぜずには居れない。

眞實に生の神祕を感じたる時ほど死の恐怖は強く私の魂に迫り來る。

生きよ、生きよ何處までも。何時までも生きよ。神祕から生まれて、神祕に生きて、そして神祕に死に行く、私の生活！　そして今生きたこの刹那こそ最大最深の神祕であれ！

4=2×2 であると說明しなければならぬ私たちの生活法はまだ眞實の生き方ではない。野の花を見よ。空の鳥を見よ。私たちが生きてゐることを見よ。

永遠の疑惑

何の宗教でも宜い。葬ひといふ葬ひに連なつたことのある人々は誰も經驗することであらうが、多くの人々はあはれな遺族たちに對して慰めの言葉を與へて「決して泣くものではありません、悲しむものではありません」と言ふ。私たちは殆んど習慣的に不用意な言葉を以てあはれな人々を慰めようとする。

けれどもしづかに考へて見るとこれはあまりにも白々しい言葉である。亡き人の骸は現在眼の前に柩につゝまれ、寂しい影を湛へた蠟燭の白い光りがわなゝいてゐる聖壇の前には眼を泣き腫した不幸な人々が立つてゐる。その人々に對して何うして「泣くんではありません」と言ふことができよう。況して「死は生の門出であります。亡君の靈は天に昇つてゐます」などといふやうな大膽な宣言が下されるものではあるまい。

私たちは未來を信ずることができなくても宜い。死は私たちの心靈の最終の閃きであると信じても宜い。また恐らく然か信ずることが最も眞實な考へ方であるかも知れぬ。私たちはこの悲しい心を持して死者を悼み遺族の人々と共に泣いてやることが眞實の方法であらう。

私たちは私達の心靈が現世のみのものであるとは考へたくない。私たちはおぼろげながら心靈の永生といふことを信じようとしてゐる。けれども現在に冷たい友の屍骸や、戀人の死を見せ付けられた刹那に、果して何れ程の人が靜然として「心靈の永生」といふことを確信して、友の死を、或ひは妻の死を、只生の一變形であるとして受け容れることができよう？

讀經を勤めることよりも、合唱をやることよりも、私たちは先づ子を失へる親、妻を失へる夫、夫を失へる妻と共

に殆んど何等の理性も分別もないまでに泣き得るだけの心を持つてゐなければならぬ。
ラザロが死んだ時キリストが涙を流して泣いたといふことは非常な美しい話ではないか。キリストはたしかに心靈の永生を確信してゐたにちがひない。キリストにとりては人間の死は、たしかに永生の刹那的變形と見られてゐたにちがひない。けれどもキリストは涙を流して泣いた。そこに人間として美しい溫かいキリストの無限な愛が湛へられてあるのではないか。またかれは十字架上にありて將に死なうとするにあたりても殆んど絕望的な歎聲を洩らしたと傳へられてゐる。こゝにこそ、またかれが僞りのない人間らしい人間であつたことが偲ばるゝではないか。私はキリスト敎が樂觀の宗敎であるか悲觀の宗敎であるか知らない。けれども私はキリストが涙の人であつたこと、寂しい人々や、悲しんでゐる人々の道伴れであつたことを想ふ時キリストといふ人は懷しい人であると思ふ。
キリストは罪を知らぬ人であつたといふ點からしては私は少しもありがたい人だとは思はない。寧ろさういふ方面からキリストを見るならば、私はキリストの前に出るには餘りに自分がかれとかけ離れた人間であることを恐れ恥ぢる。けれどもキリストが涙の人であり、慈しみの人であつたことを考へる時言ひ知れぬ懷しさを覺える。
悲しめる者と共にどこまでも悲しめ。悲しめる者をしてどこまでも悲しましめよ。そこに純眞な人間の生活があるのではないか。死者を弔へる人々に對して「およろこびなさい、その靈は救はれました」といふやうな不人情なことを言つてはならぬ。
これと同じやうな過失は私たちの人生の見方に於いても絕えず繰り返されてゐることゝ思ふ。例へば或る人は人生は暗いところであると言ふ。或る人は明るいところであるといふ。また或る人は「人生とは何ぞや」といふ問題のために絕えずなやまされてゐる。或る人は「自分が切り拓いて行くところに人生といふものがあるので別に人生とは何であるかなどゝいふ思索を繰り返す必要はない」と云ふ。私たちはその何れをも是認することができる。同時に何れ

をも否定することもできる。けれども私たちの心から「人生は果して何であらう？」といふやうな根本的な疑ひが全然取り除かれるものであらうか。少くとも私自身にとりては恐らく一生此の疑ひは取り除かれないものであるやうに思ふ。多くの人々が集まつては「生命の創造」だの「自我の擴張」だのといふことをやかましく論じてゐる際にも、私には仍り「人生に對する疑ひ」の念が執念く附いてまはつてゐた。私にはやゝもすると「生命の創造」だの「自我の擴張」だのと言つて騒いでゐたことが、眞實な心からの叫びではなかつたやうな氣がしてならない。

もつともつと大事な問題、身にぴつたりと打つ突かつてゐる問題が日常生活の上に、何時も私たちの上に降りかゝつてゐはしまいか。私は自分の生活を愛し、自分の周圍の人々や萬象を私自身のうちに懷き容れて行かうと思ふ。それと同時に何時も究竟の問題として「人生とは何ぞや？」といふ根本的な疑惑を何處までも何處までも考へて行かずには居れない。死者を弔ふ人の涙を乾かさうとあせる妥協的な宗教や道德は、こゝにも亦私たちの思索の世界にはいり込んで來て「お前はお前の生活を生活しろ、お前は人を愛せよ。そこに眞個な人生が現はれて來る。何時まで悶えたつて悲しんだつてそれが何うなるものか」といふ。けれども私は悲しむ者をしてどこまでも悲しましめたい。疑ふ自分をして何處までも——死ぬ日まで——疑はせたい。

第一に斷つて置かなければならぬが、まだ私は未來を信ずるほどの信仰もなく、人生を明るいところであると斷言するだけの勇氣もない。また生命の創造などゝいふことを大きな聲で宣言するだけの自覺もない。私はむしろ常に消極的な人生の見方をやつてゐる。けれども私にとつて人生は懷かしいところである。過去をも知らず、未來をも信ずることのできぬ私にとつては、それがどんなに暗いところであらうと、寂しいところであらうとも、私に與へられた唯一絕對の現實として人生を熱愛せずには居れない。

×

メエテルリンクも「死」を論じて、死後の未來を眞實の解放だといふやうなことを言つてゐるし、タゴールも亦「死は燭の消滅であつて、太陽の壞滅ではない」といふやうなことを説いてゐる。メエテルリンクにもタゴールにも餘程共通た點があつて一人は神祕といふことから、一人は調和といふ立場から人生を見てゐるが、二人ともむしろ光明や希望を抱いた見方をする人々である。神祕といふことも調和といふことも私には共鳴するところが多い。けれどもその行き方は私とは全然異つてゐるやうに思ふ。「死」に對するかれ等の考へ方はいかにも明るい。私は決して神祕もしくは調和といふことに對してもかれ等のやうな明るい、なだらかな韻律詩でもうたふやうな氣分で取り容れることはできない。

あらゆるものが歡喜のうちに生まれ、歡喜に生き、歡喜の未來に向つて進んで行くといふやうな見方は何うしても自分には考へられない。けれどもあらゆるものが神祕となり、調和となつて、渾然として私自身の心の底にぢッとしては居れないほどの眞實感となつて動いて來ることは經驗することができる。

かれ等にとりては白い花であり、綠の露であつた神祕なり、調和なりが、私には黑い花であり、暗の露であるやうに思はれる。けれども私は、自分に與へられた黑い花や、暗の露を決して人々の白い花や、銀の露と取り換へようとも思はないし、また自分の持つてゐるものをかれ等のものよりもつまらないものであるとも、價値少ないものであるとも感せぬ。自分にとりてはそれがより多く幸福であるとか、より多く明るいといふことよりも、私自身にとりてそれがより多く眞實性を持つてゐると直感せらるゝが故に自分の抱いてゐる思想なり、心持ちなりを大切に思ふのである。

どこまでも一種の宿命を信ずる私にとりては人生に對して終生疑ひを取り除くことはできまいと思ふ。私は今自分が握つたと思つてゐる人生のすがたが眞實であるか、否かを知らない。けれども自分にはそれより他に自分の眞實性に順從した見方はない。

私はこのやうな人生の見方をしてゐる自分の心情を愛し、またこのやうな人生を味つて行くべく生活してゐる自分の肉體をこよなきものとしていたはつて行きたい。

靈につけるものは生き、肉につけるものは亡びんと言つたキリストの言葉は或ひは心靈の永生を訓へたものであるかも知れぬ。けれども私には靈肉を區別して考へるだけの餘地はない。私は現在この肉を持ち、この肉を愛してゐる。そしてこの肉が饐ゆる時私の生活は終つたと思ふ。私が人生に對して抱いてゐる「黒い花、暗の露」といふ觀念もこの肉と共に亡びる。それゆゑに、私は自分の悲しい人生の見方に對しても、また自分自身の肉體に對しても一層の可憐さを覺える。

未來を確信する人、過去を知るといふ人にとりては現在の生活に對しても餘裕があるにちがひない。かれ等は現在を樂しむことのできる人々であるだらう。かれ等は現在に於いても光明より光明へと光りにつゝまれて歩くにちがひない。けれども過去を知らず、未來を知らず、たゞ現在に於いてのみ現實を與へられた者にとりては、それが暗であらうと、悲哀であらうと、たゞそれを貪るやうに懷しみ慈しむ心の他には何の餘裕もあり得ない。

惑瞑、感激、驚異の念を他にして人生はあり得ない。かれは善人となつて人生を超越するよりも、罪人となつても人生の眞實味を捉へようと焦燥するであらう。かれは幸福を獲る前に、人生そのものゝ眞實感を把握せんことを試みるであらう。安易なる天國を信じ、妥協的な諦めをつける安心者よりも、敬虔な悲しい心を抱いて常に人生に對する疑ひを抱いて行く不安の人、暗黒の人こそ眞の人生を感ずるであらう。

眞實實感の努力こそ常に人生の妙諦を掴まんとする者の生活ではないか。無論私たちは「人生とは何ぞや」といふ命題を提げてこれを形而上學的に論究するたけでは到底その境地に達することのできないことを知つてゐる。けれども私たちが少しでも歩一歩より眞實な自己を見出し、より眞實な人生を見出さうとする努力のうちには常に「人生と

は何ぞや」といふ深處闡明の心が本然的に動いてゐる筈である。別言すれば眞實の自己を見出し、眞實の人生を見出すといふことは、「人生とは何ぞや」といふ本然的な疑惑に對する一歩より近きより清澄な心境の發見に他ならぬ。

しかしてかくのごとき澄心の境は愛といふ意識に於いて最も強く、最も普遍的に、最も明かに直覺せらるゝであらう。否な愛の心から出發した意識のみが私たちの人生をより如實に闡明することができるであらう。

キリストも釋迦も廣いそして深い愛の意識を持つてゐた。そこにかれ等の偉大な人格が築かれ、深い人生味が實感せられたのであらう。

×

葉は愛によつて戰ぎ、花は愛のうちに薫る。雲は愛の手に流れ、水もまた愛の心に囁いてゐる。私たちの心が渾然としてあらゆる人類あらゆる事象をつゝみ了はせる刹那に私たちの人生は少くとも今日よりはもつと自由な、もつと眞實な、もつと豐かな、もつと寛容な氣分に充ちたものになるであらう。樂園、涅槃の境がこゝに切り拓かるゝであらう。多くの宗教はこの一境を目がけて進んで來た。

けれども私には、一つの疑ひが尙ほ遺されてゐる。愛の至盡境にまで達した刹那に尙ほ一つ遺された或るものがある。私たちが永久にたづねてゐる「人生とは何ぞや」といふ疑ひである。

愛の至境に達し得た者の更に味はゝなければならぬわびしさはかの大悲觀、大寂滅ではあるまいか。ゲッセマネの園に獨り祈つてゐた刹那のキリストの心にはこの一境がなかつたであらうか。キリストはたゞ一人で祈つた。かれがたゞ一人で隱れて祈つた刹那にこそ、かれの心に眞の大寂滅境が現はれてゐたであらう。その刹那こそ眞實にキリスト自身の生活が一層純眞な境に向つて進まんとする努力の最も端的に燃えた刹那であつたであらう。

キリストも釋迦も恐らく死の刹那まで「人生とは何ぞや」といふ疑義を抱いて居たのではあるまいか。古來あらゆ

る大宗教家、大思想家の生涯をかへり見る時、かれ等が常にその絕對の實在に接せんとしてゐた努力は仍り永遠の疑ひに對する焦燥ではなかつたのか。かれ等は人類を愛した。あらゆる事象を愛した。けれども何時も人生そのものに對する永遠の疑ひを持つてゐたのではあるまいか。

世界は無限なる神祕として、調和として、かれ等の敬虔な生活の上に現はれて來たであらう。かれ等は貪るやうな心を以て、神の國を取り容れようとした。人生そのものを如實に認めようとした。かれ等は、「我は神なり」といふ意識を得た。しかしそれはかれ等が宇宙の神祕、調和を通してさながらに宇宙を見、生命そのものを掴むだといふ意識の刹那に叫ばれた大歡喜の聲であつたであらう。かれ等はたしかにその刹那に於いて或ひは生命そのものを掴み得たであらう。けれども生命そのものを掴み得たといふことは、生命そのものになり得たといふことではない。かれ等が生命そのものゝ本體を掴むことが一層確實になればなるほど、意識することが明かになればなるほどかれ等は生命の神祕に對して、生命の大威力に對して驚歎の聲を揚げずには居られなかつたであらう。しかも永遠の疑ひは、永遠の疑ひとして更らに深き影を投げかけた。そこにかれ等の大悲觀、大寂滅が生まれたであらう。

しかも一步ひるがへつて衆生を見る時かれ等はその道伴れの餘りに愚昧にして力弱さに驚いたであらう。大悲觀と大寂滅に沈潛したるかれ等の慈眼は大地をうるほすが如き慈悲心を以てかれ等の弱き道伴れとしての人間を慈しまずには居れなかつたであらう。かれ等は絕えず前方に大悲觀の一境を眼ざしつゝしかも後ろに纖弱き衆生の手を引きつゝ人生の深所へ深所へと悲しき眼を瞠りつゝ進んで行く。

究めんとして究むることのできない人生の疑義と神祕に憧憬れて行く敬虔な人々の心は大悲觀の心である。

絕えず悲しめる人をして悲しましめよ。常に愛せんとする者の悲しき心を深からしめよ、廣からしめよ。そして私達の永遠に解き得ざる疑ひに對してなほも焦燥と憧憬の涙を流さしめよ。

自然の愛へ

生まれた地が人の少い片田舎の曠野のなかであつたせいか、私にとりては自然ほど親しみあるものはない。

私は殆んど病的だと考へられるまで寂しがり家である。私は自分の何時も虚な寂しい心を充たさんがために寺院にも行つた、教會にも行つた。その他の集團のなかにもはいつて行つた。けれども私はどこにも自分の虚な寂しい心を充たすことはできなかつた。集團の多くの人々は何の交渉も感じない人々であつた。たま〳〵私が交渉を感じた少數の人々はいよ〳〵私に嫌人の感じを起させる動機をのみ與へた。私は人々と爭つてまで自分といふものゝ立ち場を一所に築き上げようとは思はない。私は他に私の立ち場を探さう。或ひは相鬪ふことによりて戀の慰安を得ようとは思はない。私は爭鬪に伴ふ憎惡の觀念を恐れる。私は世界の誰にも愛せられてゐないといふ孤獨よりは世界に一人の敵を持つてゐるといふことを恐れる。私は誰にも愛せられぬ寂寞には耐へる。けれども唯一人の敵をも持つといふことは苦しい。私は自分自身生活の弱者であることを悲しむ。けれども私には何うすることもできない。私は人と人との交渉を避けて自然にかくれなければならぬ自分の性格を悲しむ。自然は私にとりて生活の廻避所である。たゞ一つの懷しい母の懷である。自然は私を愛して吳れてゐるのか或ひは私とどんな交渉を感じてゐるのか、それは私には分らぬ。けれども少くとも自然はかの巷の人々が私に與へる爭鬪の劍や、憎惡の眼を私に向けることはない。自然は私のために泣いては吳れぬ。柔かい手を持つて抱いては吳れぬ。けれどもかれは私を辱しめない。私を拒まない。よしかれが私を殺すことがあるとしても、かれは私を憎むではゐない。かれはたゞ自然の約束に引き摺られながら、無意識のうちにしかするばかりである。かれは私の屍に蛆蟲をわかさせるかも知れない。それでもかれは、私を憎んではゐ

ない。私の屍の下からは可憐な白百合が咲くこともあらう。野の鳥は私の枕邊で神祕な讃歌をうたふかも知れぬ。自然は寂しいたゞ一つの私の隱れ家である。

古來幾多の宗教や哲學が人間を以て萬物の長であるとし、人間にのみ權威を與へようとしたのは餘りに我がまゝな人間の獨斷である。キリスト教徒はキリストが十字架上に死んだことをもつて非常な誇りであるとしてゐる。人間性の最高潮に達した美しさであると想つてゐる。しかもかれ等は刹那々々私たちのために十字架の上に滅びて行く自然のために感謝の祈りをさゝげる事を知らない。一粒の燕麥一滴の水も私たちのために日々夜々かれ等自身を滅して行くではないか。私たちと自然との生活交渉をもし爭鬪征服の關係であるとしても私たちは自然を憎むことはできない。かれ等に感謝しつゝかれ等を支配しなければならぬ。感謝の勝利でなければならぬ。鞭打たるれども怒らず、滅ぼさるれども哀訴せざる餘りに柔順なる自然はどれほど美しい心靈の流動に充ち充ちてゐるのであらう。偉大なる聖者は憎惡の念を超越して萬有悉くを愛の眼をもちて見ることができるであらう。けれどもまだこの世界にはかやうな聖者は一人も生まれてゐない。佛陀にもキリストにもマホメツトにも愛の一面にはその宗敵を憎む心が動いてゐた。敵をも愛せよと叫んだ聖者もパリサイやサドカイの徒を憎むだ。憎むといふことが愛の第一歩であるとしてもそれは愛ではない。卵殼のなかゝら雛が生まれるとしても卵殼は雛ではない。卵殼を悉く破り捨てなければ完全な鳥ではない。過去が生むだすべての人類も聖者もまた憎惡の卵殼から全く解放せらるゝことはできなかつた。私たちは將來に全人を待つものである。もし過去の聖者を以て人類究竟の典型であるかのやうに考へるならばそれは人間性の進化を無視するものである。憎惡は不完全から生まれる、全人には憎惡はない。

自然には憎惡はない、自然は完全であるからだ。ソロモンの榮華の極みだに野の百合に如かなかつたといふのは事實である。かれは不完全であり、これは完全であるからだ。人間は永久に不完全な創造を繰返しつゝ全人の生活を目

的としてゐる。自然は絶えず完全な世界を形作りつゝ私たちの前に犧牲の器をさゝげてゐる。完きものは完からざるものゝために十字架に立ち、完からざるものは完きものゝ死に對して感謝しなければならぬ。

多くの人々が自然界をもつてたゞ一つの塊(つちくれ)のやうに考へて來たのは、人間獨尊の驕れる心と、愛の缺乏とからである。一片の花に對しても何うしてそれのうちに神祕な影が動めいてゐないといふことができよう。靈が流れてゐないと言へよう。花と花は何をうなづき合つてゐるだらう。葉と葉は何をさゝやき合つてゐるだらう？　かれ等は私たちに對して何を語つてゐるだらう？　かの遠い火星からの信號を覩んがためには幾多の天文學者によりて人類の努力がさゝげられた。しかも誰もこの企てを以て幻影を追ふものだとは誹らない。けれども私たちはまだ一片の花――私たちの足もとに橫たはつてゐる――に對して話しかけようとした人をも見出さない。もしかやうな企てをするものがあつたならば人々は幻影を追ふ者として笑ふであらう。しかし私は舊約に記された自然と人間との言葉の交換は必ずしも夢幻を語るものではないと想ふ。私たちが全人とならんがためには、また全人となつた場合には私たちは必ず空の鳥の言葉を聽くことができるであらう。木の葉の戰きが囁いてゐる物語りを理解することができるであらう。

さらに私たちは私たちが持つてゐる世界とかれ等が持つてゐる世界とについても考へて見なければならぬ。私たちは五感を通して實感し得た世界のみを以つて實世界としてゐる。けれども私たちが感じ得ない世界、見得ない世界、觸れ得ない世界がかれ等の所有として橫たはつてゐることをも私には想像せらるゝ。私たちには太陽の光りはたゞ一つの無色の光りとして見える。けれどもプリズムを透して見る時それは美妙な七色であることが知られた。さらにそれが空の鳥の眼を以て見らるゝ時どんなに美しい色彩としてあらはれるであらう！　野の花の心を透して觸れられるときそれがどんなにか妙なる香ひある光りとして感じられるであらう！　全人の生活は人と自然と萬有の心を心として生活するとき始めて實現せられるであらう。

「罠のなかの狼」だと呼ばれたシベリアの一囚人、それが何うしてあの「虐げられし人々」の作者であると思はれやう。

疑ひの瞳

蒼白い弱り果てた灰色の顔、一つの微笑をだに滅多に洩らしたことのない剛腹なシベリアの一囚人、それが何うして「死人の家」の作者であると想はれやう。

かれの作を讀むだ多くの人々が最も強く感ずることはかれのはてしもない愛の力である、寛容な態度である。自分を捨てた戀人のために、戀人の祝福を祈る聖者的な愛の心である。作物を透してのみ得られるドストイエフスキイの愛の心は驚異に値するほどの聖さである。偉さである。

けれどもひとたびかれの「罠のなかの狼」のやうな風貌を考へる時かれの愛の心持はたゞ聖さや偉さといふ言葉のみでは言ひあらはせないほどな複雑なものとなる。その愛は濁つたものである、波瀾の多いものである、焦燥の多いものである、努力を伴ふたものである。懊悩にとりつかれた人間の愛であることが知られる。

かれはどれほどその戀人を恨むだことであらう。かれは人一倍かれを捨てゝ行く戀人を恨むだことであらう。同時にかれは人一倍戀人をあはれと思つたであらう。

人間の苦痛といふ苦痛、怨嗟といふ怨嗟、憎悪と云ふ憎悪を嘗め盡した後の愛の心、それがドストイエフスキイの愛の心ではなかつたゞらうか。

キリストの愛を說く宗教家は多い。けれどもキリストの憎悪や苦痛や焦燥を說く者は少ない。キリストの愛をして

センチメンタルなものゝやうに、女性的なものゝやうにのみ說くものがある。けれども私たちにとりては倘つと男性的な人間味の多いキリストを知ることが必要である。キリストとマグダラのマリアの戀は何うであつたらう？

キリストは愛のみを說いて、しかも愛の矛盾を感じなかつたゞらうか。キリストはかれ自身の色々な生理上の欲望の發作から起る衝動のためにどんな苦痛を覺えたゞらうか。エルサレムの殿堂で怒つた時のキリスト、サドカイの徒を罵つた時のキリスト、獨りで祈つた夜のキリスト、三十歲といふ男盛りで死んだキリスト、それを私たちは知りたい。

「他人が與へた同情の表白もかれには不信の念をもつて受け容れられた」といふドストイエフスキイの頑なる心こそ、虐げられ虐げられた結果が齎した心ではなかつたゞらうか。

老人は疑り深いといふ言葉をよく聞かされる。若い私たちが老人と接する場合に多く經驗する不快な事實の一つである。實際老人は疑ひ深い。私たちが深切を盡せば盡すほど喜ぶと同時に一面には警戒を怠らない。老人と若い者の間がしつくり行かないのは少くともこれが一つの原因であらう。それならば何故に老人は疑り深いのであるか。かれ等とても若い日はあつた。そして若い日には人をも信じ、人をも愛し、人をも戀したに違ひない。しかも處女的な若い純な心が何時とはなしに鞭打たれて頑なになつたのだ。僞られ、欺かれ、裏切られて冷たくなつたのだ。虐げに虐げられて疑り深くなつたのだ。

私は疑り深くなつた老人の過去を悲しむ。かれ等は信愛の若い心をもつて生まれ、猜疑の老いたる心をもつて死んで行くのではないか。

「罠のなかの狼」だと呼ばれたドストイエフスキイの心は虐げに虐げられた正直者の果てゞはなかつたか。

少くとも私は學校を出るまでは人の言葉を疑ふことはしなかつた。私は不圖このころになつてともすれば人の言葉を疑ふやうな恐ろしいことを覺えた。ともすれば眞面目な人の言葉を反語的に考へるやうな恥づべきことを敢てする

やうなことがある。それは私が色々な集團の一人となつてからである。集團内の下級な傭はれ人の一人となつてからである。私は一日一日と虐げられ行く弱い自分の心をかなしむ。

私の家に二匹の犬がゐた。二匹とも昨年の冬一つの母犬の胎から生まれたものであつた。始めて懷に入れて貰つて來た折にはむくむくと肥つた可憐な仔犬であつた。雪が降つてゐる晩だつたので私たちは古い箱に柔かい襤褸や綿を入れて玄關に置いて寢かした。それでも夜中になつていぢらしい聲をしぼつて鳴き出す時には私は幾度も起き上つて仔犬の頭を撫でてやつた。初めて母の懷から離れて見も知らぬ恐ろしい人間の手に渡されて、生來始めての恐ろしい夜を經驗してゐる仔犬の可憐な無智な顏を見てゐる時私は犬の運命といふやうなことを考へてゐた。私の心は何時とはなしに暗くされた。

餘りに雪が深い夜などそつと箱から出して私の寢床の傍に置いてやつた。仔犬は何時とはなしに私の寢床にもぐり込んで溫かい母犬の胸にでも抱かれたやうな信愛の心をもつて眠つてゐた。

梅がまだ堅く蕾んで樹立の蔭には消えがての雪や霜柱が暗のなかにも白く見えてゐた。二匹の仔犬は玄關の箱を飛び出して眞夜中の寒空に家の周圍を吠えて廻つた。辛つと走ることのできるくらゐな二匹の仔犬が夜を警むる從順な忠僕となつて吠え立てゝゐるのは可憐といふよりは寧ろ滑稽にさへ思はれた。自然はかれ等の意識が芽生えると同時にこの忠實な主思ひの動物的本能をかれ等の裡に植ゑ付けたのであつた。人々は行火を抱いてなほ寒さを歎つてゐる冬の眞夜中を忠實な仔犬は危うげな足どりを運んで暗の底に吠え立てゝゐた。恰かも一と廉の大犬のやうな自信とほこりとをもつて。

けれども仔犬のいたいけな人の愛をそゝるやうな時代はいくらも續かなかつた。花が咲いてやがて散つて靑葉となるころには仔犬はかなり大きな犬となつてゐた。そして始めは殆んど同じやうな性質であつた仔犬が自然にかれ等の

個性を發揮するやうになつた。一つの犬は牡で、一つは牝であつた。牡の方は柔順で牝の方は却つてがむしやらであることがわかつた。牡は牝よりは病身であつたが可愛さもまさつてゐた。人々の愛は何時も牡の方にそゝがれてゐた。牡と牝とを並べて一緒に食物をやると牝は病身な牡を追ひ除けるやうにして貪り食つた。こんなことからも人々の愛は一層牡の上にそゝがれた。牝犬は幾度か鞭打たれた。何時とはなしに牝犬は勝手口のものを盜み出して食ふやうになつた。牝犬が捨てられたのはそれから間もないことであつた。私たちは「あれは盜犬の血統を享け繼いだのだ」と言つて捨てゝしまつた。けれども今にもまだ同じ胎から出た一匹の牡犬は大事に養はれてゐる。

「捨てられた犬」「盜犬の血を享け繼いだ犬」！　私は今にもあのおづ／＼してゐた一匹の牝犬のことを忘れることはできない。同じやうに愛し、同じやうに育てゝ來たつもりの犬が、一匹は何時も私たちの掌の上で肉片をしやぶる從順な犬となつた。他の一匹は私たちの掌の上で與へた肉片をも緣の下や木蔭に持つて逃げて食べるやうになつてゐた。

遺傳、周圍の事情、社會の制度やいろ／＼な原因がもたらす結果としての不幸な運命！　虐げられた弱者の擔はなければならぬ運命！

ドストイエフスキイが考へてゐた虐げられた人々、そしてその人々の全く虐げられ、折り曲げられた性質、暗い影、罪惡、竊盜、殺人！　私はあの捨てられた牝犬を考へるごとにドストイエフスキイのことを聯想する。

「罠のなかの狼」と呼ばれてゐたドストイエフスキイもあの捨てられた犬と同じやうな運命に泣かされたのではあるまいか。

「罠のなかの狼」のやうな灰色の顏をした男、かれは生まれて人の忌む發作的な病を持つてゐた。かれはビリエンスキイからもロシヤの多くの人々からも、幾度となく裏切られた。寂しいシベリヤの生活のなかにも心の底からの戀を得ることもできなかつた。私はあの虐げられた運命の男を想ふ。あの男の偉大な悲哀を想ふ。

秋が來た。赤いカンナが燃えるやうに花園の隅の方に顫いてゐる。落葉を焚く日も遠いことではあるまい。
木の葉が一つの梢から方々に散つて行くやうに、すべての人々は秋になつて方々に分れ別れて行くやうな氣がする。
夏に捨てた犬がまた秋の街を方々うろついてゐはしまいかとばかり私は考へる。
秋が來た。一日一日と國境の山々の襞がはつきり見えるやうになつて來た。

藝術の權威

近來我が文壇の思潮が一面深さに向つて進まうとするのに對して、他の一面に於いては擴がりに向つて展びて行かうとする傾向が倍々強くなつたやう思ふ。

感傷的、咏嘆的、觀照的であつたものが赤裸々な自我の問題を提げて眞正面に自我の闡明に向つて或ひは自我生活の要求そのもの、實證に對してかなり多くの努力を費されるやうになつた。そしてこの努力は今日なほ最も思想界の興味ある問題として私たちの前に投げ出されてゐる。

自我問題、眞生活の要求問題と同時に不離の關係を持して多くの實際問題がまた私たちの眼前に數次提供せられた。近い例を引けばこの春の文士間の政治運動問題を始めとして、共同生活問題や近くは離婚問題や、兎も角數年間行き悩むでゐた我が思想界に小ひさいながら一種の實際問題が數次提供せられて、私たちの思想生活上に多少の刺戟や色彩を與へた。さらに近くは八月の早稻田文學に於いては天溪氏の文士と經濟問題のことが論ぜられたのをきつかけに、今月に入りてこの方面に對してまた多くの人々の議論を聽くことができた。同時に一青年の自殺は端なくも文藝と青年教育といふやうな問題をも惹き起した。八月の中央公論はその創作欄の全部を問題文藝のためにさゝげた。その作品の良否は別問題としても何等かの形式に於いて我が文壇の思潮が最つと色彩の強い方向のはきりした新らしいものを要求してゐることがうなつかれる。九月に入りては早稻田文學やその他の雜誌に問題文藝といふやうなことが多くの人々によりて色々に論ぜられた。「問題」といふことが如何やうに解釋せらるべきものであるか、その意義についてこの問題は頗る複雜なものになるにちがひないが、少くとも「問題」といふ言葉の意義が普通に考へらるゝが如く「新ら

しい疑問の提出」「新らしい人生の見方」「新らしい人生思案の發表」「新らしい生活要求」といふやうなものであるとするならば近代文藝の多く殊にイプセンやビョルンソンやトルストイやドストイエフスキイの文藝はみなそれであつたといふことができる。近代文藝の特色であつたダイヤボリカルな性質に悉くこの新らしい問題、新らしい人生の見方の上に立てる巨人の叫びであつた。生みの苦しみなる言葉はこれ等の巨人の生涯の歴史を語つてゐる。一面から見るならばかれ等の文藝は悉く問題の文藝であつた。かれ等の生活全體が問題闡明を追求する者の生活であつた。

問題文藝を提唱する者の忘れてならないことは實にかれの生活である。文藝即ち生活といふ言葉には多くの疑問があるとしてもかれの文藝は少くともかれの實生活の問題を離れては片時もその意義を發見することはできない。私たちは問題文藝を云々する前に向つと〳〵問題生活のために悩まなければならぬと思ふ。私たちはトルストイが問題とし、イプセンが問題としたる生活を生活することを以て終つてはならない。私たちはかれ等を踏臺としてかれ等以上の新らしい世界を見、更に深い人生問題を提供しなければならぬ。來るべき新時代の文藝はトルストイやイプセンの天才を以てさらにかれ等以上の苦痛に耐へ、試煉に打ち克つの力を持てる者の上にのみ祝福を下すであらう。

來るべき文藝は十九世紀後半の破壊的な文藝の後を承けて何時までも悲觀的な思想、苦悶の底に沈澱してゐてはならぬ。けれども來るべき建設の曙光は決して相當するだけの犧牲をさゝげることなしには私たちの思想の窓に射し込むでは來ない。

暗黒を捨てよ、破壊を捨てよといふことはさらに新たなる暗黒と破壊とを見出せといふに他ならぬ。

ナザレの大天才は平和の國を大理想として起つた。しかもかれの生活の周圍をつゝむものは子をして親に背かしめ、妻をしてその夫に叛かしむるところの破壊的苦闘の努力であつた。かれは平和郷の花園に劍を植ゆるものであつた。キリストに近代的な香ひを見出すことのできるのは實にかれが劍の人であり、反抗の人であつたところにあるのでは

あるまいか。オスカア・ワイルドがかれを以て最大の藝術家であるといふやうに想つたのもかれが近代人的な矛盾を感じ、深酷な近代藝術家的の苦痛を悩むだところにあると想ふ。

モーゼやソロモン以後久しく國威の振はなかつたイスラエル民族が待ち望むでゐた救世主はたしかに豐かなる富力と强大なる兵力とを以てヨルダン河畔の亡國者を奮起せしむるだけの大天才でなからねばならなかつた。キリストの大天才を以てしてこのイスラエル民族の物質的欲求に氣付かなかつたことはない筈である。もしかれが望むだならば或ひはかれは昔カナアンの城々を陷れ或ひはエルサレムの要塞を攻略したかのダビデ王の子孫を提げてローマ帝國のために一敵國を建設することができたかも知れない。けれどもかれは花々しき王者の生活を求めずして野の貧しき牧者たらんことを望むだ。こゝに一個の家財を捨てんとして捨つることのできなかつたトルストイ以上の誘惑があり、苦悶があり、勝利があつた。マグダラのマリアを始めかれの周圍には常にやさしい多くの女性があつて、かれのために香油を灑ぐことを忘れなかつた。しかもかれはその何れの戀にも愛にも美しく打ち克つことができた。そしてかれは醜婦をも美女をも或ひは貧しい娼をも癩病者をも齊しく「我が兄弟よ」と呼ぶことのできる愛の勝利に生きた。私たちはこゝにキリストの近代人的な苦惱と勝利とを見出すことができる。

私たちが今日苦惱することの深ければ深いほどその藝術は尊くその藝術は永遠性を持つてゐる。宗教と言はず藝術と言はず反抗と懷疑の土臺なしに築かれるものはない。私たちの藝術から私たちの宗教から反抗と疑惑とを取り除いたならば、それはコンヴェンショナルな藝術であり、宗教であつて、偉大なる古人の死せる記念物を禮拜するに過ぎない。

新らしい藝術の世界に立つてトルストイが思索した以上の人生を思索し、イブセンが問題とした人生以上の人生を味到しようとする現代人の生活は、トルストイが苦痛としイブセンが惱まされた生活以上の深さと苦しみとを持つて

ゐなければならない。

私たちの藝術をして倘つと深いものであり、最つと眞實なものであり、倘つと生命力あるものたらしめんがためには私たち自身の生活そのものが一層深い、眞實な、力ある內容、自己批判の上に築かれ、私たち自身の生活が先づ血と生命の犧牲をさゝぐる器とならなければならない。

キリストはかれが創造した宗教問題の實際的解決のためにかれの血をさゝげた。希臘文明の偉大なる思索家はソクラテスであつた。かれも亦自己の提供せる眞理の實證のためにかれの生命をさゝぐることを辭せなかつた。

昨今問題文藝などといふことが提供せらるゝに至つた動機として、そこに生活上の苦痛な、眞劍な刺衝が潛んでゐることを想像することができる。私たちはこの傾向を以て眞面目な思想界の好傾向として認めたい。

私たちが思索することが眞劍であり、私たちの生活することが眞劍であればあるほど、過渡期より建設の時代に入らんとする藝術は一層抽象的より具體的なものとなり、一層具體的な問題解決のために努力を惜しまないであらう。

私たちは藝術の生活化――藝術即生活ではない――藝術家自身が一層かれの生活を眞に生かしめんがために藝術を創造し、生活を思索せんことを希望する。倘一層具體的に言へば、私たちの藝術が一層日本人化されんことを要求する。國民化されんことを望む。

私たちは今日まで多くの新らしい思想の傾向を聽いた。或ひは自我の問題に、或ひは婦人解放問題に、或ひは個性、個人主義の問題に殆んど數年來の我が文壇の努力は費された傾きがある。しかもそれ等の諸問題は今なほ私たちにとりて興味ある問題であり、Xの問題である。

けれども私は屢々考へた……

私たちは饒舌であつた、賢明であつた。しかも一人の十字架を擔ぐものもなかつた。主義のために一人の犧牲者を

も見なかつた。あまりに平易な問題の解決法であつた。

けれども餘りに容易な解決の後に私たちは果して何を得たであらうか。私たちは近代的の思索の方法を教へられた。けれども私たちはまだ近代生活を生活しなかつた。私たちは日本人としての生活を眞面目に見ることをしなかつた。

多くの私たちの先輩は私たちの生活をもつと複雑にしなければならぬ、それでなければ眞實の大藝術は生まれないといふ。これは一面の眞理であるかも知れない。けれどももしこの複雑といふことが近代の歐洲人の生活、さらにこまかに言へばロシヤ人のやうな生活、獨逸人のやうな社會組織といふことを意味するのであるならばこれは到底望み得らるべきことでもなく、また無意義なことである。

私たちは私たち日本人としての生活の方法を一層人間的にしなければならぬ。私たちは私たちが日本人としての歴史を受け繼ぎ、日本人としての情操を持ち、感受性を持ち、理智を持つてゐることを自覺しなければならぬ。そして日本人としての思索の方法、生活の方法を考へなければならぬ。

私たちが戀してゐる女は日本の女である。トルストイの女性でもなく、ツルゲネーフの女でもない。また私たちが交渉しなければならぬ人々はドストイエフスキイやゴルキイの作品に出て來る男や女でもない。私たちはどこまでも私たちと同じ歴史と習慣とを持つた日本人の間に生き、日本人の間に思索しなければならぬ。しかもそれは自覺せる日本人の心と眼を以てしなければならぬ。

文士の經濟問題が論ぜられ、共同生活の實行者が出て來たりするのはやがて私たちが日本人として私たちの生活問題を解決し、私たちが日本人として藝術を作らんとする日の近づいて來るがための前提であらしめたい。

私たちが久しく感じてゐた不滿――イズムを考へる、けれども犧牲の器をさゝげない――は、私たちの藝術が眞實に國民的に眼覺める時に充たされなければならぬ悲壯なる運命であると想ふ。

人類を光被する大思想が生まれんがために、大藝術が生まれんがためには幾多の生みの苦痛が永久の眞理の前にさゝげられなければならぬ。

幾多の悲慘なことや眞劍なことやが發生して來るに違ひない。私たちはそれをたゞ新聞の三面記事として見遁してはならぬ。またどんなにそれが悲慘なことであらうとも面をそむけてはならぬ。だく〳〵と溢れて來る血汐を眞正面に見つめながら私たちは私たちの人生を考へなければならぬ。袂を以て顏を掩ふやうなことをしてはならぬ。藝術の權威はそこから生まれる。

私たちはたゞかれ等が舊い道德に反抗したといふのみを以てかれ等を誹ることはできない。かれ等の行爲がたゞ一の浮氣や移り氣や興味から生まれたのだとするならば、かれ等の行爲は嚴正な批判を持たなければならぬ。しかし萬一それが誤れる見方にもせよ、眞劍な動機から出たものであるとするならば私たちは別樣の批判を與へなければならぬ。私たちは往々にして僞善者の慈善よりも、子供のやうな生正直な男の過失を有意義に思ふ。

思想の實行者と思想を自己行爲の辯解に使用する者との間には天と地ほどな逕庭がある。私たちは今日の我が思想界の動搖不安に對しては一言半句の批判をもかりそめにしてはならぬ。しかしてこれは藝術家に對する世の人々の取らねばならぬ態度であるが、同時に私たちは思想家乃至藝術家かれ自身に對しても責任を持たせなければならぬと思ふ。即ち思想家或ひは藝術家の權威はかれが豫言者であり、革命家であり、救世主であるところに存する。もし超人なる言葉を藉りるならば藝術家即超人でなければならぬ。或ひは最も偉大なる凡人でなければならぬ。古來多くの宗教家は自己の思想の眞實のために自己の生命と幸福とをさゝげた。そこにかれ等の豫言者として宗教家としての權威があつた。近代藝術の權威を築き上げんがためには、私たちは多くの犧牲者を發見した。しかもそれはキリストの十字架の如く悲壯なる生命の犧牲であつた。

先覺者を以て任ずるところの藝術家は社會或ひは同胞に對して無限の責任を感じなければならぬ。かれはかれが選んだ新たなるその生活の方式に對しては極めて明かに自己の思想を闡明し告白するの義務と好意とを要する。

かれが幾多の苦痛を忍び、侮辱に耐へ、かれの生命をさゝげて人類の眞生活を發見せんとする努力にのみ私たちは藝術の權威を認める。

私たちは現在の我が思想界の傾向を悲觀しない。同時に私たちは日本人的に眼醒めた新しい思想家の思想及び藝術に對する宗教的敬虔と宗教的犧牲とを要求する。

私たちは自己の行爲を辯護せんがためのイズムを要求しない。私たちは私たちのイズムを立證する生活行爲を要求する。それがどんなに高價な犧牲であらうとも。こゝに藝術の權威が生まれる。藝術家であり、思想家であることは、決してかれの生活をして世俗的に幸福ならしめることではない。かれは最も自己の生活に苦しみ、最も強く自己の矛盾を感ずるものでなければならぬ。かれの生活は犧牲者の生活でなければならぬ。

「かれは藝術家なるが故にこれこれの反道德的行爲は恕すべし」といふ批評は藝術家に對して好意を持てるやうであるが實は藝術家を侮辱したものである。私たちはむしろ「かれは藝術家たるが故にこれこれの行爲を敢てしたり」と言はなければならぬ。藝術家たると否らざるとを問はず反道德的行爲は飽くまでも反道德的行爲である　たゞかれの行爲をして價値あらしむるものはかれの行爲が眞實のものであるか、かれの行爲が舊き殿堂を壞たしめた大宗教家の敬虔な心に充たされたものであるか、犧牲者の眞實さを持つてゐるか否かにある。

私たちが生まれて來たのは幸福のためではない。私たちは苦悶、苦鬪のために生まれ、さらに大なる苦痛を味はゝんがために死なゝければならぬ。少くとも藝術の權威はこゝに潛むでゐるのではあるまいか。

色々な感想

合理的といふ言葉ほど誤つた觀念に支配されてゐるものはない。人々は合理的といふことに絶對の權威を置き易い。合理的であることは卽ち善であり、眞であるとすることは誤りでないとしても、それは絶對の合理的であるといふことを前提としてゞなければしかといふことはできない。

しかしながら人間の知識が限られてあるかぎり合理的といふことは到底比較的であることを免れない。比較的合理性を多く加味してゐるが故にそれを以て絶對の善であり眞であるかの如く想ふのは理智的生活を主とする人々の陷り易き恐るべき弊害である。

私は合理的であることを卑しむものではない。私たちの生活の基調は能ふかぎり合理的でなければならぬ。私たちが持てる科學的知識の證明するかぎり合理的でなければならぬ。私たちは不合理的生活の上に生活する不安に耐へない。けれども亦合理的生活にのみ私たちの生活の眞實が潜むでゐるとは想はれない。合理的であれば私たちの生活が眞であり、私たちの生活が全くされたのであるとは想はれない。合理的であるといふことは私たちの生活の第一點の方向を定めるものではあるが、それが第二步であり第三步ではない。

H_2Oが水であることを知るのは私たちの理智である。けれども私たちの生活はこの科學的知識によりてのみ成り立つてゐるのではない。詩人の眼に映る點滴は決してH_2Oそのものとしてゞはない。それは科學の力が達し得ない世界の實在としてゞある。H_2Oのなかに生命が潜むでゐると考へるのは多くの合理主義者の謬見である。

科學的知識にのみ賴つてゐる人々は水を分析して、それでもつて私たちの要求が満足されたやうに想つてゐる。し

かしそれは私たちが眞實の境、究竟の境に詣らんとする第一步の努力であるに過ぎない。

世の中には一種の固定した人生觀を抱いてゐることを以て滿足してゐる人々が多い。殊にその思想が一種の科學的知識の證明を得てゐるといふ自信の上に立つてゐる時に特に然りである。そして是等の人々は往々にして科學的知識が根本的に覆さるゝものであることを知らない。しかしもしかれ等の科學的知識が更に新らしき知識によつて根柢から覆されたとしてもかれ等は多く驚かないであらう。かれ等はさらにその新らしい學理にかれ等の人生觀を結び付けて自ら安心するの妥協性を持つてゐるから。

この種類の人々は自分を最も賢い、最も强い人間であると思つてゐるかも知れない。けれどもこの種類の人々こそ最も愚かな、最も卑怯な生活者であるといはなければならない。

私たちは今日に生きよといふ。けれども今日に生きるといふことは、よりよき明日を見出さんがためである。この刹那を最も完全に生きるといふことはこの刹那の底に流れてゐる永遠の未知界をできるだけ完全に把握し味到しつゝ生活するといふことに他ならぬ。しかも前の刹那と後の刹那とは旣に一つの科學的論理に支配されてゐない。科學的論理、科學的知識はたゞ刹那的な理智の判斷に過ぎない。それはあらゆる時間を通じての永遠性を所有してはゐない。

永遠性を內有した刹那的生活はたゞ愛のうちにのみ動いてゐる。愛は生ける力である。愛は永遠の未知を直感する唯一つの力である。科學は人をして一つの信仰に導くことはできるかも知れない。けれどもそれは力として動くことはできない。それは信仰といふよりは一種の歸納されたる概念である。多くの人々は自己の不安な生活を概念の上に强ひて平靜ならしめてゐる。

すべての知識は愛によりて淨められなければならぬ。愛によりて淨めらるゝ時私たちの知識は始めて未知の究竟に對する永遠のあこがれと生命とに眼醒めることができる。

愛のない信仰が空しきものである所以は、それが力となつて動かないからである。それが愛によりて生ずる疑惑となり、不信となり、撞着となり、矛盾となつて眞生活の無限な複雜さを經驗しないからである。信仰はマグダラのマリヤも持ち、イスカリオテのユダも持つことができた。しかも二つの信仰の差別は愛の有無から生まれる。

×

秋の寂寞は私にとつてこの上もなく懷しいものであつた。しかしこの秋になつて私はしみじみと今まで味つてゐた秋の寂寞を靜かに觀照することができなくなつた。絕えずいらいら立つてゐるやうな私の心は落ちついて秋が賦へるすべての暗示を嚙み分けることができなくなつた。私はあわたゞしい現在の私の生活を呪ひたくなつた。「門を出れば我も行人秋の暮」といふやうな故人の句と自分の心持ちとがぴつたりと抱き合つてゐるやうな氣分になれなくなつた私の生活を呪ひたい。一片の麵麭を索めんがために私たちの心靈の畑が年々に荒んで行くことを私は悲しまずには居れない。

×

少年のころにはさまでとも想はなかつた五月六月の新綠のころがこの頃では痛いほど懷しくおもはれて來た。あらゆるものが肉の疲憊になやみ、倦怠に呻くやうな、そして永久の懊惱と未知の期待とに充たされてゐるやうな初夏の世界が懷かしい。

苺の白い花が咲いた森の下蔭や、幾十里と涯しもなく續いた麥や蠶豆の野を想ふと私の胸は躍り立つばかりである。私は秋の寂寞を捨てゝ尙一度あの新綠の光りのなかに浸されたい。

しかし私は來年の新綠を見ることができるだらうか？

秋の靜かな朝私はこんなことを考へた。私の心は耐らなく淋しくなつた。

×

私はこのころ筆を執る者の悲しい運命を想はずには居れないことがある。他人の生活の足跡を拾つて行くやうな作者の生活ほどいたましいものはない。

私は近松を偉大なる藝術家であると思ふ。しかしかれの作中の主人公と女主人公とはさらにかれよりより偉大なる人間であると想ふ。

私は人間生活の記錄者とはなりたくない。人間生活の實驗者として生きたい。

×

私はイスカリオテのユダとなることは必ずできると思ふ。けれどもキリストになることはできないといふことを眞面目に考へさせられることが多い。

×

「かれは人生に對してスケプチツクな思想を抱いてゐる、かれは不幸な男だ」と言ふ人がある。けれども幸不幸といふことは存外つまらないことではないかと思ふ。私たちは幸不幸といふやうなことを考へるよりも、どこまでかれがほんたうに人生を味つてゐるか、どれほど眞劍になつて人生を摑むでゐるか、それを考へることが大事であると思ふ。大名になることゝ乞食になることゝがどれほど幸不幸があるものだかほんたうは分らない。またそれは考へる必要もない。精神界に於いては殊にさうである。樂天的であるとか厭世的であるとかいふことは問題ではない。どこまで人間としての生活を突き込むで思索し、味到して行くことができるか、それが私たちにとりて最も大事なことである。

×

何故お前はそんなに人生を悲しむのだ、もつと愉快に人生を見たら宜いだらう！　と言つてくれる人々がある。
人生はあまりに懷しいところであるから私は悲しくなつて來る！　と私は答へる。
それならよろこむだら宜いぢやないか？
斯う訊ねる人々がある。
現在のこの懷しい人生が餘りに短かいから！
私はかう應へる。
未來を信ずることのできない現實肯定者にとりては現實のよろこびほど悲しいものはない。しかし私はその悲しみを遁れようとは思はない。悲哀は現實肯定者に與へられたる唯一の實感である。

×

非常に接近するか、非常に離るれば人間と人間との接觸は美しいものとなり、懷しいものとなる。人間はみな愛すべきものであることがしみ〴〵味はゝれる。宜い加減の距離で接觸を保たうとしてゐる際には愛が憎惡に代つたり、憎惡が愛に代つたりする。

×

何々博士といふやうな人々に逢つて非常に不快な感じを起させられたことが一再ならずあつた。その多くの原因は私が雜誌記者であるといふところから、先方の私に對する心持ちが既に荒んでゐたからであらうと考へられる。
俺だつて人間だ！
私は冷たい應接室でよくこんなことを考へたことがあつた。少かのパンを索めんがために生きたる寫字機となつて初見の先輩を訪問しなければならぬことに私はどれほど自分といふものゝ價値を低くし、人間といふものゝあはれな

生活法をさげすまなければならなかつたかわからない。
「訪問」といふことが雜誌記者の主なる仕事の一つであることは私も信じてゐる。しかもそれがどんなに辛いものであるかといふことは少し自意識の强い記者であるならば誰しも感ずることであらう。多くの場合記者といふものは一種の機械視せられてゐる。
それでは書いていたゞきませう。
かう言はれてノートと鉛筆とを懷から出して、さて追ひまくられるやうにして人の言葉の端から端を追つかけて行く刹那にも「俺も人間だのに！」といふやうな感しが絕え間なしに迫つて來ることがある。まつたく泣き出したくなることがある。
それではおしまひにいたしませう。
おいとまをいたします。
かう言つて玄關に出て自分の兩足が敷居を跨ぐか跨がない間に玄關の障子がぴつたりと締め切られる。
厄介拂ひをした。
主人公は屹度かう考へてゐるにちがひない！
ひねくれ根性の私はよくこんなことを考へさせられた。
俺だつて人間だ！
私は戶外に出て深い呼吸をした。そして初めて一人前の人間になつたやうな氣がした。
私は私たちの周圍の多くの人々がこんな苦痛な經驗を繰り返してゐることを考へると氣の毒でならない。
これは私が雜誌記者としての不平であるが、他の一面から見て、多くの先輩や、訪問して行つた先方に對して氣の

毒でならないことも多かつた。

私が玄關に立つた時、家のなかで何となしにごと〳〵と物語の聲が聞えることがあつた。私は平氣で主人公の室に通つて行つた。そして三十分一時間と待たされて心中多少待ち飽ぐんでゐることもあつた。

俺も人間だ！

我がまゝな愚痴がともすれば頭をもたげて來る。

二三日經つて聞いたら、その夜博士の家では不幸があつたのであつた。そんな時訪問記者に對して平靜を裝つてゐた博士の態度は記者生活を營むでゐる者にとつては涙の出るほど嬉しいものであり、かたじけないものである。

こんなことからして私は訪問記者と訪問される主人公との位置を、引つくらかへして考へて見た。

自分の方では侮辱だと感じてゐる際に、先方ではどんなに迷惑を感じてゐることであらう。自分の方ではパンのために屈辱を忍んでゐるのだと思つてゐるが、先方では通り一ぺんの義理のために時間と勞力とを空費させられるのである。

それに兩者とも氣持ちの宜い時ばかりはない。兩者の何れにか不快なことでもあつたり、面倒なことが起つてゐたりすれば屹度兩者の間の感情はぴつたり合はないに極つてゐる。

訪問記者も氣の毒だが、訪はれる主人公は一層氣の毒な場合がないとも限らない。兩者がこれだけのことを了解してかゝつたら、「訪問」といふことも私たちが今感じてゐるやうにくだらないことでも、辛いことでもないかと思ふ。

×

個人主義の根柢は愛でなければならぬ。理解でなければならぬ。それは自己の愛、自己の理解であると同時に他人の愛であり理解でなければならぬ。自己の悲哀を感じない人に他人の悲哀を感ずる力はない。夜を徹して泣いたこと

のない人に他人の涙を掬む情はない。同時に他人のために自分を殺すだけの愛他心を感じない人に眞個に自分を愛し、自分をはぐくんで行かうとする力はない。

個人主義はまた愛の矛盾を感じなければならぬ。愛の矛盾から起るいろ〳〵な悲哀を痛感する人でなければまだ眞實に人をも自分をも愛したことのある人だとは言はれぬ。

礫が深く深く海底に落ちれば落ちるほど、同時に礫を押し上げようとする力を強く感ずるやうに、自分を愛することの深ければ深いほど同時に自分を無にして他を愛せなければならぬ意識が私たちの心に強く根ざして來るにちがひない。

自分に對する愛も感ぜず、他人に對する愛も感ぜず、たゞ自分の周圍、自分の所有物に對してのみ物的欲望を抱いて、それを以て自己を愛する心だと思つてゐる利己主義者が多い。

×

強盜をやるやうな怖ろしい人間が赤ん坊の笑顏を見てふつつり惡心を斷つたといふ物語りもある。何一つ惡いことをしたことのない正しい賢人で肉親の死を悼むことのできない冷たい人もある。

×

化學的に分析され、化合された香水の室は理智に生きた賢い人々の世である。雜草や木の花に夢のやうな野の匂ひをたゞよはしてゐる荒野は凡愚の世界である。人間は香水の匂ひを去つて一莖の野草にあこがれる時がある。

×

近松の作に出て來る性格には一人として賢い人はない。みんな市井の番頭、若旦那、意志の弱い武士、平凡な老人泣き易い女である。

このころ本郷座で「鳥邊山」を見ても私はさう感じた。哲學やその他の多くの科學が説き明かすことのできない人生の深所を我儘な一武士と無智な一女性とは無韻の詩にうたつてゐる。

×

私は人生を樂しみに生まれたのだとはおもはぬ。苦しまむがためにのみ生まれて來たのだとばかりも考へぬ。けれども私たちのあらゆる生活表現の底には絶えず一連の悲哀や暗黒が湛へられてゐるといふことを直感しないわけにはゆかぬ。

人間は笑ふことのできる唯一つの動物だといふことができるならば、また人間は泣くことのできる唯一つの動物であるといふこともできるのではあるまいか。動物も泣く、しかしかれ等が泣くのは直接な原因そのものゝためにのみ泣くのであつて、直接な原因を貫いてさらに深所に悠久の悲哀があることを泣いてゐるのではないと想ふ。

私たちは知人の死を悼む、しかしそれは葬られんとする屍に對してのみではない、人間すべてが死なゝければならぬといふ根本的な悲哀に對して泣くといふやうな心持ちが必ず潜むでゐると思ふ。

落花を見て傷む心のうちには、花と木の葉とあらゆる動物の生命の奥を徹して流るゝ死の驚異を傷む人間性の悲哀が動いてゐる。

人の死、花の凋落は悲哀の導火線となることはできる。けれども人間の悲哀そのものはさらにさらに深いものであり、悠久なものであり、普遍的なものである。

人間が大きく笑つた時ほどかれの顔に深い悲しみの影がはつきりと彫り付けられてあることはない。大きな繁榮の背景には大きな衰滅がある。大きな歡樂の蔭には大きな悲哀がある。

大きな建設の後には大きな破壞がある。

高く輝かに咲いた木の花の根には深い暗黑と悲哀と運命とが相抱いて沈んでゐる。

笑ふことは泣くことの一變形である。

笑ひつゝ生くる者も死し、泣きつゝ生くる者も死す。

愛慾の巷へ

H君。

今夜は豫て君から紹介されてあつたY君が僕の家を訪ねられた。そして話はいつしか君のことになつた。君がこのごろ結婚されたといふことも今夜Y君の唇を通して聞いた。同時にまた君が二人の病人を抱いて人生の岐路に立たれたといふやうな君の精神上の問題についても略ぼ察することができた。

君が愛してゐる人々の病褥の傍にありて、色々宗教的な色彩に勝つた人生觀を懷いてゐることだらうといふことも察せられた。君が中外日報紙上に紹介されてゐた或る佛教の高僧の極めて眞面目な、また地味な布教法に深い同情を持つやうになつたことも察することができる。

宗教的經驗の白熱せらるゝやうな刹那は多くは偶然のことである。殊に僕のやうな人間はさうであることが多いやうにおもはれる、

キリストには何のやうな機會があつてその三十三年の生涯を美しい童貞を守つて、ひたすらに救世の途を選んだのであるか、僕等には分らないが、釋尊には明かにかれが翻然として發菩提の念を喚び起した機會を持つてゐたことがうかゞはれる。名譽や地位などに對する欲望を比較的多く持つてゐる僕等にとつては、宗教的生活に入る機會を持つといふことは殊に必要であると思ふ。

君がその愛する人を擁いて大學病院に過した十數日夜の苦惱は君のために一つの稀有な機緣を與へたものであつたかも知れない。君は病床に死を待つてゐる愛人のために人生の無常と、死後の永生とを語らうと努めたといふことだ

が、その刹那の君の心持ちは君一人の愛人のためのみの發心でなく衆生のための菩提心であらしめたい。

君の噂はやがて僕等の人生觀といふやうな話題に變じて行つた。僕はY君と一つの火鉢を圍んで色々なことをかんがへさせられた。

第一に僕がこのころ痛切に感じてゐることは人間のいのちといふことである。僕等はうか〳〵してゐる間に人生の半ば以上を過してしまつた。五六年前までは何とも思はなかつた人生が一層懷しいものであり、悲しいものであるといふ念が強くなつて來た。去年の秋ころまでは、僕には秋といふものはこの上もなく懷しいものであつた。僕はよく目黑から桐ヶ谷、落合、雜司ヶ谷、とあてもなく楢や櫟の落葉を踏むで歩いた。武藏野の秋ほど僕に秋の寂しみを感じさせるものはなかつた。かたことたえ〳〵な音を立てゝ廻つてゐる水車の傍に立つて僕は幾度灰色の人生を思つたことであらう。名も知らぬ秋草の數々が北風に顫へつゝ可憐な花を抱いてゐることもあつた。玉蜀黍のうら枯れた畑にはまだこほろぎの悲しい唄が凍りもしないで聞えてゐた。煙のやうに連らなつた疎林の涯には遠い山脈が無限の世界を想はせるやうに僕の虛ろな心に仄かな悲しみをつたへて來た。

僕は孤獨から孤獨へ、寂寞から寂寞へと秋の武藏野をさ迷ふて歩いた。僕には慰めの天地といふものはなかつた。僕の偏狹な性格は家庭の人として全然不適當なものであつた。僕は常に暴君たらんことを欲するからである。僕は家庭を愛することを知つてゐる。けれども僕は家庭が餘りに感激に乏しいことを感ずる。教會に於いてもその他の團體に於いても僕は常に專制君主たらんことを欲する。僕は惠まれたる一人の世界を欲する。群盲、群集の世界に生きようとは想はない。秋はこの小ひさな暴君を受け容れるたゞ一つの世界であつた。

けれども今やその秋からして、落ちついて靜かな寂寞の天地を味ふには、餘りに僕の心はあわたゞしい。秋は忍從者の人生であつた。僕等は餘りに早く秋の靜寂を懷しむだ。

僕は遲れたかも知れない。けれども僕は春の日にかへりたい。晩春から夏の初めにかけての倦怠い日と懶い夜がなつかしい。

時といふ自然の暗い力に對して我一身の力を試みて見たい。

僕は僧院の人たるには餘りに强い情火に燃えてゐる。僕は過去に於いて味はゝなければならなかつた若い日の經驗に眼を瞑つて歩いてゐたのだ。

僕は倦怠い六月の野に入つても孤獨な暴君たらんことを欲する。笑はんと欲する時笑ひ、泣かんと欲する時に泣きたい。

僕は秋の沈靜をかなぐりすてゝ、爛蕩せる思慕のまゝに人生を味つて見たい。

何れ僕のかへり行く道は僕にも分つてゐるつもりだ。いつかはまた僕の姿は楢や櫟の落葉樹下に見出されるであらう。けれども僕は尙ほ一度心狂はしい六月の夜の巷に人間の愛慾をほしいまゝに經驗して見たい。

H君。

僕はいま岐路に立つてゐる。自分を空うして人を愛しようとする心と、自分をのみ愛しようとする心とである。僕は或る場合には自分の愛するものゝために自分の生命を捨てることはさまで困難なことではないと思ふ。けれども僕は或る場合には自分の最も愛するものを鞭打つことができる。僕はかの女を殺すこともできると思ふ。

僕はかの女を愛してゐるのだらうか？

僕はたびたびこんなことを自分に問ふて見たくなることがあつた。それは僕自身の愛が餘りに自己を中心としてゐるからである。

ドストイエフスキイの作中には自分を捨てゝ行つた女のために幸福を祈る男がある。床しい心根であると思ふが、

その平静な聖徒的な心の底に流れてゐる愛慾の闘ひを考へて見たらばどんなに悲壮なことであらう。ドストイエフスキイの手紙を讀むだ際に僕等が強く感じさせられるのは、かれの作中にあらはれてゐるドストイエフスキイとかれの手紙の上に現はされてゐるドストイエフスキイとの間には矛盾とギヤツプがあるといふことである。

僕等はかれの手紙により多くかれの眞實な性格に近いものを發見することができると思ふ。ドストイエフスキイ自身の裡にどれほど思想と實際の矛盾が横たはつてゐたかといふことを發見する。かれも畢竟人間であつた。最も人間らしい人間であつた。かれは道徳や教義を説く人ではなかつた。かれはどこまでも人間らしい憎悪と愛慾の念にもだえた人であつた。かれの實生活のどこに聖者的な平静な心があつたらう！　かれはシベリヤの獄長を憎むだ。かれは或る時はどんなにかその戀人イザイエフを怨むだことであらう。僕等はかれの作を通して見た以上にかれの實生活に立ち入つて、さらにかれの心裡に立ち入つてかれの人間らしい矛盾多い點を發見しなければならぬ。そこに僕等自身の生活に對する刺戟もあり、慰めもある。

僕はこんな風に考へて自分自身のうちにある矛盾をも悲しまない。僕は人をも愛する、同時に自分を最も強く愛する。僕はそのために色々な矛盾を感じる。僕はその矛盾を取去らんがために出來るだけの努力を惜まない。けれどもこの矛盾が一生取り去られやうとはおもはぬ。矛盾は一種の愛の表象とも見られる。僕の愛が深ければ深いほど僕は強く矛盾を意識するであらう。自己をも他人をも強く愛することのできぬ人に矛盾の苦痛はないであらう。僕がかの女の上に投げかける愛の光りが強ければ強いほど僕が自分自身を愛しようとする愛の一面は暗い蔭を作るにちがひない。

キリストや釋尊の心が澄みきつた平静を保つてゐるかのやうに考へるのは僕等がかれ等を人間以上のものであるやうに想ふ迷信から來てゐる。キリストも釋尊も人間であつた。矛盾の苦痛に悩むだ人間であつた。

かれ等の心のうちには僕等以上のエピキユリアンの血が流れてゐたかも知れない。僕等以上の惡魔的な血がたゝへられてゐたかも知れない。キリストがかつて四十日の間惡魔に誘はれて世界の富と榮とを見たといふ傳說は明かにキリスト自身の心のうちに愛慾我執の念が熾烈であつたことを語つてゐると思ふ。

×

世界が悲しいものであるか、よろこばしいところであるか、僕にはそんなことを論ずる餘裕はなくなつた。それが暗いところであらうと明るいところであらうと、自分に賦へられた唯一つの時と空間とであることを考へるとき僕はこの世界を愛せずには居れない。

「それでもお前はこの世界を樂しいとか悲しいとか、何れにか感ずるであらう。」

このやうなことを問はれたとしたら僕はたゞ一と言で應へることができる。

「人生は寂しい。」

しかし僕は何時までも生きて見たい。

僕等の周圍をつゝむでゐるものは暗である、光明ではない。光明は暗から生まれた。僕等の生命は永遠の死から刹那的に生み出された光明である。

僕等の生命は死なしには考へることはできない、恰かも光明が暗なしには考へることのできないやうに。

メエテルリンクは死を目して「生の解放」だと言つてゐる。死はさらにより自由なる生の世界への伸展であるといつてゐる。けれども僕はさうは想はない。死は生の永遠の死である。生は死を境として永遠の暗に葬られなければならぬ。

この刹那のみの生命!

かく思へばこそ自己の生命が二つとない懷しいものとなるのではないか。この刹那の肉體のなかにつゝまれた自分の生命こそ永劫の時空の間から僕が贏ち得た唯一のいのちではないか。

僕等は暗から暗の世界へと押し流されて行く。しかもこの現身の刹那にあつてのみ光りを見、愛を感ずることのできる世界を意識してゐる。僕等は何うしてこの刹那の現身の世界を懷しいとおもはないで居れよう。

×

H君。

不治の病！　これほど僕等に恐ろしい自然の命令はあるまい。そしてその刹那ほど痛切にいのちを懷しむ念に燃えることはあるまい。

僕等の友人は幾人となく不治の病のために失はれた。僕はかれ等の生活の足跡を考へるごとに餘りに人生の儚ないことを感じずには居れない。けれどもやがてこの慨きは僕等の知人によりて僕等の上に投げらるべき悲しみではないか。こゝに於いてか僕等は次來世を想像することによりて、少かに人生の無常を慰めようと努める。かほどに臆病でなければならぬ人生は悲慘ではないか。

H君！　君は僕がこんなことを言つたら笑ふかも知れないが、僕はこのころほんたうに死といふことを眞面目に考へずには居れなくなつた。そして考へれば考へるほど死といふものが恐ろしくなる。

本能と言はうか、運命と言はうか。何のために働いてゐるのか知らないが、兎も角僕等は絶えず自分自身の殿堂を築き上げようとしてゐる。誰れのためにさゝげる殿堂でもない。誰れを祀らうとする殿堂でもない。たゞ僕等の怠惰な時間を充たすために僕等は殿堂建設のために僕等の一生をさゝげてゐる。

海邊に遊んでゐる子供たちは、濱の砂を掻き集めて色々な殿堂を築いてゐる。恐ろしい浪が打ち寄せてはかれ等の

可憐なるすさびを跡かたもなく頽して行く。子供等は死んで行く。殿堂は破壞されて行く。幾代また幾代、人の子は生まれて來る。そして濱に出ては砂のすさびを繰りかへしてゐる。

濱の夕風に吹かれつゝ魔のやうな大海原の底に見入る時、僕は恐ろしい、けれども懷しい死の國を想はずには居れない。濱の子供たちの姿は見えない。たゞかれ等の破壞せられたるすさびの名殘りがあるばかりだ。

僕等の終生の努力が子供等の濱邊のすさびと何れほどのけぢめがあらう。

H君！ 僕は濱邊に立つて、暗い海の涯に立つ白浪を見つめながらいろ〳〵なことを考へてゐる。白い浪と灰色の空が相抱いてゐるところに死の世界から來る限りない悲しみがたゝへられてあるやうに想ふ。人々は遙かに死の海の白波を見つめながら、濱邊に生の創造をうたつてゐる。濱邊の鷗は靑い唄をうたふ。鷗の白い翅が夕暮の波頭に滅ゆるとき、人間のすさびが潮の底に埋められる。

H君！ 君は夜の海ほど懷しいものがないことを知つてゐるだらう。煙のやうな潮吹が風に追はれて暗い海面を滑つて行くのを知つてゐるだらう。

H君！ 君は海の笑ひを聽いたことがあるか。あらゆる人間の努力を破壞しつくした波の冷笑を聽いたことがあるか。

海と暗と相接するときそこにはたゞ死の冷笑があるばかりだ。それは恐ろしい笑ひだ、しかしそれは泣きたいほど懷しい笑ひだ。

百千の人魚の柔かな髮毛が夢のやうな死の唄をうたひながら僕の生命を柔かくつゝむでゐる。僕はその刹那に全く死を怖れない人間となることができる。もし溶けるやうにしてこの肉體が潮と一つになることができるならば僕は何で死を恐れよう。死ほど快いものがあらうか。

けれども僕は死を恐れる。僕は僕の建設の努力がやがては死のために葬り去られることを知つてゐる。けれども僕等は何等かの殿堂を打ち建てないでは居れない。少くとも自分自身の殿堂だけを建設した後死の迎へを待ちたい。たとへたゞ一つの荒浪のために一擧にして暗と死の底に葬らるゝものであるとしても、破壞せらるべき一つの殿堂をも所有しないといふことは餘りに淋しい。

齊しく大海の底に破壞せられ行く僕等の努力である。けれども破壞せらるべき殿堂の一つをも打ち建てずして死ぬといふことは餘りに悲しいことではないか。

不治の病、不時の死！

かやうな言葉を考へるごとに僕は一層時といふものが恐ろしくなる。時はすべて僕等の建設をも努力をも中途にして破壞してしまふ。

死と破壞の大海原を背にしつゝ濱邊の砂を掻き集めてゐる小ひさな建設者！

お前は潮路の涯の暗い唄を聽かないか。

また夕暮の潮がさして來た。

×

H君。この年も暮れて行く。僕の近況はY氏から聞いてくれ。君及び君の愛する人の健康を祈る。

或る秋の日記

落葉のがさつく音を聽いたり、落葉を焚く煙の靑く立ちのぼるのを見るやうになれば、自然かの靜かな眠つたやうな南國の故鄕が偲ばれる。そしてそんな日には千年川の流域に沿ふた舊い町の白壁の倉のかげなどで、儚ない夢のやうな幼な時を送つた誰れかれが耐らなく懷しくなる。

秋になつて間もない日の午後であつた。私は仍り私の舊い記憶のうちから一人の友を喚び起した。私は電話をかけてかれを呼んだ。そしてかれは一ヶ月以前既に第二艦隊に乘り込んでしまつたといふことを聞かされた。私はこの友とはかれの父と私の父との關係から兄弟のやうに暫らくは一緖に育てられたこともあつた。かれが海軍に奉職するやうになつてから今年十年振りばかりで東京に逢つたのだが、その時はもう昔のやうな純な心持ちで對することはできなかつた。見知らぬ細君や義妹や子供などがかれの周圍を取り卷いてゐた。私はかれからも自然遠ざからなければならなかつた。そして私はかれが東京を立つて一と月經つ間かれについては何も知ることができなかつた。それほど私達の間は何時の間にか遠い隔りを持つやうになつてゐた。私は淡い追憶や、寂しさを抱きながら家に歸つて行つた。

この日は出來ごとの多い日だつた。

ついこのごろ頭を惡くして飯坂の溫泉に出かけて歸つて來たはかりのT中尉から葉書が着いてゐた。それにはK男爵の奧樣が突然御危篤であるといふことが書いてあつた。

その夜は非常な雷で、雨はどしや降りに降つてゐた。

K男にはT中尉は恰度實子のやうに愛せられてゐた。T中尉との關係からして私は男爵の邸へも二三年繁々出入し

たこともあつた。男爵が亡くなられてから五年目である。その間T中尉は男爵の墓によく幾度も夜半に詣つてゐた。私も數度T中尉と一緒に谷中の墓地に行つたことがあつた。男爵の沒後、男爵家の空氣は一變せられた。田舍から伴れて來てあつた素樸な庭男は如才ない東京風な男となつた。國から上つてゐた執事は何時となしに某會社の男にかへられてゐた。

T中尉も私もそれからは殆んど男爵邸へは近寄らなかつた。

T中尉から葉書が來た翌朝だつた。私は高輪の男爵邸を訪ねた。門には既に悲しい影の紙片が貼付けてあつた。奧樣は昨深夜亡くなられたといふことだつた。そこには見馴れぬ人々が集まつてゐた。T中尉は演習に出かけて行つた後だつた。私はそのまゝ玄關から歸つてしまつた。家に歸つた時恰度T中尉が打つた電報が着いてゐた。それは今夜一緒にお通夜に行かうといふのだつた。私は最後の名殘りを惜しみたいといふ考へで再び出かけることにした。

この日もまた私にとつては寂しい思ひ出の多い日だつた。Sといふ友人の醫學士から二三日中に臺灣に出發するといふ消息を受け取つた。S醫學士も亦千年川のほとりで惡戲をした仲間の最も互に信じ合つてゐる一人であつた。かれは京都の大學を出て去年の暮東京に上つたのだつた。かれとも私は七八年振りに逢つたのだつた。それでも雜誌の訪問や編輯に追はれてゐる私はしみじみかれと話す機會を持たなかつた。かれが二三日中に立つといふことを聞いた時私は取り返しのつかぬ罪惡でも犯したやうな氣がした。何故私は倚つとかれと度々會つて遊んで置かなかつたのか、それが非常に物足りなかつた。私は大久保にかれを訪ねて、その夜遲くまで咄した。そしてその歸りに新宿から廻つて高輪の男爵邸に着いたのは十時過ぎであつた。私は玄關に受け付けをやつてゐた若い學生に頼んでT中尉を呼んでもらつた。二人は柩の安置されてある室に沿ふた長い廊下を離れの方に行つた。

そこには五六人の若い人達が黑枠附きの通知狀を書いてゐた。足を投げ出してゐる男もあつた。男爵夫人の遠い姻

成にゐたるといふ男は――この頃騎兵聯隊にゐた――庭に犬を呼んでゐた。私はまだ一度も此の男と言葉を換はしたことはなかつたので此の時も見知らぬ振をしてゐた。

お燒香をしたのか？

とT中尉が訊ねた。

何んな連中がお通夜をしてるのだ？

と私は訊ねた。ビズネスマンに、虛榮心の强さうな婦人の連中ばかりだとT中尉は言つた。そしてそれ等の人々は殆んど二人が見知らない人ばかりだつた。

道子さんは大磯から見えられたのか？

道子さんは男爵のたゞ一人の令孃だつた。T中尉が士官學校を出て間もなく、道子さんはその頃男爵が支配して居られた會社の技師長の家に嫁いで行かれたのだつた。T中尉はその秋湯ケ原から始めてかれの苦しい戀愛を私に打ち明けて寄越したことがあつた。

道子さんか？

と言つてT中尉は苦笑した。

道子さんは嬰兒さんを伴れて見えてゐられたよ。

私はそれ以上を聞くに耐へなかつた。

俺は飯坂の溫泉に行つたので折角頭が少し良くなつたやうだつたが、今度のことでまた頭が滅茶々々になりさうだ。奧さまはほんたうに氣の毒な方だつた。

T中尉は笑ひながら頭を搔き搖るやうにして言つた。二人はたうとうその夜はお通夜もせず、燒香もしないでまた

薄暗い廊下を外に出た。空には星がまたゝいてゐた。二人は三田の臺を芝公園に出た。木立の下は恐ろしいほどに黝かつた。

俺はたうとう奥様の柩も見ずに來た。

俺もあの室には一と足も踏み入れなかつたからなあ。

しかし柩の前で燒香する者が悲しんでるのか、柩も見ないで歸つてしまつた者が悲しんでるのか、秤にかけて見ないと分らない。

隱れたる所で悲しむ者がほんたうに悲しむでゐるのだ。

俺達も戰爭にでも行つて死ねりやあ、それで解決も着くんだがなあ……

二人はこんなことを話しながら山門の前に出た。秋らしい夜の空氣がひいやりと二人をつゝんだ。

その翌日は谷中の齋場で告別式が行はれた。私はたうとう行かなかつた。そして私はS醫學士を誘つて新橋で寫眞を撮つた。S醫學士が南千住を見たことがないといふので大橋に行つて、あれから船で荒川を下つた。葦の間を縫ふ秋の流れと、寂しい影を追ふ秋の陽とが、どこまでも「漢陽城頭人を送る」とでもいひさうな大陸的な哀愁を湧かさせた。S醫學士の顏を見ながら私は逢つてはやがて訣れなければならぬ人間の寂しい運命を想はないではゐられなかつた。流れの水は濁つてゐた。綾瀨川が見え出したころ鐘紡の汽笛が力ない音響を水の上に滑らして來た。私は靜かに時計を出して見た。

恰度一時！　今男爵夫人の告別式が始まつてゐるのだ！　と私は思つた。道子さんや、T中尉や、俗人や、ビズネスマンやが色々な幻影の渦をなして私の虛ろな心を襲ふて來た。

S醫學士は熱心に濁つた流れに見入つてゐた。

落葉するまで

今日も栗の葉はかさこそと音を立てゝ落ちてゐる。私は朝ことに疎らになつて行く栗の梢を透して秩父連山の山容を發見しようと努めてゐる。それでもまだ森の梢はかなりに繁つてゐるので山を見ることはできぬ。白い霜が落葉の上に置かれるまではこの窓からは秩父の脈々を見ることはできない。

私は一日一日とうら枯れの野を待つてゐる。

窓からは大學の尖塔形の屋根も見える。高臺の黒ずんだ屋根の波には沈靜な秋の陽が漂ふてゐる。そのひま〳〵を疎らな梢が埋めてゐる。庭にも筧にも黄褐色の落葉が冬の來るのを待つてゐるやうに思はれる。

秋の蝶は殊に寂しい感じを與へる。菜の花のやうに黄色な翅の蝶が小春日和の陽を浴びて落葉の上に淡い影を投げて飛んでゐる。

窓にはまた時々秋の空を支配するやうな鴃舌の聲が聞える。その男性的な聲を聽くごとに私は凛とした心地を覺える。しかしかれが可憐な小禽を追撃することを想ふ時、そこに造物者の計畫の矛盾や殘忍さを目のあたり見せ付けられるやうな心地がする。

この窓からはまた色々な物の音が聽かれる。活動の樂隊が毎朝のやうに西片町を北の方に練つて歩く。夜はまたチヤルメラを吹く男が追分の方から下つて來る。これ等の聲々がみんなたゞ生きんがためのみの人間の唯一の努力であることを想ふ時、私は人間生活殊に都會生活といふものゝみじめさを感ぜずには居れない。

この窓にもまた時々色々な世間の出來事が傳へられて來る。喜ばしいこと、悲しいこと、色々な世間の噂が傳へら

れて來る。或る處女は一年餘り逢はなかつた間に、旣に人の妻となり、人の母となるべき運命を持つてゐた。かの女はコスモスの繁つた家の娘であつた。

×

大川端の病院に入つた二人の姉妹があつた。そしてそれがこの秋、妹が死んでその翌の日に姉がつゞいてまた死んだといふことを聞いた。二人とも血を吐いて死んだ。妹の方は無口な、そして何時も隅の薄暗い處で、考へ込んでゐるやうな娘であつた。一家の人は、かの女を變人だと呼んで、誰も餘り可愛がつてやらなかつた。姉の方は、きやんで何時も如才なく振舞つてゐた。誰もがかの女を一家のクヰンのやうに持て囃してゐた。妹は床のなかでも無口だつた。そして死ぬる一日前始めてさめ〴〵と泣いた。それでも何にも言はないで、たゞ泣きに泣いてゐた。死ぬる日には極やすらかな顏をしてゐた。そして祖母と、兩親の手を交る交るに握つたまゝ「兼ちやんにも、義夫さんにも宜しく、おまつにも宜しく、ヂョンにも宜しく……」とかの女が知つてゐるだけの人の名や、飼犬の名までも擧げて死んだ。

その翌日死んだ姉は死ぬる日までこの夏拵へて置いた三枚の縮緬の單衣を着さして吳れとせがんでゐた。そして誰が訪ねて來ても逢はなかつた。ヒステリーのやうになつて無暗と附き添ひの看護婦を叱りとばした。死ぬる時には誰一人枕邊にはゐなかつた。一家の女王はかくして眠つた。

私は今窓に凭つて二人の姉妹の死のなかに暗示せられてゐる色々な問題を考へてゐる。

×

オスカア・ワイルドの、「自分は何時も悲哀を中心として一つの圓を描きながら廻つてゐる」と言ふ言葉を記憶してゐる。私は何時も自然の驚異を中心として寂しい影を作りながら廻つてゐるやうな氣がする。

私は森の自然のなかに運命つけられた男のやうな氣がする。私は時々氣まぐれに街の人々が戀ひしくなる。たま〳〵街に出て華かな燭の光りや、騒々しい物の音につゝまれる。それでも私には何うしても森の自然を忘れることはできない。私はひたぶるに自然が戀ひしくなつて森に歸つて來る。この窓から落葉を見つめてゐるとしみ〴〵とそんな感じが湧いて來る。

タゴールが「海水を一つの水甕のなかに入れて擔ぐ人はその海水の重さを感ずる。しかしかれが水甕を捨てゝ海水そのものゝ中に飛びこんで行けば何の重さをも感じない」といふやうな意味のことを言つてゐるのを讀んだ。かれの言葉の意味は狭い自我を捨てゝ廣い自我に飛びこめといふのである。小我から大我への飛躍である。

しかし私たちはまだ眞實に小ひさな自分を捨てゝ大我に飛びこむだけの決心や準備を缺いてゐるやうに思はれる。私たちはまだ小ひさな水甕を抱へたまゝで渚に佇立してゐるやうなものではないだらうか。ともすれば私達の水甕にはまだ一掬の海水さへ盛られてゐないやうなことはないか。

私は大海の潮に飛び込むだけの大悟の域に達することはできないまでも、せめて美しい大海の底から碧瑠璃のやうな潮を水甕に盛つて、虔まやかにそれを戍つてゐたいと思ふ。自分ひとりの水甕で宜い。虔まやかに、柔かに、それを抱いて行きたいと思ふ。

現在の私にとりては、先づ小自我から分離せよと言ふことも理解のできないことではない。しかしそれは自然に一度は私たちの經驗の上に來べきものであつて、現在の生活を強ひてその方面の努力にのみ導かうとする必要はないと思ふ。

小我から大我に入るといふやうなことは、自分で故意に努めたからといつてできることではないと思ふ。眞の大我に入るといふことは、眞に小ひさな自分一人の水甕を守つてゐる間に自づと安住することのできる、到達せざるを得な

い調和境であると思ふ。

私は自分一人の水甕をすら眞に愛することも、了解することもできない現在の生活法を悲しむ。ワイルドのやうな執着心の强い男の方が、まだ私たちには、かの悟り濟した聖者たちよりも幾倍かの懷しさを覺えさせる。

執着や怨嗟や惑亂や、そんなものが私たちの生活の目的であるといふのではない。私たちは少くとも眞の生き方をしようと思ふ時、或ひはかの聖者たちのやうな冷徹せる哲心の境に達し得るであらう日を期待してゐる。しかしながら、その前に私たちは自分一人の生活の燃燒が眞劍になつてゐないことを悲しむ。大海の潮に浸される日はよし來なくとも、せめて自分一人の水甕の潮に思ふ存分浸されて見たいと思ふ。

×

また或る日、私はこの窓から白い秋の飛雲を見ながらこんな靜かな氣分を見出したことがあつた。自分より年若い者や、弱い者は勿論、自分より先輩でもあり、學識もあり、地位もあるやうな人々を私の心の底から傷ましい人々であると思ふことができた時、私は誰よりも偉大なる或るものを攫むだやうな氣がした。キリストの心持ちもこれではなかつたかと思ふ。

靄につゝまれた夕暮

新綠を讚へる私の心は直ちに限りもない追憶の悲しみを誘ふて來る。梧桐、楓、栗、檜葉、八ツ手、紫陽花、枇杷樹と幾らもない庭の嫩葉を見るごとに私は遠い南の國の夏を思ふ。明るい南の國の夏！　しかしそこには暗い追憶から切り離すことのできない綠の野と白い壁の家並とがある。

剖葦と鷄と鵜とが、また私の過去の夏を思はせる深い印象として遺つてゐる。國境の大川をはるかに阿蘇の煙も見えなくなると、幾十里の平原は一面の綠につゝまれてしまふ。筑後川の蘆荻の間には、かしましい剖葦の啼く音が快い怠惰の氣を誘ふて來る。お城の濠にのぞむだ樟の繁みからは鵜の可憐な物語りが聞かれる。野良から晝食に歸つて來た男達は「今自家(うち)の田に鷄がゐた」といふことを大事件でも起つたくらゐな昂ぶつた調子で話して聞かせる。私たちは竿を以て息せき切つて水田の方へ走つて行つた。だが一度だつて鷄を捕へることはできなかつた。

椋、松、櫨、樅、欅が一時に靑葉して國境の川の土堤には幾里も凉しい影が漂ふてゐた。飴賣りや、駄菓子賣りが終日その下に立つてゐた。琵琶彈きや門付けが憩ふてゐることもあつた。私は蛇苺の實の爛れるやうに熟してゐる土堤にかけ上つて行つて、小鳥の巢を探して歩いた。笛を吹いて蝮蛇を呼び寄せる男の靑い顏をよく川岸の繁みのなかで見ることもあつた。

夏は私にとつてたゞ譯もなく嬉しいものであつた。

私は久しく旅から旅と歩かなければならなくなつた。その間に見た夏はいろ〳〵な形を以て私に現はれた。私は夏を明るいと思つた。嬉しいと思つた。しかし同時に、夏には秋にもまさる寂寞のひそむでゐることを知るやうになつ

た。

私は東京に出て來てからも室のなかで本を讀むことのできぬ性であつた。田舍にゐたころ野原に寢ころんで本を讀む習慣がついてゐた爲(せゐ)であつたかとも思ふ。私はよく巢鴨から大塚あたりの郊外に寢ころんで、靑い葉蔭を透して雲の峯を見ながら本を讀むだ。自然の恩寵は靑葉につゝまれた大地の上にこぼれてゐるやうに思はれた。凉しい風が吹いて來る每に櫟や栗の嫩葉がよろこびにふるへてゐるやうにも思はれた。

しかし私はとぼ／＼と夕方の麥畑や、森のなかをさ迷ふて歸るごとに、懶い悲しさや、不安な壓迫を感じないわけには行かなかつた。それは秋にも冬にも感ずることのできないほどの深い、そして執拗い寂しみであつた。失つた過去を悲しむ寂しみであつた。新芽が出るころになると、肉體の舊い傷が疼き出すやうに、私の心もまた靑葉ごろの夕暮になると、失はれた過去のいろ／＼な悲しみを以て疼くやうに思はれる。しかし何れにせよ綠の夏は最も懷しい人生の一表現である。切に生き甲斐のあることを感ずるシーズンである。私の心は明るかつた少年のころよりも、悲哀や暗を感じてからの此のころの方がより以上に夏の野を懷しいと思ふやうになつた。

何のこだはりもなく、何の屈託もなしに眺めてゐた夏、それは追懷のうちに懷しい綠の夏となつて現はれて來る。涙を知れる心、鞭打たれたる心に見る現在の夏は、言ひやうもなく尊いシーズンである。言ひやうもなく驚異に充たされた自然である。しかもその夕暮れに見る綠の野、綠の蔭は秋よりも深い悲しみの涙を誘ひ出す。私は夢のやうな靄のなかにつゝまれた夕暮れの夏の木立と平原とを愛する。そこに最も深い自然の驚異と私の淡い悲しみの追憶とがひそむでゐる。

睡蓮夢

こゝに美しき乙女ありて幻のごとく死なば、かの女の運命を祝福するであらう。野の花よ、川沿ひのうばらよ、かの女の亡き骸が運ばれる日の鐘の音にうなだれよ。

荒き男等よ、かの女のマアブルのやうな腕に觸れることをするな、かの女は今眞實の生命を見出したのだ。假象に囚はれたる世界の人々から奪はれた刹那に、かの女の靈は永遠の故鄕に還るのだ。

死者を送る黃昏の鐘が鳴り響く！

眞實の生命から溢れ來る力のどよめきを聽け！

黃昏よ！　お前の灰色の空は美しき乙女の亡き骸を葬むるには、餘りに貧しい、餘りに單調な、餘りにわびしい世界である。

黃昏よ！　お前のよろぼひたる足どりの流れは、可憐な乙女の死を葬むるには、餘りに悲しい思ひ入れをたゝへ過ぎてゐる。餘りに暗い囁きを泡立たしてゐる。

われ等は明日のかはたれ時を待たう！

うら若き女の死！

夜明けの星が牧場境のポプラーの並樹に！　白い哀愁の影がひたすらに赭土徑を彷徨うてゐる。反芻の懶げな音のたゆたひ、板間を蹴る寂しい足搔き！

東雲の空が眠りから醒めた湖のやうに、靜かに靜かに靑草の上を滑つて、ひいやりとしたそよ風の息遣ひを聞かせ

る。露に沾ふた大地が朝の呼吸を始めたやうに、睡蓮の卷き葉、浮き葉に抱かれた夢と、搖られた夢の名殘りが、淡い色の水煙になつて、湖一面にたゞようてゐる。翡翠の水を擊つ羽音が和むやうに物怖ぢた音を立てた――菱の核がはじけるやうな。

夜明けの星が最後の瞬きをする！　牧場の朝風が最初の囁きを初める！

今だ！　今だ！　その柩を擔げ！

墓場に導く並樹の小徑には、巡禮の詠歌一つ聞えてゐない。露と、そよ風と、晨の夢がさ迷ふほかには、鼹鼠の一つさへそこの徑を橫切つて行かなかつた。

今だ！　今だ！　乙女の亡き骸を送れ！

まだ曉の夢がさめぬ間に、湖の面が突つ俯してゐる間に、羊飼ひの男が往き來せぬ間に、白絹で被ふた乙女の柩を送れ。

夜でもない、朝でもないその一と時！

水草の白い花瓣の上で、夜と晝とが訣れようとするその一と時！

それが乙女の死を送らねばならぬモーメントだ。その刹那には人間もなければ、神もなく、生もなければ、死もないのだ。たゞ存在するものは白い花と、滑かな風と、小徑と並樹と、靈しき樂音と美しき乙女の幻影だけなのだ！

そして最後に自然のちからのみだ！

柩を擔ふ男も、花筐をさゝぐる女も、香物を供へる少年も、それはみんなその刹那の運命が造り出した、刹那的の幻影なのだ！

幻影の男と、幻影の女達よ、靜かにその柩をもたげよ。聖僧と尼僧達よ靜かに死者の祝福を祈れ！　それでもお前

達は歌つてはならぬ。聲を立てゝはならぬ。鋤の刄音さへ立てゝはならぬ。すべて靈と靈とが通ふ所には、沈默の外何物もみんな虚僞である。お前達が聖歌をうたふことも、讀經をすることも、それはお前達自らを滿足させるための利己的な心の指圖からなのだ。沈默してお前達の靈を醒ませ、そして死んだ乙女の胸の奧底から永久に醒めたる靈の力を受け容れよ！

美しき乙女の死！

人々よ、乙女の美を懷へ！　柔和な眠りを想へ！

人々よ、艶かなりし乙女の日を憶へ！　ふくよかなりし肉付を想へ！

もし誰か蒼褪めたる額、赭黒き唇、冷たき胸、爛れたる肉、落ち窪みたる眼底を想像するならば、そは呪ふべき男と女！

死は最高の權威であり、勝利である。人間の眼と太陽の冷笑が達せぬ墓場の暗には、美しき乙女は永劫に美しき乙女さながらに眠つてゐる。そこにはたゞ思ひ出と、懷しさと、快き眠りの上に築かれた美の王國があるのみだ。

實在の力に强ひられたるわれ等の悲しき運命が、われ等を送る墓場の徑は、永久の生の第一歩である。しかも美しき乙女の旅立ち！

曉の鐘よ！　凱旋のうたに合せて響け！

美しき乙女は永久の美と、生と、權威の王國に旅立つのだ！

湖の花よ！　さゝやかなる琴の音に、汝がかはたれ時のいのちのうたをうたへ！

人生の頽敗と、落日とを知らずして眠りし乙女のためにうたへ！

今日一日の太陽と風と、水と、世界が美しい乙女のために泣く！　しかも嬉しい永遠のいのちの旅立ちに！

×

夜が明けてしまつた！
朝のそよ風が森の葉摺れに快濶な羽叩きをして過ぎた。
お早う！　お早う！
野良に行く二人の男が機械的に腮をしやくつて過ぎた。
玉蜀黍の葉はまだ五寸に足らぬ！

呪はれた歌手

靑い絃の琴を抱へた男が今日も、頽敗した古街の軒並を、東から西へと疲れ切つた足を運んで行つた。絕望的な絃の音が、拗ねたやうな、投げ出したやうな氣分を誘ふて、蟲喰んだ、破風から櫺子窓を通して顫へてゐた。——若い女達のすべつこい、觸つたらつひえさうな胸の上に。

街の人達は、渠を惡魔の使だと言つて、その門の前に立つことを拒んだ。

それでも渠は枸杞や、枳殼の籬に隱れては、靑い絃の旋律に伴れて不思議な歌を唱ふた。銀壺に祕められた紅寶石の潤を揜む夜のときめきと、南國の若い戀のねたみが、恰度綀絹の裣帛のやうに、他愛もない娘達の胸をそゝるのであつた——窓のなかに鎖された娘達の。

惡魔！　俺達の娘を誘惑するな！

お前の靑い絃を斷ち切れ！

呪はた歌ひ手！

頑な親達や兄姉達が多勢で、渠を甃の上に突き飛ばした。そのはずみに靑い絃が纎細い情韻の波を一つ顫かせた。窓のなかに鎖されてゐた娘達か、氣遣はしげに櫺子の隙から渠を眺めてゐた。

親や兄姉達が、叱るやうにして、娘達を奧の方に追ひ込めた。街並の扉が渠には永久に鎖されてしまつた。

よた〱と小ひさな子供が步いて來た。覗くやうにして、渠と、靑い絃の琴とを見くらべてゐた。

叔父ちやん！　面白いからうたつて！

子供の可憐な手が、すでに青い絃に觸れてゐた。

渠は微笑みながら琴を拾うて起ち上つた。

懊惱の巷から

音樂家と話してゐる間に私はしばしば音樂家の耳を羨むことがある。畫家と語つてゐる間にまた私は度々畫家の眼を羨むことがある。それは彼等は私が聽くことのできない音を聽き、私が見ることのできない色を見ることができるからである。彼等の世界はたしかに私の鈍い官能の上にあらはれた世界よりは、より豐かな物の音と色彩とを持つてゐる。

第六、第七の感覺を發見して、そこに私たちの世界を押しひろげて行くといふことは私たちの生活内容を豐かにする上からして必要なことである。宗教家の見神といふやうな經驗も畢竟するに是等の感覺の非常に發達した現象に過ぎないことであらう。

宗教といへども私たちの官能生活を他にしては成立し得ない。第六の感覺が宗教的に眼醒めた時に宗教的憧憬が生まれる。

宗教は音樂でなければならぬ、祈禱は諸律でなければならぬ。宗教は心情の顫動でなければならぬ。宗教が罪惡を云々し、道德を批判してゐる間はまだ低級な宗教である。宗教は全心の感激でなければならぬ。そこには罪もなく法もなく、たゞ大自然の交響樂に溶け込むで行く歡喜と悲哀との直感のみが動いてゐなければならぬ。

私たちは五つの感覺を持つてゐると言はれてゐるけれども、それは何れもまだ耕すところまで耕されたことのない官能の畑である。私たちは持つてゐるかぎりの感覺から味はゝれる生活をできるだけ押しひろげて行かなければならぬ。啻に音樂家や畫家ばかりの官能生活ではない、あらゆる方面にわたりて私たちの官能の生活を伸ばして行かなけ

ればならぬ。私たちの未だ耕されてゐない五感の田園から生まれて來るものは第六の感覺でなければならぬ。直感でなければならぬ。

すべてのものは動いてゐる。生命は流れてゐる。宇宙は音樂的顫動でなければならぬ。直感は靜止ではない。直感はまた音樂的顫動である。心靈の顫動である。

直感は共鳴である。主觀の顫動と客觀の顫動とが同じ波動を持つてゐる時始めて生命の交響樂を奏づる。二つの心が同じ音樂的律動を持つとき二つの心は相結ぶ。二つの鐵片を熱するのは、鐵に顫動を與へんがためである。二つの鐵は分子の顫動なしには一つになることはできない。

人と人との愛もまた心と心との顫動でなければならぬ。心から心へと動めき行く力は二つの心の音樂的顫動でなければならぬ。そこに二つの心の間に今まで意識されなかつた新らしい世界が生まれる。第六感は新らしい世界を意識する直感である。

愛しようとして愛することのできぬ悲哀がある。二つの心が直感の一路に於いて相擁する時にのみ矛盾は取り去られる。

私たちは人を愛することを知つてゐる。私たちは音譜を持つてゐる。けれどもそれだけでは私たちの愛は成り立たない。私たちはうたはなければならぬ。彈じなければならぬ。顫動を喚び起さなければならぬ。第六感の世界に於いて天才の樂譜を味はゝなければならぬ。

知るといふことは必要である。感ずるといふことは更に必要である。私たちの愛の經驗が理想的にのみ說かれてゐる間は眞實の愛は見出されない。宗敎も愛も直感の上に燃ゆるこゝろの燃燒でなければならぬ。

打たれたる鍵の音を聽き分ける力は音樂家にある。けれどもそれだけではかれはまだ眞の意味の音樂家ではない。

彈ぜられざる琴の音を聽き、打たれざる鐘の響を聽くものでなければ眞の音樂家ではない。

直感の世界に於いてあらゆる人生の諸相は渾然として永遠の交響樂のなかに融和される。そこには音樂家もなく、宗教家もない。すべての人々が根源的生活の活動を直感しつゝ永遠の生活をよろこび無限の悲哀をかなしむのみである。それが明るい人生であらうと、暗い人生であらうとさながらの純人生を意識することのできる唯一の世界である。

直感の生活は或ひはそれが外的には乞丐の生活であるかも知れない。しかしそれはかれにとつて何の問題ともならない。無論現在に於いては私たちは非常な矛盾を感じてゐるが、そのやうな超現實的な一境を目ざして進まんとする努力を持つてゐることは否むことができない。

私は毎日自分及び自分を頼つてゐる數人のパンのために私の時間の殆んどすべてをさゝげて居る。愛、憎惡、屈從侮辱――色々な人と人との接觸から湧いて來る懊惱の渦のなかに生きてゐる。私は此生活の濁り切つた渦卷から遁れようとはおもはない。溷濁し停滞した生活の渦の底から湧く悲痛な人生の音樂をも私は聽かなければならぬ。ともすれば私の心は眞正面に生活の憎惡や爭鬪を見つめるに耐へないほど卑怯な弱いものとなることがある。けれどもそれがために私は超感覺の世界を見出さうとしてゐるのではない。爭鬪と矛盾とが私たちの生活の究竟ではない少くとも私たちは更に豐かな愛を經驗し、更に眞實な世界を見出さんがために第六の感覺、第七の感覺の世界を見出すことが必要である。

眼に見えぬ一實在の花を見、音なき物の音を聽き、憎惡のうちに愛を見出し、氷の中に溫かな春の光りを見出さんがために私たちは私たちの感覺の生活を押しひろげて行かなければならない。

私たちは餘りに眼に見ゆる世界を見てゐた。私たちは餘りに手に觸れる世界を見てゐた。しかしそれが私たちの生活すべき世界のすべてゞはない。

病床より

T君。明日は聯隊の軍旗祭だね。軍旗祭までには、是非快くなつてみんなで出かけようと思つてゐたが、これではとても駄目らしい。僕はこの四五年、いつも秋と冬の變り目には、一週間くらゐづゝ病むのが殆んど習慣のやうになつてしまつた。今度のも大方それだらうとも思ふが、それにしては少し非道いやうだ。

「卒業したら屹度皆さんが、一度は非道い病氣をなさるんですよッ」と言つて、慰めて呉れる宿の奥さんの所謂、僕は卒業病に罹つたんだらう。

丈夫な折には、滅多に考へなかつたやうなことまでもしみ〴〵と考へさせられるので何だか淡い夢のやうな、また苦いやうな、頼りないやうな感慨だと思ふが、……その夢のやうな、蜘蛛の絲を手繰るやうな儚ない想に耽つて、一日一日と灰色の晩秋を味つて行くのが、僕の昨今の日課なんだ。

卒業後間もなく。南國のバラックに一と夏を過して、腮紐のあとがまだ瞭然した日焦けの顔で、さも元氣さうに新橋に歸り着いた時、僕の心には已に一種の不安がその薄暗い影を投げかけてゐたのだ。あの焦けたやうな、長いプラツトフォームのコンクリートを踏んだ時、僕は殆んど故意とらしく思はれるまで、その第一歩を大きく開いて、がらがらと拍車の高い音をさした。しかしその拍車の音は、長途の行軍を了つて、賑かな街の宿營に着く夕に聞くやうなはしやいだ響ではなかつた。僕の心には先きを急ぐやうな、いら〳〵するやうな、或るものが纏い付いてゐた。僕は今日からバラック内の人間ではない、明日から背廣を着込んで、てく〳〵と先輩を訪問しなければならぬのだと思つた時、今までの夢のやうな生活が全然破壞されたやうな氣がした。

就職難！　バラック生活には、這麼くだらない杞憂はいらなかつた。學校生活の間にも、夢にも這麼ことは思はなかつた。卒業したら「什麼にかなるだらう」。たゞその「什麼にかなるだらう」を頼むともなく頼んで、今日まで單純な學生々活を送つて來たのであつた。

　六月になつた。久世山から關口の高臺にかけて、嫩葉の輝きが温たかい風にもえて街の家々をつゝんだ。僕は駒塚橋の袂の草村に寢ころんで、卒業後の甘い夢に耽つては、獨りではゝ笑んだこともあつた。七月、八月と南國のバラックで他愛もない生活を送つた。秋風が吹いて來た。僕は再び東京の人となつた。十日、二十日とまださすがに日中は草いきれして暑い巣鴨や、雜司谷の街外れを、日課のやうにして家を見て歩いた。辛と家には落ちついたものゝ、この頃から毎日、たゞ當てもなくぶら／＼遊んでゐることが何となく濟まないやうな、恥づかしいやうな氣がした。同時にまた生活とか或ひは就職の不安といふやうな感じが頭を擡げて來た。僕はこのあひだ、ある夕方、森川町の通りで、C君に出會つた。新調の背廣に鳥渡氣の利いた風をして、あの模範道路をすた／＼と追分の方に歩いてゐた。N新聞社に口があつて、家庭訪問の方を擔當してゐると言つた。それから四五日經つて、大久保にM先生をお訪ねした。ついこないだ新築せられたばかりの家なので、玄關から階段を上つて、先生の書齋に通された時、新しい木の香が快く匂ふてゐた。間もなくK君も來た。さうしてK君は××雜誌社の編輯を遣つてゐると言つた。その歸りに浩養館の前でE君に會つた。鼻下の髭が黄昏の暗にも、それと思はれるだけに黒ずんでゐた。羞恥家のE君があんなにはやく髭など生やさうとは思はなかつたので、何だか揶揄られるやうな、悲しいやうな氣がした。その翌日僕は履歴書を持つて、またM先生をお訪ねした。歸りには行くともなしに、面影橋から左に、江戸川の流に沿うて例の森に迷ひ込んだ。そして僕はN君と君と三人で、レクチュアを失敬しては、よくあの森に遊んだことを思ひ出した。そしてあの森をみつのゝ森と名付けたことや、蓮華艸の花筏を拵へて春の句を結び付けてあの流れに浮かべたことや、栗の實や椹の

貨を拾つては、エマースンの時間に、M先生の机の上に並べて知らぬ顔をして、先生を笑はせようとしたことなどを想ひ出した。あの頃の詩のやうな若々しい時代が戀しくなつて來た。自分ではさほどゝも思つてゐなかつたが、あの森に這入つてあの森の懷しい秋の香を嗅いで、じめ〳〵した落葉を踏んだ時、そのころの自分と現在の自分とを比較しては、僕は焦々した、せわしないやうな、絶えず何物かに追はれてゐるやうな不安に囚はれてゐるみじめな現在の自分の俤を傷はしく想はずにはゐられなかつた。舊い、しかも天井の低い建物の中で、小刀の痕だらけの燻ぶつたやうな長机に凭れながら、獨歩や梁川のやうな人達も這麼いたづらをしたのか知らと想つては、僕はあのざら〳〵した舊い机の面を擦つて見たこともあつた。そしてブラウニングの輪講に名指されたのも知らずに、大に面喰つたこともあつた。學生時代の懷しい夢をそゝるやうな櫟の落葉は忙しげに地を滑つては晩秋の聲を立てゝゐた。僕はその夕方、江戸川の終點から電車で歸つたが、あの森で見たなつかしい時代の俤が、電車の軌る喧噪な響に打ち壞されたのを惜しいと思つてゐた。

「初にお目にかゝります、私は××と申す者で……」

紋切形の挨拶を交はして僕は幾度先輩の家を訪問したゞらう。眼を閉ぢて、氣懶い體を投げ出すやうにして僕は今白いシーツの上に臥つてゐる。重湯を運んでくれた宿の奧さんの偸むやうな跫音が、室の外に暴れてゐる冬枯れの風と縺れて遠い村里の鐘を峯越しに聽く時のやうな、やるせないやうな氣分をそゝつて行く。そして、ついこなひだまでてく〳〵歩いて、肉を獵る犬のやうに、大きな門構の家を訪ね廻つた自分のみじめな敗殘者のやうな俤を描いてゐる。耐へられぬ羞恥の念がむら〳〵とおこつて來る。

他人にはさぞ迷惑であらう。しかし僕は何時までも臥つてゐたいと思ふ。病める身には、昨日の焦々した自分が、まるで他人事のやうに思はれる。僕は當分あの風の聲を聽いて思ふ存分考へて見よう。

×

昨夜は非道い風たつたね。櫟や楢の木の多い巣鴨の家では一層風のもの淋しい聲が、夜つぴて遠い海の音のやうに聽かれた。干からびた咽喉、かすかすになつた脣、掻き亂されるやうな頭、どす黒い毒血が燃えるやうな胸の疼痛に耐へながら、僕は暗を狂ふて行くあの怖ろしい風の聲を聽いて夜もすがらまんぢりともしなかつた。大都會のすべての活動が靜止した眞夜中に、虛空を蹴つて吼え狂ふ暗の風の裡に動いてゐる大自然の威力を想つた時、僕は戰慄せざるを得なかつた。夜が明けて、靜かな森の木蔭に眞白な霜が下りた時、「吾は宇宙の支配者なり」とほこる人間の小ひさな力や、愚かさを笑はずにはゐられなかつた。

「僕の全身は熱に解けて、僕の肉體は滅びて、あの風の中に、吸ひ込まれて行くんではなからうか。」

薄い衣を被せられた電燈の光りを見ながら僕は這麼ことを想つた。僕は今自分を離れて、僕の肉體と僕の精神とを暗の中に赤裸々にして、轉がして見ようと試みた。昂奮してゐる僕の神經はまざまざと僕の死後の姿をも想像することが出來たが、どんなにしても僕の靈魂の姿は見付からなかつた。僕は第三者の位置に立つて、病床の上に横たはれる僕の死骸を胸に描いた。僕の肉體の呼吸が絕えたその刹那を想つて見た。僕はその瞬間、Xてふ人名を以て呼はるべき人格ではなかつた。病床に投げ出されたるたゞ一個の肉塊である。醜い饐えたる物質である。僕の靈魂は何處に行つたんだらう？

僕の葬式には君も來て吳れるだらう。また來て吳れるだらうと思つた人が來なくつて、思ひも寄らぬ人たちが來て吳れるかも知れない。僕の死骸は白い柩に押し込まれて、貪慾な獸のやうな顏付をした葬儀社の人足に擔がれるのだらう。石切り橋の上で目白坂を下つて來た若い女たちが避けるやうにして通り拔けて、僕の柩を見かへるかも知れない。大瀧の榎の下を過ぎて、面影橋を渡つて、戶山の原に沿うて落合の方に運ばれるだらう。風の荒ぶ冬の夜に、僕

の醜骸が燒かれて、脂かぢゞとはしいつて僕の肉、血、臓腑、皮膚、頭髮を舐ぶり了はせた煙が、あの高い煙突を潜つて、何處まで飛んで行つて滅えるんだらう。暗に突つ立つた畑中の煙突の尖端に、恰度煙草の火を點けた位の炎を吐き出すのを、ほろ醉ひの馬子と疲れ切つた駄馬とが見るかも知れない。そして馬子は「今夜もか」と殆んど無意識に言ひながら自分の家に急ぐだらう。僕の死骸が炎になりつゝあることよりも、彼に取つては連れたる駄馬が躓いたことがより大きな問題なんだらう。

翌日は淋しい僕の葬式が行はれるだらう。誰かゞ型ばかりの弔文を讀んで吳れる。後ろの方ではくす〳〵と笑つてゐる者も居る。僕の柩が墓穴の底石にぶつ突かつて、カーンと響くやうなことがあつても、誰もはつと胸を衝かれるやうなこともあるまい。

せめて葬ひが夜にかゝつて、秋の寂しい山茶花と一緒に、墓場をつゝんでゐる暗を擁かせて黄ろい土をかけて貰ひたい。

これだけの手數が濟めば、いよ〳〵僕は人間界と全然境を劃られた物質に化したのである。僕のXてふ肉體は全然滅えたと同時に、僕の靈魂も亡くなつたのではあるまいか。たゞしかし僕のXてふ人格を僕の生存中に認めて吳れた人があつたならば、この人の胸に於いてのみ僕のXてふ人格が生きてゐるかも知れない。しかしその人も軈ては物質になつてしまふ。這麼ことを考へてゐると二十幾年といふ僕の努力が、たゞ小ひさな骨甕の灰を遺さんがための努力に過ぎなかつたやうな氣もする。

×

A君が肺結核で亡くなつたさうだね、僕は今朝「朝日」で讀んで驚いた。こなひだK君が遣つて來て、「丸善でA君に會つたよ、病氣も大分快いので、大森を引き拂つて、近々山吹町の方に引つ越すんだつて言つてた。

何だかダヌンチョの譯をして××文學社で出版するんだつて。」

などと僕に話してゐた。僕も是非一度訪ねて見ようと思つてゐたが、這麼ことにならうとは思はなかつた。卒業のアルバム調製に奔走して吳れたA君が、もうあのアルバムの中に祀り込まれるやうになつたのか。人が亡くなると、その人の寫眞がどんよりと曇るつていふから、今朝アルバムを出して見たが、思ひなしか影がうすくなつてゐるやうだと思つた。迷信ぢやない、眞個だよ。それからまた僕のも見た。僕のも何だかぼんやりしてゐるやうだつた。僕の死が近づいたのかと思つた。そしてA君が僕を呼んでるやうな氣がしてならなかつた。

豫科時代に靑年會館の音樂會で、何だつたか名は忘れたが、制服を着たA君の獨唱を聽いたのが、僕には一等深く記憶されてゐる。さうするとA君といふ人格は、僕にはあの目映い瓦斯の光りを浴びて、溫かい人いきれのする音樂會の夜の寂びた獨唱の餘韻として、僕の胸に生き遺つてるのだ。藥の香を嗅きながら僕はつくづく何時かは僕の上に落ちて來る死のみじめな運命を想つた。同時に僕はその死後、何物を君の胸に遺すであらうかを考へた。夢を追ふ、空想的な、森に入つて椿の花瓣に頰ずりして淋しう笑つた靑年、這麼淡い影のやうな僕の過去が、君の胸に刻まるゝ僕の人格のすべてゞはあるまいか。

×

昨日の夕方から珍らしく白いものがちら〳〵して來たが、今朝は薄い霜のやうに屋根の上に下りてゐる。四五日前貰つた仔犬が二疋で箱の中に顫へてゐるのがいぢらしいやうだ。病みほうけた僕の貌を見て、知らぬ國から來た漂浪者とでも思つたやうな好奇心の眼を以て僕を瞬つてゐる。僕はこれまではあまり犬といふものに趣味をもたなかつたが、宿の奧さんが大の犬好きなので、何時とはなしに僕も首を撫でたり、御飯を遣つたり、蚤をとつてやつたりしてる間に、犬も僕に馴染んで來るし、僕も犬が可愛くなり、去年あたりから犬好きの一人となつた。僕のやうな世拗ね

者は人を賴らなければ、矢張り自然に賴るより他はない。一つは純白なので、平凡な名だが白と名づけた。も一つのは左の耳から右の眼のあたりにかけて黑い斑點があるので黑と名付けた。白は丸こく肥つて能なしの樂天家だ。黑の方は少し意地が惡いやうだが良くちんちんや、お預けをするので宿の坊づちやんには、黑の方が大分お氣に入りだ。三片の麵麭も、二片は黑がせしめてゐる。僕は時々除け者のやうにみんなにされてゐる能なしの白を可哀想だと思つてゐる。白にも黑にも、昨夜の雪は生まれて初めてなので、いぶかるやうな、傷々しいやうな眼をしばたゝきながら、日中は箱の中から珍らしさうに外を眺めてゐたが、夜に入つてはさすがに寒かつたと見えて、夜つぴて悲しいやうな、森々と人の胸に迫るやうな細い聲をしぼつて泣いてゐる。その傷々しい泣き聲が、遠い雪空からうなつて遠い森の方に滅えて行く凩の音と縺れて、寒い夜の街を遠く流れて行くのがたまらなく悲しく感じられた。僕の靈魂もあの凩の響や、犬の聲と連れ立つて、何處か涯もない遠い國に滅びて行くのではあるまいか。かう思つてあの凩の音を聽けば今迄懷しいと思つてゐた自然の、怖ろしさや冷たさを想はずにはゐられなくなつた。

柊の咲くころ

珊瑚珠のやうな南天樹の實が、薄鼠の床壁に調和良く映つて冬の夜は靜かに更けて行く。
蒸せかへる藥の香と、汗臭い熱氣につゝまれた電燈が、うつとりとまどろんだ光りを羽布團の模樣の上に投げかけてゐる。淡い青磁色の上に浮き出された唐草模樣の謎のやうに絡んだ蔓から蔓を手繰つて僕はオリーブや、淡紅色や、ジヤワ更紗のくんすだ代赭色を取り混ぜた豐かな色彩から來る輕いスヰートな官能を刺戟されながら手觸りの快いリンネルの上に半身を投げ出した。次の室からは取り替への氷を錐で突いてゐる音や、誰かゞぽり〳〵と氷を嚙んでゐる音が洩れて來る。旅路の涯の病といふやうな淡い哀愁が湧いて來る。
S君が和歌山の中學に行つたさうだ。夕方K君が訪ねて吳れて帝劇女優訪問のことやら、××社長訪問に時間を違へて散々毒づかれたことやらを話してゐた。相變らず元氣な男だ。みんなが達者で每日仕事に追はれてゐるのを見るとなんだか羨ましい氣になつて來ることもたまにはあるが、このころではあれほどやきもきと就職難に惠まされて冷たく凝り固つてゐた僕の頭の隅々から何時とはなしに溫かな光りが射して柔かな暢然した氣が湧いて來て、僕は半年前のまた學生時代の若々しい空想の影を追ふやうになつて來た。
藥を飮むこと、驗溫器を見ること、氷嚢を頭に載つけること、これだけが僕の日課である。僕は何の野心も欲望も持たなくなつた。たゞ生きたい、もつと生きて見たい、これだけが僕の全身を支配する欲求である。歲暮だとか、年末だとか言つて騷がずもがなのことを齷齪と奔り廻つてゐる人達を餘所事にして、病氣の苦痛もあるが、そのあひまにはゆつたりした氣持ちで、甘い空想や思索に耽ることのできるのは健康な年の暮の人達に對する病者のアイロニカル

な復讐ではないか。

病中の感想でも書けつて？

什うして那麼纏まつた感想だとか、思想だとかいふものが絞らうつたつて絞り取られるものか。肉體が衰へると精神作用が盛に活動して來るのは事實であらう。常でさへ過敏な僕の神經はいやが上に過敏になつて來た。僕の頭は絕えず生と死の境に迷つてゐる。精神作用のすべてが、たゞ生きたい生きたいといふ思念にのみ注がれてゐる。恰度馬車馬のやうに生きたいといふ努力に驀進して居る。

人――自然――神――生――死――永遠――這麼文字や觀念が靑磁色の上に浮き出された唐草模樣のやうに、或ひは聯絡があり、或ひはきれ〴〵になつて渾沌として頭に浮かんで來る。自然、神、人、死生――這麼祕密の影が雨のあたりちらちらする。恰度櫻や、李や、梨の花瓣が交りながらひら〳〵と散つて逝く春の名殘を惜しむころのやうにたゞ譯もなく淋しい。人の心を壓しつける斷片的な思想が絕えず僕の頭を支配してゐる。しかしその花瓣の一片一片を、絲を通した針に刺して子供のする花環に作り上げるだけの根氣は今の僕にはない。銀盤に水を湛へなければ花の影も映らない。僕の心は水のない銀盤だ、假令水が湛へられたとしてもそれは浪立つた水だ。僕の心の絃はたゞ生きたい生きたいと顫いて、心の盤には絕えず擾亂の波をそゝのかしてゐる。波立つた心、水の涸れた銀盤に、なんで自然の祕密の影がうかゞはれよう。

病床にインスピレーションを得たといふ談は幾度も聞かされたが、修養の足りない僕は什うしても眞個に病氣を味ふことはできない。たゞもう溺れかゝつた者が何でも宜いから齧じり付いて助かりたい助かりたいと藻掻いてゐるだけのことだ。尙少し修養や經驗を累ねた後でゆつくり病氣を味ふ機會があつたら宜かつたとも思ふ。

梟の多い雜司ヶ谷の墓地近くに住んでゐた頃であつた。茄子の花の白い夕方池袋驛あたりの畑中に突つ立つて武藏

野の涯から溢れて來る黄昏の哀愁を味ひながら何とも言ひ知れぬ戀しさの影を追ふてゐた。故郷も親も都も學校もみんな冷たい人生の約束に縛られた怪物であつた。懷しい故郷の柳の葉蔭も、やさしい戀人の唄も、すべてが夕靄の灰色に似た自然の約束にひきずられながら顫へてゐる。土の香の高い畑中の小徑には勞れ切つた足を運んで農夫達が鬼子母神の森蔭の暗がりに吸ひ込まれて行つた。農夫達はまた明日の光りを野に見ることができよう。僕には暗の夜のみが永久に續くやうな氣がした。そして僕はあの山の手線の冷たい黑い軌條の上に飛び込まうと思つたことも幾度であつたらう。

遠い富士から秩父あたりの峰々がどんよりと暮れた。板橋あたりの汽笛がひとしきり鳴り響いた。武藏野の靜寂は枯草の下の蟋蟀の鳴く音に少かに壞られてゐる。丘から森に帶を引いた四條の軌條は死神の手のやうに思はれた。

吐き氣を催すやうな藥を飮んで、不味い重湯やスープで辛つと生命を取り止めた僕の姿を想像して見給へ。何處に若々しい生命が潛んでゐよう。何處に張り裂けるやうな血汐が流れてゐよう。毎日正午過ぎになると俥の音が待たれる。衣摺れの柔かな跫音が次の室に聽えて、藥の香の染み込んだ醫師の手が僕の胸に觸るゝ刹那に「今日も生きてゐた」といふ淡い希望がわく。

×

クリスマス・プレゼントありがたう。

軍旗祭に行けなかつた僕はまた復活祭にも緣がなかつた。僕はこの五六年妙にクリスマスに緣がない。四十年にはしかも暴れ空の玄海で怖ろしい復活祭を迎へた。東海道の汽車、島のバラック年から年と何時も旅路のはてゞ淋しい復活祭の夜を過した。今年ばかりはと思つてゐたがそれも駄目だつた。駒場の友人から送つて貰つた柊は厚い葉の蔭に隱れた黑い實を結んで聖像の前に飾られてある。「柊といへば僕は幼ないころの忘れられぬロマンチックな印象

を持つてゐる。まだ小學に通ふ頃、クロスと呼ばれて町の外に住んでゐた蒼白い顔の質素な人たちを見たことがあつた。樫の並樹の奥深く築かれた寺院の中は晝間でも暗かつた。庭には天鵞絨のやうな苔に蔽はれた長方形の墓碑が横たはつてゐた。聖句などが刻まれてあつた。金文字の剝げかゝつたのが遺つてゐるのも稀にはあつた。いろ〳〵な色の玻璃窓からは中世紀時代の敬虔な教徒の讃美歌の聲が今にも洩れて來るかと思はれた。その窓には色々な草花の模樣が付けてあつた。窓を通して見ゆる聖壇の前には何時も金銀を鏤めた蠟燭の火が絶ゆることはなかつた。僕はその窓の側に植つてゐた葉の厚い棘のある樹を覺えてゐる。それは柊であつた。町の人達から特殊部落のやうに思はれてゐるこの寺院の尖塔には快い秋の風が吹いて來た。窓の柊は小ひさな白い花を持つてゐた。夕の祈りの鐘が谷に響くころ、僕はよくその柊の咲いてゐる窓口に立つて寺院の中を覗いた。窓には色の白い眼の涼しい女が何時も淋しさうに柊の花を眺めてゐた。黒い衣を着て頭には白いかつぎを冠つてゐた。女の胸にはいつも十字架が飾られてあつた。寺院の窓からは沖の夕陽が眞正面にながめられた。麓の浦から出る漁舟の帆が夕陽を受けて眞黑に見えることもあつた。海の涯に淡い水色の線をずうつと一本引いたやうな影がある。阿久島の鼻だと町の人は言つてゐた。うるんだ眼ざしをして何時もその若い女は柊の窓から沖を眺めてゐた。千々岩灘から平戸沖にかけて紫色の雲が垂れると間もなく香燒島の燈明臺が瞬いた。寺院では夕の祈りが始まつた。

僕は縣の中學に入つた。二三年振りに歸つた時にはもうその女は見えなかつた。丘の上の尖塔からは今も變らず朝夕の鐘が聽えてゐる。

×

先刻の手紙はもう讀んだ頃だらう。みんなが復活祭で福引でも取つて、大人の坊ちやんや孃ちやんが大騷ぎをしてゐる時分だと思ふと、なんだか復活祭の嬉しさが迫つて來て一向眠れない。眞個復活祭は懷しいものだ。スクルーヂ

のやうな因業爺さへランプの光りに杉の實がはぜる復活祭の夜を忘れないんだもの。今夜も白と黑とが泣いてゐる。白も黑も今夜が人間の復活祭であることを知らないだらう。

僕はあの寒い夜の空を翔つて行く風悲しい聲を聽くと雪の深いスカンヂナビヤあたりの復活祭の夜を聯想する。雪と星と針葉樹の疎な森と、尖塔の聳えた寺院と、ゆるやかな鐘の音と、頰つぺたの林檎のやうに赤い日曜學校の生徒と、敬虔な老媼と、紅い蠟燭の焰とがはつきりと浮かんで來るやうだ。今日は復活祭でみんなの顏がかゞやいてゐるだらう。僕は嬉しい時に他人の悲しいことを思つたことはあまりなかつたが、今日まで丈夫な折に病人を避けるようにしてゐたことが急に濟まないやうな氣がして來た。

僕には病氣を味ふだけの餘裕はない。病中の感想めいたことでもノートの端に記したいと思ふが、僕の貧弱な頭からは何も絞れない。しかし或ひは僕の病氣が大した思想の浮かぶだけの大病でないのかも知れない。醫者は「生命の氣遣は少しもありません」と言つて笑つてゐるが、それが一時的氣安めの言葉ではないかとも思はれてならぬ。僕には絕えず生命の不安が附き纏つてゐる。新らしい本は二三頁讀んだまゝ枕頭に投げ出されてある。ノートには發病の日から每日の體溫が記されてあるだけだ。それも什うかすると二三日續けて缺けてることがある。

暸然と明日のことが解らねば今日の努力が無駄なやうな氣がする。たしかに癒る病氣だつたら臥りながら本も讀まう、筆も執らう。しかしもしか死ぬんだつたら僅かの間でも苦しむのが莫迦らしく思はれてならぬ。「今日の事は今日にて足れり」といふ徹底的な生活はまだ僕にはできない。

×

氷いてついた庭を滑り行く落葉の音が障子越に聽えてゐる。

澄みきつた蒼穹に極月の太陽は小春日のやうな柔かな光りを投げてゐる。池の波紋が南の緣の障子に反射して、ゆらゆらと陽炎がもえ立つてゐるやうに思はれる。

布團の上に横たはりながら、日ましに衰へて行く手足を擦りながら僕は心ゆくばかり泣いて見たいと思つた。板橋通ひのがた馬車がごうつと轍の音を遺して巢鴨の大通りを西に行つた。遠くで氣だるいやうな汽笛の聲が聽えた。まるで舊い驛路の町外れにでも見るやうなもの懷しい森とした空氣がもや〱と僕の全身をつゝんだ。僕はこれまであまり生といふことについて考へたことはなかつた。たゞ若い人の死がなんだか美しい詩のやうに思はれてならかつたが、この淋しい町外れの櫟林の蔭で死ぬのかと思ふと耐らなく悲しくなつて來る。死は第三者に取りては藝術ともならうが當人には美でもなければ藝術でもない。たゞ免れ難い悲しい運命だ、最大の苦痛だ、絕望だ。死の美など豫想した自分の無鐵砲さ加減や殘忍さや、或ひは死を美化しようとする藝術家といふ職業を呪ひたくなつた。布團を煽る每に足の方から胸を衝いて來る熱臭い物のあざれたやうなぬくみがなんで美であらう。冬の海のどんよりと曇つたやうな眼がなんで藝術であらう。冷たくなつて白布に覆はれた死骸の醜さを想ふ時僕は極力死といふものを拒絕したくなつた。秋の湖水の澄みちぎつた眼をしてベツドの上に横たはり、甘い夢の香に醉ひながら僕の呼吸が絕えたる瞬間、僕の肉體は解けて烟のやうに滅えてしまふんだつたら僕は死んでも宜いと思ふ。僕は醜い死の俤を想ふ時あくまでも死を憎まずにはゐられなくなる。

さら〱と木の葉が散つて行く。躊躇ふやうな煙が冬枯れの森から昇つた、けたゝましく啼いて鵯が北の方へ飛んだ。飴賣りのゆるやかな笛の音が眠つたやうな午後の街を流れて行く。かうして巢鴨の初冬は忙し氣に暮れて行く。僕は旅路の涯に病める身の儚さをつくづく味はつた。

犬吠岬より

駒込宛のお手紙、今朝海岸の散歩から歸つたら机の上に置いてありました。お京さんいよ〳〵御結婚の由嬉しいと申し上げて宜しいやら、悲しいと申すべきものにや、とんと御挨拶の致しやうもありません。但し斯やうな無躾な手紙を今の場合君に差し上げるといふことは、平生君の先輩(たゞ一二年のちがひであるが)を以て任ずる僕の行爲としては、太だ大人氣ないものとお冷笑もあらんかと思ひますが、允してください。お京さんの結婚に對して、またはお京さんに對して僕が什う斯うといふのではないのです。が僕は正直に告白しますが、この頃妙に淋しくなつて來たのです。僕は今日は君をお京さんの兄さんと思はず、お京さんとは全然關係のない僕の唯一人の友達として君にお話しをするつもりなんです。しかし君は何處までもお京さんのたゞ一人の兄さんとして聽いて下さい。

お京さんの結婚は御卒業のころから早晩僕が第三者として見なければならぬ經驗だといふことは明かに覺悟してゐました。そして僕はそれを蕾が綻びて花が咲くといふくらゐの意味以上には刺戟あるものとして想ふことも出來なかつたのです。結婚といふものが苦いものであるか、樂しいものであるか、有意義なことであるか、無意義なことであるか、そんなことを考へる機會はまだ僕には來なかつたのです。女にしたところで眞實さうだらうと想ひます。結婚の日が來るまではそれに少しでも意義らしい意義を附け加へて判斷するやうなことはないだらうと思ひます。この前君のお宅を訪ねた時、阿母さんの脣から「お京も何處にかかたづけなくつちやなりませんからッ」ていふことを聞かされたをりにも、僕はたゞ一種の輕い侮辱を感じた以外には、別に失望といふ氣分にも怨むといふ心持ちにもなれなかつたのです。

間もなく僕は君が御存じの通りの病氣に罹つたのです。靑山の石川のお婆さんが訪ねて來ては、そのたんびに僕はお京さんの結婚の談が、捗つて行くことを聞かされたのです。そのころ僕は赤十字病院に這入つてまだ間もない時で手術を受けては二日くらゐづゝ高い熱が續くのでした。そのころから僕の心は絶えずお京さんを逃げるやうになりました。本野といふ看護婦が勿忘草を僕の寢臺の枕許に挿して吳れたのもその頃のことでした。原といふ尙一人の看護婦と、その本野といふ看護婦が僕の事で衝突して、二人が二人僕の病室で泣き出したのもその時のことでした。僕はその頃始めて人懷かしいといふことをしみ〴〵と味はゝされたのです。お京さんに對する僕の心持ちが少しづゝ解つて行くやうでした。僕は、しかしお京さんを戀ひしてゐたんだとは決して思ひません。冬枯れの澁谷から目黑の丘にはひと色の灰がゝつた疎な森が續いてゐました。二三本の煙突からは何時も賴りないやうな煙の帶が海の方に流れてゐました。僕は幾度か寢臺の上に起き上つて郊外の靜かな冬を瞰きました。病室の玻璃窓には紫色の小ひさな草花のいぢけた影が映つてゐました。冷たい外の空氣が何時も力ない光りを花瓣の上に顫かしてゐました。幾度か窓の下を忍ぶやうにして擔ぎ出される柩をも見ました。僕は夜も晝も寂しいと思ひました。本野といふ看護婦は卒業して高崎の方に行きました。本野といふ女とお京さんとがごツちやになつて僕の夢を支配しました。僕は眼覺めて泣くといふことをも知りました。Aといふ隣室の男がイプセンの「高原」（?）といふ詩集をくれました。淺草で育つた享樂主義の男です。Bといふ隣室の男が不動經を吳れました。この男は宇都宮の大百姓ださうです。國に歸つたら馬と洋犬を飼ふんだと言つて樂しんでゐました。二人とも僕が夕べごとに硝子窓のところで泣いてゐることを知りませんでした。僕等は病院の芝生で寫眞を撮りました。附き添ひの看護婦も一緒に並んでゐました。しかし本野はもうそのときはゐませんでした。

僕は間もなく退院しました。お知らせしようと思つてゐたのですが、それすら僕は億劫になつてゐたのです。お京

さんには勿論、君には當分お目にかゝらない積りで東京を飛び出したのです。僕には東京を見ることが既に一つの苦痛になつたのです。東京は懷しい町です。懷しい町です。忘れられない町です。僕の若い生命の光りと刺戟とが流れてゐる都會です。君がおいでの町です、お京さんが――。

×

僕は一昨日の朝の汽車で兩國を立ちました。此の方面の旅行は僕には全然初めてなんですから僕の衰へた心の底からしみ〴〵と懷しい涙のこぼれる快さを味ふことができました。柴又の帝釋さまゝでは二三年前に行つたことがありましたが中川から先きは始めて切り拓かれた世界が、眼の前に展げらるゝやうで、ちつとも落ちついてゐることもできなかつたのです。僕はまだ春淺い下總の平原を見ました。ひよろ〳〵と輕い心持ちの筆で描かれた繪を見るやうな櫟が十本、二十本と田の邊に並んでゐました。軒の低い草葺き家が續いてゐました。母屋から、物置き、馬小屋、糀倉といふ風になつた構への家が、田の面から一段と高くなつた丘の上に築かれて、どんよりとした正午の光りがその白い壁の上に夢みるやうに思はれました。五町も十町も家が見えない所がありました。澄心艸のやうな枯れ枯れの水草が、見わたすかぎりの水原を埋めて、白い雲の下には太陽の光りが鉛色のやうに反射した湖が眠つてゐました。その湖の向う岸にも悲しい運命の人たちが住んでゐるのかと想ふと僕の眼は何時までも湖の白い面と、對岸の森と平原とを離れることができませんでした。黑い土の畑や三尺ばかりの白膠木や、小松の一面に生ひ繁つた平原が何時までも〳〵續いてゐました。亭々とした赤松の森に沿うて碧い水が流れてゐました。流れに白い水鳥が遊んでゐました。竹藪が汽車と擦れちがひさまにせゝらぎのやうな音を立てゝました。そこには白く干乾らびた礫の多い小川がありました。燃えるやうな色の椿の花が咲いてゐました。三時ころでした、僕は白い悠やかな大河を見ました。大利根でありました。白鳥のやうな白帆が浮き彫りにされて、河の涯はぼうッと煙つてゐました。僕はその夜は銚子の街に泊りま

した。夜、利根川の渚に出ました。棧橋の上には寒い風が吹いてゐました。ごうッ／＼と大きな波の音がしつきりなしに河口から襲つて來ました。兩國通ひの汽船が岸にもやはれてゐました。利根を溯つて十八時間で東京に着くんださうです。急に東京に歸りたくなつて來ました。暗い空には冷たい星がまたゝいてゐました。醬油の香の漂うた古い銚子の街を通り拔けて宿に歸りました。外では風と浪の音が咆哮してゐました。僕は傷々しい第一日の夜を浪の音に脅かされながらうと／＼としました。

僕はお京さんを戀ひしてゐるとは思ひません。しかし、たゞ何となく物足らなくうらさびしい僕の心！

翌日はいよ／＼海を傳うて曉鷄館の方に來ました。こゝには詩人獨步がゐたのかと思ふと、沖の浪の音までが懷かしくなります。こゝは旣う菜の花が松山の裾を縫うて、春らしい氣分を沸かしてゐます。月見艸までが潮風を避けて重たげな頭を垂れてゐます。濱の兒は狐くさと呼んでゐます。子守り女の赭い髮毛がはら／＼と南風に嬲らるゝ後ろには利根を隔てゝ筑波の影が夢のやうに遠い雲の下にわなゝいてゐます。女波男波の白い流れが筑波の方向に夜晝の絕え間なしに、悲しい巡禮の和讚を聯想させるやうな旋律を追ふてゐます。その後から後からと來る波頭の眞ッ白な潮吹にも海の懷を搔きむしつた遠い時代の悲哀が運ばれてゐます。大きな波が一ッ碎けて白い銀の小山のやうな或ひは眞珠の丘のやうな波の胸から擾亂や絕望の聲が地の底に喰ひ入るやうにして、僕の兩脚をわな／＼と顫かせます。それでも僕にはその一つの波が碎けて、次の波が同じ巖にぶつ突かつて碎かれるまでの沈默が嬉しいのです。大きな波が押し寄せて來る時僕の胸は緊張して躍ります。碎かれる時僕の胸が碎かれるやうに想はれます。一秒……二秒……虛心になつた僕の胸には恰度午後の日脚が步くやうに、しづかに黑潮の悲哀が流れて來ます。潮が昂まるとき僕の心が昂まります。潮が沈んで行くとき僕の心も眠りの底に沈んで行きます。海の上には何時も頹廢の色が壓し冠さつてゐます。海の底からは何時も絕望の咆哮が、濱の若い女の泣き聲のやうに聞えてゐます。沖にかゝつた汽船の影は

なほさら傷々しい人間の運命を偲ばせます。沖の空は毎日煙つてゐます。

僕は毎日燈臺の下の濱を歩いて、大海の悲哀を味ふてゐます。波に洗ひさらされた珍しい小石や、ルビイ色をした袖貝を拾ふ毎に、僕は都の人を懷ひます。僕の眼は靑色の悲しい空に翔り入る鷗の跡を追ふてゐます。僕の若い日が永遠に奪はれたやうな氣がします。こゝの燈臺には若い人達が六七人もゐます。天氣の良い日には、紅い袖裏の洗濯物などが竿にかゝつてゐます。燈臺守といふ印象は詩的ですが、來て見れば餘りさうとも限らないやうです。それでも燈臺の男は色んなことを話して與れます。秋から冬にかけて沖の鳥が夜毎、燈を索めて飛んで來ては、燈臺の厚硝子の窓にぶつ突かつて死ぬんださうです。沖が荒れた朝などは燈臺の下の海岸でよく鳥の骸を拾ふんださうです。九十九里の沖が一面に淡い霧に包まれた夜は、牡牛の咆えるやうな霧號機の警笛の聲が海の底に沈んで行きます。

曉鷄館の隣りの宿に一人の少年がゐます。その少年は仍り東京から來てゐるのです。毎日僕の許に遊びに來てくれます。病氣のために片腕と片脚を失くした可憐な少年です。愛くるしい、色の白い少年です。黃昏ころに來ては僕の室の欄干から沖をながめながらハアモニカを吹いてゐます。少年の歌は耐らなく悲しいのです。そのたんびに僕は都の人を懷ひます。少年は嬉しさうに吹いてゐます。僕は悲しい少年の曲を聽くたんびに海旅の哀愁とでも言ひませうか、新らしい心の傷みを感ずるのです。

僕は幾年來人に頼るといふことの苦痛を經驗してゐたのです。僕は最初自分より强いもの豪いものに頼つて行きました。しかし僕はそのすべての場合に於いて失望しない譯には行かなかつたのです。僕は孤獨を愛するやうになりました。それと同時に孤獨の苦痛は僕の貧しい肉をも頰の紅をも奪ひ去つて行くことを知りました。人間は獨りで生まれ、獨りで泣き、獨りで死なねばならぬものでせう。けれど僕には僕の生涯を孤獨の哀傷の面前に打ち棄てゝ置くほど冷靜な人間になることはできないのです。僕は孤獨を愛しました。しかし僕が人の影を恐るれば恐るゝほど僕の心

は人を懐しいと思ひます。

朧の夜でした。恰度東京のすべての街も、すべての小徑もが花の香にうつとりとしてゐる夜でした。僕は始めて君のお宅を訪ねる途中であの鳥居坂の中程で君等に邂逅ひました。坂は白く見えてゐました。花間を洩る月影は肌さはりの温かい靄に溶けてゐました。僕はあの朧の月影にお京さんを始めて見たのでした。

お京さんに對するその頃の僕の心情はこの濱に來てゐる少年に對する今の僕の心持ちとよく似てゐると思ふのです。僕はこの少年を愛してゐます。僕はその意味でお京さんを愛してゐました。今も愛してゐます。お京さんは弱者です、少年も弱者です。僕は强者です。僕は戀するといふことを知らない。しかし愛することを知つてゐます。僕は自然を愛するといふ意味でも、お京さんを愛することができると思ふのです。自然のすべてが美である。殊に人間は最上の美である。そして處女性は美の極致であると想ふのです。お京さんが今日まで僕の心を惹きつけてゐたのは、その尊い處女性であるのだと信じてゐます。處女お京に對しては世界の男の誰一人もがそれを汚すことのできない尊いものがあると思ふのです。しかし吾々の周圍の人達は平氣でその處女性を破壞することを何とも思つてゐません。僕自身もお京さんに接近することを恐れたことが幾度あつたでせう。僕は僕の本能の生活慾を呪はなければならなかつたのです。

僕はよく俳行脚のロマンスを夢みました。お京さんはよく僕と一緒に行脚をしようと申しました。僕は北海行きを思ひ立ちました。その時もお京さんは伴れてつてくれえつて言つたことがありました。そんな時僕の心にはあやしきまでに若い血が浪打ちました。僕の心は處女性に對する尊敬よりももつと或る力强いものに惹きつけられてゐたのではありますまいか。僕はあさましい自分の心を呪はなければならなかつたのです。

兎も角お京さんの結婚は今まで僕が知らなかつたうら淋しい感じを僕に與へました。しかし僕は僕が描いてゐた、そ

して實感してゐたお京さんの處女性を自分で滅さなかつたことを感謝してゐます。僕はお京さんを愛してゐます。しかし阿母さんなり、君なりが、お京さんを僕に下さると言つても、僕はお京さんと結婚することを躊躇します。物質上に於いて、精神上に於いて、倘つと倘つと遙かに富んだ男性がお京さんを待つてゐるにちがひありません。しかし世界の何の男性もお京さんの處女性の美の前には、餘りに貧しいものであるやうに想はれます。だがすべて在るものはあるがまゝに任せねばなりませぬ。それが悲しい人間の運命なのです。青春の時代に於いて點火せられたる吾々の情調の昂ぶりが、まだ餘熱もさめ切れない間に、男は男、女は女と訣れなければなりませぬ。吾々はたゞ過去の生き甲斐のあつた短かい時をせめてもの慰めに後の日の灰色の運命に耐へなければなりませぬ。しかしその過去の短かい時さへ、その刹那々々に於いては生き甲斐のある生活とは思はれなかつたのです。眞實の生活……すべての筋肉が緊張し、情調のすべてが白熱的に燃燒するやうな生活……は吾々には吾々の死の日まで發見することはできないのではありますまいか。

少年は欄に凭つて悲しい曲を吹いてゐます。かれは時々兩手を伸ばさうとしては右手が失はれてあることに氣付いて、僕を見てにつこり笑つてゐます。その度に僕の心には言ひ知れぬ悲しさが湧いて來ます。黄昏れて行く薄暗い靄の中に碎けては散る高波の騷音を聽きつゝ少年は佇んでゐます。燈臺の燭が瞬いてゐます。鹿島灘から九十九里濱の海岸が一樣に深い暗に沈んで行きます。たゞ潮騷の白い輝きがほのかに暗の底に流れてゐます。少年は東京の空を見たいと言ひます。僕は少年を背負つて君ケ濱から女夫ケ鼻の千人塚附近までも暗の砂丘を歩いてゐます。「あつちが東京なの？」と言つて少年は潮風に吹かれた銀杏樹が暗の中に突つ立つてゐる圓福寺の屋根の方を指さします。心持ち明るいやうな空が黒い砂丘の上に顫へてゐます。

幻影を追ふ心

人を愛せんとするトルストイの心には何時も「かれは人間ではないか」といふ意志が動いてゐた。ドストイエフスキイの心には何時も虐げられた隣人を慈むの心が動いてゐた。

カント派の人々が「人間の權威」を考へてゐたに對してショーペンハウエルの流れを掬む人々は「憐れなる隣人」を考へることを忘れなかつた。

カントやトルストイの人生の見方が男性的であつたのに對してショーペンハウエルやドストイエフスキイの見方は女性的であつたといふことが出來よう。

私はドストイエフスキイやショーペンハウエルならば自分の友人として語つて見たい。けれどもトルストイやカントは私にとりて餘りに强い人間であるやうに思ふ。ドストイエフスキイとならば一緒になつて虐げられた弱い男女のために泣くことができるけれどもトルストイと一緒になつて「暗の力」のアキムのやうに「かの女も人間ではないか、神の前に……」と呼ぶには餘りに私は弱い事を悲しむ。

私にとりて生活の苦痛、一層具體的に言へば人と人との接觸に於いて感ずる苦痛は、眞實に相愛することのできぬ苦痛よりも寧ろ「人間」を知ることのできぬ苦痛である。私には人間の權威を誇るほどの人間の價値といふことを認めることができない。或る人は人間を目して「神の子」といふけれども私自身餘りに貧しい「神の子」であることを恥づる。

私は何故に人間のみが自己の權威を主張しなければならぬか、また主張する理由をもつてゐるかについてさへ屢々疑を挿まずには居れないことがある。一草一木のうちにも――もし人間に人間の權威があるとしたら――人間と同じ

やうな權威が潛むでゐる筈ではないか。私のこの見方は餘りに空想的な見方であると想像せられるかも知れない。けれども私は眞實そんなことを考へずには居れない。草原に立つて靜かに落ちて行く露の雫を見ても、名もない雜草を見てもそこに言ひ知れぬいのちの生動を感ずる時、私は齊しく私たち人間と同じいのちを生きつゝあるかれ等のために考へずには居れない。

多くの人々は人間をもつて神の子でありとし、かれ等自身の權威を主張する根本の理由として、かれ等が思考力を持ち、かれ等が心靈を持つてゐることをほこる。けれどもこれだけのことをもつて人間のみ權威を所有してゐるかのやうに考へるのは餘りに獨斷ではあるまいか。

人間と草木との間に共通の言語なり暗示の交通がない限り、何うして私たちにかれ等をより低き生物として批評し斷定する力があらう。

自然界のかれ等は果して思考力を所有してゐないであらうか？

例へば人間が營むやうな思考力の系統化といふやうな作用はかれ等にないかも知れない。けれども系統化することに何の偉大な權威があらう。刹那の直感刺衝こそ眞實の生命である。系統化された思想は思考力の屍を積み累ねた墓場である。刹那々々に潑剌たる生命の直感こそ死化され形式化され行く思考力の系統化よりは一層眞實なものではないか。

もしかれ等に一切の思考力を認めないとしても、それが決してかれ等の生けるものとしての價値を減少せしめるものではない。同時に私たちが思考力を所有してゐるといふことがまた必ずしも私たちをして自然界にありて偉大ならしむるものでもない。人間と人間との交涉內にありては思考力の多少は直ちにかれ等の人間としての價値を定める一標準であるかも知れないが、人間と他の自然とを比較するに際して思考力の有無を論ずるのは恰かも音樂家と哲學者

とを比較して前者は思考力に於いて後者に劣るが故に人間として價値低しと定むるが如きディレマンに陷つてゐる。また心靈の有無をもつて自然と人間とを區別し高下しようとするのも大きな誤りである。この論は第一步の肯定からして誤つてゐる。誰れが自然物に心靈がないと斷言することができよう。かやうな議論は三段論法の形式さへも作ることはできない。

音樂者には音樂者としてかれが靈しきいのちの韻律を唱ふちからを所有してゐるところにかれの權威があり、偉大さがある。哲學者はかれが思惟し、靜思するところにかれの偉大さと使命とを持つてゐる。薔薇は薔薇として、雜草は雜草として、野の鳥は野の鳥として、燕麥は燕麥としてかれ等の權威を持ち、使命を持つてゐる。しかも齊しく神によりて造られ、靈しき生命の源より湧き出でたるものとして崇められ、たゝへらるべきものである。この意味に於いてのみ私は人間の權威があり、齊しく自然物に權威があることを認める。たゞ人間にのみ權威があるかのやうに思想する人々の權威に對しては私は反對する。

もしカントやトルストイと共になつて人間の權威を認めなければならぬならば、私たちは尙一步進んで一草一木の權威をも認めてやらなければならぬ。私たち自身を神の子と認めるならば、かれ等も亦神の子として認めなければならぬ。空の鳥と野の百合も亦人類と齊しく大自然の恩寵に生き、大自然のいのちを掬み分けつゝあることに於いて、人類と何のけぢめがあらうぞ。

古來多くの宗教や倫理學がこの見地まで突つ込むで行つて論じなかつたことは私にとつては一種の不可思議である。印度思想には最も多くこの考へ方は取り容れられてあつたやうに思ふ、けれども印度思想ですら、人間本位の立ち場から自然界を見ることを忘れてゐないやうに思ふ。

科學も宗教も倫理もその第一步を踏みかへなければならない。私たちは隣人を愛することを敎へられた。けれども

荒原の醜草を愛すべく私たちの心は殆んど痲痺してゐる。

私たちの愛の心が全くせられない理由の主なる一つはこゝにあるのではあるまいか。私たちは兄弟を愛することを知つてゐる。けれども異邦人を愛することを知らない。私たちは他人を愛することを知つてゐる。けれども他人を愛することを知らない。私たちは異邦人を愛することを知つてゐる。けれども野の鳥を愛することを知らない。私たちの愛は部分的である。私たちは愛する栖の一面に憎惡の焰を燃やしてゐる。私たちの愛は差別的である。

人類の愛が萬有に對してゞなくたゞ人類相互の間にのみ考へられてゐる間は私たちの愛は一面暗黑と死滅とを湛へてゐる月の光りたるに過ぎない。私たちの愛は巷の隣人をも野の羊をも空の鳥をも燒き盡すが如き太陽の愛でなければならぬ。

キリストや佛陀のやうな大宗敎家がよく自然界の事物を取り容れてかれ等の敎へを說いたことは意義あることだと思ふ。かれ等の心にはひとり人間に對してのみならず自然界に對する深い理解感應の念が動いてゐたのであらう。

人間をのみ對象として宗敎が說かれ、愛が說かれてゐる間は愛は限られたるものである。差別的な愛である。人間をのみ對象として說かるゝ愛はやがて人間と自然とを區別するが如く異國人を區別し、隣人を差別し、自己をのみ守るエゴイストとならなければならぬ。私はかれの國家をのみ愛する人々を知つてゐる。かれ等はまたかれの家庭を愛してゐる。かれはまたかれ自身を愛してゐる。けれども全人類を愛するところの愛國者でない以上はかれは決して眞實に國を愛するものでも、家庭を愛するものでも、かれ自身を愛するものでもない。かれは國家を愛すといふけれどもかれは國家なる概念を愛するのであつて國家そのもの、國民全體を愛するのではない。かれはその隣人を愛することすらできない。かれは國家を愛すと叫びつゝかれの同胞たる下婢下僕を虐げてゐる。またかれの家庭をのみ愛すると主張するものがある。けれどもかれはかれ自身を愛するがために家庭を愛するのであつて、家庭を愛するがために家

庭を愛するのではない。しかもかれ自身をのみ愛せんとするかれは永久に我なる概念の上に自己の牢獄を築いてゐる。かれはつひに人を愛することをも自己を愛することをも知らない。

人間の愛をして自己より家庭に、家庭より隣人に國家に全人類にそしてさらに萬有自然に對するの愛としたい。人間のみ最も尊しとする謬見を捨てゝ萬有齊しく尊く、萬有齊しく生命の尊さと靈妙さとを呼吸せるものとして愛して行きたい。私たちは一椀の食を取る時にも私たちの肉體の糧となる植物のために感謝をさゝげたい。或ひは私たちの生命を維持せんがために尊い犧牲をさゝぐる小羊のために、小鳥のために感謝の念をさゝげたい。

さて自己より隣人に、全人類に、全宇宙に私たちの愛の心が押しひろげられたとして、なほ私には疑ひがある。それは私たちは人類及び自然に對して權威を認むるが故に私たちの愛を感ずるのであらうか？「かれも神の前に人間ではないか」といふやうな意識からして果して愛が全きものとなされるであらうか？

愛の迸り出づる源としては、私は寧ろ人間の弱所、萬有の缺陷を愍む心ではないかと思ふ。

私たちはたしかに人間のうちに或ひは自然のうちに尊い或るものゝ潛んでゐることを知つてゐる。私たちはそれに對して崇敬の念を感ずる。けれども決して愛を感じはしない。愛はむしろかれ等萬有と自己とを貫く一つの暗い宿命に對する弱者の同感同鳴の念よりして生まれると考へることが自然ではないか。

權威は尊敬を要求することはできる。けれども信愛を求むることはできない。この世界が光明と歡喜とに充ち、私たちの生命が無限のものであるとしたならば私は何の愛の必要をも見出すことはできない。

生命の無限を唱ふる人々がある。かれ等は死を以て一種の解放であるとする。次來の世界を以て光明と歡喜とに充てるものとする。けれどもそれは現在の私たちにとりて何の關係もない。私たちは現在の時と空間とを充たしてゐる私たち自身の生命についてのみ眞面目に人生を考へなければならない。それが私たちに賦へられた唯一の現實であり、

眞實であるからだ。

私たちは豫言者によりて如何に次來の世界の光明と歡喜とがたゝへられやうともそれに向つて感謝しようとは思はぬ。次來世の解放や歡喜に對して讃榮の詩をさゝぐるほど私たちの心には餘裕はない。私たちは次來世の光明や歡喜を冀はないものではない。けれども必ずしもそれを期待するものではない。現在の私たちにとつては次來世の光明や歡喜や無限の生命よりも、現實界の暗黑や悲哀や死の方がどれほど切實なものであり、懷しいものであるか知れない。

私は現在界の苦痛を愛する。罪惡をも尊きものとして愛する。未知の世界より生まれて未知の世界に行くあはれな人間が經驗することのできる唯一つの實在として苦痛をも罪惡をも悲哀をも尊いものとして受け容れたい。

或る人々はいふであらう「お前たちは初めから人生を悲しいものと決めてゐる」と。また或る人々はいふであらう「かれ等は始めから人生を樂しいところであると決めてゐる」と。

私はその何れをも認める。人生は樂しい、けれども同時に悲しい。その何れをも私たちが直感することのできる唯一の存在として尊敬する。そして悲痛を透しても、歡喜を透しても、或ひは光明を透しても、暗を透しても、私たちが眞に感じ得る唯一の存在は不斷の驚異である。私にとりては世界はたゞ驚異といふ直感の他何ものもない。

人生を以て悲しいものである、よろこばしいものであるといふやうにはつきりと決めてしまふことはできない。生きてゐることが果してどれだけの價値を持つてゐるか、死ぬことが果してどれだけ悲しいことであるか私には分らない。けれどもたゞ私は現在の生活に對して、過去と未來とを通じての自分の生活に對して、その周圍に對して絕えず驚異の眼を瞠らずには居れない。私はよろこぶ刹那の自分をいとしひと思ふ。私は悲しむ刹那の自分をいたはらずには居れない。恐れつゝ、悲しみつゝ未知より未知の時空に步み行く一人の旅人を想ふ時私は自分自身を愛せずには居れない。同時にまた私と同じ未知の鄕を辿る多くの旅人を顧る時私はかれ等をいたはらずには居れない。野の百合に

對しても、空の鳥に對してもこの隣人を劬はる心持ちを忘れることはできない。もしこれが愛の心といふことができるならば少くとも私の愛の心は弱者の間に交換せらるゝ同感同鳴の思ひやりである。虐げられたる者と虐げられたる者との抱擁に他ならぬ。

私は造物者といふものがあるならば、また萬有に宿命を與ふる實在があるならば、それに對して尊敬することを忘れない、けれども愛をさゝげようとは思はぬ。愛は造られたるもの、運命づけられつゝあるものとものとの間に結ばるべき思ひやりの他に出でない。

私は人生や自然萬有のどん底を貫いて流るゝ驚異の他に私の生活を動かしてゐる何ものをも發見することはできない。

人は自然が與ふる材料を用ひて創造的進化の行程を歩みつゝありといふ。けれども私たち自らその材料を産み出すことはできない。また私たち自身にその力を産み出したのではない。材料も力も悉く非生（パアスレス）の絶對實在から賦へられたものではないか。私たちは到底一個の造られたるものであり、委託せられたるものである。私たち自身が非生（パアスレス）の絶對實在でないかぎりは、私たち自身が非生（パアスレス）の創造者でないかぎりは私たちは宿命の下に生きなければならぬ。私たちに何の權威があらう。

バビロンの高塔を築いた古代人の建設と海岸に白砂を掻き集めてゐる少年の遊戯とどれたけのけぢめがあらう。

私は宿命を呪はない。また悲しみもしない。それが私の現實の生活に與へられたる唯一の機會であることを考へる時如何なる形の宿命も私にとつて意義あるものである。私は感謝と驚異の念を以て私の運命を受け容れる。そして靜かに運命の奥に徹して驚異につゝまれた實在を索めんことを努める。

驚異より生まれて驚異に生き、驚異の世界に驅られ行く人生ほど靈しきものはない。私はこれに對してたゞ感謝を

さゝぐるのみ。

私の生活にとつて創造といふことは考へられぬ。私の驚異の眼が一日一日とたゞ擴がり行くのみである。私の努力は創造を齎すことはできない。私の努力はたゞさらに新らしき、さらに深い驚異を發見するのみである。

萬有は既に劫初より無限の驚異を湛へられてあつた。私たちは絶えず驚異の底より底へと歩むでゐる。しかも驚異が無限であるところに人生勞作の意義がある。

蜜蜂は絶えず野をかけめぐつて花の香を翅に運んで來る、しかも大地は無限の花の香を湛へてゐる、私たちの小ひさな直感の翅に私たちは絶えず驚異の花の香を運んで來る。しかも大自然は永遠に無限の驚異を私たちに與へる。花の香を見出すところに蜜蜂の生活があり、驚異の泉を掬み出すところに私たちの生活がある。

現實の生活にありて何の未來を考へる必要があらう! 現實の刹那にありてできるだけ多くの驚異に醉ふことのできる生活こそ最も意義ある生活ではないか。人の子が犯した罪のうちにも、善のうちにも、悲しみのうちにも、光りのうちにも、より多くの驚異を見出したものゝ生活こそ最も尊き人間の生活ではないか。

草木のうちにも心靈の動めきを知らなければならないといふのも畢竟私たちの驚異の念を一層强からしめ深からしめんがためである。

私は鳥の言葉を聽きたい、風の歌を聽きたい。私は人間と草木、人間とあらゆる自然との間に忘れられてゐる言葉の存在を思ふ。私たちはその忘れられてゐる言葉を發見することによつて一層私たちの驚異の世界を押しひろげて行かなければならぬ。

或る人は私のこの驚異の念を指して幻影であるといふかも知れない。よし幻影であるとしてもそれが私の生活を刺衝し、押し動かして行くものであるならば私は感謝する。手に取ることのできるものゝみが價値があり眞實であり意

義があるといふことはできない。手に取ることのできないものに現實以上の價値、眞實味がないと斷言することはできない。人間の智慧が2＋2＝4なりといふやうに證明し得た事實が果して幾何あるであらう。無限な世界の驚異は、何時も私たちの手から遁れようとしてゐる。無限の驚異はたゞ幻として私たちの眼前に泛かんでゐる。幻影のうちにこそ私たちの生命の努力を要求する或るものが潜むでゐるのではないか。私たちの一生はたゞ驚異の開拓にあるのみである。

私たちは隣人を怒つてはならぬ。私たちは自然界を虐げてはならぬ。かれ等も齊しく私たちと共に驚異より驚異へと運命の旅路を歩み行く私たちの道伴れではないか。

私たちの生活をしてすべてのものに對する同感同鳴の生活たらしめよ。萬有は悉く驚異のうちにあつて宿命の笞に虐げられてゐるのではないか。鞭打つ者も鞭打たるゝものも齊しく私たちの道伴れではないか。イスカリオテのユダもネロも齊しく私たちの友ではないか。

私たちの愛をして鞭打たるゝ者と共に鞭打つ者を愛せしめよ。そしてたゞ驚異より驚異の世界を見出すことをして私たちの生活努力のすべてゞあらしめよ。

雑草の中

武藏野の中から

T君。幾年振りだらう！ 僕が突然このやうな手紙を君に上げるのは。

この夏僕は東京の町住まひを止めて、郊外の親切な友人の家に引つ越して來たのだ。一つは病身の妻の健康のため、尚一つは郊外の靜かな家にはいり込んで、成るたけ世間的な交際といふものを避けて、出來るだけ本でも讀んで見るつもりでやつて來たのだ。

場所は荒川から餘り遠くもない丘の上だ。汽車や電車に乘るためにも、小川を越えたり、欅の木立をくゞつたり、玉蜀黍の畑を横切つて行かなければならぬ。ほんたうに東京といふいやな埃くさい都會から遠ざかつた氣持ちがする。ちよつとそこいらを散歩すれば暗い木立につゝまれた沼には水草の花が咲いてゐたり、野生の百合が背ほどもある草のなかゝら咲いてゐたり、白い雲が地平線から出て、地平線に落ちて行く大陸的な眺めが横たはつてゐる。

僕は朝から晩まで暇さへあれば武藏野を歩いてゐる。そして或る時は獨歩を想ひ、或る時は不圖S子を想ふこともある。そんな風で、實は夏から今日まで一冊の本も讀まないで、たゞ空を見たり、野を見たりしてゐるのだ。

雨が降る日には荒川まで釣りに出かけることもあるが、それも億劫なので、縁側に腹這ひになつて古い雜誌を引き出して來て讀んだり、今度の引つ越しの時、數年振りに行李の底から出て來た古い寫眞帖などを開いて見ることもある。そして獨歩の言ひ分ではないが「あのころは……」といふやうな寂しい心持ちになつて小半日、古い、剝げかゝつた寫眞などを見つめてゐることもある。お互に年を取つたなあ、しかしまだあのころの感傷的な感じは、何うかす

るとあのころのまゝに喚びさまされて來ることがある。

五六日前であつた。雨が降つてゐた。妻は階下で髮を結つてゐた。病身な妻はこのごろでは髮を梳くたんびに「髮の毛が薄くなつちやつた！」と言つては寂しい顏をするんだ。だから僕は二階に坐つてゐても、妻が髮を梳いてゐる音を聽くと、「ほんたうに俺たちの若い時代も過ぎて行つたのだなあ！」と思つて、耐らなく心細いやうな氣がする。髮を梳く櫛の齒音はほんたうに寂しいものだ。それにこの附近では、黍の葉を吹く秋風の聲がいやといふほど寂しいのだからなあ、實際耐らなくなることがある。

いつものやうに虛ろな心を抱いて二階に坐つてゐると、髮を梳いてゐる妻が、鏡臺に櫛を置いたりする音が時々二階まで聞えて來るんだ。

「また髮を梳いてるんだなあ！」と思ひながら僕は古い寫眞帖を取り出して見てゐたのだ。さうすると久しい間忘れるともなく忘れてゐたS子の寫眞が不圖見出されたのだ。S子が女學校を卒業した春の寫眞だ。黑の紋附きを着たS子だ。あのころのS子の俤だ。僕はぢつと眼をつむつてあのころのS子のことを考へて見た。學校のことも何も彼も忘れて夢中になつてゐたあのころのことが、たまらなく懷かしい思ひ出となつてあらはれて來るのであつた。

今では恐らく數人の子供たちの母親となつてゐるであらうS子！　今では何處に居るのか僕はそれも知らない。五六年前であつた。連れ合ひの男が上海の支店詰になつたので、一緒にあつちに行つてゐるといふことを聞いたのは。恐らくS子とは永遠に二度と逢ふことはあるまい。あれほど夢中になつた人間同志が、お互の生死さへ知らないで別れて行かなければならないといふ、これくらゐ寂しいことがあらうか。時は、そして自然は、何も彼も靜かに、永久に滅ぼしてしまふ。

×

今日も寫眞帖を出して見たが、僕はＳ子の寫眞を見るに耐へないほど寂しい心になつてゐた。同じ寫眞帖のなかゝら僕と君が黑の脚絆を穿いて、草鞋掛けになつてゐる寫眞が出て來た。君も僕も制帽を冠つてゐるんだ。裾野に行つた歸りに撮つた寫眞なんだ。君も若かつた。僕も若かつた。あのころの僕等の眼は燃えてゐるやうだ。乙女峠を越ゆるころ君が笛を落してしまつて、草のなかを掻き分けて探したが、たうとう見つからなくつて泣いてゐたのはあの時だつたよ。まつたく君は詩人だつた。

あのころであつた、僕が散々Ｓ子のことを君に話して聽かせたのは。蒲田から池上に出て、本門寺の木立を突つ切つて目黑の方へ歩いて來た時は落日が芒の原を照らしてゐた。僕等はあの芒のなかに坐つてバアンスの“Highland Mary”を讀んだ。あの時僕の頭のなかには、山査子の下に坐つてゐる詩中の女は、Ｓ子の俤となつて映つて來てゐたのであつた。恐らく君の頭には垂水の海濱にゐたといふ女が映つてゐたことであらうと思ふ。

Ｔ君。僕はあのころの君の寫眞を見てゐる間に、ほんたうに君と逢つて見たくなつたのだ。逢つてあのころのことを語つて見たくなつたのだ。既う僕等の生活にはあのころの話でもして、かすかな胸のときめきでも感ずるより外には、まるで生活の感激といふものがないんだから。感激を持たない生活は墓場の生活も同然だ。

そんなことからして出しぬけに、今夜久し振りで君に手紙を書いて見る氣になつたのだ。君がどれほどの感激を持つてこの手紙を讀んでくれるか知らないが、僕自身は手紙を書いてゐる間だけはあのころの感激に再び浸さるゝことができると思ふ。

Ｔ君。あのころのことを想ふとほんたうに耐らなくなつて來る。

高田馬場の奥の寂しいお寺に自炊をしてゐた君は、僕が訪ねて行つたら、せつせと柳行李をくゝつてゐた。「何うしたんだい？」と驚いて僕がたづねたら、君は「親爺が危篤なんだ。僕は學校なんてやつて居れぬ。今夜の汽車で國に

歸る」と言つた。君の眼にはいつぱい涙がためられてゐた。

雨が降つてゐた。新橋驛にはお寺のおかみさんとあの娘が見送りに來てゐた。

「父は既に白玉樓中の人となつてゐた。僕は神戸の海岸で父が好きな葡萄を買つて歸つたが、僕の船が玉の浦に着いたころは父は幽明境を異にしてゐた！」君が歸郷後第一にくれたあの手紙は今でも僕は覺えてゐる。君はあれつきり東京に歸つて來なかつた。

「僕は一人の母と一人の弟を養ふために、たうとう山間の小學の敎員となつた。五つの壞れかゝつたガラス窓、剝落した一枚のボールド、三十人に足らぬ村童、部屋の一隅にある爐、爐の上の煤けた大藥罐、古びた二枚の地圖、それが山間の小學のすべてなのだ。山は深い、谷も深い、太陽は一日のうち僅かに五六時間ぐらゐしかこの山間の小學を直射しない。學校の裏に牧場がある。若い小學敎師は秋の太陽を惜しむやうに、子供たちと一緒に牧場に行つては唱歌をうたふ。時として僕はまたキイツやバアンスの詩をうたふ。僕ひとり黯然として思ふこともある。校庭の隅には誰が植ゑたのかコスモスが咲いてゐる。S子さんが好きであるといふ花だけに、僕もコスモスを見れば君等の戀を羨み、君等の戀を祝福したくもなる。かつてバアンスやキイツを夢みてゐた僕の生涯はあまりに早く冷たい運命に踏みにじられた。」

「山間の秋深し、草原を步めば秋悲し……」といふやうな意味の手紙が來たのはその年の秋であつた。その最後の二句「山間の秋深し、草原を步めば秋悲し」は今でも思ひ出して、あの頃の君の苦痛な心情を想像することがある。

その後君からはたゞ二度たよりがあつたゞけであつた。君のたゞ一人の弟御が出奔して、上海通ひの船のボーイとなつてしまつたといふ事と、君が敎へ子の間から若い細君を見出したといふ事だけであつた。

恐らく君も、今では幾人かの子供たちの父となつて、靜かな落ちついた生活を送つてゐることであらうと思ふ。

×

T君。お互に年は相當に取つたといふが、世間並に言へばまだこれからが、僕等の働き時であらう。しかし僕はこの頃急に年を取つたやうな氣がしてならぬ。

あのころはたとへ人生が何であらうと、人生が何のやうに寂しい場所であらうと、僕等の胸にはいつも若い血と希望が波打つてゐた。感激があつた。秋の悲しいといふこと、そのことが實にむせかへるほど懷かしいものであつた。苦痛や戀そのものが、實は胸を躍らすほどの感激であつた。

T君。君は僕の生活を幸福であると思つたこともあつたであらう。新橋驛で君を送つた夜の君の悄氣かたは今でも覺えてゐる。君のお父さんの病氣が案ぜられたのは無理もないことだが、君は電車の中でも僕を顧みては幾度か「僕は永久に文學といふものからも、學問といふものからも離れなければならぬ」と言つて溜息をついて、くやしさうに涙をためてゐた。

都會にゐて學問の研究に一生をさゝげるといふこと、或ひは文學者となつて華々しい文壇の大立物となるといふ君の最初の目的から見たら、君は人生の落伍者となるべく餘儀なくされたのであつた。

しかし、實際に人生といふものを考へて見たら、都會の喧騷なうちに埋もれて一生を書齋で送らなければならぬ學究の徒の生活なんて、ほんたうにみじめなものだ。さらに空名を追ふ文學者流の生活なんて、ほんたうに悲慘な氣がしてならぬ。

僕はこのごろつくづく君の山間の生活を羨ましく思ふ。

T君。「何のために生まれた？　何のために生きてゐるか！」このやうな問題を眞面目に提供したとしたら、今日の多くの社會の人たちは笑ふであらう。また宗教家だの、教育家だの、社會改革家だのといふ人たちは尤もらしい理窟

をならべ立てるであらう。しかし、そのやうな人たちの理窟が何のたしにならう。

T君。僕は學校を出て十餘年、齷齪として大都會のうちに、或る時は學究者のやうな顏をし、或る時は詩人のやうな顏をして、生きて來たことを恥づかしくも思ひ、殘念にも思ふ。

T君。僕はチエーホフの「物憂い物語り」といふ作品を讀んだ。ロシヤの或る大學の老敎授の晩年の內生活の苦惱を書いたものである。殆んど機械的に大學敎授として硏究に沒頭し、大學敎授として無味乾燥な生活を生きて來た老敎授はその死の近づいて來たことを知つた時、長い過去を振りかへつて見て我何をなせしやといふやうな長嘆息を洩らさないでは居れなかつた。かれはその妻からも、子供たちからも離れて孤獨の生活を苦しまなければならなかつた。かれの家庭はかれにとつて墓場のやうに冷たかつた。かれはたうとう家を捨てゝ、世間の人々を避けて、田舍町のむさくるしいホテルに病軀を横たへた。かれの隱れ家をたづねあてゝ來た一人の女があつた。それはかれの舊い友人の一人娘で、或る時は旅役者と一緖にコーカサスに逃げてそこで私生兒を生んだりした。かの女は世間からはいつまでもみだらな女性のやうに誤解されてゐた。かの女がこの世界でたゞ一人の父とも思つて賴つて行つたのは老敎授であつた。かの女は最後の身の振り方を相談するために、老敎授を田舍町のホテルにたづねて來たのであつた。しかし老敎授はこの不運な世に捨てられた一人の可憐な女性をすら何うすることもできなかつた。かの女は寂しくたゞ一人でかつて私生兒を埋めたコーカサスに旅立つてしまつた。

老敎授は終生のライブラリイの硏究のうちに何を見出し得たか? かれはかれ自身をすら救ふこともできなかつた。たゞ一人の女性をすら救ふことはできなかつた。かれの生活は畢竟ナッシングであつた。

T君。人間の一生を盡しての學究に何の力があらう。人生は無限に深く、無限に驚くべきものを持つてゐる。無限に解くことのできぬ悲しみを持つてゐる。

小說を書く作者の人生の摑み方といふものも、ほんたうに考へて見ると氣恥かしいやうな氣がしてならぬ。「何も讀むな。何も書くな、たゞ默つて秋の野を步いてゐれば宜いのだ。何も考へるな。たゞ靜かに秋の聲を聽いてゐれば宜いのだ」

T君。僕はこのごろよくこんなことを考へさせられる。そして武藏野の秋をあてもなく步いてゐる。

×

T君。武藏野の秋と言つたゞけでも、君には懷かしい思ひ出が湧いて來るであらう。君と二人で、"Highland Mary"を讀んだ武藏野は大分破壞せられたところもある。トタン葺きの屋根や、煙突が武藏野の調和を破つたところもある。しかしまだ〳〵武藏野には櫸の丘もあれば、杉の木立もあれば、黍の葉に埋もれた曠野もある。やがてトタン葺きの屋根や高い煙突も武藏野の寂寞のなかに溶けこんで行く。そして何の不調和も見出さないほど武藏野の秋は寂しい。

僕は轉々として居を移しいつも旅人の心に生きてゐなければならぬ。僕の故鄕の老親や、姉妹や、または僕の妻やを養ふために一日でもペンを休めることはできぬ。かなりオーヴアー・ウオークもやる。一週に三四度は二つの私立の中學に顏を出して先生らしい顏をしたり、校長の前にいやな頭も下げなければならぬ。

まつたく僕は僕の周圍の人々のためにオーヴアー・ウオークをやつたり、橫柄な男たちの前に頭を下げなければならぬやうな生活を十餘年つゞけてゐるのである。この生活はこれから先き恐らく僕の一生の間つゞいて行くことであらう。

しかしこのやうな倦怠い生活のうちにも、このごろでは、僕は武藏野を步くことのできる幸福を心から喜んでゐる。

T君。三十幾つの男が貧相な鬚面を下げて、黍畑のなかを步いたり、櫸の列樹の下に佇立してゐたりしてゐるのは、はたから見たらあまり宜い圖ではないかも知れぬ。

しかし、僕の現在の生活にとつては、黍畑のなかを歩いたり、欅の列樹の下に佇立したりすることくらゐありがたい時間はないんだ。

今日も僕は黍畑のなかを歩いてゐたんだ。あの廣い長い葉、あの高い秋の空を仰いで寂しい兩手を擧げてゐるやうな白い穗、あの名狀しがたい寂寥な聲を立つる葉摺れの音！

まつたくあの黍の葉摺れの音くらゐ秋らしい聲はない。あの聲は秋そのもの丶悲しみの聲だ。秋は收穫のシーズンだなど丶言つて、喜びの時期だといふやうな西洋人の口眞似をする人間もあるが秋の聲ぐらゐ悲痛なものがあらうか。

T君。武藏野の秋の午後を想像して見給へ。

秩父から函嶺の方の山脈が靑く、くつきりと空を劃つてゐる。芒が地平線の上に白く輝いてゐる。黍の葉がぼろぼろに乾き切つた黑い土の曠野をうづめてゐる。赭土色の徑が絕えてはまた向うの木立の前につゞいてゐる。森では蜩が鳴いてゐる。馬車の馬の背だけが、黍の葉の上ににゆつと影を見せて動いて行く。殆んど人聲といふものを聽かない。たまに何處からともなくチヤルメラの音が倦怠いやうに響いて來ることもある。

行儀よく一列に植ゑつけられた黍の莖からは、風が吹くごとに白い柔かな葉がかさ〱とたとへやうもないほどな寂しい聲を立てる。

僕は土の上にしやがんで、ぢいつと一枚々々の黍の葉を見てゐた。そしてあの寂しい聲を聽いてゐた。かさ、かさ、かさ……何といふ寂しい、何といふつ丶ましやかな秋の聲であらう。それは無限から無限へ流れて行く生そのもの丶寂しい聲である。刹那々々に滅びて行く生そのもの丶悲しい聲である。

少年よ、靑春よ、戀よ、中年よ、すべてのものよ！　みんな瞬く間に滅びて行くのではないか！

T君。僕はしやがんで黍の葉音を聽いてゐる間に、瞼の裏がほてつて來るのを感じた。

僕は故郷の兩親のことを思つた。病身な妻のことを思つた。S子のことを思つた。僕は黍畑の徑にしやがんで泣いた。

T君。僕は病身な妻がもし僕に先立つて死ぬやうなことがあつたら、どんなにこの世界が寂しくなることであらうと思ふ。また故鄕の兩親がゐなくなつたら、この世界がどんなに賴りなくなるであらうと思ふ。既うその時は、僕は二度と秋の野に立ちて黍の葉音を聽くには耐へられなくなりはしないかと思ふ。

S子は既に人の妻であり、人の母である。そして今何處にゐるかも知らない。けれども、もしS子がこの世界から去つてしまつたといふことを知つたら、僕はどんなにか寂しく思ふことであらう。

たとへ自分を捨てゝ行つた女であらうとも、かの女がこの世界にまだ生きて、僕の名を、僕との逍遙を、想ひ出してくれるといふことは、僕にとつてほんたうに尊いことである。

僕はいつまでも生きてゐたいと思ふ。また病身の妻をもいつまでも生かして置きたいと思ふ。

僕はそのために何のやうなオーヴアー・ウオークをやつてもかまはないと思ふ。「誰も生きよ、いつまでも〳〵生きよ。」

僕は黍畑のなかにしやがんでいつまでも同じ言葉を繰りかへしてゐた。

T君。いつまでも生きてゐてくれ。垂水の病院にゐたといふ君の初戀の女はその後何うしたのか。僕は心からその女が生きてゐてくれることを祈る。

僕等の現在の生活にとつてはあのころを想ふ刹那ほど懷かしい刹那はない。尊い刹那はない。更にあのころの悲しい戀人たちが、いまだにこの世界の何處かに生きてゐるといふことを想つただけでも胸苦しいほどになつかしいではないか。

垂水の女も生きよ、S子も生きよ。

×

T君。僕は君がお母さんと一緒に、靜かな山村に生活して居ることの出來る幸福を羨しく思ふ。

僕は殆んど故鄕を出てこの二十年來、兩親と一緒に棲んだことはない。中學の寄宿舍にゐるころであつた、「兩親から別れてゐなければならぬくらゐなら、乞食しても宜いから、中學を止めて故鄕に歸らう！」と思つて夜汽車で急に國に歸つてしまつたことがあつた。僕はあのまゝ故鄕を出なければ宜かつたにと思ふ。

馬鹿な靑年の名譽心が、僕を驅つて今日のこの孤獨な境涯に置いたのであつた。

二三日前であつた。僕は終日武藏野を步いて來た。晝間あまり遠くまで步いて疲れたせゐかして、僕は夜中に幾度も眼がさめて眠れなかつた。

僕の頭には故鄕の町や、年老つた兩親のことなどが浮かんで來るのであつた。

遠い〳〵旅路を隔てた故鄕に、恐らく父も母も僕のことを考へて眠れないでゐるかも知れないと思ふと、穴倉のやうな暗い百姓家のなかにうごめいてゐる二人の衰へ切つた老人の姿がはつきりと映つて來るのであつた。

僕がうと〳〵と眠りから覺めた時は、窓からは夜明けの白い光りがかすかに戶の隙間から洩れてゐた。

秋の風が屋根の上を高鳴りして過ぎて行くのであつた。

故鄕や父や母のことが再び僕の胸に犇々と迫つて來るのであつた。耐へ切れぬほどの寂寞な人生が眼の前に浮かんで來るのであつた。

「人生とは？」僕はかさ〳〵と朝風に鳴る黍の葉音を聽きながら、ぢいつと眼をつむつてゐた。

淚がわけもなしに湧いて來るのであつた。

やがて故鄕の親たちからも、妻からも、S子からも、すべての人々からも別れて永遠にたゞ一人で步かなければな

らぬことを想へると、僕はほんたうに子供のやうになつてすゝり上げて泣きたいほどの寂しい心になるのであつた。

×

T君。僕はこのごろ時々生の廻避といふことを想ふことがある。それは苦悶の末に來る廻避ではなくて自然の寂寞の底に瞑合して行く歡喜の廻避である。自然そのものゝなかに欣求しつゝ泣きつゝ、あこがれて行く廻避である。

月が武藏野を照らす時、黍の畑も、沼も、川も、草原も夢のやうな霧につゝまれる。僕は一時間も二時間も家の周圍をぐる〳〵とまはつて月を見ながら露を踏んでゐる。霧が手に觸れるくらゐ濃く、そして柔かく流れて來る。空も流れも草原も人間もまるで一つのものとなつてしまふまで霧の海がひろがつて、月の光りが水のやうに流れて來る。

何處まで歩いて行つても限りもなく、柔かな霧の海がつゞいてゐる。

そのやうな晩である、僕と妻は草を踏んで月を見てゐる。

「このまゝ歩いて行つて、家に歸つて來ないやうな旅に出たいなあ！」僕はさう言つて妻をかへり見る。

「まつたくですわねえ……」病身な妻は寂しさうにさう言ふ。病身な妻は僕さへ死ぬ氣なら、いつでもよろこんで一緒に死ぬ氣になつてゐる。

病身な、そして賴り所をもたない妻は、いつか萬一、夫に捨てられるくらゐなら、今のうちに、夫に愛されてゐるうちに、その夫と一緒に死ぬことをむしろよろこんでゐる。

ほんたうに僕等は今のうちに霧の深い月の夜に、世の中といふものをすつかり捨てゝしまつて、旅に出て行つたら、何れほど幸福であるか知れない。

白髮になつた人たちが、利慾のために恥も外聞も忘れてあさましい生き方をしてゐるのを見ると、人間といふものに愛想が盡きてしまふ。

妻との間には三人の子供があつたが、三人とも死んだ。僕は時々、その子供たちが何處かの世界に僕等を待つてゐるやうな氣がしてならぬこともある。しかしそれも幻である。

しかし、今では一人の子供たちもゐないことを、亡くなつた子供たちのために幸福だと思ふ。僕のやうな男の子は、また屹度僕のやうな寂しい人生をのみ見るか、自殺するかであらうから。

T君。人生には何の目的もない。人生はみな幻である。

しかし、あのころの生活だけは幻は幻としても懷かしい。胸が疼くほどなつかしい。

×

T君。こゝに住んでから一層、僕は自然のなかにつゝまれた人々の生活の尊さを思ふやうになつた。

默々として炎天にさらされながら草をむしつてゐる人たちを見ると、ほんたうに尊いと思ふ感じがわいて來る。

僕は一日のうち三時間もペンを握れば一日の生活費だけは得ることができる。ところが、默々として野に働いてゐる人たちは、朝、薄暗いうちから働いて、日が暮れるまで野のなかに立つてゐる。そしてその得るところは僕の三時間の勞銀にも及ばない。

僕はペンを投げ出しては、仰向けになつて机の前に寢ることがある。しかし默々として炎天に燒きつけられて働いてゐる人々の鎌の音を聽いては、怠惰な自分の心を責められて起き上る。

武藏野を步けば、到る處に勤勉な農夫たちは默々として草を刈り、土を打つてゐる。

トルストイの「イヷンの王國」は空想ではないと思ふ。人間が尙少し賢くなつて來たら、尙少し正直になつて來たら、尙少し嬰兒のやうな心を持つて來たら、武藏野の草原には幾人ものイヷンが見出さるゝであらうと思ふ。

×

T君。僕の隣りにも一人のイヷンがゐる。名は藥師さんといふ。ほんたうな名は別にあるのだらうが、本人も藥師さんと呼ばれるのを當然のやうに心得てゐる。

かれは五十にもならうが、見たところではまだ四十そこ〳〵に見える。十二の年から野良に出て働いてゐるといふことであるが、今では五人の子の親となつてゐながら、まだ一軒の小屋も持たず、一坪の土さへ持つてゐない。かれの所有物と言つては、武藏野の土のなかに眠つてゐるかれの二人の子供たちの小ひさな墓場だけである。

一年中、かれは人に雇はれては武藏野の土を打ち、草を刈つてゐる。そして今日得たゞけの物は今日の生活に費してゐる。ほんたうに明日の事を思ひわづらふことをしない生活である。かれは六尺に近い肥大な肉體を持つてゐる。そして膂力はたしかに普通の人の二倍くらゐはあるであらう。かれは一日も學校といふものに通つたこともないが、地主に對しても、村長に對してもこつちからは頭を下げないといふのが自慢である。腸を惡くして起きられないやうに弱つてゐる時でも、鉢のやうな茶碗で茶漬飯をかきこんでゐる。

かれのたゞ一つの道樂は將棋である。かれは金を貯へることも考へず、畑を買ふことも考へてゐないらしい。かれてはむつつりしてゐるかれが、夕方野良から歸つて來て縁臺に涼んでゐる時家の前を通りかゝる豆腐賣りや、馬子を呼び寄せて將棋を挑む時の顏のあどけなさは別人のやうな氣がする。

かれは一度將棋盤に對したが最後、何も彼も夢中である。群をなして草村から集まつて來る蚊は、かれの手となく、足となく、頭となく、容赦もなく襲ふのであるが、かれは蚊遣り一つ焚かず、團扇一つつかはないで、將棋の上に眼をそゝいでゐる。

武藏野の芒の間から月が出て來ようと、桑の葉に秋風がざわめいて來ようと、かれは無我無心になつて盤を見つめてゐる。

尚一人隣りの家にはイヷンが遊びに來る。かれの名を僕はまだ知らない。たゞ「兄さん！」とばかり隣りの家の人は呼んでゐる。藥師さんの細君の「兄さん」であるらしい。

越後の海岸の漁師であつたが、稼ぎためて建てた家を火事で燒かれてしまつたので、故郷を捨てゝ東京に出て來たのださうな。「下駄の齒入れ屋がお前さんの商賣としては宜からう」と言つて藥師さんがすゝめたさうだが、「そんなことをしては村の鎭守さまに申譯が無え」と言つて、やつぱり自分ひとりで、荒川の上流に小ひさな草の小屋を結んで、川魚を釣つてゐるさうだ。

兄さんも人に頭を下げることが大嫌ひださうで、「わしら、誰にも頭下げることはいらねえだ。雲と水さへ見てゐれば宜いだけに」と、僕に話したことがあつた。背の低い男だが、體は荒波で鍛へたゞけに鐵のやうに堅い。

「兄さん」は一日に鯉を一匹釣れば暮らして行けるさうだ。大きな鯉を釣れば二三日は草の小屋のなかで、煙草を喫かしながらごろ〳〵寢ころんでゐて宜いさうだ。

「兄さん」も大抵夕方になると藥師さんの家にやつて來る。そして二人は夜が更けるまでカンテラを點して將棋盤を見つめてゐる。

滅多に笑ひもしない、物も言はない。たゞぱちく〳〵と將棋の駒の音だけが聞えてゐる。

頭の上を星が飛ばうと、秋の風が吹かうと、まるで無關心の體である。

今日、夕方再び僕は家を出て武藏野を歩いた。僕が家を出かける時藥師さんと「兄さん」は、盤を戶外に出して將棋をさしてゐた。

僕はあまり月が良かつたので、黍畑のなかだの、沼だのとあてもなく步いた。そして「無限な人生の孤獨」をも想へて見た。「あのころ」のことをも想ひ出した。S子の名をも呼んで見た。

「生命よ。青春よ。戀よ。萬有の幻よ。孤獨よ。流轉よ。死よ……病身な妻よ。S子よ！」僕は霧に迷うた少年のやうに、夜霧のなかを徐かに歩いて來た。そして幾度か桑畑の徑に佇立した。

僕は家にはいる前、ちよつと藥師さんの家を覗いて見た。

月に背を向けた二人の男たちは、僕が近づいて行つたのも知らないで、無心に將棋の駒を見つめてゐた。

T君。僕はイヴンたちの幸福を羨む。イヴンを書いて滿足することのできたトルストイを羨ましいと思ふ。

「ほんたうに幸福なイヴンたち！」

僕はイヴンだけの生活はできるかも知れない。けれども僕はイヴンになり終はすことのできない人生に對する寂寞を持つてゐる。

トルストイは神を信じた。かれは幸であつた。

神を信ずることのできない僕にはイヴンの王國もまた永住の地ではあり得ない。

たとへイヴンの王國の一農民として働くことができるとしても、僕は桑の葉の下で無限の寂寞を想うて涙を流すであらう。

家に歸つて見れば病身な妻は籐椅子を草の上に持ち出して水のやうな空を仰いでゐた。

×

T君。夜が更けた。武藏野は霧の底に眠つてゐる。

二人のイヴンたちも眠つたのであらう。將棋の駒の音もしない。

妻はすや〳〵と寂しい顏をして眠つてゐる。

僕はあのころのことを想ひながらペンを走らせてゐる。

この鬚面を下げて初戀の女の思ひ出でもあるまいぢやないか……。しかし人間の心といふものは、妙な奴だなあ。自分自身でも、自分の心といふものを想像して見ると、噴き出して笑つてやりたいやうな氣もする。君も、僕の心を笑つてくれ。

これでなほ四五日の間は、僕もまたあのころのことを思ひ出すであらう。S子のことを想へるであらう。それとも、この手紙が君のところに着くころは、僕はあのころのことも、S子のこともすつかり忘れてゐるかも知れない、ハハハ……

要するにこんなことは一年に一度か二度、瘧のやうに發つて來る中年者の寂しい病氣なんだらうからなあハハハ……。

井戸端で洗濯してゐた女たちが木立のなかを通りすがりに「すつかり木の芽の香ひがしだして來た！」と話してゐるのが私の耳に響いて來た。

淺春

春が來たのだといふ感じが沁々と病後の心に迫つて來る。シベリヤの囚人たちが復活祭を焦り待つといふ心持ちなどが幾分想像されるやうにも思ふ。

古い椿の葉が新らしい春の葉と替るためか、時折り、まるで甃を打つ小石のやうな音を立てゝ落ちて行く。鶯が下葉から下葉へとさゝ鳴きをして渡つてゐる。小鳥が松に來ては鳴いてゐる。

西ケ原から染井の墓地あたりの森をかけて、家も土も煙りはじめてゐる、土の香が私の魂をふうわりとつゝむ。

草のなかに寢ころんで本を讀むことのできる春が近づいて來たかと思ふと、ちよつと少年時代に經驗したやうな胸を打つほどのよろこびも湧いて來る。生きてあればこそといふ、生そのものに對する心からの感謝も湧く。

「乞丐のやうな生活をしても宜いから生きてゐたい。」と私は病中に考へたこともあつた。また或る時は「一生涯人々のために托鉢僧となつて歩いても生きてゐたい」と思つたこともあつた。この考へだけは今もまだ私の心の底にかすかに動いてゐる。

六十幾歲で世を捨て旅に出て、それつきり一度のたよりもしないで、何處で死んだか、たうとうわからなくなつてしまつた親戚の老人のことなどを思ひ出す。西行、芭蕉といふ人々の生活も思ひ出される。

しかし私は世捨人には何うしてもなれない。世捨人になるには私はあまりに幸福を求めてゐる。私はまだ人間の巷

か戀しい。

西行は知らぬが、芭蕉は世捨人ではなかつた。芭蕉くらゐ人間から人間へと迎へられ、よろこばれて生きて行つた人は少いであらう。

萬有寂滅の悲しみを心ゆくまで味はつた芭蕉にとつて生きて行くたゞ一つの道は溫かい人間の心のうちにあつた、溫かい人間の涙の底にあつた。

あの交通不便な時代に芭蕉がたび〳〵故鄕をたづねて思ひ出に泣いたことや、木曾、伊勢、近江、或る時は「奥の細道」をわけて到る處に友を見出したことを想ふと芭蕉ほど人間のなかにあたゝかい世界を見出した人は少いやうな氣がする。捨子の友、傾城の友、旅僧の友、乞食の友、農夫の友、醫師の友、かれはすべての人々の仲間であつた。

牛乳屋も、渡し場の船頭も、洗濯屋も（私の仲間！）と呼んでゐたホイットマンを想はせる。

心の素直な仲間と仲間とが、一緒に生の感謝を知るために、生きることのよろこびを心ゆくまで味識するために、讀まなければならぬ作品を産み出してくれる藝術家を尊敬する。

眞面目に考へて苦しんでゐる人、勤勉な、心の美しい人、子供のやうな心の人は、みんな私たちの藝術の世界の仲間でありたい。

怠惰者、ずるい人間、傲慢な人間、小ざかしい人間、悧巧振る人間、このやうな人々に對して私たちの藝術を與へてはいけない。

働かない人々にパンを與へてはならないと同樣に、手の白いなまけ者に對しては私たちの藝術を與へてはならぬ。

スコットランドの小作人や敬虔な老爺や、鎖につながれて死んだ羊の仲間であつたバアンスを尊敬する。

今日も靜かな麗らかな日である。冬は何處にか立つてしまつたやうな氣がする。梢にまつはるやうにして靄が森を

つゝんでゐる。

田七八反隔てた小學校からしきりと唱歌の聲が聞えて來る。卒業式の準備にうたつてゐるのであらう。私たちが小學を出る時うたつたのと同じ唱歌である。あの歌は今日は妙に葬らひ歌のやうに私の耳に響く。讃美歌集の中の「死近し」といふ歌を聯想する。聽いてゐるとしんみりした感じはするが、あまり寂し過ぎる。

五六日前の夕方であつた。まだ私の熱がさがらない時であつた。近所の家のなかであつたか、草原のなかであつたか。若い女の聲であの「死近し」の讃美歌をうたつてゐたものがあつた。私はすつかり敎會に行かなくなつてからながいことあの讃美歌を聽かなかつたが、偶然に通りすがりの人がうたつたのであつたかも知れぬが、病んでゐてあの讃美歌を聽いた。その刹那だけは私は神にすがらうといふやうな考へを起した。人間は病氣をしてゐる間はほんたうに素直な自分を見出してゐる。

私はまる六年ばかり讃美歌といふものをうたつたことがない。中學時代には朝床を上げる時でも、顏を洗ふ時でも、寢る時でも讃美歌をうたつてゐたが。

今日は不自由な足を引き摺つて半日書齋のなかを探して見たが讃美歌集はたうとう見つからなかつた。

人間はだん／＼靑年から遠ざかるにつれて歌もうたはないで、祈ることもしなくなつて、ぢつと冷たい死の影を見つめるやうになるのかと思ふと寂しい。

獨步、梁川、樗牛とながいこと病氣になやまされて死んだ人たちのことが想ひ出される。梁川の死は靜かな哲人の死を想はせる、樗牛の死は悲しさのうちにも美しきロマンテイシストの死を、獨步の死はいたましい失戀詩人の死を想はせる。なかにも最も凡人らしい凡人獨步の死は私の胸にひたと迫る。

神をもとめて神を得ず、戀をもとめて戀を得ず、しかも神を捨て得ず、戀を忘れ得ず、最も凡人らしい生活上のア

ソビションに燃え、空想に熱し、不平を叫び、酒語を放つたあの多感な病詩人の死はいたましい。私は伊豆に旅するごとにかれの「湯ヶ原より」を想ふ。かれの脆かつた涙を思ふ。
私の心に最も強く求めてゐるものはプラトーの哲學でもない、トルストイの眞理でもない。私は哲學を求めない。私は眞理を求めない。私の欲するものは凡人の凡人らしい言葉と涙。でなければ巨人の力。
私は前の意味に於いて凡人獨歩を愛する。後の意味に於いてイプセンの作の主人公たちの、あの底力の強い憎みを欲する。
病後に土を踏むといふことはほんたうに嬉しいことである。土からは柔かな蓬の芽が出た。麥の芽が丸く毬のやうにかたまつてそこいらの野を靑く彩つて來た。小ひさな家も籬も電柱もぼんやりとかすみはじめた。
私はぢつと靑く輝きはじめた草の中に立つて、柔かな微風に吹かれながら西ヶ原から染井あたりの煙つた野良を見てゐた。
たうとう春が來た！　と私は思つた。その刹那私の瞼の裏が熱くほてつて來た。
春の日を見出し得た嬉しさ。生きることの嬉しさ。生きることの惱ましさ。私の胸はかすかに顫へた。私は最も強く生を感謝する心と、死を思ふ心とが、背中合はせに隣合つてゐることを知つた。
「ねがはくば花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ」
「花みればそのいはれとはなけれども心のうちぞくるしかりける」
私は西行の歌を思ひ出した。極端な生の享樂と極端な生の廻避とはいつも隣合つて坐つてゐる。

×

中學の一年くらゐの子供たちを見てゐるとほんたうに宜い感じがする。制服の腕が長過ぎたり、ズボンがだぶ〲

してゐたり、靴が不調和に大きかつたりするところは何となく、軍隊の新兵を思ひ出させる。ユウモラスな感じをわかさせる。

「何といふ可憐な天使であらう。」私は紅顔の少年たちを見るたんびにさう思ふ。

あの腕の長過ぎる、だぶ〳〵のズボンの制服を着て眞面目な顔をして街を歩いてゐる金ボタンの少年たちを見てゐると、私は何とかして一緒に話をしてみたくてたまらなくなる。あの黑い澄んだ瞳、あの長い睫、あの輝かな紅い頰、あの糞眞面目な可憐な議論……私は時々、中學一年を敎へてゐる先生たちを羨ましく思ふ。

今日も三人の少年たちが大きなカバンを背負つてやつて來た。道の傍の片岡の草の上に一人がカバンを投げ出すと他の二人も同じやうにカバンを投げ出した。一人の子が柴笛を吹き出すと、二人の子は草の上に寢ころんだまゝ、糞眞面目な顔をして、空を仰ぎながら聽いてゐた。何が可笑しかつたのか、急に三人が一緒にはしやぎ出して笑つた。

三人の少年は兎のやうに、片岡を下つて町のなかへかくれてしまつた。

私は少年たちが寢ころんでゐた草の上に歩いて行つた。そこには少年が吹いた柴笛の葉が二つに裂かれたまゝ捨てられてあつた。

私は柴の葉を取つて柴笛を拵へた。

だが、それだけであつた。私は柴笛を捨てた。

小鳥の巣

夕方になつてから家の周圍を歩いてゐると、椿の葉の中でばさ〳〵と塒をもとめてゐる小鳥の羽音が聞える。
地の上には雪がまだ解けないでゐる。地はから〳〵と凍りついてゐる。
小鳥は人の近づいて行つた跫音に、警戒するかのやうにちよつと羽音を止めることもある。
しばらく立ち止まつてゐると、再び小鳥の動いてゐる音が聞える。それは雪につゝまれてしまつた地の冷たさを想はせるほどほんたうに仄かな、うらさびしい聲である。たまらなく寒い聲である。
「小鳥よおいで、私の部屋まで。私の部屋には爐があるよ、暖かい。私の部屋に來て一晩とまつて行かないか！」
私は、さう言つて、椿の下の小鳥に話しかけて見たいと思ふこともある。
私はぢつと椿の傍に立つてゐる。
日がだん〳〵暮れて行つてしまふ。
椿の葉の蔭が眞つ暗になつて行く。
地の雪が暗のなかにかすかになつて行く。
空の風も止んでしまふ。
椿のなかの小鳥も滅多に羽音をさせなくなる。
小鳥も眠つたのであらう。
雪の上には星がまたゝき始めた。

「寒いだらう！　小鳥は……」

私はさう思ひながら私の部屋にはいつて行く。

何故人間と小鳥といふものが、話しもしないで別々な世界に住まなければならぬのか。

私は部屋にはいつてからまで、こんなことを考へることがある。

悪い人間は滅びても、可憐な小鳥はいつまでも幸福であれと私は思つてゐるのに、私と小鳥とはいつも別々である。

×

日が暮れてからとぼ〳〵と荷車を輓いて行く馬を見るのは傷々しいことである。

×

雪の日に私は下駄の緒を切つて困つたことがあつた。

職工長屋の端の家に駄菓子を賣つてゐたおかみさんは私を呼び止めて麻の苧をくれた。

雪が晴れてから二度私はその長屋の前を通つておかみさんを見て默禮をして過ぎた。

三度目にその家の前を通つた時は、その家は戸が閉(しま)つて、貸家札がはつてあつた。

×

雨が晴れた後や、朝まだ露が草の葉に眠つてゐる時は、日光の照り具合で色々な色彩が一つ一つの露から生まれて來る。

その一つ一つの露が作り出す色彩の美しさにはどのやうな寶石の輝きも及ばない。

紫、紅、コバルト、ルビイ、……それが一つ一つ星のやうにまたゝいてゐる。

無數の寶石、無限の色彩、それが庭一面に、原一面に撒き散らされてある。

何物をも持たぬ私はすべての寶石と色彩を惠まれてゐる。
若い女たちよ、お前のたゞ一つの紅寶石の指環をお捨て、そして素足のまゝ朝の露を踏んで御覽。
あんなにたくさんの寶石が、お前の足の裏にころがつてゐる。
「刹那だけだつて！」
さうではない。明日も、明後日も、太陽と大地があるかぎりは、露があるかぎりは無數の寶石が輝く。
あれはみんなお前のものだ。
あれはみんな乞丐のものだ。
あれはまたみんな王樣のものだ。
そのうち、一等貧しい人が、一等多く、あの寶石の美しさを知ることができる。
星を御覽。月を、太陽を……微風を……あれもみんな私たちのものなんだ。

流れ行く影

山の手の家から下町の今の家に引つ越して來てから恰度一年經つた。雪の降る寒い日であつたが、北向きの窓から見える隣の庭に、大きな木瓜の實が二つ三つ梢に附いてゐたのや、靜かな澄みちぎつた空に秩父の山系が靑く仄かに見えてゐたのなどを今にも憶えてゐる。

木瓜の實は一度落ちて、淡紅色の可憐な花を開いて、新らしい實を結んで、また寒い冬の空に顫へてゐる。私は每朝のやうに北の窓から外を眺めてゐるが、この冬はまだ秩父の山脈は見えない。郊外にだん〳〵と工場の煙突などが殖えて行くので、或ひは今年は山の姿は見えなくなつたのかも知れない。さう思ふと名殘惜しいやうな氣もする。

しかしすべてのものゝ流轉といふやうな儚い感じは、私の書齋の北の窓から見た人事の上に一層强く遺されてゐる。私の書齋の右と左とに若い佛師がゐた。私はよく佛を刻む鑿の音などを右と左の家に聽いたのであつた。靑葉の頃になつて障子が取り除かれるやうになつてからは、私は刻みかけた佛の前に槌を握つては考へ込んでゐる若い男を、私の窓から覗いたのであつた。

秋になつて右の家の佛師は何處にか立つて行つてしまつた。また左の佛師の家でも鑿の音が滅多にしなくなつた。瓦斯會社の男などが來て幾度も口汚く金の催促などしてゐる聲を私は書齋の窓から聽いた。佛師の老母が苦しさうに何かと言ひわけをしてゐる聲も聞えた。私は暗い晩など格子戸の前に立つて佛師の老母に林檎など持つて行つてやつたこともあつた。讀み古しの雜誌などを老母が自身で借りに來たこともあつた。若い佛師に似て老母も人の善さゝうな女であつた。言葉つかひなども上品過ぎるほど上品であつた。

「この頃忰が一向家に居着かないものですから」と言つて泣いたこともあつた。私はこの夏のころ、若い佛師が毎晩のやうに赤い女の襦袢を着て佛を刻んでゐたのを思ひ出した。また若い佛師が「この着物は吉原の女に貰つたんだよ」と言つて客らしい男に話してゐたことを思ひ起した。

隣の家からは殆んど鑿の音が聞えなくなつた。佛師の老母は何かと賣り拂つては、寂しさうに暗い室に一人でぽつねんと坐り込んでゐた。

或る晩であつた。久し振りで若い佛師が家に歸つて來たやうであつた。それから二晩ばかり續けて殆んど夜つぴて男や女たちの泣く聲や罵る聲が聞えて私は眠れなかつた。

「吉原の女が押しかけて來たんですよ。」と筋向うの家の老婆が小聲で私に敎へてくれた。

「女郎なんかを嫁にするくらゐなら、妾は咽喉を突いて死ぬ。」と言つて老母は泣いた。

二三日經つてからであつた、若い佛師と女は老婆を捨てゝ隱れてしまつた。

私の書齋の窓から見える狹い横町では、毎日のやうに長屋のおかみさんたちが集まつては若い佛師の噂をし合つてゐた。

燈も點けない暗い室に、散らかつた木屑のなかにぽつねんと坐つてゐる老母を見ては心から氣の毒に思はずには居れなかつた。

老母の姿が十日ばかり見えなかつた。眼を病らつて入院したといふことであつた。巡査が來て失踪した若い佛師のことなどを留守居の男に訊ねてゐたりした。

冬になつてからであつた。暗い路次の入り口で私は顏半分を繃帶した佛師の老母を見た。それから四五日經つてからであつた。姿を隱してゐた若い佛師と女とが、女の父親といふ男に荷車を輓かせて隣の家に來た。やがて佛師や女

たちは煤けた簞笥などを積んだ荷車を先に立てゝ出て行つた。
「悴のいふやうに二人を一緒にさせまして、妾も當分厄介になるつもりです。」
佛師の老母は私の家の前に立つて泣きながらさう言つた。老母はまだ顏に繃帶してゐた。
「ほんたうにお別れいたしますのはお名殘り惜しうございます。」と言つて老母は泣いてゐた。
この春になつてから老母は二度私に手紙を寄せてくれた。それは北國からであつた。「雪が深くて春までは汽車にも出られず候。私一人にて一と先づ歸國いたし候」とも書いてあつた。
若い佛師や老母たちの後には、勤め人らしい賑かな一家が引つ越して來た。そこからは毎晩のやうに三味線の音などが響いて來た。

木槿の花

私の家の近くには、たゞ一人の娘にかゝつて暮しを立てゝゐるお袋たちもゐる。そのやうなお婆さんたちのうちで、百日紅の咲いてゐた家のお婆さんは私に一番深い印象を與へてゐる。

このお婆さんも、かういつた種類の女性たちにありがちな迷信を持ち、暮し向きも切りつめたやり方である。乞丐などが格子戸の前に立つとお婆さんは險のある目をして「お前さんなんかにあげるお金はないよッ」と叱るやうに言つて障子をぴしやりと締めてしまふ。殊に今にも私が氣の毒であつたと思つてゐるのは、或る日、恰度そのお婆さんと同年くらゐの年老つた女が、見るからに傷ましい姿をして針を賣りに來た時であつた。お婆さんはその老婆に對しても冷たい視線を投げて、例の惡罵を浴びせかけた。すご〳〵と路次の奥の方へ歩いて行つた老婆の姿を私は氣の毒に思ひながら見てゐたことがあつた。私は百日紅の咲いてゐた家のお婆さんを憎いとさへ思つたことがあつた。

しかしそのお婆さんは孤兒院の子供なんかゞ來ると玄關に引き入れて菓子を食はせてやつたり、錢をやつたりしてゐる。そして噓だか眞實だか知れぬ孤兒の雄辯な物語に涙を流してゐる。

お婆さんの隣の長屋に女學校の先生が引つ越して來たのは去年の夏の初めころであつた。先生は中年の夫婦者であつた。朝になれば夫婦共學校に出て行つた。扉をしめてしまつた家の二階の物干臺には硝子瓶のなかに入れられた金魚が、私の窓から見えてゐた。

先生夫婦が引つ越して來て一ヶ月も經たない間に私は奥さんが急にこて〳〵と白粉を塗り始めたことに氣付いた。隣近所の長屋の二階に住んでゐる女たちは、大抵日髮日化粧を怠らない種類の女性だつたので、先生の奥さんも自然

そんな風になつてしまつたのであらう。それでも奥さんは學校に出かける時だけは黒い顏をして出かけて行つた。暑中休暇のころなどは大柄の派手な浴衣を着て、顏を白く塗つた奥さんの姿が私の窓から見えてゐた。

女學校の先生の家では、百日紅の咲いてゐるお婆さんの家とは隣り合はせであつたが、滅多にものも言はないやうであつた。

「馬鹿にしてるんだよ。女學校の先生なんて威張つてゐるんだよ……」

お婆さんの眼には何時もさういつたやうな不平が讀まれた。

「ほんたうに困つちまう。こんなに行水の水を流して貰つては……」

私が家の前に立つてゐた時、お婆さんは先生の家に聞えよがしに大きな聲をして私に話しかけた。そこは先生の家の庭から流し出された水で一面に道がぬかつてゐるのであつた、しかしそれつきり先生の家からは湯浴の水が戸外に流されなかつた。私は先生の家に對して氣の毒だとも思つてゐた。

「お互樣ですから、路次の戸締りだけは良くして下さいよ。この近所はこそ〳〵盗人が多いんですから……」と言つて先生の奥さんに喰つてかゝつてゐるお婆さんを見たこともあつた。先生の奥さんは白い木槿の花の下でお婆さんにお詫びをしてゐた。お婆さんと先生の家の間に狹い路次があつて、夜になると兩方の家で遲くまで起きてゐる家が路次の戸締りをすることになつてゐたのであつた。

百日紅も木槿も散つてしまつた頃であつた。先生の奥さんは體が惡いので入院することになつた。奥さんは冬になつても歸つて來なかつた。珍しくその冬は雪が早かつたが、ひどい雪の夜であつた。奥さんの死が傳へられた。

「こんなことになるのを奥さんの魂は知つてゐたんでせうよ、病院に行きなさる日、初めてあたしの家の玄關に上り込んで、留守中の事を頼むと言つてねえ……」などゝ語りながらお婆さんは泣いてゐた。

葬ひの日は前夜からの雪が深く積もつてゐた。長屋の女たちは戸外に出て奥さんの柩を見送つた。フロックや羽織袴の男たちに交つて、お婆さんの縞の羽織を引つかけた姿が見えた。

日暮れ方であつた。お婆さんは雪の中を一人で歸つて來た。

「火葬場まで附いて行つたのですが、皆さんは俥でせう。何うしても追ひつかないんですよ。そのうちに下駄の鼻緒を切らしてしまつて……」

さう言つてお婆さんは手にしてゐた片方の下駄を上げて見せた。

先生の家では硝子瓶のなかの金魚だけがこの寒い冬の日にも二階の物干臺に見えてゐる。

路次裏

去年の春ころは毎朝のやうに私の家の屋根に來て遊んでゐた白い鳩の群があつた。御飯の殘りを水に混ぜて屋根の上に撒いてやるのを待つてゐるやうにして飛んで來たのであつたが、何時のころからかぱつたり來なくなつた。人にでも捕へられたのでもあらうか。

上野の「時刻の鐘」の錢を毎日五厘づゝ集めに來た爺さんがあつた。一錢渡してやると非常に喜んで行つたが、この秋ころから少しも見えなくなつた。

夕方何時も往來で逢つた老乞丐は、手押車のなかに板屑だの新聞紙などを入れて日暮里の方に歸つて行つた。普通の乞丐とはちがつて長い鬚を生やし、髮を肩まで垂らした、眼の凄いやうな男であつた。しかし雨に濡れて歸つて行く姿などは傷々しい感じを抱かせてゐたが、その男もこの冬になつてから少しも影を見せなくなつた。

嬰兒を負んぶした小娘の巡禮だけが、今でも折々やつて來ては格子扉の前でうたつてゐる。着物はぼろ〳〵の垢染みたものだが、顏立ちは十人優れた娘である。色も白い。

「今に惡い人に買られでもしなければ宜いが……！」

その巡禮の聲を聽くごとにさう思ふ。

チエーホフの歎き

一つの作品とそれについての或る批評家たちの批評を比べて讀んで見ると、創作家の頭の善い惡いより先づ批評家自身の頭の善し惡しがはつきりと浮かんで來る。

批評の立場からいへば或る特殊の圭角を持つた作品は摑まへどころがあるために一般に批評し易い。たいていの凡庸な批評家はいつも目立ち易い、摑まへどころのある作品にぶつ突かつた時、鬼の首でも取つたやうな氣で評し立てる。そこに附和雷同の批評が生まれて來る。褒めても笑はれなさゝうな材料なり、作家なりを摑まへては笑はれなさうな批評をする。

しかしほんたうに深い作品はそんなに十人の批評家が十人同じ聲を立てるやうなものではない筈だ。いつたい藝術といふものは摑まへどころや、圭角をはつきり見せようとする場合には、どうしても小我的な不純物が混じ易い。藝術の至境にあるものは圭角もなく、特殊なものもなく、素の素なるものでなければならぬ筈だ。名人の藝は初心者のそれにちかきものでなければならぬ筈だ。初心者の藝にちかい名人の藝術を批判することは、凡庸な批評家にはできないことである。どうしても立派な、大膽な批評家の眼が必要である。

作家にとつては所謂世間的な批評家の言葉よりは無數な無言の批評家の眼を恐れなければならぬ。職業的批評家にしても、自己の良心に對すると同樣に無言のしかも無數な批評家の批判を恐るゝことを知らなければならぬ。

チエーホフがかれの「鷗」(？)のなかで劇中の主人公に語らせてゐる通り、恐らく當代のトルストイやツルゲーネフの偉大なる名の前にはかれ自身の名はあまりに小ひさくあまりに顧みられないものであつたであらう。かれはたゞ一

個の可憐なる作家として認められてゐたのであらう。かれの作品には一般の批評家にとつて好都合なトルストイのそれのやうに主角がない。摑まへどころがない。それゆゑにかれはいつまでもペテイ・ライタアとして、たゞ一部の人々にのみ愛せられたであらう。

かれは大きな聲をして怒鳴るやうな作品を書かなかつた。それゆゑに耳の遠い批評家たちはかれの聲を聞き分けることができなかつた。

かれはセンセーショナルな作品を書かなかつた。それゆゑに神經のきはめて蕪雜な一般の批評家たちは、かれの纖細な感じを味ふことはできなかつた。

「わたしが死んだら、わたしの墓を見て、人々は、これは愛すべき作家……であつたといふであらう」といふやうなことを語らせてゐるチエーホフの心持が想像できる。しかも當代の多くの批評家たちの名が忘れられてしまつた時、可憐なる作家チエーホフの愛すべき、大きな名のみが殘つてゐる。

何といふ皮肉であらう。

×

批評壇が第二第三階の人々によつて占められてゐる場合には作品もまた第二第三階のものが認められる。それはかれ等にとつて取り扱つてゆくに恰度手ごろのものであるからである。かれ等はそれ以上のものを見る眼を持つてゐないからである。この種の批評家は眞實の作品にぶつ突かつた刹那にはすでに語るべき言葉を失つてしまふ。沈默か、然らずんば冷笑である。

いろ〳〵の批評のうち一番他愛もない批評の一例は芝居好きの芝居批評である。芝居好きとはいふもの〻實はひいき役者のための芝居見物である。この種の人々の批評は、批評といふよりはむしろ禮讃である。たゞひいき役者でさ

へあれば何もよし、彼もよしである。これはこれでいゝ、他愛もなき禮讃として。

しかし眞に批評として語る時はこれでは困るが、やゝもすればすべての藝術界にこれに類似な批評が見出さるゝ。そのやうな批評は結句かれ等の友人を却つて救ひがたき病弊に陷れてしまふ。

批評の職分といふやうな面倒くさい問題を今更開き直つて提示する必要もない。が、批評の氣分、批評の氣魄といふものを今日の狀態よりもずつと引締めてかゝる必要はある。でないと、却つて批評そのものが世間から置き去りせられることになつて來るであらう。

わたくしは踊りといふものを踊つたこともなし、研究もしたことがないから踊りに對しては盲目であるが、三津五郎の所作を見るたびにかつてチエーホフが批評家に對して感じたであらうやうな寂しさを三津五郎のために感じないでは居れぬ。

三津五郎の所作はいつもたいていは批評家たちの間ではあまり評判がよくないやうである。たまに褒めてやつても、きつと何とか彼とか難癖を附けてゐる。三津五郎のために氣の毒な思ひがする。

果して三津五郎の所作は、現代の他の踊り手たちのそれに比較して見劣りのするものであらうか。三津五郎の踊りを批評してゐる批評家達は果してどれだけ日本の踊りを知つてゐるのか、わたくしは三津五郎のためにかういつてやりたい。少なくともわたくしたち素人には少しもこせつかない、見てくれのない、大まかな、三津五郎の踊りは見てゐて氣持がいゝ。

先々月の市村の仁左衞門の松王に附き合つた千代之助の宿禰太郎を見た時もわたくしはペティ・ライタアの寂しさを感じた。しばらく見ない間に千代之助はたいへんいゝ役者になつた。今ではまだ型の方の苦心に氣をとられ過ぎてゐる形であるが、大まかな捨て難い味がをり／＼閃めいて來た。あの年輩の役者仲間ではともかくまるで異つた大き

な味を持つてみさうである。

東京の劇壇でとかく繼つ子扱ひにされてゐるやうな千代之助のために祝福される日が近づいて來たやうな感じがした。

×

陸軍の學校の一人の教師が或る家庭の御馳走に招かれる。かれはその家庭の主人が大の勳章ありがたがり家であることを知つてゐるので或る士官から勳章を借りて出かける、意氣揚々たる態で。ところが食堂にはいらうとすると驚いたことには同じ學校の佛蘭西人がすでに食卓についてゐる。かれはしまつたと思つたがどうすることもできない。右の片手で胸の勳章を隱して椅子につく。偸眼で見ると佛蘭西人はじろり／＼と自分ばかり見てゐる。右の手が放せないのでせつかくの御馳走も見るばかりで食べるわけにゆかぬ。不思議なことには佛蘭西人も自分と同じやうに御馳走を見るばかりで何も食べない。淑女たちのために乾盃を擧げなければならぬ。萬事休せりである。かれが右手を擧げるとゝもに胸の勳章は衆目に曝された。と同時に、勳章なんか持つてゐる筈のない例の佛蘭西人の胸には更に大きな勳章が燦としてかゞやいた。かうなつては佛蘭西人よりもつと大きな勳章を借りて來なかつたことを後悔しずにはをれなくなるのであつた。

一人の旅をしてゐる官吏が、夜の旅の無氣味さにおびえながら、弱氣を見せまいために無暗に强がりを言つて人相の惡い馭者をおどかす。おれはピストルを持つてゐる。一挺のピストルは何人力に相當するといふやうなことをいふ。おれの後からはやはりピストルを持つた同僚が三人やつて來る……話はますます强がりの話になる。馭者は顫へあがつて旅の官吏を眞暗な曠野の中に置いてきぼりにして逃げて行つてしまふ。藥が利きすぎたのである。

或る田舍の農夫が鐵道のレイルのナットを盜み取つて裁判官の前に立たせられる。裁判官からいへば重大事件であ

る。幾多の人命に關するシリアスな問題である。ところが農夫の頭には裁判官が考へてゐるやうなシリアスな結果は夢にも浮かんでは來ない。たゞ釣のおもしに具合がいゝから取り外したゞけである。それもレイルのナットを全部取り外したわけではない。汽車の故障がないやうにちやんと心得て危險のない程度に取つたゞけのことである。どうしても監獄に送られる理由はない筈である。農夫はかく信ずる。それ以外を信ずることはできない。

チエーホフが取り扱つてゐる材料はロシヤ人たちであるだけに殊に大まかである。日本の昔の狂言に取り容れられた人物に似てゐる。ロンドンやパリの人たちに見出すことのできないどことなしに土くさいユウモアがある。そこには冷たい鋭いキツトの閃めきはない。ステツペの中の物語りである。草から草、雲から雲へつゞく草原を旅する馬車の中の物語である。ほんたうに寂しい笑ひである。

草原を旅してゐる人たちは思ひ出したやうに、たまに草の中から響いて來る馬車のかすかな轍の音を聞くであらう。懷かしいが寂しい聲である。さらにそのやうな場合にどこからともなく響いて來る馬車の中の旅人の笑ひ聲を聞いたとしたらどんなに懷かしくも寂しくもあることであらう。草の中の笑ひ聲は刹那に消える。あとには無邊際の草原と、雲ばかりがつゞく。あとにはさらに深い沈默と寂寞とが漂ふ。

チエーホフの笑ひはそれである。チエーホフの笑ひに似た靜かなしかもほんたうな藝術の味はいつの世にも、甲高い聲、がさつな聲の藝術のためにともすれば忘れられがちである。

渡り鳥

K君。大分秋が深くなつて來ました。煙のやうな霧の下に黄ばんだ稻の田が目路のかぎり擴がつてゐるのを見たり、日一日と紅葉して行く片岡の木立を眺めてゐたりすると、秋の一日といふものがほんたうに尊く思はれます。何んなにいろ〳〵な苦痛を忍んで來たにせよ生きてゐた事をまた生きてゐる事を心から感謝したい心になります。

玉蜀黍はすつかり野から影を無くしてしまひました。黍だけがまだ疎らな葉をそよがせてゐます。實つた黍の穗はもう半月も前に刈り取られたのですが、まだ實り切れない穗だけが取り殘されてゐます。そのひよろ〳〵した弱さうな、頼りなげな穗の影が一層秋のわびしさを強く意識させます。

ついこなひだまでは燃えるやうに畑の一劃に咲いてゐた紅蜀葵がわづかに芋殼のやうな殘骸をのこしてゐます。萩も三日前の嵐ですつかり地に叩きつけられてしまひました。

あれほどたくさんゐた蜥蜴も一疋もゐなくなりました。冬ごもりの穴を探してゐた蛇の子も滅多に姿を見せなくなりました。

何も彼も冬ごもりの準備を急いでゐるやうです。

靜か過ぎるほど眞晝の野は靜かです。木も、草もすべての小ひさな動物もみんな冬の日の眠りに急いでゐます。

人間だけが野の面に終日働いてゐます。さく〳〵と鎌の音だけがさびしげに傳はつて來ます。

君は、あの收穫を急いでゐる人々の寂しい鎌の音を落ちついた心で聞いたことがありますか。默々として鎌を手にして野に働いてゐる人々の姿を見ると、部屋のなかにぢつとしてゐるのが濟まないやうな氣がしてなりませぬ。

僕は本を讀むか、原稿を書くかして疲れた時、疊の上に仰向きになつて寢ころぶ事があります。そのやうな時、野に働いてゐる農夫たちの鎌の音が聞えてくると、僕は疊の上に寢そべつてゐたりすることを罪惡だと思はずに居られなくなります。

僕はまた一つの作品を纒めるために家の周圍や附近の野良を歩くことがあります。さうするとこのごろでは小川や、水溜りで老人や女たちが水のなかにはいつて大根だの葱だのをせつせと洗つて車に積んでゐるのを見うけます。日が暮れて終つてからまでカンテラを點して働いてゐるのです。そして夜が更けてから東京まで荷車で運んで行くのです。

僕は終日終夜働いてゐるあの人たちの生活を見ると、自分も白手（ホワイトハンド）の一人であることを恥づかしく思はずにはゐられなくなることがあります。

「一日作さゞれば食はず」と言つた風な考へ方がともすれば僕の心のうちに湧いて來ることがあります。

僕は教壇に立つてゐれば、或ひはペンを握つてゐれば「それで人類に對するお役目は濟むんだ」などゝ言つてゐるのは、あまりに勝手過ぎたことのやうに思はれてなりません。

ペンを握つて机に凭りかゝつてゐても、窓の外の野良の人たちを見れば、まだ〳〵僕等の方が安逸を貪つた生活を送つてゐるといふことが胸に迫つて來ます。

僕も出來ることなら田舍に引つ込んで、自分で食ふだけの物を拵へて見たいと思つてゐます。無論まだ幾年後のことだか見當はつきませんが。

世界の人たちが、自分の食ふだけの物は自分で作るやうになつたら、どんなに人類は惠まれるか知れないと思ひます。

×

ついこのごろまで盛に鳴いてゐた蟲がぴつたり鳴かなくなりました。既う かれ等は多の眠りにはいつてしまつたのでせう。恐らく次の時代の子孫だけを大地の懐にあづけて、自分等は永遠の眠りに落ちて行つたのでせう。こほろぎだけがまだ夜になると臺所の隅で鳴いてゐます。それがまたばかに多の近づいた感じを濃厚にさせます。

夜が更けてから髮を梳いてゐる妻の櫛の音と、こほろぎの鳴く音が一緒に、室の靜寂をかすかにやぶつてゐるのを、ぢつと聞いてゐたりすることもあります。

晝はいろ〳〵な小鳥が木に來て鳴くやうになりました。大抵渡り鳥なんでせう。胸毛の紅い小鳥や、嘴の紅いのや、名も知らぬ可憐な小鳥が代る〳〵木に來ては囀つてゐます。その聲がいかにも久しい間別れてゐた秋の野に歸つて來た靜かなうれしさをさゝやいてゐるやうにも聞えるのです。また靜かな大空を母として、母の懐にあまえて鳴いてゐるやうにも思はれるのです。聽いてゐる僕自身までが微笑みたいやうな氣になります。

×

僕は庭の木に囀つてゐる小鳥の唄を聽いてゐていろ〳〵なことを想へる日があります。渡り鳥の聲といふだけでも僕には何となしに傷ましく思はれるのです。或る鳥は幾十日幾十夜と沙漠を飛んで來たものもあるでせう。また或る小鳥は幾千里といふ大洋を渡つて來たものもあるでせう。そしてまたやがては、可憐な翼を羽搏つて沙漠を越え、大洋を越えて歸つて行くでせう。或るものは人間の手に捕へられ、或るものは嵐のために翅を折られることもありませう。しかも何處で死ぬるのか、そんなことも知らないで、考へもしないで、高い秋の空を見ては胸を膨まして、胸いつぱいに鳴いてゐます。何といふ可憐なコスモポリタンでせう。何といふ愛すべきボヘミヤンでせう。

渡り鳥の儚い運命を想へてゐると、自分等の周圍にどこからともなく集まつて來ては、またどこへ行つたとも知れず消息を失つてしまふいろ〳〵の人々の事を思ひ出します。

恐らくあの人たちは今でも何處かの世界で歌をうたつたり、戀を語つたり、戀を失つたり、子を産んだり、人に死別れたりしてゐるでせうが。既う僕とは二度と逢ふこともありますまい。

「父は海軍の音樂手でしたが日淸戰爭に戰死をしたんださうです。母は長崎の藝妓だつたさうですが、私を捨てゝ逃げてしまつたのでした。ですから私は父も母も知りません。お寺に養はれて僧籍にはいつたのですが、十五から三年間眼がつぶれてしまつたこともあります。あのまゝ眼が見えなかつた方が見たことのない父や母の顏を想像するには却つて都合が宜かつたかも知れません。ハハハ……」などと語つて行つた若い僧侶のことが不圖僕の頭に映つて來るのです。

僕がその若い僧侶と別れてから數年後でしたが、僕はその僧侶のことについて「あの人の腹ちがひの妹さんが一人あつたのですが、その妹さんがあの人の友人との戀愛事件から上野の下で汽車に轢かれて死にました。あの人はほんたうに氣の毒な人ですよ」といふ話を誰からか聞いたことがありました。

今年の夏でした、僕は珍らしくもその若い僧侶から手紙を貰ひました。山陰道の寂しい町の住職になつたといふ通知でしたが、引つ越しをしたりしてゐる間にその手紙を失つてしまつたので、今ではこちらから手紙を出さうにも、出すことができないのです。恐らくあの若い僧もこの晩秋の日光を浴びていろ〳〵なことを想へてゐるでせう。

×

若い僧侶と殆んど前後して一人の靑年が僕の家を尋ねて來ました。いつも顏色の蒼い、神經質らしい靑年でした。僕は語つて行く間に靑年の父が三十年の間村長をして、村のために山も屋敷も賣り拂つて、しまひには氣が狂れたこ

とや、一人の弟が船のマストから落ちて不具者になつたことや、また一人の弟が雪に埋もれて死んだといふやうな悲慘なことを知りました。

三四度その靑年は僕の家をたづねてくれましたが、僕はその靑年に對して何の慰めをも與へることはできませんでした。靑年と別れてから十年餘になります。僕は不圖、蒼白い、そして幾分むくんだやうな顏をしてゐたその靑年のことを想ひ出すことがあります。

永遠に逢ふこともないであらう若い不幸な僧侶や蒼白い顏の靑年たちのために、せめてもの幸福を靜かに祈つてやりたいやうな感じがわいて來ることもあります。

×

思ひ出す人々のうちで、ほんたうに濟まない事をしたと思つてゐるのは、中學時代の僕の先生であつた市來といふ人のことです。

市來先生は肥後の球磨川附近の人であつたと思ひますが、熱情的詩人でした。先生が町のオーソドックスな思想に囚はれた敎會の人々から追はれるやうにして町を出で、學校を捨てゝ旅に出られた時、僕は先生から先生の詩や感想を綴めたものをいたゞいたのでした。僕が文學などをやらうと思つた動機の一つは市來先生にあつたのでした。

市來先生と別れてから七八年の間、僕は殆んど先生の消息を知らなかつたのでした。ところが或る日僕は東京で偶然先生の訪問を受けたのでした。先生はその時、何とかいふ保險會社の勸誘員をして居られたのでした。僕の方からも二度ばかり市來先生を訪ねて行つたりしました。先生は「神と財寶とに兼仕ふあたはずといふから、神を捨てゝ財寶に仕へた」と言つて笑つて居られたが、その顏は非常に寂しくありました。僕はやつぱり先生の眼のうちに昔のまゝの詩人らしい濕ひを見出したのでした。

しかし先生は到底財寶に仕へることは出來ない人間であつたと見えて、會社の方も失敗らしかつたのです。霜が降り初めたころでしたが、先生は芝の愛宕下の下宿に垢づいた袷を重ねてゐました。

何でも先生と久し振りで向島の附近を散歩して二三ヶ月も經つてからでした、或る晩門の傍の郵便函を見に行くと先生からの葉書が來てゐるのでした。僕は驚きました。先生はその日の午後五時の汽車で九州に歸つてしまはれたのでした。その時は既に七時か八時だつたのです。

その日に限つて僕は日中郵便函を見に行くことをしなかつたのです。先生からの葉書は正午ころに着いたのでせうが。

先生は恐らくたゞ一人で冷たい新橋驛を寂しく發つて行かれたことであらうと思ひます。

恐らく市來先生にも永遠にこの世界では逢ふことができないかも知れません。

僕の心にはあのやさしい眼の持主である不運な詩人の市來先生が映つて來ます。

不運な眼の美しいコスモポリタン！

×

Ｋ君。近いうちにまた遊びにおいで下さい。あの嵐でコスモスが臺なしになりました。毎日々々夏の間、石鹼水を拵へては蟲を防いで丹精したのでしたが、無殘に嵐にへし折られてしまつたのを見た時は泣き出したくなりました。しかし竹の手をやつて起して見ましたら、大抵元々通りになりさうです。今朝は白い花が二つ初めて咲きました。

ありがたき人情の人

H兄。一茶について何か纒つたものを書かなければならないのですが、またいつかは書いて見たいとも思つてゐるのですが、なか〳〵纒りさうもありませんので、たゞ少しばかり一茶についての旅の印象を書かしていたゞきます。

わたくしが一茶をまとまつて讀まうと思ひましたのは京都の旅中からでありました。わたくしは或る年の夏近江の義仲寺に芭蕉の墓に詣でたことがありました。馬場の停車場から義仲寺へゆく白い埃の立つ道の傍にはちやうど木槿の花が咲いてゐるころでした。

その翌る年の秋わたくしはさらに京都へ行つて、京都から木津川に沿うて伊賀へ入り、伊賀上野に芭蕉の故鄕塚をたづね、蓑蟲庵へ遊んだことがありました。大和、伊賀境の高原には桔梗や姫百合が一面に咲いてゐたころでした。

その旅ではわたくしはかなりゆつくりした氣持ちで十日ばかりを京都の宿で過しました。

東京を出る時書物を持つて出なかつたものですから、寂しくてなりませんでしたので京都の丸善へ出かけてゆきました。その時求めたのが一茶の本でした。一晩か二晩讀んでゐるうちに一茶の故鄕をたづねて見たくなつたのでした。伊賀の上野の芭蕉の故鄕塚に詣でゝ間もなく東京へかへりましたが、旅の疲れもまだとれぬうちにわたくしは初めての信濃の旅へ出かけました。

輕井澤あたりでわづかに夜が明けて來ました。高原は深く霜にとざされてゐました。眠たい眼にわたくしは枯草の中の落葉松を見ました。自殺をした有島氏のことを想ひながら、霜につゝまれたキヤベツ畑などを見ました。

何といふ寒い山であらう。何といふ尊い、何といふ孤獨な山であらう。信濃に入つてわたくしが感じた第一の印象

はこれでした。
高い山、きはめて勾配の急な山、雲から雲へとつゞいてゐる山の下で人々は虔しく生きてゐるのでありました。行儀よく石を並べた屋根、中二階の軒先きにつるした南瓜、大きな鋸を背負つた木挽の群、もんぺを穿いた畑の人、さらに寒い遠山。
わたくしはこれらの信濃の風物を、一月前旅して來たばかりの伊賀の上野のそれと比べて見ました。かしこでは柔かな修竹につゝまれたあたゝかな邸があつた。山一つ越ゆれば奈良があり、吉野があつた。鈴鹿の空は晴れてゐた。わたくしはかしこに芭蕉の詩が生まれ、こゝに一茶の詩が生まれたことをいかにも自然なことであると思ひました。
涙もろい、それでゐて拗ね者である。皮肉屋である。それでゐてさらにお人善しである。人懷つこい男である。
善光寺の御堂の前に立つた時わたくしはかれの句

ちかづきの榮書見えて秋の暮

を思ひ出してかれのために泣かずにはをれないやうな氣がいたしました。
わたくしは善光寺の御堂の丸柱や壁のあたりに手を觸れて見ました。そして一日ちがひのために二十年前に別れた長崎の友人に逢ひえなかつたかれの老年の悲しみを想像しました。
もし芭蕉の藝術が深いさとりから生まれたものであるならば、かれの藝術はさとりえぬ人間の悲しみから生まれたものでありませう。
かれくらゐ悲しみに對して悲しみ、よろこびに對してよろこんだ俳人はあまり例がないでありませう。もし例を外國にとるならばロバート・バアンズがあり、ホイットマンがありませうか。しかしかれはさらにバアンズよりも悲しみに徹してゐます。ホイットマンよりも人界の苦を知つてゐます。

ともかくもあなたまかせの年の暮

ばかいふな何の此世を秋の風

世の中よでかい露から先おつる

身の上の露ともしらでほだしけり

人間の運命を悲しむ魂のすゝり泣きであります。これほど迫つた心持ちをうたふことのできる詩人がどこにありませう。

高い嶮しい信濃の寒い山につゝまれた家の人々はどんなにか人懐かしく思ふでせう。一茶はいつも人をなつかしがりました。親を思ひました。子を思ひました。かれこそ凡夫らしい凡夫でした。かれこそ子として泣き、親として泣いた凡夫らしい尊い凡夫でした。

息才で御目にかゝるぞ草の露　（わらぢながら墓参）

柏原の宿、丸山の暗い木立の中の墓に詣でた時たれでもこの句にあらはれてゐるかれの俤を描くことができるであらう。

かれは泣くにも笑ふにも人情の詩人であつた。罵るにも、皮肉を投げるにも。

世の中よ針だらけでも蓮の花

繼母に育てられ、幼くして世間の波にもまれたかれにとつては針だらけの人間の世界がいつもかれの魂を脅かしてゐた。かれはいやといふほど冷たい針に刺され通しであつた。けれどもかれの詩人的な魂はそこにまた温かい自然の心を見出さずにはゐなかつた。

帷を雨が洗てくれにけり

捨る神あれば拾ふかみあればぞ我も花のかげ

拗ね者のやうにも見えるがかれは拗ね者にはなりきれなかつた。かれは冷たい荊棘のかげに直ちに可憐な花を見のがすことができなかつたのでありました。

「父は無梨を待ちて居給はん、このまゝに歸りて父を何と慰めんやと思へば胸せきふさがりて」

五月の或る日であります。病床の父が梨が食ひたいといひ出したので善光寺まで七八里の道を歩いて行つたをりの日誌であります。

父を思ふかれの孝心を考へるごとにわたくしは涙なきをえないことがあります。

父ありてあけぼの見たし青田原

何といふ凡人の、何といふ愛すべき人間の至情でありませう。あきらめてもあきらめてもあきらめえぬ眞人間のありがたいなげきではありませぬか。

「十四歳の春の曉、しを〳〵と家を出でし時、父は牟禮まで送りたまひ毒なるものは食べるなよ人にあしざまに思はれなよ、とみに歸りて健かなる顔を再び見せよやとていとねんごろなる言の葉に思はず泪うるみしが未練の心ばし起りなば連れなる人に笑はれんと父に弱き歩みを見せじと無理に勇みて別れけり」

父へ別れて江戸へ出立したをりの話であります。

わたくしは時雨に暮れかゝつた牟禮の山を見ました。そこの三本松の下で父と一茶は別れたと村の人は語つてゐます。

或る意味でかれの生活は舊約聖書の中の約百の生活に似てゐると思ひます。約百は富豪でありましたが、一茶は生まれ落ちるから死ぬまで貧乏でありました。その數人の子を生んでは失ひ、生んでは失ひした一茶の悲しみは殊に約

百に似てゐます。しかも日本の約百は聲を上げて哭してゐます。わたくしたちの腸を斷つばかりに。

丸山の草の中にあの小ひさな石碑の前で四つんばひになつて地下の父をなぐさめようとした一茶の人間らしい凡人らしさには泣かない者はないでありませう。

あれほどの父思ひ、あれほどの子煩惱のかれに對して運命はいつも冷たかつたのでした。漂泊四十年かれは父ともゆつくり一緒に暮すこともできませんでした。子に對してはさらにかれは不運でした。生まれる子も生まれる子も死の手に奪はれてしまひました。

柏原を訪ねたのは初時雨に旅のわびしさを思ふ日でありました。妙高も黑姫も、飯綱も雨につゝまれてゐました。いかにも山は寒く、草は蕭殺としてゐました。わたくしはそこに生まれた一茶の一生を考へずにはをれませんでした。頼るにはあまりに山は寒い感じがいたしました。訴ふるには野はあまりに枯れ枯れな感じがいたしました。

　春風の底意地寒し信濃山

恐らく春になつても信濃の山は寒いでありませう。

　故郷やよるもさわるも茨の花

　人心險ニ山川一難レ知レ天　天有ニ春夏秋冬旦暮期一

寒いのは信濃の山ばかりではありませんでした。かれにとつては人の世はすべて信濃の山よりも冷たかつたのでありませう。

そこには一茶のひがみもあつたでせう。しかしともかくかれはあまりに冷たい運命に支配せられた。

黑姫や妙高が深い雪につゝまれてしまつた冬の日、あの柏原の北國街道から十五六間奥へはいつた畑の隅の三間四方くらゐの籾倉の中に寢起きして、ぢつと老年を見つめてゐた一茶の眼には六十五年の生涯はどんなに映つて來たで

ありませう。

從安永六年出舊里而漂泊三十六年也。日數一萬五千九百六十日。千辛萬苦。一日無心樂。不知已而成白頭翁。

是がまあ終の栖か雪五尺

不思議なり生れた家で今日の月

露の世は露の世ながらさりながら

秋風やむしりたがりし赤い花

×

一茶の家でわたくしはかれの俳諧日誌を見せてもらひました。非常に筆まめな人であつたと見えて、小ひさな小ひさな字で紙一面に細かな記憶が書きつゞられてありました。植物の繪なども書き込んで、それにまた細かな説明がついてゐました。

一茶が手習に行つてゐた本陣の中村氏の跡は大きな邸ですが今では寂しく門もとざされてゐるやうな形でした。弟仙六の子孫といふ人も往來(北國街道)をへだてゝ筋向ひに住んでゐました。

昔からさうだつたらしいのですが往來の眞ん中に一筋のせまい川が流れてゐます。川の緣には白い菊などが咲いてゐました。本街道ですからかなり廣い往來です。町はその後燒けましたので、日記にある母屋は跡形もないのですが、例の糓倉だけは菜畑をへだてゝ隅の方へ殘つてゐます。

一茶が夕暮れに妻を待ちかねて歩いてゐたであらう野尻湖への道には白樺があり、コスモスが美しく咲いてゐました。

曠野を想ふ日

K君。僕は田舍の廣い平野のなかに生まれて、育つたのも殆んど山や海近くであつたせゐか、都會のごみ〳〵した空氣の底に生活することは苦痛である。神經質な僕は空氣の濁つてゐるのや、不自然に熱せられてゐたりすることが苦になつて仕方がない。そんなところからして僕には圖書館の勉强などはまるで出來ないことである。僕の體中には幾分 Vagabond の血が流れてゐるのぢやないかとさへ思ふ。田舍道を步いたり、河船に乘つたりしてゐる間だけは僕はほんたうな自分を見出したやうな氣がする。僕は兵隊になつてゐた時、行軍や野外演習は好きであつた。それは新しい空氣や日光に自由に浸さることができたからだ。

空氣のうまさや土の香といふものをほんたうに一度味つたものにとつては、都會生活は決して死ぬまですべきものではないと思はれる。

僕は芭蕉が幾歲で旅に立つたか、ちよつと記憶してゐないが、少なくとも僕にはあのやうな心持ちが何時かは湧いて來るのではないかと思ふ。別に都會生活を憎むとか避けるとかいふやうな意味からでなくて恰度小鳥が何處にでも飛んで行くやうな極めて自然な明るい懷かしい心持から、旅に出ることがありはしないかと思ふ。

旅をしてゐる間は、何か知ら彼方に自分を待つてゐるものがあるやうな氣がしてならない。自分の血管を流れてゐる血がそのたんびに文字通りに顫くやうな心持がする。寂寞といふか、悠久といふか、人間の苦惱も淚も僞りも憎みも拭ひ取つてくれる人間の眞の母とでもいふやうなものが、何處かにゐて、自分を待つてゐるやうな氣がする。

社會では改造だの建設だのといふ言葉が盛に使はれてゐる。僕も或る時は人なみに憤慨をしたり、大きな聲を立て

て議論することもある。そして殉教者の尊い生活を描いて見ることもある。しかし一人で自分の家に歸つて行くと、色々な意味で、何だか自身に對して氣恥かしいやうな氣がすることがある。

やつぱり僕は何も爲でかすことのできない Vagabond の血を餘り多く受けて來てゐるのであらう。僕には都會の人たちのざわめきよりは野が戀ひしく、日光が懷かしい。

去年の秋奈良に行つた時であつた。僕は三笠山の芝生の上に寢ころんで法隆寺から丹波市あたりを一眸の下に見おろしてゐた。

近所の村の百姓らしい男が柿と蜜柑を賣りに來た。籠から果物を取つて食ひながら、その男に春日神社の裏で買つて來た何とかいふ名物の餅の殘りをやつた。

「そいぢや、饗ばれますわい……」といふやうなことを言つて、その男はむしや〱と僕がやつた餅を食つてしまつた。

僕が草の上に寢ころんで蜜柑の皮をむいてゐると、しまひにはその男までが草の上に腹這ひになつて、僕に一つ一つの山の名だの、川の名だのを敎へてくれるのであつた。

法隆寺あたりから出て來る汽車が黃色な秋の平原のなかを仄かに動いて行くのが見えたり、ぴかぴかと白く光つた流れが斷續的に山の裾を縫うて行つたりするのであつた。

私は立ち上つて二月堂の方へ下つて行つた。その男は途中から別れて行つたが「御機嫌よう」といふやうな意味のことを言つた。私にはそれがいかにも自然な懷かしみの深い人間らしい人間の言葉のやうにおもはれた。

×

奈良から京都に歸つて翌日の午後嵐山に行つた。夕方であつたので嵐山に着いた時は山はすつかり影つてゐた。保津川で舟に乘つたころは淡い月影が水に泛かんでゐた。

私と伴れの女の他に、京都から同じ電車に乘つてゐた三人の男と二人の女とが、偶然にもまた同じ舟で川を下ることになつた。

三人の男のうちの一人は大學の制服を着てゐた。他の二人は東京あたりから行つた華族か、富豪かの息子たちでもあるか、二人の女たちはその男たちに對しては「若さま」といふ敬語を使つてゐた。

男たちは快く私にも語つた。時節柄サボタージュだのプロレタリアなどいふ言葉が會話のなかに繰り返された。

たゞ私が不快に思つたことがあつた。それは私の伴れの女や私に對する若い娘たちの態度であつた。

私の伴れの女は、若い娘たちの下駄を片寄せてやつたり、何かと話しかけたりした。若い娘たちは、三人の男たちと話す時とはまるでちがつた不快な色を泛かべながら私の伴れの女に對した。その眼のうちには私はたしかにブルジヨアがプロレタリアに對して持つ侮蔑の色を見出すことが出來た。その刹那に私の頭に描かれてゐた數日間の快い京都の印象がかなり強く破壞せられた。

若い娘たち、私の夢に美しく生きてゐた若いほがらかな娘たちは死んだのであらうか。

夢幻、夢幻……私が描いてゐた若い娘の瞳は詩を夢みる黑い瞳を持つてゐた筈であつた。

あの瞳に打算的な、小悧巧な光りが輝く時、そこに何の處女としての美しさがあらう。

あの嵐山の寂しい川邊に小ひさな塚をのこしてゐた小督を想ふ。

若い娘たち、お前はとこしへに夢を見るあの黑い瞳を失つてはならぬ。

×

氣持だけは中學生のやうな考へでゐるが、不圖自分の齡を振りかへつて見て寂しくてたまらないことがある。

「俺は何んな仕事をしたか。また將來何んな仕事をすることが出來るか？」

幾分の希望を無理にも作り上げることもあるが、大抵は絶望に近い考へが泛かんで來ることが多い。「これからだ。」と思つて自分を勵まして見ることもある。しかしそれならば過去に於いて何か將來を暗示するやうな天才の閃きでもあつた筈である。「俺にはそれがない」と云ふとまつたく自殺でもしたくなる。「小學時代には成績は善かつた」と考へて見ることもある。しかしそれは田舍の極めて小ひさな學校であつたし、それに糞勉強をしたからであつたと思ふ。

自分の作品を讀みかへすことさへ恐ろしい。それでゐて何か書いて見たいとは思ふ。

お世辭にでも何とか言はれると嬉しい。くさゝれると滅入つてしまふ。二三日くらゐ家にゐても家の者にいやな顏をして見せる。惡いことだとは思つてゐるが、何うすることもできぬ。

獵人

この二十年來山獵にも釣にも出かけないが、父が殺生好きであつたせゐか、わたくしは子供のころはいろ〳〵な殺生をした。小學校の子供のころから父につれられて山に行つた。まだ朝眞つ暗なうちに家を出て一里ぐらゐ歩いたころやつと眞つ白な霜につゝまれて、夜が明けるといふ鹽梅であつた。だから十四五歲のころはもう鐵砲を擊つことを覺えてゐた。雉子だの、山鳥だの、うばしぎだの、鴨だの、よくそんなものを擊ちに出かけた。鴨を擊つのは夜だつたから、たいていおひるころから家を出て三里も四里もはなれた草山の背をあさつて、そこに見出さるゝ山の池や澤に集まつて來る夜鴨を、鳥舍(とや)をあんで待つてゐるのであつた。

鳥を擊つことは誰でもあまりいゝ心持ちはしないにちがひない。落ちた鳥を抱いてまだあたゝかな胸に手を觸れたり、眠つてゐる可憐な白い眼を見るとずゐぶん可哀想なといふ氣もする。二度と鐵砲を擊つまいと思ふこともあつた。しかし山をあさる人間には自然の誘惑といふか、ともかくもそんなものがある。鳥を擊つといふことよりも夜が明けるのを待つ心、または日が暮れて山の池に星がまたゝいて來るのを待つ心持ちといふやうなものが、何ともいへぬ誘惑を持つてゐる。

この心持ちはわなをかけにゆく子供心にも感じられた。今でも山村の子供たちは冬になれば山にはいつては小鳥のわなをかけてゐるであらう。樫か、椎か成るたけ彈力性に富んだ母指くらゐの木を心にして、二條の麻糸を結びつけて、はぜだの、ひざかきだの、木の實を餌にして雜木林の中にわなをかけるのである。たいてい晝でも暗いやうなしげみの中を十五六町、時としては小一里もはいつて行つてかけるのである。朝と日暮方がいゝので、學校のゆきかへ

りに冬の山をめぐつてわなをかけたり、わなを見て歩くのである。ものすごいほど靜かな深い山で里からは半里も一里もはなれてゐるので、小鳥が落葉の上をかさこそと歩いてゐる音さへはつきりと響いて來るのである。わなを見に行つて日暮ころ冬の山を下つて來る途中、狐などに出會つたこともあつた。

そのころの心を考へて見ると、殺生といふことよりはその山の神祕的な誘惑が子供の心を惹きつけてゐたのである。なぜといふに子供らのわなに小鳥がかゝるといふことはほとんどない。たいていは餌を食ひちらされるくらゐのことであつた。それでも山に行かない日は子供心にも不思議な物足りなさが感じられた。

わたくしはこの一月伊豆の山の中で子供がざるを伏せてわなを作つてしげみの中にこゞんでゐるのを見た。或る日かれは一羽の小鳥を捕へた。たま〳〵それが鶺鴒であるのを見ると、少年はをしげもなくその小鳥を逃がしてしまつた。わたくしはその少年を見てゐる間に、わたくしの子供時代のことを思ひ出した。

またわたくしはよく海や川の釣に出かけた。一度はまだ泳げないころで水にはまつて死にそこなつたこともあつた。釣は今でも折さへあつたらやつて見たいと思つてゐる。對馬では玄海にといつても岸ちかくだが、船を出してあらかぶを釣りに出かけたりした。然し波が荒いので、船に弱いわたしにはあまり面白くなかつた。對馬の西北の海岸で、秋の靜かな日など朝鮮の山が見える砲臺の下の入海で釣をしたことは、今でも忘れがたく思つてゐる。四國に行つた時は夕方になると每晩黑鯛を釣りに出かけてゆく船を見たが、夜釣ならば行つて見たいと思つた。一昨年の秋は駿河の海岸でよく黑鯛を釣つてゐる人を夜になると見に行つたが、どういふわけか自分で釣を垂れる氣にはなれなかつた。しかし日が落ちて、星だけが高くまたゝいてゐる波の高い岸にぽつねんと一人たゝずんでゐる氣持ちは特別であつた。子供のころ山にわなをかけに行つたころと同じやうな自然の誘惑がそこにも見出された。

釣もやはり魚をつることが目的でなく、何もかも忘れて絕對孤獨な自分の靜かな境地を見出し得ることに釣の誘惑

があるのではないだらうか。大きな自然の中に放り出され、たゞ一人の自分を見出しえた刹那に、わたくしたちは何ともいへぬ人生の靜寂を味ふことができる。その刹那の味を忘れえないがために山にゆき、川にゆくのではないか。

筑紫の平原の秋は三十里四十里の間一眸無邊の稻田に埋められてしまふ。森もなければ、さへぎる山もない。稻田の間を歩いてゐるといたるところに水の涸れた濠がある。水面をおほうて菱の花が咲いてゐる。棹の先でしづかに菱を掻きやると、そこに三四尺四方の水の面があらはれて來る。高い空と、白い雲が映つて來る。草の上にしやがんで釣を垂れる。蘆で作つたうきがかすかな波紋をゑがいては消える。

終日水の上を見つめてゐても、そこいらには人の聲一つ聽くこともない。

たまに草の下にこほろぎが鳴くことがある。菱の實のはぜる音かそれとも小魚が水草の葉裏をつゝく音なのか、泡沫のくだけるやうなかすかな音のみが思ひ出したやうに聞える。そこにしやがんでゐる人の心を動かすものはたゞそれだけのものゝ音である。

その絕對的な靜寂と孤獨とが人を池のほとりに誘惑するのではないだらうか。

旅を歩いて見も知らぬ山國などの靜かな旅籠屋の一室につくねんとしやがんでゐる刹那の心持ちにもこれに似た旅の誘惑を感じることがある。

靜かな雨の日など、河岸のやぶを分け入つて淀んだ水の面に描かるゝ一つ〳〵の水の輪を見入りながら釣を垂れてゐる心は、禪ならば三昧に入つた心であらう。

魚があまり釣れ過ぎたら釣は面白くないであらう。

釣を斷つて、棹をすてゝ水の面を見つめてゐる境地に到つて初めてほんたうな釣の味が出て來るのかも知れない。

鳥も擊たず、魚もつらず、たゞ山に入り、川にたゝずむやうになつたら、ほんたうな三昧境に入るのかも知れない。

芭蕉の跡 二三

靜岡の町を西に出はづれたところに安部川がある。廣い、白い磧のほとりには仇討ちの物語りが今もつたはつてゐる。二年前に川をわたつたころは古い木の橋が、赤いペンキで塗つた鐵橋に架けかへられやうとしてゐた。名物の餅をひさぐ家だけが昔のまゝに寂しく人通りの絕えがちな道の傍に並んでゐた。

かなり長いこと稻田の間を縫つて舊街道をたどつて、翠巒の眉間にさし迫つて來るころは、山と山との間に東海道の老松の並樹を見出すのであつた。山の懷に抱かれ、爪先あがりの道を控へて二三軒の茶店が古風な軒をならべてゐた。「芭蕉のうめわか菜」の句を以て有名な鞠子の宿である。

山の景色、とろゝ汁の店がまへ、どことなしにまだ廣重の繪の俤をとゞめてゐる。

二抱へ三抱へもありさうな老松の並樹が山峽の道を縫うてつゞく。懶き蛙の聲が聞える。鞠子の宿から宇津の谷峠を越えて藤枝の宿へ入るまでに幾人の旅人に逢つたであらう。かつて西行が「夢にも人に逢はぬなりけり」とうたつた心持ちもうなづかれるほど、山も道も死の如く靜かである。

とく〳〵の淸水を掬み、西行の旅を思ひ出でながら山を越えたであらう芭蕉の一蓑一笠の姿も描かれる。

羊腸の道をめぐつて峠を越え、ふたゝび羊腸の道を下り初めようとするあたりに草深い小ひさな塚が立つてゐたのを、今にもわすれることができない。誰の塚であつたか聞き洩らしたが。

宗長の柴屋寺も訪ふ暇なく、西行の墓に詣づることもせず、案內の友人に吐月峰の話を聞きつゝひた急ぎに山を下る。默阿彌の作によつて有名な文彌殺しの場面を想像しながら山を見、藤枝の宿を眺めて夕暮れの道を急ぐ。

宇津の谷を越えて藤枝から島田の宿まではまだ昔のまゝの松の並樹が、人通りも滅多にない古道の靜寂をひた守るやうにつゞいてゐる。初めてそこの松並樹を歩いたのは四月の末であつた。煙のやうなまだ肌寒い春雨が柔かに道ばたの麥の穗を濡らしてゐた。遲咲きの櫻が古い廐のくづれかゝつた壁をいたはるやうに咲きこぼれてゐたりした。駿河路の山は靑く、いかにも茶の煙あはれに、茶のかをりかすかに山峽の家を、畑をつゝんでゐた。

二度目にあの松原を歩いたのは十一月の末でもあつたらうか。島田の宿のはづれの小高い雜木山の上の白巖寺といふ古刹で友達と一緒に行厨をひらいて半日を過しながら、舊街道の松並樹を見、大井川を眺めたことがあつた。生憎、風が強く、大井川原を吹きまくる風に小石は飛び、磧をこめて霧のやうに吹き飛ばされた砂の煙が立ちのぼつてゐた。山蔭に風を避け、茶畑の片隅に日向を選んで、草紅葉をしとねに小春日和の甘い怠惰をむさぼつたこともあつた。野茨の赤い果も、かすかなたとへば禪味だの俳味だのといふ感じを聯想させる茶の實も秋の末の大井川のほとりの散策にはめづらしく靜かな感興を喚びさます。

風は痛いほど冷たかつた。日は照つてゐた。雲らしい雲もないに時折り霙のやうに冷たい雨が横なぐりしては日の光りの中に消えて行つてしまふ。

芭蕉は東海道を往き來するたんびに島田の宿に泊つては土地の弟子たちの家に旅のつれづれを慰められたことであらう。

どの家がそれであつたか、無精なわたくしには、それを調べて見るほどの熱心さもないが、傾斜のゆるやかな屋根の町並を通して見ゆる大井川原や、川向うの金谷の町や、小夜の中山を眺めてゐると、いかにも靜かな旅の心がわいて來る。

わたくしの友人のY氏の先考が、橋普請の石材に捨てられようとしてゐたのを發見して三升の酒と替へたといふ一五

月雨の雲ふき落せ大井川」の碑が今はY氏の庭の八重櫻の下に立てかけられたまゝになつてゐる。

×

犬山も古い町である。犬山燒の名は有名だが、今でも犬山の停留場を下りて、城の大手まで一直線に通つた古い町を歩いて行くと道の兩側には古雅な犬山燒が窓にかざられてある。このごろの作ではまだいゝものを見たことがないが、それでもそこの土地で昔の俤をのこした作品を店頭に見るのはうれしいものである。

桑の畑や、竹藪や、無花果や、ところ〴〵には蓮の花も咲いてゐたが、古いくづれかゝつた築地にかこまれた士族町らしい靜かな横町を見るたんびに俳人丈艸のことを思ひ出すのであつた。恐らく薄暗い竹藪のあたりには丈艸の家もあつたであらう。

木曾川に臨む美しい城と、陶器を作る家あるがゆゑに犬山の町はなつかしく、丈艸の「うづくまる藥のもとの寒さかな」の一句を思ひ出すがゆゑに、さらに尊い。

城の直下の岩壁から船を流して、美濃の笠松まで五里、木曾川の悠揚迫らざる水を下る。

水は玉の如く澄み、秋の如く寂し。

一鳥尾張の空より水を横ぎりて美濃の桑畑のかなたへ飛ぶ。醉水の如し。

「時雨ふれ笠松へ着く日なりけり」この句は或ひはわたくしの記憶にあやまりがあるかも知れぬが、ともかく笠松へ着く日に芭蕉が時雨を欲しがつたことはたしかであつたやうに覺えてゐる。秋の木曾川を下る旅に一番ふさはしい點景としては白い雲の群もいゝ、啼きもせで水をかすめ飛ぶ鳥もいゝ、岸に物洗ふ女もいゝ、もやはれた舟の水車もいい。さらに岸より岸へ走る初時雨は一番ふさはしいものであらう。

×

芭蕉が善光寺に詣でたのはいつのころであつたらう。恐らくは、姥捨の月をながめた年の秋でゞもあつたらうか。
わたくしは去年の秋、信濃へ旅した。秋といつても信濃はすでに霜が深かつた。冬の外套に深く首をうづめて冷たい雨の日の旅をつゞけた。
若い美しい尼宮がしづかに凍てついた石だたみの上を歩いて朝まだきのお勤めへ本堂の階段を登つてゆかれるお姿を、霜の途に跪いてありがたく拜んだ。
わたくしはその朝、山門の前と、本堂の廻廊のあたりで二羽の鳩が死んでゐるのを見た。
「乞丐のいねたるを見て」と記された信濃坂木の横吹といふのはどのあたりの山につゝまれてゐるのであらう。
「おきな〳〵起ば浮世の秋を見ん」
しづかに乞丐を道ばたに寢せて、自分ひとり浮世の秋を忍び、浮世の秋を目さめてゐた芭蕉の俤が泛かんで來る。
信濃の秋の山は霧が深く、霜が深く、野菊がことさらに美しかつた。

温泉嶽紀行

朝の陽が大村灣に沿うた村々を照らしてゐた。山の輪郭も、入り江の水の色も大抵は少年時代の私の記憶に刻み込まれてゐたまゝであつた。

芒の穗が白く陽にかゞやいてゐた。濱邊の小高い丘には私の軍隊生活の友人の家が見えてゐる。私はその友人の家に泊つて秋の夜を語り明かしたことなどを思ひ出した。蜜柑や朱欒の畑の中にもしかかれの姿がと思つて汽車の窓から覗いて見たが、それらしい人の影も見えなかつた。露が重く草の色を沈めてゐた。

「僕の長男は來春中學の試驗を受ける！」と言つて寄越したかれの手紙のことなどが私の頭に浮かんで來た。木槵樹の蔭の白いかれの家の倉の壁には眞正面に日の光りが動いてゐた。かれや、かれの平和な家庭の幸福を祈りながら私はかれの家が山にかくれるまで眺めてゐた。

汽車は靜かな秋の海の岸から岸を傳うて走つてゐた。山の蔭の熟れかゝつた稻田の上には狹霧がたゞようてゐるところもあつた。六七人づゝの群をつくつて學校に行く子供たちのなかには、笛を吹いて稻田の間の徑を歩いてゐるのもあつた。

ともすれば稻田の間から笛の聲が汽車の窓まで聞えて來るのであつた。

私たちの小學校時代と恰度同じやうに、稻田の間を笛を吹いて行く少年の影はひどく私の心を惹きつけた。

私は涙ぐましい心になつてぢいつと稻の間にかくれて行く少年の影を追うてゐた。

彼杵の驛についた時、私はポプラの蔭につながれてゐた牛を見た。牛の首には二三十の小ひさな鈴がくゝりつけら

れてあつた。彼杵から三里の山道を歩いて大野原といふ高原のバラックに數週間を過した秋のことを思ひ出した。そこには私の「熊のわな」の主人公の老大尉が、今も恐らくあの寂しい眼で靜かな高原の秋を見てゐることであらう。霧の深い月の夜に高原の池の鮒を肴に酒をあふりながら、唄をうたつてゐた人の善い老大尉の顔が私の心に浮かんで來るのであつた。

諫早といふ小ひさな驛で長崎本線から岐れて汽車は島原線になるのであつた。私たちが乘つた三等車は客車といふよりはむしろ貨物車であつた。屋根はトタンの海鼠板のやうなもので葺かれてあつた。

多良嶽の裾をめぐつて左手に有明の水が見え出したころは、右手に溫泉嶽の黑い雄大な姿が雲につゝまれてゐるのが汽車の窓に迫つて來た。

愛野といふ田の中の小驛で下りたが、五六臺のガタ馬車や自動車の上には西洋人だの、湯治場行きの客たちが疲れ切つた顔をして車の出るのを待つてゐた。

私は溫泉まで六里ばかりの道を歩くことにした。

有明の海を背にして、私は愛野から溫泉の裾を歩一歩とたどつて行つた。

粟と黍と畑の中を道はゆるやかな傾斜をなして上つてゐた。畑の中に働いてゐた男たちが穿いてゐるだぶ〳〵の靑い股引きがどことなしに異國的な感じを起させた。和蘭陀か或ひは西班牙か或ひはゼスイット敎の人々の遺して行つた俤が、それ等の服裝の上にもあらはれてゐるやうに思はれた。

溫泉の裾野を歩きながら、私はすぐに富士の裾野を思ひ出した。恐らくすべての火山の裾野がさうであらうが、あの悠々として迫らず、曠々として涯のないやうな草の野の感じほど、人の心に自然に對する懷かしさと寂しさとを深く感じさせるものはない。裾野を歩いて行つた西行法師、芭蕉といふやうな昔の詩人の心持ちも大抵は想像がつくや

うに思ふ。

裾野を横切つて雲が湧く。次の刹那には雲は消える。歩む者は自分ひとりである。默々として旅人は裾野を行く。たまさか杖に打つ突かつた礫のかちといふ音が大自然の靜寂を壞れば、一層大きな深い靜寂が地の底から湧き上つて來る。

思ひもかけぬ草野の中を馬の背や、檜笠が横切つて行く。自分にとつてはそれが無緣の影でもあり、有緣の相でもある。

芒の穗に秋らしい風が吹く。西行ならずとも、芭蕉ならずとも、地に俯して天地のさびに胸打つ心にもなる。風は往く。自分の寂しい思ひもあてもなき空に往く。

×

一生を旅に送つた芭蕉の生活がしみじみと戀ひしくなる。自分にもそのやうな時が何時かは來るにちがひない。來なければならぬ。

こんなことを考へて草いきれした野の道を歩いてゐる間にも幾臺かの馬車や自動車が裾野を走つて行つた。

薔薇の花が咲いてゐる。空の色が文字通りに瑠璃色に輝やいてゐる。無限に深く。都會の人たちの想像もつかないほど美しく。

一つの峠に達する。千々岩灘が一眸の下に展げられてゐる。松風の音が聞える。人相の惡い三人の男が、海に臨んだ崖の絶頂にひそ／＼と語り合つてゐる。私は何の連絡もなしに不圖トルストイの「殺人者の悔」を思ひ出した。

三人の荒くれた男たちから一町ばかりはなれた松山の中にはいつて行つて、私は廣い海を眺めながら脚絆を脱いだりして落葉の上に寢ころんだまゝ飯を食つた。

直ぐ私の頭の上で小鳥が鳴いてゐた。四十雀の聲である。私は秋の武藏野を思ひ出した。紅葉しかけた高い欅の上で泣く武藏野の小鳥の聲を思ひ出した。懸巣に似て、聲は千鳥のやうにさびしい黒い翅の鳥が白い波頭を目がけて、一直線に松山から崖を下つて行くのもあつた。松の間からは深い雨雲につゝまれた溫泉の巨人のやうな姿が見えた。

松山を出て間もなく私は女二人、男一人の旅人と先きになり、後になりして歩くやうになつた。男は振り分けにして三つの荷物をかついでゐた。

女も男も何處となく人ずれのした不快な聯想をわかさせた。一人の女は薄い脚まである長いシャツを着てゐた。二人の女の毒々しいパラソルの色は、私に外國出稼ぎの女たちを聯想させた。

根上り松の多い千々岩灘の波打ち際は軍神とたゝへられたT中佐の生まれた故郷であつた。そこにはいかにも軍神らしい顏の、素つ裸な老人たちが松林のなかで網を繕うてゐた。砂のなかで眞つ黒な小軍神たちが砂まみれになつて相撲を取つてゐた。私にはそこに立つてゐた軍神の銅像よりは、何とかいふ昔の力士の墓が道傍に倒れかゝつてゐるのがあはれにもありなつかしくも思はれた。

軍神の村で私に道を敎へてくれた女も、梨を賣つてくれた女もいゝ感じは與へなかつた。

秋であつたが、眞晝間の山道は蒸すやうに暑かつた。私は幾度か谷川の水に足を浸したりして行つたが、時々眼まひがしさうになることもあつた。

小濱と溫泉の道が岐れる山の中の小ひさな村の店の前に、二疋の猿が柿の實を嚙じつてゐた。猿の顏にも秋らしい日の光りがかすかに動いてゐた。

無花果の下でさつきの三人連れの旅人が水を飲んでゐた。長いシャツを着た女だけがそこから馬車に乘つて、他の

一人の女と男は馬車について小走りに山を上つて行つた。

山は思つてゐたよりも急であつた。滅多に人を見ることができなかつた。山で二三人の男を見たが、みな不氣味な顏をしてゐた。

眼がくらみさうに暑かつたので、山の上の雲が雨になつてくれゝばいゝなどと考へてゐる間に、大粒の雨が溫泉(うんぜん)の方から雷鳴と一緒にやつて來た。あまり雨と雷鳴がひどいので心細くもなつた。

一里ばかりも歩いてゐる間に雨は小降りになつた。忽然として直ぐ十間ばかりの草のなかゝら虹が立つた。一つの虹が消えると、また足の下の方に遙かに重なつた二つの虹が立つた。雨が銀絲のやうに輝やいて青い草原の上に落ちて行く、その間を岩燕が翅の白い裏をきら／＼と輝やかせて斜に野を横切つて行く。

何といふ小鳥であらう。たゞ一羽捨てられたやうな寂しい聲を立てゝひようひようと鳴いてゐる。鳥の聲だけが聞えて形はどうしても見えない。草の上をば聲だけが寂しく消えて行く。

×

湯の町から硫黃の香が漂うて來た。谿といふ谿からは煙が霧のやうに湧いてゐる。昔、伽藍堂宇三百坊を連ねてゐたと傳へられてゐる山腹の原には、たゞ一つの小ひさな堂が木蔭にのこつてゐるだけで、稻田だけがひろ／＼と靜かな秋の日を浴びてゐた。二人の女が水のなかにはいつてしきりと藺を刈つてゐた。

山上の溫泉宿についてからもはげしい雨と電光に、夜更けまで眠ることはできなかつた。

夜が明けて間もなく私は宿を出た。

梨を賣つてくれたお婆さんに山の案内者を連れて行くようにすゝめられたが、案内者のために感興を殺(そ)がれるのもいやだつたので、案内者を伴れないことにした。

湯の町を出て間もなく森林地帶を通り拔けるとそこは一面の牧場になつてゐた。放牧の馬や牛が眠たげな顏をして草を食んでゐた。どんなに遠い草山の上にも屹度一群の馬や牛が遊んでゐた。牛と馬が顏と顏とをこすりつけて眠つてゐるのもある。親を追うて草を食んでゐる仔馬が殊に愛らしい。人が近づいて行くとなつかしさうに人を追うて來ては、きよとんとした顏をして人を眺めてゐる。

この靜かな山の上でも、かつては美少年を中心にした破戒僧と破戒僧との戰ひがあつたり、ゼスイツト教徒の侵略があつたりしたことなどが思ひ出さるゝのであつた。聖母の前に跪坐した男女の姿も草の中に描かるゝのであつた。牧場の草原を横切つて上り詰むればそこは再び密林地帶になるのであつた。黑い密林に掩はれた深い谿が、鑿で削られたやうにそゝり立つてゐる。

鈴蘭のやうな花が密林の深い苔の間からやさしい香をたゞよはせてゐる。

空も見えない。たゞ死のやうに靜かな沈默が密林のなかを埋めてゐる。

×

舊噴火口の池をめぐつて普賢のいたゞきに登りついたのは恰度正午ごろであつた。千切つて捨てられたやうな白い雲が、有明の靑い潮の上を流れてゐるのが麓の方に見えた。

天草や阿蘇の山脈も水を隔てゝ見える。

岩燕はさかんに五千尺に近い峰の上を小石のやうに飛んでゐる。

ばさ〱と木の葉を分ける音がしたので振りかへつて見ると、そこには放牧の馬が人懷かしげに私の方へ近づいて來るのであつた。

紗のやうな雲の幕が下の密林地帶から漂うては、普賢の岩壁に打つ突かつて、やがてまた靑空のなかに消えて行く

のであつた。

普賢を下りて再び密林地帶をくゞること四時間にして、私は島原半島の海岸に近い櫨林のなかを歩いてゐる自分自身を見出した。

振りかへつて仰げば、普賢も、妙見も黒い雨雲につゝまれてしまつた。私は櫨林のなかで最初に牛を牽いた男に出會つた。

道程を訊けば島原まで二里半といふ。足は疲れるし、日は傾きかゝるしかなり心細くもあつた。

櫨林のなかの道を歩いてゐて私は一人の老人に出會つた。老人は櫨の實を籠に入れて運んでゐた。その老人はわざわざまはり道をして道を敎へてくれた。私にはその老人が聖パウロとでもいふ人のやうに想はれてならなかつた。三百年の昔、恐らくかれ等の先祖たちはこの濱邊で十字架や聖母を拜むことを敎へられてゐたであらう。

林の間から黑い衣を纏うた、そして胸に銀の十字架を飾つたゼスイットの老僧が今にも歩いて來るやうな氣さへするのであつた。

島原の町に近づくにつれて無花果の樹立があり、櫨の實を運ぶ馬が目立つて見えた。一人の若い馬子の品の好い顏は、私に伊太利の寺院の壁畫に見る聖母を聯想させた。若者の眼は殊に美しかつた。

湊といふ島原の南の船場は近松の中の或る戲曲を聯想させた。細帶一本で歩いてゐる夕暮れの女たちの顏には哀愁をたゝへた港町らしい感傷的な感じが流れてゐた。

磯の香のこまやかな海邊まで三味線をかゝへた女がすたすたと歩いて行く姿が、すでに秋の黃昏のなかにつゝまれてしまつてゐた。

墓

田舍の町に父と母の墓地を探してもらつて、墓碑を建てることに着手してからかれこれ半年以上になる。最初は三月初めには出來上るといふ約束であつたが、それが三月なかばとなり、四月となり、五月となつてもまだ石工の仕事が延び〳〵になつて出來上らない。出來上つたといふ通知があつたら九州まで歸つて、今度はできるだけ九州の地をゆつくり歩いて來たいと思ふ。父も母もみなくなつてから滅多に九州の地を踏むこともなくなるにちがひないから。

最初に分骨して東京へも一つ墓を別に建てようかと思つてゐたが、やはり田舍の町だけに一つ建てることにした。父はともかく母は一度も九州の地をはなれたことはなかつたし、遺骨ばかりを東京に持つて來るのもあまり形式的だと思つたからである。

今度墓を建てる場所にしたところで、父や母の故郷からは二十里もはなれた町である。故郷で破産した父と母は異郷で一生を終り、異郷に骨を埋めたことになるわけである。

一時は故郷の山へ持つてゆかうかとも思つたが、今ではもうそこにもあまりゆかりの人もなし、結局三十幾年住み馴れた異郷の山河に骨を埋めることにしてしまつた。

さて墓が出來上り、いよ〳〵異郷の地へ骨を埋めてしまつたとなると父といひ母といふ人のさびしかつた一生が今さらのやうによみがへつて來る。

殊に一番心苦しく思ふのは父や母を故郷に置いて二十年來東京に出てしまつたことである。わたくしはたつた一人

の男の子であつた。父も母もわたくしひとりを賴りにしてゐた。それが何の因果か東京熱に浮かされて東京へ出てしまつた。せめて一年でも半年でも一緒にしづかに棲んでゐることができたらと、今になつて考へたところで後のまつりである。この悔は一生わたくしの胸に燒きつけられてあるにちがひない。東京に生まれ、東京で育つて、東京に住んでゐる若い人たちを見て一番羨ましいことは、あの人たちが親と一緒に住んでゐることである。

田舍では小學を出ると同時に二十里なり三十里なり離れた町までゆかなければ中學校はなかつた。それもまだ汽車も完全には通じてゐなかつた頃なので、家に歸るといふことは暑中休暇か春の休暇かに限られてゐた。そんな風でわたくしたちは十三四歳の頃から父や母の家を出て、幾山河隔てた土地へ笈を負はなければならなかつた。

十三四の東京の子供たちはいかにも明るい幸福を知つた紅顏の少年である。あのころの田舍の少年たちは父母の膝下を去つて日夜望郷の思ひに痩せるといつた風な可憐な境遇にあつた。「乞丐をしてゞもいゝから父や母と一緒に暮したい」わたくしは幾度こんなことを思つたか知れない。そして幾度寄宿舍を逃げ出して父の家へ歸らうと思つたか知れない。

わたくしが父や母を思ふ幾倍父や母はわたくしと離れてゐることを寂しく思つたにちがひない。

「こんな時は、東京に出さなければよかつたと思ふ」と母が最後の病床でよくくりかへしていつたといふことを聞いた。母のその言葉を思ひ出すだけでもわたくしの胸は刺される。

佛壇の前に坐る夕暮の一刻だけが今のわたくしの生活の一番靜かな氣分の時となつた。その剎那だけわたくしは父とも母とも逢ふことのできるやうな氣がする。

一基の石碑が建てられたところで、それが未來永劫に失はれないものでもない。父や母の墓もいつかは無緣になつてしまふであらう。どのやうに子孫がつゞいて生まれたとしても。しかしわたくしはそのことに對しては寂しいあき

らめを持つてゐる。

わたくしの父と母とはたゞわたくしだけのものであつて、もう孫たちのものではない。父と母とを悲しむ心はわたくしひとりのものであつて、孫たちの心ではない。

わたくしが生きてゐる間、父も母もわたくしの心に寂しく思ひ出されてゐる。わたくしの死と共に父も母もこの世界から全く絶緣さるべき筈である。

父と母の墓を蔦がつゝんでしまふであらう。すべては大自然に還るであらう。

冬の旅

箱根を越えて、三島から狩野川に沿うた菜園麥圃の間を、雲雀の唄を聞きながら、ガタクリ馬車に揺られてゐた數年前の呑氣な旅行は今ではもう北伊豆の溫泉廻りにも見られなくなつてしまつた。

暮歳も後一日でお正月といふ押しつまつた冬の日の朝私は東京を立つた。國府津を出るころから乙女峠や二子山が車の窓にはつきりと映つて來る。遠い山々の蔭には雪が白く積つてゐるのが見える。酒匂川沿ひの靜かな村々には幾輪かの梅が綻びたり、谿川の水がせゝらぎの音を立てゝ流れてゐたりするのを見ると旣う長閑な春が來たやうな氣もする。

不快なトンネルをくゞつてはまた暗いトンネルをくゞらなければならぬ苦痛から辛つとのがれると、今度は列車のなかのヒーターに頭が痛むくらゐ熱せられたので、旅といふものが厭にさへなつた。ラスキンは近代文明の所產である汽車が嫌ひで、北歐から南歐へと長い間の旅行も大抵は汽車に乘らないで馬車ですましたといふことである。その馬車代のために彼の家の大きな財產が盡されたといふことであるが、私も出來ることなら汽車に乘らないで旅行をしたい。序に海の旅は汽船でなくて、やはり帆船にしたい。吐き氣を催すやうな蒸汽の香、油の香、煙の香――思ひ出したゞけでも不快でたまらない。

しかし、このやうなことを想へてゐる間に汽車は三島に着いた。雪につゝまれた富士を背にして、大仁行の電車に乘る。東京の電車にも劣らぬほどの混雜である。さすがに松飾りなどが道に沿うた農家に見えるのもお正月が眼の前に近づいて來たことを思はせる。

修善寺には既に泊るべき宿屋は一軒もないといふので、伊豆長岡まで馬車を驅らうとしてゐる男たちもあつた。狩野川の鐵橋を渡るころは日が既に暮れかゝつてゐた。冷たい流れの上に少かに冬の陽の名殘が顫いてゐるのが、一層旅の哀愁をそゝるやうに思はれるのであつた。

「この河で情死したんぢやないかね？」

私は馬車の男をとらへて話しかけた。

「えゝ、さうでしたよ。この夏でしたつけ……」馭者は二三度つゞけざまに煙草をふかしながら前を向いたまゝ答へた。「何でもそこいらの岸か靑い草に埋まつてゐるころでした。」と言つてその男が指さした白い磧は薄暗の底に廣い道路のやうにひろがつてゐた。

「東京の藝妓ちうことでしたつけ！　女は……」馭者の聲が轍の音にまぎれて途切れがちに聞えて來た。

天城連山が黑い岩のやうに川上の空に突つ立つてゐた。夕燒の名殘が雪雲の上にほんのりと紅く殘つてゐたりした。無理にも若い生命を滅ぼして行かなければならぬ不幸な人々の俤が、それからそれへと私の胸に描かるゝのであつた。「死」「美しい死！」何といふ蠱惑的な言葉であらう。恐らく人生のうち、一度は誰もが「美しい死」に對して美しい空想を描く經驗を持つであらう。

私も過去に於いて持ち過ぎるほど「美しい死」についての空想を持つことがあつた。「ウェルテルの悲しみ」を涙なしに讀むことのできなかつたのは私であつた。近松の心中物に對して顫くほどの感激を持つたのも私であつた。殊に相愛する若い男女が場所を異にして、夜の鐘の聲を合圖に死んで行く傷い近松の抒情詩を讀んだ時、最も美化せられたる刹那的生活を讃美しようとしたのは私であつた。

しかし既う私の心は、そのやうな美しい夢を見るには餘りに醒め過ぎてゐる。

醉へる者が幸福であるか。醉のうちに、美しい夢のうちに、死んで行く者が幸福であるか。冷たい生の現在に灰色の道を歩いてゐる人間が幸福であるか。……

色々な追憶を壞(やぶ)られた刹那に、私ははげしく鳴る馬車の喇叭の音を聞いた。馬車は深い谿川を下に見ながら坂路を上つてゐた。

薄暗のうちにも湯の町の入り口の丘の上にそゝり立つてゐる教會堂の尖塔や、湯の町の燈が谿に沿うてほの見ゆるのであつた。

×

かねては靜かである修善寺の湯の町も、正月の數日の休暇を利用した都會の客たちが入り込んでゐるので、かなり騷がしかつた。久しい間夜眠ることが出來ないので、思ふ存分眠るつもりでやつて來たのであつたがとてもゆつくり眠れさうにもない。

私は成るたけ體を疲勞させて夜ぐつすりと眠りたいと思つたので湯に浸つては、山だの谿だのを歩くことにした。

大晦日の夕暮であつた。私は修禪寺の山門をくゞつて本堂から庫裏の方へ歩いて行つた。黑い衣につゝまれた雛僧が二人、冷たい風に吹かれながら、薄暗い、がらんとした臺所で、牛蒡だの昆布だのをしきりに刻んだり、洗つたりしてゐた。明日の御節(おせち)を拵へてゐるのであらう。世を捨てた人たちにも新らしい春は待たるゝのであらう。

山峽に臨んだ湯の町を縱に貫いてゐる桂川の白い流れが冷たい星の光りに銀のやうにくだけてゐる。夜が更けるにつれて淙々の聲が一としきり高まつて行く。

宵闇のなかを縫うて修禪寺の鐘の聲が、湯の町から、やがて町をめぐつてゐる山々に淋しく響いて行く。

私は修善寺に來るたんびに、あの鐘の聲を聞いて、「久し振りで靜かな山の町に歸つて來た！」といふやうな感じを

抱かせられるのである。

谿の底に連つた湯の町の窓から窓へと靜かに響いて行く修禪寺の鐘の音は、病める者にとつては無常の涙を誘ひ出すものであり、夜の山道をたどりついた旅人にとつては靜觀の涙を催させるものである。

その音は輕くもなく、重苦しくもない。たとへば深い地の底から靜かに無常と靜寂とを語る哲人の淋しさを思ひ起させるものである。それは冷たい響ではない。人間的といふには餘りに聖（ホーリー）な感じを含んだものであるが、人生の同勞者をいたはる慰めを持つた響である。それは勇士を戰場に出すマーチではないが、たしかに傷ついたものを抱き撫づる涙を聯想させる響である。

湯壺の方では高い笑ひ聲などが聞えてゐる。この町では滅多に聞いたこともない三味線の音などが、旅の、徒然を慰むるほどの心で、何處かの室から流れて來る。恐らく人々は修禪寺の靜かな鐘の聲を忘れてゐるのであらう。

山から山を傳うて落葉を地にたゝきつけるやうな風の音が、鐘の音にもつれて暗の空を走つて行つた。

「あの女たちは何うなつたか知ら？」

私は風や鐘の音を聞くともなしに聞きながら、名も知らぬ母子の女のことを思ひ出したのであつた。

それは伊豆の平原も、谿間も、菜の花と麥の輝きに埋もれてゐた去年の春のことであつた。狩野川に沿うた道を、病身な娘を連れた母親と一緒に、私は同じ馬車に乘り合はせたことがあつた。

「溫泉といふ溫泉はかうやつて旅をしてまはつてゐますが……」と語りながら、面やつれした母親はちよつと娘の蒼白い顏を見ながら話しかけたのであつた。母親の顏にはいた〳〵しい諦めの色が泛かんでゐた。娘の頰には病的な紅潮がほんのりと射してゐた。

あの黑い瞳、白い手、黑い髮……恐らくそれ等のものは旣うこの地上のものでないかも知れない。世界の何處かに

不幸な彼女のために小ひさな墓が建てられてあるかも知れない。そして不幸な母親がたツた一人で、寂しい溫泉町の旅の日を思ひ出してゐるかも知れない。

誂へて置いた蕎麥が來たのは、東京ならば旣う追々除夜の鐘でも鳴り出すであらうと思はれるころであつた。山の湯の町の寂しさは戶外を通る人の氣はひもしない。

三年前の除夜に、南伊豆の小ひさな旅籠屋の二階に、田舍廻りのちんこ芝居の小娘たちと隣り合せの室に泊つて、夜つぴて怒濤の音に眠れなかつたことなどを思ひ出すのであつた。

×

さすがに山の湯の町にも春らしい羽子の音などが聞えた。東京から來た若い男女であらう。池一つ隔てた二階の室からわざとらしく聲を顫はせた歌の聲などが響いて來た。

梢から梢をわたる小鳥の聲がつい近くまで流れて來たりした。

谿の底の溫泉場は九時ごろになつてもまだ日の光りが射さぬ。霜柱の道を賴家の墓に詣づる。政子寄進の經堂のなかには霧のやうに香の煙が漂うてゐた。そのなかを附近の子供たちが大勢集まつては駈けまはつてゐた。金色の御像が尊く煙のなかに仄見えてゐた。

賴家の墓は年々、湯の町がひろげられるにつれて、よしなき人々の土足に踏みにじらるゝことの多くなるためであるか、何となく傷々しい感じを起させる。三つの輪塔が土にまみれて低く埋もれてゐるのも、そゞろに人生の儚い一面を想ひ起させる。

賴家の墓の前で御籤を引いて見た。半吉であつた。

賴家の墓から桂川に沿うた戶田街道の方へ步く。流れの上を小鳥が飛んでゐる。椿の花が川を緣取るやうに咲いて

ゐる。

馬に食はれたか、燈心草が頭を揃へて途中から切られてゐる。纖細(かぼそ)い莖を引き抜いて嗅いで見る。少年の頃のことなどが思ひ出される。美しい自然のなかにつゝまれた郷土的な戀愛詩のことなどが頭に泛かぶ。エヤー川のほとりで山査子(さんざし)の花の下で高原(ハイランド)の少女とはかない戀を結んだ若い多情な蘇國の詩人バアンスのことなどを思ひながら、石ころ道を歩いてゐると、木立のなかで淙々と響く瀧の音や、ぎい〳〵と軋る水車の音などが聞えて來るのであつた。

範頼の塚の傍の泉水には薄い氷が張つてゐた。去年來た時は桃の花が咲いたり鶯が鳴いてゐたりしたのであつたが……

×

修善寺の町から北へ山一つ越えた芝山からは大仁、韮山、さらに箱根、十國峠あたりも見わたされる。狩野川が冬ざれの野を銀の帶のやうにうねり〳〵流れてゐる。

峠に一本の幹の大きな笠松があつて、その下には一基の地藏尊が安置されてゐる。富士の姿が殆んど裾野まで手に取るやうに見えるので、私は修善寺に來るたんびにこの山に登る。青い空、限りなき山々の背、更に富士から左手に走つてゐる中央山脈の雪をいたゞいた連亙がかすかに大空の涯まで流れてゐる。

私は不圖地藏尊の前に供へられた小ひさな手桶を見出した。徑三四寸の竹の筒で拵へたものであつた。珍らしいと思つたので手に取つて見たが、更に驚いたのは手桶の周圍に書かれてある文字であつた。

「この峠を往き來するお方は、往きにはこの手桶を持つて山を下つて下さい、そして還りには麓から水を掬んで上つて來てお地藏さまにお供へ下さい。たとへ一枝の花を手折つてお供へなされても供養になります。××寺住職……」

といふやうな意味の言葉であつた。

私はこの文字を讀んだ時に、ほんたうに宜い氣持になつたのであつた。このやうな山奥にも、人間の美しい心が生きて動いてゐることを感じたからであつた。

地藏尊の前には往き來する人々の手によつてさゝげられた柴の小枝などが冷たい風に吹かれてゐた。私も附近の樹の小枝を手折つて地に挿しながら山を下つて行つた。

山を下つて谿川に出て、更に山を越えて修禪寺の裏門から御堂の前に出たのは、恰度日が暮れかゝつたころであつた。

私はかね〴〵賴家の面がこの寺に保存されてゐるといふやうなことを聞いたことがあつたので、恰度山門をくゞつて町から歸つて來た若い僧にそのことを訊ねて見た。

「それはありません。寶物は春秋の弘法樣の御開帳の折だけお目にかけます……」と言つて、人の好さゝうな笑ひ顏を見せながら若僧は庫裏の方へ行つてしまつた。

暗い御堂を燭を持つた雛僧たちが、小急ぎに歩いてゐるのが多の日の黄昏らしい感じを深くした。

左源太賴家……賴家室若葉局七百忌供養といふやうな文字が本堂の前の廣場の塔婆に讀まれた。

賴家やその奥方の悲壯な最期が想ひ出されるのであつた。猫越峠を越えて落ちのびたといふ人々の事などが劇的な光景になつて私の頭に泛かんで來るのであつた。

賴家が修禪寺に泊つてゐる間に、この町の或る小店の女を寵愛したといふ傳說だけは今でも町に遺つてゐるやうである。その女の家は今でもこの町にあるとかいふことであるが、それも往事すべて夢のごとき物語にすぎない。またその女が何のやうな運命に落ちたか誰も知る人もない。

鐘樓には黑い衣の雛僧が撞木を握つて立つてゐた。黑い衣の袖の裏から白い下衣の袂が覗いてゐるのも、僧庵らし

い感じを湧かさせるのであつた。

×

正月も四日五日と經つ間に都會から集まつて來て居たお客たちは歸つてしまつたので、またいつものひつそりした山の湯の町となつて行くのであつた。

湯にはいつては所在なさに私は山から山を歩くのであつた。奈良に多い馬醉木がこのあたりの山にも多いことを見出した。寒いのでまだ白い可憐な蕾は堅く結んでゐた。

日に日に天城の連亙が雪に埋められて行くのが眼立つて見える。下田街道と伊東街道とが白く狩野川の左右に岐れて、天城の谿間を縫うて走つてゐる。白い砂埃を立てゝ折々自動車と馬車が往き來してゐる。

城山の腰をめぐつて、狩野川の吊り橋をわたつて妙國寺に行く。

橋錢を取る家の前に立てば、伊豆の港町の女郎であつたといふおかみさんが、油氣のない髮を亂しながら破けた障子を明けた。

妙國寺の庭からは富士の巓だけがはつきりと見える。梅が咲いて、香がかすかに漂うてゐる。

德川家康の寵妾であつたお萬の方の遺跡であるが、今ではその化粧の井戸も桑畑のなかに埋もれかゝつてゐる。ちよつと探さうとしても、探しきれぬやうに荒れはてゝゐる。お萬柿といふのもあるが、これとても枝は折らるゝまゝに嵐に折られてゐる。

菜の花が薫つて、蜜蜂のかすかな羽音が聞えるころは伊豆の村々から來る寺詣での善男善女が少くない。

冬ざれの野を歩いて來る人もないと見えて、がらんとした堂のなかはひとしほ寒い。

妙國寺を出て裏の田圃道を二三町歩けば大見川がある。そこには靑木の渡しといふのがある。昔日蓮上人が川を渡

つて來られたといふ傳說の地である。

子供を背負つておかいさんが渡し守をしてゐる。

靑木の渡しをわたれば桑樹につゝまれた高い丘になつてゐて、そこからは富士が眞正面に見える。御殿場あたりは煙つてゐた。修善寺に歸るには更に狩野川の渡しをわたらなければならぬ。

賴家が月を觀たといふ月見ヶ岡は淵をたゝへた渡し場に面して靜かな影を投げかけてゐる。

私たちは車を曳いた馬と一緒に渡ることになつた。深い底の魚がすつかり見えるほど水は美しい。

「鮎ではねえでがさあ――うぐひでさあ……」魚の名をたづねた時、船頭はさう言つてぐつと船を押した。

×

馬車に搖られながら私は狩野川に沿うて走つてゐるのであつた。歩一歩天城の雪をいたゞいた連互が近まつて來るのであつた。私は修善寺を出て、更に天城の麓の名もない寂しい溫泉場へ行く旅人となつたのであつた。

馬車のなかには大仁の町にでも買ひ物に行つたらしい田舍の男が一人、鬱金の風呂敷包みにもたれて居眠りをしてゐるだけであつた。

窓からは戸を半ば鎖した農家が山に沿うて見えたり、椿の花が紅く燃えるやうに咲いてゐるのもあつた。

馬車の轍が無限の旅をつゞけるかのやうに遠く仄かな音を谺しながら響いて行つた。

「旅！」さう思ふと私の心は、靜かな墓場でも見出したやうな寂しさと、同時に涙ぐましい落着きとを感ずるのであつた。

無限な旅から旅を歩くコスモポリタンの寂しい、しかし自由なあこがれの心が想像せらるゝのであつた。

私は「卽興詩人」の主人公を想ひ出した。また私は「生ける屍」のなかの不幸な男女を想ひ出した。あの疲れ果て

た二人の旅の樂師を想ひ出した。
私の心は妙に感傷的になつて來た。
乘り合ひの男は途中の小ひさな觀音堂の前で下りて行つてしまつたので、私はまつたく一人ぼつちになつた。
私は自分の弱い心を引き立たせるために口笛を吹いて見た。それは殆んど十年來經驗したことのないことであつた。
私は口笛を吹く術すら忘れてゐた。たゞすう〳〵と唇をかすつてがさつな節音が滑り出るのみであつた。
私は眼を閉ぢた。そして何事をも考へまいと思つた。「これは病氣の爲なんだから！」と思つたので、つとめて自分の心を快濶にするやうにした。そして自分でも可笑しいやうな馬鹿氣た事などを語つては馭者を笑はせて見たりした。
「旦那さまは、ほんとに面白え方ですのう！」
馬車が山のなかの湯の町に近づいた時馭者は振りかへつて笑ひながらさう言つた。
「そんなに僕は面白い人間かい？」私は可笑しさうに笑ひながら答へた。
馭者臺では、何か思ひ出したと見えて、馭者はつゞけさまに獨笑ひしてゐた。
私は何うしても夜眠ることのできない自分の病氣が、今度の溫泉場では屹度快くなるにちがひないと思ひながら、始めて見た寂しい溫泉場の入り口を眺めてゐた。
「しかし、こゝでもやつぱり快くならなかつたら？」
私の心にはまた暗い影が動いて來るのであつた。
「旦那！　着きましたぞい。」
馭者は愚鈍さうな眼をしばたゝきながら、私の荷を擔ぎ出した。
私は尙一度元氣さうに馭者の顏を見ながら笑つて馬車から下りた。

日が暮れかゝつてゐる溫泉場は煙のやうな湯氣につゝまれてゐた。かすかに漂うて來る湯の香が疲れ切つた私の神經に不思議な涙ぐましい感じを湧かさせるのであつた。

暗いカンテラが一つ、直ぐ私の眼の前の軒に吊されてゐた。

「宿屋は？」と私は振りかへつて馭者に訊いた。

「こゝが宿ですわい……この他に尙一軒ありますが、その方はお話になりませんわい……」

馭者の聲までが煙のやうな湯氣につゝまれてしまつてゐた。

私はもう笑ひ出す勇氣もなくてぼんやり薄暗いカンテラの灯の前に突つ立つてゐた。

「雪が降つて來た！」

私は後の方で叫んでゐる男の聲を聽いても、空を仰いで見る元氣もなかつた。

職業と文學

文學の普遍化は同時に文學の職業化を生み出した。今日の文學界を見て文學が一つの間違ひもなき職業であることを否むものはあるまい。たとへば文科大學のごときも今日ではすでに一種の職業教育を授けるところとなつてしまつた。文科大學そのものゝ本來の目的はたとへば文學といふものゝ研究、哲學といふものゝ研究にあることは今も昔も變ることはない筈であるが、社會の一般的な經濟組織の變遷や、時運といふものがその教へを授けつゝある人々、並に教へを受けつゝある人々の頭をば自然さういつた風な傾向に導きつゝあることは否まれない事實である。

所謂通俗小說對藝術小說といふものゝ問題が論ぜられ、かつて峻嚴なる對蹠的關係に於いて兩立せしめられたものがやゝ同じ範疇を見出すことによつて、何處かの一點に於いて接近しようと努めてゐる傾向を生んだのは、實は文學の普遍化と同時に文學卽職業といふ考へが人々の頭を強く支配するやうになつたからではないか。

文學卽職業といふ考へ方は一面から考へると寂しい氣もする。しかし文學者が人間であるかぎりは食つてゆかなければならぬし、それは止むを得ない事である。むしろ當然の歸結であるといはなければならぬ。

文學卽職業といふ考へのうちには將來文學をはぐくみ育てゝゆくにたしかに善い刺戟も含まれてゐる。文學は遊びではないといふ眞劍な考へと、一つの立派ななくてはならぬ職業といふ考へとが當然結びつく筈である。文學は片手間仕事ではない。文學はすべてを投げ出してかゝるべき勞働である。この考へ方はどのやうな社會に於いても文學者をして社會人として自分等の仕事に對する信仰を失はせないことになる。と、同時に自分等の仕事に對する社會的な責任を感じさせる筈だ。

しかし現在の文壇に於いてはこの職業といふ言葉の意味があまりに commercial な考へと結びつけられてゐる。その結果は雷同が多くなり、お座なりが多くなり、老成さが目立つて見えて來る。最初から一人で立つて闘つて行かうとする意氣の人が少くなつてゆく。

われ〳〵は後から生まれて來る若い人たちのためにも、出來るだけ澄んだ空氣を作つて置いてやることを考へなければならぬ。將來の日本の文學を正しく大きく育て上げるために。

文學は職業であるとしたところで、決してそのために文學が本來具有すべきものが低下せらるべき筈はない。文學はその本質としていつもその目すべからざるものを持つてゐる筈だ。その目すべからざる凛たるところを持つてゐるものであれば、どのやうな人によつて、どのやうな形で作られやうとも立派な藝術である。その凛たるところを失つて民衆に媚びる時それはどのやうな人によつて、どのやうな形で表はされやうとも似而非藝術である。

文學はどこまでも文學でなければならぬ。文學をやらうといふ靑年たちにとつて、文學は一番苦しい魂の試練であるべき筈だ。一番苦しい孤獨の試練であるべき筈だ。一番苦しい信と不信の闘ひであるべき筈だ。一番苦しい自責の連續であるべき筈だ。醜い自分を鞭打つ不斷の精進であるべき筈だ。「人生は幸福のために存在してゐるものではない。」ほんたうにこの言葉を味つてゆく人でなければ文學者ではありえない筈だ。

文學そのものゝ本質は、誰が作り出さうと、どのやうな職業の人が生み出さうと異る筈はない。文學は永遠に目すべからざるものを持つてゐなければならぬ。と、ともに文學者たるのほこりと、苦しみとを感じなければならぬ。

職業といふ言葉が文學靑年たちに誤つて考へられることは如何にもあり得べきことであるし、それでなくとも文學の普遍化はやゝもすれば若い人々の間に文學の本質をも疑はしめようとしてゐる。今後文學に志す若い人々のためにも吾々は文學といふものゝ世界を引き締めて置く必要がある。嚴肅さと正直さとを取りもどして置く必要がある。

霜夜

數年前に自殺をしたTがまだ生きてゐたころのことである。

私はまだその頃早稻田へはいつたばかりであり、Tは士官學校入學の準備をしてゐるころであつた。Tも私も中學時代に着てゐた詰め襟の制服の上から外套を着て、二人とも破けた古靴をはいて出かけた。

十一月の末であつたか、十二月の初めころであつた。二人とも苦しい學生生活を送つてゐたので金といふものは殆んど持つてゐなかつた。

鳥居坂のH氏の邸を訪ねて奥さんに銀貨を二三枚貰つた。その頃第三女學校にゐたH氏の娘さんが恰度學校から歸つて來て、私たちの妙な風を見てころげるやうに笑つたことをおぼえてゐる。三の橋から天現寺橋の方へ歩いて行つたのは午後の二時ころでもあつたらうか。その頃はあの附近には電車もなければ、家もまばらで、河の岸には蓼のやうな草がうら枯れてゐた。

目黒から池上へ行く道では、夕陽に照らされた芒が白く光つてゐたのを今にも記憶してゐる。暗いほどな竹林や、櫟の列樹や、蕎麥の畑がつゞいてゐる廣々としたいかにも曠野らしい眺めはまだ武藏野といふものを知らなかつた私には非常に珍らしかつた。

池上の本門寺の裏の松山のなかを通り拔けるころは落日の影がちら／＼と木の間から見えたり、雨あがりであつたかして草の根には沼のやうに水がたまつてゐたことなどを憶えてゐる。

本門寺の疎林を透して黝い富士が暮れて行く平原のかなたに、夕燒の空に對して雄大な影を投げかけてゐるのを見

た。

本門寺のあの高い石段を上りつくして少し片寄つた所には足腰の立たぬ癩病の男が二人で、何か語りながら火を焚いてゐた。

間もなく日が暮れてしまつた。本門寺の石段を下つて行つたところに廣場をめぐつて數軒の旅籠屋があつたが、そのころはまだ家の恰好なども昔のまゝらしく、旅館といふ感じでなく、何處までも旅籠屋といつた風な感じがする建物であつた。

軒にも古びた木の厚い看板が懸けてあつて、文字などは殆んど讀めないくらゐに古びてゐた。

×

池上から何處へ行かうといふあてもなかつたのであつたが、ともかく南の方へ南の方へと志して歩いて行つた。そのころはあの廣い平原にめつたに家といふものを見出すことはできなかつた。私たちは道で幾度も鎌や稻束をかついだ農夫たちに出逢つた。途を歩いてゐる間に、月が出て來たので際限もないやうに廣い平原の上に一面薄い霧がかゝつてゐるのが見えて來た。

稻に埋められた平原の、何處からともなく水車の音が聞えたり、荷車の轍の音がかすかに聞えて來たりした。

「何處に行くつもりだ？」と私が時々Tの顏をのぞきこむやうにして訊ねるのであつた。四五間先きを歩いてゐるTの姿が霧のためにぼかし繪のやうに見えることもあつた。

「うーむ……」Tにも何處へ行くといふあてはなかつたのであつた。Tは野のなかを歩いてさへゐれば宜いといつた風で急ぎもせず、道も考へないで歩いて行くのであつた。

「何處に行かうかなあ？」しばらく經つと、今度はTの方から私に訊ねた。

私も殆んど返辭もしないで南らしく思はれる方向へずん〳〵歩いて行つた。
本門寺から一時間ばかり歩きつゞけてゐる間に、私たちは途中でたゞ一軒の百姓家を見出した。
主人はまだ歸らないと見えて、腰の曲つた老婆と若い田舍には珍らしい色の白い眼の黑い細君らしい女が竈の前に坐り込んで火を燃やしてゐた。
東京から水一杯飮まずに歩き通しでゐた私たちは、咽喉がかす〳〵になつてゐたので、家の中から洩れて來る光りを避けながら、湯を貰つて飮むことを相談した。
しかしTも私も家のなかにはいつて行つて老人や若い女に話しかける勇氣もなかつたので、再びすご〳〵とその家を離れて行つてしまつた。

×

振り返へつて見ると、平原のなかの一軒家の燈が水のやうに白い月の光りの下に久しい間明滅してゐた。行く手の平原の涯にほの見ゆる燈の群を見出した時、私たちの心は無性にをどるのであつた。私たちはひもじさをも忘れて軍歌などをうたひ出した。
六鄕川の渡船場に着いたのは夜の七時近くでもあつたらうか。
靜かな月の夜の渡船場の光景は感傷的な靑年の感情をいやが上にもそゝるのであつた。
私たちは船で少しばかり流れを下つて間もなく六鄕川の岸に着いた。
岸の水に映つて動いてゐる家々の燭の影が、いかにも水鄕らしい感じを湧かさせるのであつた。
Tと私とは村はづれの稻田の傍に立つて、月に照らされながら二人の金を集めて見た。しかしとても宿屋にとまることはできさうもなかつた。

私たちは村の周圍を大部歩いて、御堂のやうなものを見出さうとしたが、終にそれらしいものを發見することもできなかつた。

しかし、宿よりも先きに、私たちは空腹の問題を何うにか片付けなければならなかつた。

私たちは再び村の方へ引きかへして六鄕川の岸に出た。私たちはそこで何でも蒟蒻を煮たやうなものを食つたと思ふ。それで幾分腹は出來たが、また宿屋の心配が湧いて來た。

私たちは幸ひにして安泊りを發見した。

低い草葺家の軒に「御安泊り、一晚三錢」といふやうな行燈の文字が讀まれた。

その隣りの家には「牛馬御宿一晚二錢」といふ文字が障子に書いてあつた。

私たちは疲れ切つた體を暗い上り框に投げ出すやうにして腰を卸した。主人がすゝぎの水を持つて來てくれた。

しかもそれも二人前六錢の宿料を拂つてやつてからであつたと思ふ。

茶はたしかに宿料を支拂つてから後に運ばれて來た。

型の通りに族籍職業といふやうなものを古びた宿帳に書き込んでから、さらに二錢の蒲團代を奮發して、Tと一つの夜具に寢ることにした。

天井の低い八疊ぐらゐの室一つきりで、障子といつても骨ばかりだし、疊はじめ〳〵としつけてゐた。小ひさな二分心のランプが一つ天井から吊されてあつた。室中には腐つた空氣が漂うてゐた。

私たちが室にはいつて行つた時は、旣に四五人の男が寢てゐた。一人の顏色の惡い男は夜具から首だけを出して、しきりと算盤の珠をはじいてゐた。筆墨を行商して步いてゐる男だと見えて、その男の傍へは筆を入れた箱などが置かれてあつた。

私たちは外套を着たまゝで寢たが、何うしても寢付かれなかつた。家の上り框の帳場に坐り込んでゐる親爺は、十二時過ぎまでも表の戶を明けつぱなしにして客を待つてゐた。

うと〳〵と眠つたかと思ふと私たちの夜具を片方へ押し寄せてゐる男があつた。

「御免なさい。先きのお客さん……」と言つてその男は、人の善さゝうな眼をしばたゝきながら私を見た。私は何とも言はないで外套の一端を顏の上にかけて眠らうとした。

しばらく經つてからであつた。私はその男が「太郎坊……太郎坊……」と言つては、しきりと何かを二人で食べてゐるやうな音を聞いた。そうッと外套の間から見ると、太郎坊といふのは小ひさな猿であつた。兄弟か、親子かのやうな親しさで、その男と小猿とはせんべいのやうなものを嚙じつてゐた。

六鄉の川を下る船の男たちの款乃の聲であらう。遠い世界に滅えて行くやうに仄かに人の聲とも思はれぬほど靜かなリズミカルな聲が、霜夜の空から空を響いて行くのであつた。

櫓の音だの、波の音などが思ひ出したやうに枕もとに傳はつて來た。

再び眼をさました時は、月の光りが八疊の室の半分くらゐまで流れ込んでゐた。室のうちには十人近くの男が疲れ切つたらしい仄かな鼾をかいてゐるのであつた。むせるやうな室の空氣は私の呼吸を息塞まらせるほどに思はれた。

「起きよう。とても苦しくて眠れない……」私はさういつてTを搖り起した。

午前の三時であつた。私たちは靜かに起きて安泊りを出た。帳場の主人たちは、帳場に小屛風を一枚立てゝ一つの夜具にくるまりながら眠つてゐた。宵に見た小猿が土間の隅の石油箱のなかに寒さうに眠つてゐるのであつた。

土を踏むごとに霜柱がざく〳〵といふやうな音を立てた。月は水のやうに白かつた。

「何處に行かう？」二人が殆んど一緒に同じことを言つた。

私たちはあてもなく、たゞ南の方へ南の方へと平原のなかを歩いて行つた。
夜が明けかゝつた時、私たちの眼の前には燻し銀のやうに煙つた海が横たはつてゐた。
Tも私も外套にくるまつたまゝ小半時も默りこんで、夢からさめて行くやうな朝の潮の上を見つめてゐた。
「昨夜、一軒家で見た百姓のおかみさんは何處か敬子さんに似てゐたなあ……」とTが恥づかしさうに笑ひながら言つた。
それはTが朝になつてはじめて語り出した言葉であつた。敬子といふのはH氏の娘さんの名であつた。

×

十幾年の昔になつた。Tも、鳥居坂のH氏もH氏の奥さんも、さらにTの自殺の第一の原因であつたH氏の娘さんも死んでしまつた。
今になつて考へて見るとTはそのころ既にH氏の娘さんに對して、燃ゆるやうな初戀を苦しんでゐたのであつた。

山茶花

數年前引つ越しの時或る男にゆつつてやつた山茶花が、偶然にもふたゝびわたくしの庭に運ばれて來た。あのころは、幹を隱すほどに葉も枝もこんもりとしてゐたが、今日見た山茶花は幹も枝も裸にされて、心も摘まれ、枝は惜しげもなく切りさいなまれてゐる。恐らく秋が來て花が咲くごとに、無殘にも枝を剪つてしまつたのであらう。わたくしはその男を憎みたくなつてしまつた。

このころ或る事件から一人の若い辯護士W氏と知るやうになつた。

體重二十三貫柔道四段といつたゞけでも、たいていその人の風丰の想像はつく。逞しい毛深い腕を見たゞけでもいかにも賴母しい男らしい感じがする。

W氏は日向の產、いかにも南國の人らしい多感の男である。歌舞伎座に佐々木高綱を見てすゝり上げて泣いた話や、本鄕座では感極まつて舞臺に躍り上つて惡侍を投げ飛ばしたといふ話も聞いた。頭にも手にも刀傷がのこつてゐる。學生時代には飯よりも喧嘩が好きであつたといふ男である。

そのW氏が朝は必ず佛壇の花の根を洗ふ。夜は必ず觀音さまへお詣りをする。愛犬が死んだをりは三日が間夜具を引つかむつて寢てしまつた。そして一切辯護用でたづねて來た客をことわつてしまつた。

二三日前の夜のことであつた。

わたくしはW氏と向かひ合つて坐つてゐた。一疋のわらぢ蟲が疊の上を這つて來た。

わたくしは子供のころからわらぢ蟲が嫌ひである。蛇と同じやうに嫌ひである。だから見つけさへすれば殺さない

ではをらぬ。その夜もわたくしは紙を持つて來てわらぢ蟲をおさへた。そしてくる〳〵と紙に卷いて緣側に捨てた。
「可哀さうですよ」とW氏がいかにもあはれな聲を出した。
「あなたは蟲を殺すのが嫌ひですか」とわたくしはたづねた。
「えゝ、わたしはどうも、どんな小ひさなものでも生き物を殺すのはいやです」W氏は子供のやうな顏をした。
わたくしはW氏に對して惡いことをしたと思つた。急いで緣側に捨てた紙を拾ひ上げて見た。わたくしは潰されてしまつたわらぢ蟲を豫想しながら紙を開いて見た。わらぢ蟲の影も形も見えなかつた、わたくしはほつとした。
「大丈夫ですよ、わらぢ蟲は逃げてゐます」
わたくしは紙を開いてW氏に見せた。W氏は安心したらしい顏を見せた。
今に世界中にわらぢ蟲が湧くやうになつたらどうしようなどと懸念しながらも、わたくしはW氏の手前わらぢ蟲が逃げてゐてくれたことをうれしく思つた。
かれは愛すべき可憐なる偉丈夫である。

×

この秋わたくしは三本の山茶花を植ゑた。白い花が日に日に咲いてゆくのをぢつと見戍つてゐると、亡くなられた抱月先生が山茶花を愛せられたといふ話を思ひ出す。山茶花はしをらしい花である。冷たいやうでゐながらしをらしい花である。墓を守るにはふさはしい花である。
二三日前もY氏と話をした。
お互に人間の世といふものは、苦しいことやいゝ腹立たしいことや、うるさいことばかり多い。一つの家をめぐつて如何にわづらはしい憎みや憤りの渦が卷いてゐるか知れない。そのために靜かな秋の日が照らうと、靜かな秋の風が

吹かうと、人間の心だけはいつも憂鬱な牢舍の底につながれてゐる。
「二度と生まれかはつて來ようとは思はぬ。」
「さうです。ちやうど一度生まれて來たゞけでたくさんです。」
「生まれて來なかつた方がいゝとは思はぬが、一度だけ生まれて來たゞけでたくさんだよ。」
もし生まれて來なかつたら口惜しいと思つたかも知れぬが、二度と生まれかはつて來ようとも思はぬ。
人生はそれほど惡いところでもないが、それほどいゝところでもない。白い山茶花を見てゐれば、わたくしの墓の上にも二三本の小ひさな白い山茶花を欲しいと思ふ氣にもなる。

×

概念と眞理とを取りちがへた作者の作品ほど讀みづらいものはない。それと同樣に概念から出發して、デリケートな人間の行爲なり、心持ちなりを無遠慮に判斷し、無遠慮にかたづけてゆくやうなやりかたくらゐ不愉快なものはない。いつの時代にも、「先づ罪なき者石をもて女を擊て」といつてやりたくなるやうな所謂賢者たちがあまりに多い。
一つの概念を持つことは易い。概念によりて作品を作り出すことは易い。
眞理を見出すこと、さらに眞理によりて作品を生み出すことは名人でなければできないことである。
ほんたうな法悅をあたへるところの作品は、眞理を感じた人のみによつて生み出される。
ガルスワージイの作品とイブセンの作品を比ぶる時殊にこのやうな感じを抱かせられる。

×

世の中のことを考へ拔いてゆくと、いつたい人間の考へ得る眞理とは何であるか、考ふれば考ふる程わからなくなつて來るに違ひない。手も足も出なくなつてしまふかも知れない。

ほんたうに善い人でゐながら、考へに考へ拔いて、その結果は何一つしえないで、朽葉のごとく死んでしまふ人がどれほどあるか知れない。

田舍などを旅して歩いてゐると時として、よくそのやうな人に出逢ふことがある。ずゐぶんいろんな物を讀み、いろんな事を考へ、眞面目に研究と思索をつゞけてゐるが、周圍に對して高い聲一つ立てるでもなく、考へに考へ拔いたまゝの無爲にして淡々として死んでゆく人がある。そのやうな人が實は一番尊まるべき人であるにちがひない。

粟津の義仲寺のほとりに庵を結んで師の後世を祈つてゐた丈艸が一生の日誌や、かれの作品の全部を惜しげもなく荒壁に張りつけてしまつて乞丐法師の淡々たる生活を樂しんでゐた心持ちだけでも、芭蕉以後何萬の俳人たちの仕事よりは尊いやうな氣がする。

藝術も滅びてしまへ。たゞ丈艸の淡々たる心のみがいつまでも尊く思はれる。

海をわたつて

秋の末であつた。山の紅葉が散つて間もなくであつた。私が對馬に渡るついでに、長崎の町に數年振りで立ち寄つたのは。空は朝から曇つてゐた。午前中は醫學校の友人と一緒にお寺の多い山の手の町や、大浦の舊教の會堂などを見て歩いた。私たちは苔むした高い石段をのぼつて行つた。緑だの、葡萄色だの、黄色だのゝ硝子板を、モザイツクのやうに組み合はせたゴシツク風な高い窓から、暗い室のなかに流れて來る晩秋の光線は、墓場のやうな靜かな感じをわかさせた。裏の芝生につゝまれた墓場には葉鷄頭やコスモスがわびしげに、秋の陽をうけてゐた。異國の土のなかに眠つてゐる人々を掩うた白い大理石の碑の面には、秋の日ざしが微かにわなゝいてゐた。圓柱形の大理石を途中からわざとぶつゝりと折つた型の碑もあれば、サンタ・マリヤの像を置いたものもあつた。サンタ・マリヤのうしろの山茶花は紅かつた。碑の面には金の文字を刻みつけたものもあつた。金が大抵は剝げて落ちてしまつてゐるのが、一層寂しい感じを抱かせた。

猶太の女たちがゐると言はれてゐた居留地の裏町には、無花果の列樹が埃を浴びてゐて、煤けた石造りの家の窓からは燃えるやうに紅い女のスカーフなどが風に搖られてゐるのが見えた。

Uといふ一人の友人に送られて私は朝鮮通ひの汽船に乘つた。大波止のあの大きな圓い鐵の塊――天草四郎の島原亂の時使つた彈丸だといふ傳說がある――の下にUはぽつねんとしやがんで甲板の上の私を見送つてゐた。船が動き出したころはUの顏も見えないくらゐ黃昏の色が迫つてゐた。

伊太利の水の都に似たと言はれる南國の水の町はしづかに暮れて行つた。いかにも秋の日らしい暮れかたをして。

筑後町や大浦の舊敎の禮拜堂の鐘も鳴るころであつたが、それも聞えないで日は暮れて行つた。
港の出口の神の島の下を通るころは潮のなかの燈明臺の靑い火がまたゝきはじめてゐた。
沖に出るとまだ殘光が甲板を照らしてゐた。五島の島影が靑く水平線の上に流れてゐた。
甲板の上には六尺もあるかと思はれるやうな背の高い朝鮮人が二三の日本人を對手に議論をしてゐた。普段長崎に來てゐるのだと見えて言葉は大抵長崎のアクセントを持つてゐた。この大きな朝鮮人から離れていつも一人で舳に立つて暮れて行く海の上を寂しげに見つめてゐる一人の洋服の男があつた。
「あの人はながいあひだロンドンに留學してゐた人です！」と言つて、例の大きな朝鮮人は寂しい洋服の靑年を指さした。靑年も朝鮮人であつた。
彼杵半島の岸を嚙む波だけが白く夕暗のなかにほの見ゆるほどに暮れて行つた。風は強く波はます〳〵高くなつた。船に弱い私は何うしても船室のなかにはいつて行く勇氣はなかつたので、ひとりで後甲板の方へ出て舷によりかゝりながら暗い海の上を見つめてゐた。
空が追々に晴れて來た。星の光りがちぎれ雲のあひだから瞬いて來た。私は時計を出して見た。長崎を出てから二時間經つた。右手の水平線の上に黑い山らしい影が見えた。私の少年時代を送つた田舍の山であるあの山の向うには近鄕切つての大富限者であつたのが若い美しい細君に死なれた後は、することなすこと喰ひちがつて、今では一人の女の子をつれて或る老舖の番頭になつてゐる氣の毒な男がゐる。あの山のこつちには、小學時代に評判の子であつた造り酒屋の娘が緣付いて來てゐる。その女が嫁いで行つたのは、秋になると芙蓉が一面に咲いてゐる川に沿うて白壁の倉が幾戶前もつゞいた家であつた。私は小學時代の色々の人々のことなどを想ひ出して山を眺めてゐた。
波は暗の底に寂然としてくだけては、また寂然として暗のなかに消えて行つた。

お坊つちやん

T島の聯隊にゐた折原見習士官はよくその頃美しい女性の姿を描いては、たゞ一人で美しい夢にあこがれてゐた。秋の大演習に參加するために、折原見習士官の聯隊は海を渡つて本土の方へ行くことになつた。島の兵營の生活をした事のない人たちには、殆んど想像もつかないことであらうが、本土といふ言葉だけでも島の兵士たちにとつてはこの上もない蠱惑を持つてゐるのであつた。兵士たちは大抵本土から島へ派遣せられて來た若者たちであつたから、晴れた日など高い山の上の砲臺の觀測所や肩墻の上の草のなかに腹這ひになつて、青い海を隔てて本土のかすかな山を見入つてゐることが多かつた。

誰も彼もが水平線の涯の島影を眺めては一日でも早く島をのがれて故郷に歸る日のことばかり考へてゐた。砲臺から一里餘も離れた屯營まで海岸を傳うて歸つて行く夕暮れなどは、本土から派遣された兵士ばかりでなく、士官學校を出て來たばかりの折原でさへも、兵士の軍歌を聞きながら涙ぐましい心になることもあつた。

島の生活はあまりに單調で、寂しかつた。だから、島の聯隊が內地に渡つて行くことになつた時、兵士たちの喜びやうといふものはなかつた。かれ等は荒い浪に搖られて船暈になやまされながらもたゞ內地の賑かな町や、燭や、若い女のことばかりを想像してゐた。

異性に對して華かな空想を描き初めてゐた折原見習士官の胸の底にも、兵士たちに劣らぬ力強い、息苦しいほどの色々な想像が湧いて來るのであつた。

聯隊が上陸した最初の町から、風紀軍規といふやうなことが軍司令官や聯隊長あたりから、かなり嚴しく傳へられ

てゐたが、若い兵士たちは何のやうな小ひさな隙間でも見のがさないほどの注意力を持つて、燃えるやうな慾情を充たすために、あらゆる機會を利用することを怠らなかつた。

折原見習士官がゐた中隊のK少尉は、港に着いた日から宿舍の若い美しい娘と親しげに語るやうになつた。そして四五日の滯在のうちにK少尉とその娘はすつかり戀に陷ちてしまつた。

「見習士官殿はやつと二十になつたばかりのまだ坊つちやんだから駄目さ！」

などゝ言つて中隊の下士などは、笑つてゐたが、折原見習士官自身は「俺だつて……」と心のうちでは、あべこべに、笑つてゐる下士たちの鼻を明かさしてやりたいやうな氣になることもあつた。

かれはK少尉と宿舍の若い娘との戀に對しては幾分嫉妬を感じないでは居られなかつた。だから聯隊がいよ〳〵港の町を出發するやうになつた時は、多少痛快な感じも抱いた。

聯隊は幾日となく秋の平野や山地を行軍した。士官たちや、兵士たちは色々な村や町で經驗した淡い戀を思ひ出しては語るものもあり、微笑むものもあつた。

折原見習士官は異性に對する燃えるやうな執着を感じながら、まだ一度もほんたうに女といふものと打ち解けて語るだけの勇氣は持たなかつた。かれはまだ女とちよつとした會話を取り交はすだけにでも、ともすれば顏を赧くすることがあつた。かれの女に對する空想は極めて浪漫的なものであつた。かれは若い女性に對しては一種の崇拜に似た感情を持つてゐた。

かれは行軍をしてゐる間にも、また町の宿舍に泊つた時も、色々な若い女を見たが、自分の心のうちに女の白い肉體を聯想するやうなことがあれば、まるで疫病にでも取り憑かれたかのやうに恐れて、醜い空想を破らうとするのであつた。

かれの頭に描かれて來る女はいつも男性に汚されたことのない處女であつた。かれは處女崇拜の夢に醉うてゐた幸福者であつた。

「お前はそれで滿足が出來るか？」と或る聲が叫ぶことがあつた。かれはやゝもすれば「それだけでは滿足は出來ない」と言はずには居られなくなつて來ることもあつたが、しかしかれの頭にはまだ「處女は美しいもの、尊いもの、そしてみだりに汚してはならぬものだ」といふ考へが力强く動いてゐた。

×

明日は愈々總攻擊といふ日の朝であつた。軍司令部から出し拔けに演習中止といふ命令が來た。それから間もなく或る參謀や或る聯隊長が虎列剌にかゝつて死んだことが判つた。

折原見習士官が屬してゐた聯隊でも一夜のうちに十七八名の虎列剌患者が出來た。白い棺桶に入れられた死骸が四つも五つも續けざまに森の中の急拵への火葬場へ運ばれて行つた。

聯隊も一週間餘、小ひさな町の宿舍に隔離さるゝことになつた。

梅雨のやうな不快な雨が日も日も降りつゞいた。

宿舍の兵士たちは空元氣を附けるために酒を飮むか、窓から首を出して往來の若い女たちを見てはからかつたりするのであつた。

雨のなかを聯隊の病者の擔荷や、棺桶が人足にかつがれて窓の下を通つて行つた。殆んど何の宿舍からも一人か二人の虎列剌患者が出た。そして大抵は死んだ。

人々は蒼白い顏をして雨に煙つた町や野を見てゐた。

このやうな不愉快な雨の日にも、若い人たちは戀をあさることを忘れなかつた。

曹長と宿舍の娘が怪しいだの、誰と誰があの女房を何うしたゞのといふことを、兵士たちは平氣で語つた。

聯隊の兵士たちの間には町の或る酒屋の娘が第一の美人として噂されるやうになつた。そこには十五六人の豫後備の召集兵や現役兵が泊つてゐた。そこに泊つてゐる兵士たちは他の宿舍にゐる兵士たちからは少からず羨まれてゐた。

折原見習士官は巡察に出かけるたんびに、その酒屋の前を通つた。そこには屹度他の宿舍の兵士たちまでが集まつて來て酒を飮んでゐたりした。かれはたッた一度だけ馬の上からその娘を見たゞけであつたが、すつかりその娘に魅せられてしまつた。

十六か七くらゐであらうか、瘦せ型の、色の白い、寂しい顏であつたが、その日から急にかれの心の一隅にその女の顏がこびりついてゐて離れなかつた。

かれはその夜直ぐ東京の聯隊にゐる同期生の一人に「僕はほんたうに心からかの女の美に擊たれた。かの女は天成の美の結晶だ。かの女こそ深山の自然のまゝの處女だ。僕の胸は裂けるほどかの女を思つてゐる」と書いて送つた。まつたく、かれは或る隱された寶玉でも見出したやうなよろこびを感じながら、その娘の俤をかれの胸のなかに祕めてゐたのであつた。

かれは巡察の番がまはつて來るたんびに馬に乘つて酒屋の前を通つた。しかし不思議にかれは酒屋の前に來ると、自分の氣に咎められるやうで、酒屋の奥を覗くことができなかつた。

かれはたゞ一度娘を見たきりで、二度と逢ふことはできなかつた。しかしかれは幸福であつた。一ヶ月でも、二ヶ月でも聯隊がこの町に屯してゐれば宜いとすら思つた。

かれは兵士たちがその娘の噂をしてゐるのをそうつと聞いては、まるで美しい自分の戀人でもほめられてゐるやうな幸福を感ずるのであつた。

雨が止んで、再び靜かな田舍の町の秋がとりもどされた。野には芒の穗が銀のやうに光つて來た。

聯隊は島の屯營に歸ることになつた。

いよ〳〵町を出發する前の夜であつた。

「角の宿舍の娘が物にされた」、「駄菓子屋の女房が……」といふやうな噂がひとしきり晩餐の席上で繰り返された。

港の町で女を買つたゝめに三等症にかゝつた兵士が五六人出來たことなども噂された。

こゝの町の娘といふ娘、女といふ女が、大抵は兵士たちと何うかしたやうな話が傳へられた。

「しかし、あの娘だけは！」と折原見習士官は考へた。「あの美しい娘、あのつゝましやかな娘だけは、淫らな若者たちのために汚されることはない筈だ。そのやうに輕々しく、淫らな男たちに汚されてなるものか」かれはさう信じ切つて兵士たちの話を聞いてゐた。

しかしかれのはなやかな空想は一人の兵士の話のために根こそぎくつがへされてしまつた。かれはいたましい奇蹟を見せつけられたのであつた。

「酒屋の娘かい！　あれだつてさあ、宿舍に泊つてゐる豫後備の奴等あひどいんだあ、ずるいんだよ、可哀さうにみんなで……」

「でも、お前だつて、あの宿舍にわざ〳〵泊りに出かけて行つたぢやないか。」

「そりやあ、さうだが、俺は知らんフッフッフッ……」

とその男はずるさうな笑ひ方をした。

折原見習士官はまるで惡夢にでも取り憑かれたやうな不快さに苦しみながら一夜を過ごした。

かれは一刻でも早く町を出て行きたかつた。まだ夜が明けきらぬうちに起きて、從卒を起して馬具を裝けさした。

恰度そこに中隊長から傳令が來た。かれは馬を走らせて中隊本部の方へ行つた。道には初霜が下りてゐた。

「君、心配なことが起つたのだ……」と言つた人の善い中隊長の顏色はひどく沈んでゐた。中隊長の用事は……酒屋に泊つてゐた中隊の初年兵が昨夜逃亡したので、それを探すために折原見習士官に隊から離れて、附近の部落を見てくれといふのであつた。

かれは一度宿舍に引きかへしてから、中隊長の命令通りに酒屋に行つて逃亡兵の數日來の動作や、面會人のことなどについて訊ねて見る必要があつたので、酒屋の方へ出かけて行つた。

聯隊の兵士たちは出かけてしまつた後だつたので、暗い酒屋の土間はがらんとしてゐた。五十ばかりの主人と例の娘が土間に下りて來て叮嚀に頭を下げた。

大抵は主人が口を利いて娘はその後から時々顏を上げてかれを見た。

娘の顏が思ひなしかばかに蒼白く見えた。

娘の顏はやつぱり美しかつた。

「しかし、何も彼もおしまひだ。汚されてしまつたぢやないか！」

かれは美しい娘の顏を見ながら、さう思つた。娘がもぢ〳〵してゐればゐるほど、かれはぢれつたかつた。哀れつぽいやうな腹立たしいやうな感じが後から後からと湧いて來るのであつた。

かれは主人から何を聞いたか殆んど覺えてゐなかつた。かれは馬に乘つて、ぐつと拍車に力をこめて馬の橫腹を締めた。そして野の中を橫切つてゐる一直線な國道を見下す丘の上に出た。

砂埃を立てゝ行く砲車の縱列が並樹の間に見えた。

朝の太陽は靜かに動いて行く人々と馬の群を照らしてゐた。

そこからは折々轍の音にまじつて人々の笑ひ聲が響いて來た。かれの浪漫的な世間見ずなお坊つちやんの空想を冷笑してゐる豫後備役の兵士たちの勝ちほこつた眼や、處女の貸い魂を踏みにじつた野獸のやうな老兵たちの眼が、はつきりとかれの心に映つて來るのであつた。

「畜生ッ！」かれは惡魔のやうな男たちの眼を想像しながら叫んだ。そして再び太股にぐつと力を入れて馬の横腹を締めた。

移轉

階下では運送店から荷馬車を持つて來た男たちが、大きな聲で話しながら簞笥だの、葛籠だのを運んでゐた。

私は二階の書齋にはいりこんで、書棚から一度に七八册づゝ纏めて本を取り出しては、ざつとはたきをかけて、それを小ひさな麻絲でくゝつた。

「お火鉢は何うしませう。灰はあのまゝに入れて行きませうか？……お流しもこちらさまのでございませうか？……」馬車を曳いて來た男や、手傳ひに來た婆やたちは、こんなことを言つては二階の書齋を覗きこんだ。

私の心はそのたんびに暗くされた。何となしに腹立たしかつた。

「おたねはまだ歸らないのかい？」私はちよつと險のある聲で婆やに訊ねた。

「まだお歸りになりません。きつと髮結さんのところが、こんでゐるんでございませう。」婆やは埃だらけの髮を撫でながら言つた。

「おたねが來て見ないと、僕には階下のことは何もわからないが……」私はさう言つて、婆やゝ男たちに背を向けて、どんどん自分の本だの、古い雜誌だのを棚から取り出した。そこに、かねて約束をして置いた骨董屋の若い主人も小ひさな荷車を持つて來てくれたので、私は一層面喰つてしまつた。

「引つ越しなんていふものは、家の女が一人でやるべきものだ。男がこんなくだらない仕事に時間を費すなんて、そんな馬鹿なことがあるものか？　第一、居なければならぬおたねが、今朝になつて髮を結ひに行くなんて、そんなばかなことがあるものか……」私は自分一人でぶつくさ言ひながら持つて行かなければならぬ本と、賣り拂つてしまひ

たい本とを選り分けた。

一年に一度讀むか、二年に一度讀むか知れないやうな本でも、やつぱり持つて行かなければならぬといふことはばかばかしくもあつた。私は引つ越しをするたんびに、たゞ身に纒つた衣一枚と檜笠一つで暮してゐた芭蕉翁のことなどを想ひ出すのであつた。

やつとおたねが歸つて來た。階下の方で何か甭高い聲で話しては笑つてゐた。とん〳〵と跫音をさせて二階に上つて來て、

「ほんたうに濟みませんでした。あたしこんなに早く運送屋が來てくれようとは思はなかつたもんですから……」と娘のやうな顏をした。

「だから僕が言つたぢやないか、十二時ごろに馬車を持つて來てくれるやうに賴むのだつて、それを八時だなんていふからこんなに朝早く來るんぢやないか」私はやけにはたきをかけながら言つた。

「あたし、十二時ごろつて言つて置くつもりでしたが、婆やが、八時ごろつて言つて置いて何うせ十二時くらゐにしかまゐりませんていふのですもの……」おたねは結ひ立ての髮を氣にしながら手拭を冠つた。

「今更そんなことを言つたつて仕方がない。早く階下に行つて荷物を片付けておしまひ。第一不用心だよ。こゝいらの橫町なんてちつとも氣がゆるせないからよく荷物を氣をつけてゐないと駄目だよ。」私は妻を追ひやるやうにして階下にやつた。まつたく私は自分等の荷物を橫町の口數の多いおかみさん連に見せたくなかつた。時折り何處からか出かけて來る旦那といふ男を待つほかには針仕事一つするでなく、淺草の劇場あたりの三流四流の役者の噂でもするか、近所合壁の長屋の蔭口でも利いて步くより他に仕事を持たないお圍ひ者や、長屋のおかみさんたちは、何時誰のうちではどんな風の男が訪ねて來たゞの、どのやうな模樣の晝夜帶を誰が締めてゐたゞの、誰の家にどんな簞笥が買はれ

たといふやうなことまで噂してゐた。だから私たちは人に知れないやうに、買物に行くにも夜分に出かけて行つた。ちよつと晝間に、新らしい着物でも着替へておたねが出かけやうものなら、横町の女たちは露骨に障子を明けて覗くやうなことまでした。

だから、今度の引つ越しだつて、私たちは引つ越しの朝まで近所の誰にも語らなかつた。出來るだけ短い時間に、疾風迅雷的に荷物を片付けて引つ越したいと思つたのであつた。横町の一部の人たちを除いては、大抵の人々に對して私達はつくぐ〲嫌氣がさしてゐた。

運送屋から來てくれた男が思ひの外、實直な、親切な人であつたり、また骨董屋の若い主人がたいへん骨を折つてくれたりしたので、私たちの荷物は存外早く片付いてしまつた。馬車一臺では積み切れないといふので、骨董屋の主人が自轉車で走つて行つて、荷車を一臺連れて來てくれたりした。

「この横町でこんなにたくさん荷物を運んだ家は一軒もありませんよ」おたねは若い女らしいほこりを感じたらしく、横町いつぱいに並んだ三臺の車を玄關から見て、私の顏を覗きながら微笑んだ。

向うの家のお婆さんは「まあ、どつさりなお荷物!」と幾度もくりかへしてゐた。

馬車を先頭にして三臺の車が横町を出て行つてしまつた。婆やも荷車の後からついて行つた。近所のおかみさん達や、子供たちが格子戸の前でおたねを中心にしばらく高い聲で話したり、笑つたりしてゐるのが二階まで聞えて來た。

×

おたねが近所廻りだの、魚屋や八百屋の支拂ひなどに出かけて行つた後では、私一人二階にのこつてゐて、そこいらに散らかつてゐた紙屑を片付けたり、また私が手に提げて持つて行く筈になつてゐた細々したものなどを新聞紙に包んだりした。

おたねはなか／＼歸つて來なかつた。

私は、骨董屋にのこして行くことになつてゐた小ひさな瀨戸物の火鉢に手をかざしたまゝ、がらん洞になつてしまつた寂しい自分の書齋の壁だの、天井だのを見るともなしに見た。ミケランゼロの肖像をピンで留めて置いた壁の跡が際立つて白く見えてゐた。

戸外では子供たちが急に「雪こん／＼」をうたひ出した。私は細目に障子を明けて見た。粉雪がちら／＼降り出して來たのであつた。

子供たちは狹い横町を飛びまはつて歩いた。そして私の家の格子戸の前に來るといつものやうに溝の踏み板をどんどんと踏んで「雪こん／＼」をうたつた。

私にはうたつてゐる七八人の子供たちの聲が、一つ一つ別々にはつきりと區別が出來た。メリヤス屋の子、雜貨店の子、彫刻師の子、お圍ひ者の子、勤め人の子……どれもこれも私に親しみのある子供たちの聲であつた。

「恰度、都合の宜い時に引つ越しをした。夕方にでも引つ越すんだつたら、雪で困つたらうに！」私は障子を締めながらさう思つた。四年前、こゝに移つて來た折も淡雪が降つてゐたことなどを思ひ出した。

私は所在なさに火鉢の灰を搔きまぜては、おたねが歸つて來る跫音を待つてゐた。

今朝のあわたゞしかつた心が落ちついて來るにつれて、さすがに四年の間、私たちの生活の快い巢であつたこの横町の小ひさな家に對して、いろ／＼な聯想や思ひ出も湧いて來るのであつた。

この家は少くとも私とおたねにとつては思ひ出の多い家であつた。私たちははじめて二人のためにいろ／＼な苦痛な思ひを忍んで小ひさな快い巢をこゝの家に見出したのであつた。そこには一坪の庭もなかつた。たゞ拇指大の山茶花が一本はゞかりの窓の先きにひよろ／＼と伸び上つてゐた。私たちの巢には門もなかつた。玄關の格子戸から直ぐ

に横町の往來になつてゐた。向うの家のお婆さんが、物騷だからと敎へてくれたので、格子戸には一々家の中から栓をかふことにした。

私たちは朝起きて玄關の格子戸を明けると、直ぐ隣りや、向う側の人たちと顏を合はせて「お早う」だの「結構なお天氣で！」だのと挨拶をするのであつた。隣りから隣りへ、まるで異邦人のやうな冷たい生活をしてゐる山の手に育つて來た私にとつては、そんなことまでが物珍らしく、うれしかつた。

おたねと二人で外出をするにも、私たちは向うの家のお婆さんや、近所の人たちに一々留守を賴んで出かけるのであつた。歸りにはちよつとした半襟だの、お煎餅の袋だのを土産に買つて來て、お婆さんなどにやるやうなことにも興味を持つことができた。夜おそく歸つて來ると、向うの家のお婆さんが起きてゐて、十能に火種を入れて持つて來てくれるのなども、ほんたうにうれしかつた。

「山の手の勤め人たちの利己的な生活よりか下町のこんなところの人たちの生活がどれほど眞人間らしいか知れない僕等は一生あんなかすかした山の手の生活には歸りたくない」と、私は幾度かおたねにも話し、友人にも話した。

春から夏になると町の祭りがつゞいた。軒から軒へ花だの、提灯だのが飾られた。大人も子供も家の前に立つては、その年々の藤だの、牡丹だのと軒の花をうれしげに眺めるのであつた。町の御輿が町中を練り歩くと、私たちは横町の入口まで出かけて行つて、子供のやうになつて御輿を拜むのであつた。

祭りが終るころになると、私の家の隣りの庭ではいろいろな花が咲き始めた。私の窓近く花梨の淡紅い可憐た花が咲いたり、棗の黨りのいゝ花が咲いたりした。私たちは近所の緣日に出かけて行つては、狹い階下の緣側や、二階の物干臺に、色々な草花の鉢を運んで來た。

私たちは一坪の庭をも持たなかつたが幸福であつた。十八になつたばかりのおたねの紅い手絡はいつもこの小ひさ

な巣を幸福に輝かせてゐた。
私は或る夏の夕方、町から疲れて歸つて來た。そして二階に仰向けになつたまゝ、眠つてゐた。眼がさめた時は八時過ぎであつた。私は不圖、私の全身が月光に白く照らされてゐるのを見た。
私はおたねを呼んだ。おたねは二階に上つて來た。私は月に照らされた私自身の手足や私の書齋をおたねに示した。そして「僕等は一坪の庭をも持たないが、幸福だよ。この月の光りに照らされた自分等の巣を見ろ！」と言つて聞かせた。私はその夜の印象を詩にも作つたことがあつた。
また私たちの横町には二十人ちかくの子供たちがゐた。その子供たちは直きに私たちになついた。殊に横町の誰よりもおたねになついて來た。子供たちは朝私たちがまだ起きないうちから玄關の前に來ては同音に「××の小母さん遊びませうか！」と聲をかけるのであつた。時としてはうるさいと思ふほど、格子戸にぶらさがつたり、臺所口から大勢顏を揃へて家の中を覗いたりするのであつた。しかしほんたうに子供たちは私たちの巣のユーモラスな、樂しいお客様であつた。
私たちは下町に移つて來たことを心から喜んだ。

×

しかし私たちの樂しい横町の巣の生活にも、間もなく幻影破壞の寂しい日が來た。
私たちは無智な、あけすけな長屋住まひの人たちを愛した。しかし一年二年と一緒になつてゐる間に、その人たちは、私たちが夢みてゐたほどナイーヴな人たちではなかつたことが、日に日に明かになつて來た。
そこには二人または三人くらゐの旦那を取つてゐる顏色の蒼い女もあつた。その女は男の病毒のために死ぬか生きるかといふほどの恐ろしい病氣になやまされて、長いこと入院してゐた。花梨の紅い花片が散るころであつたが、そ

の女は毎日死人のやうな顔をして、薄い夏羽織などを引つかけて藥瓶を下げて出かけて行つたが、いつも着物も帶も同じものであつた。

「あんなにまで苦しい思ひをして、幾人もの男になぶられてゐて、それでもあんなみじめな生活をしなければならないのか知ら！」私たちは心からその女を氣の毒だと思つた。しかしその女たちは私たちの好意を決して素直には受け容れなかつた。私たちの好意はいつも反對の結果を齎すのであつた。その女たちは私たちが思つてゐる以上に自分自分のほこりを持つてゐた。その人たちは二重にも三重にも殼をかむつて私たちに接しようとするのであつた。そして恐ろしく厚かましかつた。あさましいほど羞恥といふことを知らなかつた。薄情であつた。

横町の或る家の主人がくだらぬ嫌疑を受けて永いこと未決囚として牢舍に入れられた時であつたが、殆んど横町の人たちは誰一人としてその留守のおかみさんや子供たちと口を利くことすらしなくなつた。未決囚の子は横町の子供たちの間では一番可愛らしい子であつたが、毎朝たゞ一人でぽつねんと、私の家の格子戸に來てはおたねを呼んだ。おたねが林檎だの蜜柑だのをやると喜んで家へ歸つて行つた。

横町の二三の子供に物をやつて、他の子供たちにやらないやうなことがあれば、おかみさんたちは赤裸々に冷淡な仕向けをすることがあつた。顔を合はせても、わざと知らぬ顔をして通り過ぎるものもあつた。私たちの留守に玄關の前に運ばれて來た炭俵の炭を籠に入れて盜んで行つた者もあつた。

未決囚の男が無罪で歸つて來ても近所の人たちは當分ものも言はなかつた。雪の朝であつたが未決囚で歸つて來た男は、朝薄暗いうちに起きて、横町の雪を自分ひとりで掻いてしまつたが、誰一人挨拶らしい挨拶をする者もなかつた。

私の家と同じ棟つゞきになつてゐる隣には官吏の未亡人がゐたが、この女は二日目には「わたくしの親類の工學博

士が……その友人の男爵が……」といふのが口癖であつた。未亡人の家の猫はよく私の家の臺所に來ては魚を盗んだ。それで一度私が擲りつけたら、未亡人はそれつきり私とはものも言はなくなつた。その隣りには何處かの會社員が引つ越して來たが、會社員は肺病の細君を亡くした夜も、大酒を飲んで來て芝居じみた泣き方をしてゐた。そして三十五日も來るか來ないに、新らしい細君を迎へたりした。道で逢つても知らぬ顔をして、夜は一時までゝも二時までゝも近所かまはず大きな聲を出して、新らしい細君とはしやいでゐた。

會社員は横柄な顔をして横町の人たちを見下してゐたので、横町の人たちは會社員の前にはぺこ〲頭を下げてゐた。會社員は電車まで遠くもないのにわざ〲俥を走らせた。そして時々車賃のことで車夫ときたない罵り合ひをしたりしてゐた。

「何といふ俗物(フイリステイン)共だ！」私は幾度さう思つたか知れない。

「ほんたうに馬鹿にしてるのよ、お圍ひ者のくせに、人が挨拶をしても、ふゝんて笑つてるんですもの！」おたねもよくこんなことを言ふやうになつた。實際現金主義な人たちは何か與(や)つた二三日の間だけはちやほやするのであつたが、しばらく水の手が切れると、まるでちがつたやうな冷淡な風をして見せるのであつた。

「もう、こんなところにゐるのは一日もいや！」とおたねも言ひ出すし、私も不快だつたので、私たちは三四ヶ月の間、殆んど毎日のやうに暇を作つては貸家を探して歩いた。

横町の二十人ばかりの子供たちが、一度も私が叱つたこともないのを宜いことにして、格子戸の前の溝の板の上で跳び上り、躍り上つて毎日騒いでゐるのも、たまらなく苦痛になつて來た。

×

戸外では絶えず雪が降つてゐた。窓を明けて見ると、花梨の大きな果の上にも淡く雪がつもつてゐた。

私はそこに新聞紙に包んであつた十號の一枚の油繪の上を、さらに油紙につゝんで、雪に濡らさないやうにしようと思つた。

私は尙ほ一度油繪を取り出して見た。

私たちが四年前にこゝに移つて來てから間もなくであつた。或る日私の詩集を讀んだといふ一人の靑年がその油繪を持つて來て、私に贈つてくれたのであつた。

私はその日のことをはつきりと思ひ出すことができる。それも今日のやうに寒い冬の日であつた。靑年は雪の深い北の國の小ひさな町から東京に出て來たのであつた。靑年が取り出した繪は非常に暗い感じのするものであつた。空は一面に雪雲にとざされてゐた。地は重苦しい空の壓迫に窒息しさうであつた。荒凉たる裸山の間を一條の鐵道が寒げに貫いてゐるのであつた。山にも畑にも雪があつた。石ころも、木の株も凍りついてしまつて、そこには暗い死を想はせるやうな初冬の午後の影が震へてゐるのみであつた。

「こゝは僕の町から、その女の村に行く途中です。この附近をいつも女と二人で歩いたのです。一度はこのレールの附近で女と二人で死ぬ覺悟までしたのです。しかし女は僕を置いて逃げたのです、他の男と一緒に……。僕は東京まで出て來たんです、まだ女に未練があつたのです。しかしたうとう女にも逢へないで國に歸りました。僕は幾度このレールの附近を一人で歩いたか知れません。しまひには一人で歩くのが恐ろしくなりました。しかし一日でもこのレールの附近に行かないでは居られませんでした。僕は女と二人で歩いたレールのあたりの路を毎日歩きました。女が歩いた下駄の跡がまだ土の上に遺つてゐるやうに思はれるのでした。僕は土の上を見つめて歩きました。僕は二ケ月の間毎日カンバスを持つてレールの傍に行きました。そしてこの繪を描いたのでした。しまひには雪が降つて來て、とても描けないのです。うつかりすると繪を描きかけたまゝ雪に埋まつてしまふかも知れませんでした。ですから家

の者が心配して無理に僕を連れに來るのでした。僕はこの繪を描いたまゝ雪に埋もれて死んぢまつた方が幸福だと考へました。この繪はまだ未完成です。僕は三年でも四年でも、この繪を描き直して見るつもりです。完成しないで、雪のなかに埋もれてしまつて死んだつて、何とも思ひません。春になつて雪が溶けたら深い雪の底からカンバスと僕の死骸が出るかも知れませんよハハハ……」青年は繪を見つめながら寂しく笑つた。

「でも、僕は滅多に死にません。屹度立派な繪を作り上げて、あなたにお目にかけます。その時はこの繪は破いて下さい。完成した繪をお上げいたしますから……」青年は手の甲で無器用に眼をこすつて再び寂しく笑つた。

その後一度たよりがあつたきりで、靑年からは何の消息もない。

靑年は今日もまだあの同じレールの傍にしやがんで繪を描いてゐるのだらうか、それとも戀人を忘れて、繪のことも忘れてしまつて、新らしい夫となり、父親となつて、畑にでも出て働いてゐるのだらうか。

私は色々と靑年のことを想ふのであつた。

深い雪の底にカンバスを抱へたまゝ靑年が凍え死んでゐる姿までが、現實の出來事のやうな確實性を持つて、私の頭に描かれて來るのであつた。

「もし、靑年が生きてゐて再び私の家を探しに來たら、行く先きが分らないで困りはしないか知ら……」

次の瞬間には私は暗い靑年の繪を見つめたまゝこのやうなことを想像するのであつた。

過去四年間に、私たちのこの巢で起つた色々な悲しい出來事や、こゝに訪ねて來た忘れがたい友人のことなどが、それからそれへと想ひ出さるゝのであつた。

月に一度づゝは屹度私の玄關に門付けをして、蘭蝶などをうたつてくれた不幸な老婆が、私たちが引つ越したことを知つて寂しく思ふだらうなどゝも考へた。その老婆はこの橫町では私の家だけを賴りにして來るのであつた。私た

ちは老婆が月に一度、三味線をかゝへて流して來る夜をいつも待ち遠しく思つてゐた。

「それでは、いよ〳〵お引き上げとしませう！」歸つて來たおたねもさう言つて、なつかしさうにがらんとした家のなかを見まはした。

私とおたねとは手を分けて、まだのこして置いた近所の家々に挨拶まはりをすることにした。會社員の家だけには行かないことにした。未亡人の家にも私はたうとう聲をかけないで來てしまつた。

私は早く挨拶をすましてしまつて停車場のプラツトフホームにおたねを待つてゐた。

おたねは十五六分も後れてプラツトフホームにはいつて來た。おたねのコートも傘も雪で眞つ白になつてゐた。

「隨分寒いんですねえ。」と言ひ〳〵おたねは雪を拂つた。

おたねの眼にはいつぱい涙がためられてゐた。

「どうしたんだい？　そんな顔をして！」私はおたねの顔を見ながらたづねた。

「何でもないのよ。あんないやなところでも離れるとなると妙な氣がしますね。それに横町の子供たちがみんな出て來て、あの往來まで送つて來るんですもの……」おたねは涙を拭いた。

「僕にも、引つ越すの小父さん、つまんねえなあなんて言つてゐたよ。」

「えゝ、さうですみんな小母さんの家で引つ越すからつまらねえやつて言つてるんですよ。ほんたうに子供つて可愛いゝものですね。雪のなかをみんなでぞろ〳〵と送つて來てくれるんですもの。それに、ねえ、あの竹ちやんは悧巧ですね、小母さんまたおいでねツていふんですよ……」おたねは、さう言つては笑ひながら眼を拭いた。竹ちやんといふのは未決囚で歸つて來た男の一人子であつた。

「大町さんの奥さんも泣いてゐましたよ、あたしが挨拶に行つたら……」汽車に乘つてからおたねは思ひ出してさう

言つた。
大町さんといふのは、横町で私たちが一等親しくしてゐた京都の人であつた。
「やあ、しまつた！」と私は叫んだ。それは汽車を下りて、今度の新らしい家へ行く途中であつた。
「何うしたんです？」おたねが不安げにたづねた。
「大町さんの裏の家ねえ、あすこに挨拶に行つたかい？」
「あら、さうでしたねえ。行きませんでしたよ……」
「何だか、まだ行かなければならぬ家があるやうな氣がしてゐたんだが、たうとう、あすこだけ忘れちやつた。」
それは、横町の人たちと顔を合はせることを恐れるやうにして、いつも靜かに住んでゐる二人の老婦人の家庭であつた。二人とも品の善い、立派な母子の老人であつたが、私たちにはいつも叮嚀な挨拶をする人たちであつた。幾らか遺されてゐる財產を大事にしてつゝましい庵寺のやうな生活を靜かに送つてゐる人のやうであつた。その家には夏になると白い木槿の花が咲いてゐた。
「まあ、忘れたら仕方がないさ、わざ〳〵出直して行くにも及ぶまい……」
私はさう言つてすた〳〵歩き出した。その刹那にわけもなしに私は輕い溜息をついた。すべての別れ行く人間――(それは永遠に逢ふことのない)――の運命といふやうなことが、かすかに私の心に動いてゐたのであつた。
私は靑年の繪を雪に濡らさないやうに、幾度も持ちかへては雪の道を歩いて行つた。

生命の微光

自序

「力は孤獨から生まれる。」

生まるゝとき私はひとりであつた。生くるとき私はひとりである。死ぬるときまた私はひとりでなければならぬ。

この人生の見方は非常に淋しい。けれども非常に力強い。

愛慾、懊惱の人間生活の底に住して、靜かに人間の悠久な運命の姿をさながらに見出すことのできるものは「我れたゞ一人なり」といふ悟りの境に詣り得たる哲人のみにあたへらるゝ特權である。

私たちの人格が偉大なれば偉大なるほど私たちの孤獨の影は他から明かに區別せられる。

「我れ一人なり」といふ境に立つた時私たちは全世界、全人類を自分一個の所有とすることができる。全人類の愛がこゝから生まれる。

「我れ一人の友を持てり」といふ時、私たち自身は二分せられたのである。千人の友を持てりといふ人はかれ自身の千分の一のみを所有せるものである。

「我れ一人なり」と叫ぶことのできる哲人こそ、ほんたうにすべての時空を通じて、全世界と全人類とを持てるものである。

愛せんとして裏切られ、信ぜんとして欺かれ、たゞかれ一人となつて全世界から捨てられた刹那、かれは

始めて「力は孤獨から生まれる」といふ悲しい、しかしながら最も力強い聲を聽くことができる。キリストも捨てられた。ダギンチも捨てられた。ミケランゼロも捨てられた。そしてかれ等が眞實に寂しいかれ一人の影を見出した時、かれ等は眞實の道を見出すことができた。

秋になつて幾萬と數知れぬ木の葉は親木を捨てゝ散り散りに己がこゝろのまゝに散り行く。たゞ一つ冷たい巖石の上にとりのこされた親木は赤裸々な幹を守つて冬の風を待つ。けれども木の葉に裏切られた喬木は始めて直接に太陽の光りを全身に浴びることができる。そしてかれは來るべき春の新らしき嫩葉のためにいのちを準備する。孤獨なる哲人の悲哀のうちにのみ眞の光りが生まれ出づる。孤獨なる哲人の悲哀のうちにのみ新らしき世界といのちと愛とが生まれる。

涙をたゝへつゝ夜を泣き通したる者のみ朝の光りをたゝへることができる。光りを愛することができる。人生の愛に飢え、愛に裏切られたるものゝみ人生の尊さと懷しさとを知ることができる。

過去の幾年が間私はひたすらすべての人々に愛せられんことをもとめた。人々の愛を覓めて歩いた。私は愛の乞丐であつた。また私は或る人々を愛しようとした。そして何れの場合にありても私の愛は成功しなかつた。

私は人々を呪つた、人々をうらむだ。

けれども私は心の靜まるにつれて、愛をもとむる私の方法が如何に醜い乞丐の生活であつたかを少かに知ることができた。

私が與へんとしてゐる愛の如何に不純なるものであるかを知つた。

私は愛を貰うてもならぬ。愛を與へてもならぬ。まづ私は自分ひとりのうちに自分ひとりの寂しい影を見出さなければならぬ。

友を捨てよ、戀人を捨てよ、父を捨てよ、母を捨てよ。そして汝一人落莫たる人生の曠野に立て。

私には味方もない、敵もない。たゞ私ひとりが涯しもなき悠久の運命の下に淋しい孤影を見守つてゐる。

大地は悉く灰色である。そこに私のたゞ一つの孤獨の影が無限に投げられてある。

孤獨なるものゝ祈り！

私の生活がこゝから始まる。

より善く、より眞實なる生活を見出さんがために私は今孤獨者の道を歩いてゐる。

私の悲しみは人を愛し得ざるの悲しみでなく、人間の執着、愛慾を斷ち得ざるの悲しみである。「力は孤獨から生まれる」といふ孤獨者の生活を徹底的に味ふことのできぬ悲しみである。

生みの苦痛！　新らしき眞實の生活を生み出さんがために私は感傷的な人類愛慾の念を斷つて、たゞ一人の冷靜水の如き孤獨なる哲人の姿を見出さなければならぬ。

私は愛をもとめない、光りをもとめない。たゞ力をもとめる。我れ一人のうちに見出すかぎりなき哲人の力をもとめる。やがてそれが私の弱い生活に鐵の如き生活意志を與へんがために。

私は神の盃を待つ、でなければ惡魔の盃を待つ。

「生命の微光」は孤獨者の貧しき生活の收穫である。

私の弱い自己を叱する鞭であり、また孤獨者のさゝぐる祈りであり、人生觀照の嘆咏である。

私は非常に弱い微かな孤獨者の影を見出した。そして私自身この弱い愚かな自分をいたはる心の一日一日と切になつて行くことを感じてゐる。「生命の微光」は少かに見出し得たる淋しき生命の光りをあこがるゝ孤獨者の歌である。

大正五年極月二十九日亡友Tの墓に詣でし夜駒込にて

著　者　識

孤獨者の心

嬰兒は母の胸に縋る。かれが成長するにつれてかれは母の胸から社會といふもの〻懷に縋る。そこではかれは友を見出し、戀人を見出す。かれは眞實の生活がそこにあるのだと信ずる。けれどもかれの生活のよろこびはさう長くはつゞかない。人生の光りはやがて寂しい影に掩はれる。かれは友を怒るやうになる。戀人を呪ふやうになる。人類を憎むやうになる。かれは母の懷を去り、人類を去り、自然の懷にいだかれようとする。かれ一人のうちに寂しい孤獨を守らうとする。

都會といふ人間生活の渦卷を去つて、旅に出たといふ意識を持つた刹那に感ずる寂寞の後には、人類を去つて自然の懷にいだかれようとする遁世的な靜かな心持ちが涙のにじみ出るほど「鬪ひなき生活」を感謝してゐる。「船の上に生涯をうかべ馬の口とらへて老をむかふるものは日々旅にして旅をすみかとす古人も多く旅に死せるあり」と書いた俳人の出塵の心持ちが耐らなく懷しく思はれる。

生活といふことや鬪ひといふことが文學者や宗敎家といふ人々によりて火花を散らすほどに眞劍に論じられてゐる際に、このやうな囘避的な弱い心を呪ひたくもなる。けれども私は自分のこの心持ちを强ひて僞つてまで社會と一緒になつて戰ひへ戰ひへ！　と叫ばうとは思はぬ。

誰れかその「隣人を愛する」ことを忘れよう。誰れかその隣人と共に居り、共に生くることを欲しないものがあらう。かれは隣人を愛すればこそ隣人を憎み。隣人を愛すればこそ隣人を捨つるのではないか。隣人を囘避したるかれは弱かつたといふ批難は受けねばならぬかも知れぬ、しかしかれは僞らざる人である、かれは愛に生きんことを欲し

た人である。かれはトルストイが行かんとしたる道を行き、キリストが歩いた道を歩かんとした。たゞかれは善人であつたが、弱い人間であつた。しかし私たちはキリストにもトルストイにも弱い心のあつたことを知つてゐる。アバ父よと叫んだキリスト、寒村の驛路に斃れたトルストイを見るとき私たちはかれ等がかれ等以上の力をもとめんとした仍り一種の弱者であつたことを知ることができる。

キリストもトルストイも弱者であつた。しかしかれ等は最後まで人類を愛し貰かうとした。そこにかれ等の生活の力がある。弱い私たちには愛し貫かうとする勇氣がない。力が足りない。私たちは力を得たいと思ふ。

私たちは多くの人を愛しようとした。人を信じようとした。しかもその愛が事々に裏切られ、その信が事々に破壞せられたとき私たちは私たちの愛、信といふことについて疑をいだいて來た。「それはお前の愛が足りないからだ。お前は愛に對して何ものかを要求してゐるからだ。」このやうなことを私たちは考へさせられる。それならば私たちは愛に對して何ものをも要求してはならぬか。多くの宗敎家たちは「然り」といふに躊躇しないであらう。「愛することそれ自身が旣に愛の絕對目的である。」或る人はから敎へる。けれども實際私たちは愛に對して何ものかを要求してゐるやうにおもはれてならぬ。少くとも不完全な現在の私自身の心の裡に抱いてゐる愛といふ觀念のうちには相互の愛、相關の愛といふやうな意識がかなり濃い影を投げかけてゐる。そのやうな愛は眞實の愛ではない。それは自己を中心とした一種の欲求であると言はれゝばそれまでゞあるが、草木などに對していだく愛は別としても、隣人や家畜に對していだいてゐる自分の愛にはもつと〳〵極めて功利的な一種の報酬を豫期するやうな愛慾の影が潛むでゐるやうにおもはれる。すべてのものを與へて要求しないといふやうな聖者的な愛からは頗る遠い。もつと俗人的な、人間の煩惱に燃えた愛慾の念が強く私の心のなかに動いてゐる。

自分が人に對して愛を感ずるといふ刹那には少くとも自分は失はれてゐた「自己の半分」を見出し得たといふやう

な心がある。人生の孤獨といふことを強く感じてゐる自分にとつて自己の愛すべき人を發見するといふ事は「他の半自己」を發見したといふ歡喜を喚び起す。隨つてそこに二つのものを全一な結合に結び付けようとする欲求なり努力なりが生まれる。

「生ける屍」の主人公ヴアシリエヴイチ・プロタソフが別れた妻リザに對して抱いてゐた愛はやはり期待を持ち報酬をもとめた俗人間的な愛であつたやうにおもはれる。妻リザとギクタア・ミハイロヴイツチ・カレニンとの戀を知つたときかれは自分自身を捨つることによつて二人の幸福を祈らうと努めた。かれは自ら妻を捨て、家庭を捨て、猶太人の女歌手マシヤアと寂しい戀に落ちた。テニソン時代の詩人であつたならばエノツク・アーデンに描かれたものと同じくプロタソフの戀も美しい靜かな聖者のやうな犧牲として描かれたであらう。けれども現代人の複雜な苦惱を知つたトルストイはプロタソフを通して私たちに、自己の幸福を捨て、他人を愛するといふことの後に潛んでゐる深い人間的な懊惱や憎惡を物語つてゐる。プロタソフが自殺を決心してリザとカレニンとに送つた手紙には「リザ並にギクタアに呈す。自分は噓はつきたくない、それで「親愛なる」などゝいふやうな敬語はつけない。自分は君等及び君等の愛の幸福を考へる每に苦惱と汚辱の感を制することはできない……」と書いてゐる。これは自分を捨てた戀人のために、かの女の幸福を祈つて自殺をしようとしてゐる男の最後の手紙としては餘りに矛盾多いやうにおもはれる。けれども多くの愛に敗れたる人の犧牲心のうちには、このやうな復讐的な念が動いてゐるのは事實である。プロタソフは終に法廷で二人の戀愛を祝福して自殺した。しかしその心にもやはり何等かの要求がなかつたとは斷言されない。かれは「不幸なる戀の失敗者として犧牲者としてかれ自身」を二人幸福なる胸に刻みつけて置きたかつたのではあるまいか。

私たちの愛が不純であるか、または聖化せられないものであるか、そのためにこのやうな悲劇が生まれるとしても、

私たち自身――多くの人々――の愛といふものがこのやうな本質を持つてゐる以上私たちはこの種の愛を捨てゝ、もつと聖なるものとなれ、博大な愛となれとのみ叫ぶばかりではまだ眞實に人間の苦惱を知つたとは言へない。この完からざる人間愛の情焔のなかに人間は踊り、人間は狂死してゐる。

私は人を愛したいと思ふ。けれども愛の後にひそむ裏切りの穽を恐れる。私は人を憎まなければならぬ。自分ひとりでなければならぬ。しかし耐らなく寂しい。どこかでまだ人を信じ、人を愛しようとする純な心の閃きがある。私は無理にもその純心の閃きを打消さうとしてゐる。

路傍の一本の若樹は光りへ光りへと伸びて行つた。道を往き來する人々は若樹の幹を傷け梢を折つた。今までは素直な柔かい幹であり枝であつたものが、醜い隆起や裂け目を持つやうになつた。そして不揃な頑な樹皮で掩はれるやうになつた。往き來の旅人等はさらに傷けたり折つたりした。若樹はやがて老木となつた、そして嘗て傷けられ裂かれたる幹は岩石のやうな醜い頑丈な皮で掩はれるやうになつた。人々は醜い頑な幹を見た。けれども誰れもが醜い老木のうらに若い芽生えや柔かな葉が光りへ光りへと伸びてゐることに氣付かなかつた。そこは旅人の暴威が達し得ない高い梢のうらであつた。

頑な心にならうとする私自分の心のどこかにまだ柔かい信愛の心が動いてゐることを感ずる。やがてはその柔かな梢も枯れてしまはなければならぬ事を想ふと寂しくてならぬ。

私がこれを書いてゐる朝久しいこと逢はなかつた友人から、近々に逢ひたいといふ手紙を受けとつた。私の心は無性にうれしかつた。私はたゞ一人で生きて行かうといふ孤獨をよろこぶ私の心から、かれには久しく逢ひもせず、たよりもしなかつたのであつたが。

仍り人はなつかしい、無性になつかしい。かれが私の家を訪ねて來るのを待たないで今夜にも自分の方から出かけ

て行きたいと思ふ。

けれども私の冷たくなつた心が叫ぶ。「あるものをしてあるがまゝにあらしめよ。お前はたゞ一人で家にゐれば宜い。そして來るものを喜べ、去るものをも祝福しろ。お前自身から愛しようとするな。愛せられたならそれだけの愛をかへせ。信じられたならそれだけの信をかへせ。お前はお前一人のなかにぢつとしてゐれば宜いのだ。」

私は愛したい。けれども愛の後に來る悲しみを想ふ。裏切らるゝ寂しさを想ふ。

「私は人を愛する心を殺してひとりで眼をつむつて居よう。人が溺れて行く水音を聽いても動くまい。路傍に飢えたる者を呪つてやらう。

虐げられたる人々を呪つてやらう！」何といふ恐ろしい誘惑であらう。

「自分ひとりに寂しく生きる强い人間にならう！」何といふ悲しい誘惑であらう。

さらに私たちが悲しまなければならぬことは、これ等のかたくなゝ愛すらもやゝもすれば私たちは失はんとする危機に接してゐることである。少くとも自分一個にとりてそれは恐ろしい誘惑であると思つてゐる。過去に於いて私たちは幾度か人を信じ、人を愛しようとした――その愛は通俗的な愛であつたにせよ――しかも幾度か裏切られた時私たちは人を信愛することから來る苦痛を恐るゝやうになつた。愛することや、信ずることのばかばかしさを感ずるやうになつた。何といふ恐ろしい誘惑であらう。

俺は俺である。他人は他人である。自分といふものを失はない限りに於いて人々は互に相愛し相信じてゐる。私はこのやうな寂しい、しかしながら赤裸々な自分のこの利己的な心を見出さなければならなくなつた。少くとも過去の或る時代に於いては殆んど自分を捨てゝまで人を愛し、人を信じ、人に賴る心を持つたと想つたこともあつた。それは少年時代の夢をよろこぶ心の空想に描かれた愛であつたかも知れない。しかしながら人を信じ愛しようとする心は絶

えず燃えてゐた。それだけ人生といふものに努力や希望を感じた。けれども今日の私は成るべく人との接觸を避けて、人を信じ、愛することから離れようとしてゐる。愛しようとする心と愛すまいとする心の鬪ひがある。信と不信との鬪ひがある。

嘗ては「半自己」を他人のうちに見出すことにせめてもの希望を持つた私は全く自分自身のうちにのみすべてのものを見出さなければならなくなつた。生まれるとき孤獨であつた。生くるとき孤獨である。死ぬるときまた孤獨である。人間はしか運命づけられてゐる。この考へかたは寂しい、けれども强い、非常に强い。

私は嘗て老人の心に接したとき、かれ等が若い人々の好意をよろこびつゝも、その一面に於いて警戒を怠らなかつたことを不快に思つたことが幾度もあつた。しかしかれ等が過去の幾十年の間欺かれ、裏切られた悲しみを經驗したであらうことを想つた時、私は老人の頑な冷たい心を氣の毒だと考へるやうになつた。一日一日と荒び行く私の心がやがてすべてのものを疑ひ、すべての愛を拒む老人の心となるのではないか。

「力は孤獨から生まれる!」

罪人の涙

神のいのちの杯から溢れ出るもろ〳〵のちから！　よろこびとなり、かなしみとなり、光りとなり、暗となり、義となり、罪となる吾等の世界のもろ〳〵の顯現！

靈しきいのちの神よ。私に今爾に面して、昔イスラエルの子等が「全地よエホバにむかひて謳ふべし。エホバにむかひて謳ひその名をほめよ。日ごとにその救をのべつたへよ」と謳つたことばをくりかへす。

しかし神よ私のほめ歌の聲は餘りに悲しみに充たされて居るではないか。私はイスラエルの子達の心を疑ふことさへある。またかれ等が殘して行つたほめ歌の餘韻に言ひしれぬ悲しみの顫ないて居ることを知る。

かれ等は川のほとりに立琴を擁いてほめ歌をうたふ。エホバをほめよ、神をほめよ、しかしながらその聲の悲しいことよ。牧者を見失へる小羊等が、かはたれ時の薄暗にかすかなる光りを見出したる時のやうに、かれ等は悲哀の底からわづかに顫き出る嘆詠の聲を放つて居るのではないか。

小羊のむく毛を見よ。夕暮れの冷酷な寒さと灰色の風とにおびえ立てるかれ等のむく毛を見よ。しかもかれ等は耳傾けつゝあて途もなく森から森を、野から野を、はてしない空漠の世界にさ迷ふのではないか。かれ等の常住は疑惑である、恐怖である、驚異である。丘といふ丘、空といふ空は灰色につゝまれて居る。雲の隙間から少かに洩れて來る夕べの光りは、暗と迷路に彷徨へる小羊等にとりては、自ら嘆詠驚異のこゝろを眼醒ましめる。私達の先人がエホバをほめたゝへた心持ちは夕暮れの野をさ迷ふ小羊等がかの光りをたゝへたるそれと同じではあるまいか。

舊約を通じて、殊に詩篇を透して聽く昔人の神榮讃嘆の諸律は、その背景として、その底調として人間の孤獨、人

生の絶望、翹望してしかも見出し得ざる人生の眞實、或ひは不安、恐怖、惑溺を考ふることなしには解釋することはできない。

絶望のなき所に希望なく、哀傷のなきところに法悅はない。罪のなきところに義なく暗のなきところに光りはない。嘆詠は苦痛が生みたる花瓣である。光耀は暗黒から絞り出されたる閃光である。歡喜は絶望の湖面に泛かび出でたる泡沫である。惑溺の深潭の底を潜ることなしには、湖面の泡影は永久に光被せらるゝことはない。

私達は六月の朝の睡蓮を見る。その神の如く淸らかな花瓣、その乙女の如く氣高いかをり、その嬰兒の如くまどろめる面影、そこに私達は自然界のあらゆる美と平安と歡喜と悠久のいのちとが潜んで居るやうに想ふ。しかしながら私達は湖面の底へ下つてそのなよやかな莖と、暗き土にはひまつはつてゐる細い幾百條の根とを忘れてはならぬ。その莖と根は絶えざる外力の抵抗に對して鬪ひつゝある。根と莖と悉く爭鬪と暗黒の脅威に包まれつゝある。さらにかれ等を抱ける大地は暗と悲哀のうちに眠つてゐる。原子と原子とを結び着くるちからは悲哀の流動である。分子と分子とを包みて一つとするちからは暗黒の漂動である。原子は眠れるちからである。原子は貯へられたる潜勢である。原子を眼醒ましめて流れゆくちからとするものは悲哀である。暗黒である。原子は野にやすらへる旅人である。悲哀と暗黒とは旅人の春眠を吹く微風である。悲哀はちからを眼醒ましめ、暗黒はちからの在るところに常住の世界を見出す。

影は體に副ひ悲哀はちからに副ふ。しかも根本的にちからの表現としての體を見れば、影あつて體があり、悲哀と暗黒とがあるが故にちからあり、歡喜あり、光明ありと云はなければならぬ。空の鳥あるが故に聲あるのではなく、聲あるが故に空の鳥があるのではないか。

今、私の窓を透して六月の空が曇つて見える。淡綠の若葉につゝまれた白樫の幹は黒く、幾條の梢はさも輕げに新

綠の嫩葉を支へて居る。巣立つたばかりの雀子はいた〳〵しい聲を絞つて母鳥の餌をせがむで居る。これ等の現象を、たゞ假象の上にあらはれたる梢の雀としてのみ見る時、私は之に對して何等の同感も理解も持ち得ないであらう。私がその聲を聞くとき、私がそのいた〳〵しい羽叩きの音を聽くとき、私はかれ等と私との間に横たへられた時空の觀念から、まつたく超越して、かれ等と私とが一つの渾然たる、悲哀の中に一つのちからのあらはれとしてそのかなしみを感ずるとき、私は眞實にその傷ましい聲に泣き、そのやる瀬ない翹望の心を掬むことができる。

表現は假象である、假象は虛像である。表現としての體、假象としての聲すべて刹那的である。假象としての時が短ければ短いほど私達は眞實のちから眞實のいのちの沈潜を直感することが確實であり、端的である。聲は相よりも端的である。聲は相よりも刹那的である。聲は隨つて相よりもより確實に、より端的に私達をして、いのちを直感せしめる。

凡そ世界にあらゆるものゝ一つとして滅びないものはない。その滅び逝くが故に、そこにいのちがあり、ちからがある。寂滅は眞のいのちに歸る門であり、眞のちからに入る階段の第一步である。

端的に、刹那的に、自我のちから、自我のいのちを燃燒し行くところに生命の美があり、法悅がある。いのちは暗黑であり、悲哀である。しかも端的に、刹那的に寂滅し燃燒し行く時にちからとなりて、美と法悅の炎をかゝげる。無限に積み重ねられたる影と悲しみとのいのちはたゞその端的なちからのうごめきに於いてのみ光被せられる。深き暗と悲しみとの底から溢れて來る泉は巖を突いて陽の光りを浴びる刹那にのみよろこびを感じ、光明を感ずるであらう。暗と悲哀は湖面を貫いて一直線に地心の一點にまで達しつゝ喘いでゐる。地球はその最極軸心に至るまで暗と悲哀の重荷にうなだれて居る。いのちは其處に眠つて居る。悲哀と暗とがいのちを眼醒ましめるとき、いのちは頭を擡げて、そこにちからとなり、湖面には乙女のやうな睡蓮が咲く。

暗と悲哀の無限な連鎖を引きずりながらたをやかな睡蓮が湖面に咲いてゐる。尼僧のやうな虔しやかな睡蓮を見るとき、私は地軸にまで連なる悲哀と暗の連鎖なるその細き根莖を想像せずには居られない。美しきヒヤシンスが咲く。しかもそれは地軸に達するまでの悲哀と暗とを引き摺りつゝ、一點の紅花を地の表に咲かせるのである。

香のいゝカアネエシヨンが咲く。しかもそれは永遠の時空にわだかまれる悲哀と暗の端的な燃燒寂滅の刹那としてである。

美しきすべてのものをうたへ。美しきすべてのものをたゝへよ。美は永遠の悲哀と暗黒の端的な實在であり、燃燒であり、唯一絕對の光被界である。たゞ零碎一點の睡蓮の美を生まんがために大地を支へつゝある大なる暗黒と悲哀とが悶へなやみ苦しみつゝあることを想へ。

無限大なる生みの苦痛を知る時、私達は悲哀と暗黒との端的な表現、端的な燃燒としてのいのちのうごめき、美の誘惑に對して、すゝり泣く程の懐しさと、偉さを感ずるであらう。

美は美であるが故に美であるといふのは、まだ眞に美を知り、いのちを知り、ちからを感じたる人の言葉ではない。無邊甚深の懊惱に鉛の如く漂うてゐる黒い海の潮吹こそ美であり、光りである。私達は相擊ちては滅えて行くしぶきの運命を悲しんではならぬ。そこに美があり、完成がある。私達はしぶきの壞滅を悲しむよりも、しぶきの美、しぶきの光りを生んだ無限の悲哀そのものとしての黒い海の底、さらに宇宙そのものゝ悲しみを悲しまなければならぬ。私達は落花をいたむことの前に花を生んだ大自然の悲哀と暗黒のもだへを悲しまなければならぬ。

黒き土は悲しんでゐる。枝頭には美しい花がこぼれて居る。

エホバよエホバよ爾をたゝへまつる吾等の祖先のほめうたが、黒き土から萠え出でたるサイネリヤの花瓣のやうに、無限の暗と、無限の悲哀から絞り出されたる刹那的な歡喜、自我を燃燒し盡さんとする端的な法悅でなかつたかを私

は疑ふ。

いのちは常に暗である、悲しみである。ちからとなりてあらはるゝときそれは美となり光りとなる。美となり、光りとなるときそれは寂滅であり、死である。暗き悲しみの土は人間となり、サイネリヤとなり、金絲雀となる。土は永遠に生きて泣き、永遠の暗の中に眠る。人間とサイネリヤと金絲雀とは刹那的に生きてよろこび、刹那的に光りのうちに踊つてゐる。

こゝに於てかすべての顯現は最も美であり、光りである。私達がいのちの顯現としてこゝに生き、こゝに呼吸し、こゝに泣き、こゝに懊惱しつゝあるときそれは最も尊き刹那である。永劫の時のうちたゞ一度のみ賦へらるゝ美と光りの刹那である。人生の尊さは寔にこゝから生まれて來る。

涙をもて麵麭を食ふたることなき人に麵麭の味ひを知ることの出來ぬやうに、涙なくして人生を見たる人に眞の人生は味はゝれない。

夕暮の嵐と、晦瞑と、寂寞と絕望とに追はれたる荒野の小羊が、少かに暮れやうとする夕雲の隙間から流れて來る疲れたる光りを仰ぐ讃嘆の念は、やがて久遠の悲哀と暗黒とを盛れるいのちの杯を捧める眞人の心である。涙なくして美を慕ふ人あらば、まだそれは人を解せず、美を解せないからである。涙は絕對の權威である。

私達の自我が、その故鄕のいのちを忘れたるとき私達の胸から涙が涸れてしまふ。實に私達のいのちの故鄕と私達とを結びつけるものは、或ひは私達の個的自我と根源的自我とを連ね、私の胸のときめきが、宇宙的生命のときめきであることを感ぜしめ、私の刹那的ないのちと永遠のいのちとの脉管を通ぜしめるものはたゞ私達の涙である。

罪人が泣いたとき、かれはその刹那に淨められる。蓋しかれの涙はかれの個的自我が犯した罪のすべてを根源的自我のいのちの海にそゝいで行つたからである。そこには罪もなく、義もなくたゞ暗と悲哀とが永遠の影を泛かべて漂

うて居るばかりだ。そこには罪人も聖徒も同じいのちの流れに浸されて、永劫の暗と悲哀とに眠つて居る。

人生に於ける罪とは、本然のいのちの外殼を掩へる灰色の紗衣である。または沙塵である。私達のいのちが涙によりて本然のいのちのなかに立ちかへるとき、その紗衣は捨てられ、沙塵は洗ひ浄められる。いのちは實在である。罪は假象である。假象は實在の世界に潜入することはできぬ。いのちは靈である。罪は物質につけるものである。罪は終に靈を汚すことはできぬ。

かくして人間を見る時に、そこに冒すべからざる人間性の尊さが明らかになつて來る。靈なる人間性を見る時、獄底の人も亦靈なるいのちを他にして考ふることはできぬ。柿色の獄衣、冷たき鐵柵は靈なる人間性のいのちの尊さに觸れることは出來ぬ。

涙！　涙！　悲哀と暗黒とを鞭打ちて眠れるいのちを眼醒ましめるものは涙である。涙のあるところにいのちがあり、ちからが生まれる。涙ある處にそこに聖い世界が創造される。

心の貧しきものは幸なり、涙を知れるが故である。悲しみあるものは幸なり、靈そのものとしての人間性を見ることが出來るからである。

私は涙を知らぬ賢き人となることよりも、涙を知れる愚な人となることを欲する。涙なき賢人は常にいのちの骨組みを見　悲しめる愚人の胸は常にいのちの流れと、いのちの温みとを感ずるからである。

啄木鳥

啄木鳥！　啄木鳥！
お前はなぜ一度も美しい歌をうたはないのだ。
お前の胸の底にはどんな懊惱が湛へられてあるのだらう。
お前はなぜうたはないのだ。
木を啄くお前の嘴からは血が流れてゐる。
お前はうたはない。けれどもお前が木を啄く音は鸚鵡の歌よりも尊い。

×

「イエス之に曰ひけるは狐は穴あり、天空の鳥は巣あり、されど人の子は枕するところなし。」
革命家としてのキリスト、舊い宗敎、舊い道德に對する反抗者としてのキリストの生活の底から絞り出された言葉として最も人間らしい人間の叫びではないか。
革命家といふ言葉のうちにはいろ〳〵な意味があり、種類がある。たとへば舊いイズムに對して新しいイズムを主張するものも革命家である。けれども新しいイズムが私たちの人生をより濕ひあるもの、より眞實なものとなさないかぎりは革命は無意義である。今日の人民の味方が明日は人民の敵となるやうな革命は最も憎むべき革命である。
キリストは弟子に賣られたる革命家であつた。けれども古來弟子を賣つた革命家の多かつたことをも記憶しなければならぬ。

愛に生ける革命家は何時も孤獨であつた。人類を愛したる革命家は人類の刃に斃れた。古來人類は常にかれ等の恩人を敵として滅ぼした。

第一の鐘を打つ者は常に兄弟の呪咀を浴びせかけられた。

×

新しき酒は新しき革囊に容れなければならぬ。新しき革囊のみをかゝげて舊き酒を强ひんとする革命家ほど憎むべきものはない。

新しいイズムには新しい人格がなければならぬ。イエスの新しい福音はイエスの新しい人格によりて始めて意義を持つことができた。私たちは今日餘りに多くの新しいイズムを見出すことができる。けれども新しい人格としてのキリストが果して幾人あるであらう?

「自由を與へよ、然らずんば死を」と叫んだ人々のこゝろのうちには博愛なる觀念が强く動いてゐた。そこに始めて革命反抗の意義があつた。けれどもその「自由」がやがて個我々々のための「自由」といふ意味に用ひられた時、かれ等の共和制は腐敗した。

パンを與へよと叫ぶ者がある。それが全民族のため、全人類のための叫びであるならば、それは美しい反抗である。けれどもかれ一人のための要求の上に立つた叫び聲である時そこには既に不純なものが混じてゐる。

×

自分が窮乏の極にある時隣人の貧困をあはれむことは容易い。自分が暖い衣と豐かな肉を持つてゐる時隣人の窮乏を愍することは困難である。私たちが眞の宗教家たり、革命家たり得ないのはこゝにある。

眞の宗教家たり、眞の革命家たることを希望するものは畢竟キリストの生活さながらの生活を生きなければならな

いのではあるまいか。

人の子は枕するところなしと言つたキリストの生活まで行くのでなければ眞實の革命家は生まれ得ないのではあるまいか。

キリストは一生孤獨であつた。かれは家をも持たなかつた。かれがもし今日生きてゐたとしたら恐らくは無一物の乞丐のやうな生活を送つてゐたのではあるまいか。

キリストも一生家を成さなかつた。かれは貧しい人々の友であつた。釋尊も家を捨てた。孤獨者の愛、一人者の愛、それが救世者としての第一の資格ではあるまいか。

平凡人の生活は樂しいホームのうちにある。偉人の生活は悲慘なる孤獨のうちに生まれる。わたしたちは樂しまんがために生きてゐる。偉人は苦しまむがために生きてゐる。十字架を負はんがために生きてゐる。

一枚の衣を脫いで赤裸々な路傍の人に與へることのできぬ自分に何で神をあがめる資格があらう!

私の心はかう叫ぶことがある。

俺は倘つと豐かな生活をやつて見たい!

同時にこのやうな欲望が湧いて來る。

キリストや日蓮や幾多の乞丐のやうた貧しい生活の聖徒たちを懷しくおもふ。

×

歐羅巴や亞米利加からは神の子は生まれ得ない。それは神の國と共に富の國を建設しようとしてゐるからである。

キリストは人は二人の主に仕ふることはできないと言つた、人間は乞丐になつて靈の國の王となるか、富者となつて天國の餓鬼となるかでなければならぬ。

貧人の友であるキリストの敎は歐羅巴に傳へられて貧人の友であることよりは富める人の友であるやうになつた。宗敎の發芽は亞細亞の地にかぎられてゐるやうにおもはれる。

ユダヤの貧人の宗敎がローマの黄金の殿堂にあがめられた時それは生命を失つた。印度の寂しい佛者の敎が、奈良や京都の大伽藍の奧にあがめられた時佛敎はその生命を失つた。

宗敎はどこまでも貧人の宗敎であらしめたい。

ミツシヨンといふ言葉ほど感じの惡いものはない。さらに傳道會社などゝ譯される時嘔吐を催したくなる。ミツシヨンとは傳道師を製造するところであるやうにおもはれる。かれ等は宗敎は製造することのできぬものである事を知らないのであらうか。

外國の傳道會社から送られて來る所謂傳道師なるものを見るごとに私は何時も宗敎の事務家といふ感じを懷かずには居れない。

ナザレの大工の子イエスよ、おん身の折々の赤貧の涙は今や多くの豐かなるビズネスメンによりて系統的に組織立てられ、機械によりて甘き砂糖となりて販賣せられてゐる!

私はかう叫びたい。

×

或る時、或る男の作品が當局の忌諱に觸れたといふ噂があつた。かれを知つた多くの人々は色々な心を持つてかれを見た。かれは二十日餘り不快な一室に閉ぢこもつて考へてゐた。誰れもかれの寂しい心を知らうとつとめるものはなかつた。みんなが一種の interest を持つてかれに接した。かれは interest の上に集まつて來る周圍の人々を憎んだ。

かれはその時面と向つてかれの作を攻擊して吳れた一人の先輩を最も懷しいとおもつた。

×

銀座の通りから左に折れて出雲橋の袂にかゝつたときであつた。正午ちかくであつた。橋の欄干には人々がたかつてゐた。一人の巡査と二人の若い男が水棹を持つて濁つた水を掻きまぜてゐた。

水死人でせう！

女でせうか、男でせうか？

人々の眼には恐怖と好奇心とが輝いてゐた。

そしてそれが男でもなく、女でもなく、たゞの野良猫であることが分つたとき人々は一緒にどつと笑つた。私も笑つた。

私は冬の陽を浴びて小牛町も歩いてゐた。

私の心が急に淋しくなつて來た。

私はなぜ猫の死を笑つたのだらう？

人間といふ殘忍な動物！

×

未知の人から自分の書いたものに對して共鳴を感じたことを書いて寄越されるごとに私はせめてそれを自分たちのプロフエッションに對する慰めともし、はげみとも感じてゐる。そして世界の何處かに自分と同じ寂しい道を歩いてゐる人のあることに言ひ知れぬ心强さと慕はしさとを感ずる。けれども私はそれ等の人々が餘りに多く自分に期待されてゐることを考へると、自分といふものが恥かしくもなり、そら恐ろしくもなる。そして自分の作を讀むでくれた人々から文通や面接を求められるごとに幻影破壞の悲劇を人々に實驗させる自分の貧しい實際生活を悲しまずには居

れない。

私は hero でありたい、historian ではありたくない。

×

かれは非常に私を愛してゐた。私はかれを最も愛すべき友人として愛してゐた。けれども私が二日三日續けさまに眠れないやうな苦痛がある時も、かれはすや／＼と眠つてゐた。

お前はなぜ俺と同じやうに眼をさましてゐないのだ。俺の悲しみはお前の悲しみではないか。

私はかう言つて友を責めた。友は靜かにうなづいた。かれはまた眠りに陷ちてゐた。

×

私の周圍には未だかつて一度も結婚といふやうなはなやかな集合はなかつた。年々たゞ寂しい人々の死のみが繰返されて私の前を徂徠する。

×

戰爭を肯定したといふので多くの人々に呪はれてゐるニイチエは非常にセンチメンタルなところのある可憐な男のやうにおもはれる。氣の弱いやさしい男であつたやうにおもはれてならぬ。海拔六千尺のアルプスの一角に立つたかれ！　ロシヤの女を見送つて泣いてゐたかれ！

×

私はこのころ祈らずには居れない寂しさを感じてゐる。そして祈る言葉のない寂しさを感じてゐる。

×

誰れをも愛せなければならぬことを私は知つてゐる。けれどもその愛が不斷のものでない悲しみを繰り返してゐる。

どんな惡人でも或る刹那だけは自分に對して愛を喚びさまさせることがある。願はくばその刹那が永續的であれ。キリストの愛と私たちの愛のけぢめは永續的な愛と刹那的な愛のみにあるのではあるまいか。

×

私は時々客觀的な神の實在を信じようとする。そして偏りに固まつてゐる自分に何等かのよろこびを賦へてゐる神に感謝せずには居れないことがある。

旅から旅へ

かれが死んでから雨の日が幾日もつゞいた。殊に私が東京を立つた日は近ごろにないきつい雨と强い風が荒れ狂ふてゐた。窓を閉ぢてしまつた汽車のなかは人いきれと煙草の煙とに鎖されてゐた。川崎、羽田、横濱と見渡すかぎりの平原は濁流に埋められてゐた。雨のなかを走つて行く窓に近く、雨に打たれた黑い木柵と赤いレールと今にも折れさうに撓められてゐるポプラーの枝とが、寂しい旅立ちを一層感傷的なものにした。

それでも汽車が函嶺にかゝつたころは雨の勢も大分衰へて窓からは快い風が吹き込むで來た。高い峰々を繞つてゐる霧と深い谿底の濁流とが過ぎ去つた嵐のあとを物語つてゐた。蜩の聲が一しきり涼しい風を送つて來た。三島見當の平原に夜の燈がちら〳〵する。今しがたまで見えてゐた秋草の色も一様に黃昏の薄暗のなかを沈むで行つてしまふ。

心の底にかくされてゐた新愁が靜かに頭を擡げて來る。西の空の暗のなかゝら少かに雲の隙を通して夕陽の名殘りがほの見えてゐる。

汽車の窓から洩れる明りに沿道の黍畑や水田が消えてはまた連なる。

Tの俤がまた私の心に泛かぶ。汽車の走るがまゝに山に沿うた家々の燈が走つて行くやうに、Tの俤がまた汽車につれて走る。臨終の床に横たはつたTの俤や、赤城山から歸つて來た折の旅行姿のかれの俤が窓の前の暗のなかを走る。

Tは死んだ!

私はTの死を疑ふ自分の心を叱するやうに幾度も心のうちに叫んだ。汽車は西へ西へと暗のなかを走る。私は死に

ついて考へないでは居られなくなつた。死について考へるごとにおもひ出すのは樂天的な死の見かたをしてゐるメェテルリンクの未來觀のことである。私にはメェテルリンクのやうな明るい死後といふものは想像することはできない。かれの見方によれば現在の生活よりもさらに次來世の生活は光明であり自由であるやうにおもはれる。しかしメェテルリンクの死の見方は餘りに空想的でありはしないか。現在親しい者を失ひ、親しい友を失つた人々にとつて何うして死後の光明や解放といふやうなことが考へられよう。メェテルリンクの死の見方は少くとも死といふ人生の科學的一現象を取り扱つてゐるだけのことであつて、亡くなつた親しい人々の死について考へてはゐない。この點に於いては私たちはむしろテニソンのイムメモリアムに深い懷しみを感ぜずには居れない。死者をいたむ心は人を亡へる人のみ感ずることができる。ハムレットの苦痛はホラシオにはわからなかつた。

汽車は幾多の鐵橋を走つた。眞夜中ごろ眼ざめた私は窓を開いて外を見た。そこには雨の音も風の聲もなかつた。汽車は平原を走つてゐた。滿天の星河そゞろに秋の近きをおもはせるものがあつた。

Tは死んだのだ。

私の心にはまだ深い暗愁が喰ひこむで來た。

このやうな星の夜であつた、二人は平原を橫切つて地平線の彼方に沈むでゐる燭を追ひもとめて旅の夜を步いたこともあつた。そこには野菊の白い花瓣が星明りの下にかすかに薰つてゐた。狹霧にこめられた丘のかげからは水の流れや水車の音が夢を誘ふやうに聽かれた、先きに立つて步いてゐたかれの姿が大きな影像のやうに霧のなかにぼかされてゐることもあつた。朝霧の下に靜かに橫たはつてゐる平原の町を見ながら、私たちは丘に立つて水筒の水を傾けたこともあつた。

Tの影がまだそれ等の霧深い平原のなかをさ迷ふてゐるやうにおもはれてならぬ。私は窓を通して幾度か外の平原

を眺めた。Tが夜の道を歩いてゐるやうにおもはれてならなかつた。

×

寢ぐるしい夢から覺めて私は窓を明けた。空はやゝ曇つてゐた。汽車は朝の琵琶湖を右に見ながら走つてゐた。煙のやうな雨雲の脚が消えがてに湖水の面に垂れてゐたりした。桔槹を並べた田畑には露に濡れた楡栁が淡い影を投げてゐた。

瀨戸内海に沿うた家々の周圍からは向日葵や杏竹桃が咲いてゐるのが見えた。旅に出たといふ感じがしみじみと湧いて來た。正午ちかく私はF驛に下りた。砂利が正午の日光に焦りつくやうに熱してゐる道を歩いて、私は山陰道境に行く輕便鐵道の方へ行つた。學生時代に歩いたことのある山道には狐草や百合などが、咲いてゐた。私は始めて姉を訪つてこの山里のなかに來たころのことを思ひ出した。

玩具箱のやうな小ひさな汽車は桑畑や黍畑のなかを靜かに走つて行つた、番小屋見たいな幾つもの驛を通り過ぎて汽車は國境へ國境へと走つた。

驛に下りた時、畑に立つてゐた人々は鍬の手を止めて私の方を見た。小高い丘の上に白い塀の家を見出したとき私の胸は小さく波打つた。兄は葡萄畑にしやがむでゐた。私が聲をかけるまで私を知らなかつた。兄の顏は昔とすつかり異つて土のやうに焦げてゐた。

「葡萄も一段歩二百五十貫は上るやうになつた。」

「姉さんは春の養蠶で三百圓だけとつた。」

「養鷄も農家の副業としては有利な事業だ。」

「いや田を持つてゐたんぢや公債の利子にも合はぬ。租稅にとられてしまふのでなあ。」

「大隈内閣は評判は宜い、しかしあの紙幣の處分については大分この附近でも大損害を受けたものがある。破産者もできた。」

畑から歸つて來たばかりの兄は土によごれたまゝの手で麥湯をあほりながら元氣のいゝ聲でそんなことを話した。葡萄や蜜蜂の話は私の興味をひいた。殊にこの方面の知識についてはまつたくの素人であつた筈の姉が今ではいつぱしの職業者になつてカニオラン蜂だの、晩秋蠶だのといふやうなテクニックを使つてゐることが私には不調和にも滑稽なやうにも思はれた。けれども今日の内務大臣が誰れだか、ともすれば總理大臣の名さへ忘れようとしてゐる私のやうな人間には兄の政治方面の話などはつまらなかつた。

生活に對する私たちの見方は、死に對するメエテルリンクの見方と同じ立場にあるやうな氣がする。田園の農夫たちは心靈の世界を忘れてゐる。けれどもかれ等は現實の世界に於いて餘りになすべく多くのものを持つてゐる。都會人は書を讀み、ライブラリイに入り、人の講演を聽き、思想を論ずる。そこから人生をつかみ出さうとしてゐる。

田園のかれ等は薄明のなかに起き、田に入り、葡萄畑に働く。炎熱と戰ひ、寒氣と戰ひ、重税と苦闘する。世界には全くちがつた二つの生活があるやうにおもはれる。私たちは何れの世界を選ばなければならぬか。その何れの世界にも入ることのできぬ多くの人々のうちの私は一人であるやうな氣がする。私たちは鋤をとるべきか。書を捨つべきか。何れかに迷ふ。田園に入りて詩を賦すといふことは都合よき私たちの希望である。けれどもそれはたゞ空想のみ。劍とコーランとを一人が所有することは矛盾ではないか。劍か然らざればコーランかその何れか一つのみ所有すべきである。田園の兄の生活はいろ〳〵なことを私に考へさした。

夜の十時私は兄の家を捨てゝまた桑畑のなかの小驛に行つた。兄は提灯をかざしては幾度か立ち止つて桑畑を見た。

山間の小平原の夜は殊に寂しかつた。たゞ一つか二つの燈が彼方此方の小山に沿うた高地に明滅してゐた。秋近い平原には蟲の聲が時雨のごとくわびしかつた。

兄と姉と作男と三人が汽車の窓に面して立つた時私は想つた。

「人間は別れなければならぬ。死なゝければならぬ。」何でもない人生の常套事がその夜は殊に深い悲しみをもつて私の胸に應へた。

汽車は動いた。桑畑を過ぎて、竹藪を横切つて汽車はF町の方向へ下つて行く。私は振りかへつて姉の家の方向を見た。一様にとざゝれた暗の底には燈の影も見えなかつた。空には銀河が白く流れてゐた。

×

眞夜なか頃私は水を隔てゝ宮島の燈を見た。島も眠り、海も眠り、夜も眠つてゐる間に幾連の燈火が靜かな瀏頭に光脚を垂れてゐる。燈も眠つてゐる。平家の一門の悲歎がこの邊から旅人の心に哀調を誘うて來る。

夜が明けて汽車は青い稻田のなかを走つてゐた。露を帶びた芒の穗が汽車の窓にすれ〴〵になびく。蜑の子が靜かな朝の海に見入つてゐる。壇の浦とおぼしきあたりを幾つもの眞帆片帆が動くともなく動いてゐる。

ドストイエフスキイの「貧しき人々」を出して見る。貧しい年寄つた男から若い女にやつた手紙のなかには他のドストイエフスキイの作に見ることのできる寛容な男ドストイエフスキイ自身の心がこゝにもうかゞはれる。若い女は年寄つた男の親切と愛とを感謝しつゝも他の若い田舍の物持ちの男に嫁いで行く。「妾はあなたを愛してゐる。妾はかれを愛してはゐない、けれども生きなければならぬ、妾はかれと結婚しなければならぬ。」これが多くの場合嫁ぎ行く多くの女の言葉である。ドストイエフスキイには女のこの心を深い同情をもつて掬むだけの寛容があつた。けれどもかれも人間である。その寛容の後ろに潛むでゐる忍耐、苦痛、憤怒を忘れることはできぬ。しかもかれはこれ等のあら

ゆる懊惱を耐へ忍んで聖者のやうな靜かな心の地に詣らんとつとめた。悲壯なる忍從者の生活であつた。男が最後に別れ行く女に送つた手紙のなかには「お前は泣く、けれどもお前は行く！」と書いてゐる。それからまた女が男を捨てゝ他に嫁ぐ理由として男は「お前が嫁ぐのはかれがお前に玩具を買つてくれるからだ」と言つてゐる。貧しい老人には女の肩掛けや上衣を買ふ金はなかつた。女には戀よりも生きて行くことが大事であつた。パンやボンネットを買ふことが必要であつた。

汽車は西へ西へと走る。人々は棚の手荷物を卸したり、上衣を着かへたりしてゐる。私は「貧しき人々」を信玄袋のなかに入れた。

Tと一緒に東京に上るをり渡つた海峽の面には日の光りがたゆたげに漂ふてゐた。

「Tにも戀人に玩具を買つてやるだけの金がなかつたのだ。」

私はTの悲しい運命を想ふた。私は暗い心を抱きながら海峽を渡つた。

淡紅のチウリップ

春の夜であつた。櫻散る夜であつた。道は白く見えた。月がおぼろな夜であつた。私たちは並んで街を歩いた。私はあの夜を忘れ得ない。カンテラやアセチリンの燈が街に沿うて燃えてゐた。かの女の顔は月のやうに白く見えた。色々な草花が並べられた棚の前を私たちは幾度か往き來した。春の夜は私たちの幸福のために作られてあるやうに想はれた。

先生！

女はから言つて私に西洋草花の鉢植を買つてくれた。淡紅のチウリップであつた。

櫻散る山の手の道を辿りながら私たちは歸つた。私の胸は寂しかつた。道は白かつた。花の香が夢のやうに薫つた。

私は女の家まで送つてやつた。それでも私は門の外で別れた。黑い板塀に白い櫻の花瓣が散りかゝる月の夜であつた。

先生！

女の美しい聲がいつまでも私の耳にのこつてゐる。

彼の女は二人の子の母となつた。

私は今日も旅路の空に貧しいパンを索めてゐる。

チウリップの咲く悲しい春！

私はその春の夜を忘れ得ない。

孤島の春に

春の雨が煙のやうに、裂かれたる紗のやうに島の浦和をこめた日であつた。眠つたやうな春の水には夢に訪れるやうな潮の香が湛へられてゐた。山には白い花や紅い花が芽生えしたばかりの春の谿谷を埋めてゐた。今日は朝鮮の山も見えぬ。

何時もはつい近くに泛かび出てゐる朝鮮の山脈も、今日ばかりは遠い潮路の涯に沈むでゐる。

薄靄のなかを縫うて玄海を北へ南へ流れて行く白帆の影が淡く郷愁の涙を誘ふ。

今日は鶯も啼かず、雉子も鳴かぬ。何處からともなく、沖の漁船が舷を叩いてゐる音が入江の峡に谺して來る。水を拍つやうな、山の峡に滅えて行くやうなその物音が一層孤島の春の雨を寂しいものにする。

國を離れた人にとりて、人間ほど懷しいものはない。私たちは練兵の暇あるごとにこの島の岸から岸と道もないところを歩いて、偶々古杖につゝまれた數戸の漁村を見出すごとに耐へ切れぬ人の懷しさと異郷の寂しさとをしみじみ味はゝされた。

椿の花が若い女の唇を想はせるほどに紅く燃えた下には雨風に打たれた破船が横たはつてゐた。白い貝殻や船蟲の殻などが雨に打たれながら古い船板にこびりついてゐた。名も知らぬ雜草の可憐な花が板の裂目から覗いてゐることもあつた。

その春雨の日であつた。私は靜かな春の潮に滅えて行く細雨の音を聽きながら、花の多い入江に沿うて歩いてゐた。物の音一つ聞くことのできぬ春雨の朝であつた。岬から少し曲つたところに低く漂うた烟が見出された。そこには十

二三人の海女が雨に濡れながら磯馴木を焚いてゐた。私は何の氣もなしにそのなかにはいつて行つた。海女の一群はめづらしげに私の方を見た。それでも誰れも話しかけるものもなかつた。かれ等は內地人に對して何時も相當の尊敬を拂ふと同時に、一種の恐怖心を抱いてゐた。みんなが今までの咄しを急に止めて、ぢいつと燻ぶつてゐる焚火に見入つた。

春の雨は烟のやうに降つてゐる。音もなしに。

しかしかれ等の沈默は幾らも續かなかつた。年増の女たちは偸むやうにして私を見ながら何かひそ〳〵と話し出した。けれども私はこの群から離れなかつた。女たちは大きな聲を出して、他愛もないことを興じ合つて笑つた。そして殆んど私がそこにゐることを心にもかけないやうに見えた。

靜かな入江の春雨の朝であつた。微かに立ちのぼる烟の下に集つた十二三人の海女と、たゞ一人の異鄕の旅人は紗のやうな春雨に打たれながら潮の香につゝまれてゐた。

私はその春雨の朝を忘れない。

口汚く大きな聲を出して笑ふ海女の一群のうちに、私はたゞ一人のつゝましやかな乙女を見た。女は深く頰をつゝむでゐた。輪廓の正しい横顏と柔かな髮の毛とが何時までも私の記憶に遺つてゐる。

しと〳〵と春雨の降る朝であつた。私は名も知らぬ海女を見た。私の心は悲しかつた。

靜かに流され行く藻の花を見つめるやうにして私は纖細い海女の姿を見た。私はいつまでもそこに立つてゐることはできなかつた。私は寂しい思ひを抱きながら入江の岬を廻つた。靑い烟が這ふやうにして春の潮の上にたゞへられてゐるのを私は尙一度振りかへつて見た。

私は島の春雨の朝を忘れない。

柳の芽生

異人さん、異人さん寂しかろ。
小僧さん、小僧さん寂しかろ。
銀座の街(とほり)に柳の芽生えが溫かな春の光りに照らされた日の正午(まひる)ころであつた。電車のなかは流石に眠氣(ねむけ)を催すほどのあたゝかさであつた。
異人さんも眠つてゐた。小僧さんも眠つてゐた。疲れ切つた生活の人々は春の光りを浴びつゝも絶望の色を泛かべて窓にもたれて眠つてゐた。
異人さん、異人さん寂しかろ。
小僧さんも寂しかろ……。
私は疲れ切つた正午(まひる)の電車のなかの寂しさを忘れ得ない。

夜の汽車

汽車は琵琶湖畔を走つてゐた。日は黄昏れてゐた。私はその時十七であつた。始めての都上りに、初めての旅に私の心は寂しい影にとざされてゐた。白壁の家、雪の山、湖上の漁火、……汽車の走るがまゝに寂しい影は寂しい影を迎へた。

「これが關ヶ原なんですよ。」

かう言つて敎へてくれた優しい聲の持ち主を私は忘れることはできない。

三角形に尖つた木立や、疎な林が見えた。さして高くもない丘が空をかざして見えた。矗々と立つた木立の上には熢火を燃したやうな夕の星が瞬いてゐた。私はその夜を忘れることはできない。

私はその後幾たびとなく關ヶ原を通る。湖畔を通る。三角形の木立、小高い丘、そして夕の星が何時もあの車の窓から見られる。

私の心はいつも寂しい。私はあの夜を忘れ得ない。私はあの聲を忘れ得ない。

馬關海峽で

馬關海峽の潮が暗く流れてゐる眞中夜であつた。私たちは寒い潮風に吹かれながら聯絡船の甲板に立つた。丘から丘、水から水と動き行く幾千の燈がどんなにか旅人の心に冷たい鄕愁を湧かさしたであらう。私たちはその時けたゝましい嬰兒の泣き聲を聽いた。

「お父さん、お父さん、なぜお父さんは來ないんだ。いけない、いけない、なぜお父さんは來ないんだ！」

嬰兒は火がついたやうに泣いた。そして抱かれてゐる母の胸を蹴つた。

船は容捨もなく動いた。幾千の燈が動いた。

「お父さん、お父さん、なぜ來ないんだ……。」

父といふ人の姿はたうとう見えなかつた。

今はなれて來たばかりの彼方の波止場は、同じ海岸の燈と一緒にけぢめなくなつた。嬰兒はたゞ暗い潮の上を見やりながら泣き叫んだ。

「お父さん、お父さん、なぜ來ないんだ……。」

人々は爭ふやうにして新らしい陸地のプラットフオームを歩いた。

私はその夜を忘れることはできない。

或る朝

或る朝電車のなかで私は立派な紳士を見た。かれは高價な毛皮の外套を着てゐた。かれは銀の飾りを附けた大きなステツキを持つてゐた。かれは堂々たる風采を持つてゐた。かれは兩のポケツトを探つた。人々は好奇の眼を瞠つて、かれが何を取り出すかを注意した。紳士は小ひさなハンカチイフの包みを出した。人々はそのハンカチイフに見入つた。紳士はやがてそのハンカチイフを解いた。中から釣の道具が出た。人々の好奇心はむざ〳〵と破られた。

かれの周圍の人々は今日も時間に束縛せられつゝパンを索めに行く生活の疲勞者であつた。

人々は會社や工場や學校へ急いだ。

紳士は微笑を含むだ眼を以て空を見上げた。紳士の瞳には靜かな海と靑い空とが映つた。

私はあの月曜の朝を忘れ得ない。

大學正門前で

春雨の降る朝であつた。
大學の正門前に一頭の馬が傷々しいほど殘酷な笞に鞭打たれてゐた。
馬は大學から運ばれた重い荷を挽いてゐた。
幾度か鞭打れつゝも馬は動くことはできなかつた。
私はあの新らしい帝國大學正門前の春雨の日を忘れ得ない。

寒い日であつた

寒い日であつた。
一人の寂しい顏の老乞丐が橋の上に坐つて憐みを乞ふてゐた。
私は銅貨を一枚投げてやつた。
乞丐は喜んでその皺枯れた手を伸ばして銅貨を拾はうとした。
銅貨はころころと橋板を滑つて大川に落ちた。
私は躊躇した、けれども立ち戻つてさらにかれに與へることをしなかつた。
私の心には暗い影が射した。

この秋

T君！

突然、君が亡くなつてから三週間になる。

今までは何ともおもはなかつた靈まつりといふやうなことが、今年はしみ〴〵と自分の心に深い印象を刻みつけるやうにおもはれる。

銀座のペーブメントの上を歩いてゐると煎りつくやうな光りのなかに、どこからともなく秋らしい風が吹いて來る。そのたんびに柳の葉が靜かに落ちて行く。亡くなつた君の俤を描きながら僕はまたペーブメントの上を歩いて行く。

テニソンのイムメモリアムを讀むだ時、僕はたゞ美しい詩人の追想としてのみ讀むことができた。さうだ、あの時はたゞスヰートな心持ちで詩を讀んでゐたのだ。眞實にテニソンの悲しい心持ちと僕の心とぴつたり合つてゐるのではなかつた。

僕はこのころ久し振りでふたゝびイムメモリアムを讀みなほしてゐる。

君が最後に僕を訪ねてくれたのは、君が亡くなる少か六日前であつた。それは雨あがりの蒸し暑い夜であつた。春のやうな月の夜であつた。その夜僕は始めて君の眼に涙があるのを見た。あとで考へ合はせると君は既にその時死を決してゐたのであつた。僕の愚かなる、終に君を見殺しにして、君の死を知ることができなかつた。

二人は月の光りを浴びて戸外に出た。もう大抵の家は眠つてゐた。僕等はあてもなく小暗い木立のなかや町はづれの路を歩いてゐた。交番の紅い燭だけが僕の記憶にのこつてゐる。

君はその夜は殊に何にも話さなかつた。今から考へて見れば、君はどんなにか僕の饒舌に受け應へするに苦痛を感じたことであつたらう。無論あの夜は僕もどつちかと言へば餘り語らなかつた。あの夜ばかりではない、君と逢へば二人は大抵無口になることが多かつた。

月はをり〳〵くもつた。樫の木立のまつくらに繁つた下を通り拔けて廣い通りに出た時、僕は君の痩せ衰へた姿を見て泣き出したくなつた。けれども君は何時も頑健をほこつてゐたので、君はまた直ぐに健康體になつてくれることと思つてゐた。

君と僕はよく夜の丘や、郊外や海邊を歩いた。僕等が兵學校にはいる準備をしてゐた頃二人で眞夜中まで白川のなかを歩いてゐたこともあつた。また黄色な埃を浴びて水善寺まで月を觀に走つたこともあつた。六郷の木賃宿や刈田の畔や、二人の過去には夜の散歩が多かつた。しかしあの最後の夜のやうに沈むでゐた夜を見たことはなかつた。しかも僕はその時君が死を決してゐたことを知らなかつた。現在の僕にはそれが一等心苦しい。なぜ僕はあの夜の悲しい決心を察することができなかつたのだらう。

僕はその夜も君と肩を並べて歩きながら、君が僕よりも少し背が高いと思つたりしたこともあつた。何うして君が死を決して、ひとりで泣いてゐたことを察することができなかつたのだらう。

僕は寢る前に君に葡萄酒を上げようかと思つた。けれども却つて神經を興奮させはしないかと思つたので止した。床についたのは一時過ぎであつた。君は三時頃まで反轉してゐた。三時と五時との間に少しまどろむでゐたやうに思はれた。たゞ僕はその夜の君の深い吐息を今も忘れることはできない。

夏の夜は直ぐに明けた。珍しく君は起き上らうともしなかつた。いつもならば薄暗いうちから飛び起きる君がその朝は幾度も僕に促されて辛つと起きた。新らしい空氣も、新らしい日の光りも君には既に何の甲斐もなかつたであら

う。僕はそれを知らなかつた。

「どこか、こゝいらに靜かな寺はないだらうか？」

君は昨夜僕に話しかけたことを、朝になつてまた語り出した。

「こゝいらの寺は駄目だらう。何なら鎌倉に行つたら何うだ」

「圓覺寺？」

「さうだ。」

「しかし、たゞ行つたゞけで入れてくれるか知ら？」

僕等はこんなことを話し合つた。

庭に居た二匹の仔犬を君はぢつと見まもつてゐることもあつた。

「ともかく、毎晩眠れないではいけないから、是非靜かなところに行つて來たまへ。」

僕はかう言つた。

「しかし餘り靜かなところも淋しくて耐へ切れない。」

君は旣に何うともすることのできぬデイレンマに落ちてゐた。君は生來孤獨を愛した。けれども君ほど人を懷しんでゐた者は少なかつた。

君は少しも自分の苦痛を語らない人であつた。君とは最も親しかつた筈の僕でさへ殆んど君の昨今の苦痛をそれほどゝは察することは出來なかつた。君は海岸から終列車で飛び出して僕を訪ねてくれたあの夜も「耐らなく淋しかつたのでやつて來た」と雜作もなげに言つて笑つてゐた。僕も平氣でその言葉を聞いてゐた。僕は何といふ神經の鈍い男であつたらう。

尤もその夜僕は、「二三週間少しも眠れない」といふ言葉を聞いたとき、もしや恐ろしい病氣に襲はれてゐるのではないか、それがためもしものことがありはしないかといふやうな悲しい想像をしたことはあつた、けれども僕は自分を叱るやうにしてその忌はしい想像を打ち消してしまつた。

二人が朝の食事をすましたのは八時過ぎであつた。君は朝の食事をおいしさうに食べてゐたので、僕の不安は餘程やはらげられた。

その日僕は君と別れるのが寂しかつた。君と別れる時、僕は夜でも大抵六七町の道を停車場まで送つて行かなければ氣がすまなかつた。

その日は僕は成るべくなら學校の方も休みにしたいと思つた。生憎その日は學校の試驗日だつたので僕は學校にもぜひ顔を出さなければならなかつた。春日町で僕は別れなければならなかつた。あとで僕は神保町まで行けば宜かつたと思つたりした。

「一時間ばかり學校の前で待つてゐないか。一緒に例の森を歩いて晝飯を食つて別れよう。」

僕はかう言つて君を引き止めたが、君は靜かに答へた。

「神田に寄つて本でも買つて行かう。」

「さうか、それでは屹度また近いうちに逢はう。」

これが僕等の最後の別れであつた。

僕は振りかへつて君の方を見たが君は俯向いたまゝ電車の硝子窓に凭りかゝつてゐた。

僕は學校に行つていやな試驗室に一時間を過して、人々の走らせるペンの仄かな音を聽きながらも淋しい君の俤をたどつてゐた。

今ごろはおつ母さんの家を訪ねてゐるか知ら？　古本屋をあさつてゐるか知ら？

こんなことを想ひながら、兎に角僕は一時間の仕事を終へて町に出た。もしかと思つて神田へ廻つて神保町の通りを見まはしたりしたが君の姿は見えなかつた。

それから後の五六日は僕にとつてかなり心苦しい日であつた。僕は今になつて見れば君の死を直覺してゐたやうにも思ふ。

二人の間にも一種の直覺作用が時々あつたやうに想はれる。

「今日は君が來るやうな氣がして待つてゐた。」

僕はあの元氣の宜い君の聲を忘れることができない。聯隊の居住室に君を訪ねた時君はよくこんなことを言つた。あの室には世界地圖がいつも暗い影のなかに泛かんでゐた。滿洲やチベツトの地圖もあつた。「十國」と刻むだ尺八もあつた。それは嘗て君が湯ヶ原から十國峠に行つて瞑想したころの記念であつた。僕等はあの室で秋寂びた武藏野の涯に沈む太陽を見ながら語ることが多かつた。思へばそのころから君は深い決心を持つてゐたのであつた。クウプリンの「決鬪」のなかで讀むだ哲學者肌の中尉、またはあの作の主人公を一緒にした偉が君のやうに思はれてたらたいこともあつた。

君はよく僕の家を訪ねて來た。それは多くは夜であつた。その時僕はまた、

「僕も今日は君が來るやうな氣がしてならなかつた。」

と言つたことが幾度もあつた。

今度の死についてもさうである。僕は君と別れて數日の間に幾度か君の死を想像せずには居れなかつた。そして自分で打ち消してゐた。

それでも何とはなしに氣がかりだつたので僕は海岸の旅館宛に近ごろにない長い手紙を書いた。それには「苦しいこと、悲しいことに打勝つて行かなければならぬ。人生は悲しい、けれどもそれに敗けてはならぬ。大悲觀の後に大聖の覺りが生まれる。よし悲しければとて生きてゐればこそ悲しみも苦痛も味はゝれるではないか。どこまでも生きて戰へ。」僕はこんなことを書いて送つた。それは五月雨の降るいやな日の午後であつた。君に送つたあれが最後の手紙であつた。

しかし君は既に海岸の旅館を引き上げて淋しいA村の下宿に歸つたあとであつたらしい。君はあの手紙を讀むでくれたゞらうか。

また僕は最後に別れる時、君にニイチエの哲學と誰かの小說とバイブルとを新聞紙につゝむで上げた。いつもは君の方から探して持つて行く本だのに、その朝は餘り氣がすゝむでゐないやうだつた。君はその時既に書籍といふやうなものには何の慰めも見出すことが出來なかつたらしい。たゞ君がもとめてゐたところの友だちからの慰めすらも君は滿足に受けることは出來ないで別れて行つたのではなかつたらうか。そのことを考へると僕は耐らなく苦しくなる。自分といふ冷淡な男が耐らなく呪ひたくなる。

恐らく君はあのバイブルもひもとかなかつたであらう。

君に逢ひたいといふ感じはその後ちつとも絕えなかつた。君が亡くなる三日前の日曜であつた。その日海岸の旅館に君を訪ねようと思つてゐたが、その日は學校の會合があつたのでその方に行つて、次の日曜にぜひと思つたりしてゐたがあんなことになつた。僕が日曜の夜集會から歸ると君からの葉書が着いてゐた。それには「忙しいところをお邪魔して濟まなかつた、しかし世にたゞ一人の友たる君の心の外に慰めを得べきホームなし」といふやうな意味の言葉が書いてあつた。

僕はさらに冷淡であつた自分の心を呪はずに居られなかつた。

T君！　君が見えられたあのころは毎日僕の家の前の森には喧しいほど鳥が啼いてゐた。あんな迷信的なことでも今では意味ありげにおもはれる。僕は迷信ではない、あれは眞個に君の死を豫言したものであつたと思はずには居れない。それにつけても僕は何うして君を死から救ふことが出來なかつたのだらう？

T君！　君の危篤の電報を受けとつたのはやはり五月雨のものさびしい日であつた。晩飯をすまして書齋に入つたばかりのところに電報が來た。しかしその時は君の病氣は例の神經衰弱が昂じたのであらうくらゐにおもつてゐた。

僕は雨のなかを兩國驛に急いだ。電車は非常に遲かつた。

僕は悲しいのだか、恐ろしいのだか、何のために歩いてゐるのだか分らなかつた。たゞ僕は雨のなかをすた／＼とステーションの方に歩いてゐた。

×

T君！　君が亡くなつてから三週間が過ぎた。

女郎花や向日葵や寂しい花が咲いた。

夕ごとに君が訪ねて來るやうな氣がしてならぬ。僕はぢいつと立つて夕暮の空を見てゐる。今年の秋は淋しい。

八丈島に行つた女

薄暗い待合室、朝一番の船を待つ男と女たち……
島の男、島の女、誰れも彼れも潮風に吹かれた顏。
八丈にゆく女の顏は蒼白い。かの女は暗い待合室の隅の方で時折り力弱い咳をしてゐた。
切符を賣る男の横柄な態度とぞんざいな言葉は少からず私の心を暗くした。
かれが二等の待合室へはいつて來た時私は膝を組み合はしたまゝ傲岸な風を裝ふてかれに對した。
かれは先つきとはすつかり變つた鄭重な言葉と態度で室を出て行つた。かれは輕いびつこであつた。色の褪せた、そして所々にはふせのあたつた小倉服の男、私は急にかれがいたましくなつた。
八丈に行く女も、伊豆に行く男も申し合せたやうに小ひさな風呂敷包みや行李をかゝへて棧橋に立つた。水は濁つてゐた。うら寒い秋の風が吹いてゐた。
「坊ちやん、こちらから乘れますよ。」
聲の主は先つき暗い室で私が睨むだ例のびつこの男だつた。かれは四つ五つの男の子をかゝへて艀舟に乘せてやつた。かれの顏のどこに憎まなければならぬところがあらう。
私は急にすまないことをしたと思つた。
私はかれの傍に立つてぢいつとかれの顏を見守つてゐた。
かれは不圖私を見た、かれは私に何かやさしい言葉で話しかけさうであつた。私も「宜いお天氣ですねえ」とでも

言つて見たいと思つた。

けれども二人は何にも言はないでしまつた。

艀舟は朝の潮を静かに滑つて沖の汽船に行つた。びつこの男も乗つて行つた。

私は何時までも海岸に立つてゐた。

かの女は幾度か私の方を向いて蒼白い顔に淋しい笑をたゝへてゐた。

私はびつこの男のことはすつかり忘れてゐた。そして今汽船の方へ行く艀舟を見つめながら蒼白い顔の女のことを想つてゐた。

人々が艀舟から本船に乗りうつる姿が靄のなかにかすかに見えた。女は上甲板に立つて私の方を見た。

「不運なる女よ。」

私は八丈に行くかの女を見てからおもつた。

かの女は人目を恥ぢるやうにハンカチイフを出して欄干に垂らした。臆病な少女にはハンカチイフを振るやうなことはできなかつた。

「女よ、お前には父もなかつた、母もなかつた、そしてあるものは暗い病のかなしみばかりであつた。」

女は八丈に行つた。

重なり合つてもやはれてある船と煙のなかにかの女の船は直きにかくれた。

幾年を隔てた今日。

秋が來るごとに八丈島に行つた女を想ふ。

、、、

びつこの男は今もあの船で後から後からと島へ行く若い病人の悲しみをはこんでゐることであらう。

濱に立つて

濱に立つて沖を見ると希望と絶望とが交々に私の心を明るくしたり暗くしたりする。
濱の小石を拾つて私は靜かな秋の海のなかに投げた。
小ひさな波紋と音をたてゝ小石は滅えて行つた。どこからか女の淋しい笑ひ聲が聽えるやうにおもはれる。
「今日は歸つて來るだらう。」
毎日濱に立つてから幾日になるだらう。だまされるといふことは信じながら、私は幾度濱に立つて沖を見たらう？
「秋の白い雲が水平線とぴた〱に抱き合つてゐるあたりが八丈に行く航路だ。」
私は何時もかうおもつてその見當の沖をながめた。
黑い影が見えた。そのたんびに私の胸は波打つた。しかしそれは日の光りをかゝげつた船の帆であつた。
たまに八丈通ひの船が棧橋についても、そこには見知らぬ人の影ばかりがあつた。
しまひには私は船がついても棧橋の方へ走つて行かなくなつた。それでも時折は濱を傳ふて來る人々のなかに八丈に行つたかの女を物色しようとした。
けれどもおしまひには私にはそれも億劫になつた。汽笛を聽いても、汽船の影を見ても私の胸はをどらなくなつた。
私は何時の間にかそこいらに荷を上げてゐる人夫たちの唄や掛聲を面白いとおもつて聽くやうになつた。
そして人夫たちが歸つてしまつたり、見えなくなつて急に淋しくなつた時、不意に沖の方をながめて鉛のやうに沈むだ白い海を見つめた。

私はもう汽船や煙が見えても嬉しいとはおもはなかつた。
汽船や煙が見えない時私の心は却つて靜かであつた。
かの女は船にも乘つて來ない。かの女は歸つて來るたら屹度水の上を歩いて來るにちがひない、恰度風か何かのやうに！
私は幾度もさう想つた。
びつこの男、八丈へ行つた女、お前たちは何時かまたこの濱にかへつて來るのだらうか。
私は明日もその明日もこの濱に立つてゐよう。

ナザレの貧兒

キリストが一貧民の子として生まれ、ギリシヤ語も知らず、ギリシヤ哲學も知らないほんの片田舎の子供に過ぎなかつたといふことは非常に面白いことである。葡萄と無花果の多いナザレ、そこには氣立てのやさしい百姓や美しい處女が多かつた。丘にのぼれば遠い山々の連亙も見えた、ヨルダンの谿も見えた。町には冷たい井戸が溢れてゐた。

キリストは自分で何も書かなかつた。それはかれに深い學問がなかつたからであるかも知れない。けれどもかれはあらゆる學問の力で購ふことのできぬ尊い天啓に接することができた。

多くの場合に於いて、物を書くことや、描くことはかれ自身の不完全な生活の缺所を補はうとする要求から生まれる。かれ自身の生活が完きものであるとき藝術や宗教といふやうな一つの形式のなかにかれ自身の生活を盛らんとすることは愚かなことである。

キリストの生活は藝術でも、宗教でもなかつた。それはかれ自身の生活そのものであつた。藝術、宗教、科學あらゆる人生の諸相を超越したかれ自身の人間生活そのものであつた。

美しい處女的な自然を搖籃としたかれの心靈に、どこまでも柔和た自然のまゝな心であつた。かれの素直な心は葡萄や無花果と同じやうに大自然の愛の心をさながらに呼吸してゐた。

葡萄は春が來て花を咲かした。無花果は實つた。キリストは時が來て愛を說き、愛を實行した。葡萄も無花果も枯れた、キリストも死んだ。キリストの一生はキリストにとりてすべて自然であつた。葡萄は葡萄のために花咲き實る。キリストはキリスト自身のために四十日野に祈り、癩病患者を癒し、十字架についた。ルナンが言つてゐるやうにキ

リストの徒となることは教義や神學を知ることでなくて、キリストに結びつくことである。平凡な言ひ表はし方のやうであるが、なか〳〵實行のむづかしいことである。なまじひに神學や教義といふやうな古い歴史を重ねて來た教會の人々にとりて殊に困難である。

それにしても全き人間としてのキリストは羨ましい。何にも書かず、何にも語らないでもかれは幾千の人々に飢と渴とを忘れしむるだけの力をもつてゐた。かれは生まれながらの大藝術家であつた。かれの聲、かの顏は人類が生むだ第一の傑作であつた。かれを見に集まつた無智な群集はかれに觸れ、かれを見ることによりて救はれた。かれの一瞥は千卷の神學や哲學にまさつてゐた。かれは驚くべき大傑作の藝術品であつた。

エルサレムの殿堂詣でのキリスト、ガリラヤの湖畔をさ迷ふたキリスト、收税吏や賤民と飮み食ひをした放浪者のやうなキリスト、マグダラのマリヤに香油を塗られたキリスト、ゲツセマネの園に月光を浴びて祈つたキリスト、最後の晩餐の席に沈默してゐたキリスト、愛する母や弟子たちの前で十字架についたキリスト……そしてかれ自身の神の如き淸崇な姿は多くの若い女性たちを愛以上の愛にひきつけるだけの魅力を持つてゐた。

今日のキリスト敎の人々にとりて殊に物足りなく感ずるのはこの藝術的方面から見たキリストを餘り深く知らないことである。成るほど人々は藝術品としてのバイブルの價値やまたキリストの一生を知つてゐるといふ。けれども私が出逢つた多くの宗教家の藝術觀は既に型にはまつたものであつた。かれ等は理解してゐるかも知れぬ、けれども直感してゐない。かれ等は宗教に對しても多くさうである。理解は持つてゐるが直感が足りない。

藝術的な鑑賞力を缺いてゐる宗教界の人々に何うして人間としてのキリストが直感せられよう。ルナンの言を藉りるまでもなく、かれが最も人間らしい人間であつたればこそ私たちはかれを懷しいと思ふ。天國と惡魔の世界とがかれの一心のうちに潛んでゐたればこそ私たちはキリストを忘れることができない。かれが惡魔に誘はれて四十日が間

祈つたといふことは、如何にかれが強い人間的欲念の所有者であり、また自己革命の苦痛な鬪ひをたゝかつたかといふことを想像させる。かれの心の一面は惡魔であつた。かれの一面は神であつた。かれは神の一面をのみ所有してゐたのではなかつた。

メレジユコウスキイはその著「神々の死」や「先驅者」のなかに神人に對する人神の戰を說いてゐる。しかし神人といふ觀念は一種の理想であつて、眞にあるものは人神でなければならぬ。人間が倫理的にも宗教的にもその究竟に達した刹那にかれは人神となる、最も人間らしいことがとりもなほさず神といふことである。人神である。キリストは人神であつた、神人ではなかつた。

×

キリストが罪人の友であつたのはキリストが最も人間らしい人間であつたからである。キリスト自身が罪人であつたからである。かれはその弟子が七度人の罪を免さうと言つた時、さらに十倍せよと敎へた。かれは百倍せよ、千倍せよと言つたであらう。

×

キリストは安息日に弟子をして麥の穗を摘ましめた。これはユダヤの傳統的宗敎にとりて大なる革命であつた。パリサイの徒がその違法を詰つたのに對してキリストは「安息日は人のために設けられたる者にして人は安息日のために設けられたる者に非ず、されば人の子は安息日にも主たるなり」と言つた。

キリストは最も大膽な人間神の創造者であつた。宗敎や宗敎的傳統はかれにとりて死物であつた。安息日は人のために設けられたものであつた。人は生くることが大切であつた。すべてのものは最善の生活を人間にさゝげんがためにつくられたものであつた。オスカア・ワイルドは「獄中記」のなかに「ギリシヤ人は肉體の生活を敎へた、しかしキ

リストは同時に靈の生活をも敎へた」と言ふ意味の言葉を語つてゐる。キリストは私たちに最も適切に神の國の正しきを敎へてゐる。けれども私たちは同時にかれが安息日の傳統を破つて弟子のために肉體の食を與へたことに深い意義を見出さなければならぬ。

×

私はキリスト敎の人々に出逢つて失望させられたこともあつた。けれども眞實に美しい心の人を見出すこともあつた。キリストの心をさながら分ち持つたともおもはれるやうな人に出逢つたこともあつた。その一人の美しい心は私をしてキリストを忘れることをできなくせしめた。そしてそれ等の美しい心の所有者は片田舍の舊い信仰に立てこもつてゐると稱せられる人々の間にあつた。

×

文藝は到底民族的でなければならぬ。同時にキリスト敎も民族的でなければならぬ。

日本のキリスト敎は卑俗な外國傳道者を放逐した後でなければ生まれない。

日本のために働いて現れた崇高な人格の外國傳道者を忘れることはできないが、同時に下等な渡り者の傳道者は呪はなければならぬ。

汽車のなかで日本婦人の前で靴下を穿きかへたり、煙草をふかしてゐた外國傳道師、私の田舍で道具の端くれまで競賣にして行つた外國傳道師、到底かれ等は日本の宗敎界から放逐しなけばたらぬ。

×

私はこのごろ一層切に默つたまゝで生きてゐたい。自分の生活の資を得るために私は毎日少くとも三時間、多いときには五時間くらゐ立てつゞけに敎壇の上で大きな聲を出してゐなければならぬ。元來咽喉の惡い私は夕方になれば

大抵耳朶からほてり出して頸の腺が痛み出す。恐ろしい病氣でも潜むでゐるのではないかと想つたりすることがある。家にかへつて一と安心と思つてゐるとまた色々な人と語らなければならぬ機會が起つて來る。そしてその話題は大抵は「人生」だの「運命」だのといふ理窟がかつたことが多い。

何故私たちは語らないで、たゞ一人で考へてゐることはできないのだらう？

秋雨の靜かに落つる庭には一二輪の薔薇が咲き、紫苑が咲き、白芙蓉が咲いてゐる。私はぢつと何時までも何時までも夕暮の庭に立つてひとりで眺めてゐることを好む。

武藏野の秋

何處からともなく永遠の悲しみと寂しさとをはこぶやうな秋の聲が地の底から湧いて來る。

そこには蟲の聲もない、風の聲もない、木の葉の落ちる音もない。たゞ寂しい秋の聲が大地の底から漂うて來る。

私はたゞ一人で武藏野の秋に立つてゐる。今年私はTを失つてから、たゞ一人で武藏野を歩かなければならなくなつた。

武藏野の森といふ森、川といふ川にはTと私との思ひ出が深く深く刻まれてある。Tは死んだ、武藏野の秋に。

Tと二人で佇むだ雜木林、Tと二人でさ迷ふた耕作地、Tと二人で夜を更かした渡頭、Tと二人で聽いた武藏野の秋の聲！……私は今自分ひとりで歩かねばならぬ、見ねばならぬ、聽かねばならぬ。

悠久の悲哀、歸ることゝなき人と人との別離！

櫟の葉が落ちる森、銀色の雲が漂ふ空、水車の音が幽かに聞える丘の連續、がた／＼と斷續的に響いて來る荷車の音、森のかげの雁來紅やコスモスの家、秋の武藏野は悲しいおもひ出の一つとなつた。

人は死んで行く。秋が來る。

生きのこつた私は二つの悲しみを抱きつゝ武藏野の秋に立つ。

鞭

T君！

京都からのたよりも、神戸からの葉書もありがたく拜見した。君が門司出帆の日は東京でも生憎風が强かつたので、君の航海もさぞかしと遙かに案じてゐた。

君が東京を立つたのは近ごろにない寒い日だつた。君をステーションに見送つてから僕はまた例の暗い煉瓦の建物のなかにはいつて行つた。そして君と二人の時と同じやうにあの古ぼけた卓子の上で貧しい晩餐をすました。君が國府津か御殿場あたりに行つてゐるころだと思ひながら、僕はたゞ一人で君のために淋しい乾杯を擧げた。

日がすつかり暮れてしまつた。僕はそれでも電燈を點けなかつた。あの老人が下から上つて來て幾度も室の扉口から覗いて行つた。今夜ばかりは老人と話す氣にもなれなかつた。

一人の友人を旅に送るといふことがこんなに寂しいことであらうとは想はなかつた。

逢つた時には僕等は恐ろしく沈默であつた。何時も二人の心を底まで打ち明けたと思ふことはなかつた。けれども沈默で訣れた時程後になつてうれしいことはなかつた。

獨身者の特權として友人を懷しむ心ほど尊いものはあるまい。僕は何時もさう思つてゐる。けれども僕等のこの獨身者の生活が何時までつゞくかとおもへば耐らなく淋しくなることがある。僕は人間が一人でゐることが必ずしも眞實な生き方であるとは想はない。けれども何の理解もなく、何の動機もなくして多くの人々がホームを作つて行く大膽さを寧ろあはれに思ふ。

僕の心には今二つの思念が闘つてゐる。それはキリストのやうな獨身者の生活を欲する心と、所謂幸福な生活を欲する心とである。僕等は乞丐となつてキリストの足跡を踏むか、或ひは富める者となつてキリストを十字架につけるか、何れかの途を選ばなければならぬ。眞實にキリストを愛するといふことは人類のうちにありて最も悲しい生活を苦しむものでなければならぬ。自分よりもより苦しい人生を生きてゐる人があるならば自分はまだ眞實にキリストを愛してゐるのではない。

僕の生活を顧みてどこにキリストを愛する心があらう。僕は月々のサラリイを貰つて、相當に温かい衣を着、腹に充つだけの糧を得てゐる。僕の隣りには六十七十の老人が荷車を挽いてゐる。僕はその人々に對してどれだけのやさしい言葉や、愛の心を動かしたゞらう。僕は一度だつて自分の衣を脱ぎ捨てゝその人々に與へたことはない。

眞個に僕等がキリストを愛するといふならば、僕等はこの刹那に、自分の持てるすべてを捨てなければならぬ。僕等にはそれができない。この悲しみはトルストイ一人の悲しみでない。僕等すべての悲しみである。

T君！　僕等は乞丐になるだけの覺悟なくしてはつひにキリストを愛するものとなることはできない。

キリストは平和を地に下さんがために來たとは言はなかつた。かれは劍を齎したのであつた。僕は僕等の劍の鈍いことを想はないでは居れない。

T君！　臺北の町外れから眺めた中央山脈の雄大な姿はたしかに君の心に深い何物かを與へてゐるにちがひない。僕は高架索のバラックにゐたトルストイを聯想せずには居れない。

君が出發された翌る日であつた、M君が亡くなつたといふ通知があつたのは。中學時代のクラスメートが集まつて淺草の寺で法會を行つたのはそれから間もなくであつた。少か一ヶ月ばかりのこの多の間に僕は三人の知人やら先輩やらを失つた。お互に强いことを言つて疑惑より疑惑へと迷つてゐるが、ほんたうに何うなるだらう？

敬虔な祈りの聲に耳傾むけないでは居れない日がある。

T君！　四五日前岡山にゐるI氏が僕を訪ねて來たといふことであつた。去年の夏東京驛で訣れたきり逢へなかつたので、この冬の休暇には是非逢ひたいと思つてゐたが生憎僕が外出してゐたので逢へなかつた。その夜の汽車で立つといふことだけ分つたが、何時の汽車やら分らないので、時間表を調べたりしてゐたが、生憎これも明日東京を立つといふ友人が訪ねて來たのでI氏を送ることもできなかつた。僕はひとりで淋しく東京を立つたであらうI氏の痩せた姿を胸に描いた。

×

T君！　創作家といふ言葉ほど悲しいものがあらうか。かれがさゝぐる祈りはそれがどんなに貧しいものであらうと、それが眞の心の呼びであるかぎりは神によりて聽かれるであらう。けれども神の住に彼等の周圍には多くの預言者たちが立つてゐる。そしてかれの貧しい祈りを嘲るではないか。さらば彼等に嘲弄されつゝ尙ほ寂しい祈りをつゞけてゐる。

T君！　僕は多くの人々によつて與へらるゝ鞭の痛さを知つた。僕は感謝する、多くの鞭打てる人々に。かれ等は神にかはりて鞭打つのであつた。僕は鞭打たるゝ者の悲しみを祝福したい。

×

T君！　武藏野の春が來た。寂しい春が來た。懷しい春が來た。散る花と白い路とが一緒に溶けこむでしまふやうな春のあけたれころを僕は一人で歩いた日を想ふ。この病院の窓を想ふ。雜木林を想ふ。ツルゲーネフの小品集を呉れた男を想ふ。さらに悲しかつたあの一日を想ふ。渴河原に飛び出して行つたあの夜を想ふ。

T君・　君は澁谷の老人が亡くなられた夜のことを記憶してゐるであらう。馨さんの遺骨が小田原から着いた日の

ことを忘れないであらう。男爵も奥さんも亡くなられた。そして僕等にたゞ一つの悲しい思ひ出としてあの喬木の下の家を遺して逝かれた。あの喬木の家に祝福あれ、そして美しかつたかの女の上に祝福あれ。

T君！　少年は何時の間にか青年となつてゐた。君が立つて間もなく僕はかれと二人であの雑木林を歩いた。遠い波の音が風のやうに訪れた。

犬吠崎でハアモニカを吹いた片足の少年は立派な青年になつた。僕等の追憶は老いたではない。

すべては滅びに行く、たゞ苦い追憶のみが深く深く刻まれて行く。

母の愛、母の心

理論から理論へと辿つて行く人がある。新らしい宗教團體、新らしい思想界の人々にとりて合理的といふ言葉ほど大切なものはないやうにおもはれる。けれども果してこれ等の人々の間から何ものが見出されたか？

私は疑ふ。かれ等が唱へてゐる合理的といふことが果して合理的であるか、何うかを。

私は過去數年に於いて色々な人々を知つた。その多くは思想家の部類に屬すべき人々であつた。かれ等はその一擧一動に何等かの理由と意義とを附け加へることを忘れなかつた。けれども嘗てこれ等の人々の間から眞實の人間の味を見出すことはできなかつた。

かれ等は最も大膽に自分をさらけ出し、自分の要求を露骨に叫ぶものであると唱へてゐる。けれどもかれ等ほど卑怯な、かれ等ほど不正直な、かれ等ほど殘忍なものはないやうに想はれてならぬ。私は虞れる、私自身が或ひはその一人ではないかを。

×

私に一人の友があつた。かれは何事をも語らぬ男であつた。かれは何時も默したるまゝに私に接した。しかもかれは私に對して終生忘れることのできぬ深いものを與へた。默々として何ごとをも語らないかれに於いてのみ私は深い人生と、無限な人間の心靈とに觸れることができた。

かれは六月の末海濱の淋しい旅館に死んだ。

私の心は今かれを想ひ出すごとに耐へ切れぬほどの哀愁に鎖される。かれは私に色々な學說や議論として遺つては

ゐない。かれの默したる淋しい貌、衰へたる瞳、夢みる如き眼、靜かな聲、それ等の一つ一つが私の心にさながらにのこつてゐる。

夕暮れの靜かな門をくゞつてかれの跫音がよく私の玄關に聽かれた。蚊遣火を焚く昨日今日一層亡くなつたかれの俤が悲しくも泛かび出ろ。

×

自分の親しい者の死について語つた時、その話を聽かされた對手の者の顏に何の同情の影も泛かばない時ほど不快なものはない。たとひそれが幾分故意につくられた表情であつても宜い、對手のものが自分と同じ悲しみの表情をしてくれゝば、自分は感謝の念をさゝげないでは居れない。

パンを持たない苦痛は飢えたる經驗を持つた人でなければわからない。親しいものを失つた悲しみはまた親しいものを失つた經驗を持てるものでなければ察することはできない。

自分の悲しみは隱して置くのが最も良いやうにおもはれる。それは自分の悲しみを心ない人々に汚されないために。それでも、もし自分の悲しみを自分ひとりで祕めて置くことができないなら、悲しみを知れる人の前にのみ持つて行け。

しかし悲哀はどこまでも自分ひとりの胸に祕めて置くほど長い生命を持つやうにおもはれる。

×

悲哀は時として個人に賦へられた寶である。隱れたる寶である。悲哀は撒き散らすことによりてその尊さを失ふ。悲哀は靜かに個人の心の扉の中に祕めらるべきものである。

眞珠を豚に投げあたへてはならぬ。

或る朝兩國行きの電車のなかで私はこんな話を聽いた。
「盜むで監獄にやられる奴は善人だ。」
「眞個の惡人は立派な顔をしてゐる奴等だ。」
この聲の主は二人とも印半纏の男であつた。
この簡單な言葉がロシヤあたりの作家の口から洩れたなら何にも驚かないが、割引電車のなかの人々の唇から洩れた時、それは耐らない悲しい聲であつた。

×

善人と惡人、どこにその區別があるだらう。弱い善人は人殺しや夜盜となる。強い惡人と強い善人の間は往々一つに塗りつぶされてしまひ易い。

×

眞個に貧しいものは一と切れのパンに涙を流して天の惠みを感謝してゐる。食ふべきものを持ち、着るべきものを持てるものは却つて自己の貧しさを叫ぶ。滿腹せるものは天の惠みを感謝せず、また貧しきものゝ叫びを呪ふ。

×

語つても語つても物足りない友人がある。何にも語らないで、しかも別れてから耐らなく懷しい友人がある。教會や學校や主義や團體から得られる友人は前のものに多く、たゞ偶然に出會つた友人に後者を發見することが多い。
キリストはパリサイやサドカイの徒を顧みないで却つて罪人や娼婦の友となつた。今の世にキリストをあらしめてもキリストは罪人とマグダラのマリアとを愛したであらう。正しい道を歩むこと、正しい道理に隨つて生くることがのみ眞實の人生であると考へるのはサドカイの徒である。

世には正しい道を歩むことのできぬ弱い人間がある。けれどもかれはキリストに愛せられることのできる人間である。かれは如何に人を愛すべきかを知つてゐる。如何に人を信ずべきかを知つてゐる。けれどもかれは到底弱い人間である。かれは正しき一本筋の道を歩くことはできない。そこにかれの生活の悲劇が生まれる。人間の涙がそこから流れる。涙はたゞ愚かにして弱き人間にのみ賦へられたる神のめぐみである。弱い人間が犯すあらゆる罪悪は一滴の涙によりて淨められる。

涙に灑がれぬ正しき行爲よりは涙に浸されたる罪惡により多くの人間味が見出される。

ゴーゴルの「タラス・ブルバ」の最初にキエフのアカデミイから歸つて來た二人の息子と老コザックの話が書いてある。そのうちで一等私を動かしたものは二人の子の母の悲しい運命と愛とであつた。

老コザックのタラス・ブルバは二人の息子を伴れて明日の夜明けを待つてコザック聯隊の所在地へ出發しようとしてゐる。二人の息子もまた勇敢なコザックの武者振を描きつゝ眠りに就いた。その夜は父も二人の子も屋外の叢に第一夜の露營についたのであつた。

今日キエフの學園から歸つて來たばかりの二人の子を明日は戰場に立たせなければならぬ母親の心は察することができる。

かの女は自分の膝に二人の若い戰士を枕さして、夜つぴてまんぢりともしなかつた。星は蒼白い光りを投げて草原を照らした。かすかに馬の草を喰む音が聞えた。かの女は思つた、できるなら何時までも夜が明けないでゐてくれゝば宜いと。

しかしすべては空しき望であつた。タラス・ブルバと二人の子は逞しい馬を騙つてコザックの屯營への旅へと立つた。しかもそれが親子四人の最終の訣別であつた。

人生は戦ひであると人々はいふ。然り、人々はタラス・ブルバのやうに、オスタップのやうに、アンドレフのやうに生命を賭して戦ひの野を駈け廻らなければならぬ。

けれどもそれが眞實の人生であらうか。

靜かな眞夜中に二人の愛兒を抱いて夜もすがら眠らなかつたアンドレフやオスタップの母の心には神は何を囁いたであらう。

戦ひの他何ものも知らぬ若い人々の心にどうして母の心がわからう。けれども母の心は永遠の母の心である。永遠の悲しみと愛とに湛へられた母の心はいつも戦ひに勇む人々の心から離れることはできない。

怒れるもの、憤れるもの、呪へるもの、憎める者の心をも靜かに抱いてゐる母の心、それは何といふ美しい心であらう、やさしい心であらう。

さらにゴーゴルは三人のコザックについて語つてゐる。アンドレフは美しい乙女のためにコザックの群を捨て父と兄とに刃を向けた。そしてかれは自ら言ふ、「眞實にめざめたのである。自らのために生くるのである」と。

恐ろしいコザックの群にありてかれはたゞ一人の自己にめざめた人であつた。けれどもかれの死は悲慘であつた。かれは父の銃丸に斃れた。

オスタップも死んだ、それは殘忍な殺され方によりて殺されたのであつた。最後にタラス・ブルバはコザックとして最も花やかな悲慘な死を遂げた。呪ひつゝ憤りつゝ死んだ。

唯一人淋しく生き殘つた母の心、それは何といふ淋しさと悲しさとに包まれたであらう。かの女には戦もなかつたほこりもなかつた。

かの女はたゞ愛すべく生まれ、悲しむべく生きた。

空には花が咲き、燕が翔り、暴風が起る。大地はいつも暗い忍耐と愛と涙とを持つて空にあるもの、水にあるものを養つてゐる。
人々はたゞ空間に起つて來る人生の諸相を觀る。けれども大地の忍耐と愛と涙とを忘れがちである。
母の愛、母の淋しい心。

秋雨の日

秋雨のなかを靜かに立つてゐるといろ〳〵な過去のことが想ひ出される。

音もなく終日降り灑いでゐる秋雨に濡れた紫苑や向日葵を見つめてゐると、私の心には過ぎ去つた日の、過ぎ去つた人々の聲と面影とがいろ〳〵な渦を卷いて泛かんで來る。

私はこの數年間に二人の自殺者を友人の間から見出した。一人は秋に死んだ。それは非常に理性の發達した男であつた。鳥渡自殺などとは思ひも寄らぬ質の男であつた。かれが修めてゐた學問が化學的なものであつた結果、その自殺の方法は極めて自然死に近い藥品を用ひられたのであつた。かれが何故自殺を選んだかといふことについては、かれに自分自身に不治の病を自覺してゐたからだと斷ずるより他はない。けれども側から見てかれの病狀はさほどまで進むでゐたとはおもはれなかつた。かれは每日のやうに學校に通ふてゐた、成績も拔群であつた。しかもかれは人々の意表に出づる死に方をしてしまつた。かれの二十幾年の學問殊にその化學的知識はたゞかれのために自殺藥を作らしむるためにのみ役立つたかのやうにおもはれる。或る時はかれは郊外に出で、沼や水田の蛙を捕へてかれが發見した藥品の實驗を可憐たる生物に行つた。

かれはその實驗が都合よく運ばれ、かれの發見藥の異常なる效果を實驗した刹那に、どんなにかかれの頭腦の明晰さをほこつたであらう。同時にどんなにかかれの死について悲しむだであらう。

不幸なるかれは自らを殺すためにあらゆる自己の能力を集中しつゝあつたのであつた。

靜かに冷かに自己の死を批判しつゝ死んだかれの短い生活の悲壯であつたことを考へると、明かに「自殺の權能を

賦へられた人間」の偉大さと悲愴さとをおもはないでは居れぬ。

若き化學者の死は私にとつて悲しいものであつた。しかしかれと私との交りは比較的短かつたのと、それに餘りに賢く餘りに理性的であつたかれは私に畏敬の念を抱かせたが、親しみの情は持たせなかつた。それだけにかれの死は驚きの念を喚び起さしめたが私にとつて耐らなく悲しいものだとは思はれなかつた。かれの自殺はむしろ人類の自殺の悲慘なる一典型を表現してゐるものゝやうにおもはれた。恰度乃木將軍の自殺に對するやうに……。

この夏私は最も親しかつた一人の友を失つた。かれの自殺は世間にありふれた死であつた。かれは短刀を持つて腹を切り咽喉を突いて死んだ。新聞紙には精神に異常があつたとか、過度の勉强の結果だとかいふことが書いてあつた。世間の多くの人々には別に何の珍しいことでもなく、また或る人々は標題だけを讀むで記事を讀まなかつたかも知れない。

けれどもかれの死に至るまでの永い、苦痛な生活を知つた私にとつて、かれの死は嘗て經驗しなかつた人生の嚴肅さと寂しさとを深く私の心に刻むだ。

社會に起つて來る一つ一つの小ひさな事件の底には突きつめて行けばつきつめて行くほど寂しい嚴肅な人生の姿が潜むでゐる。

二寸か三寸の小ひさな草花を人々は何の氣にもかけないで踏みにじつてゐる。けれどもその花にはどんなにか深い生活の意義と驚異とが潜むでゐることであらう。

同じ人間の死であつても、私の心に深い交渉を感じてゐたものゝ死と、然うでないものゝ死との間には比較することのできぬほどな嚴肅さや深さの相異がある。私たちは日常平氣で新聞記事にあらはれた出來ごとに何の嚴肅さも意義をも感じないでゐる。

私がたゞ一人の友を失つたといふことの後には、自分の冷酷な心を責めないでは居れぬ後悔の念が絶えず湧いてゐる。

人が自殺を選む多くの場合は周圍の人々の不注意と相愛相憐の情が足りない所から生れて來る。友人を見殺しにした私はさうおもはないでは居れない。

私たちは友人に對してかなりの愛憐は持つたつもりであつた。けれども私たちの愛は何時も自分を忘れることのできない愛であつた。もつと露骨に言ふならば、自分の食はなければならぬパンを友に與へるのではなくて、自分の食ひ飽きたパンを友人に與へるのが私の愛であつた。

愛は生命そのものを投げ出したものでなければならぬ。食ひ殘しのパンに何の力があらう。

×

かれの頰はこけてゐた。かれは何時も眼をつむつてゐた。私はかれの寂しい影をなつかしいとおもつた私はかれを愛したとおもつた。かれは死ぬ刹那まで私の名を呼んでゐた。かれは私一人を賴つてゐたのだつた。私はかれに食ひ殘しのパンを與へたのに。

日一日と秋が爛けて行く。椎の實が落ちる。田舍では冬ごもりの仕度にとりかゝるころである。かれと私の故鄕の川は水が涸れて、白い砂原には秋の收穫が干されてあるころである。故鄕のあの川原にはまだ私たちが二人で東京で何かやつてゐることゝおもひながら收穫をあつめてゐる老人もあるだらう。

三十の彼

三十のかれは千葉の町に近い淋しい旅の宿で自殺した。雨の朝であつた。

昨日千葉の病院にかれを訪ふて、暮れ方千葉から東京に歸つて來たばかりの私はまた同じ兩國驛から今朝千葉に行かなければならなかつた。帶のやうに長くためらうてゐる煙の下には黑い建て込んだ家が並んでゐた。間もなく汽車は見わたすかぎり宵々した平原に出た。私は寢不足な眼を開いて窓からすが〳〵しい六月の水田を見た。太陽は雨上りの美しい空と平原とに潑剌たる光りを投げてゐた。けれども私の心は暗かつた。私は昨夜病院で訣れたばかりのかれの姿を描いた。

鋭利な短刀で搔き切つた咽喉、すう〳〵と呼吸するごとに傷口から洩れる空氣、逼迫せる呼吸、落ちくぼんだ眼、力ない握手……昨日見たばかりのかれの俤が何うしても私の記憶から離れない。

「多分大丈夫だらうと思ひます。何でしたら電報を打つて上げます。」

看護の人々の言葉はその場合私に非常な心強さを感じさした。私は午後の汽車で一と先づ東京に歸ることにした。その時尙一度かれの病室を訪ねた。かれはすや〳〵と眠つてゐた。かれの手は美しかつた。

「かれは今日始めて睡眠の快よさを貪ることができたのだ。」

私はその刹那から思つた。それと同時にかれがこの二三ヶ月間殆んど眠れないと言つてゐたのをおもひ出して、今傷手を忘れたやうに眠つてゐるかれの耐らなくいぢらしかつた。私は心のうちに明日の再會を豫期しながら靜かに病室を出たのであつた。

汽車は市川の鐵橋を渡つて千葉の方へ急いでゐた。

「××キトク」私は幾度か懷から電報を出して見た。かれの死を疑ふことはできなかつた。

恰度三ヶ月前である。かれが千葉に轉任したので私はかれを送つて市川まで行つた。しかもそれが同じ八時のこの汽車であつた。麥秋には少し早いころで、まだ麥の間には辛子菜の花がつゞいてゐた。遠い平原を貫く一直線な道が折々村の森にかくれたりした。今日も私はそれ等の道を見ることができた。麥は刈られてしまつて、稻は五六寸も伸びてゐる。樺や楡の葉の繁つた並樹を透して夏雲の白い片々が動いてゐた。

「かれは死んだのだ。」

かう思ふと今更のやうに新らしい悲しみと寂寞とが胸を衝いて來る。

小高い丘の連續の涯に夏の海が浮き上つて見えた。かれは東京から千葉までの間を幾度も徒歩で行き來したと言つてゐたが、かれが歩いたであらう街道は遠い森の蔭に見えた。白い夏の雲と、綠の野が遠い旅路を思はせるやうな哀愁をそゝつた。

汽車は千葉に着いた。一昨夜强い雨風のなかをどことも知らず道々迷つたことがまるで別世界の出來事であつたかのやうに思はれたりした。赭土色の坂を走るやうにして私は千葉の病院に行つた。

「亡くなりましたか？」

私は玄關で逢つた看護婦に訊ねた。かれは午前一時五分に眠つたといふことであつた。

夏草の繁つた病院の廣い庭を木立のたかにはいつて行つた。先きに立つて行く看護婦の白い服に木の葉の影が靜かに動いた。

屍室の前には二人の男が立つてゐた。

看護婦は靜かに扉を明けた。
私は薄暗い屍室のなかに少かに白い被ひを見た。私は室に入ることを躊躇した。

×

私は屍室から出て、また森の道を歩いた。千葉の町を取圍むでゐる松林の丘の上には白い雲の峰が盛り上るやうにして漂うてゐた。東京灣の白帆が作り付けられたやうにぢいつとひとところに止まつてゐた。紫陽花の咲いてゐる病院の垣根に沿ふて私は再び千葉のステーションに出た。二十分の後に私は稻毛驛に降りてゐた。運輸店や茶店らしい二三軒の家が立ち並んでゐる前を通り過ぎて海岸へ急いだ。

そこに立つてゐた女は養生館へ行く道を教へてくれた。六七町の行く手に小高い丘があつて、そこには、一面の木立がしげつてゐた、測量基點の三角塔が松林の間から突き出て居た。

私は幾度か立ち停まつては瞑默した。海風の聲と雲雀の唄、それに遠くで土を撃つ鋤の音が沈默を破つて聞える。

松の丘と丘との間の低いところにすゝけた大構への一軒の家があつた。それが養生館であつた。私は一度海岸に出た。そして數日前かれが夕暮の空を見入りながら立ちつくしたであらう東京灣の遠い干潟や澪標や仄かに描き出されてゐる半島の山脈を眺めた。

養生館にも紫陽花が咲いてゐた。かれがどんなにかこの花を見て泣いたであらうと考へたりした。籠のなかの鶯が啼き、カナリヤが囀つてゐた。夏の客を迎へる準備に疊職人がはいつて取り込むでゐるところだつたが、私はたつて晝飯を拵へさした。そしてかれの室を受け持つてゐた女を呼んでもらつた。

かれは養生館に來ても二日と落ちついて泊つてゐることはなかつた。そして東京を訪ねてからその歸りに一度立ち寄つたきり顏を見せなかつたといふことであつた。

私はかれが泊つてゐた室に行つて坐つた。そこからは稻毛の沖が涼しい木蔭を洩れて見えた。燻つた床の上には古い雜誌と新聞紙とが散らかつてゐた。

「やはり氣が沈んでゐるやうでしたか？」

私は女に訊ねた。

「俺はどうしてこんなに頭が痛むのだらうと仰つしやつて、夜も一向お寐(よ)りにならないやうでした。」

女はかう言つて私の顏を見た。

今まで靜かであつた海岸の松林の中ではしやいだ聲がした。海水帽や海水衣の六七人の男女が笑ひ興じながらはいつて來た。

私は自ら死を選んだかれが一層いた〳〵しくなつた。私は人々の笑ひ聲を恐れるやうにして海岸に出た。

貝殼を小山のやうに積みかさねた廣場から左に折れて千葉の町の郊外の方に歩いた。

泥濘の道に沿うて深く繁つた竹藪や、暗い森林の小蔭に見ゆる農家は私たちの故鄕を思はせた。ひよろ長い幹の向日葵が厩の壁に沿うて咲いてゐたりした。

じめ〳〵した農家の附近を通り拔けると一面の丘になつてそこには麥を刈りつくした跡に小屋程に積み上げられた堆肥が限りもなくつゞいて、正午の太陽に蒸されては腐つたものゝにほひをかもしてゐた。かれが住んでゐた千葉の郊外の農村は鐵道線路の北の方に十五六町も離れた深い森のなかにあつた。段々畑や線路や幾つもの丘の涯に見ゆる森の裏にかれは住んで居た。私はその見當の森を見た。その附近には家らしい家も見出されなかつた。夜汽車で平原を通る時旅人はかすかに小ひさな燈を發見するであらう。かれはその燈の一つの所有主であつた。

こんな淋しいところに！　しかも孤獨の三十の男であつたかれの死はまことに慘ましいものであつた。

私は草いきれのする丘の畑を鐵道線路の方へ急いだ。

丘の畑には黃色い花が咲いてゐた。

私は火葬場に行かなければならぬ時間を想ひながら歩いてゐた。

野良には所々に男女が働いてゐた。南瓜の花がそこここゝの畑に咲いてゐた。涼しい海の風が松原越しに吹いて來た。

雲雀の聲が高い空に聽かれた。

人通りの甚だ稀な田舍道には幾日か前に通つた俥の跡や下駄の跡がそのまゝにのこつてゐた。私は數日前までこの道を歩いてゐたかれの足跡をと思つて幾つもある下駄の跡を見た。

それはかれが死を決してからであつたらう、かれは千葉の郊外からこゝまで毎日のやうに往き來してゐた。東京に私を訪ねた最終の夜、かれはこゝの養生館からこの道を傳うて稻毛驛に出た。そして終列車で兩國に着いたのであつた。その夜は私と一緒に床について次の朝かれはまたこの道を養生館に歸つたのであつた。

かれはこの畑の黃色い花を見たであらう、雲雀の唄を聽いたであらう、白い雲を見たであらう。かれはどんなにか泣いてこの道を往き來したことであらう。

かれが自殺を決心しながら眞夜中に私を訪ねてこの道を往き來したことを思ふと私は耐らなくなる。かれはこの世界にほんたうに孤獨の人であつた。

かれが今この道を歩いて來たらどんなに嬉しいだらう、私は咽び泣いてかれに抱き付いたであらうに。

暗と悲哀とから

或る北歐の作家の手になつた短篇を讀むだことがある。それはシベリヤに追放されてゐた一人のポーランドの作家の話を書いたものであつた。

話はかうである――

或る雪の深いシベリヤの町に一人のポーランドの作家が追放せられてから一ヶ月後のできごとであつた。かれは或る日同じ町に追放せられてゐた一人の男の葬ひに列したのであつた。十一月初めのシベリヤは氷點下三十度四十度といふやうな恐ろしい寒い日から寒い夜へとつゞいて行つた。故國を追はれた十人ばかりの仲間は雪を踏分けて病院の屍體假置場へと急いだ。そこには机も腰掛もなかつた。白い壁には雪が吹きつけ、灰色の床は白い霜が踏むごとにざく〳〵と物すごい音を立てた。そこに鬚のある大きな男の死骸が殆んど素つ裸のまゝで床の上に横たへられてあつた。死骸も凍つてゐた。死骸の上には寒い日の光りがたゞよふてゐた。棺がその傍に準備されてあつた。死骸は棺のなかに入れられた。仕立屋の細君が僧侶のかはりをして、兎も角死骸は雪の道をとある共同墓地に運ばれた。人々は凍つてゐる土を棺の上へ投げた。人々はやがて自分の上に振りかゝつて來るであらう同じ運命について考へた。

春が來て雪が解けて、雜草が生えるころには、その死骸は雪とともに消えて、墓場の位置さへも分らなくなるであらう。

その翌の日であつた。淋しい心を抱きながら自分の室にとぢこもつてゐたポーランドの作家はペンを投げすてゝ所

在なさに室中を煙草の煙いつぱいにさせた。

かれの心にはワルソウ郊外の黄金の野や、エメラルドのやうな緑の牧場や、黒ずんだ森の繁みが浮かんで來た。波打てる穀物の葉摺れの音や、林の小鳥の唄がひゞいて來た。

かれの心は故國の春の生温い春の空氣と、靑い穀物の野のなかを歩いてゐた。

窓の外にはシベリヤの雪が蕭條としてあらゆるものを埋めてゐた。

扉を叩くものがあつた。それはポーランドから來たジユウの行商人であつた。かれにはジユウの唇から洩れて來る少かなポーランド語がなつかしかつた。

かれは夢からさめたものゝやうになつてジユウを見た。そして言つた。

「俺は何にも買はない――」

かれは想へたのであつた、このジユウも仍り他のジユウと同じやうに何か押し賣りに來たのだらうと。しかしジユウは物を賣りに來たのではなかつた。

「……あなたはワルソウからおいでになつたのださうですね？……ながくはお暇をとらせません……ほんの少しばかりお話を……」

かう言つてジユウはなつかしさうにポーランドの作家を見上げた。

「一體何の用なのか？」

「たゞほんの少しお話を……」

ジユウは同じ言葉を繰り返した。

ジユウにはたゞポーランドから新たに來た作家の顔を見て何か物語るといふことの他には何のために來たのか、そ

れは自身にもわからなかつた。このジユウにはこのやうな心持ちが起ることは必ずしも今日が始めてゞはなかつたこのジユウは時々細君から「一體あなたは何うしたんです？」とたづねられても、自分で自分のことが分らないことが多かつた。今日ポーランドの作家をたづねて來たのも何のために雪のなかをやつて來たのか自分にも分らなかつた。政治のことを聽きに來たのでも、またワルソウの物價のことをたづねに來たのでもなかつた。たゞ何か知らぬが言葉に說き明すことのできない或る力があつてかれをさうさしたとしか思はれなかつた。

ジユウは三年前に妻と四人の子をつれて長い旅の果てにこのシベリヤの町についたのであつた。三人の子は長い旅行の間に死んだ。このジユウは少かに知つてゐたポーランドの言葉さへも日一日と忘れて行くのだつた。たゞポーランドの作家の顏を見て、ポーランドの言葉を聽いて、ポーランドといふ懷しい自然を想ひ起すことができればそれでかれの心は充たされるのであつた。

「何時ワルソウをお立ちでした？」

ジユウはかう訊ねた。

「露歷で言へば四月の末だつた。」

「寒うございましたか、溫かでございましたか？」

「溫かだつたとも。初めのあひだは夏服で旅行した。」

「なるほど、こゝではねえ、旦那、地も氷つてゐたころですよ。」

「……四月には野に種子が播かれるときだからな、そして樹といふ樹は綠だ。」

ポーランドの作家の綠といふ言葉はジユウの心を躍らせた。

「あゝ、あゝ、さうだ……綠だ……」

ジュウはこの綠といふ言葉を聽きに來たのであつた。ジュウがもとめてゐたものは、ワルソウ郊外の太陽であつた、空氣であつた、野であつた、牧場であつた、小鳥であつた。

「さうでした、さうでした、旦那！　私がお伺ひしましたのはそれでした。」

かう言つてジュウは子供のやうに笑ひながらポーランドの作家の手を握つた。次の刹那にジュウは又子供のやうに泣いた、かれは長いこと子供のやうになつて泣いた。

×

ウォーヅオースやブレークの詩のなかに私たちはよく、私たちが遺して來た世界のことについて語られてゐることを見る。まどろめる嬰兒のまつげのほとりには黃金世界のまぼろしが漂うてゐる。何も知らない少年の頭には嘗てかれが棲むでゐた光明界の見はてぬ夢がのこつてゐる。

空漠な人生の旅路に人々はポーランドの作家や、ジュウのやうな同じ寂寞と焦躁に自分を苦しめてゐる。

少年から靑年へ、靑年から老年へと進み行くにつれてかれ等は見のこして來た眞如界を忘るゝとしても、かれ等が再び眞實世界を見出さうとする焦躁は年一年と痛切になつて來るにちがひない。

「何だか自分にも分らない、けれどもぢつとしては居れない……」

このやうな心のいら〱しさは、十九世紀末の惡魔的傾向の作家たちをもとめるまでもなく、近代人のすべての心に喰ひ入つてゐる。

「何うしたら宜いでせう、私の生活は……？」

少くとも近代人的な意識に眼ざめた靑年でこのやうな反問を起さないものはないであらう。靑年の顏は蒼白い。かれの眼は絶えず不安から不安へと顫いてゐる。かれ等は自分で自分の問題を提供して、そしてその解決をもとめて苦

しんでゐる。

或る人は今日の靑年を目して「神經質な意志の弱い靑年」と評するであらう。この言葉には少くとも幾分の眞理が含まれてゐる。けれどもそれはまだ眞實に近代靑年の心を掬むだものではない。かれが神經質であるといふことの一面にはかれの神經が眞實に眼ざめたといふことを意味してゐる。妥協あきらめといふやうなことができなくなつたといふ眞劍な靑年の態度があらはれて來たのである。

意志の弱いといふことも事實である。けれどもこれは靑年ばかりではない。近代人すべてが弱い意志を持つてゐる。宗教も文藝もみなさうである。かれ等は或ひは人道主義といふものを見出した、自己に忠實であるべきことを見出した。それはかれ等のデリケートな神經の働きから獲られたものであつた。かれ等はその新らしい主義の實行に於いて幾多の困難に遭遇した。かれ等は躊躇した。かれ等は臆病になつた。

「私は何うしたら宜いでせう……？」

このやうな近代人の疑惑的な問は貫かうとして貫くことのできぬ實際生活の矛盾から生まれて來た。かれ等は色々な新らしい生活の主義を敎へられた。かれ等の知識は非常に複雜になつた。けれどもかれ等はそれだけ臆病になつた。かれ等は知識を與へられたが力をあたへられなかつた。

かれ等は今日以後歩むべき大體の道路は知つてゐる。けれども歩むべき力をもつてゐない。かれ等は遠い人生の前方を眺めてゐる。それは非常に遠い旅路である。かれ等は歩まうとしてゐる。けれどもかれ等は疲れてゐる。

「私は何うしたら宜いでせう？」

かれ等は前方を見つめながら同じ言葉をくりかへしてゐる。

私たちはこゝに力を與ふる豫言者の出現を待たなければならぬ。同時に「近づける天國」に對して謙虛なる心の準

備をしなければならぬ。

飢え渇くが如くポーランドの作家の一言一句を味はんとしたジュウの心は、涙に灑がれた淋しき人の謙虚な心であつた。かれには困難な哲理や學說は何の力をも與へることはできなかつた。かれの淋しい謙虚な心にはたゞワルソウの春の綠といふやうな短い言葉の暗示だけで充分であつた。綠といふ一語はかれの淋しい生活、安住なき心に、溫かい生命の波を波打たせるに充分であつた。

シベリヤの荒凉たる雪のなかに生活をもとめたジュウは、思想から思想へと新らしい生活をもとめて步いた近代人の焦躁、絕望の生活を表象してゐる。かれ等は今疲れに疲れてゐる。そして「私の生活は何うしたら宜いでせう？」とくり返してゐる。

誰か、こゝに新らしい豫言者が出なければならぬ。そして「綠」といふ暗示をあたへなければならぬ。

私たちは今日まで餘りに多く饒舌であつた。私たちが口にしたものは政治の談話であつた　市場の景況であつた、社會改良の政策であつた。

シベリヤの雪のなかでこれ等の話は何の力をも慰めをもジュウに與へなかつたと等しく私たちの落ちつきのない生活にも、それは餘りにかけはなれた問題であつた。貧しき人にとつて一椀の食は未來の天國の約束よりも尊いものである。私たちの今日の生活——餘りに餘りに灰色な生活——にはワルソウ郊外の春の光りと空氣とが必要である。

私たちはワルソウ郊外の空氣と光りに浸されたことのある豫言者を待つてゐる。同時に私たち自身の心がジュウのやうな謙虚な心であることを要する。

たゞ、しかし私はこゝに斷つて置かなければならぬことがある。豫言者の出現、謙虚な心の所有といふことは、必ずしもたゞ信仰に賴れ、あきらめよといふことではない。科學的知識の發展は何處までも尊い人間の最上の努力とし

て認める。疑惑より疑惑へと進むで行かなければならぬ人間の悲壯な智惠の運命を私はこの上もない悲しいしかし尊い事實として認める。

私のもとめてゐる人生の究竟は一部の人々が信じてゐるやうなはなやかな光明の世界ではない。それは恐らく悲しい、宿命的な人間の眞實相であるであらう。けれども私はそれを見出すことを避けようとはおもはぬ。私の智惠の翅が羽打つてゐる限り私は何處にか翔つて行かなければならない。過去はすべて暗のなかに葬られてしまつた。現在では黝い海の波の音が翅の下に響いてゐる。前程に仄かな島影が見える。それが唯一つの人生の究竟地である。そしてその島が達し得られた時に、それは永遠の宿命に泣く暗い孤島であるかも知れない。けれども何で自分はそれを悲しいと思はう？　それが人間にあたへられたる唯一の運命であるならば、自分はそれをも祝福して受け容れようとおもふ。喜びといふことが祝福せらるべきものであるならば悲しみもまた祝福せらるべきものではないか。暗があればこそ光りがある。悲しみは根本實在である。暗は永遠の實在である。喜びと光りとは暗と悲しみとから生まれる刹那の假象に過ぎない。

その暗の世界、かなしみの世界、それを私たちはもとめてゐる。ワルソウの春、ワルソウ郊外の緑それは決してたゞのよろこびでなく、たゞの光りではなかつた。それは悠久な人間の悲哀のなかに浸された光りであり、よろこびであつた。そしてポーランドの作家とジユウの涙に淨められた時、ワルソウの春も緑もかれ等の生命となり力となつた。

私たちはどこまでも悲しみの世界に住まなければならぬ。暗の底に沈まなければならぬ。悲しみに面をそむけてはならぬ。そして靜かに悲しみと寂しみとから生まれて來る人間生活の大悲哀に心ゆくばかり涙の感謝をさゝげなければならぬ。

「私の生活はどうしたら宜いでせう？」

この言葉にはまだ力がない。私たちは自分で自分の生活を切り拓いて行かなければならぬ。自分でポーランドの作家を訪ねて行かなければならぬ。そしてそこではポーランドの「春の綠」を想ひ出すことによりて一層いたましい新愁を味はゝなければならぬ。

私たちが與へらるゝ力はさらに深い人生の暗と悲哀とを切り拓かんがためである。私たちはその力をあたへられたがために雄々しい、しかし謙虚な心をもつて雪の道を歩いて扉を叩かなければならぬ。

そして最後にあたへらるべき福音は涙と暗につゝまれたるワルソウの春であり、綠であることを忘れてはならぬ。うれしい、しかしながら同時に絕對の悲哀につゝまれた人生、私たちはその前に靜かに思惟する。

先驅者の悲哀

ヅーデルマンの戯曲「バプテスト・ヨハネ」の中に描かれた豫言者ヨハネの寂しい心は何時迄も忘れることが出來ない。獸の毛皮を着て、ヨルダンの河邊に「天國は近づけり」と叫んだヨハネは確かに偉大な人格であつたにちがひない。「野の聲」といふ一語は何となしに荒削りな偉大な人格を偲ばせると同時に、その後ろに潜むでゐる劇的な大悲哀、大寂寞といふやうな空洞の如き感じを起させる。

ヅーデルマンの見方によればヨハネは最も偉大なる先驅者の大悲劇を最も良く現はしたものであつた。世を導くもの、また世の先驅者といふ種類の人々の宿命的な悲劇を表象したものであつた。

私はこの數年の間に、何時とはなしに一種の教育者といふやうな立場に立たなければならなくなつた。そしてついのころまで心付かなかつたことであつたが、自分自身にもこのヨハネと同じやうな種類の悲しみを味はゝなければならぬ事が日一日と多くなつて行くことを思はずには居れない。無論その大小から見たならば比較にもならないほどな悲哀の差があるにちがひないが、私の小ひさな一個人にとつて、それはかなり重大な問題であり、深い悲しみである。

野に叫べる義人としてのヨハネはユダヤが生むだ大人格であつた。巖の如く強い人格であつた。かれは世の指導者であり豫言者であつた。けれどもかれは畢竟かれより後に來るメシアのために野の荊棘を切り拓くべき野の人に過ぎなかつた。

かれは「パリサイの徒よ、爾蝮の裔よ」と叫んで當代の知識階級の人々を叱することができた。かれはまたヘロデ王に對して、またはその妃に對して、サロメに對してどこまでも豫言者の權威を維持することができた。かれは王者を

も恐れぬ大豫言者であつた。しかもかれの人格の權威の大は悉くかれより後に來るキリストのための準備の手段であるに過ぎなかつた。ヨハネの悲劇、ヨハネの生活の寂寞はこゝから生まれて來た。

かれがヘロデの王庭に召し捕へられて、既にサロメのためにその首を渡さんとしたる刹那まで、かれは豫て使に出して置いた自分の弟子が歸つ來るのを待つてゐた。弟子は歸つて來た。そしてその弟子によれば、ガリラヤの湖畔に道を説ける靑年はたしかにメシアであることが信じられた。盲は眼明き、病みなやめるものは癒され、人々は神の愛に浸されたことを知ることができた。

この話しを聽いたヨハネはかれがその使命を果したことをよろこむだであらう。ヨハネは從容として首をサロメに渡したであらう。けれどもこゝに考へて見なければならぬ一事がある。

バイブルの文字上から見たゞけではヨハネは使命を果して從容として死に就いたとも言へよう。しかしツーデルマンはヨハネの複雜な心理狀態を想像した。ヨハネは使命を果し得たといふ感じと同時に、豫言者といふものゝ寂寞を感じずには居れなかつたのであつた。

眞實のメシアが生まれたといふ弟子の報告はかれによろこびを與へたと同時に、かれ自身の生活の運命に對する寂しさを喚び起した。即ちかれはかれ自身の後に來るべきメシアが更にかれ以上の力ある者であることを想ふとき一種の悲哀を感じずには居れなかつた。

かれはかれよりさらに大なる靑年を生まんがために野に叫んだ。果してかれより偉大なる靑年は生まれた。かれは自己の事業が完成せられたことを感謝すべきである。しかし、しかし滅び行くかれ自身の運命と、榮え行く後進者の運命を照らし合はせたる刹那に先驅者の悲哀が喚びさまされる。

×

敎育家といふものゝ多くは豫言者の務めを果すべき人々である。パプテスト・ヨハネの立ち場にあるべき人々である。「吾等の肩を踏み臺として新らしき世界へ歩め」といふ言葉は寔に美しい先驅者の心がけである。けれどもそこにはヨハネと同じ豫言者の悲哀が繰り返されるであらう。後進者のために道を切り拓き、後進者のために踏み臺とならねばならぬ先驅者の悲哀！

×

一本の喬木は雨に打たれ、日に焦かれつゝ無數な木葉や花や木の實をはぐくむで行く。しかもすべての木葉、すべての花と木の實とはたゞの一つも全く同じきものは生まれない。そしてやがては悉く親木を離れて思ふがまゝに或ひは散り或ひは落ちて行く。親木は寂しい枯木となつて冬の蕭條たる北風にさらされてゐる。私は枯れ果てた森の喬木を見るごとにさびしい先驅者の運命を想ふ。

×

N君が久々で阿武隈河畔の生活を捨てゝ東京に出て來た。

「俺たちは久しい間色々な說を立てゝ戰つた。しかしどれが眞實の生活であつたか自分には分らぬ。あの河の畔で親子三人が平和な生活をやつて居たのが一等ほんたうの生活のやうであつた。」

N君のこの言葉は私に歸るべき古巢を敎へてくれたやうな氣がした。しかし私はもう田舍にかへることはできない私の翅はあまりにあわたゞしき羽叩きに馴らされた。私の古巢はもう荒らされてしまつた。

私はこのやうなことを考へながらぢいつとN君の寂しい顏を見た。N君も私の顏を見て寂しく笑つた。

靜かな森の古巢！　何といふ懷かしい言葉であらう。けれども私の翅は古巢に歸るには餘りにあわたゞしい生活に馴らされてしまつた。

ロシヤに行かんとする青年へ

先夜は失禮しました。

あなたはあの夜私にとつて初見の人でしたがあなたが暗の途をかへつて行かれてからこつち、今日まで何の關係もなかつたあなたの問題について私は先輩……極少かの年長者ですが……としてこのまゝで濟ましてゐることはできないやうな氣がしてなりません。あなたが親を捨て弟を捨てゝ眞實と思ふ生活に入らうとなさる心持ちは、同じ時代の同じ思想の流れを掬むだ私として推察することはできます。またそのやうな苦しい決心をせねばならなかつたあなたの境遇には同情を持つことができます。しかし、あなたの決心には同情することができるとしても、あなたのこれから採らんとして居られる方法は正しいことでせうか。否、たとへ正しいことであるとしても、それがほんたうにあなたを大きくし、善くする生活の手段でありませうか。

トルストイは人に人を裁く權能があるかを疑ひました。キリストは「誰か石をもて女を撃つ者ぞ」と叫びました。正しいといふ點から見ましても、絕對に正しいといふことは人間生活にはあり得ないことではないかと思ひます。要は比較的正しいことを正しいとし、比較的正しくないことを不正としてゐるに過ぎません。

かう考へて見ますと、正しいといふことのみを以て生活の標準とするならば或ひは恐ろしい獨斷に陷ることがありませう。「たとへ山を動かすほどの信仰があつても愛なくば……」と言つたキリストの言葉は眞實に人間といふものを知つた言葉であつたと思ひます。

信仰或ひは智慧または正しいといふことは光りに過ぎません、それはものゝ姿をさながらに映します。けれども光

りには力はありません、光りに熱が加へられた時始めて力となります。そして冰れる地球に春をあたへ、人間の血管に生命の血をみなぎらせます。愛は熱であり、力であります。

あなたは私に初見の挨拶のうちに「僕は近いうちロシヤに行きたいのです」と言はれました。

ロシヤといふ言葉はこの頃の若き文學好きの人々の間にはかなりに强い、懷しい魅力を持つてゐるやうにおもはれます。涯もない灰色の大廣原、雪を切つて行く馬橇、驛路の鈴の音、國境の唄、大河の岸に日向ぼつこをしてゐるヴアガボンドの群、唄唱ひのジユウの娘、復活祭の夜をウオツカーに醉ふシベリヤの追放人、……このやうな異國風な大陸の氣分がどれほど今日の靑年の心を魅してゐることでせう。暗い冬のスカンヂナビヤやアイルランドの素樸な若い娘たちは温かな明るい新世界のアメリカに行くことを何よりの光榮としてゐるといふことです。この國の靑年たちが、單調な温帶の柔かな刺戟に飽いて、灰色の半原始的な、ウオツカーのやうに强烈な北方民族と暗い自然の刺戟とに走らうとすることもあり得べきことだとおもひます。南の燕は北へ、北の燕は南へと翔んで行きます。あなたが若い心をば擅にロシヤの空に運ばれるのも無理のないことだとおもひます。殊にあなたには耐へがたい苦痛があるのですから。

「僕はロシヤに行つて見たい」と言はれた時、私はあなたもたゞ普通の文學好きの靑年がロシヤといふ言葉や聯想にあこがれてゐるのだとばかりおもひました。けれどもあなたの決心には深い悲しみが潜むでゐました。

「父は長い病氣ですし、日一日と氣むつかしくなつて、氣の弱い母は奴隷のやうに鞭打たれてゐるのです。」

あなたのロシヤ行の決心は世間の文學好の靑年のそれと一緒にして考へることはできませんでした。あなたは自分の腕一本で氣むつかしい父親や、おツ母さんや二人の幼い弟たちを養つて居られるのでした。あなたは近所の人々からは「珍しい孝行な子」として噂さゝれておゐでゝした。

「僕は二十幾年の間、他人のために生きてゐたのでした。これからは僕自身のために僕はロシヤに行きたいのです。僕は兩親や弟達の悲慘な生活を知つてゐます。或は僕がロシヤに行つてしまつたら、かれ等は飢えて死ぬかも知れません。けれども僕はもう何時までも他人のために自分を殺してゐることはできません。僕は若いのです、若いのですそしてこの若い日を悉く他人のために殺してしまはなければならぬのでせうか、僕にはそれが耐へ切れない苦痛になつたのです。」

あなたの聲には少しの浮薄なところもありませんでした。私はあなたの心持ちをどこまでも氣の毒だと思ひました。

「あなたはロシヤへ行つて何か新らしい仕事でも見出しなさるのですか？」

私がかうおたづねした時、あなたは「僕は仕事を見出すために行くのではありません。」と語りました。あなたは仕事を見出しに行くのでもなく、生活を見出しに行くのでもありませんでした。あなたは「僕はさらにスカンヂナビヤにもフランスにも行つて見たいのです」と言ひました。あなたは家を捨てゝたゞ自由な世界をあこがれてゐられるのでした。責任、負擔、執着といふものから去つて、食をもとむる渡り鳥のやうに異鄉から異鄉へとヴアガボンドの生活を夢みてゐるのでした。

「僕はどこで死んでも構ひません。」

あなたはどこまでゞも生きなければならぬといふ強い生活意識の要求からしてロシヤに行かれるのではありませんでした。あなたは生きんがためにロシヤ行を思ひ立たれたのでありませんでた。あなたのロシヤ行は寧ろ死なんがためでありました。變形せる自殺の方法に過ぎませんでした。

あなたは「自分一人の生活のため」と言はれました、しかしあなたは仍り自分一人の生活をも生くることはできなかつたのでした。あなたは餓死する肉親の人々を眼前に見て自分一人強く生きることはできなかつたのでした。あな

たは飢えたる人々の面前でパンを貪り食ふことはできなかつたので、人々から逃れて、隠れてパンを貪り食はんとしたのです。しかもそれは眼前に貯へられたゞけのパンを食ひ盡さんためであつたのです。

あなたは正しいことのためにロシヤに行くと言はれました。けれどもあなたは自分一人の安易な生活を夢みて居られたのではありますまいか。あなたはパンを作り出す工夫をなさることが必要ではありますまいか。またあなたはその憐れな隣人のために與ふべきパンを工夫なさることが本當な生き方ではありますまいか。強請まれるが故に他人に與ふるやうな愛であるならばそれはたしかにあなた自身の生活を殺すものであります。けれどもあなた自身が與へないでは居られないといふやうな内部の衝動よりして人々に惠まんとする愛であるならば、あなたの生活は愛によりていよ〳〵大きく、いよ〳〵善きものとなるのではありますまいか。奉加帳に刻まれた施與は却つて施主の生活を殺すものです。餘儀なくして施す愛ほど私たちの生活を醜くするものはありません。

あなたはあなた自身の若い日が他人のために犠牲にせらるゝと言はれました。私もその心を掬むことができます。若い血と若い心を法衣につゝむだやうな淋しい生活――これほど若い私たちにとつて悲しいものがありませうか。

しかし若い心を狂ふまゝに狂はせることが、どれほど私たちの生活に大事なことでせうか。ロシヤの片田舎に放浪者の悲しい歌を唱ふことがどれほどあなたの生活にとりて意義を持つてゐることでせうか。殊にそれが二人の老いたる人々と二人の若い弟たちを殺してまでもあがなはれなければならぬ尊い生活でせうか。

あなたは不運な方です。私はどこまでも同情することができます。けれどもまだあなたには、あなたの愛を待つてゐる四人の弱い生命があります。あなたはこれ等の人々に對して、愛を與ふることのよろこびを經驗なさることができるのではありませんか。世間には自己の愛を待てる人をさへ見出し得ぬ不運な人もあります。

イスカリオテのユダは愛すべき一人の兄弟も持ちませんでした。そしてかれ自身の生活のために獲たる三十枚の銀

は却つてかれの生活を亡すものでありました。

キリストはかれの愛を與ふべき全人類を見出しました。あなたは父上を指して「僕の若い血をすゝる利己主義者である」と言ひました。さうです弱いものは皆な利己主義者です。可憐な小利己主義者です。それを憎むではなりません。今あなたは世界に四人の小利己主義者を見出して居ます。全世界の人々が私たちにとりて悉く可憐なる小利己主義者となつて表はれて來る時、私たちの生活は全世界をつゝむ偉大なるものとなるのではありますまいか。

「日蓮は明日佐渡の國へまかるなり。今夜のさむきに付ても牢のうちのありさま、思ひやられていたはしくこそ候へ。」と言つた日蓮のやさしい人思ひの心は、かれの幾百卷の正しいことのための說敎より尊くおもはれてなりませぬ。

鞭打つ者、鞭打たるゝ者

鞭打たるゝ苦痛は、それが私たちの生活をより善く、より強いものとなさせる時限りもなく貴い價値をもつてゐる。愛によりて與へらるゝ鞭の苦痛に限りもない價値が潜むでゐることは言ふまでもないことであるが、たとへ憎みによりてあたへられた鞭の苦痛といへども、自分をより偉くより善き、より強きものとなさしむるに價値ある場合が少くはない……憎みが眞劍であるかぎりは。

鞭打つといふことは鞭打つ人の生活にとりてよりは、鞭打たるゝ人の生活にとりて多くの意義をもつてゐる。私たちが最初から完全な人間でないかぎり、鞭打たるゝといふことは呪ふべきことではない……それは悲しい、苦しい事實にはちがひないが。

鞭打たるゝ苦痛に誰れが泣かないで居れよう。鞭の痛みを知ればこそ鞭打たるゝことが意義あるものとなつて來る。鞭の痛みを、何かにまぎらして、忘れようとするのは臆病である、どこまでも鞭の痛さを、痛さとして味はゝなければならぬ。

強い人間となることは、鞭の痛みを避けようとする者には不可能である。どこまでも強くなれ。そしてどのやうな殘忍な鞭にも正面して、鞭の苦痛を味はゝなければならぬ、鞭は私たちをより善き人間とする、けれども強き人間でなければ、鞭に耐へることはできない。

私たちは與へらるゝ鞭の打撃の苦痛を知ると同時に、偉いものであることを知つてゐる。けれども最後まで耐へ忍ぶには往々にして餘りに弱い。弱いものはより惡しきものとなり、強き者はより善きものとなる。善惡には二元はな

い、鞭を忍ぶと、忍ばないとの差のみである。

×

同じ高山の水が一つは平原の美しい河に流れた、そして他の一つは岐れて市街の中央を貫いて流れた。

同じ一木の公孫樹から運ばれた種子が、一つは森のなかに根付いた。一つは煤の多い工場の傍に芽生えした。

×

鞭打たるゝ者にとりては一つの輕い打撃もより重き打撃と想はれる。鞭打つ者にとりては重き打撃も餘りに輕きものと想はるゝであらう。

鞭打つ打撃の餘りに重きを恐るゝものは愛の人であり、鞭打たるゝ打撃の餘りに輕きを感ずるものはほんたうに自分を觀ることのできる敬虔な生活者である。

「俺は今日は何にも與へるものを持たない」と言つて乞丐の手を強く握つたツルゲーネフの心は美しい。しかし鞭打たるゝものよりも、より以上に深い悲しみと愛とをもつてその友を鞭打つものも尊い人格ではないか。

鞭打たれたる痛みを忘るゝものは愚人である。鞭打つことの辛さを忘るゝものは冷酷な人間である。

×

鞭打たれたるものは終夜寢ぬることはできない。かれは輾々として床上に悶へる。鞭打てるものも亦終夜寢ねてはならぬ。自分の與へたる鞭が友の心を傷つたとするならば、鞭打てるかれは自分の心を傷るか、でなければ友の心を築き直してやらなければならぬ、鞭打つ者には當然それだけの義務がある。

鞭を持てる多くの人々は言ふ。「自分は正しいことのために鞭打つた」と。かれは弱き不幸なる惡人を鞭打つてすやすやと眠る。かれは繰り返して言ふ「正しきことのために鞭打つた」と。そしてかれは眠る。

かれ等は誤つてゐる。鞭打たれたるもの丶傷れたる肉と傷れたる心とは「正しきことの」ために慰められはしない。かれ等は癒されはしない。弱い人々にとりて「正しきこと」は何の力も慰めも持つてゐない。かれ等は愛に飢えてゐる。かれ等は涙に渇えてゐる。

鞭打たれたるもの丶悲しみ以上に悲しみつ丶、夜もすがら悶へたことのある鞭打ち手でなければ、眞實の鞭打ち手ではない。

キリストは三年が間パリサイの徒を鞭打ち、羅馬の兵士を鞭打ち、イスラエルの子たちを鞭打つた。パリサイの徒やイスラエルの子等は鞭打たれても鞭打たれてもいぎたなく眠つてゐた。キリストはたゞ一人ゲツセマネの夜を悶へに悶へた。キリストの鞭は生命をもつてあがなはれたる鞭であつた。かれの鞭は生命の血に洗はれたるが故に權威があつた。

×

罪を憎むものは眞實の說教者となることはできぬ。罪を愛し、罪を悲しむもの丶みが鞭を使ふ權利を持つてゐる。

曇り日

書棚から本を取り出して、何氣なく開くとなかゝら栞にされてあつた葉書が出て來た。
この夏自殺したかれから來た繪葉書であつた。
私はいつまでもその葉書を見てゐた。

×

冬らしい寒い曇り日が來た。
私はこの春しまつたまゝにしてあつた外套をとり出して着た。
電車に乘つてから外套の隱しに手を突つこむと何か知ら厚い紙が手にさわる。
「何だらう？」
私はかうおもつたまゝで出して見もしなかつた。
そして何時とはなしに外套の隱しの厚い紙のことを忘れてゐた。
歸りに電車のなかでまた私は外套の隱しに手を突つ込むだ。そして厚い紙がはいつてゐたことを思ひ出した。
それでも私は出して見ようとはしなかつた。
小川町！　日比谷！　電車のなかは身動きもできぬほどこむでゐた。
私は數寄屋橋で下りて濠に沿うて土橋の方へ歩いて行つた。
今にも雪が降り出しさうであつた。柳の葉はすつかり落ちてゐた。

私は外套の隱しにまた手を突つこむだ。そしてまたそこに厚い紙があることに氣付いた。
私は今度はその厚い紙をとり出した。
手さわりの厚い紙！
それは萬年筆で書かれた友からの繪葉書であつた。
自殺したかれが、まだ島の守備隊にゐた日、私に寄越した島の繪葉書であつた。
私は八九ケ月かれと二人でこの街を歩いたことを懷ひ出した。
繪葉書は再び寒い曇つた冬の光りを見るやうになつた。
かれは永遠にかへらない！

×

電車のなかで私の前に立つた男がある。
かれの肩幅は廣くて、その顏は私に強い力の壓迫を感じさせた。
私は輕い反抗を抱いてぢいつとかれを見つめた。
その時隣りに坐つてゐた老婆が私に訊ねた。
「山王下はこの次ぎでせうか？」
私ははつきり覺えてゐなかつたので、他の人に問うて確かめてやらなければならなかつた。
爲うことなしに、私は前に立つたその男に訊ねた。
「この次ぎの次ぎです……」
その男はまるで私の豫期を裏切るやうなやさしい聲で敎へてくれた。かれの眼は變にかゞやいてゐた。

「こゝにも私の兄弟がゐる！」

私はかう思つた。

老婆は間もなく下りて行つた。

私はその一日世界が明るくなつたやうに思つた。

大地は呻けり

諦めるといふ言葉には言ひ知れぬ人間の善心の苦闘の疲勞や絶望やが含まれてゐる。諦めるといふ言葉ほど斷ちがたい人間心の纒綿たる未練を言ひあらはしてゐるものはない。

諦めるといふことは斷念ではない。その內に潛める力として必ずやさらに苦しい戰ひを切り拓いて行かうとする雄雄しさが遺つてゐる。

諦めることを知らない者はまだ眞實に人間を知らない人である。諦めるといふことはどのやうな偉大な人格の上にも悲劇的の色彩を投げかけてゐる。この淋しい影は、ダ・ギンチにもあつた、ミケランゼロにもあつた、トルストイにもキリストにもあつた。

諦めるといふことは弱い人間心の一時的停滯である。絶えず深さより深さへと進むで行く人間の善心が切り拔けがたい一つの困難に出逢つた刹那に經驗する一時的なためらひである。

四十日が間野にありてサタンに試みられたキリストの生活はかれの生活を通しての大轉換機であつた。かれが神の子となるか、惡魔の子となるかの境はこの四十日の內的苦闘にあつた。かれは幾度か諦めたであらう。

諦めは新らしい人格を生み出すための靜想に過ぎない。諦めは悲壯なる低徊である。水は幾度か瀨に落ち淵に淀みつゝ永遠の流れを走る。人間の思想生活は決して同一の速度をもつて直進するものではない。低徊、疑惑、逡巡、いろ／＼な複雜な進行の道をたどらなければならぬ。

諦めは眞面目な生活者にとりて絶えず襲ひ來る思想上の轉換機であり、新生面の開拓時であるが、最も大きな危險

はこの時期に潜むでゐる。

キリストとなるかサタンとなるか、その岐れ目はこの轉換機に於いてのみ決定せらるゝ。

善き樹は善き實結び、惡しき樹は惡しき實を結ぶと言ふ、けれども善惡一如ではないか。どこに二元的な差別の世界があらう。實をもつて樹を判斷することはできない。一本の樹にも年によつて善き收穫と惡い收穫とがある。白い花と紅い花、そこに花として何の差別があらう、梢を通して流るゝ色素の差別のみ。酒を盛れば酒壺と呼ぶ、水を掬めば水甕と呼ぶ。もと一つの甕のみ。

×

サタンとキリストとを同一と見るのではない。私たちはキリストにならなければならぬ。善き實を結ばなければならぬ。そしてキリストとなり、善き實を結ぶべき機會が、諦めの刹那ごとに與へられてゐる。

人生の闘に疲れた人々、そしてそれ等の人々の諦め！　諦めほど悲壯なものがあらうか、尊いものがあらうか。

悲しい人生の旅路を歩く弱い人々よ、私達はしつかりしなくてはならぬ。しつかり歩かねばならぬ。私達は時々絶望的な氣分にもなるであらう！　諦めようとする心もおこるであらう。それでも私達は決して絶望に終つてはならぬ。私達は善人なのだ。私達は弱いキリストなのだ。今が一等大切な刹那なのだ。その立ち場から一歩でも退つてはいけない。私達は今ヨブと同一の苦痛な試みに置かれてゐるのだ。かれは羊七千、駱駝三千、牛五百耦、牝驢馬五百を始めそのすべてを失つた。かれは惑ふた。かれは或る刹那には諦めたであらう、かれは低徊したであらう。かれは「外衣を裂き髮を斬り地に伏して」天を拜して叫んだ「我裸にて母の胎を出たり、又裸にて彼處に歸らん」と。何といふ悲壯な諦めやうであらう。

しかし神がヨブに與へた試錬はさらにさらに強い鞭を加へた。神はサタンをしてかれを擊たしめ、「その足の跖より

頂までに惡しき腫物を」生ぜしめた。ヨブは「土瓦の碎片を取りそれをもて身を掻き灰の中に坐つた。」

ヨブの諦らめは人生の回避とならうとした。かれは生活上の危機に面した。かれは生を呪はずには居られなかつた。

「我が生れし日亡び失せよ、男子胎にやどれりと言ひし夜も亦然あれ。その月は暗くなれ。

神上よりこれを顧たまはざれ、光りこれを照す勿れ、黒暗および死蔭これを取りもどせ……」

ヨブの絶望的苦悶は最も大きな人格の破産と新生の轉換機を示してゐる。かれの人格が大きかつただけその苦悶は大きかつた。かれは大なる惡魔たるべきか、大なる神の子たるべきかの岐れ目に立つた。

蔭の擴がりによりて樹の大きさを知ることができる。疑惑、懊惱の深さによりて人格の大きさが知れる。

私たちの諦らめから生まれて來る悲しみが大きいだけ、それだけ私たちは大きな人格を築き上げる可能性を持つてゐるのである。同時にそれだけ恐ろしい惡魔となる可能性をも持つてゐる。

ヨブは勝つた。ヨブは苦悶に勝つた。かれは一萬四千の綿羊と六千の駱駝と一千耦の牛と、一千の牝驢馬と、美しき三人の女子と七人の男子とをあたへられた。

弱い諦らめの人々よ、私たちはもつともつと大きく悲しまなければならぬ、鞭打たれなければならぬ。

悲しめる人々よ、私たちは惡の實を結むではならぬ。鞭打たるれど鞭打たるれど恐れてはならぬ、呪ふてはならぬ。

どこまでも嬰兒のやうな素直なこゝろを失つてはならぬ。

×

樹は伐らるれど伐らるれど新らしい芽生に光りをもとめてゐる。鞭打たるゝ私たちの心はどこまでも生きつゝ、苦しみつゝ光りへ光りへと芽生えして行かなければならぬ。

とはいへ、一日一日と滅びて行く心弱い人々の餘りに多いことを想はずに居れない。かれ等の素直な善心はいつと

はなしに頑な惡心となり、かれ等の星のやうな瞳はいつとはなしに血走つた囚人の瞳とかはつて行く。

このやうな弱い自分を鞭打つて、ほんたうに强い强い人間となるといふことは非常に困難なことである。しかも困難であるだけ苦痛を切り拔けた偉大な人格は藝術よりも傳統的な宗敎よりも限りなく尊いものである。

「死！　かばかりながく待たれつ、來たることかばかり遲き……」

かうたつたミケランゼロの八十幾年の生涯は傷ましい闘ひの生活であつた。雲の上を翔けめぐる獨創的なかれの大天才の翅は、絕えず悲しい日常生活の泥澤の底に引き卸されなければならなかつた。三人の弟子と一緒にたゞ一つの寢臺と水とパンとをもつて勞作に從事したのも、幾年となく服も靴も脫がないで働いたのも、眼を惡くし首の骨が曲つたと言はれるまで丸天井の畫を描き續けたのも、藝術的感興の他に大きな原因があつたが故にちがひない。かれは幾度かかれの苦痛な生活の境を悲しむでゐる。「かれ等は俺の天才を滅ぼしてゐるのだ」と言つたかれは、あの冷酷な父や弟たちの過分な要求を充たすために自分の天才を幾何の金に代へなければならなかつたのであつた。老い行くにつれて父は一層かれに對して辛くあたつた。そして老人はこの親思ひの子を「父を追ひ出す不孝な子」として世間に言ひ觸らした。

かれは一生を親と兄弟のためにさゝげて、しかも誰れにも受け容れられなかつた。その鄕土フロレンスの町にもかれを慰むべき巢はなかつた。生きてフロレンスの土を踏むことのできなかつたかれは死をどんなにか懷しいと思つたであらう。「死ねばフロレンスに歸られる！」と思つたミケランゼロの生活は何といふ悲壯な生活であつたらう！

「眠りは私にとりて尊い、しかし石となることは更に私にとりて尊い。」

「見ることもなく、聽くこともなくば私は幸福である。私を覺してくれるな、低い聲で語つてくれ。」

あれほど雄々しく闘つた人生の勇士に、これほどの深い悲しみや諦めがあつたことは皮相な見方からすれば不思議

であるかも知れない。けれどもこれほどの悲しみと諦めとを知れるかれであつたればこそあれほどの强い戰ひに鬪へたのではあるまいか。

光りは暗からのみ生まれる。

勇氣は悲しみからのみ生まれる。

「かれの生活の最後の日、それはかれの平和の王國の最初の日！」であつた。

×

暗へ行くべきか、光りへ入るべきか、そこには光りもない暗もない。あるものはたゞ刹那々々の寂しい生命の私語と雄々しき苦鬪者の涙のみである。それでも私たちは生を呪うてはならぬ、自らを傷つてはならぬ。忍從と苦鬪の底に流るゝ靜かな生命の嗚咽を聽け。そして鞭打たるれど素直に伸び行く若き芽生えの心を失うてはならぬ。

ヨブも悶へた。ミケランゼロも惱むだ。かれ等の生活の偉大さはその大なる悲哀の暗を背景として始めて築き上げられたものであつた。

どのやうな偉大なものも悲しみなしに偉大なものはなかつた。たゞ悲しみを避けんとするものと、悲しみに正面するものとの間に、人格の大小、心靈の深さ淺さの區別が生まれる。

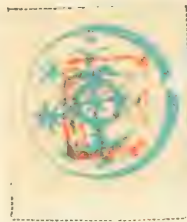
どこまでも、どこまでも悲しみの鞭に耐ゆるだけの力を持つことが私たちの唯一の願でなければならぬ。

——「第一感想集」了——

昭和六年一月廿八日印刷
昭和六年二月五日發行

一册・壹圓五拾錢

第一感想集

著作者　吉田絃二郎
發行者　佐藤義亮
印刷所　富士印刷株式會社
製本所　植木製本所

發行所　東京市牛込區矢來町　新潮社
電話牛込（一八〇五番・八〇七番・八〇九番
一八〇六番・八〇八番）

第十六卷目次

第一卷　短篇小說集（1）　島の秋、法妙寺の叔母、山上の小屋、靜かなる死、麥見の前、小梅の母外十八篇　近刊

第二卷　短篇小說集（2）　大地の涯、熊のわな、彼岸詣り、憎、疲れたる魂、少年、濱、紙、外十六篇

第三卷　短篇小說集（3）　雉子笛を吹く人、神の子、青い毒藥、叔父夫歸、手紙、草の上、犬吠崎外十五篇

第四卷　短篇小說集（4）　山寒し、二人の無能者、母を思ふ日、花梨の下、盜人の妻、二老人と彼外十二篇

第五卷　短篇小說集（5）　芭蕉、壁、屋上白夜、笑ふ彼、秋、草枯れ、地に落つるもの外十七篇

第六卷　短篇小說集（6）　父、金、家出、二人の老人、時計、秋の海、寒日、形見分け外廿二篇

第七卷　長篇小說集（1）　靜夜曲、人間苦、欅

第八卷　長篇小說集（2）　無限、孤獨なる女、結構な空

第九卷　長篇小說集（3）　白路、高原の日記、石に撃たるゝ女

第十卷　戲　曲　集　大谷刑部、燕、忠信の父、狂人となる迄、淸作の妻、丈草庵の秋、靜夜曲外十一篇

第十一卷　感　想　集（1）　小鳥の來る日、生の悲劇、雜草の中生命の微光　既刊

第十二卷　感　想　集（2）　草光る、生くる日の限り、旅人、山家日記

第十三卷　感　想　集（3）　木に凭りて、心より心へ、わが詩わが旅

第十四卷　感　想　集（4）　靜かなる土、麥の丘、青鳩

第十五卷　感　想　集（5）　白日の窓、霧島紀行、春の日

第十六卷　童　話　集　騎兵と馬、或る步哨の話、熊とピストル木村軍曹と赤靴、外五十餘篇